

怪狩り ～ 人の絆と怪 の決意

アヤ・ノア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本のどこかにある、見捨里市。

そこに突如として時空に現れた、×印状の裂け目。

そこから漏れ出す、様々な時代の怪物達による怪奇現象が、見捨里市を襲っていた。見捨里市を守るため、臆病な少年・真之勇氣と、彼を手助けする謎の少年・キユウ、路地裏に住む四人の亜人達は、時を超えて怪狩りの旅に出る。

角川つばさ文庫「怪狩り」の二次創作です。

主人公は原作と同じですが、オリジナルキャラクターがいますので、ご注意ください。

pixiv版はこちらになります↓<https://www.pixiv.net/>

n
o
v
e
l
/
s
e
r
i
e
s
/
9
2
5
8
9
9
4

目次

Setting Material

登場人物紹介 | 1

用語集 | 15

episode | Revived

Legend | 怪の始まり

1 | 奇妙な夢 | 19

2 | 怪事件の噂 | 23

3 | 勇気がない勇気 | 31

4 | 謎の少年 | 36

5 | 怪が潜む洞窟 | 47

6 | 勇気の決断 | 57

episode | Revived

Legend | 巨大な影

1 | 父親の書齋 | 68

2 | 巨大な地鳴り | 75

3 | 羽心とスコップ | 82

4 | ネス湖へ | 88

5 | 三人のハンター | 95

6 | ネットシーとの戦い | 101

episode | Revived

Legend | 凍る夏

1 | プールでの怪異 | 111

2 | 江戸の町へ | 119

3 | 雪女を探して | 126

4 | 勇気とダイアーナとお雪

6		諦めない心		430
episode 3		Bonds		S
un and Moon	ゝ	動く死体		
1		奇妙な動物		436
2		秘密の実験室		445
3		天才すぎる科学者		455
4		生き返った怪物		466
5		見捨里市の戦い		477
episode 3		Bonds		S
un and Moon	ゝ	ターニン		
グポイント				
キユウ				493
S i d e				
S t o r y				
盗賊達のスूप作り				501
クリスマスパニック!				512
episode 4		Star		of
Hope	ゝ	勇気の始まり		
助つ人参戦				525
episode 4		Star		of
Hope	ゝ	森に棲む者達		
1		見捨里市大パニック		543
2		謎の金の粒子		550
3		妖精事件		555
4		二人の少女		569
5		妖精を説得せよ		585
episode 4		Star		of

4		特別な矢		691
3		平安の都へ		680
2		怪の正体		667
1		夜のジョギング		656
Hope ~ 平安の恐怖				
episode 4 Star of				
6		もう一人の勇氣		643
5		地下の町		632
4		羽心の決断		622
3		起こり始めた異変		615
2		温泉騒動		606
1		三つ目のグローブ		598
Hope ~ 地底の王国				

3		現れたゾンビ達		792
2		小さな町		778
1		奇妙な男女		765
~ 彷徨う怪達				
roaching nightmare				
episode 5 The app				
後編				
752				
前編				
738				
Wonder Dream				
裏切りの忍び達				
730				
路地裏暮らしも悪くない?				
715				
Side Story				
5 鶴を狩る者達				
702				

4		ゾンビ達のリーダー		801
episode 5 The app				
roaching nightmare				
4		呪いの歌声		
1		謎の歌声		812
2		覚めない眠り		822
3		歌声の正体		832
4		青年と人魚		842
5		迫りくる領主達		853
6		真つ白な泡		860
episode 5 The app				
roaching nightmare				
3		死者と話せる発明		954
2		学校にて		945
1		羽心はどこに？		941
episode 6 Truth				
of Jaki 動き回る炎				
		魔女つ子マギ・プリズム		933
Side Story				
6		プーカの危機		917
5		発明王の研究室		901
4		飛び出す幽霊達		893
3		怪の映画上映		885
2		金曜日の放課後		879
1		あの世との通信		872

1131	2		時のトンネル		Ba	1143
	3		怪の復讐		Ba	1156
	4		黒い煙		Ba	1166
	5		邪鬼と勇氣		Ba	1174
episode 7			Last		Ba	
title	↘		見捨里市の怪		Ba	
	1		勇氣と母		Ba	1187
	2		誰もいない博物館		Ba	1195
	3		プーカの提案		Ba	1208
	4		邪鬼の狙い		Ba	1217
episode 7			Last		Ba	
title	↘		最後の戦い!		Ba	

1		町を襲う怪達		1225
2		強敵の弟		1235
3		見捨里タワーの入り口		1247
4		怒りと絶望		1259
5		勇氣と希望		1271
6		最後の時		1282
Epilogue		怪狩り		1293
	↘	勇者の導く先		

Setting Material

登場人物紹介

〈原作キャラクター〉

秘めたる勇気を持つ少年

真之 勇気（しんの ゆうき）

Shinno Yuki

種族：人間

能力：予知夢を見る程度の能力

見捨里市に住む小学生。

臆病で気が弱い性格だが、いざという時の行動力と推理力に長けている。

また、起きるかもしれない事態を夢で見る事ができる。

それ以外は普通の人間であり、突出した能力はない。

しかし、怪との戦いの中で未知なる力を発揮する事もある。

謎の少年キュウとの出会いで、勇気は非日常に踏み込んでしまった。

普通の生活がどれだけ貴重で、日常がどれだけ大切なものかを知ってしまった。

そのため、見捨里市の「普通」と「日常」を守りたいと誓った。

キユウが消えた事でしばらくの間、音信不通になっていたが、

羽心が星のグローブを装備したため、彼女と共に戦う事になった。

当初は「危険な目に遭わせたくない」という理由で羽心が戦うのを反対したが、鶴との戦いをきっかけに、羽心を仲間として認めるようになった。

アトランティス人の末裔で、特殊能力を持つ人間の一人。

邪鬼とデИАーナの超融合を見届けた後は、輝きを選ばれし者として、

キユウから受け継いだゴーグルを身に着けて見捨里市を守る決意を固めた。

赤き亡霊

キユウ

K i y u

種族：亡霊

能力：時のトンネルを開通させる程度の能力

突然、勇気の亡くなった父親の書齋に現れた亡霊の少年。

時と場所を超え、別の地に行く「時のトンネル」を開通する力を持っている。

名前を名乗らなかつたため、「キユウ」という仮名がついている。

人間では勇気しかキユウの姿を見る事はできないが、退魔の力を持つ者は見られる。

見捨里市を守るため、勇氣と共に行動する事になる。

邪鬼とは因縁があり、彼を倒すという決意を抱いている。

様々な世界に行くうちに、勇氣を「相棒」として見るようになる。

そして、「二人で一つ」という決意も抱くようになった。

だが、羽心が使ったオシリスの鈴と、邪鬼の攻撃により消滅してしまった。

——と思われたのだが、夢の中の神殿で勇氣と出会った。

その正体は勇氣の祖父、真之喜優。

一度は消滅したがフォードが持っていた奇跡のペンダントの力により復活し、

邪鬼の野望を阻止するため、戦線に復帰した。

力に取り憑いた邪鬼を倒すため、勇氣や羽心、プーカと共に邪鬼を追う。

その時、ディアーナにラーの勇者が使った超融合のカードを渡す。

やがてディアーナが発動した超融合の代償として自身の存在の力を失い、

役目を終えたキユウは天に昇っていった。

心に翼を宿す少女

白鳥 羽心（しらとり うらら）

Shiratori Uraa

種族：人間

能力：古代人の力を持つ程度の能力

勇気の幼馴染でクラスメートの美少女。

性格は勇気とは正反対に強気で勝気、お転婆。

かなりのオカルトマニアで、様々な怪奇現象を知っている。

成績優秀で教師受けが良いが、良くも悪くも自己中心的。

行動力はあるものの彼女も勇気同様に肉体的には一般人であり、

勇気と共に行動する事は少なかったが、

フアフロツキーズ異変で、今までに忘れていた異変の記憶を思い出す。

それ以降、彼女も見捨里市を守りたいと思うようになった。

実は彼女にも特殊能力があり、それを知った邪鬼に騙され、

黒い鈴ことオシリスの鈴を使用してキュウを消してしまった。

キュウを消した責任を取るため、そして勇気の力になるため、

プーカから貰った星のグローブを装備し、勇気と共に怪を狩る事を決めた。

エジソンがいるアメリカに向かった時に邪鬼に遭遇し、

霊界通信機の暴走のどさくさで邪鬼にさらわれるが、勇気達に救出される。

勇気同様にアトランティス人の末裔で、特殊能力を持っていたのはそのためだった。

自身の特殊能力が完全に目覚めたため、勇気同様にキュウが見えるようになった。

最終決戦でプーカやジャネットと共に人狼と戦い、退ける。

その後は邪鬼とディアーナの超融合を見届け、勇気と共に見捨里市を守る決意をした。

怪を呼ぶ黒き刀

邪鬼（じやき）

J a k i

種族：悪霊

能力：次元の裂け目を開く程度の能力

次元を切り裂く刀を持った謎の少年。

刀を振って作った×印状の罅により、見捨里市に怪の力を送る事ができる。

口は微笑んでいるが、目は笑っていない。

冷笑のみを湛えながら世界中の怪を唆し、見捨里市に異変を起こす。

勇気と羽心が特殊能力を持つている事を知っており、

能力を自覚していない羽心を騙し、黒い鈴を使わせた。

結果、邪魔者としてしているキュウを間接的に消し去った。

麗羅、つるぎ、揚羽、カリオストロという部下がいたが、裏切られている。

その正体は勇気の父・力に取り憑いた、人間の負の感情から生まれた怪。

人間を憎悪しており、人間を滅ぼすために数々の怪を利用した。

勇気と羽心が特殊能力を持っている事を知っていたのも、

彼らがかつて自身を封印したアトランティス人の末裔だからである。

パンドラの箱とプーカから奪った三つのグローブの力で世界中に怪を呼び、

世界を破壊しようとするが、戦えば戦うほど力が弱まる事に気づかず、

皆が抱いた希望によって弱まったところを、超融合のカードでディアーナと融合した。

森に舞う気高き妖精

プーカ

P u c a

種族：妖精

能力：鱗粉をまき散らす程度の能力

勇気達がコティングリーで出会った妖精族の王子。

消滅したキユウに代わる、新たな仲間となった。

性格はやんちゃで、偉そうに振る舞う事が多いが、

キユウがない勇気や、戦い慣れしていない羽心を支える優しさも持っている。

様々な道具を持っており、太陽・月・星のグローブは彼の先祖が作ったもの。

戦闘では妖精特有の魔法の鱗粉を使ってサポートする。

スタイルは揚羽に似ているが、こちらは強化に特化している。

邪鬼との戦いが終わった後は元の時代に戻り、エルシーやフランスと共に暮らした。

くオリジナルキャラクターく

美しき上のエルフ

デИАーナ

Diana

種族：ハイエルフ

能力：魔法を使う程度の能力（精霊使役）

とある異世界から、何者かに魔術師の英霊キヤスターとして召喚されたハイエルフ。

「異次元の旅人」で異世界を自由に旅する事ができるが、

英霊としての型にはまっているため本来の力を発揮できない。

エルフの上位種であるハイエルフは妖精の血が色濃く残っており、

殺されるか深い悲しみを背負わない限りは不死。

温厚で、物事に達観している事が多いエルフにしては珍しく、

明朗快活で行動的な性格であり、若さからか感性は人間に近く、

理不尽な事や曲がった事は見過ごせない正義感の強さがある。

勇気にとっては姉のような存在であり、同時に畏怖する存在でもある。

また、いつか人間の伴侶を得たいと思っている。

精霊魔法を得意としており、双剣術もそこそこ使える魔法剣士。

「自然を守りたい」という決意により、

魔法の力が失われた現代でも彼女の魔法は強力な効果を発揮する。

実はジャネットことジャンヌ・ダルクに召喚されたラーの勇者。

英霊の知名度が低かったため、今まで邪鬼にバレずに済んだ。

見捨里タワーでの最終決戦で邪鬼と融合した後、世界を再構築して去っていった。

救国の聖なる魔女

ジャネット・デイ・アルク

Janet di Arc

種族：英霊

能力：応援すると周囲の力が増す程度の能力

見捨里市の路地裏の建物で、デИАーナ達に指示を与える少女。

生前は年若くして軍を指揮していた羊飼いの娘だったという。

生真面目な性格で、気苦労が絶えない。

その正体は、ジャンヌ・ダルクが具現化した存在で、裁定者の英霊^ル。無闇に力を振るえば怪として処罰の対象となるため、

建物から出る事はできず、指導者の役に留めてある。

彼女が指導する怪は、同族にとどめを刺す事ができない。

それは彼女の慈悲であり制約である。

怪を退治するのはいつだって人間で、協力する怪は引き立て役。

ジャネットはそれを弁えているために、あえて枷を付けている。

海に沈んだ大陸が浮上した時、彼女も指導だけではいけないと思い、

彼女も（正確には分身だが）ディアーナと共に戦う事を決意した。

純真無垢な銀の羽

ノノ・オーガスタ

Nono Augusta

種族：獣人（鳥）

能力：歌で活力を高める程度の能力

見捨里市の路地裏の建物に住む獣人の女性。

20年以上生きていますが、外見と性格は子供そのもの。

献身的な性格をしており、常に楽観的で前向き。

その明るさによつて、周囲を支えている。

実はサンダーバードと人間の歌姫のハーフ。

人間の血が濃かつたため、歌声で味方を支援する力を持っていた。

鳥に変身する事ができ、また、その歌声で味方を支援できる。

その反面、攻撃や防御は心許ない。

花似合うルーガル

アプリル・フェルナンデス

Apple Fernandez

種族：獣人（狼）

能力：満月の夜に身体能力が高まる程度の能力

見捨里市の路地裏の建物に住む獣人の男性。

典型的なフェミニストで、女好きだが、

子供であつても男性には手厳しい態度を取る事が多い。

粗野な言動が多く頭も良くないが、仲間を誰よりも大事にしており、

優先的に盾になつたり、仲間を傷つけた者に対して激怒したりする。

実は羽心や花恋に恋心を持っているようだが、

人間と怪が恋をすると碌な結果にならないという事だけは知っており、

その思いは決して表には出していない。

あと、「ロリコン」と言われたくないから。

高速移動する拳法が得意で、魔法の扱いは苦手。

未来を手中に取った暗黒神

チエイニー

Chaney

種族：神様

能力：全ての時が見える程度の能力（昔）

血液から武器を創造する程度の能力（今）

見捨里市の路地裏の建物に住む闇の神。

過去や未来など、全てを見通す力を持っていたのだが、

ある事件がきっかけとなってその力は弱体化している。

現在は神の力を利用して、味方を守る役目を担っている。

知的好奇心旺盛で容姿に似合わない年寄言葉で話す。

性格は真面目だが、根は心優しい。

戦闘では血液を凝縮した武器を使い、あらゆるものを破壊する。

華麗なる森の斥候

麗羅（れいら）

Reira

種族：獸人（栗鼠）

能力：音を立てずに忍び込む程度の能力

見捨里市のどこかに住んでいる女盗賊。

先祖代々続く盗賊の家系に生まれており、厳しい規律のもと、優秀な盗賊へと育った。手先が器用で、得意とするナイフ投げだけでなく、暗器の扱いにも長けている。

また、先祖が先祖なので木を登る能力が極めて高く、動きが素早い。

怪奇現象が起こっている時代に赴いて宝を手に入れるのが彼女の夢。

気が強く怒りっぽい性格で、かなりの負けず嫌い。

リーダーシップはないものの、先鋒型なので必然的にリーダーを任されている。

邪鬼との決着後は、アルカディアに去っていった。

閃刃の付喪神

つるぎ

Tsurugi

種族：付喪神（劍）

能力：磨けば磨くほど切れ味が良くなる程度の能力

見捨里市のどこかに住んでいる剣の付喪神。

キザな性格で異性を口説くのが好き。

かつては邪鬼の刀と同じ力を持ち、彼に付き添っていたのだが、

人間の文化に感銘を受けて「地球は人間の時代になった」と確信。

邪鬼を裏切つて、麗羅と共に忍びの者になる。

邪鬼との決着後は、アルカディアに去っていった。

可憐な蝶

揚羽（あげは）

Ageha

種族：獣人（アゲハチヨウ）

能力：幻惑する程度の能力

見捨里市のどこかに住んでいるアゲハチヨウの獣人。

妖精と見紛う容姿だが、虫になれるためれっきとした獣人である。

かつてはある神殿に祀られていたが、濡れ衣を着せられて脱走。

現代日本の見捨里市に逃げ出して忍びの者となる。

その際に邪鬼を攻撃してしまったため、彼から狙われている。

性格は明るくおしゃべり好きで誰にでも友好的。

邪鬼との決着後は、アルカディアに去っていった。

闇に咲く鈴蘭

カリオストロ

Cagliostro

種族：魔法使い

能力：魔法を使う程度の能力

見捨里市のどこかに住んでいる魔法使い。

男性とも女性とも取れぬ中性的な美貌が特徴で、性別は不明。

邪鬼との決着後は、アルカディアに去っていった。

用語集

英霊【怪異】

人間などが死後に信仰や畏怖などで怪に変化したもの。

ジャネットは前者、ツタンカーメンは後者。

簡単に言えば、歴史上の偉人や伝説上の人物などが具現化した存在である。

大抵は生前の行いから英霊の力が反映されるが、死後に英霊として力を得る事も稀にある。

王様のポーチ【その他】

妖精の王族に代々伝わるポーチで、現在はプーカが所持している。

中は異次元空間になっており、物体がいくらでも入り、いつでも取り出せる。

オシリスの鈴【その他】

邪鬼が所持していた、霊体を消滅させる黒い鈴。

オシリスとは、エジプト神話の冥界の神の名前。

ドラキュラとの戦いで勇気が×印の罅に投げ捨てたものを羽心が拾い、

ジャネットの警告を無視して邪鬼に騙される形で羽心が使用した事でキユウは消滅

した。

怪【怪異】

怪物、怪人、怪奇現象など、（現代世界の）通常では考えられない存在の事。

吸血鬼、宇宙人、幽霊、妖精、妖獣、エルフ、獣人、魔法使い、英霊、妖怪などがこれに当たる。

後述する×印の罅と関わりがあるため、基本的に恐怖を糧にする。

決意【怪異】

全てを捨てても叶えたいという強固な願いや、思い、自我。

怪は例外なく何らかの決意を抱いており、それを力にして現実改変を行使できる。

人間の決意は怪より弱いものの、逆に言えば、決意が強くなれば人間も怪になる。

時のトンネル【怪異】

時と場所を超える、レポート魔法の一種。

ただし、怪がいる時代に行った場合、怪を倒すまで元の時代に帰還できないという制約付き。

×印の罅とは力を同じくするらしい。

×印の罅【怪異】

邪鬼が刀によって作り出す罅。

黒い煙が漏れており、これによって怪の力は見捨里市に間接的に送られている。

罅は怪の影響を受けた人々の恐怖の感情によって大きくなり、

限界まで罅が大きくなれば、怪が直接見捨里市に行けるようになる。

見捨里市【地名】
みすてり

日本のどこかにある、怪奇現象が多発する地方都市。

基本的にマスコミや研究機関はこれを認識できない。

怪奇現象の原因となっている怪を倒した場合、怪奇現象は文字通り無かった事になる。

そのため、戦いの際に、一般人の記憶を消す必要はない。

妖精のグローブ【その他】

プーカの先祖が作った魔法のグローブ。

太陽のグローブ、月のグローブ、星のグローブの三つが確認されている。

月のグローブは時のトンネルを開く事ができ、

太陽のグローブと星のグローブは装備すれば時のトンネルを潜る事ができる。

ちなみに、このグローブを使えるのは、特殊能力を持った人間か、元人間の怪のみ。

路地裏【その他】

見捨里市の路地裏。

ジャネットをリーダーとして、多数の善良な怪がここに逃げ込んでいる。

表向きは魔法が失われたこの世界における、最後の魔法の聖地である。

ここに住む怪は一般的な怪が黒を基調としているのに対し、白を基調としている。

e p i s o d e 1 — R e v i v e d L e g e n d

怪の始まり

1 — 奇妙な夢

20XX年、6月、23時。

怪奇現象は、突然起きる。

癖のある茶髪と緑色の瞳を持つ小学6年生の真之^{しんの}勇氣^{ゆうき}は、ふと、ベッドの上で、目を覚ました。

(誰かに呼ばれたような気がする……)

勇氣は上半身を起こし、薄暗い部屋の中を見た。

勉強机と本棚があり、テーブルの上には、作りかけのジグソーパズルが置かれていた。

部屋には誰もおらず、いつもと変わらない風景だ。

「夢でも見たのかな……」

勇氣は自分に呆れながら、再び眠った。

『ユウキ』

「誰？」

部屋の外から声がしたため、勇氣はドアの方を見るが、返事はない。

「お母さん？」

家には、勇氣と母親しかいない。

しかし、声は小さく、男なのか女なのか分からなかった。

「ねえ、お母さんでしょ？　ねえってば」

勇氣はベッドから出て、母親を呼びながら、ドアに近づいて開ける。

しかし、廊下には誰もいなかった。

『ユウキ』

すると、また、一階から声がした。

勇氣が恐る恐る下へ降りると、また声が聞こえてきた。

『ユウキ』

勇氣は声のした方を見て、戸惑う。

(どうしてあの部屋から……)

そこは、一階の奥にある死んだ父親の書斎だった。

父親は様々な国に行き、かつて栄えた文明や文化の研究をしていた考古学者だったが、

勇気が2歳の時、出張中に事故死した。

どういう事故だったかは、母親が詳しく教えてくれないので分からない。

書齋は、短い階段を下りた、半ば地下室になった場所にある。

そこには人間の骨格標本や動物の剥製などが飾られていて、

呪いの宝石や人形など、曰くつきのあるものも置かれていて。

勇気は昔から気味の悪いものが苦手で、書齋に入るのも怖かったので、覗いた事しかなかった。

何より、部屋に入ると、父親の事を思い、寂しくなってしまう気がする。

だから勇気は、自然と書齋には近づかないようになっていた。

(それなのに……)

勇気は、階段の前までやってきて、書齋のドアを見る。

ドアの隙間から明かりが漏れていて、中に誰かがいる。

「お母さん、いるの……?」

勇気はそう言いながら短い階段を下り、書齋の前までやってきた。

「こんな時間に何してるの? 僕の仕事、呼んだよね?」

ドア越しに声をかけるが、反応はない。

「お母さん……」

母親は、夜中に書齋で何をしているのだろうか。

「は、入るよ……」

勇気は手を伸ばし、ドアのノブをゆっくりと掴んだ。

すると、背筋に悪寒が走った——勇気は確信した。

中に誰かがいて、それは母親ではないような気がする、と。

その時、声があった。

『ユウキ、クルンダ』

それは、男の声だ。

「うわあああ！」

勇気はドアノブから手を離すと、その場から逃げ出した。

2 — 怪事件の噂

ここは、路地裏にある建物。

夜は魔物が活躍する時とはいえ、エルフの少女ディアーナは欠伸をしていた。

しかし、そんな時間は終わりを告げる。

ドアを開けた人物、ジャネット・デイ・アルクが建物を見回すと、ディアーナに視線を向けた。

「ディアーナ、来なさい」

「はい」

ディアーナはジャネットに命じられ、デスクに向かった。

ジャネットは真剣な表情でディアーナに話す。

「見捨里市で、動物石化事件が発生しました。被害者は既に30匹を超えています」

見境なしの石化に、ディアーナは神妙な面持ちになる。

「犯人の名前はメデューサ。彼女の視線を見た者は、魔力を持たなければ石化します」

この世界の人間で、魔力を持つ者はほとんどいない。

メデューサを野放しにすれば、見捨里市は石の町に成り果てる。

「ディアーナは領いて、武器を構える。」

「無茶はしないでください。私達の仕事は殺しではありません。事件の收拾です」
「分かりました。この事件、必ず解決します」

「よし、行きなさい」

ディアーナとジャネットは互いに領き合う。

そして、ディアーナは建物を後にするのだった。

その頃、勇氣は――

「はー、ホント、情けない」

昼休み、勇氣は廊下で長い黒髪と金の瞳を持つ少女、しらとりうらら白鳥羽心と話していた。

「別に、羽心には関係ないだろ」

勇氣は少し見上げながら羽心に言った。

「あのねえ、勇氣が変な事すると、幼馴染の私まで恥ずかしくなっちゃうの。」

この前だって、体操服を裏返しに着てたでしょ。

私、恥ずかすすぎて顔から火が出るかと思っただから」

勇氣と羽心は、物心がつく前からよく一緒に遊んでおり、6年生で初めて同じクラスになった。

誕生日は勇氣の方が早かったが、羽心の方が背は高く、

性格もしっかりしているので、姉弟のように見える。

「それで、どうして授業中に書齋の夢なんか見たの？」

勇氣は、羽心に先ほど授業中に見た出来事を話していた。

「どうして、って言われても……夢に理由なんてないよ」

「昨日眠れなかったとか？」

「そんな事ないよ。ただ、急にぼーっとしちやつて。」

「なんか、夢って思えないくらいリアルな感じで……」

勇氣は、どう説明すればいいのか分からなかった。

「それにしても、不思議よね。夢だとしても、勇氣がああ書齋に入ろうとするなんて」

書齋の事は、不思議な話が好きな羽心もよく知っていた。

勇氣の家の書齋には、父親が研究で使っていた考古学の本や資料だけでなく、

怪奇現象や超常現象に関する本もあった。

「もしかしたらその夢、何かを暗示してるのかも？」

「な、何言ってるんだよ」

「夢に出てきたものが自分の今の心の状態や未来を表している、夢占いってあるでしょ？」

「そういうのって、ただの迷信だろ」

「意外と当たるのよ。それにその夢、今日初めて見たわけじゃないんでしょ？」
「それは、そうだけど……」

勇気が書齋の夢を見たのは、今回で数度目だった。

「きつと、それだけ何か強い暗示があるのよ。えつと、夢占いで書齋の意味は……」
羽心は、人差し指で額をトントンと叩いて、記憶を探った。

「思い出した！ 書齋は『仕事』を意味してるの。部屋の中が明るかったんでしょ？
つまり、仕事が上手くいくっていう事かも」

「仕事って……僕、小学生だよ」

「だったら、やらなきゃいけない事が上手くいくって事じゃない？」

「やらなきゃいけない事といえば、宿題か趣味のジグソーパズルを完成させる事ぐらいだ。」

「でも、今日も結局、書齋の中には入らなかったのよね？」

「あ、ああ。途中で怖くなって」

勇気はいつも、今回と同じようにドアを開けずに逃げていた。

「それなら、もしかするともう一つの意味の方かも。こっちは、ちよつと不吉だけどね。
書齋に入れなかった場合はね、仕事で大きなトラブルが起きるって意味があるの」

「ええええ？」

勇氣は顔を強張らせた。

夢占いなど信じていなかったが、トラブルが起きると聞けば、いい気はしない。
(それに……あれは誰なんだろう……)

勇氣は男の声を思い出すと、思わず身震いした。

「へえー、それマジかよ」

目の前を通り過ぎようとした少年達が、大きな声を上げた。

隣の3組の男子生徒だ。

「マジだつて。兄貴の友達が本当に見たんだつて」

「信じられないな。猫が石になっちゃうなんてさ」

「猫が石に!?!」

羽心は目を輝かすと、男子生徒達の会話に割り込んでいった。

「ねえ、どういう事?」

「な、何だよ急に」

「いいからいいから! 何があったのか私に詳しく教えなさい!」

羽心はいつも強引で、興味のある事なら、相手が誰であつても平気で声をかける。

男子生徒は戸惑い、昨日、高校生の兄から聞いた話をした。

『ニャアアオ! ニャアアオ!』

1週間前の夕方、兄の塾友達は何活を終えて帰ろうと商店街の前の道路を通りかけた時、

路地から猫の鳴き声が聞こえてきたという。

明らかに普通の鳴き声ではなかった。

猫は叫びながら、必死にもがいていた。

怪我でもしたのだろうか、と駆け寄り、電柱の後ろに隠れていた猫を見た瞬間、ギョツとした。

猫の身体の半分が、石になっていたのだ。

『ニャアアアオオオオ！』

次の瞬間、猫の顔が音を立てて、身体同様に石になってしまった。

彼は、怖くなってそのまま逃げた。

「何だよ、それ……。きつと、何かの見間違いだよ」

勇気は無理に笑おうとした。

「私も知ってるわ」

不意に、話を聞いていた1組の女子生徒が口を開いた。

「知ってるって、石になった猫の事？」

羽心が尋ねると、女子生徒は首を横に振った。

「私が知ってるのは、石になった鳩の話よ」

3日前、近所に住むおばあさんが、公園の草むらで、鳩そっくりな石を見つけたのだという。

草むらには、10を超える鳩そっくりな石が転がっていたというのだ。

「その中の1つの石が、本物の鳩みたいに羽ばたいてたんだって。

すぐに石になったから、ただの見間違いかかって言ってたんだけど」

「それって、猫の時と同じだ……」

勇気の言葉に、女子生徒は小さく頷く。

「誰かの悪戯なんじゃ？」

「そんなの、どうやってやるの？ 生きた動物が急に石になったのよ？」

「それは……」

勇気は、上手く答える事ができない。

「まさか、メデューサがいるわけないし……」

「メデューサって、何？」

「ギリシャ神話に登場する、生き物を石に変えちゃう怪物よ」

「ギ、ギリシャ神話って何千年も昔に作られた物語だろ？」

勇気が口を挟むと、羽心はジト目で勇気を見た。

「……勇氣……もしかして怖いのか？」

「そ、そうじゃなくて！ ほら、チャイム鳴ったし、教室に入ろうよ」
チャイムを理由にその場を収めると、勇氣はふうつと汗を拭った。

（まったく……みんなどうして、こんなに怖い話が好きなんだろう）

3 — 勇気がない勇気

放課後、勇気は羽心と一緒に帰っていた。

「それにしても、動物が急に石になるなんて不思議よね」

「そうだね……」

羽心は勇気の前を歩きながら、動物が石化する話をしている。

「やっぱり『この町』……見捨^{みすてり}里市はただの町じゃなかったのよ。」

「この町ではミステリーな事件が起きるはずよ」

「そんなの、ただの偶然だよ。」

「宝町つてところに宝があるわけじゃないし、光町つてところはいつも光ってるわけじゃない」

「もー、勇気はロマンがないわね。真面目すぎると、つまんない男って思われちゃうわよ」

「あのね……」

勇気は、別に真面目な事を言っているつもりはなかった。

ただ、不気味に思ったただけだ。

「ねえ、私達も探してみない？」

羽心は立ち止まり、勇気の方を見て笑みを浮かべた。

「探すって、何を？」

「もちろん、石になった動物よ！」

「えええ!？」

「だって、猫と鳩がいたのよ？　きっと、他にもいると思うの」

「そうかもしれないけど」

「でしょ。今日の夜、探してみましようよ。そうだ、学校に飼育小屋があるわよね。

あそこなら、兎とか鶏とかがいるからちようどいいかも」

「きよ、今日は見たいテレビがあつて」

「じゃあ、明日は？」

「明日はジグソーパズルを完成させようと思つて」

勇気が怯えながら言うと、羽心は大きな溜息をついた。

「勇気にはないのは、ロマンだけじゃないわよね」

「どういう意味だよ」

「『勇気』って名前なのに、全然勇気がないじゃない」

「……」

その言葉に、勇気は思わず動揺する。

「おじさんが悲しむわよ。『勇気』って名前をつけてくれたの、おじさんだったんでしょ？」

「そ、それはそうだけど……ってか、今はそんなの関係ないだろ。」

大体、動物が急に石になるなんて、あり得ないよ。見た人が嘘をついたんだよ」

「そんな嘘について、何の得があるのよ？」

「多分、みんなを驚かせようとしたんだ」

「高校生の人だけだったらそうかもしれないけど、石になった鳩を見たのはおばあさんよ？」

「おばあさんだって、みんなを驚かせたいって思う事があるだろ」

「そんなのないわよ」

「あるったらある。あの話は全部嘘に決まってる」

「もういい！ 勇気に頼んだ私が馬鹿だった。」

勇気は怖がりだもんね。夢の中でも何度も怖くなって逃げちゃうし」

「だからあれは！」

「飼育小屋には私一人で行く！ 勇気はジグソーパズルでもやってたらいよいよじゃない！」

「あつ、ちよつと！」

羽心は勇気を睨み、頬を膨らませると、スタスタと歩いていった。

勇気が呼び止めるが、羽心は立ち止まる事なく、角を曲がる。

「もー、何なんだよー」

勇気は呆れながらも羽心を追いかける事にした。

一方、ディアーナは見捨里市で起こった石化事件について調査をしていた。

「突如として現れた謎の×印状の罅。あそこから出る黒い煙。」

間違いない、アレは空間の裂け目……」

ディアーナは空中に浮かぶ×印状の罅を見て言った。

×印状の裂け目の中からは、黒い煙がゆらゆらと揺らめいている。

しかし、ディアーナは前が見えていなかった。

茶髪の少年が、ディアーナとぶつかろうとする。

「わああつ!!」

勇気とディアーナはぶつかる寸前に、互いの顔を見てそう言った。

「な、なんだ……人間じゃないの、こんなところでどうしたの？」

「人間……？ 君は一体何者なんだい？」

「あ、そんな事は気にしないで。何を悩んでいたのか、聞きたいの」

「ディアーナは慌てて話題を切り替える。

「実は、変な夢を見たんだ。書齋の中に、赤い髪の少年が現れて、僕を呼んでいたんだ。でも、書齋には行きたくなくて……」

「ふーん。でも、どうして書齋に行きたがらないの？」

「曰くつきのものとか、骨格標本とかがあつて、怖いんだ」

「はっ！ そんなものに怯えるなんて子供ね」

「いや、僕子供だけど」

「でも、書齋に行かなきゃ始まらないでしょ？ 『旗』は必ず回収しないと」

勇氣には、ディアーナが何を言っているのか理解できなかつた。

だが、彼女の言う通り、書齋に行かなければ何も始まらない。

勇氣は、小さく頷いた。

「……書齋に行きなさい。あの子が待っているわよ」

「……」

仕方なく、勇氣はディアーナと共に、書齋に行くのだった。

曰くつきのものがたくさんある、恐怖の書齋へと——

4 — 謎の少年

「さ、行くわよ」

「うん」

勇氣とディアーナが書斎の前までやってくる。

時計の針は、8時を過ぎていた。

母親は看護師をしていて、今日は夜勤なので、家には勇氣とディアーナしかいなかった。

(怖いけど、だけどここのままじゃ僕は……)

勇氣は全身に力を入れると、目を大きく見開いた。

ディアーナは表情一つ変えていない。

「……勇氣を出すんだ！」

勇氣は自分に言い聞かせるようにそう言うと、

ドアのノブを掴み、回し、ゆっくりとドアを開く。

ディアーナも共にドアの中に入る。

次の瞬間、部屋の明かりが目飛び込んできた。

「勇氣は目が眩みそうになるのを必死に耐えて、ディアーナと共に部屋の中を見た。
「やつと、会えたね」

部屋の窓際に、あの少年が立っていた。

「夢、じゃないよね……?」

「やってみる?」

ディアーナに促され、勇氣は頬をつねってみた。

「痛い……」

痛みを感じるという事は、これは現実だ。

(……いや……だけど、この子は一体どこから……?)

(書齋に住み着くのかしら)

戸惑う勇氣と、顎に手を当てるディアーナに、少年は優しい笑みを浮かべた。

「僕はね、君が自らドアを開けるのをずっと待ってたんだ」

「ずっと? 夕方はいなかったじゃないか」

「君がドアを開けたわけじゃないから」

異変が起きた時、勇氣がドアを開ければ、朝でも昼でも夜でも、この部屋に現れる」

「意味が全然分らないんだけど……」

「大体、あなたは誰なの?」

「それは後で説明するよ。今はあまり時間がないからね」

入り口のドアが勢いよく閉まった。

「何？」

勇気とディアーナはドアの方を見る。

「勇気、君に手伝ってほしい事があるんだ」

突然、勇気の耳元で声がした。

振り返ると、窓際にいたはずの少年が勇気の真横に立っている。

「ひゃ、いつの間に？」

「神出鬼没ね」

「僕は霊体なんだ」

「え？」

「簡単に言くと、幽霊だね」

「そこそこ高位のアンデッドね」

勇気は慌てて離れ、ゾツとして少年を見た。

ディアーナは冷静に少年を見ている。

少年はそんな勇気をよそに、レザーグローブを嵌めた左手で、父親の机を指差した。

「あの机の一番上の引き出しを開けてみて」

「ど、どうして?」

「いいから」

勇気は首を捻りながらも、机の傍に行くと、恐る恐る引き出しを開けた。すると、引き出しの中に、ある物が入っていた。

時計のような装置がついた漆黒のレザーグローブだ。

「あら、これは?」

ディアーナは興味深そうに見ている。

「これって、君のと同じ物……だよな?」

勇気は少年の嵌めたグローブを見つめる。

「グローブは左右逆の手で、羅針盤も少し違うけどね」

「羅針盤?」

「この時計のような物だよ。」

方角を示すコンパスで、僕の羅針盤には『月のマーク』が、

そこにある羅針盤には『太陽のマーク』がある」

そう言われて、羅針盤を見つめると、確かに太陽のマークがあった。

「さあ、勇気、そのグローブを嵌めるんだ。あのエルフには必要ないからね」

「僕が? なんて……?」

「とういかなんで、あたしの事をエルフだって知ってるの?」

勇気とダイアーナの質問には答えず、少年は別の質問をする。

「ところで、君達は、×印状の罅を見た事はあるかい?」

「それって……」

ダイアーナは調査していた時、空中に浮かんでいた×印を思い出した。

「黒い煙を出す罅の事でしょう?」

「ああ、やっぱり見たんだね。だったら、急がないと」

少年は険しい表情になった。

「勇気、君はグローブを嵌めたら、そのカメラを持つんだ」

「あたしは?」

「必要ない」

少年は柵の上に目をやる。

柵の上には、父親の古いインスタントカメラが置かれていた。

「どうしてカメラなんか?」

「そのカメラが必要なんだよ。『怪』を止めるためにはね」

「カイ?」

耳慣れない言葉に、勇気は首を捻った。

「怪物、怪人、怪奇現象……つまり、常識では考えられない存在だよ」

「な、何それ……」

「待って！ 妖精や天使は怪なの？ これらもこの世界の常識では考えられない存在だよ」

勇気は急に怖くなったが、ディアーナは質問する。

質問に対し、少年は首を横に振った。

「人々に恩恵を与える者は、怪とは呼ばない。これは絶対の真実だ。さあ、怪を止めに行きましょう」

少年はそう言って、勇気とディアーナに近づこうとした。

「来るな！」

勇気はドアの前まで逃げるが、ディアーナは物怖じせずに剣を抜こうとしている。

「お、お前は誰なんだ？」

「それは後で話すよ。今は怪を」

「怪、怪、うるさい！」

勇気が怒鳴ると、少年は小さな溜息を漏らした。

「まったく、君と下らない押し問答をしている暇はないんだ」

そう言って、少年は勇気とディアーナをじっと見つめる。

「……この世は、ヒトが理解できる事ばかりじゃない」

少年は、グローブを嵌めた左手を傍の壁の前にかざし、呪文を唱えた。

「カオスゲート
時空貫通」

螺旋状に風が舞い、壁に光が渦巻く。

その渦が大きくなっていき、次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

まるで巨大な掃除機のパイプが壁に現れたようだ。

壁に向かって強い風が起きている。

「わああー！」

「わあ、かっこいい！……あら、聞いた事があるわね」

勇氣は身体を支えるためにドアの枠に手をかけた。

一方、少年は微動だにもせず、ディアーナもわくわくしている。

「さあ、行くよー！」

少年は、グローブをした手を勇氣に向かって差し出した。

「な、何なんだよお前は!!」

勇氣はパニックになりながら叫び、そのまま、書斎から飛び出す。

(こんなのあり得ない！ 絶対変だ!!)

勇氣は玄関のドアを開けると、家の外へ逃げようとした。

その時、勇気とディアーナの目の前に何かが落ちてきた。

「あ、が、がああ」

それは、顔が半分石になった、男の生首だった。

「うわああああ!!」

「自然じゃないわね……」

勇気は思わず仰け反り、ディアーナが不快な表情になると、

上空に浮かぶ大きな×印が目に入った。

(ま、まさか、あそこから……? いや、でも!)

足元の生前の男は、目を大きく見開き、勇気とディアーナをじろりと睨んだ。

「み、みんな……やられ、たー、ちくしよおおお!!」

男の顔が音を立てて、石になっていく。

男は目と口を大きく開いたまま、完全に石になってしまった。

「ひいっ!」

「なんて不快! 許さないわ!!」

勇気は慌てて家の中へ逃げ帰り、ディアーナは感情的になって暴言を吐く。

「その首は、盗賊のものだ」

冷静な声が響いて、勇気とディアーナはハツとした。

ドアが開いたままになっていた書斎から、少年がこちらを見ている。「盗賊……?」

「怪の棲んでいる洞窟の宝を盗もうとしたんだ。」

「だけど石にされて、首だけ×印状の罅へ投げ捨てられたんだろうね」

「石に? 投げ捨てられた?」

「あの×印の罅の向こうは、怪のいる場所に繋がっているんだ。罅から黒い煙が漏れ出てるだろ。」

「つまり、怪の力が、この町に漏れ出しているんだよ」

「そんな……」

少年は厳しい顔つきで勇気とディアーナをじつと見た。

「このままでは、この町の全ての生き物が」

「石にされてしまうわよね」

「そうだ。さあ、怪を倒しに行くよ」

「ま、待つてよ!」

戸惑う勇気を安心させるように少年は微笑む。

「君が必要なんだよ、勇気。エルフも……」

少年の目が真剣で厳しいものになった。

「夢の中で言っただろう。この町を救えるのは、君しかないんだって」
 「僕……だけ」

「さあ、グローブを嵌めて、カメラを手に取るんだ。エルフも、行くよ」
 「……分かったわ」

勇気は戸惑いながらも書斎に入ると、グローブを見つめた。

恐る恐るグローブを手に取ると、右手に嵌め、棚のインスタントカメラを持った。

少年は、床に置いてあつた父の登山靴を指差す。

「それを履いた方がいい。足場の悪い場所に行くからね。怪我はしたくないだろう？」

勇気は渋々、言われた通りに靴を履いた。

「さあ、これで今度こそ、準備が整った」

「剣も魔法も、準備はしているわ」

「なあ、どこに行くんだよ？」

「決まっているだろう。——怪のいる場所だ！ カオス・ゲート 時空貫通」

少年はグローブを嵌めた手を再び渦にかざした。

そして、先程と同じ呪文を唱えると、風と光が増し、壁にできた大きな穴が光り輝いた。

勇気とディアーナは眩しさと強い風に目を細める。

少年のハーフコートが舞い上がって音を立てる。

「行くぞ、僕に続け！」

「ええ！」

少年とディアーナは、光の渦の中に消えた。

勇気は一瞬躊躇う。

「どうして僕なんだよ……？！」

「このままじゃ、みんなが……」

勇気はぎゅつと目を瞑ると、顔を上げた。

足に力が入り、手にしたカメラもしっかり握る。

「ああー、もう、何なんだよ！」

勇気も遅れて、光の渦に飛び込んだ。

5 — 怪が潜む洞窟

「わああああああ!!」

勇氣は、光のトンネルを手足をばたつかせながら飛んでいた。

ディアーナは目を閉じて、トンネルの中を移動する。

勇氣はスカイダイビングをやった事がないが、もしやったら、こんな感じかもしれない。
い。

勇氣は混乱しながらも、そんな事を考える。

「うわあ! わああ! わあああああ!」

やがて、光のトンネルの奥に、松明の炎が見えてきた。

勇氣は勢いよく地面に倒れ、ディアーナは乱れたスカート裾を直す。

しばらくすると、ディアーナの髪が淡く光った。

「いたたた……」

「……洞窟?」

ピチャン、ピチャンと音がする。

地面はヒンヤリとしてゴツゴツしていた。

勇気は起き上がりながら、ディアーナと共に自分がどこにいるのか確認した。そこは、薄暗い洞窟の中だった。

岩肌に松明が取り付けられていて、炎が揺らめいている。

「休憩している暇はないよ」

いつの間にか、少年が横に立っていた。

「ハイハイはゴハハ？」

勇気は周りを見る。

鎧に身を包み剣を手にした石像が、いくつも転がっていた。

その顔は皆、何故か恐怖に慄いている。

「さっきの男の仲間だよ。怪に襲われたんだ。

宝目当てに、盗賊が次から次へとこの洞窟にやってくるからね」

「それって、人間って事？」

「ああ、今はもうただの石だけだね」

「こいつらもメデューサの被害を受けたのね」

彼らの服装は、映画や歴史図鑑で見た事がある。

「もしかして、ここは……昔のギリシャ？」

「もしかしなくても、その通りだよ。

君達は、時と場所を超える『時のトンネル』を通つてきたんだ」

「そんなのあり得ないよー！」

「へえ、あの子が使う技と同じね」

その時、ディアーナの足元でパリンと音がした。

ディアーナが見ると、石になった盗賊達の傍に、割れた鏡がいくつも落ちていた。

それを拾つて調べてみると、この鏡は誰かが割つた事に気づいた。

「鏡が割れている……一体、誰が割つたのかしら？」

すると突然、不気味な音が響いた。

「隠れるんだー！」

少年に言われ、勇気は訳も分からず、慌てて物陰に隠れた。

しかしディアーナは遅れてしまい、視線を一瞬だけ見て重圧を受ける。

「……つつー。しまったわ」

不気味な音を出しながら、誰かが近づいてくる。

松明の炎が、その姿をうっすらと映した。

ポロポロの布を纏った女だ。

女の頭には、髪の代わりに、無数の蛇が蠢いていた。

無数の蛇の尾や舌が細かく震えて音が出ている。

不気味で悍ましい声の下に、眼光鋭い恐ろしい女の顔がある。

身体は巨大な蛇そのもので、女はその蛇の身体をくねくねと動かしながら、地面を進んでいた。

それを見て、勇氣は悲鳴をあげそうになる。

そんな勇氣に、少年は「しー！」と注意した。

「あれが、怪のメデューサね」

「メデューサ!? 本物のメデューサ!? 生き物を石にしてしまうギリシャ神話の怪物の!?」

「そうだ。あの気味の悪い女と目が合うと、石になってしまうんだ」

「ジャネットは言っていた……石化事件を解決しなさいと」

「……ジャネット?」

ディアーナは右腕を挙げながら、そう言った。

その時、メデューサが石になった盗賊達の前で止まった。

一つだけ、割れていない鏡が落ちていた。

次の瞬間、メデューサは地獄から響くような叫び声を上げ、蛇の身体で鏡を粉々に砕いた。

やがて、メデューサは洞窟の奥へと消えていった。

「鏡が割れた？」

重圧が解けたディアーナは、メデューサが見えなくなったのを確認する。

「鏡にメデューサの顔を映せば、それを見たメデューサは

自分の力によって石になってしまおう、とジャネットは言ってたわ。だけど」

ディアーナは割れた鏡の傍に立った。

「ご覧の通り、弱点に気づいてしまったらしいわ。もう鏡は通じないわよ」

「だから、そのカメラが必要になったんだよ」

少年は、勇気を持つインスタントカメラを見た。

「カメラでメデューサの顔を撮るんだ。」

その写真をメデューサに見せれば、石にして倒す事ができる」

「……あたしは？」

「メデューサを弱らせてくれ」

「分かったわ」

この時代にカメラはないだろうから、メデューサにも気づかれないかもしれない。

勇気は納得しながらも、ふと疑問を抱いた。

「だけどそれなら、君がカメラを持ってくればよかつたんじゃないの？」

それを聞くと少年はフツと笑って、勇気を持つカメラを掴もうとした。

しかし、その手はカメラをすり抜けた。

「へっ?」

「僕は霊体だつて言つただろ」

少年は、ふわりと宙に浮いた。

「僕も、怪の一つなんだよ」

「えええ?」

「安心して。別に襲つたりはしないよ。怪の全てが悪い存在というわけじゃないからね」

「それは妖精も同じよ」

少年は、勇気に向かって飛んできた。

「や、やめて!」

勇気はとつさに身構えるが、少年は勇気の身体をすり抜けてしまった。

「ご覧の通りさ」

「ご覧の通りつて……」

二人が話していると、洞窟の奥から不気味な音が響いてきた。

「こうしちゃいられないわ!」

ディアーナは遠くからメデューサー目掛けて風の刃を放つたが、

攻撃はギリギリでかわされてしまう。

「当たらなかつたわね……行くわよ」

少年、勇氣、ディアーナは洞窟の奥へ走った。

「ああっ！」

洞窟の奥に、メデューサがいる。

メデューサの前に、×印状の罅が浮かんでいた。

蛇が一層大きな音を立て、メデューサが一層大きな声で叫ぶ。

その度に、×印状の罅が大きくなっていった。

「……何よこれ」

「勇氣の町で、かなりの小動物が石にされたせいだね」

「石にされた小動物の数が増えると、罅が大きくなるのね」

「ああ。このままじゃ、メデューサそのものが、

あそこを通って勇氣の住む世界に行けるようになってしまう」

「じゃ、早く止めないと！」

勇氣はカメラを少年に渡そうと突き出した。

「エルフはメデューサを弱らせてくれ。」

そして勇氣は、気づかれないように回り込んで、正面から写真を撮るんだ」

「分かったわ。でも、カメラはなんで勇気が持つのか？」

「さつき説明しただろう。僕はシャッターボタンを押せない」

「だけど、目が合うと石になっちゃうんだよね！」

「気づかれないようにって言ったじゃないか。さあ、頑張つて！」

今ここでカメラを持つ事ができるのは、勇気しかない。

戦えるのも、ディアーナしかない。

弱音を吐いても、誰も代わってくれない。

(ここまで来たら、やるしかない、よね……)

勇気は歯を食いしばると、真つ直ぐ前を向いた。

「いくわよ！」

「ああもー！」

勇気とディアーナは、メデューサの下へ向かった。

「かぜのせいはいよ、みえざるしよげきを！ Wind Blast」

ディアーナは竜巻を起こし、メデューサを巻き込んでダメージを与えた。

その隙に、勇気は身を屈めて距離を詰め、カメラのシャッターボタンを押した。

フラッシュが光り、メデューサが声を上げる。

「やった！ 僕やったよ！」

勇氣は少年の元へ駆け寄り、急いでカメラから写真を取り出そうとした。突然、カメラから鈍い音がした。

見ると、写真が途中で引っかかってしまっている。

カメラが古いせいだ。

「もー、こんな時に！」

「ちよつと、勇氣！」

勇氣が写真を引つ張ると、勢い余ってカメラを放り投げてしまった。

カメラが岩にぶつかり、無残に割れ、写真も破れてしまった。

「勇氣、流石に笑えないよ」

「分かってるよ！」

「……あつ」

少年はメデューサの方を見て、声を漏らした。

「あれも流石に笑えないね」

「分かってるつてば！」

勇氣はメデューサが襲ってくると思ひ、慌てて目を瞑った。

「そうじゃない、見てみる」

「えっ？」

少年に促され、勇氣は、視線を合わせないように恐る恐るメデューサの方を見た。すると、メデューサの姿が消えていた。

「どこに行ったのよ」

「逃げたよ。いや、新しい獲物を狙いに行ったというのが正解かな」

「新しい獲物？」

「まさか」

勇氣とディアーナは、空中に浮かぶ×印状の罅を見た。

「メデューサが罅の中に入ったわ。まずいわね」

このままでは、ディアーナの言う通り、町の人々が石にされてしまう。

「仕方がない。このまま僕達も行くよ」

少年は、罅へ向かって宙を滑るように移動する。

「行くって、あの罅に入るつもり？」

「ああ」

「あの大きさなら入れるわ」

少年とディアーナはそう言うのと、罅の中に飛び込んだ。

「ちよ、ちよっとー！」

勇氣も無我夢中で罅に飛び込んだ。

6 — 勇気の決断

勇気とディアーナは地面に落ちた。

「まだだ、痛たたた……」

見上げると、空中に大きな×印状の罅が浮かんでいる。

「……は？」

勇気とディアーナは周りを見る。

そこは、見捨里小学校の校舎だ。

校舎の壁にかけられた時計の針は、夜の8時過ぎを指していた。

勇気とディアーナが書齋で少年と会った時から、ほとんど時間は経っていないよう
だ。

「勇気、エルフ、これを見て」

声に反応し、前を見ると、少年がいた。

少年の横には、像が立っている。

「あんなところに石像なんてあったっけ？」

勇気とディアーナは目を凝らして見てみた。

「ああ！」

像は、両手を上げて驚いた表情のまま石になった、原末先生だ。

「先生！」

「とうとう人間も被害者に……」

勇気は原末先生の元へ駆け寄る。

「残業をして、メデューサに会ってしまったんだろうね」

「そんな！ 先生、いつも怒ってばかりで大嫌いだったけど、こんな姿になるのは嫌だよ！」

勇気はショックで石像になった原末先生に抱きついた。

「とにかく、メデューサを倒すんだ」

「メデューサを倒せば何とかなるわ」

「僕がカメラを壊したからだ！ 先生、ごめんなさい!!」

「しっかりしろ真之勇気！ お前が泣いてたら、お前の名前が泣くぞ！」
それを聞き、勇気は我に返った。

「勇気、エルフ、君達だけがこの町を救えるんだ」

「分かったわよ……」

勇気は原末先生から離れると、拳をぎゅっと握り締めた。

少年とディアーナは、校舎の方を見た。

「このまま何も持たずに戦っても勝ち目はない。カメラを探そう」

「そんなの探してる暇ないよ？」

「カメラを壊したのは君だよ」

「ぐつ、それは」

「まあいい、だったら鏡だ。それならすぐ見つかるだろう？」

「上手く割られないようにすれば、メデューサを倒せるかもしれないからね」

「あたし、メデューサを探すわ」

ディアーナは双剣を構える。

少年は鏡を手に入れるために、校舎に入ろうとした。

「きゃあああー！」

校舎の横から、悲鳴が聞こえた。

「誰かがメデューサに襲われてるんじゃない？」

「勇気！」

勇気は慌てて声が出した方へ走り、少年も勇気を追う。

勇気は、校舎の端までやってくると、声のした方を見つめた。

飼育小屋の前に、メデューサがいる。

襲われているのは、羽心だ。

「羽心！」

「……酷い、女を襲うなんて！」

羽心は、這うように逃げていた。

今はメデューサーに背を向けているが、目を見て石にされてしまうのも時間の問題だ。

「助けなきや！」

「当然よ！」

勇気とディアーナは羽心の下へ駆け出した。

だがそんな勇気とディアーナに、少年が立ち塞がった。

「やめろ！ 今はカメラか鏡を探すのが先だ！」

「あの子を見殺しにするわけ？」

「彼女は諦めろ！ 君達が犠牲になったら町が全滅するぞ！」

少年の言葉に頭に来たディアーナは、双剣を抜き放った。

「怪を倒しても人を守れないなんて、何の意味もないわ」

「そうだ。僕の名前は、真之勇気なんだ！」

勇気とディアーナは少年の身体をすり抜けると、羽心の下へ走った。

「勇気、エルフ！」

少年が呼び止めるが、勇氣とディアーナは振り向く事なく走り続ける。

「目を閉じなさい！」

勇氣とディアーナは、這って逃げる羽心に駆け寄った。

「メデューサ、もう来たわね」

蛇達が髪になったメデューサが、不気味な音を立てて背後から迫ってくる。

「勇氣、私、動物を撮影しようと思って……」

羽心の横には、スマホが落ちていた。

「無茶しちゃって……いい？ 何があっても目は閉じなさい」

「わ、分かった！」

勇氣とディアーナは背中に羽心を庇い、振り返った。

「ガアアアアアアア!!」

目を合わせないよう、視線を落とした勇氣とディアーナの耳に、

メデューサが迫る音が聞こえる。

不気味な蛇の音がゆっくりと近づいてくる。

「羽心！ 僕の合図で目を閉じたまま立ち上がって走るんだ！」

「う、うん！」

その時、メデューサの叫び声が上がった。

メデューサの巨大な蛇の身体と地面をこする音が迫ってくる。

「かぜよ、ふきあれろ！」

ディアーナは呪文を唱え、竜巻を起こして攻撃する。

彼女の決意が乗った竜巻は、メデューサをずたずたに切り刻んだ。

その派手な威力に勇気は驚くが、メデューサを倒すためならばこちらも負けてはいられない。

勇気はメデューサに思い切り頭突きし、傍にあつた石を投げつけてメデューサを怯ませる。

「今だー！」

勇気はその隙を突いて、羽心の傍に落ちていたある物を手に取った。

「動け、早くっ！」

震える指先で、必死にある物を動かす。

そんな勇気と、ディアーナに向かって、メデューサが襲いかかった。

「これを見ろ！」

しかし、それより一瞬早く、勇気が眼前にある物を突き出した。

それは、スマホだ。

画面に、メデューサの瞳が映っている。

スマホを操作し、カメラのレンズを画面の方に切り替えたのだ。

「ガアアアアア!!」

自分の目を見たメデューサが、咆哮した。

頭に生えた無数の蛇も悶え苦しみながら、固まっていく。

完全に石になったメデューサが地面に倒れた。

メデューサが粉々に砕け散り、黒い煙が辺りに四散した。

「やった!」

「……あたし達の勝ちね……」

「ゆ、勇氣……」

羽心は、ふらふらになりながらも勇氣とディアーナの方を見た。

「羽心、無事で良かった」

「こ、怖かつ……うつ、ひぐ……」

いつも強気な羽心が泣き出して、勇氣は驚いて肩を支えた。

「勇氣、エルフ、信じられないけど、見事だったね」

少年とディアーナが勇氣の傍にやってきた。

「本当に、倒せたの?」

「ああ、罇も消えたよ」

少年はふと、勇気が持っているスマホを見る。

「ところで、それは何だい？」

「スマホだよ。カメラ機能を利用したんだ」

「ス・マ・ホ？」

「もしかして、知らないの？」

「この時代の事はあまり知らないね」

「どういう事？」

「さあ、何だろうねえ」

勇気が尋ねるが、少年は話をはぐらかした。

「ジャネットに報告しましょう」

「ディアーナはそつと、勇気の傍から去っていった。」

「おい、お前達、何をしてるんだ？」

校庭から、原末先生が走ってきた。

勇気は目を丸くして「あ！」と声を上げる。

「先生！ 先生が元に戻った！」

「元について、どういう事だ？」

「先生は、先生は石になってたんです！」

「はあ？ 真之、またボオーツとしてたのか？」

「違います！ さつき見たでしょ！」

戸惑う勇氣の傍に、少年が歩み寄ってきた。

「怪が消えれば、その怪が起こした全てはリセットされるんだ。

つまり、怪の事を覚えているのは、君と……あのエルフだけという事だね」

「僕だけ？ って事は、羽心も……羽心も何も覚えてないの？」

さつきあんな目に遭ったのに、そんなはずないだろ……」

勇氣が驚いていると、羽心が首を捻った。

「勇氣、一人で喋ってるの？」

さつきまで泣いていたはずなのに、すっかりいつも通りだ。

「一人って、僕は今、彼と……」

「ああ、これも言っただけだね。僕の事は、君と、怪と、妖精にしか見えないんだよ」

「あ？ え？」

「勇氣、本当に大丈夫？」

羽心は眉を潜めている。

「ええつと、羽心こそ大丈夫なの？ 怖かったら？」

「怖い？ っていうか、私、どうしてこんな時間に学校にいるの？」

周囲を見回した羽心は、原末先生が睨みつけているのに気づいた。

「それは先生が聞きたいね。真之、白鳥、こんな時間に学校で何をしてたんだ？」

「そ、それは……」

勇気はどう説明すればいいのかわからず、しどろもどろになった。

「そろそろ帰るよ」

少年はそう言うと、宙に浮かんだ。

「ちよ、ちよつと！ 君は何者なんだよ？」

勇気は慌てて少年の傍に駆け寄る。

「名前くらい教えてよ！」

「名前？ それは好きに呼んでくれていいよ」

「好きにつて！」

「そうだ。君が『勇気』だから、僕は逆の『キユウ』つていうのはどうかな？」

「何だよ、そのいい加減な名前は！」

「まあまあ、大事なものはそこじゃないから」

キユウは浮かびながら、勇気をじつと見つめた。

「これは始まりに過ぎないよ。この町を救えるのは、君しかいないんだからね」

キユウはそう言うと、そのまま空を飛んでいった。

「何なんだよ。どういう事なんだよ……」

勇気は戸惑う。

それは、6月の騒々しい夜だった。

勇気は、デイアーナと、キユウと出会い、この町を守る使命を負った。

巨大な影

1 | 父親の書齋

(やっぱり、あれは夢だったのかも……)

メデューサを倒して、一週間が過ぎた。

羽心も原末先生も、石化事件の事や、

その犯人であるメデューサと遭遇した事は、全く覚えていなかった。

町でも全く話題にもなっておらず、もちろん、ニュースでも報道されていなかった。

怪が消えれば、その怪が起こした全ての事が人々の記憶から消える、とキユウが言った。

(だけど……)

勇気はあれが本当にあった事かどうか、正直自信がなかった。

何故なら、あの日以来、キユウが全く姿を現さなかったのだ。

勇気は学校が終わると、いつものように父親の書齋に向かった。

「入るよ」

部屋の前でそう言うと、ゆっくりとドアを開け、部屋を見回すが、部屋の中にキユウの姿はなかった。

「やっぱり、今日もないよね……」

この一週間、確認するのが日課になっている。

キユウは、メデューサを倒した後、「これは始まりに過ぎない」と言っていた。それはつまり、また怪が現れる可能性があるという事だろう。

勇気はキユウがいるのを確認する作業のおかげで、

あれほど入るのが苦手だった父親の書齋に、平気で入れるようになっていた。

書齋には、父親が世界中から集めた曰く付きの不気味な骨董品の他に、

考古学の本や、羽心が好きでたまらない怪奇現象に関する本がたくさんあった。

勇気は今まで「羽心って変わってるよね」ぐらいにしか思わなかったが、

石化事件以来、そういう本も読むようになっていた。

「へー、メデューサって、ゴルゴンっていう名前の怪物で、

ステンノー、エウリュアーレというお姉さんがいる三姉妹なんだ。

『妖女ゴーゴン』ってタイトルで映画も作られてるのかあ。

ええっ？ 頭の蛇って毒蛇だったの？」

「勇氣は、ギリシャ神話の本を読みながら、改めてメデューサの姿を思い出してゾツとした。」

「あらっ、またここにいたのね」

しばらくすると、母親が部屋に入ってきた。

「お父さんの持ってた本を読んでたんだ」

「へえ、ギリシャ神話……。勇氣、そういうのに興味あったのね」

「えっ、ま、まあね」

あの事件の事は、母親には言っていない。

羽心達と感じように、事件そのものを覚えていないからだ。

母親は、勇氣を見ながら、にっこりと笑った。

「何?」

「何だか嬉しくて。だって、勇氣がお父さんの部屋に入るようになってくれたでしょ」

「それが嬉しいの?」

「そりゃあ、嬉しいわよ。お父さんがいなくなったの、勇氣が2歳ぐらいの時だったで

しょ。」

「勇氣は全然お父さんとの思い出がないから、それがずっと、悲しかったのよ」

母親はそう言いながら、部屋を見回した。

「ここにはお父さんの思い出がいっぱい詰まってるの。」

あの人がどれだけ好奇心旺盛でいい人だったかかっていう思い出がね」

勇氣はそれを聞き、母親と同じように部屋を眺めた。

今までは、部屋に近づくたびに、父親の事を思つて寂しい気持ちになっていた。しかし、今は違う。

この部屋にいと、父親が傍にいるような気がして、楽しいのだ。

「そう言えば、最近あれを言わなくなったわね？」

「あれ？」

「ほらっ、あの赤い髪の事よ」

それは、キユウの事だ。

石化事件の事は覚えていなくても、勇氣の見た夢の事は覚えているようだ。

「夢、もう見なくなつたの？」

「えっと、まあ、もう見なくなつたかな」

キユウが現れなくなつて以来、夢も見なくなつていた。

「そう、それはよかつた。ようやく、勇氣も夢と現実の区別がつくようになったのね。読んだ本はちゃんと元に戻しておくのよ」

母親はそう言うのと、部屋を出て行つた。

「夢と現実かあ……」

キユウとディアーナと一緒に体験したあの出来事は夢のようだった。

そもそも、霊体のキユウと、エルフのディアーナそのものが、現実的ではない。

やっぱり、夢だったのかも、と思いつつも、首を小さく横にふった。

「あれは、やっぱり現実だったんだよね……」

勇気は、ポケットを探ると、ある物を取り出した。

それは、漆黒のグローブだ。

夢などではない。

勇気はこのグローブをつけて、キユウと、ディアーナと共に、

古代ギリシャに行き、怪と戦ったのだ。

「グゴオオオオオ」

突然、大きな地鳴りがした。

「うわっ！」

勇気は、書斎を飛び出すと、リビングにいた母親のもとへ向かった。

「お母さん、大丈夫？」

「ええ、地震かしら？」

母親は慌ててスマホを確認する。

地震の時は速報が表示されるはずだが、速報は表示されていなかった。

その時、先ほどよりさらに大きな地鳴りが響いた。

「グゴオオオオオ、グララアアアア」

「み、耳が！」

空気からビリビリ伝わる振動に、思わず勇氣は耳を塞いだ。

「勇氣、大丈夫？」

母親も耳を押さえつつ、テレビをつけてみる。

だが、どのチャンネルでも、いつまで経っても、地震があつたという報道は流れなかつた。

その頃、路地裏の建物では、デイアーナがジャネットから依頼を受けていた。

「ネス湖の怪物ネツシーが、見捨里市に現れようとしています」

「ネツシーはこの世界ではただの都市伝説よね。でも……大地が揺れているのは事実でしょう？」

「ただの都市伝説ではありません。私を否定する事になるのでですよ」

ジャネットも伝承が形を取ったものだ。

それを否定するのは、ジャネット自身を否定するのと同じだ。

「ネツシーは確かに実在します。少なくとも、異変が起きている間は、ですが」

そう言うと、ジャネットはディアーナを指差す。

「ディアーナ、今すぐに調査をしなさい。拒否権はありませんよ」

「……じゃ、行つてきます」

ディアーナは準備をして、建物を出ていった。

2 — 巨大な地鳴り

「昨日のあれ、変だったよな！」

翌日、6年2組の教室では、昨日の地鳴りが話題になっていた。

「俺、地震だっと思ってたのにさ」

びつくりして外に避難したよ」

「私も。後……何だかまだ耳が変な感じ……」

「うちの妹もまだ小さいからさ、昨日はずっと泣いてた。結局何だったんだろう？」

「勇気は、クラスメイトのみんなが話しているのを、自分の席で聞いていた。」

（もしかして……また何か怪が……？）

どう考えても、ただの地震ではなさそうだ。

「勇気が心の中で分析していると、羽心が傍にやってきた。」

「珍しいわね。勇気が怖がってないなんて」

「羽心はそう言うのと、空いていた隣の席に座った。」

「羽心の席はそこじゃないだろ」

「いつでもどこでも、座りたい時に座りたい場所に座る。それが私の信条なのよ」

「どんな信条だよ」

呆れる勇気の顔を、羽心はジロジロと覗き込むように見つめた。

「僕の顔に何かついてるのか？」

「ううん、なんかちよつと変わったな、って思つて。」

よく分からないけれど、勇気、ちよつとだけたくましくなつた感じがするのよね」

「たくましくなつた？」

以前の勇気なら、謎の地鳴りがしたと聞いただけで怯えていたはずだ。

しかし、身体が石になるわけでも、頭に毒蛇が生えた怪物が出てきたわけでもない。

(そっか、メデューサとの戦いのおかげで、気持ちは強くなつたんだ……)

「羽心、もう、勇気つて名前なのに勇気がないなんて言わせないからね！」

勇気は鼻息荒く宣言する。

羽心は意味が分からず、きよんとしていた。

「羽心ちゃん、今いい？」

ショートヘアの女子、蒲谷亜衣と、長身の男子、志水拓馬が、勇気達の傍にやつてきた。

「羽心ちゃん、怪奇現象に詳しいわよね？」

「怪奇現象の事なら、何でも私に聞いてちょうだい！」

亜衣の言葉に、羽心の耳がピクンと反応した。

まるで、餌に食いついた魚のようだ。

すると、亜衣の後ろにいた拓馬が口を開いた。

「昨日の地鳴りの事で、ちよつと気になる事があるんだ」

「どうしたの？」

「あの地鳴り……」

「ここから、大きな地鳴りがしたのね」

ディアーナは、地鳴りがしたというミス池を調査していた。

町の外れにある公園内の森を抜けた場所にあり、魚がよく釣れるスポットとして有名である。

水面を見ると、上に十字の割れ目ができていた。

「なぜのせいれいよ」

ディアーナは風の精霊シルフを召喚し、十字の割れ目を調査した。

シルフはくるくると回転すると、十字の割れ目を見て騒ぎ出した。

「何、メデューサと同じ？ 大体分かったわ。とりあえず、書齋に行ってみる」

地鳴りに関する情報を一通り集めたディアーナは、勇気の家の書齋に向かった。

視点は小学校に戻る。

「ミス池……ミス池……」

なんか、似たような名前の有名な怪奇現象があつたような気がするんだけどなあ」

羽心は、人差し指で額をトントンと叩いて、記憶を探った。

これが、彼女の癖である。

(また、羽心が興味持っちゃった)

石化事件の時と同じで、全く懲りていない。

勇気はそう思いつつも、羽心が石化事件もメデューサの事も、

全て忘れてしまっている事を改めて思い出した。

(もー、これじゃあ、どうやって注意すればいいか分からないよ)

勇気は大きな溜息をついた。

「えっ?」

ふいに、勇気の頬に風が当たった。

気がつくのと、勇気は何故か森の中にいた。

目の間には大きな湖が広がっている。

「どろろしてっ」

さっきまで教室にいたはずだ。

勇気は、湖の傍に立っている看板に目が留まった。

看板には「Loch Ness」と書かれてある。

「英語？ ミス池……じゃないよな？」

ミス池もそこそこ大きいが、今いる場所はそれの比ではない。

まるで海のように大きな湖を、鬱蒼とした森が取り囲んでいる。

勇気は、驚きながら湖を見つめた。

「な、何？」

突然、大きな音が響き、大地が揺れた。

音は背後にある森の方からした。

勇気が振り返ると、木々が激しく揺れ、音を立てながら薙ぎ倒される。

その木々の後ろに、見た事もない巨大な影が現れた。

「グゴオオオオオ！」

「わあああ！」

巨大な影が咆哮し、勇気の方へ向かって突進してきた。

勇気は慌てて湖の方へ逃げたが、慌てすぎて足が絡まり、転んでしまった。

「うわっ、ああ！」

勇気は起き上がろうとする。

その時、目の前の地面が真っ暗になった。

荒い鼻息がする。

恐る恐る顔を上に向けると、あの巨大な影が、勇気の真上にいた。

「グゴオオオオオ！」

次の瞬間、巨大な影が、勇気に向かって覆いかぶさってきた。

「うわあああ!!!」

「どうしたの、勇気!？」

「えっ?」

突然、誰かが勇気の肩を大きく揺さぶった。

勇気がハツとすると、肩を揺さぶった手の先を見た。

そこには、羽心、亜衣、拓馬がいて、勇気の方を見ている。

「ええつと……」

勇気は、教室の自分の席に座っていた。

「ちよつと、いきなりどうしたのよ?」

「そ、それは」

「ボオーツとしてたわよ」

「ボオーツと……?」

教室の時計を見ると、先程から5分ぐらい過ぎていた。

(僕、また夢を見てたんだ……)

3 — 羽心とスコップ

ディアーナは、書齋でネツシーに関する本を読んでいた。

その間に、髪が淡く輝いていた。

1934年の4月。

ある医師が、イギリス・スコットランドのネス湖にやってきた。

早朝、友人と一緒に鳥の写真を撮るために湖畔を歩いていると、

突然、湖の水面に、長い首を伸ばした怪獣の顔が現れたのだという。

医師は慌ててそれを写真に収めた。

そこに写っていたのは、大昔に絶滅したはずの首長竜のようだった。

湖の名前から『ネツシー』と名づけられたその怪獣の写真は、

瞬く間に世界中に広がり、大きな話題になった。

「へえー、ネツシーかあ！ かっこいいわねえ」

ネツシーに関する本を、一心不乱に読むディアーナ。

勇気に気づかれないのは、彼女が異世界の住人だからだろうか。

しかし1993年、ある人物が、写真が偽物だったと証言した。

その人物の養父が、世間を騒がせるために、おもちゃの潜水艦に怪獣の首の模型を取り付け、

それを湖に浮かべて写真に撮ったというのだ。

医師がその写真を撮ったように見せかけたのは、社会的に地位のある彼が言えば、誰も嘘だとは思わないと考えたからだという。

「ネツシーはいなかったのかしら？　でも、確かに地鳴りが起こった……う……う……ん」
デイアーナは唸り声を上げた後、本を本棚に戻すのだった。

学校が終わると、勇氣は急いで家へと戻った。

(×印が出たって事は、キユウがいるはず！)

そう思いながら、書齋に向かうと、家のチャイムが鳴った。

チャイムはリズムミカルに鳴り続ける。

母親は仕事で、今、家には勇氣だけだ。

「はーい、ちよつと待って！」

勇氣は開きかけた書齋のドアをそのままに、仕方なく玄関へ向かった。

「もう、一度目のチャイムで出てよね！」

玄関のドアの前に立っていたのは、羽心だ。

その手には、何故か巨大なスコップを持っている。

「何それ？」

「あー、勇気のお家のものを、ちょっと借りようと思って」

「僕の家の方？」

そう言えば、自転車置き場の脇にスコップを置いていた。

「もしかして勝手に取ったの？」

「失礼ね。今、貸してって言おうと思ったの。だからチャイム鳴らしたでしょ」

「そ、そっか、ごめん」

普通は借りる前に言うものだが、反論しても、自己中な羽心には勝てそうにない。

「ところで、スコップなんて何に使うんだよ？」

「決まってるでしょ。今から、ミツシーを捕まえに行くのよ！」

「ミツシー？」

羽心はにっこりと笑った。

「拓馬君からミス池の話聞いて、

私、なんか似たような名前の怪奇現象があったような気がするって言ったでしょ。

それが何だったのか、やっと思い出したの」

「何だったの？」

「それはねえ、怪獣よ！」

「ええええ？」

「あらっ、知らないの？」

イギリスのネス湖っていうところで、ネツシーっていう怪獣が目撃された事があるの」

「ああ、それなら知ってる！ だけど、ネツシーは……」

書齋にあつた怪奇現象の本に載っていたため、勇氣は本の内容を思い出した。

「……という内容なんだ」

「確かにそうかもね。」

「だけど、世界には、ネツシーと同じような生き物の目撃情報がたくさんあるのよ。」

「この国でも、イツシーとかクツシーっていつて、湖で怪獣が目撃された事があるんだから」

「そうだったんだ」

「勇氣は、湖の怪獣についてそこまで詳しく調べていなかった。」

「それで、ミツシーっていうのは？」

「あー、私がさつきつけたの。ミス池にいる怪獣だから、ミツシー！」

「ミス池は湖じゃないと思うけど……」

すると、羽心は真剣な表情になった。

「昨日のあの地鳴り、あれはきつと、ミツシーの鳴き声だと思うの」

「……ネツシーの鳴き声……」

「ネツシーじゃなくて、ミツシーね。ほら、拓馬君が池の方から聞こえたって言ってたでしよ。」

きつと、池で鳴いてたのよ！ で、勇気もどう？ 一緒にミツシー探ししない？」

楽しそうにスコップを上げ下げする羽心を見て、勇気はハツとして声を荒らげた。

「駄目だ、危ない！ 大体そんなスコップなんかじゃ、どうにもならないだろ！」

「これはファツションの一部よ。冒険の雰囲気作り」

「あのなあ、また怪物に襲われたりでもしたら……」

メデューサに襲われていた羽心の事が脳裏に浮かんだ。

今回も怪が絡んだ事件だとしたら、羽心がまた危険な目に遭ってしまふ。

勇気が必死で説得する理由を探していると、羽心が首を横に振った。

「やっぱり、来ないわよね。勇気は勇気ないもんね」

「そ、そうじゃない！ とにかく、危険な事は……」

勇気は石化事件の事を話そうと思ったが、それよりも早く、羽心が口を開いた。

「もういい。一応誘ってみただけだから。亜衣ちゃんと拓馬君がついてきてくれるし」

羽心はそう言うと、去って行ってしまった。

「う、羽心……い！」

「グゴオオオオオ！」

追いかけてようとした、その時だった。

突然、大きな地鳴りがした。

「これって！」

昨日と同じ地鳴りだ。

「このままじゃ、彼女は大変な事になるかもしれないねえ」

「口先だけで何もできないのに」

聞き覚えのある声が、二つした。

「まさか！」

勇気は下を走ると、書斎の前にやってきた。

ドアが開いたままになっていた書斎に、一人の男の子と、長身の女性が立っている。

「キユウ、ディアーナ！」

「やあ」

キユウは微笑み、ディアーナは既に準備をしていた。

4 — ネス湖へ

「やっぱり、夢じゃなかったんだ！」

勇気は短い階段を下りると、書齋の中に駆け込んだ。

キユウは存在し、ディアーナもいる。

彼の身体はほんの少しだけ浮いていた。

「キユウ、ディアーナ、今までどこにいたんだよ！」

「僕も色々忙しいからね」

「だけど、この町にまた現れたのよ」

「やっぱり！ さっきの地鳴りの事だよね？」

「ああ、あの羽心という子は勘が鋭いようだね。あれは、ネツシーの鳴き声だ」

「ネツシー？ それって偽物だったんでしょ？」

「それは、調べたばかりよ」

「勇気も、夢の中で見たはずだよ」

「えっ？」

勇気は今朝、学校で見た夢を思い出した。

大きな湖の傍の森で、木々を倒して巨大な影が現れた。

巨大な影は、グゴオオオオオと咆哮しながら、勇気に襲いかかってきた。

「もしかして、あれが……ネツシー?」

勇気の言葉に、キユウは小さく頷いた。

「勇気の見る夢には、特別な力があるからね」

「ど、どういう事?」

「それはまあ、いつかちゃんと話すよ。それより、彼女達、大丈夫かな?」

「「あつ」」

それを聞き、勇気とディアーナは声を上げた。

「羽心達がミス池に行っちゃったよ? ネツシーがいるんだよね?」

「今はまだ、ネツシーはこの町には現れていない。」

「だけど、放っておいたら、今夜中にネツシーがこの町へ抜け出してくる可能性が高い。」

罅は、かなり大きくなっているからね」

「それじゃあ、羽心達が!」

「大変な事になるかもって言っただろう。まあ、襲われるだけならまだマシかもね。」

「ネツシーは肉食だから、食べられるかもしれないね」

「そんなの絶対駄目だ!」

「当然よ！」

勇氣とディアーナは羽心達を止めるために、部屋を飛び出そうとした。

「彼女達を止めるだけでは、何も解決しないよ——」

「えっ?」

勇氣とディアーナは思わず立ち止まり、キユウの方を見る。

キユウは真剣な表情をしていた。

「ネツシーがこの町に現れたら、大勢の人達が襲われる事になる。

だから今、君達がやるべき事は、彼女達を止める事じゃない」

キユウはそう言うと、グローブを嵌めた左手で柵を指差した。

そこには、懐中電灯が置かれていた。

「まさか、また……?」

「そう、そのまさかだよ。」

ほらっつ、勇氣、懐中電灯を持って、右手にグローブを嵌めるんだ」

「お願いね」

「さあ、怪を倒しに行くよ。……怪狩りの時間だ!」

キユウは、グローブを嵌めた左手を傍の壁の前にかざし、呪文を発した。

「カオス・ゲート
時空貫通」

螺旋状に風が吹き、壁に光が渦巻く。

その渦が大きくなっていき、激しく輝いた。

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

「行くぞ。懐中電灯と靴を忘れないようにね」

「ネツシーと戦うわよ！ デイアーナ号、出陣！」

キユウとデイアーナが渦の中に飛び込む。

「あ、ちよつと待つてよ！」

相変わらず、キユウは何でも勝手に決めてしまおうし、デイアーナは突っ走る。

「もー、何なんだよ……」

勇氣は文句を言いながらも、グローブを嵌めると、懐中電灯と靴を手を取った。

勇氣が恐る恐る穴に近づくと、吸い込まれるように、穴の中に入った。

「わああああ！」

勇氣は、光のトンネルを手足をばたつかせながら飛んでいた。

デイアーナは風を纏いながら飛んでいる。

「うわああ！ うわあ！ わああああ！！」

やがて、光のトンネルの奥に森が見えてきた。

勇氣は勢いよく地面に倒れ、デイアーナはふわりと着地する。

地面は緩やかな斜面になっていて、勇氣はそのまま傍に立っていた木の根元まで転がる。

その根元に頭を思いつきり打ち付けた。

「いたたた」

前回もいきなり地面に落ちて、痛い思いをした。

「もうちよつとマシなところに出口作つてよー」

勇氣は、目の前で涼しそうな顔で宙に浮いているキユウに文句を言った。

「それは贅沢な注文だね」

「贅沢って、もう少し安全性を……」

「待って」

勇氣はふと、周りが木々に囲まれた森である事に気づいた。

夜、空には月が見えている。

「()は……?」

夢で見たあの湖に似ている。

「()は、1934年のネス湖だよ」

「えええ?」

勇氣は立ち上がると、ディアーナと共に周りを見た。

森の向こうに、月明かりに照らされた湖が見える。

「ネス湖って事は、イギリスって事？」

「へえ、よく知ってるじゃないか。タダで海外旅行に来られてよかったね」

「全然よくないよ！」

「というより、1934年に撮られた写真は偽物だったんでしよう？」

「ああ、その可能性が高い。だけど、当時多くの人がネツシーを目撃したと言っているんだ。」

そして、今ここには、あの罅がある」

「罅が？　じゃあ近くにネツシー……」

「ネツシーだと？」

突然、真つ暗な森の奥から声がした。

「だ、誰？」

勇気は慌てて持っていた懐中電灯をつけると、森の奥を照らした。

ディアーナには暗視能力があるので、問題ない。

「うわっ、何だ??」

「眩しい！　やめろ!!」

そこに立っていたのは、三人の大人の男達だ。

「おい、やめろって言うのが分からねえのか！」

大柄な男が勇気とディアーナを睨むと、持っていた猟銃を二人に向かって構えた。ディアーナは双剣を抜いて、反撃しようとした。

5 — 三人のハンター

「ボス！ これは、凄くいいライトですよ」

「高級品に違いねえですぜ」

眼鏡をかけた痩せた男と、背の低い男が、

勇気の懐中電灯を手にしながら、大柄な男の方を見た。

小柄な男には、ディアーナの双剣の跡がついている。

「どうやら、大柄な男がリーダーのようだ。」

「つたく、子供の癖に、こんないもん持つてるとは世の中どうなってるんだ」

大柄な男はチラリと勇気の方を見た。

勇気は、湖畔で男達に捕らえられていた。

縄で縛られたりしているわけではないが、

彼らは猟銃を持っているため、逃げ出す事などできない。

「ね、ねえ、キユウ、彼らは何者なの……？」

勇気は、傍に浮かんでいるキユウに、小声で話しかけた。

「彼らは、どうやらハンターのようだね。ネツシーを捕まえて、大金を手に入れる気だ」

ね」

「いかにも、欲にまみれているわね」

「ディアーナは不快な表情になっている。

「ネツシーを捕まえれば、美味いもんいっぱい食べられますよねえ」

「綺麗な服も買えるし、家だつて建てられるぜえ。なあ、ボス」

「ああ、有名になつて、世界中を回る事だつてできる。貧乏とはおさらばだ！」

男達は大笑いし、ディアーナはさらに眉を顰める。

「おい、このライトは貰つておくれ」

「そんな！」

「これだけ明るく照らす事ができれば、ネツシーも見つけやすいつてもんだ」

それを聞き、勇気は焦つた表情でキユウとディアーナを見る。

「懐中電灯を奪われちゃったけど、大丈夫なの？」

「うーん、懐中電灯がないと、ネツシーを倒すのは難しいだろうねえ」

「えええ、そんなに重要なの!？」

「おい、うるせえぞつ！」

大柄な男が怒鳴つた。

「さつきから何一人で喋つてるんだ？」

「えっ、あつ、ええつと」

「……やっぱり、彼らにも見えないのね」

男達にはキユウは見えない。

勇気は、男の手にある自分の懐中電灯を見つめた。

「ん、何だ？」

「えつと、できれば、その懐中電灯……ライトを返してほしくて」

「ああん、何だと!？」

「いえ、何でもありません！ ただの独り言です！」

勇気は慌てて笑顔を作つて誤魔化す。

「まったく、金持ちの子供はこれだから嫌いだぜ」

大柄な男は鼻を鳴らすと、部下達とまた話を始めた。

「もー、滅茶苦茶怖かったよ」

勇気は、さらに小声になって、隣にいるキユウとディアーナにそう報告する。

「あの人達は欲にまみれているわ」

「キユウ、あの人達から懐中電灯を奪い返してよ」

「僕が？ 言つただろう、僕は霊体だから物に触れられないって」

「ちよ、やめてつてば」

キユウは、手で勇気の顔を掴もうとしながら、何度もすり抜けさせた。

勇気はキユウから一步離れると、大きな溜息を漏らした。

「ま、結論として……」

「このままじゃ、ネツシーなんか倒せないよ」

「ああ、これは笑えないね」

「笑えないどころの話じゃないよ」

その時、勇気はハツとした。

「羽心はどうなるの？」

今頃、羽心は拓馬と亜衣と共に、ミス池に行っているはずだ。

「それも言っただろう。放っておいたら、今夜中にネツシーは君の町に現れるって」

「じゃあ、羽心は……」

羽心はスコップを持っているが、

当然、そんなものではネツシーとまともに戦う事などできない。

「彼女は、本当は君にも来てほしかったんだらうね」

「えっ？ 誘われたけど、それはスコップを借りにきたついででしょ？」

「逆だよ。誘いたいと思ったから、わざわざ借りに来たんだよ」

「どういう事？」

「口先だけだしね……」

勇気はよく分らない。

しかし、羽心が少しでも頼りにしてくれていた事だけは分かった。

「とにかく、懐中電灯を取り返さないと……」

ここでネツシーを倒せば、羽心達は襲われずに済むはずだ。

「懐中電灯は絶対に必要なのよね？」

「ああ。無ければ、ネツシーを退治する事は難しいだろうねえ」

勇気とディアーナは、大柄な男が持っている懐中電灯を見つめた。

どうにかして取り返さないと……。

「よし、あたしに任せて」

「えっ、どうしたの？」

ディアーナは呪文を唱え、姿を消す。

足音を立てないように忍び寄り、懐中電灯にそっと手を伸ばし、懐中電灯を取った。

あっさりと事が解決したため、勇気はぼかーんとしていた。

そして、そのまま去ろうとした時。

「!？」

突然、湖の方から大きな音が響いた。

水飛沫が上がり、その中に、巨大な影が見えた。

巨大な影が大きな鳴き声を響かせる。

「うわああ！」

「来たわね！」

それは、怪獣ネツシーだった。

6 — ネットシーとの戦い

「「出たー!!」」

勇気と三人の男達は、湖の方を見ながら一斉に叫んだ。

「グゴオオオオオ！」

ネットシーは咆哮しながら、湖畔に上がってきた。

体長20mは超えていて、目の前で見ると、まるでビルのようなだ。

「ボ、ボス、チャンスですぜ！」

「お、お、おお、分かってる！」

背の低い男が構一杯強がり、声をかける。

大柄な男も強がるが、ネットシーのあまりの巨大さに身体が震えていた。

「お、おい、お前がやれ！」

大柄な男は、背の低い男にそう言う。

「俺ですか？」

「銃には詳しいって言ってただろ？」

「そ、それは……」

背の低い男は急に泣きそうな顔になった。

「実は俺、銃の種類に詳しいだけで、一度も撃った事ないです！」

「なんだと？ だったらお前がやれ！」

大柄な男は、後ろにいた眼鏡をかけた痩せた男の方を見た。

だが、痩せた男は地面を見ながらオロオロしていた。

「さつき、ポストとぶつかつた時、眼鏡がどこかに行つたみたいで……」

「眼鏡、眼鏡……」

痩せた男は、必死に地面を探す。

「くうう、このポンコツどもが！ こうなつたら俺がやってやる！」

これで貧乏とはおさらばだっ!!」

大柄な男は猟銃を構えると、銃口をネットシーに向けた。

そして、引き金に掛けた指に力を入れた瞬間、大柄な男が消えた。

いや、消えたのではない。

ネットシーが大きく尻尾を振つてぶつけ、大柄な男を吹き飛ばしたのだ。

湖の方から男が落ちる音がする。

「ポスト!!」

痩せた男達は、湖まで吹き飛ばされた大柄な男の方を見た。

「グゴオオオオオ！」

「えっ、あ、ひいいい!!」

ネットシーは、二人の男達にも尻尾を振った。

二人の男達も、あつという間に湖まで吹き飛ばされた。

「そんな！」

「所詮は口だけ……ね」

勇気はあまりの迫力にたじろぎ、ディアーナは笑っていた。

「まあ、たとえ銃を撃てたとしても、怪を倒す事なんかできなかつたと思うけどね」
キユウが勇気の横で浮かびながら、冷静に分析した。

「じゃ、どうすればいいんだよ？」

「そのために懐中電灯と」

「あたしがいる」

「ディアーナはネットシーに挑め。」

そして勇気、弱ったネットシーの目に、懐中電灯の光を当てるんだ！」

「分かったわ！」

ディアーナは呪文を唱えて竜巻を起こし、ネットシーを怯ませる。

その隙に勇気がネットシーの顔に懐中電灯の光を当てると、ネットシーが目を細めた。

「ギユウウウウウ！」

「そっか、光を当てれば倒せるんだね！」

「倒せるわけじゃない」

「勇気はさらに光を当ててるが、キユウが冷静に言う。」

「ネツシーは夜行性だから光が苦手なはずなんだ。だから、光を当てられたら凄く怒るんだよ」

「怒る？」

「それを先に言いなさいよ……キユウ……」

「ディアーナが呆れると、ネツシーが雄たけびを上げた。」

「グゴオオオオオオ！」

大地を震わすような声が、勇気とディアーナの耳を襲った。

「思わず耳を塞いだ勇気とディアーナに、怒り狂ったネツシーがにじり寄ってくる。」

「ここ、こんなの聞いてないよ！」

「勇気、ディアーナ、走るんだ！」

「何言ってるんだよ！」

「いいから。作戦通りだから。あそこまで行くんだ！」

キユウは、湖畔の向こうを指差した。

そこには、崖がある。

「走れ、勇気、ダイアーナ！」

「分かったわ！」

「で、でも」

「でも、じゃない！ 今すぐ行くんだ！」

「は、はいいいっ！」

ダイアーナと勇気は崖に向かって走り出した。

「グゴオオオオ！」

月明かりの下、木々が激しく揺れて、次々と薙ぎ倒される。

ネットシーは狂ったように勇気とダイアーナに迫ってくる。

「駄目だ、追いつかれちゃうよ！」

「もつと全力で走りなさい！」

「これが全力だつてば！」

土の地面は走りにくく、勇気は何度も躓きそうになる。

ダイアーナは浮遊しているが、転んだら一卷の終わりだ。

「も、もう駄目だよ」

「諦めないで！」

崖へと続く坂を走りながら、勇気は泣きそうになる。

「ディアーナは、ただ走り続ける。」

「頑張れ、あと少しだ」

キユウは空中を飛びながら応援する。

「どうして、僕ばかりこんな目に……」

メデューサの時といい、あまりにも危険な目に遭いすぎる。

「それは、決まってるだろう。町を救えるのは、君しかいないんだ。あれを見ろ」

勇気とディアーナは必死に走りながら、キユウの見ている方向に顔を向ける。

すると、湖の上に、大きな×印状の罅があった。

「どんだん罅が広がってる！ 急げ！」

一方、見捨里市では、羽心がミス池を一人眺めていた。

先ほどまで周りは垂衣や拓馬を含め、たくさんの野次馬で溢れていたが、

少し前から昨日とは比べ物にならないほど大きな地鳴りが続き、

ほとんどの人が逃げ帰ってしまった。

にも関わらず、羽心はあるものに目を奪われ、その場から動けない。

「あ、あれは、何なの……？」

見つめる池の上には、黒い煙がゆらゆらと揺らめく×印状の罅が浮かんでいた。

「何だか……見た事があるような……」

羽心の記憶の底で何かが動いたが、結局その正体は分からなかった。

「このままだと、ネッシーはすぐに罅に入れるようになってしまうよ」

「そんな……」

キユウは勇氣とディアーナにそう言う。

ディアーナが何とか食い止めているが、このままでは、羽心達が……。

「羽心！」

勇氣とディアーナは全身に力を入れた。

「そんなの絶対嫌だっ!!」

「あたしは負けないわ……!」

勇氣とディアーナは、全力で崖の上を目指して走った。

やがて、崖の上に到着した。

眼下には、剥き出しになった無数の岩肌が広がっている。

「グゴオオオオオオオ！」

ネッシーが地哮しながら、坂を上ってくる。

「キユウ、どうすればいいんだよ!」

「あたしの魔力もあと僅かよ……!」

勇気が叫び、ディアーナも疲れを見せると、キユウは月を指差した。

「月に向かつて、懐中電灯を投げるんだ！」

「どういう事？」

「いいから、やるんだ！ このままじゃネツシーに食われるぞ！」

「そ、そんなの嫌だ！ もー、何なんだよー！」

勇気は無我夢中で、崖の上から懐中電灯を放り投げた。

懐中電灯が眩しく光りながら、夜空を舞う。

「伏せろ！」

キユウの言葉より早く、勇気が地面にひれ伏した。

ディアーナは呪文を唱えて風の盾を作り出し、ネツシーの攻撃を防ぐ。

「ガアアアアアアアア！」

ネツシーは懐中電灯の光を追って、崖の上からジャンプした。

そしてそのまま、崖の下へ落ちていった。

ネツシーの身体が岩に叩きつけられると、ネツシーは黒い煙になって、辺りに飛び

散った。

「た、倒したの……？」

「何とかね」

「罅は……」

ディアーナが湖の上に浮かんでいた罅を確認すると、罅もネツシーと同じように消えてしまっていた。

「怪を倒したから、罅も消滅したんだ」

「そっか、よかつた〜」

「お疲れ様」

勇気はその場にへたり込み、ディアーナは彼を労う。

すると、湖の方から声がした。

「お、おい、どうして俺達こんなところにいるんだ？」

「知りませんよ！ ボスの家にいたはずですよ??」

「ねえ、俺の眼鏡知りませんか？ 何も見えないです！」

「怪が消えたから、彼らの記憶からも怪の事は消えたみたいだね」

男達は暴れながら互いにしがみつき、溺れそうになっている。

「助けなきや！」

「彼らをかいは？ 懐中電灯を奪った奴らだぞ」

「それでも助けなきや！ 今行くよ！」

勇気は坂を駆け下りていった。

「まったく、人がいいんだから」

キユウは呆れ顔で首を振る。

しかしふと、一点を見つめ、険しい表情になった。

そこは、×印状の罅のあつた場所だ。

「絶対に、食い止めないと……」

キユウは、坂を駆け下りる勇気の方を、じつと見つめた。

そして、誰に言うでもなく呟いた。

「勇気なら、あいつを止められるはずだ」

「……キユウ？」

キユウの声を聞いたのは、ディアーナだけだった。

episodell — Revived Legend

凍る夏

1 — プールでの怪異

初夏の朝、見捨里市にある市民プールでは、開業日が間近になっていた。

「今日も暑くなりそうだな」

職員の男性が、雲一つない青空を眺めながらプールの事務所にやってきた。

先週、場内を綺麗に清掃し、プールに水も入れたため、開業日を迎えるだけだ。

今年は暑くなるらしい。

男性は、今年も大勢客が来るだろうと思いつたばかりの缶コーヒーを一口飲んだ。

「大変です！ プールの水が！」

その時、事務所に女性職員が駆け込んできた。

血相を変えた女性職員の表情に、男性職員は一瞬驚く。

「プールの水がどうした？ ゴミでも落ちてたのか？」

女性職員は首を大きく横に振った。

「そうじゃないんです！ 真っ白で、カチカチなんです！」

「はあ？」

「見れば分かります！」

女性職員は、男性職員を強引にプールサイドまで連れて行った。

プールが白い何かで満ちていて、いつもは水面越しに見えるプールの底も全く見えな
い。

「これは……」

男性職員はプールに近づき、屈んで表面を触った。

指先から、痛いほどの冷気が伝わってくる。

「馬鹿な。こんな……あり得ない」

昨日の夜まで、プールには何の異常もなかった。

それなのに、目の前には信じられない光景が広がっていた。

「これじゃ、スケートリンクじゃないか……」

午前11時30分。

建物の中で、ダイアナはジャネットから依頼を聞いていた。

「今回、プールの水が凍結する怪奇現象が起きました。犯人は……」

「ジャックフロスト？ フラウ？ イエティ？」

「雪女です」

「へえ、雪女か。綺麗だろうね」

雪女、それはアルカディアにおいて非常に美しい女性の姿をした氷の精霊である。ディアーナが言っていた、ジャックフロストやフラウと同類だ。

もし、雪女との約束を反故にする事があれば、冷気で凍結させるといふ。

「ま、上のエルフは、暑さにも寒さにも強いんだけどね」

仮に雪女に凍らされても平気でしょ、とディアーナは笑った。

対し、ジャネットは真剣な表情をしていた。

「ふざけてはいけませんよ、ディアーナ。愛情と憎悪は紙一重なのです。

……行つてきなさい。雪女を調査するのですよ」

「はい」

ディアーナは建物を出て、書齋に向かうのだった。

昼過ぎ、勇氣は羽心に強引に誘われて、ガードレール沿いに坂道を歩いていた。

「おい、どこ行くんだよ？ せっかく、もうすぐ完成するところだったのに」

日曜日の朝、勇氣は300ピースのジグソーパズルに挑戦していた。

3時間ほどかかって、残り10ピースで可愛い猫の絵が完成するところだった。

「ジグソーパズルなんて、いつでもできるでしょ」

「300ピースは一気にやるのが一番楽しいんだよ」

「そんなものより、もつと楽しいところに連れて行ってあげるから」

「楽しいところ？ またセールじゃないよね？」

先日、商店街の洋服屋で、タイトのセールがあつた。

一人2枚までしか買えないので、羽心は勇気を連れて行つたのだ。

羽心は相変わらず自己中心的である。

勇気はその性格に呆れていた。

「おかげで可愛いタイトが4枚買えたから、感謝してるわ。でも、今日はもつと楽しいところ」

「もつと楽しいところって、さらに安売りのセールとかだろ」

勇気はうんざりしながら、坂道を連れられて歩いた。

やがて、小高い丘の上に出ると、羽心が眼下を指差した。

「あそこがもつと楽しいところよ」

「あそこって……市民プールの事？」

ちょうど今いる場所からは、市民プール全体が見下ろせた。

しかし、何だか様子がおかしい。

周囲に何故か人だかりができています。

「皆さん、近づかないでください。離れて！ ほらっ、危ないですから！」

建物の入り口に警察官が立っており、人々が中に入らないように、ドアを塞いでいた。それよりも、何よりも明らかにおかしい点がある。

プールの水面に、何人も人が立っていたのだ。

「ど、どういう事？　なんで人が水面に……」

「プールの水がね、全部凍っちゃったらしいの」

「え！」

勇気は目をパチクリさせる。

確かに羽心の言う通り、水面がカチカチに凍っているように見えた。

「きつと、『雪女』の仕業よ」

「はあ？　雪女……？」

父親の書斎にある怪奇現象の本を読まなくても、その名前は勇気も知っている。

冷たい息を吹いて相手を凍らせる、恐ろしい女だ。

「この暑いのに、自然現象でプールが凍るなんてあり得ないもの」

「それはそうだけど……この現代に雪女だなんて……」

羽心は、人差し指で額をトントンと叩きながら、話を続けた。

「雪にまつわる怪奇現象って何があったか考えてみたの。

雪男とか雪入道とかいるけど、雪女の冷たい息なら、プールの水を凍らせる事ができるでしょ」

その言葉に、勇気がゴクリと唾を飲み込んだ時、何かが割れるような音がした。

「危ない、みんなプールサイドへ上がれ！」

慌ただしい声と共に、人がプールから退くと、

プールの水面に見覚えのある×印状の亀裂が走っていた。

「危な……でもあれだけ人が乗ってたら、割れてもおかしくないわよね」

そう呟く羽心の横で、勇気は拳を握り締めた。

「ただ、割れただけじゃない……怪の仕業だ……」

「カイ？」

勇気の言葉に、羽心が首を傾げた。

「ああ、石化事件とか怪音事件と同じだよ」

「何それ？」

「何って……あつ」

怪が消えれば、その怪が起こした全ての事が人々の記憶から消える。

覚えているのは、勇気と一部の人物だけなのだ。

「また、ボオーツとして変な夢見たんじゃないでしょうね？」

「いや、夢とかじゃないんだけど、ええっと」

「まあいいわ。それより、もっと近くからプールを見てみない？」

「えっ？」

「ここから見てるだけじゃ、ちゃんと調べられないでしょ。」

一ヶ所だけフェンスが破れてる場所があるの。そこから中に入れば、目の前でじつくりと……」

「それは駄目だ！」

突然、勇気が声を荒らげた。

「な、何よ、急に？」

「あつ、えつと、そんなの危ないだろ、ああもう、とにかく勝手にプールに入るなんて駄目だよ。」

大体、警察官がいっぱいいるんだよ。見つかったら怒られるぞ」

「市民が市民プールに入って何が悪いわけ？」

「だ、駄目だ！ 今すぐ家に帰ろう。これから大変な事が起きるかもしれないんだ！」

「大変な事？ 何が起きるっていうのよ？」

「いや、それは、えつと、分からないけど、えつと……」

羽心は、自分が怖い目に遭ってきた事を忘れている。

怪は、勇気にしか止める事ができない。

それを上手く説明できない勇気は身悶えた。

「つべこべ言わずに今すぐ帰るんだっ！ 羽心、たまには僕の言う事を聞けっ！」

「はい。分かりました」

勇気の凄まじい剣幕に目を丸くした羽心は、つい素直に答えてしまった。

2 — 江戸の町へ

勇気は羽心を家に帰すと、自宅に駆け込んだ。

(早くしないと、また羽心がプールに行っちゃう)

勇気は、一直線に父親の書齋に向かうと、ドアを開けた。

「やあ、待ってたよ」

「お帰りなさい！」

書齋の真ん中に、キユウとディアーナが立っていた。

「やっぱりいた！」

キユウは普段は部屋の中にはいない。

しかし、怪の現象が起きると、いつの間にか現れる。

ディアーナも彼を追いかけていた。

「キユウがいるって事は、あれは雪女の作業なんだね？」

「へえ、よく分かったね。正確に言うくと、×印状の罅から、雪女の力が漏れ出しているんだ。」

「このままじゃ、もっと酷くなって町も人も全て凍ってしまうだろうねえ」

「そんな、絶対嫌だ！」

「石になるよりはマシだけど」

「このまま放っておくつもりはないよ」

キユウは、柵の方を見た。

「グローブを嵌めて、あそこにあるマッチ箱を取るんだ」

「マッチ？」

「雪女は火に弱い。マッチがあれば、すぐに火を起こせるだろ。それだよ」

キユウが勇気の背後の小さな箱を指差す。

「ライターとかの方が便利じゃない？ マッチって、使った事ないんだけど……」

「あたしも魔法を使えるけど」

「まったく、今時の子供とエルフは……。つべこべ言わずに、早く」

「……自分だって子供じゃないか」

勇気はぶつぶつ言いながらグローブを嵌め、柵に置かれていたマッチ箱を手を取った。

「ディアーナもレイピアとダガーで武装し、冒険者セットを手取る。」

「準備はいいかい？」

「うん。正直、ちよっと怖いけど」

「なんだよ、まだ慣れないのか？」

「慣れるわけないだろ」

「魔物だし」

今回は雪女であり、退治に失敗すれば氷にされてしまう。

「怖くても行くよ。凍った羽心なんか見たくないから」

「流石、勇気だ」

「酷くなりたくないわね」

「さあ、怪を倒しに行くよ。——怪狩りの時間だ！」

キユウは、グローブを嵌めた左手を壁の前にかざし、呪文を発した。

「カオス・ゲート
時空貫通」

螺旋状に風が吹き、壁に光が渦巻く。

その渦が大きくなっていき、激しく輝いた。

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

キユウとディアーナが渦の中に飛び込み、勇気も思い切って飛び込む。

「んんんん！」

頭が回る。

勇気は、必死にバランスを保ちながら、光のトンネルの中を飛んだ。

目が回るが、それでも、勇氣は耐え続ける。

やがて、光のトンネルの奥に、野原が見えてきた。

「わわつととー！」

「とおー！」

勇氣とディアーナは勢いよく地面に落ちた。

勇氣は思わず転びそうになるが、足に力を入れて踏ん張り、何とか転ばずに済んだ。

「着地が上手くなつたじゃないか。成長したね」

「当たり前よ」

「三回目だからね！　ところでキュウ、このマッチはどうやって使うん——のわあっ！」

勇氣は自信に満ちた表情で言うから歩き出した瞬間、石に引っかかって転んだ。

転んだ勢いで勇氣の手を離れたマッチ箱が、弧を描いて川に落ちる。

「……勇氣、さつき褒めたのは撤回するよ」

水を吸ったマッチ箱は川面から水中に沈んでいった。

勇氣はガツクリと肩を落とす。

「キュウ、じゃ、書齋に戻ろうよ」

「それは無理だよ」

「なんで？」

「説明してなかったっけ？ 怪を倒すまで元の時代には戻れないんだよ。」

僕の『時のトンネル』は、この時代の怪を倒すまで通れないんだ」

「はあ？ 不便じゃない」

「まあ、マツチが無くてもこの時代には火打ち石もあるし、誰かから火種を借りればいい
」

「ヒウチイシ？」

「ああ、冒険者セットにあるアレ、ね」

勇氣は聞き慣れない言葉にきよとんとした。

ディアーナは冒険者セットを取り出し、火打ち石を見せた。

「これが火打ち石よ。もつとも、おがくずとか、金属片とかも必要なんだけどね」
「そ、そうなのか……」

火打ち石と金属片を打ち付ける事で発生した火花をおがくずに飛ばし、
息を吹きかけて火種にする、とディアーナは勇氣に説明した。

勇氣は「へーっ」と言葉を漏らした。

「ヤッ」

ディアーナは周りを見た。

野原の向こうに、明かりが見える。

しかし、そこに建っている建物は、瓦屋根の木造の低い家ばかりだ。一組の男女が、傍の砂利道を歩いているのが見えた。

女性は着物を着ていて、男性も着物で頭に丁髷を結っていた。

「もしかして、ここって……」

「ああ、江戸時代の江戸の町だよ」

「えええー」

「倭国に似てるわね、というか倭国か」

勇氣は呆然となったが、ディアーナはふん、と鼻で笑う。

「今度は国内だから、気が楽だろ？」

「そういう事じゃなくて！」

文句を言う勇氣を放って、キユウは宙に浮くと町を眺めた。

「今、雪女はこの町のどこかにいる」

「そ、そうなの?？」

てつきり、山奥に隠れ住んでいると思った。

「僕も詳しい事は分からない。分かっているのは、雪女が『お雪』と名乗ってる事だけだ」

「たつたそれだけ?」

江戸の町はかなり広そうなので、見つけられるか自信がない。

「まあ、見つけられるかどうかは君達の頑張り次第だねえ。ファイト！」

「あのねえ、キユウも一緒に探すんだろ」

「僕が、どうやって聞き込みをするんだよ？ 僕は君以外の人間には見えないんだよ」

「まったく、もう……」

勇気は大きく溜息をついて、ディアーナと共に町へ向かって歩き出した。

3 — 雪女を探して

「あの一、お雪って人を知りませんか？」

江戸の大通りで、勇氣は道行く人々に尋ねて歩いた。

しかし、江戸の人達はこちらをジロジロと見るばかりでまともに答えてくれない。

「坊や、その妙な着物はなんだい？」

「お嬢ちゃんも南蛮の子かい？ それにしては、耳が長いな」

「いいねえ、その着物。どこで売ってるんだい？ 流行りそうだねえ」

（時代と文化の壁が立ち塞がるわね……）

どうやら、かなり目立っている。

勇氣とディアーナは周りからジロジロ見られながらも、雪女の事を探し続けた。

しかし、いくら聞いても、全く情報は得られなかった。

「やっぱり、名前だけじゃそう簡単には見つからないよ」

「まあ、江戸の町には100万人ぐらい住んでるからね」

「100万人!! そんなの見つかるわけないよー」

見捨里市など比べ物にならないほどの大都市だ。

「はあ、はあ……」

勇気とディアーナは、大通りから伸びる路地の入り口に座り込んだ。歩き回り、人に話しかけるのにすっかり疲れてしまったからだ。

「おや、どうしたんだね？ 迷子にでもなったのかい？」

白髪交じりの男性が路地から勇気とディアーナの傍へやってきた。

男性はそう言つて、優しい笑みを見せる。

「えつと……」

尋ねる気力が二人にはもう無かった。

「勇気、このおじさんにも聞いてみるよ」

「無駄だよ。こんな大きな町で見つかるわけがない」

勇気は背後のキユウに小声で答えた。

「えつ、何だい？」

「あつ、いえ、ちよつと聞きたい事があつて」

「あたし達は、お雪つて人を探してるのよ」

「お雪？ お雪？ うちの長屋に、『お雪ちゃん』ならいるけどね？」

「え？ ほんとですか？」

「俺はここの長屋の大家だけど」

男性は後ろの路地を指差した。

「煙管職人のミノキチさんのところにお雪ちゃんはいるよ」

勇氣、キユウ、ディアーナは、三人で目を見合させた。

「親戚か何かかい？ 煙管の看板が出てるから直ぐに分かるよ」

「煙管職人のミノキチさんですね？」

「ああ、大家から教えてもらってたって訪ねてみな。じゃ、俺はちよいと用があるんでね」
そう言うと大家は歩き去って行つた。

勇氣とディアーナはすくつと立ち上がると、単なる路地だと思つていた道を見た。

木戸の奥に狭い道があり、両側には障子が貼られた引き戸が連なっている。

高層マンションに住んでいる友達の家に行くと、室内廊下を挟んで両側に家があった。

勇氣はその時の事を思い出したが、あのマンションに比べると、木造の家々は古臭い。

「もしかして、これが長屋？」

「ああ、江戸の町の多くの人が住んでた家だよ」

勇氣とディアーナは木戸を潜つた。

「勇氣、これが煙管の看板だよ」

キユウの言葉で勇氣は立ち止まった。

目の前に、曲がるストローのような先端が曲がった棒状の看板があった。

「煙管って何？」

「子供の君には関係ないけど、煙草を吸う道具だよ」

「そうなんだ……」

勇気は看板の端に『巳之吉』と書かれている文字を見た。

「この漢字が、もしかして？」

「ああ、ミノキチって読むんだよ」

「……倭国語ね」

それを聞いて勇気はゴクリと唾を飲む。

今まではお雪を探すのに夢中だったが、

上半分が障子の引き戸の向こうに雪女がいるかもしれない。

そう想像すると、勇気は急に足が竦んだ。

「あなた……馬鹿みたいに臆病だわ。あたしみたいに、慣れればいいのに」

「ディアーナ……慣れすぎだよ……」

そんな勇気に、ディアーナは呆れている。

「で。僕は、そのお雪ちゃんに、なんて尋ねればいいの？」

「ああ、確かに、そうだよねえ」

キユウは少し考える。

「あんたが、雪女だよな？　見捨里市のプールを凍らせただろ？　って聞くしかないよねえ」

「でも、雪女は正体を隠していて、それを暴いたら殺されちゃうんじゃないか？」

「ほおっ！　怖いのが苦手なのに、よく知ってるな」

「感心する事じゃないだろ！」

「確かに雪女は自分の正体を口にした者を殺す怪だ。尋ねるのは危険だよねえ」

「ふーん？　そうなの。あたしがいた世界では認知されてるのにね」

小声で揉めている三人の顔の引き戸が、突然開いた。

「ひっ！」

勇気は思わず数歩後ずさる。

出てきたのは鬚を結った30歳ほどの男性で、手には風呂敷で包まれた仕事道具を持っていた。

巳之吉に間違いないだろう。

「どうやら仕事に行くようだ。」

急いでいるのか、引き戸を閉めると、

勇気とダイアナには目もくれずに浮かない表情で長屋の出入り口に向かう。

「待ちなさい」

「なんだい？」

ディアーナが声を上げると、巳之吉が立ち止まって振り返った。

「迷子になって困ってたら、大家さんが助けてくれたのよ」

「そうなんだ。迷子にね……。悪いけど、俺、今急いでるんで……」

「何を急いでるのかしら。魔物でも見たような顔ね」

ディアーナが言うのと、巳之吉は少し考えてから口を開いた。

「……実はこの数日、嫌な夢を見るので、よく眠れないんだよ」

「どんな夢なの？」

「いや、それは……」

「言いなさい。悩みは打ち明けた方が良いわ」

巳之吉の心が少し動いた。

「実は、その夢というのが……」

巳之吉の家の引き戸が再び開いた。

勇気とディアーナが振り向くと、抜けるような白い肌が眩しい、

勇気と同じ年くらいの少女が立っていた。

「おとつつあん、早くしないと約束の時間に遅れちゃうよ」

少女は透き通るような優しい声で巳之吉を仕事に急ぎ立てる。

「あ、そうだよな。じゃ」

巳之吉は勇氣とディアーナに軽く挨拶をすると、慌てて表通りに向かった。

少女は勇氣とディアーナに向き直る。

少女の頬は少しこけていて、着物から見える腕や足首から、華奢な身体つきなのも分かった。

具合でも悪いのだろうか。

「何かご用ですか？」

勇氣を訝しげに見ていた少女が尋ねた。

「え？……ご用？」

少女の美しさに心を奪われていた勇氣はボンヤリと聞き返した。

「おい、勇氣、しっかりしろ！ 君のお母さんは『お雪』という名前じゃないかと聞いてみる」

キユウの耳打ちで勇氣はハッと我に返った。

「あの、もしかして、君のお母さんはお雪という名前じゃないですか？」

キユウに言われた通りに少女に尋ねる勇氣。

少女はじつとこちらを見返してくる。

しかしその視線は勇気ではなく、背後に注がれている。

「あなたは……？　あなたは何者？」

勇気とディアーナの背後にいたキユウが、前に出た。

「僕の姿が見えるのか？」

少女は何も答えなかった。

キユウを睨みつけた少女は、家の中に入り、引き戸をぴしやりと閉めた。

4 — 勇気とディアーナとお雪

「どうしよう?」

三人が長屋の木戸を通り抜けると、再び白髪交じりの大家に出会った。

「お雪ちゃんは親戚じゃなかった」

「勇気が伝えると、大家は勇気を可哀想に思い、空き部屋に泊まってもいいと言ってくれた。」

夜、勇気、キユウ、ディアーナは畳の上で考え込んでいた。

「それにしても、雪女があんな少女だったとはな……」

「妖精だったからね」

キユウも意外だったようだ。

「あの子が怪なんだよね。あんな綺麗な子を倒さないといけないんだよね?」

「おい、勇気。まさか好きになったわけじゃないよね」

「え? そんなんじゃないよ」

キユウに睨まれた勇気は、慌てて手を振った。

「勇気、怪に惑わされちゃダメだ。どんなに美人でも怪は怪だ」

「分かつてるよ」

「それなら、どうして直ぐに倒さないの？」

「それは、奇妙に思うところがあるからなんだ」

「奇妙って？」

「生き物を殺すのが雪女だ。普通はプールを凍らせる、という無意味な事はやらない」

「あの子は子供だから悪戯をしたんじゃないの？」

「勇気、惑わされるな。彼女は、子供に見えても雪女だ」

「とにかく、本当に見捨里市のプールを凍らせたのかを調べるわよ」

「でも、どうやって？」

「考えるしかないねえ」

話が行き詰まってしまつて、勇気は布団に横たわつた。

いつの間にか、夢を見ていた。

夜の山、少年と祖父は吹雪から逃れるために小屋に避難していた。

囲炉裏を挟んで、二人が寝ている。

冷たい風が吹き、囲炉裏で赤々と燃えていた火がシュツと消えた。

勇気と同じ年くらいの少年がふと目を覚ます。

囲炉裏の向こうの祖父を見ると、白い着物の少女が祖父に覆いかぶさつていた。

少女は祖父の顔に、白い息を吹きかけていた。

祖父はすっかり凍ってしまい、既に呼吸は止まっている。

「じつちゃんっ！」

ゾツとした少年の口から声が漏れた。

白い少女が、少年に近づいて来る。

「あ、あああつ！」

少年は恐怖のあまり、声にならない悲鳴を上げる。

少女は、少年に息を吹きかけようとして、不意に動きを止めた。

「よく見ると可愛い子だね。お前の命は取らないでおこう。」

でも、もし今夜の事を一言でも誰かに話したら、その時は、

私はお前の命を取らないとならない。今夜の事は忘れなさい」

少女はそう言うと言とスウーツと戸に近づき、小屋の外の吹雪の中に出て行った。

「うなされてたわよ」

ディアーナの声で、勇気はハツと目を覚ました。

上のエルフのディアーナは、休息の時に別の世界に行くため、眠る必要はないらしい。

「夢の中で、白い着物の少女が少年を殺さないで助けたんだ。」

その代わり、この事は誰にも言ってはならないってきつく言ってた。

多分、あの少女はお雪ちゃんだと思う」

勇気の言葉にキユウとディアーナが頷く。

「君は巳之吉さんが少年の時に体験した事を夢に見たんだ」

「僕が……?」

「君の見る夢には特別な力があると言っただろ?」

単にボオーツとしてたり、夢を見たりしてるんじゃない」

ふと、部屋の引き戸の障子を少女の影がよぎっていった。

「お雪ちゃん……?」

「……お雪?」

勇気とディアーナが眩くと、キユウが再び頷いた。

5 — 凍りつく見捨里市

三人は外に出てお雪をそつと追いかける。

街灯のない時代は、月明かりだけが頼りだ。

お雪の白一色の着物が闇に浮かんでいて、勇気が夢の中で見たのと同じだった。

「恐怖を与えないと……私は……」

長屋の外れの藪にお雪が入っていく。

それを物陰から覗く勇氣、キユウ、ディアーナ。

その先には、なんと藪の中に×印があった。

幸いにも、罅はまだ小さくて、お雪が入れる大きさではない。

お雪が×印に顔を近づけ、小さな口から冷たい息を吹き込んだ。

現代の夜の見捨里市。

むし暑い空気に包まれた住宅街のあちこちに、小さな罅が走った。

その小さな×印から、一斉にモワモワと真つ白な冷気が漏れ出す。

「なんだ、あれ、煙……？」

帰宅途中だったスーツの男性が、道路を照らすオレンジ色の街灯を見上げた。

街灯に白い靄がまとわりついている。

火事だろうか、と首を傾げた瞬間、街灯が凍りついて割れた。

男性は悲鳴を上げて走って逃げ出した。

別の道、塾帰りの高校生が自動販売機でジュースを買おうとすると、

その販売機に白い冷気がまとわりついた。

目の前の自動販売機が真っ白に凍りつき、高校生は腰を抜かした。

「ひっ!!」

同じ頃、羽心は二階の自室で勉強をしていた。

音が聞こえて、羽心は窓のカーテンを開ける。

「何?」

窓外の信じられない光景が目飛び込んできた。

駐車場に停めてある車や、周囲の窓などが見る見る凍りついていく。

「え? 何これ?」

羽心は自分の目が信じられず、目を擦った。

藪の中のお雪が×印の罅にさらに冷気を吹き込み、罅が音を立てる。

お雪が身を引くと、×印から黒い煙が湧き出て、×印の罅が少しだけ大きくなる。

「この程度の恐怖じゃ、罅が大きくなるのよね。」

生き物を凍らせれば恐怖も大きいから、大きくなるはずだけど……」
お雪は溜息をついた。

それを、木々の陰から勇氣とディアーナが覗いていた。
キユウは勇氣に囁く。

「勇氣、エルフ、このままじゃ、見捨里市が凍りつく。急いで倒さないと」
「分かってるわ」

「でも……」
「なんだ？」

木々の間から見えるお雪は、悩んだ表情で藪から出て行った。

勇氣は魅入られたように、ディアーナは真剣な表情でそつと追いかける。

「おい、勇氣、エルフ！ 何してる」

お雪の後を、勇氣とディアーナは静かにつけていった。

勇氣とディアーナは小声で話している。

「さつき、お雪が小声で『恐怖を与えないと』って言ったわよね？」

「って事は、お雪は恐怖を原動力にしているのかしら？」

「そうだと思う……」

怪は人々の恐怖を原動力にして動いているらしい。

人々の希望を原動力にしている妖精とは大違いだ。

それを知ったディアーナは、「人と怪は共存できない」と嘆いていた。勇氣は、彼女を見て複雑な表情になった。

「やっぱり……怪のお雪ちゃんを倒さなきゃいけないのかな……？」

6 — 江戸を彷徨うお雪

人っ子一人いない江戸の通り。

周囲の木造の建物を、月明かりが淡く照らしている。

そこを力なく彷徨うお雪は、まさに幽霊そのものだった。

勇気とディアーナは物陰に隠れながら、そんなお雪を尾行する。

「いい加減にしろ、勇気！ 長屋に戻って怪を倒す方法を考えるんだ！」

キユウは勇気に、小声だが強い語気で言う。

「ミャー」

不意に、どこかで猫の鳴き声があった。

お雪は軒下に猫の母子を見つけ、覗き込んだ。

子猫は熱があるのか、小さく震えていた。

それを心配して母猫が子猫の身体を舐めている。

「ミャー。ミャー」

母猫が子猫を元気づけるように必死に声をかけ続ける。

お雪はそんな親子をじっと見つめた。

「物を凍らせるより、生き物を殺した方が恐怖は大きいに決まってるわ。

試しに、この親子を凍りつかせてみようか……」

お雪は子猫にそつと近づき、じつと見た。

「ニャー!」

母猫が不安げにお雪を見上げた。

「二匹同時に殺すよりも、子だけを殺した方がお前の恐怖は大きいんだろうね」

母猫が異変を感じて身を硬くした。

「私が長屋の子供達にいじめられて殴られた時に、

巳之吉おとつつあんもそんな不安な表情をしてたわね」

警戒心を強めていく母猫を、お雪は冷たく見つめる。

「子猫の事が心配なんだね。だったら、目の前で我が子が凍ったら、さぞかしショックだろうね。」

さぞかし恐怖も大きいだろうね。ふふふつ、ふふふつ」

お雪はそう呟くと、熱に浮かさされている子猫を睨みつけた。

「ニャー!」

「シヤアアアアアア!」

猫が一際大きく鳴いた瞬間、お雪が冷たい息を吹き出し、子猫の顔に冷気がかかる。

母猫は毛を逆立てて、お雪に飛びかかったが、お雪の冷気は治まらない。子猫の頭がうつすらと白くなつていく。

「シャーッッ！」

母猫がお雪にもう一度飛びかかろうとした、その時。

「ニャー！」

子猫が元気に鳴き声を上げた。

お雪が程よい冷気で熱を下げたのだ。

「ニャアー！」

母猫が明るく鳴いて、子猫と頬を擦り合わせる。

その様子を見てお雪が微笑んだ。

「元気に暮らすんだよ」

お雪は猫の親子に声をかけると、ゆっくりと立ち上がった。

「今の私には生き物を殺すなんて出来ない」

お雪の頬を一筋の涙が流れた。

勇気、キユウ、ディアーナは、その一部始終を見ていた。

「ねえ、僕達は、お雪ちゃんを本当に倒さないといけないの？」

「あたしには、見逃す事しかできないわ」

歩き去って行くお雪を見つめる勇気の気持ちは、辛くなっていた。

今の質問はキユウだけでなく、自分への問いかけでもある。

「さつき、×印に冷気を吹き込んで、見捨里市を凍らせていたのを見ただろ？」

「そうだけど……。でも……」

「怪は怪だ」

「キユウ……」

「お雪！ お雪！」

巳之吉の声が背後から響いてきた。

後ろを見ると、巳之吉の姿が通りの奥から近づいてくる。

しかし、勇気とディアーナが向き直った時には、お雪の姿は既になかった。

「彼に話を聞こう」

キユウの耳打ちに従って、勇気は巳之吉の前に出た。

「お願いです。話を聞かせてくれませんか？」

巳之吉は立ち止まった。

7 — 幸せな結末

巳之吉の家の前に吊るされたキセルの看板が夜風に揺れている。

畳敷きの狭い部屋で、勇氣、デイアーナ、巳之吉の三人は向かい合って座った。

巳之吉は酷く悩んだ様子で、ぼつりぼつりとここ最近の事を語り始めた。

「数週間、両親に捨てられたらしい少年を受け入れる事になったよ。」

「実はお雪も迷子だったのを俺が預かったんだ。お雪も弟が出来て、幸せになれると思つた。」

「でも、その子が来てから奇妙な夢を見るようになって……」

「奇妙な夢？」

「ああ、子供の時に、おじいちゃんと山に登つたんだが、突然の吹雪に遭つてしまつてね。」

「それで山小屋にこもつたけど、おじいちゃんは凍死したんだ。」

「その時に、奇妙なものを見て……」

「それで？」

「いや、この話はすっかり忘れていたんだ。」

「というか、忘れないといけないと自分に言い聞かせてた。」

それを突然、夢で見るようになってしまった。それで、お雪にその夢を話したんだ」
「話したのね？」

「ああ、話をしたらお雪は突然泣き出して、それから顔さえ合わせないようになった。ところが、数日前から以前のように接してくれるようになった。

でも、夜中にどこかに出かけるようになって……。

「訳を聞いても答えてくれないし、どんどんやつれていくし……何がなんだか……」
「それで、その少年は……？」

「それがお雪に夢の話をした日から突然、いなくなってしまうて……」
「その子の名前は？」

「俺やお雪は太郎と呼んでいたけど、本当の名前は自分でも分からないと言っていた。家族も故郷も覚えてないと言っていたな」

「名前の分からない少年……？」

キユウがぼそりと呟いた。

巳之吉は膝の辺りをグツと握り、涙を堪えて呻いた。

「お雪は本当の自分の子だと思つて暮らしてきたんだ……。

妻と子供が流行病で死んでどうしようもなかった時に、お雪が来てくれたんだ。

お雪のおかげで幸せに生きてこられたのに、俺はお雪が苦しんでいても何も出来ない

し、

挙句、お雪が人間ではない、別の何かのようにさえ思えてしまつて……」

巳之吉の辛さが勇氣とディアーナにも痛いほど伝わってきた。

子供を守りたいが、何かおかしいという気持ちもある。

その葛藤の中で苦しんでいる……そう思うと、

勇氣は、とてもお雪をこの世から消し去る気にはなれなかった。

ディアーナも同じ気持ちになった。

「あたしは彼女を助けたいわ」

「何を言つてる！ 怪だぞ！ 見捨里市がどうなつてもいいのか？」

「でも、さつきだつて猫達を助けていたし……」

巳之吉はそんな勇氣とディアーナを不思議そうに見る。

「お嬢ちゃん、君は誰と話してるんだ？」

その頃、町をふらふらとろつくお雪の足取りが、ズズツ、ズズツと重くなつていた。

「巳之吉おとつあんと一緒に暮らすようになって、私はすっかりダメになつてしまつた。

もう、生き物の命を奪うなんて出来ない」

「……というわけで、僕達はその……彼女を倒さないといけないんです……」

巳之吉の家では、勇氣が巳之吉に全てを説明し終えたところだった。

『こんな話、信じられないですよね?』と僕の背後のキユウが言っています」

勇氣の話をじつと聞いていた巳之吉は独り言のように語り出す。

「ああ、信じられないよ。絶対に信じられないよ」

巳之吉の言葉は戸惑いを強めていく。

「……確かにお雪と一緒に暮らしていると、色々不思議に思う事があった。

真冬のどんな寒い時でも、火鉢の傍には絶対に来なかつたしね。

変だと思つてたんだ。でも、わざと気にしないようにしていた。

優しい……本当に優しい子なんだ。信じられない! お雪が雪女だなんて絶対に信

じない!」

目の前で俯く巳之吉があまりにも切ない。

しかし、勇氣は背後から語りかけられて、再び重い口を開いた。

「あの、キユウが言っています。『巳之吉さんの気持ちは分かるけど、

このままでは巳之吉さんの命が危ないし、それ以外の人も危険になる』って……」

「そんな、馬鹿な事があるか!」

巳之吉は首を振っています。項垂れる。

「キユウが『ここは任せてくれないか?』と言っています」

苦しみに目を潤ませる巳之吉が顔を上げた。

「……」

巳之吉の家に戻ってきたお雪は、引き戸を開けて目を丸くした。

出かける時は布団が二つ敷かれて、その一方には巳之吉が眠っていたはずだった。しかし目の前の部屋には、巳之吉の姿はなく、布団も片付けられていた。

そして何より、部屋の真ん中に火鉢が置かれている。

「どうして、私が大嫌いな火鉢が……？」

恐る恐る近づくと、炭が赤々と燃えていた。

その熱がお雪の顔を温めると、くらくらとする。

お雪は反射的に冷気で火を吹き消そうとしたが、すぐにハツと辺りを見回した。

「おとつつあんに見られたら大変だ……。おとつつあん、巳之吉おとつつあん！」

お雪は巳之吉を探して、隣の部屋に続く襖に手をかけた。

「お雪という少女は雪女である」

突然の声にお雪が振り向くと、部屋の物陰からキユウが姿を現した。

「お前は昨日の！ おとつつあんでどうした？」

「質問するのはこつちだ。何故、×印に力を使う？ 何故、無意味な悪さをする？」

「無意味？ そんな事より、私の正体を知った以上、お前を殺さなければならぬ」

お雪は口を窄め、冷気を一気に吹き出した。

今までで一番強い冷気はキユウをすり抜け、その先の障子を見る見る白い氷壁に変えていく。

「お、お雪！」

勇気、ダイアーナと共に、隣の部屋に隠れていた巳之吉がお雪の正体を知り、崩折れた巳之吉を勇気が支えた。

障子がすっかり凍りついた頃、キユウがゆっくりと口を開いた。

「残念だな。僕には効かないよ。僕はお前と同じ、この世の者じゃない」
諦めたお雪に、キユウは改めて尋ねた。

「なんで、見捨里市に悪さをするんだ？」

「……だって、だって！」

巳之吉おとつあんと幸せに暮らしていたのに、

おとつあんが、私の事を思い出して喋ってきたから……」

お雪は悔しそうに語り出した。

「だから、私はおとつあんを殺さなければならなくなった。

でも、太郎が『別の世界に行けば、巳之吉おとつあんを殺さずに済む力が手に入れられる。」

そのためには別の世界を恐怖に陥れて、×印のトンネルの入り口を広げないとならぬ
い』って、

教えてくれて……」

「それはその少年の嘘だ。

雪女は人間が寝たり、食べたりしないと生きていけないように、

自分の話をした相手を殺さないと生きていけない怪なんだ」

お雪は痛いところを突かれたと思い、顔を覆った。

「でも、私はおとつつあんと！ 巳之吉おとつつあんと一緒にいたいんです！

殺すなんてとても出来ない！」

「お雪！」

「おとつつあん！」

襖が勢いよく開いて巳之吉が飛び出し、二人は抱き合った。

巳之吉はキユウが立っていると終われる場所に向かって頭を下げた。

「キユウさん、お願いです！ 何とか助けてください！」

隣の部屋から出てきた勇気の耳元に、キユウが顔を寄せた。

やがて、勇気は首を振った。

「『それは無理だ』そうです。

『お雪ちゃんがあなただを助ければ、いずれお雪ちゃんが衰弱して死ぬ』そうです
「え？ そんな……！」

「『それは、お雪ちゃんが一番分かっているはずだ』とキユウは言っています」

巳之吉はお雪をしつかり見つめて尋ねる。

「そうなのか？ お雪」

お雪は悲しい目をして頷いた。

巳之吉は愕然としたが、やがて決意に満ちた表情でお雪を見た。

「だったら……だったら、おとつつぁんに……。おとつつぁんに、その息をかけてくれ！」

頼む！ 冷たい息を一思いにかけてくれ！ 頼むから！

お雪はあり得ないとばかりに首を横に振った。

「おとつつぁん！ 何言ってるの！」

「頼むよ！ その方がよっぽど良い！」

抜けるような白い肌の少女は、大粒の涙を流して大きく首を横に振った。

目尻から飛んだ涙がポトリ、ポトリと畳で音を立てる。

「そんな事出来ないよ！ おとつつぁん！」

「お雪！」

お雪は泣きながら叫び、巳之吉はお雪を抱き寄せた。

その姿は本物の親子以上に仲の良い親子に思えた。

二人の姿があまりに悲しすぎる。

勇気もこみ上げるものを抑えられず、涙が溢れてきた。

すると……。

「さつきから黙って聞いてれば、悲しくて辛い話ばかり」

デイアーナが拳を握り締めていた。

彼女の表情は、どうにもならない事への怒りで歪んでいる。

「こっちの世界と比べるのは野暮だけど、

人と、あなた達が怪と呼ぶ存在が共存している世界もあるのよ。

どうして共存できないの？ どうして人は怪を排除しなければならないの？

信じられないっ！ あたし、そんなの認めたくないっ!!」

巳之吉とお雪が共に生きられない事に、

デイアーナが押さえていた怒りが、ついに爆発したのだ。

彼女はお雪の腕を掴む。

「な、何するの!？」

「あたしがこの子を妖怪屋敷に連れて行く。

そして、賢者に引き取ってもらって、この子には幸せになってもらう！」

「この世界のルールより、別の世界のルールの方が、この子には似合うんだから……！」
「ディアーナ!!」

「何をするんだ!!」

ディアーナは片手で空間を開くと、お雪と共にその中に飛び込んだ。

そして、しばらくすると、ディアーナは空間を飛び越えてこの時代に戻った。

お雪の姿は、もうなかった。

「な、何をしたの……?」

「あの子には、幸せになってほしいの。巳之吉からも彼女の記憶を奪いたくない。

でも、この世界のルールではできなかつた。だから、あたしが別の世界に連れて行っ

た」

「……」

自分と「ある人物」以外にも、時を超える力がいたとは。

キユウはただ、唾然とした。

「……巳之吉。あの子はいつかまた、あなたのところに戻ってくるわ。

だから、もう、その事は、忘れてね……」

ディアーナはそう言って、眠りの精霊を召喚し、巳之吉を眠らせた。

次の瞬間、巳之吉はぐつぐつと眠りについた。

本当は妖怪屋敷で永住する事になるのだが、嘘も方便なのだ。

翌朝、長屋の一室から生き生きとした表情の勇氣とディアーナが出てきた。

あれから大家が貸してくれた部屋に戻り、お雪も救われた事により、

二人はぐつすりとお眠る事ができるようになった。

「おはよう」

「おはようございます。あの、巳之吉さんは？」

「まだ、家にいるはずだよ」

「じゃ、お雪ちゃんは？」

「お雪……そんな子がいたな。白くて可愛い女の子……」

巳之吉の部屋には、長屋の子供達上がり込んではいやいでいる。

ディアーナの行動により、お雪の記憶は朧げながら残っていたようだ。

「おお！ お前達も上がれよ！」

勇氣とディアーナが顔を見せると、手招きした。

「巳之吉さん、私をここの子供にして！」

子供達の中の少女が無邪気に言う。

「よし！ もちろんだ！ お前達は俺の子供だよ。いっぱい遊んで早く大きくなれよ

！」

「わーい」

少女や子供達のはしゃぐ。

その様子を見た勇氣も笑った。

今頃お雪も、妖怪屋敷で平和に暮らしているだろう。

ディアーナのおかげだ。

勇氣は大いに、彼女に感謝した。

「勇氣、エルフ、帰るぞ」

「うん。……ディアーナは本当に、凄い子だったな」

悲しい結末を幸せな結末に変えたディアーナは、まさしく勇者だろう。

勇氣、キユウ、ディアーナは長屋の片隅に向かった。

キユウは左手をかざすと『時のトンネル』を作り、三人はその中に消えていった。

灼熱の太陽の下、一人の少年が立っていた。

黒髪を結び、右目を包帯で隠して、黒い着流しを風に靡かせている。

包帯の外から覗く目の色は、紫だ。

少年は腰に差した刀を抜くと、二回、十字に空を斬った。

すると、空中にあの×印状の罅が生まれた。

「さあ、また楽しませてくれよ」

そう言って、不敵に笑う。

少年が立っているのは、巨大なピラミッドの頂上だった。

e p i s o d e 2 | W a n d e r i n g C u r s

e s 王の呪い

1 | 博物館と英霊

午前7時のある日の事だった。

「……さて。ディアーナ、ノノ、私が何者なのか分かりますか？」

建物の中で、ジャネットがディアーナと、翼を持つ少女、ノノ・オーガスタと話をしていた。

ディアーナとノノは首を横に振った。

任務以外で彼女とあまり話をしていないから、当然だ。

「ジャネットおねえちゃん？」

「この本を見てください」

ジャネットは、『世界の偉人伝 ジャンヌ・ダルク』という本を見せた。

表紙の少女は、ジャネットとそっくりだった。

「私は彼女が具現化した存在です。」

こうして多種多様な巫人をまとめる事ができるのも、私の力ありきなのです」
「そ、そうなのね……へへーっ」

目の前にいるのは、約600年前のフランスの英雄。

240年生きているディアーナも、流石に畏怖した。

「そして、今回現れる怪も……」

「ジャネットおねえちゃんみたいなのだよね」

「……はい」

つまり、今回の怪奇現象は、偉人が起こすものらしい。

話しているジャネットの顔が、暗くなる。

しかし、偉大なる人物が怪奇現象を起こすなんて、ディアーナとノノにはよく分からなかった。

「お願いします。どうかこの異変を收拾してください。これは、指導者として頼む事です」

「……分かったわ」

ディアーナは真剣な表情で頷いた。

だが、ディアーナはどこか浮かぬ様子であった。

「それで、報告によると、雪女は倒していない、

との事ですが……彼女が起こした異変はどうなりましたか？」

「あれは大丈夫。あたしが魔法で何とかしたわ」

雪女を異世界に連れていった事で、見捨里市はどうなったのかをジャネットは聞いた。

「デイアーナはちゃんと後始末をしたようで、ジャネットは安心する。

「では、行つてきなさい」

「……偉人が怪奇現象、ねえ……」

「よくわからないよ……」

「デイアーナとノノはもやもやししながら、建物を出ていった。

場面は博物館が変わる。

真之勇氣は幼馴染の白鳥羽心に誘われて、見捨里市立博物館にやってきていた。

博物館で『エジプト文明展』が開催されていたのだ。

「エジプト文明つて、紀元前5000年頃から始まったらしいわよ。

紀元前3000年頃から小さな国がまとまって、

ファラオ、つまり王様が治める大きな国になったの。

ヒエログリフっていう象形文字を使ったり、

ピラミッドを作ったりして、とっても繁栄したそうよ」

人で賑わう館内を歩きながら、羽心はまるで案内員のように勇氣に説明していった。館内には、遺跡から発見されたエジプト文明の石像や彫刻や装飾品などが、いくつも展示されている。

それらの展示物を、羽心はキラキラと目を輝かせながら見ていた。

羽心は怪奇現象だけでなく、かつて栄えた文明や文化も大好きらしいが、勇氣は展示物ではなく、天井をぼんやりと眺めていた。

「博物館って、どうしてこんなに薄暗いのかな？」

博物館にやってきたのは、小学3年生の校外学習以来だ。

天井に淡い光を放つライトしか付いていない事がずっと不思議だった。

すると、羽心が眉間に皺を寄せながら勇氣の方を見た。

「明るいと雰囲気が出ないじゃない。」

っていうか、館内の明るさよりエジプトの神秘に感動してよね。

おじさんの書齋に、いっぱい本があったでしょ」

「それは、確かにいっぱいあったけど……」

10年前に亡くなった勇氣の父親は、考古学者をしていた。

だから父親の書齋には、骨格標本や剥製、さらには怪奇現象や古代文明、文化に関する本や資料がたくさん保管されているのだ。

もちろん、エジプト文明の本もある。

勇気は長らく、その書齋に入るのを避けていたのだが……。

「最近、勇気はよくおじさんの書齋に行くようになったから、

こういうのにも興味あるかと思ったんだけど」

「それは……」

勇気は言葉に詰まった。

少し前から、勇気の住む見捨里市では怪奇現象が起きるようになっていた。

原因は時空に出来た×印状の罅ひびで、そこから、様々な時代の『怪』の力が漏れ出してくるのだ。

神話の怪物のメデューサ、妖獣のネツシー、精霊の雪女……。

勇気は町を守るために、謎の少年・キュウとエルフのダイアーナと共に、

時代を超えて、怪達と戦う毎日を過ごしていた。

書齋へ出入りしている理由は、そんな怪を調べるためだ。

文明や文化の本は怪には関係なさそうなので、そういう本は全然読んでいない。

そもそも、勇気は文字ばかりの本を読むのは苦手だった。

だが、その事情を知らない羽心はただ不満そうに目を細めていた。

怪を倒せば怪奇現象は消え、それが起きた事も人々の記憶から消え、全てが元に戻る。

勇氣は以前、メデューサに襲われそうになった羽心を助けた事があつたが、彼女はそれを全く覚えていないのだ。

(だけど、どうして僕の町に怪が現れるんだろう……?)

キユウは何故見捨里市に罅が現れるのか、その理由を教えてください。

謎だらけの終わりの見えない孤独な戦いに、勇氣は溜息をついた。

「何よ、勇氣。楽しくないの?」

ふと、羽心が悲しそうな表情を見せた。

「勇氣が元気になるかと思つて来たのに……」

意外な言葉に勇氣は目を丸くした。

この頃、勇氣は怪の事で悩んでばかりいた。

またいつ怪と戦う事になるか分からず、不安だつたのだ。

キユウに相談しようにも、彼は怪奇現象が起きた時にしか現れないし、

ディアーナもどこにいるか分からないため、勇氣は一人で悩むしかなかった。

羽心は、そんな勇氣を見て何かを察し、元気づけようと思つたようだ。

(それなのに、僕は……)

勇氣は、羽心の気持ちに踏み躪はつてしまった自分を恥はずかしく思つた。

「もう帰る?」

羽心が力なく言うのと、勇氣は慌てて首を大きく横に振った。

「帰らないよ！ 楽しいよ！ うん、凄く楽しい！」

「よかったー。やっぱりそうよね。楽しいに決まってるわよね」

その言葉に、羽心は一瞬驚いたものの、すぐに笑みを浮かべた。

「よし、それじゃあ気を取り直して、今回の目玉を見に行くわよ！」

「目玉？」

「ふっふふー、それは見てのお楽しみ！」

羽心はそう言うのと、嬉しそうに隣の展示室へと歩いて行つた。

「あつ、ちよつと！ ……まったく、そういうところが羽心の悪いところだよな」

羽心はいつも肝心な事を教えてくれない。

ちよつとうんざりしながらも、勇氣は羽心が元気になつてホツとする。

「ねえ、待つてよー！」

勇氣は羽心の後を追つた。

「ほらつ、あれよ」

隣の展示室にやつてきた羽心は、部屋の中央にある台を指差した。

勇氣はそれを見て、目を大きく見開く。

「あれつて、もしかして！」

台の上のガラスケースの中に、眩い光を放つ黄金のマスクが飾られていた。

「ツタンカーメンの黄金のマスク、だよね……?」

エジプト文明の事をあまり知らなくても、黄金のマスクはテレビや本で見た事がある。

すると、羽心が楽しげに喋り始めた。

「ツタンカーメンは、18歳の若さで亡くなった古代エジプトの王様よ。

王様の服装や装飾をそのまま表している黄金のマスクは、

ツタンカーメンのミイラが棺の中で被っていたものなの。

あの豪華な前垂れも、縞柄の頭巾に付いている蛇と禿鷲の飾りも、顎にある付け髭も、

ツタンカーメンが普段からしていた物だそうよ」

「付け髭って、あの顎にある棒の事?」

「そう! 威厳があるでしょ。」

普通、王様のお墓って泥棒に入られて、中にあつた宝物は盗まれてたりするんだけど、

ツタンカーメンのお墓はほとんど盗まれていなかったの」

「それは凄いねえ」

「うん。だけど本当に凄いのは、ツタンカーメンのお墓が発見された事自体なのよ」

「どういう事?」

「ツタンカーメンは、歴代の王様の名前が書かれた場所から名前が消されて、本当にいたかどうかずっと分からなかったの。」

そんな王様のお墓が発見された、つまり、本当にいたって事が分かった。

だから、ツタンカーメンのお墓が発見された時、世紀の大発見って言われたのよ」「そうなんだ」

勇気は感心しながらも、ふと首を傾げた。

「だけど、どうして名前が消されてたの？」

王様なのに、名前を消されてしまう事などあるのだろうか。

「それはええと……そ、そんな事より！ 黄金のマスクって凄いでしょ！」

羽心は笑って誤魔化し、話を変えた。

「これは残念ながらレプリカで、本物はエジプトの博物館に飾ってあるらしいわ」

「へえ、レプリカでも充分迫力あるね」

「でしょ。このマスクってツタンカーメンの顔に似せて作られているらしいわ」

「……ん？」

勇気は、黄金マスクの横に、パネルが展示されている事に気づいた。

ツタンカーメンの墓の資料や写真で、

写真には、本物の黄金マスクや、人型の黄金の棺などが写っている。

その中で、勇氣は一枚の写真に目が留まった。

「これって……」

そこには、ツタンカーメンのミイラが写っていた。

一瞬、怖いと思ったものの、何故か勇氣は目を逸らす事ができなかった。

ツタンカーメンのミイラが、何だか怒っているような気がしたのだ。

(そんなのあり得ないよね?)

ミイラなので表情など分からないのに、勇氣には何故かそう思えたのだ。

勇氣はその事を言おうと、羽心の方に顔を向けた。

「あれ?」

黄金のマスクの前にいたはずの羽心がない。

勇氣は周りを見回し、羽心の姿を探した。

「あつ!」

すると、羽心は部屋の隅にいた。

何故かふらふらとよろめき、胸の辺りを押さえている。

「羽心、どうしたの?」

勇氣は羽心の傍に歩み寄った。

「何だか……急に体調が、悪くなって……」

羽心は苦しそうな表情でそう答えた。

「大丈夫？」

「え、ええ。だけど……この変な声は、何なの……？」

「変な声？」

「聞こえてるでしょ……ウウウウって、唸り声が……」

「えっ？」

耳を澄ますが、そんな声は全く聞こえない。

「……羽心！」

突然、羽心がその場に倒れた。

羽心は気を失っていて、反応しない。

「どうしたんだね？」

「大丈夫？」

周りにいた人達が、驚きながら集まってくる。

「羽心、しっかりして！ ねえ、羽心！」

博物館の中に、勇気の叫び声が響き渡った。

2 — 広がる不安

「そういえば、あの本には軍を率いて祖国を解放した後、

敵軍に捕らえられ、19歳の若さで処刑された……って書いていたわ」

「かなしいね、おねえちゃん」

ディアーナとノノは、ジャネットの依頼で見捨里市を周っていた。

しかし、この時間なのにやけに静かだ。

どんな怪奇現象が起こったのだろうか。

ディアーナとノノには、全く分からなかった。

「まともに情報収集ができないし、書斎に行くしかないわね」

「うん」

人っ子一人いない以上、聞き込みをする事はできないと判断したディアーナとノノ。

仕方なく、ディアーナとノノは、書斎に向かった。

一方、勇気はというと。

（羽心、大丈夫かな……）

病院の待合室でソファに座り、不安げな表情を浮かべていた。

あの後、博物館の係の人に救急車を呼んでもらい、羽心と病院に移動したのだ。
(だけど、どうして急に……………?)

羽心は、朝からずっと元気だった。

風邪も引いていないし、体調も崩していない。

それなのに……………。

勇気がそう思っていると、白衣を着た一人の女性がやってきた。

「そこにいたのね」

「お母さん」

この病院で看護師をしている、勇気の母親だ。

「羽心は大丈夫なの?」

勇気は立ち上がると、母親の下へ駆け寄った。

「病院は走つちや駄目よ」

「ねえ、羽心は?」

心配する勇気の顔を見て、母親は優しい笑みを浮かべた。

「大丈夫よ。今は落ち着いて眠ってる。羽心ちゃんのご両親もすぐに到着するって」

「風邪? それとも食中あたりとか? あっ、急に熱が出たとか?」

勇気が矢継ぎ早に尋ねると、母親は急に怪訝そうな顔をした。

「それが、分からないの」

「どういう事？」

「どうして、羽心ちゃんの体調が悪くなったのか、検査しても全然分からないのよ」

「そんな……」

勇気はますます不安になる。

そんな彼の気持ちを感じたのか、母親は落ち着いた口調で話を続けた。

「大丈夫。大きな病院で検査をすれば、きっと原因が分かるはずよ」

勇気の母親が勤めている病院は、小さな町の病院だ。

大きな病院には詳しく検査ができる設備が整っているという。

「だけど……」

母親の表情が曇った。

「これで、今日5人目なの。原因が分からなくて倒れた人……」

「えっ？」

「みんな、どこからか変な唸り声が聞こえたって言ってたわ」

「唸り声……」

羽心が言っていた事と同じだ。

「お母さん！」

勇気が母親の方に顔を向けた時。

「いっ……」

勇気は何故か、道路の真ん中に立っていた。

さつきまで病院にいたはずなのに。

「え……あれって……」

すると、道路の角から母親が現れた。

先ほどまで白衣を着ていたのに、

今は、普段家にいる時のような白いブラウスにデニムのパンツを穿いている。

「お母さん!？」

勇気は混乱しながらも、母親の下へ駆け寄ろうとした。

「ゆ……う……き……」

母親が、勇気の方に顔を向けた。

その顔は苦しそうに歪んでおり、胸の辺りに手を当ててふらふらしながら声を絞り出した。

「ゆう……き……に……げて……」

母親は、その場に崩折れた。

「お母さん!」

勇氣は慌てて母親に駆け寄るが、街の道路の向こうを見て、思わず唾然となった。道路の向こうに、数え切れないほどの人々が倒れていたのだ。

皆、気を失っていて、その顔は苦痛で歪んでいる。

「どうなってるんだ？」

「ウウウウウ、ウウウウウウ、ウウウウウ、ウウウウウウウウ」

突然、倒れた人々の向こうから、声が聞こえてきた。

不気味な唸り声は、だんだんと言葉になっていった。

「ウウウウウウウウ……シメエエ、ルシメエエ……ウウウウウウウ、ルシメエエ……クルシメエエ」

「苦しめ？ がっ！ あがが……」

勇氣がそう繰り返し返した瞬間、胸が苦しくなった。

まるで、誰かに心臓を掴まれているようだ。

息ができず、あまりの苦しきで顔が歪んでいく。

「クルシメエエ、クルシメエエ」

「く、来るな……が、あ、ああ……」

何かが、勇氣の方へ近づいてきた。

勇氣は胸を押さえながら必死に逃げようとするが、あまりの苦しきで動けない。

「クルシメエエ……クルシメエエ……ニンゲンドモヨ、クルシメエエエエエエ」

次の瞬間、人影が勇気に襲いかかってきた。

「うわあああ!!」

「勇気、大丈夫?」

ハッとすると、目の前に白衣を着ている母親が立っていた。

周りを見ると、病院の待合室だ。

「ぼ、僕……」

「急にどうしたの? ボーツとしてたわよ」

「ボーツと……」

また、夢を見たのだ。

(もしかして、さっきのは……)

勇気は、羽心達が何故急に倒れたのか、その理由に気づいた。

「このままじゃ、みんなが!」

「勇気、どうしたの?」

「お母さん、羽心の事ちゃんと見ててね!」

「えっ、ええ、もちろんそのつもりだけど」

「後は僕が何とかするから。この町は、僕が絶対に守ってみせるから!」

勇気はそう言うと、病院から飛び出した。

3 — 灼熱の太陽の下で

「キユウ！」

勇気は家に帰つてくると、父親の書齋に駆け込んだ。

「キユウ、大変なんだ！」

だが、部屋の中にキユウがいない。

いるのはディアーナと有翼の少女だけだ。

「君達は……誰？」

「あたしはディアーナよ」

「ノノだよ！ ねえ、どうしたの？」

「実は……」

勇気が事情を話そうとすると、頭上から声がした。

「勇気」

見ると、天井付近にキユウが浮かんでいた。

「そんなところで何してるの？」

「いやあ、窓の外を見てたんだよ。またあれが現れたからね」

「あれって！」

勇氣、ディアーナ、ノノは窓の外を見た。

町の上空に、×印状の罅が浮かんでいる。

罅の中から、黒い煙がゆらゆらと揺らめいていた。

「既にかなり罅が大きくなってるね」

「やっぱり、さっきの夢は！」

勇氣の見る夢には、不思議な力がある。

このまま放っておいたら、夢の出来事が現実になつてしまうのかもしれない。

勇氣は自身が見た夢と羽心が倒れた事をキュウ、ディアーナ、ノノに話した。

少年説明中……

「そういう事だったのね……」

ディアーナは真剣な表情で、顎に手を当てる。

「今回の怪らしく厄介な現象が起きているようだね」

「今回はどんな怪なの？」

「君達も知つてると思うよ。……ツタンカーメン。古代エジプトの王だ」

「えええ？」

「ジャネットおねえちゃんと、おなじ……」

「彼は人間に強い怨みを抱いている。

このまま放っておいたら、町のみんなはツタンカーメンの呪いによって、苦しみながら死んでしまっただろうね」

「死ぬ!?!」

人間への憎しみから、歪んでしまったツタンカーメン。

彼が起こす怪奇現象は、ただ、体調が悪くなるだけではなかったのだ。

「そんなの絶対駄目だ!」

「みんながかわいそうだよ!」

羽心や母親達を死なせたくない。

勇氣、ディアーナ、ノノはキユウを見つめた。

「ああ、君達の気持ちは分かっている。だから、僕はここにいるんだよ」

キユウは幽霊なので、物を触ったり持ったりする事はできない。

しかし彼には、時と場所を超えて、怪のいる時代へ行く事ができる力がある。

「さあ、行くよ」

「うん!」

キユウは左手に嵌めた漆黒のレザーグローブを見せた。

勇氣は怖がるが、ここで逃げるわけにはいかない。

ディアーナとノノも武装し、勇氣はポケットの中からグローブを取って右手に嵌めた。

勇氣のグローブには太陽のマークの羅針盤、

キユウのグローブには月のマークの羅針盤がついている。

キユウはグローブを嵌める事によって、時空を超える穴を作り出す事ができるのだ。

「よし。じゃあ、その本を取るんだ」

キユウは、部屋の隅にある本棚を指差した。

「一番上の段の右端にある本だよ」

「ツタンカーメンを倒すための道具って事だね！」

キユウは、いつも怪を倒すためのアイテムを選んでくれる。

今回は本のようにだ。

ツタンカーメンを倒す呪文が書いてある魔術の本だろうか。

勇氣は期待しながら、その本を手にとった。

【とっても楽しい エジプト観光ガイド】

その本には、表紙にこう書かれていた。

「へっ?」

「見ての通り、気楽に読める観光ガイドだよ」

「ええっと、これでツタンカーメンを倒す事ができるの？」

「ああ、多分ばっちりだ」

「ばっちりって！」

「だいじょうぶだよね、おにいちゃん？」

「ああ、大丈夫さ。さあ、行くよ」

「えっ、あ、ちよつと待って」

「待てないよ。早く怪を倒さないと、この町が大変な事になる」

「みんな、しんじやうからね」

キユウはグローブを嵌めた左手を傍の壁の前にかざし、呪文を唱えた。

「カオス・ゲート
時空貫通」

螺旋状に風が舞い、壁に光が渦巻く。

その渦が大きくなって、壁に大きな渦の穴ができた。

まるで巨大な掃除機のパイプが壁に現れたようだ。

先に向かって強い風が起きている。

「靴も忘れないようにね」

「う、うん！」

勇気はあらかじめ部屋に置いていた靴を手を取った。

瞬間、風と光が増し、壁にできた大きな渦が光り輝いた。
「行くぞー！」

キユウ、ディアーナ、ノノが、光の渦の中に消えた。

「ああ、ちよつとー！」

観光ガイドでどうやってツタンカーメンを倒すのか、キユウからまだ教えてもらって
いない。

羽心と同じで、キユウもいつも肝心な事を教えてくれない。

「どうして、僕の周りはそういう奴ばっかりなんだよー！」

勇気は呆れながらも、本を握り締めた。

そして意を決すると、光の渦の中に飛び込んだ。

「んんんんー！」

光のトンネルの中を飛んでいき、目が回り、頭が回る。

何度飛んでも慣れる事はないが、勇気は耐え続ける。

やがて、光のトンネルの奥に、乾いた土の地面が見えてきた。

「あいたたた」

勇気は勢いよく地面の上に落ち、尻もちをついてしまう。

「あちちちちー！」

途端に、地面に触れた。

手足が燃えるような熱さに襲われ、勇氣は思わず飛び上がった。

「熱いわ……森の声が聞こえない」

「あついよ……」

デイアーナは暑さに耐えられず、髪が淡く光り、ノノを思わず睨みつける。

「そりゃあ、熱いと思うよ。ここはエジプトだからね」

宙に浮いたキユウが涼しげな顔で言った。

「エジプト？」

勇氣は辺りを見回す。

空には灼熱の太陽が照りつけ、辺り一面は荒れた大地がどこまでも広がっていた。

「勇氣、靴を履いて！」

「えっ、あ！ あちちちち！」

勇氣は慌てて靴を履いた。

「ねえ、ここは本当にエジプトなの？」

「ああ、またタダで海外旅行に来られたね」

「旅行気分になんてなれないってば！」

勇氣はそう言いながらも、周りの景色を見て首を捻った。

「何だか、イメージしていたエジプトとは随分違うんだけど……」

勇気のイメージにあるのは、砂漠の中にピラミッドやスフィンクスがある風景だ。

しかし、砂漠もピラミッドもなく、ただの荒野といった風情だった。

ディアーナとノノも苦しそうな顔をしている。

「おにいちゃん、ピラミッドはどこにあるの？」

「ああ、あれはここからかなり離れた場所だね」

「じゃあ、どうしてこんなところなの？」

「ツタンカーメンがここにいてるからさ」

「こんなところに？」

「王様だったら、ピラミッドの近くとか宮殿とかにいるんじゃないの？」

勇気がそう言うと、キユウは傍にある岩壁の方を見た。

「あの岩壁の下に、ツタンカーメンがいるはずだ」

「えっ！」

勇気、ディアーナ、ノノは思わず身構える。

もしかしたら、岩壁の下にツタンカーメンが大勢の兵達と共にいるのかもしれない。

勇気は、キユウ、ディアーナ、ノノと共に岩壁の端へと近づくと、恐る恐る下を眺め

た。

「あれっ?」

「ひとがいつばいいいるよ」

岩壁の下には、大勢の人達がいた。

頭にターバンを巻き、白いローブのような服を着た人達が、何か作業をしている。

その中には、勇気が普段見慣れている形のズボンとシャツを着た人達も交じっていた。

「何、あの人達……」

勇気が戸惑いの声を上げた。

「現地の作業員と、イギリスから来た政治家とか研究者だろうね」

「えらいひとがいつばいだ!」

「え? こことて古代エジプトじゃないの?」

「そんな事、一言も言っていないだろう。ここは、1925年のエジプトだよ」

「ええ? どうしてそんな時代に?」

「ツタンカーメンが王だったのは、古代エジプト時代、つまり紀元前の事だ。

「ええつと、それってつまりどういう事?」

「ええつと、それってつまりどういう事?」

「言っただろう。彼は人間に強い怨みを抱いているつて。彼はその怨みを持ったまま死んだ。」

そして、1925年に棺が開けられて、怪になつて外に出てしまつたんだ」

「人間が、怪に……？」

今まで出会つたメデューサともネツシーとも雪女とも違う。

勇気はごくりと唾を飲む。

一方で、ディアーナは明るい表情をしていた。

「それつて、やっぱり伝説の英雄じゃない。」

伝説や歴史はあやふやなものだけど……でも、怪奇現象が起こっているのは確かよ

ね」

「……まあ、それよりも」

キユウはしばらく話した後、優しく微笑んだ。

「みんなでやれば、きつと倒せる。——さあ、怪狩りの時間だ！」

4 — 大発見をした男

「()って何なの？」

「勇気はキユウ、ディアーナ、ノノと共に、岩壁の下へとやってきた。

上から見た時は、岩だらけの荒れた大地かと思つたが、

岩壁の側面に大きな横穴がいくつも開いていた。

人々は、その穴の周辺で土を運んだり、何かを調べたりしている。

「彼らは遺跡の発掘作業をしているんだ。

ここには古代エジプト時代の歴代の王の墓がいくつもあるからね」

「お墓なんかどこにあるんだよ」

「勇気は辺りを見回すが、墓石などどこにもなかった。

「君達の顔に見えているじゃないか！ あの穴がツタンカーメン王の墓の入り口だよ

！」

「え？　　そ、そうなの？」

三人が後ろを見ると、白いワイシャツにズボンを履き、短い黒髪に口髭をたくわえた、

優しそうな中年男性が立っていた。

「ここは『王家の谷』と呼ばれているんだよ。

長い間、存在が忘れられていたんだけど、

ジャンⅡフランソワ・シャンポリオンがヒエログリフを解読してくれたおかげで、
ここを発見する事ができたんだ。

穴は一つ一つが歴代の王達の墓になっていて、

王家の谷で最初に墓を作ったと言われているトトメス一世の墓もあるし、

あつちにはラムセス二世の墓もあるよ。

凄いだらう？ ロマンを感じるだらう？」

「うん！ おじさん、すごいね！」

「え、ええつと……」

男性とノノは、キラキラと目を輝かせながらそう言った。

博物館を案内していた時の羽心と同じ感情だが、二人とも勇氣より年上だ。

勇氣とディアーナが戸惑っていると、男性は首を傾げた。

「君は誰の子供だい？ あの子は誰だい？」

「えつ、あ、えつと、僕は」

勇氣が名前を言おうとすると、男性の傍に部下らしき人が駆け込んできた。

「ハワードさん！ ジョンの奴が！」

「まさか、またか?」

ハワードと呼ばれた男性は、血相を変えて部下の人と共に走っていった。

「何だったんだ、あの人?」

「なるほど……」

勇気がキョトンと立ち尽くすと、キユウが呟いた。

「彼がハワードか」

「キユウ、あの人知ってるの?」

「ああ。彼は世界的に有名なイギリスの考古学者、ハワード・カーター。」

「彼がこの場所で、ツタンカーメンの墓を発見したんだ」

「ええ? そうなの?」

「ハワードさん、かっこいい!」

「あの人、凄い人だったんだ……」

「羽心は、ツタンカーメンの墓は世紀の大発見と呼ばれていたと言っていた。」

「そんな風には全く見えなかった。」

「……というか、あそこの穴がツタンカーメンの墓だと言ってたよね?」

「つて事は、この中に怪がいるの?」

だが、前方に見える岩穴には、たくさんの研究者や警備の人がいて、

とても簡単には近づけそうにない。

「いや、あれだけ人がいて、騒ぎになっていないという事は、墓の中にもう怪はいないだろう。」

恐らく、魂だけが抜け出してどこかに移動したんだ」

「そんな……じゃあ、どこを探せばいいか分からないじゃないか」

「ハワードさんを追うんだ。彼なら、可能性のありそうな場所を知っているはずだ」

「よし、追いかけるわよ！」

キユウの言葉に、勇気、デアーナ、ノノは頷く。

四人は、急いでハワードの元へ向かった。

ハワードは、少し離れた場所にあるテント小屋にいた。

テントの入り口には大勢の人達が集まっており、テントの中を見ながら、何故か怯えている。

勇気、デアーナ、ノノは彼らを見て戸惑いながらも、中を覗き込んだ。

「えっ?」

テントの中には簡易的なベッドがあり、その上に、若い男性が苦しそうな表情で寝ていた。

「ジョン、しっかりしろ! すぐに医者が来るからな!」

ハワードは苦しんでいる男性の手を握り、必死に励ましていた。

「ジョンの奴、さつきまで元気だったのに」

「これで今週7人目だぞ」

「まさか、あの噂は本当なんじゃないのか？」

「ツタンカーメン王の呪い……」

「やっぱり、王の棺を開けたりしたから……」

「しつ、ハワードさんに聞こえるぞ」

テントの入り口で、人々が怯えながらそう話していた。

「これって……」

ディアーナの顔が険しくなる。

見捨里市で起きている怪奇現象と全く同じだったのだ。

その時、黒いバッグを持った医者が、テントの中に駆け込んできた。

「先生、早く診てくださいい！」

医者はベッドの上のジョンをしばらく診察すると、首を大きく横に振った。

「ハワードさん。他と同じだよ。原因は全く分からん」

「そんな……」

ハワードはジョンの方を見ると、悲しそうな表情を浮かべた。

「何とかしなくっちゃ……」

勇氣は、拳を強く握り締める。

羽心や見捨里市の人達だけではない。

ここにいる人達も、怪の力によって苦しんでいるのだ。

「勇氣、今から言う事を彼に伝えるんだ」

キユウは勇氣に耳打ちした。

靈であるキユウは、人間では勇氣と退魔の力を持つ者以外には見えない。

そのため、人間と話をするためには、勇氣が代わりに話さなければならなかった。

勇氣はキユウの話を聞いて頷くと、ハワードに近づいた。

「あの、僕、『ジョンさんや皆さんを助けられる方法を知っています!』」

「なんだって!?!」

ハワード達が一齐に勇氣の方を見る。

だが、医者だけは眉間に皺を寄せていて勇氣を睨んだ。

「君、親はどこにいるんだね?」

大方、ツタンカーメンの墓を見学しに来た学者か政治家の子供だろう?

大人をからかっちゃいかん。とつととテントから出て行くんだ!」

医者はそう言うと、勇氣をテントの外に追い出してしまった。

勇氣はテントに入ろうとするが、外にいた人達が入り口を塞いでしまう。

ノノは落胆し、ディアーナは不快な表情になる。

見知らぬ子供が助ける方法を知っていると云つても、全く説得力がなかったのだ。

「キユウ、どうにかならないの？」

「うーん、こうなつたら、自力でツタンカーメンを探すしかないね」

「自力でつて言われても……」

勇氣、ディアーナ、ノノは王家の谷を見つめる。

王家の谷はかなり広く、手がかりもなしにツタンカーメンを見つけ出す事は難しい。すると、ハワードが勇氣の傍にやってきた。

「君、本当にみんなを助ける方法を知っているのかい？」

「えつ、えつと、それは……」

「知っていると言うんだ」

「し、知つてます！ 僕はみんなを助けるためにここに來たんです！」

勇氣とハワードは、互いの目をしっかりと見つめる。

ハワードは真剣な表情でそう言つた。

「君が研究者なのかは分からない。だけど、嘘をついているようには思えない。

私は君を信用するよ。だから頼む、教えてくれ！ 私はみんなを助けたいんだ！」

「いい人ね」

デイアーナもまた、ハワードを信頼するのだった。

5 — 秘密の部屋

少年説明中……

「……というわけなんです」

勇気はキユウに言われ、ハワードにキユウの存在と、人々が倒れた原因を話した。

「幽霊？ それに、棺の中から逃げたツタンカーメン？」

「正確には、逃げたのは怪になったツタンカーメンの魂です」

「怪ねえ。うーん、怪かあ……」

ハワードは、勇気の事を信用すると言ったものの戸惑っているようだ。

「お雪ちゃんの時も、巳之吉は全然信じてくれなかったわ。なんで？」

「知らない世界の事は、誰だって簡単には受け入れる事ができないものだよ」

「アルカディアディアーナの故郷。剣と魔法のファンタジー世界。やどこか『東方Project』の舞台、幻想郷。ではしっかり認知されてるのに……」

「だけどもあ、ハワードさんの場合は少し違うようだね」

勇気とディアーナがハワードの方を見ると、ハワードは何故か嬉しそうな顔をしていった。

「いやあ、世の中知らない事ばかりだ。幽霊に怪に、それから妖精。

うーん、凄いいねえ。ロマンを感じるねえ」

どうやらハワードは、皆の事を心配しながらも、どこかワクワクしているようだ。

「考古学者というものは、知らないものを知る事に喜びを感じる人達だからね」

「そうなんだ……」

勇気はふと、10年前に死んだ父親の事を思い出した。

ハワードを見てみると、父親もこんな風に好奇心旺盛で純粹だったのかもと思えた。

「それで勇気君、キユウ君、デイアーナ君、ノノ君。」

ツタンカーメンが潜んでいそうな場所を知らないかかって話だよな?」

「そうです。多分、見つかりにくい場所にいると思うんです」

これだけ人がいて、怪を見た人がいないとは、恐らく、どこかに隠れているのだろう。

「もしかしたら、あそこかも」

「どこですか?」

「谷の外れに、最近小さな穴が見つかったね。」

あまりにも小さいから、作っている途中で破棄された墓だと思って、誰も調査してないんだ」

誰も調査していないとは、潜むには絶好の場所だ。

「みんな……」

「ああ！」

「ええ！」

「ハワードさん、今すぐ案内してください！」

勇気達は、谷の外れにやってきた。

予想通り、発掘の作業員や見学をしている人達も全くいない。

しんと静まり返っていて、乾いた風だけがかすかに吹いていた。

「……」

ハワードは、ある壁の前で立ち止まった。

そこには、屈めば人が一人入れるぐらいの小さな穴が開いていた。

「2 mも進めば、突き当たりになってしまっただけだね」

「そんなにせまいの？ ノノ、みたい」

そんなところに怪が潜んでいるだろうか。

ノノは身を屈めると、とりあえず穴を覗いてみた。

「えっ？」

穴の中に、奥まで続く通路が見える。

「ハワードおじさん、みちがあるよ！」

「何だつて？」

ハワードは身を屈めて中を確認した。

「本当だ！ こんなもの、いつの間に？」

「ツタンカーメンがやったんだらうね」

キユウが、ハワードの横で穴を覗きながら言った。

「小さな穴なんだからみんな調査をしなかったけど、隠し通路があつたんだな」

「じゃあ、ツタンカーメンはこの中に……？」

ノノは、ハワードの方を見た。

「ハワードおじさんはここでまっつて！ ノノたちがなんとかするよ！」

「待った！ 私も手伝うよ！」

ノノ、勇氣、キユウ、ディアーナが中に入ろうとすると、ハワードがノノの肩を掴んだ。

「ハワードおじさん、ツタンカーメンおにいちゃん、ジャネットおねえちゃんとおなじだよ？」

「だからだよ。元はと言えば、私がツタンカーメンの棺を開けてしまったせいだろうか？」

「ハワードおじさんは、しらなかつたんだよね？」

「知らないからって許されるわけじゃない。そのせいで、みんなが苦しんでいるんだ。」

それに、女子供だけで危険な事をさせるなんて、英国紳士として放っておけないからね」

「ハワードおじさん……」

ハワードは好奇心旺盛なだけでなく、優しく、勇気もある。

「翼ある者、どうせなら彼にも手伝ってもらおう」

「ゆうきおにいちゃん、おねがい！」

「ハワードさん、キュウも『手伝ってもらおう』って言っています！」

「よし勇気君、キュウ君、ディアーナ君、ノノ君、行くぞ！」

「分かったわ。……ジャネット、大丈夫よね」

ハワードは、先陣を切って中に入って行った。

「くらいなあ……」

中は真つ暗で、通路は狭く、あちこち曲がりくねっている。

緩やかな坂になっていて、少しずつ下っているようだ。

「こんな事なら、ランプを持ってくるんだったねえ」

「そうね」

先頭を歩くハワードが今更ながらに言う。

ディアーナには暗視能力があるので、問題なかったが。

「ハワードさん、この道はどこまで続いているんですか？」

「うーん。分からないねえ。どの王の墓の構造とも違うようだ。」

まるで、何かを隠すために、これだけ曲がりくねった通路にしているような気がするねえ」

「何かを？」

勇気はハワードの背中を見ながら、ごくりと唾を飲み込む。

その時、前方にうつすらと明かりが見えた。

勇気、ディアーナ、ノノ、ハワードは同時に身構えた。

「みんな、油断するな」

「分かっている……」

キユウが浮かびながら注意する。

勇気は観光ガイド、ディアーナは双剣を強く握りながら、

ハワードと共に部屋に足を踏み入れた。

「ハハハ……」

そこは、10m四方ほどの空間だった。

壁に松明が取り付けられていて、部屋の中をぼんやりと照らしている。

細かい文字が壁にも天井にもびっしりと刻まれていた。

「これって確か……ヒエログリフ、だよな？」

ヒエログリフは、博物館で見た象形文字だ。

だが、肝心のツタンカーメンはどこにもいなかった。

「何なんだ、この部屋は？ こんな部屋、見た事ないぞ」

「結構荘厳な部屋ね」

「わーい、すごいねー！」

ハワード、ダイアーナ、ノノは未知の部屋を前にして、戸惑いながらも興奮しているようだ。

一方、キユウは壁に刻まれたヒエログリフをじっと見つめていた。

「なるほど、この部屋にはそういう意味があるのか」

「キユウ、もしかしてヒエログリフを読めるの？」

「ああ。どうやら、ツタンカーメンは潜むためにこの部屋に入ったわけじゃない。

元々、この部屋に来る事が目的だったんだ」

「どういう事？」

「ここは、王の復活後の玉座の間らしい」

「復活後の玉座の間……？」

勇気、ダイアーナ、ノノは戸惑いながら部屋を見回した。

「ツタンカーメンは、18歳の時、暗殺されて死んだんだ。

そして、彼が信仰していたものが異端だと見なされて、

後世の王によって、その存在も消されてしまったと言われているんだ」

「ちよつと！ それじゃ、無辜の怪物『Fate』のスキル。後世のイメージで能力や姿が変わる。になるじゃない。そんな訳ないでしょ！」

「……この世界ではそうなんだ」

暗殺された挙句、存在そのものも忘れ去られてしまった。

人間に強い怨みを抱くようになるのも無理がないのかもしれない。

唯一、ディアーナだけはそれを否定していたが、

それは彼女の性善説を表しているのかもしれない。

「ところで、話は変わるけど、この部屋は何なの？」

「恐らくこの部屋は、ツタンカーメンの死後、彼の信者が復活を信じて作った部屋なんだろう」

「でも……こんな薄暗い場所が玉座の間なんて……？」

その時、勇氣は奥の壁にあるものを見つけた。

ヒエログリフの中に、大きな『太陽』と『月』のマークが刻まれていたのだ。

「これって！」

勇気は、右手に嵌めたグローブを見る。

壁に刻まれた二つのマークは、グローブの羅針盤にあるマークとそっくりだった。

「キユウ、どうしてこのマークがここに?」

「マークだって? まさか!」

キユウはハツとすると、勇気、ディアーナ、ノノを見た。

「今すぐこの部屋を出るんだ!」

「え?」

「きゃあ!」

次の瞬間、部屋中のヒエログリフが輝いた。

壁に刻まれた太陽と月のマークも、激しく光り輝く。

次の瞬間、勇気達はその光に飲み込まれた。

「「うわああああ!!!」」

「「きゃああああ!!!」」

6 — ハワードとツタンカーメン

「たたた……」

勇気とディアーナはどこかに着地した。

また、勇気はお尻から落ちてしまった。

傍を見ると、ハワード、キユウ、ノノもいる。

「ハ、ハワードさん、大丈夫ですか？」

「あ、ああ、一体何が起きたんだい？」

「それは、ええつと」

勇気は助けを求めようとキユウの方へ顔を向けた。

「えっ？」

キユウの後ろに、何故か空が広がっている。

三人が周りを確認すると、階段のように積み上げられた石段の上だった。

「……ってまさか！」

「勇気君、ディアーナ君、ノノ君、ここはピラミッドの頂上だよ！」

ハワードが真っ赤な顔で高揚しながら叫んだ。

「わあ、ピラミッドだ！」

「ほらっ、あそこに見えるのはスフィンクス！　ここはギザだ！」

「凄いよ、一瞬で王家の谷から移動したんだ！」

「キユウ、どういう事なの？」

「勇気は、石段から落ちないようにキユウの傍に寄った。」

「ノノは空を飛び、ディアーナは慎重に立っている。」

「どうやら、あの部屋には時空を繋ぐ穴があったようだね」

「それって、時のトンネルの事？　あの太陽と月のマークが関係してるの？」

「っていうか、どうしてあの部屋にマークがあったんだよ？」

「それはまた、いつか詳しく話すよ。残念ながら、今はそれどころじゃない」

「えっ？」

「おい、あれはなんだい？」

突然、ハワードが声を上げ、上空を指差した。

そこには、×印の罫が浮かんでいた。

そしてその近くに、浮遊している影があった。

豪華な前垂れとローブ、頭には縞柄の頭巾を被り、蛇と禿鷲の飾りが取り付けられていて、

顎には棒のような付け髭がある。

「あれって！」

勇氣よりも早くハワードが声を上げた。

「ツタンカーメンだ！」

「アアアアアアアアアアアア」

ハワードの声に反応するかのようになり、ツタンカーメンが叫んだ。

「これが怪なのか？」

ハワードは怯えながらも興奮している。

ツタンカーメンとの戦いが、始まった。

ノノは真つ先に鳥に変身し、翼を羽ばたかせて衝撃波を飛ばす。

だが、ツタンカーメンには、大したダメージを与える事ができない。

「なぜのせいはいよ、みえざるしよ上げきを！ Wind Blast」

「アガア」

ディアーナは呪文を唱えて、強力な衝撃波をツタンカーメンに飛ばした。

ツタンカーメンはまともに攻撃を食らい、逆に苦しんだ。

「今だ！ 勇氣、本を開くんだ！」

「本？」

キユウは勇氣の横に立ち、指示を出した。

勇氣は観光ガイドを持ってしている事を思い出した。

「32ページを開け！」

「わ、分かった！」

勇氣が慌ててページをめくると、黄金のマスクの写真が目飛び込んできた。

「そのページをツタンカーメンに見せるんだ！」

「うん！」

勇氣は開いたページをツタンカーメンに向けようとした。

「クルシメエエエエエエエ」

瞬間、ツタンカーメンが激しく身体を震わせ、身体中から黒い靄が吹き出した。

ノノは翼を飛ばたかせて黒い靄を吹き飛ばす。

攻撃を防がれたのか、ツタンカーメンはノノに向かって襲いかかってきた。

ツタンカーメンはノノの胴体を掴むと、そのまま石段に押し付けた。

「いたい！」

「があっ！」

ノノは集中を切らして人の姿に戻る。

その衝撃で、勇氣が持っていた観光ガイドが落ちてしまう。

黒い霧がハワードを襲い、胸を押さえる。

ハワードはノノの傍へ行こうとするが、胸が苦しく、動く事ができない。

「があ、ああ……」

跪いたハワードの前には、開かれたままになった観光ガイドが落ちている。

「クルシメエエエ、クルシメエエエ」

ツタンカーメンは、ノノを石段に押し付けながら叫び続ける。

その目は怒りに満ち、我を忘れてるように思える。

「クルシメエエエ、クルシメエエエ、クルシメエエエエ」

「やめなさいー!」

ディアーナは風を飛ばし、ノノを掴む腕を無理矢理引き剥がす。

自由になったノノは再び鳥に変身して黒い霧を吹き飛ばすが、このままでは本が取れない。

「クルシメエエエ……クルシメエエエ……ニンゲンドモヨ、クルシメエエエエエエ」

必死でノノは翼を羽ばたかせているが、徐々に疲れが見えてくる。

ツタンカーメンがノノに襲い掛かろうとした、その時。

「やめろ!」

「アアアアア」

ハワードの、悲痛な叫び声が響いた。

「ツタンカーメン、あなたはこんな事をする人じゃない！」

「グ……？」

「私は、10代の頃にあなたの事を知った。そして、あなたの墓を見つけようと人生をかけた」

ハワードはツタンカーメンを睨み、近づく。

「ツタンカーメンなど存在しない……墓などない、とみんなに笑われた。

だけど、私は、あなたがいたと信じた。あなたがいた事を、みんなに知ってほしかった。

だから私は、ここにいるんだ！」

ハワードは、ツタンカーメンの目の前に立つと、持っていた物を突き出した。

それは、勇気が落とした観光ガイドだ。

「私は……間違っていないかった！」

あなたは、あなたは、こんなにも、みんなに愛されるんだ！」

開かれたページには、ツタンカーメンの黄金のマスクの写真が載っていた。

エジプトの博物館で展示されている風景だ。

マスクの前には、数え切れない人達が集まっていた。

皆、ツタンカーメンに注目していた。

「ア、ア、アアア」

瞬間、それを見たツタンカーメンの動きが止まった。

「その人のおかげだ」

ふと、キユウがツタンカーメンに言った。

「あなたは歴史から消された存在だった。だけど、ハワードさんがあなたの墓を見つけ
てくれた。

確かに、あなたは悲劇の王だ。しかし今は違う。

今は、あなたは古代エジプトの歴代の王の中で、最も有名な王なんだ」

「アア、アアアアアアア」

「ツタンカーメン！」

瞬間、ノノが元の姿に戻り、ツタンカーメンが光り輝いた。

ハワードとツタンカーメンは、互いに手を伸ばす。

「ア……………ガ……………ト……………ウ」

その顔は、笑っていた。

次の瞬間、ツタンカーメンは黒い煙になり、風に舞い、消え、罫も消滅した。

勇気達はそれを見つめながら、眩しい光に包まれた。

気がつくくと、勇気達は発掘現場の近くに立っていた。

時刻は夕暮れ時で、作業員達が発掘作業を終え、テントへ戻ってくるころだった。

「さあ、みんな食べてくれ！ 腹が減っては発掘作業はできないからな！」

作業員達に食事を配っているのは、ハワードである。

ハワードの傍には、ジョンもいる。

ジョンは笑顔でハワードの手伝いをしていた。

その様子を、勇気、キユウ、デイアーナ、ノノは岩壁の上から見ている。

「ジョンさん、元気になったみたいだね」

「ああ、見捨里市も元に戻っただろうね」

「よかった。今回はハワードさんがいて、本当に助かったよね」

「すつごい、すつごいひとだったよ」

ハワードがいなければ、あのままツタンカーメンに殺されていたかもしれない。

「そう……だね」

キユウはそう答えながら、ふと、自分の手を見つめ、勇気の肩にそつと手を伸ばす。

しかし、幽霊であるキユウに、勇気を掴む事はできない。

「どうしたの？」

「えっ、いや、何も？」

「さあ、帰ろう。僕、お腹減っちゃった」

「あ、ああ」

勇気、ディアーナ、ノノは屈託なく笑う。

キユウも、優しい笑みを勇気に見せた。

「英雄は、常識では語る事ができない強さがある。だから、怪でもあるのよね？」

「……ああ」

e p i s o d e 2 | W a n d e r i n g C u r s

e s 小さな怪

1 | 夜の路地

夜の0時過ぎ、一人の若い男が、住宅地の路地を歩いていった。

スーツはヨレヨレで、ネクタイは曲がっていて、その顔は疲れ果てていた。

(またこんな時間か……)

今の会社で働き始めて3年。

就職する時、仕事は午後6時に終わると聞いていたが、

今まで一度もその時間で終わったためしがない。

(新しい仕事を探そうかな。けど、今の世の中、新しい仕事なんか簡単に見つからないよなあ)

会社ではいつも上司に怒られていて、後輩にも小馬鹿にされている。

家に帰っても、風呂に入っても寝るだけだ。

明日は休日だが、疲れてしまっていて、どこにも出かける気にならない。

実家で暮らしているので、親が料理を作ってくれる事だけがせめてもの救いだが……。

「もう嫌だ……消えたい」

男が溜息交じりにそう言うと、どこからか、音が聞こえた。聞き覚えのない不気味な音だ。

「何だ？」

男は歩きながら周りを見るが、特に異変はない。

すると、傍の空き地の方から、また音が聞こえた。

先ほどより大きな音だ。

薄暗いのでよく見えないが、音は空き地の中から聞こえているようだ。

男は不思議に思いながら、空き地に足を踏み入れた。

元々この場所には古い家がいくつか建っていたが、取り壊され、マンションが建つ予定らしい。

朝、通りかかった時、建築資材がいくつも置かれていた。

「あれ？」

男は目を凝らしながら、薄暗い空き地の中を見たが、

あれだけあった建築資材が、全てなくなっている。

業者の人が持つて行ったのだらうか。

(だけど、ここですぐ使ったために置いてたんだよな?)

男はそう思いながら、奥へと一步踏み込んだ。

突然、草むらから小鳥が数羽飛び立った。

「うわ、びっくりした!」

男は驚きながらも小鳥を目で追うと、何故か、その小鳥達が一瞬で消えた。

「な、何だよ……」

訳が分からず周囲を見ると、空中に何かが浮かんでいる。

「ひいっ!」

空中に浮かんだ×印状の罅の中から、黒い煙がゆらゆらと揺らめいていた。

男はますます訳が分からなくなったが、それが危険なものだと直感した。

罅に背中を向け、慌てて逃げようとした時、罅の中から大きな音が響いた。

「た……す……」

シュツという音と共に、男の声は途切れた。

しんと静まり返り、空き地には、何も無い。

男は、小鳥と同じように消えてしまった。

その日の建物は、静まり返っていた。

「ジャネットは神妙な面持ちをしている。

「様々な生物が突然失踪する事件が発生しました」

「ジャネットは、今回起こった怪奇現象を、ディアーナとノノに話した。

「犯人は胴だけが異常に太い、蛇のような姿をした魔物、ツチノコ。

高くジャンプし、今まで何人も目撃した人がいますが、捕まえた人はいません。

写真や映像にも撮られた事がなく、まさに伝説の生き物です」

「でも、なんでツチノコさんがいきものをけしちゃうの？」

「分かりません。しかし、一つだけ言える事があります。

それはツチノコがただの魔物ではないという事です」

「どういう事……?」

「その答えを知るためには、あなた達が実際に調査をしてください。ツチノコの正体を

……」

「わ、分かったわ」

そう言つて、ディアーナとノノは、建物を出ていくのだった。

「……フランスで、怪が生まれなければいいのですが……」

ジャネットは建物の中で、顎に手を当てながらそう言つた。

2 — 奇妙な噂

「ねえ、見て見て！」

日曜日の昼間。

勇氣の家に、羽心の明るい声が響いていた。

羽心は書斎にある椅子に座って、勇氣に髭付き眼鏡を見せていた。

「どう？ 一周回ってお洒落でしょ」

「そんなのどこで付けるんだよ」

「もちろん、誕生日会よ。みんな笑ってくれると思うのよ」

羽心は髭付き眼鏡をかけると、笑顔でウィンクした。

来週は、クラスメイトの蒲谷亜衣の誕生日なのだという。

そこで、仲の良い女子達が集まって、誕生日会を開くらしい。

羽心は朝から100円ショップやおもちゃ屋を回って、

会で使うクラッカーやパーティーグッズを買ってきたのだ。

髭付き眼鏡もその一つで、羽心の傍の机の上にはそれらが入った買い物袋が置かれていた。

最近、羽心は亜衣と仲が良く、ネツシー騒動の時も、

亜衣は羽心と同じように怪奇現象に興味を持っていた。

彼女も不思議な話が大好きなので、羽心と相性が良いのだろう。

「だけど、どうして買い物帰りに僕の家に来るんだよ？ オレンジジュースも勝手に飲んでるし」

勇気は、羽心が手にしているオレンジジュースを見た。

「あら、勝手になんか飲んでないわよ。」

おばさんに、いつでもジュース飲んでいいからねって言われてるんだから」

「今、お母さんは仕事でいないだろ」

「いない時も飲んでいいからねって言われてるの。だから大丈夫」

羽心は美味しそうにジュースを飲んだ。

（まったく、どうしていつも僕の家に来るんだよ）

羽心は用もないのに、よく勇気の家に来て来る。

他人のジュースも飲むほど自己中心な羽心に、勇気は呆れていた。

「そうそう、勇気にプレゼントがあるのよね」

羽心は髭付き眼鏡を外すと、買い物袋の中を探って何かを取り出した。

「ジャジャーン！ 可愛いでしょ！」

それは、小さな藁人形のキーホルダーだ。

「何これ？」

「1000円ショップで見つけたの。見習い藁人形のわら夫君って言うのよ。可愛いで

しょよ。」

「可愛い？ これが？」

どう見ても不気味すぎる。

羽心のセンスはよく分らない。

「私も、わら夫君の恋人のわら子ちゃんキーホルダーを買ったんだ。

明日から学校用のリュックに付けるつもり。

だから、勇気もわら夫君をリュックに付けてよね！」

「これを、リュックに？ うん……」

勇気はどう答えればいいのか困り果ててしまった。

「ところで、ちよつと気になる事があるの……」

羽心は、急に真剣な表情になった。

「何、気になる事って？」

「笑わない？」

「う、うん」

「あのね……」

羽心は一瞬言うのを躊躇ためらうような素振りを見せながらも、言葉が続けた。

「空中に浮かぶ、変な罅を見たような気がするの」

「えっ!」

勇気の脳裏に、あの×印状の罅が思い浮かんだ。

また、罅が現れたのだろうか。

すると、羽心は困惑したような表情を浮かべた。

「だけど、いつ見たのか全然思い出せないの」

「どういう事?」

「見たような気はするんだけど、それがいつ、どこで見たのかは記憶にないの」

「記憶に、ない……?」

羽心は、以前怪奇現象が起きた時に見た罅について、かすかに覚えているようだ。

怪が消えれば、その怪が起こした全ての事が人々の記憶から消えるはずなのに、

羽心の記憶の中に残っている。

勇気が戸惑い、何も言えずにいると、羽心が苦々しい表情になった。

「私の事、呆れてるでしょ?」

「えっ、いや、そういうわけじゃないけど」

説明するにはあまりにもややこしすぎるため、適当にやり過ぎすしかない。

「多分、羽心はオカルト系の本の見すぎなんだよ。」

ほら、この藁人形だって、普通の6年生だったら喜んで買ったたりしないしき」

勇気は無理矢理話題を変えようと、藁人形のキーホルダーを見ながら笑った。

「!?」

突然、大きな音が響いた。

見ると、羽心が机を叩いて立ち上がっていた。

「真剣に話して損した!」

「う、羽心?」

「どうせ私はオカルトオタクよ。センスもないわよ。」

悪かったわねえ、変なキーホルダーもプレゼントしちゃって!」

「え、えっと」

「ジュースも勝手に飲んじゃってごめんなさいね!」

っていうか、家に勝手に来ちゃって悪かったわね!」

「あの、羽心」

「もういい! 私、帰る!!」

羽心は書斎のドアを勢いよく開けると、玄関へと歩いて行った。

「あつ、ちよつと！」

勇氣は慌てて羽心を追いかけるが、羽心はそのまま外へ出て行ってしまふ。

羽心は一度も振り返る事なく、道路の角を曲がって行った。

「何なんだよ……」

さつきまで機嫌がよかつたのに、急に怒り出してしまった。

羽心の気持ちが出来ない。

勇氣は目の前で立ち尽くしながら、呆然となっていた。

「いなくなつた?！」

ふと、すぐ横の道路から声がした。

振り返ると、近所のおばさん達が何やら神妙な面持ちで立ち話をしている。

「ええ、家に帰つてこなかつたらしいよ」

「スマホも全く通じないらしいわ」

「流石に、それは心配ね」

「あの、どうしたんですか?」

勇氣は、話の内容が気になり、おばさん達に声をかけた。

「あら、勇氣君、こんにちは」

最も親しくしている田中さんが、勇氣の方を見た。

「それが大変なのよ。高橋さんの息子さんが、急にいなくなつたんですって」
「ええ?」

高橋さんは確か、隣の地区に住んでいる若い男性だ。

話した事はないが、朝の通学路でよく見かけるので顔だけは知っている。
ヨレヨレのスーツを着て、疲れ切った表情をしているのが印象的だった。

「息子さん、仕事の事で悩んでたそうよ」

「毎日遅くまで働いてたんでしょ?」

「仕事が嫌になつて、家出でもしたんじゃないかしら?」

田中さんがそう言うと、他のおばさん達が大きく頷いた。

「家出かあ……」

大人でも、家出をする事があるのだろうか。

羽心のコロコロ変わる気持ちと同じように、勇氣にはよく分からない。

勇氣は、おばさん達に挨拶をすると、家へ戻る事にした。

「あれ、ディアーナに、ノノ? 何をしてたんだ?」

玄関の前には、金髪の女性ディアーナと銀髪の少女ノノが立っていた。

「あたし、失踪事件を調査していたの。……つたく、あの自己中女め」

「自己中女って、羽心の事?」

「そうよ」

「それはやめろ！」

ディアーナに羽心を自己中と言われて、勇気は珍しく怒った。

幼馴染を侮辱されるのは、流石の彼も腹が立った。

「ごめんなさい」

「許すよ。……ところで、失踪って何？」

「突然、いなくなる事よ」

「あと、こうえんにいたことりさんも、いなくなっちゃったんだ」

「小鳥も……？」

高橋さんだけではなく、小鳥も消えてしまった。

勇気は家出だと思っていたが、ディアーナが「失踪」と言った事に、首を傾げる。

「とにかく、話は書齋に入ってからにしよう」

「ええ。彼も待っているから……」

「いたわ」

「キユウ！」

書齋のドアの向こうには、予想通り、キユウが立っていた。

3 — 可愛い怪

「キユウ、急にどうしたの？」

「僕が君達の前に現れる理由は一つしかないだろう」

「それって……」

勇気はキユウを見つめた。

「高橋さんは、怪の力に襲われたんだ——」

その言葉に、勇気の身体が強張る。

怪は、いつ襲ってくるか全く予想がつかない。

今回は完全に油断していた。

「犯人は分かっているわ」

「ことりさんをたすけなきゃ」

「……ダイアーナ……ノノ……」

ダイアーナとノノには、分かっていたらしい。

「さあ、行くよ」

キユウは書齋の壁の前に向かうと、グローブを嵌めた左手をかざそうとした。

「ちよつと、待つてよ！　まだ心の準備ができてないよ！
つていうか、どういう怪なのか教えてよ！」

勇気はキユウの傍に駆け寄った。

「あー、今回は今までで一番小さな怪だよ。兎ぐらいかな。
見た目もまあ、可愛いと言えば可愛いかもしれないね」

「可愛い……？」

勇気は、雪女のお雪の顔を思い出した。

「大きさは兎ぐらいなんだよね？」

そんな怪はいただろうか？

勇気は、読んだ怪奇現象の本の内容を思い出そうとした。

「まつ、どんな怪かは実際に会ってからののお楽しみだね。エルフ達は知ってるだろうけど。」

ところで、今回は怪を倒すためにちよつどいい物を、羽心ちゃんが買ってきてくれた
ようだ」

キユウはそう言うと、机の上を見た。

そこには、買い物袋が置かれている。

「あつ、急に怒っちゃったから」

「どうやら、羽心は頭に血が上り、買い物袋を持って帰るのを忘れてしまったようだ。」

「その中に、缶が入っているだろう。今回はそれが役に立ちそうだ」

「缶？」

「勇気が袋の中を見てみると、『ヘリウムガス』と書かれた缶が入っていた。」

「これって何なの？」

「何だい、ヘリウムガスを知らないのかい？」

「ええっと、理科の授業で先生が言ってたような気もするけど、うーん……」

「勇気は思い出す事ができず、首を捻った。」

すると、ノノが明るい声でこう言った。

「ヘリウムガスすいこんだらへんなこえになるし、ふわふわくらむよ」

「そ、そうか……」

「勇気はとりあえずポケットからグローブを取り出して右手に嵌めると、」

「缶をしっかりと握り締めた。」

「準備はいいようだね。さあ、怪を倒しに行くよ。——怪狩りの時間だ！」

「キユウはグローブを嵌めた左手を壁の前にかざして、呪文を唱えた。」

「カオスゲート
時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

勇気は慌てて部屋に置いていた靴を持つ。

「ディアーナ、ノノ、キユウに続いて、勇気も光の渦の中に飛び込んだ。
「んんんん！」

光のトンネルの中を飛んでいく。

やがて、光のトンネルの奥に、森が見えてきた。

「やああつ！」

勇気は今度こそ尻もちをつかないようにとバランスを取った。

「よし」

「やったあ！」

勇気、ディアーナ、ノノは、茂みの上に見事に着地する。

「やった！ やったよ、キユウ！」

勇気はキユウに向かって笑顔でピースした。

「そんな事で喜んでる場合じゃないよ」

「いいだろ、初めて上手く着地できたんだから！」

勇気は満面の笑みで周りを見た。

そこは、山の麓の野原で、野原の向こうに広場が見える。

広場には、大勢の人達が集まっていた。

「なにしてるんだろう?」

100人以上はいるようだ。

家族連れが多く、皆、リュックを背負っていて虫取り網を持っていた。

屋台もいくつも出ていて賑わっている。

「こんなところでお祭りかな……?」

「それなら、たのしそうだね」

勇気はそう言いながら、ふと、ある事に気づいた。

「ここって、日本だよな? だけど……」

皆、馴染みのある顔つきをしているが、勇気は違和感を覚えた。

日本で間違いなさそうだが、彼らの着ている服がどれも古めかしかつたのだ。

ディアーナとノノは、楽しそうな様子で周りを見渡している。

「そう、ここは日本だよ。だけど、君の知っている時代じゃない」

「どういう事?」

「ここは、昭和50年……1975年の日本なんだ」

「ええ、40年以上も昔なの?」

道理で、皆の服装が少し今と違うはずだ。

「何だか僕、凄い体験をしているような……」

「今更、何を言ってるのよ。あなた、紀元前や日本の江戸時代にも行ったじゃない」

「それはそうだけど、今まで行ったところはあまりにも自分の時代とは違ってたからね。」

40年以上前の日本って言われると、何だかりアルに昔だなーって思ってた。40年以上前と言えば、両親が生まれるより前だ。

広場にいる子供達が両親より年上だと思うと、妙な気持ちになった。

「ところで、怪はこの時代にいるんだよね？ 君が言うなら正しいけど……」

キユウは、小さな怪だと言っていた。

40年以上前の日本にそんな怪がいたなど信じられないが、放っておく事はできない。い。

勇気はヘリウムガスの缶を構えると、いつでもスプレーを噴射できるように準備をした。

ディアーナも双剣を構えている。

「みんな！ 絶対に捕まえたいかー！」

その時、広場の方から声がした。

皆の前で、中年男性が拡声器越しに叫んでいる。

「みんな、用意はいいかー！」

「オー！」

「今日で伝説が本物になるぞ！」

「オー！」

「みんな、気合いを入れろ！ 絶対にツチノコを捕まえるぞー！」

「オオー！」

広場から歓声が上がる。

勇気、ディアーナ、ノノは中年男性の言葉を聞き、目を大きく見開いていた。

「ツチノコって、あのツチノコ、だよね……？」

「そうよ」

勇気は、父親の書齋にあった本で、それを読んだ事があった。

小さい怪というのは、ツチノコの事だったのだ。

「だけど、あの人は何してるの？」

広場にいる人達は、ツチノコの調査をしようとする研究員なのだろうか？

それにしても、家族連れが多い。

「あれは、ツチノコを捕まえるイベントに集まった人達だよ。

昭和40年代後半から50年代の最初にかけて、

ツチノコを探すのが日本中で大ブームになったんだ」

「大ブーム？」

「ああ。テレビや雑誌でツチノコがよく取り上げられるようになってね。

毎月のように日本のどこかで、ツチノコを捕まえるイベントが行われたんだよ」

「すごいねー」

勇気とノノは、まじまじと広場に集まっている人達を見つめた。

すると、キユウが浮いたまま動き始めた。

「彼らより早く、ツチノコを見つけないとね」

「え、あ、そうだよね」

彼らに捕まえられてしまったのは、面倒な事になりそうだ。

勇気、ディアーナ、ノノは、キユウと共に、山の中へ入って行った。

4 — 三人の若者

山の中は、鬱蒼とした木々が生いていた。

勇氣とダイアーナはキユウと共に歩き続け、ノノは羽が周囲を舞いながら、空を飛んでいる。

もう1時間近く経った。

山道はなくなり、勇氣は方向もよく分からないままに、茂みの中を進んでいた。

「ねえ、キユウおにいちゃん、ツチノコはどこにいるの?」

ノノは、前方をプカプカと浮かぶキユウに尋ねる。

「うーん、もう少し奥かもしれないね」

「ほんと?」

「あれだけ人が来たんだ。怖くて奥へ逃げたんだよ。ツチノコは本来、気が弱い怪だからね」

「もじがあかい。ほんとのこと?」

キユウの言葉に、ノノは何か引つかかった。

突然、茂みが激しく揺れた。

「うわあっ!」

「きやあ!」

勇気は怪が現れたのだと思い、とつさにガス缶を構える。

ディアーナもレイピアに手をかける。

しかし、そこにいたのは、ジーンズ姿の男性二人と女性一人だった。

三人は皆、虫取り網を持っている。

ツチノコのイベントに参加している人達のようなだ。

「ねえ、君、この辺りで、眼鏡をかけた男性を見なかったかな?」

長髪の男性が、ディアーナに尋ねる。

「え? 見えないわよ」

森に入った直後は、ツチノコを探す人達を何人も見かけたが、

奥へと進むにつれて、誰も見かけなくなっていた。

「ちよつと、隆志君、どうするのよ?」

「お前が奥まで行ってみようとて言ったせいだぞ!」

赤いヘアピンをつけた女性と、体格のいい男性が、隆志という名の長髪の男性に怒る。

「とにかく、正太郎を探さなきゃ」

「探す? あの、一体どうしたんですか?」

勇氣は、隆志達から話を聞く事にした。

彼らは、この山の近くにある大学に通う大学生だった。

以前から、山ではツチノコらしい生き物がたびたび目撃されていたらしい。

そこで、町を挙げてイベントが行われる事になり、彼らも参加する事にしたのだが、いくら探しても、ツチノコは見つからなかった。

そこで、隆志が森の奥へ行ってみようと言出し、みんなでここまでやって来たと言
う。

「だけど、一番後ろを歩いていた正太郎が、気づいたらいなくなつてて」

「迷子になつたつて事か」

（いや、違うわね……）

隆志は、困惑した表情を浮かべながら言った。

しかし、ディアーナは気付いていた——正太郎は怪奇現象に巻き込まれた事に。
勇氣とディアーナは周りの茂みを見る。

山道がないので、今自分がどこにいるのかもよく分からない。

途中で皆とはぐれたら、迷子になってしまうだろう。

「じゃあ、電話を試してみたらいいんじゃないですか？」

勇氣はそう提案したが、それを聞いた隆志達はキョトンとしていた。

「こんなところで、どうやって電話なんかするんだよ？」

「それはもちろんスマホで」

「スマホ？」

隆志達はさらにキョトンとした顔になった。

「この時代にはスマホなんてないよ」

浮かびながら話を聞いていたキユウが口を挟む。

また、時代の壁が立ち塞がった。

昔は携帯機がなく、誰かと電話で話す時は、取り付けられた固定電話を使っていたのだ。

「40年以上前って、やっぱり凄い昔だよねえ」

「アルカディアには時代の壁なんてなかったのに……」

「ノノたちは、おはなしできるけど……」

勇気は改めて昭和50年という時代にショックを受け、ディアーナとノノは溜息をついた。

一方、キユウは顎に手を当てて、隆志達をじつと見ていた。

「迷子か……」

キユウは何かを思うと、勇気の方を見た。

「彼らに、正太郎さんがいなくなった場所に連れて行ってもらうんだ」

「正太郎さんを探すって事？」

今は、ツチノコを探す方が先決ではないだろうか？

だが、正太郎の事も心配だ。

「キユウって優しいところもあるんだね！」

キユウの意外な一面を知り、勇気は嬉しくなる。

勇気、デИАーナ、ノノは早速、隆志達にその場に連れて行ってもらう事にした。

「アハハ」

勇気、デИАーナ、ノノは、隆志達と共に、5分ほど歩いた場所にやって来た。

茂みと木々だらけで、他とあまり変わらない場所だが、近くに大きな岩がある。

「ちようど、あの岩で休憩しようと思ったら、正太郎がいなくなってたんだ」

隆志がそう言うと、女性が話を続けた。

「私、休憩する1分ぐらい前まで、正太郎君と話をしてたのよ。」

ほんの一瞬目を離れた隙にいなくなっちゃったの」

どうやら、正太郎は突然消えるようにいなくなったらしい。

「勇気、この辺りをくまなく調べるんだ。エルフと翼ある者も、だぞ」

「わかった！」

「嫌だわ」

勇気とノノはとりあえず、隆志達と辺りを調べる事にした。

「正太郎さ〜ん、いますか〜？ 返事をしてください〜い！」

「しようたろうさ〜ん!!」

勇気とノノは辺りを歩きながら、正太郎に呼びかけ続けた。

隆志達もそれぞれ少しずつ離れ、同じように名前を呼んでいた。

しかし、返事はなく、勇気達の声は、鬱蒼と生い茂る木々の中に空しく響くだけだった。

「もしかして、一人で山を下りたのかも」

迷子になったのなら、それも考えられるだろう。

隆志は隣にいる体格のいい男性と、山を下りるかどうか相談し始めた。

「ねえ、これ！」

「それって正太郎の！」

突然、少し離れた場所にいた女性が、黒縁眼鏡を持って声を上げた。

隆志と体格のいい男性が女性の元へ走り、勇気も慌ててディアーナと共に駆け寄った。

「ここに落ちてたの！」

女性は地面を指差すが、勇氣はその地面を見て首を傾げた。

山の中はどこも雑草が生い茂っているが、女性が指差した地面だけは、まるで雑草が抜かれたように、茶色い土が剥き出しになっていたのだ。

「やはりそうか……」

「どういう事なの？」

勇氣はキユウに原因を聞こうとした。

その瞬間、音と共に、女性が突然、目の前から消えた。

5 — 不気味な音

「真美ちゃん！」

女性が消えた事に気づいた隆志達は、慌てて辺りを探した。

「そんな！」

「あー！」

ディアーナは女性が立っていた場所を見る。

すると、新たに雑草が抜かれたように、茶色い土が剥き出しになっていた。

「一体、どうしてなの？」

剥き出しの土の上には、赤いヘアピンとベルトが落ちている。

「まさかこれって、あの子の？」

ディアーナがキユウの方を見ると、彼は大きく頷いた。

「気をつける。ツチノコがこの近くにいます！」

「かかってきなさい！」

ディアーナは双剣を構える。

すると、茂みの奥から、不気味な音がした。

「わっ！」

「うわ、あああ！」

次の瞬間、突如木々が激しく揺れ、傍にいた体格のいい男性がバランスを崩した。

男性の周りの草木が抜け、茂みの外へと飛んで行く。

「た、助けて！ うわあああ！」

男性がそこから離れようとすると、男性の姿が消えた。

それを見て、隆志はパニックになり、その場に尻もちをついた。

「お兄さん、立って！」

勇気は隆志を立たせようとするが、隆志は怯えてしまい、動かない。

「勇気、その人はもういい！ 今は自分の身を守る事が先決だ！」

キユウが叫ぶように言うが、勇気は大きく首を横に振った。

「お兄さんを助ける方が先決だろ！」

「ネツシーの時もそうだったわ！」

勇気とディアーナはそう言うのと、隆志を何とか立たせようとした。

ディアーナも武器をしまう。

キユウは勇気とディアーナをじっと見つめる。

勇気とディアーナは隆志に必死に声をかけていた。

「立ちなさい！」

「な、何がどうなってるんだ?？」

「いいから！ 立って！」

「俺達は、ただツチノコを捕まえに来ただけぞ！」

「いいから！」

「このままじゃあなた、消えるわよ！」

「消える!? そ、そんなの嫌だ！」

その言葉に、隆志の表情が一変した。

隆志は立ち上がると、勇気とディアーナを放つてその場から逃げ出した。

「あ、待って！ ひいいい！」

二人が追いかけてようとすると、再び後ろから音が響いた。

瞬間、隆志が引つ張られるように茂みの奥へ飛んで行き、消えた。

「お兄さん！」

「これだから人間は！」

「三人とも、横に飛べ！」

キュウが叫ぶ。

勇気は訳も分からず、ディアーナ、ノノと共に横に飛んだ。

三人が今までいた場所にあった木が、轟音と共に揺れ動く。そのまま、木は地面から抜け、茂みの奥へと飛んで行った。

「何これ？」

「じつとしていたらツチノコに飲み込まれるぞ！」

「飲み込まれる?」

奥の茂みが大きく揺れた。

何かが、こちらに近づいてきている。

ダイアーナは、目を凝らして茂みを見つめた。

茂みの中を、兎のような小さな物体が跳ねながら動いていた。

だんだん高く跳ねる。

3 m、いや、5 mは跳ねている。

次の瞬間、その小さな物体が、三人の傍に着地した。

蛇のような生き物で、身体は丸みを帯びていて、

黒目はクリクリとしているが、胴だけが異常に太い。

「これが……ツチノコね」

想像していた以上に、小さくて可愛い。

勇気は何か肩透かしにあったような気がして、一瞬気が緩んだ。

「逃げろ！」

キウウが叫ぶと同時に、ツチノコが口を大きく開けた。

「わっ！」

勇気、ディアーナ、ノノは咄嗟に横へ逃げる。

三人の立っていた場所の草木が激しく揺れ動き、草木が剥ぎ取られるように地面から抜けると、

一瞬でツチノコの口の中へと消えて行った。

「ツチノコの先制攻撃ね」

「嘘っ？ え、今、ツチノコが吸い込んだの？」

信じられない光景に、勇気とノノは目を疑った。

流石のディアーナも、驚きを隠せない。

「逃げるんだ！」

「駄目！ まずはおたしとノノが食い止める！ あたしは逃げも隠れもしないわ！」

「ノノ、がんばる！」

「ちよ、ちよつと待ってえ!!」

勇気、ディアーナ、ノノは、ツチノコに勝負を挑んだ。

「♪♪♪♪♪」

ノノは鳥に変身し、歌を歌ってツチノコの戦意を喪失させようとする。だが、ツチノコにノノの歌は効かなかつた。

「かぜのせいはいよ、みえざるしようげきを！ Wind Blast」

ディアーナは呪文を唱えて、風の衝撃波をツチノコに向けて飛ばす。

攻撃を食らつたツチノコは、いとも簡単に吹っ飛んでいった。

「こつちだ、ツチノコ！」

勇気はツチノコをおびき寄せるが、それが逆にツチノコの怒りを買う。

ツチノコが勇気達を吸い込もうとした瞬間、

ディアーナは風を飛ばしてツチノコを吹っ飛ばした。

その後、勇気は無我夢中で走り出し、ディアーナとノノも離れた。

「まったくもう、どうして逃げたり、隠れたりするのよ！」

「僕は普通の人間なんだよ！ ツチノコには真つ向から挑めないんだよ！」

「はあ……これだから人間は……」

6 — 立ち向かえ

勇気とダイアーナは森の中を必死に走り、ノノは空を飛ぶ。

ツチノコは、ピヨンピヨンと跳ねながら三人を追いかけていた。

思った以上にスピードが速い。

(このままじゃ、僕達は……)

男性達はかなり離れた場所にいたにも関わらず、ツチノコに吸われて飲み込まれてしまった。

あんな小さな身体なのに、恐ろしい消化力があるらしい。

このままでは、同じように飲み込まれてしまう。

勇気は恐怖を感じ、みるみる顔が青ざめていった。

ダイアーナとノノの表情が険しくなる。

「来るぞー！」

キユウが横を飛びながら声を上げた。

後ろを見ると、ツチノコがピヨンピヨンと跳ねながら口を大きく開けている。

「やばいー！」

「あたし達に任せて！」

ツチノコが口を開けて、ディアーナを吸い込もうとすると、
ノノが翼を羽ばたかせてツチノコを吹き飛ばす。

「でいやああああああああ!!」

ディアーナが飛び上がり、風を纏った双剣を勢いよくツチノコに振り下ろす。
ツチノコの身体は真つ二つになった。

「やった！」

「……まだ油断は禁物よ！」

真つ二つになったツチノコの身体が再生する。

そして再び、ツチノコは襲い掛かってきた。

ツチノコは、闇雲に勇気達を追っているわけではなさそうだ。

狙いを定めて、飲み込むチャンスを伺っているのだ。

後ろで、ツチノコが空気を吸う音が響く。

すると、勇気の目にあるものが映った。

それは、大きな岩だった。

勇気達は気づかないうちに、先ほど隆志達といた場所に戻って来ていたのだ。

「そうだ、あそこなら！」

勇氣は慌てて岩の陰に隠れた。

「ちよつと、何隠れてるのよ！」

「だから、僕は君達と違つて、まともに戦う力なんてないんだよ！」

「それにしても、ツチノコがあんなに凶暴になるとは予想外だよ」

「ふ、普段はあんなんじゃないの？」

「ああ、元々は気が弱い怪だ。だけど、人間が捕まえようとしたから怒ってるんだろう」

「そんな……」

「このままでは、勇氣が飲み込まれるのも時間の問題だ。」

「なあに、大丈夫よ。あたしの劍捌き、見た？」

「う、うん……」

鳥に変身したノノが翼をはためかせる。

ディアーナとノノの派手な戦いに、勇氣は感心した。

しかし、強いとはいえ、女性二人だけでは心許ないと勇氣は思った。

「そうだ！ ツチノコを倒す方法を、キユウが思いついたわよ！」

「勇氣、これを」

キユウは、勇氣が持っているヘリウムガスの缶を見た。

「これでどうやって……？」

「ツチノコは、一度吸い込んだものを吐き出せない。

だから最初はヘリウムガスを吸わせれば、ツチノコを上空へ飛ばして倒せると思ったんだ」

「だけど、ツチノコは木とか人とかも吸ってたよ?」

「僕の思っていた以上にツチノコの胃袋は異次元に大きいようだ。

エルフと翼ある者の攻撃もツチノコにはあまり効果がなかったし、ヘリウムガスでとどめを刺すのは不可能だろう。全く笑えないね」

「えええ? 笑えないのはこっちだよ! それじゃあ、どうするんだよ?」

「勇気、人生なんて常に予想外なものだ。だけど、諦めなければ道は開ける。

今回はラッキーだったよ。その缶があるからね」

「ヘリウムガスじゃ倒せないんでしょ? じゃあ、何? 缶で殴って倒すとも言うの?」

「あたしじゃないんだから」

「違うよ、その缶をツチノコに飲み込ませるんだ」

「飲み込ませる……?」

勇気は、キユウの言っている事が全く理解できなかった。

そんな勇気に、キユウは話を続けた。

「ツチノコは、眼鏡やヘアピンやベルトを飲み込まなかつたし、あのエルフの剣は効果的だった。」

それは、どうしてだと思おう？」

「どうしてって、それは、ええつと……」

「恐らく、ツチノコは金属を消化できないんだよ。つまり、金属が弱点という事だ」

「あつ！」

勇気は持つている缶を見つめた。

まさに、缶は金属の塊だ。

「チャンスはたった一度だ。失敗したら、君はツチノコに飲み込まれてしまうだろう」

「たった一度？ 僕、そういうの凄く弱いんだけど！」

「あなた、一般人だしね」

「弱いとか強いとかの問題じゃない。これは、勇気、君にしかできない事だ！」

「僕にしか、できない……」

勇気は唾を飲み込む。

缶をツチノコに飲み込ませる事ができるのは、今この場に一人しかいない。

「わ、分かった。僕、やるよ」

勇気は意を決し、ゆっくりと立ち上がると、茂みの方を見た。

「ツチノコ！ 僕はここだー！」

勇氣は恐怖を押し殺しながら、岩の前に立った。

ヘリウムガスの缶は、身体の後ろに隠している。

ツチノコがピョンピョンと跳ねながら近づいてくる。

そして、勇氣の前に着地した。

「チー、チー」

ツチノコが勇氣を睨む。

勇氣は恐怖を感じながらも、目を逸らすまいと、ツチノコを睨み返した。

風が勇氣とツチノコの間を吹き抜ける。

草が宙を舞い、ツチノコを見つめる勇氣の視線を一瞬邪魔した。

その瞬間、ツチノコが口を大きく開けた。

「うあつー！」

勇氣は避けるのが僅かに遅れ、物凄い勢いで身体を引っ張られた。

「ああつ、勇氣！」

キユウは失敗したのだと思い、叫ぶ。

だが、勇氣はバランスを崩しそうになりながらも、

必死に目を大きく見開き、ツチノコを見ていた。

「僕は……僕は、真之勇氣だ!!」

勇氣は持つていたヘリウムガスの缶を、ツチノコに向かって投げつけた。ツチノコの口の中に缶が飲み込まれる。

勇氣は、転がりながらも岩にしがみつく。

「勇氣!」

「ツチノコは?」

キユウが傍に飛んできた。

勇氣は、あちこちすり傷だらけの身体を起こして、ツチノコの方を見た。

「チイチイイイイイ!」

ツチノコはもがいていた。

腹を見せてひっくり返ると、バタバタとのたうち回る。

金属を飲み込んでしまい、苦しんでいたのだ。

「チチー、チー、チイイイ!」

ツチノコの弱々しい鳴き声が響き、やがて動かなくなった。

黒い煙が辺りに飛び散り、ツチノコは消えてしまった。

7 — 勇気の思い

山の麓の広場には、イベントに参加していた人達が戻って来ていた。

結局、誰もツチノコを捕まえる事ができなかったようだ。

「あゝあ、結構期待してたんだけどなあ」

「俺、ツチノコ捕まえたら、有名人になれると思っただけどなく」

隆志が黒縁眼鏡の男性、正太郎にそう言う。

他の人達も傍で笑っていた。

勇気はキユウ、ディアーナ、ノノと共に、少し離れた場所からそんな彼らを見ていた。

「今回は弱点に気づけてよかったよ。怪は分からない事が多いからね」

キユウがそう言いながら微笑んだ。

しかし、ノノは何故か浮かない顔をしていた。

「どうしたんだい？」

「ツチノコさん、かわいそう……」

「可哀想？」

キユウが首を傾げると、ノノはキユウを見た。

「キユウおにいちやんがいったよね、ツチノコはもともときのよわいかいだって。それなのに、みんながつかまえようとしたからおこったって」

勇気達は広場にいる人達を見つめた。

「みんな、またツチノコを捕まえに来ようとしてるけど、それって何か間違っているような気がするんだ……」

「勇気……」

キユウは勇気の言葉に驚いたが、小さく頷いた。

「確かに、相手の気持ちを考えるのは大切な事だよ。それがたとえ怪でもね」
「相手の気持ち……」

そこに、人も怪も、そして妖精も関係ないのかもしれない。

そう思いながら、勇気はふと、羽心の事を思い出した。

(僕、羽心に酷い事を……)

朝、見捨里市の一日が始まる。

羽心は溜息をつきながら、道路を歩いていた。

「おはよう！」

「え、え、おはよ……」

後ろから声がする。

立ち止まって後ろを見ると、勇気が立っていた。

羽心は少し苛立ちながら、適当に挨拶を返した。

「誕生日会のグッズ、家に忘れてたよ」

「あ、ああ、そうだったわね。またその内に取りに行くわ」

羽心はさっさと学校へ向かおうと歩き出した。

「今日来たらいいだろ？」

「えっ？ あっ！」

思わぬ返答に、羽心は勇気の方を見た。

勇気のリュックに、藁人形のキーホルダーがついている。

「それ！」

「あく、よく見ると凄くいいなあ、って思っただけ。羽心、ありがと！」

「勇気……」

羽心の口元が思わず綻ぶ。

「もう、やっとその良さに気づいたの？」

羽心は、いつものような明るい表情に戻った。

「ホント、勇気ってセンスっていうものが分かってないわよねえ」

「何だよ！」

「センスがあつたら、わら夫君の良さにすぐに気づくはずでしょ！」
羽心はそう言うと、笑いながら歩いて行った。

「あ、ちよつと！」

勇気はそんな羽心を慌てて追う。

二人のリユツクには、似たようなキーホルダーが付いていた。

二つのキーホルダーは仲良く揺れていた。

「人間とは異質な存在であれば、例外なく怪となる。

それがどんなに優しく、争いを好まない性質でも」

「キユウ……」

やはり、この世界では、人間と怪は共存ができなさそうだ。

ディアーナは悲しさのあまり、涙を流すのだった。

episode 2 | Wandering Circus

e 幕間

黒マントの紳士と聖少女

「ねえ、ジャネット！ 次に出てくる怪は誰？」

路地裏の建物の中で、ディアーナはジャネットに次の怪について聞こうとしていた。すると、ジャネットはいつになく真剣な表情になり、じつとディアーナの顔を見つめた。

そして、ディアーナに向かって静かにこう言った。

「あなたは留守番をしてください」

「え？ ど、どうして？」

「その怪と遭遇した時、あなたは他人に迷惑をかける事でしょう。何も悪い事は言いません。」

今日はノノ一人だけで行きなさい」

「ジャネットおねえちゃん！ ノノひとりには、こわくていやだよ！」

ノノは泣きながらジャネットに抱き着く。
ジャネットは優しく、ノノの頭を撫でた。

「あたしが迷惑をかけるって、どういう事？」

「その怪は……あなたの心を乱すから……」

「……？」

ディアーナには訳が分からなかった。

だが、ジャネットはディアーナを行かせたがらないようだ。

ディアーナは納得がいかず、ジャネットに言った。

「なんでよ！　なんで、あたしだけ行っちゃいけないのよ！」

それに、ノノ一人じゃ彼女が可哀想よ！　あたしも一緒に行くわ！」

「……分かりました。ただし、絶対に落ち着いてくださいね」

「はい」

ジャネットは渋々、ディアーナとノノを調査に向かわせるのだった。

そして……。

「キイキイ！　キ、キイ、キイー！」

石造りの天井の隅の暗がり、蝙蝠が鳴いている。

ランプと蝋燭、そして壁に作り付けられた暖炉の炎に照らされた大広間。

ここは西洋の大きな城の中だ。

片目を包帯で隠した少年が、この城主を訪ねてきていた。少年を描き入れた城主が奥に引っ込んだのは数分前だった。

全身黒ずくめの、オールバックが特徴的な男が戻ってきた。

羽織った黒マントの裾が広がり、まるで大きな蝙蝠のようだ。

少年は椅子からすつと立ち上がった。

鋭い眼光で堂々と歩き、少年の顔のテーブルに、何かを置くために手を伸ばした。

しかしその手も顔も、血の気のない死人のように青白かった。

「君の相談を受けてから、これが必要だろうと思つてね」

テーブルに置かれたのは、黒い鈴である。

少年は目を見張った。

「これは、初めて見ました」

「私は君の何百倍も生きています。何しろ私は伯爵だ。手に入らないものはない」

「はい。ですから、協力をお願いしたのです」

伯爵は奇妙な表情で、少年の片方だけの目をじつと覗き込んだ。

「……なんとも不思議だ」

「何がですか？」

「君の賢さは少年とは思えない」

「とんでもないです。あなたを尊敬する単なる少年です」

少年は畏まって頭を垂れた。

少年の自分への敬意に、紳士は満足して微笑んだ。

「とにかく、私に任せたまえ」

紳士はマントを軽く翻すと、

テーブルの端に置かれた赤い液体の入っている純金の杯を手にした。

「勇気という子と一緒にいる幽霊を、私が抹殺する。間違いなく約束するよ」

「お願いします」

前祝いといわんばかりに、乾杯の要領で純金の杯を頭上に掲げる。

少年は再び頭を下げた。

「心配するな」

紳士は頷くと、赤い液体をグイと一気に飲み干した。

「君のおかげで、こんなものより新鮮で美味しいものが幾らでも飲めるようになる」

喜びがこみ上げ、微笑みは高らかな笑いとなった。

「はははっ、ははははははっ！」

地獄から響くような笑い声が大広間にこだまする。

赤く染まった伯爵の口から牙が見えた。

頭を下げたままの少年は、そんな伯爵をチラリと見る。

「期待してますよ。怪の伯爵さん」

そう呟くと、冷たい笑みを口元に浮かべた。

episode 2 | Wandering Curs

e 3 怪の伯爵

1 | 図書室にて

見捨里小学校は、平穏な夕陽に包まれていた。

勇気はいつもならば家に帰っている時間だが、図書室で本の整理をしている。

クラスメイトで図書委員の桐谷きりたにかれん花恋に手伝いを頼まれたからだ。

今日は図書室の整理の日だが、もう一人の図書委員が体調不良で休んだのだ。

最初、花恋は仲の良い羽心に声をかけたらしいが、

羽心は他の小学校の友達と作っている『UFO研究会』の会合で断った。

「勇気に頼んでみなさいよ。」

今日はお母さんが夜勤だから一人でのんびりジグソーパズルを完成させるって言うてたわよ。

ジグソーパズルより図書室の整理の方が大事だからね」

そう羽心が提案したので、花恋は勇気を選んだのだ。

(なんで、僕の予定を羽心に仕切られないといけないの……)

花恋からその話を聞かされて、勇気はムツとした。

しかし優しい花恋の頼みを断るのは気が引けた。

かくして、勇気が手伝う事になり、花恋に指示された方法で本の整理をしていた。

「本当にごめんね」

勇気の脇で整理をしている花恋が申し訳なさそうに謝った。

黒縁眼鏡が不似合いなのを除けば、花恋は本当に素敵な女の子だ。

「そんなに気にしなくていいよ。どうせ暇だったんだから」

「でも、ジグソーパズルをやるはずだったんでしょ？」

「それは大した事じゃないって。だから、もう謝らなくていいよ」

「ありがとう」

よほど申し訳なく思っているらしい。

(花恋ちゃん優しいな。強引で自己中な羽心と全然違う)

勇気はそんな事を思っただけでニッコリすると仕事に戻った。

本の整理だなんて最初は退屈だと思っただけが、やってみると意外に楽しい。

世の中にはこんなに様々な本があるのだと感心した。

勇気は、たまたま手に取った美術書に目を留めた。

そこには、日本の屋敷の屋根に置かれる『鬼瓦』、沖縄の伝説の獣『シーサー』、パリのノートルダム大聖堂などの外壁に装飾された怪物『ガーゴイル』など、世界の魔除けや厄除けの美術品が紹介されている。

(お父さんの書齋にも似たような怖い置物やペンダントがあったけど……)

ページをめくっていくと、日本の寺の山門に立つ『仁王像』が紹介されていた。

「そっか、こういうのがおっかない顔をしてるのは、悪霊を追い払うためだったんだ」
思わず呟いていた勇氣に、花恋がくすりと笑った。

「何？」

「だって、校外学習でお寺に行った時の事を思い出しちゃって……」

「え？ あ、あの時の事……」

勇氣は顔を赤らめる。

去年、校外学習である寺に行った時、山門の両側に立つ仁王像があまりに怖くて、
勇氣は逃げ出してしまったのだ。

「だって、あれは鬼だと思ったんだ」

「あの時も先生は鬼じゃなくて、私達の味方だって説明してたよ」

「怖くて、そんなの耳に入らなかつたよ」

「でも、今はその本を平気で見てるよね」

「え？ うん、まあ……」

花恋は悪戯っぽい笑みを浮かべる。

勇気はちよつと戸惑つて、頭を搔いた。

「勇気君、最近、何だか変わったよね」

「僕が変わつた？」

「うん、何だか、大人になつたといふか……たくましくなつたといふか……」

「ええつ？ 僕が？」

「あ、ごめん。気を悪くした？」

勇気はますます頭を搔いた。

花恋は俯いて、仕事の続きを始める。

自分の発言に、自分で照れてしまつたようだ。

その様子に勇気まで恥ずかしくなつた。

「勇気君、ありがとう。本当に助かつた」

図書委員の手伝いは予想より早く終わったが、

勇気が花恋と連れ立って校門を出てきた時には、夜の帳とぼりが降り始めていた。

深々と頭を下げる花恋の前で、勇気はまた頭を搔いた。

「そんな大した事してないし……。じゃ、また明日」

勇気と花恋の家は別々の方向だ。

花恋に背を向けた勇気は、小さく首を振った。

何だか変に意識してしまう。

(とにかく、急いで帰ってジグソーパズルの続きをやるう)

そう考えて、家路を急いでいると、突然、風が吹いた。

世界が一瞬で変わったようだ。

「キャッ！ いやああー！」

「花恋ちゃん！ 花恋ちゃん！ 大丈夫？」

勇気は慌てて踵を返し、走る。

「キィキィー！」

頭上に聞き慣れない音がよぎった。

走りながら勇気が見上げると、奇妙な生き物がいくつも飛んでいる。

ふらふらした飛び方から蛾に思えたが、それにしても大きい。

(蝙蝠?!)

動画では見た事があるが、本物の蝙蝠なんて初めてだ。

「いやっ！ 助けてっ！」

「花恋ちゃん！」

再び聞こえた悲鳴の方を見ると、花恋が一匹の蝙蝠に襲われていた。勇氣は必死に走った。

「いやああ！ いやああ！」

花恋は道にしゃがみ込んで蝙蝠を振り払おうとしているが、蝙蝠は首筋に絡みついて離れない。

「花恋ちゃん！」

勇氣はダツシユして、花恋に駆け寄った。

「花恋ちゃんから離れろ！」

手を伸ばすと、自分の手のひらより大きい蝙蝠を、勇氣は払った。

硬い路面にぶつかった蝙蝠がのたうつ。

それを見た勇氣は荒い息をついて花恋に振り向く。

「大丈夫？ 怪我は？」

道にしゃがんで俯いた花恋は何も答えない。

勇氣は路面に落ちた眼鏡に気づき、拾って差し出した。

「さ、花恋ちゃん、もう大丈夫だから」

花恋は俯いたままだ。

勇氣は眉を寄せた。

彼女の首筋に二つの傷が出来ていたからだ。

「もしかして、噛まれたの？」

勇氣は傷をよく見ようと首筋に顔を近づけると……。

「ぐがあああっ！」

花恋が不気味な声と共に振り向いた。

その顔は青白く、目は淀んで白くなっていた。

しかも、口から2本の鋭い牙が生えている。

大きく開かれた花恋の口が、勇氣の目の前に迫った。

「わああああああっ！」

勇氣はハッと我に返る。

自分の部屋のベッドで寝ていた。

「なんだ、また夢か……」

そう呟いて、額に滲んだ汗を拭った。

家に帰って着替えもせず寝てしまった……と言うより意識を失った感じだった。

いつものボーッとした時に見る夢よりも強烈な体験だったのだ。

窓の外はどっぷりと夜になっており、時計を見ると0時近い。

花恋の事が心配になった。

(連絡してみよう！)

しかし、どうやって連絡を取ればいいのか分からない。

以前、母親がぼやいていたのを思い出す。

「お母さんが子供の時はみんなの連絡先が分かるクラス名簿が配られたけど、今は個人情報保護法とかで名簿が配られないから、不便なのよね」

花恋の家がどこにあるかも知らない。

勇気が途方に暮れて、ふと窓の外を見ると、誰かが道をぼんやりと歩いている。

不似合いな眼鏡を掛けた、花柄のパジャマ姿で、しかも裸足だ。

勇気は慌てて窓を開けて叫んだ。

「花恋ちゃん!? 花恋ちゃんだよね!」

ふらふらと歩く花恋の耳には聞こえないようだ。

「くそっ!」

勇気は急いで一階に向かい、玄関を飛び出した。

「花恋ちゃん! しっかりしろ!」

勇気は夢遊病者のように歩いている花恋を追って掴まえた。

「何してるんだ?」

「え? 私……」

花恋はやつと我に返つて周囲を見回す。

「嘘？　なんで、こんなところに……？」

「こんな格好でどうしたの？」

「わたし……わたし……」

途端に花恋の唇が震え出した。

恐ろしい何かを思い出したらしい。

「家に居たら、外から男の笑い声が聞こえたの……それで……」

「それで……？」

「それで……窓から外を見たら、奇妙な×印が空に浮かんでた。

そしたらそこから蝙蝠が飛んできて……」

花恋は顔を覆つてしゃがんだ。

これ以上は思い出したくないのだろう。

「しつかりしなよ！」

勇気は花恋を励まして抱き起こそうとした。

首筋の傷に気づいたのはその時だ。

蝙蝠に噛まれたとしか思えない。

(さつき見た夢が現実になつて……という事は……)

花恋は俯いて震え、勇気の背筋は凍りついた。

夢で見た、牙を剥く花恋がフラツシユバツクした。

怖い、花恋を置いていく事なんて出来ない。

(逃げちゃダメだ！)

勇気は勇気を出して花恋に声を掛ける。

「ねえ、大丈夫？」

「うううう……」

花恋は震えるだけで何も言わない。

「さ、行こう」

勇気は花恋の肩に恐る恐る手を掛けた。

花恋が悍ましい牙の生えた口で振り向いたら、間違はなく噛みつかれる。

勇気がごくりと生唾を飲む音が響いた、その瞬間。

「うん、ありがとう」

花恋は微笑んで振り叩いた。

顔色は悪いが、いつもの不似合いな眼鏡を掛けた女の子の顔だった。

2 — 中世、東ヨーロッパへ

勇気が花恋を家に招き入れると、彼女は自分から自宅に電話を入れた。

夜更けに娘の姿が見えなくなり右往左往していた両親は、慌てて勇気の家を迎えに来た。

花恋の父も母も事情を飲み込めずにいたが、

とにかく娘が無事だった事に感謝して直ぐに帰って行った。

「……怪、だよね」

玄関の扉を閉じた勇気だが、安心は出来なかった。

花恋が蝙蝠に襲われただけで終わらないのは間違いない。

勇気は父親の書齋に足早に向かった。

そして、半地下の短い階段を下り、ドアを開いた。

「やあ、また怪が動き出したようだね」

「よくぞやって来た、勇気ある少年よ」

「ディアーナ!？」

「……ディアーナおねえちゃん、けさからこんなかんじなの」

キユウとノノ、そして様子がおかしいディアーナがいた。

勇気は頭を振って、今までの事をキユウに語った。

「僕は夢で蝙蝠が花恋ちゃんを襲うのを見たんだ。そして、花恋ちゃんは本当に蝙蝠に襲われた。」

だから、今回の怪は蝙蝠のお化けだと思っただ」

それを聞き終わったキユウは、珍しくじつと考え込んだ。

「どうしたの?」

キユウの顔色がいつもより悪く見える。

「花恋という女の子は蝙蝠に襲われて首筋を噛まれたんだね」

「そうだけど……何?」

「花恋ちゃんは怪に操られるだろう」

「何だと? 他者を支配し意のままにする……それは人形か? 洗脳術か?」

ディアーナが仰々しい口調で聞き返すと、キユウはゆっくり頷く。

「……それって、蝙蝠に操られるって事?」

「その蝙蝠は怪の手下にすぎない」

「え? 手下?」

「そうだ。蝙蝠だけじゃない。人間の血を吸う事で、その人間を操って手下にしてしま

うんだ。

「そしていずれば、全ての血を吸いつくし、その人間を殺してしまう」

「ああ、強敵だ」

「強敵って？ 誰？」

「決まっているだろう！ ドラキキュラだ！」

「えっ！」

「……」

勇気の口から、驚きが思わず漏れてしまった。

恐らく、誰でもよく知っている名前だろう。

「勇気を見た夢の中で何匹も蝙蝠が飛んでたなら、襲われたのは花恋ちゃんだけじゃないだろう」

「嘘だ、花恋ちゃんがドラキキュラに？」

勇気はショックで眩くばかりだ。

それでもキユウはお構いなしに語り続ける。

「一刻も早く倒さないと、花恋ちゃん達も吸血鬼となり仲間をどんどん増やしていくだろうね」

「闇は感染し同族を増やす……そして血の繋がりにし親と子は血族となり……」

さらなる勢力を増やすだろう！」

勇気は心臓に針を刺されたようなショックを受けた。

「やめてよ！ 花恋ちゃんもドラキキュラになっちゃうだなんて！」

「落ち着いた方がいいよ。花恋ちゃんはドラキキュラにはならないよ」

「え？ じゃ、花恋ちゃんは助かるの？」

「少年よ、吸血鬼がドラキキュラと呼ばれているわけではない。

ドラキキュラは吸血鬼の中の一人の名前に過ぎぬ。

ノスフェラトウ、カーミラ、ナハツエーラーもいたな。

ともかく、桁外れの身体能力、しぶとき肉体、機敏な動き、洗脳術、破滅をもたらす

力、

姿を変える力、血による武器生成……多彩な能力を持っているのだ」

それを聞き、勇気は総毛立った。

目の前の怯える少年に、キユウが強い口調で言う。

「……とにかく、やる事は一つ。今すぐ怪狩りだ」

勇気の心に大きな恐怖と不安がのしかかってくるが、

花恋や見捨里市の事を考えると深く頷くしかない。

「さあ、ゆくぞー！」

勇気は右手にグローブを嵌め、ディアーナとノノは武装する。

キユウは左手のグローブの装着を確認した。

「僕は何を持って行けばいい？」

「ふ……いいだろう。夜に活動するドラキュラは日射しに弱く、光を浴びると灰となる。

その隙に、杭に心臓を打ち込むがよい」

「杭を心臓に打ち込む？」

「……つまり昼の間、寝ている時に杭を心臓に打ち込むのが一番の退治方法だ」

「ここに杭なんてないし、そんな残酷な事は出来ないよ」

「子供故に残酷を拒むようだな？　だが、助からぬ道を選ぶか？」

「そうだ！　十字架が効くんじゃないの？　お父さんがコレクションした十字架がある

よ」

勇気はすかさず書斎の棚を見回したが、キユウは浮かぬ顔だ。

「十字架か……。無いよりましかもしれない」

「何故だ？」

「あれは、勇気以外に僕が見える人間……ブラックコートだったら使えるけど……」

キユウとディアーナの眩きは、十字架探しに夢中になっている勇気の耳には入らな

かった。

勇氣は様々なコレクションの中から、手のひらサイズの銀の十字架を見つけた。

「ほら、これがあればドラキュラを退治できる」

「まあ、そうかもしれない。でも、念のために、ニンニクを持って行こう。」

ドラキュラはニンニクを嫌うんだ」

「分かった。念には念をだね」

勇氣はキッチンにニンニクを取りに行く。

キッチンから戻ってきた勇氣は、銀の十字架とニンニクを、上着の左右のポケットに

入れた。

ニンニクは株をまるごと持ってきたので、バッグのポケットが大きく膨らんだが何と

か入った。

「それで、今度は何処に行くの？」

「中世の東ヨーロッパ。トランシルヴァニアだ」

「初めて聞く名前だけど、分かったよ」

勇氣が準備を終えると、キユウは壁を見つめた。

「さあ、怪を倒しに行くよ。……怪狩りの時間だ！」

「この疾風の霊双剣士ディアーナにかかれば、闇の領主など風の中に消し去ってくれる

！」

キユウは、グローブを嵌めた左手を壁の前にかざし、呪文を発した。
カオスゲート
「時空貫通」

螺旋状に風が吹き、壁に光が渦巻く。

その渦が大きくなっていき、激しく輝いた。

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

ダイアナ、ノノ、キユウが渦の中に飛び込む。

続いて勇氣も飛び込んだ。

悪魔が振り下ろす三つ又槍のような稲妻が、天空を走る。

遅れて轟く雷鳴、闇に包まれた山、風雨で森の木々が踊っている。

再び走った稲妻が、石造りの屋敷の輪郭を、ざわつく木々の間に浮かべた。

城の外に降る雨が突如、渦を巻き始めた。

「わわつととー！」

「む……まさしくここは、闇夜に沈みし城か」

ダイアナとノノは無事に着地するが、勇氣は着地に失敗して地面に転んだ。

勇氣はトンネルを出た瞬間、風雨に煽られてバランスを崩した。

「あわっ！」

勇氣は葉が生い茂る大木の下に逃げ込んだ。

ここなら多少は雨が凌げるが、勇氣はすっかりびしょ濡れだ。そこにのんびりと宙を滑るようにキユウがやってきた。

「キユウは、雨に濡れる事もないんだな」

激しく降る雨が、キユウの身体を通り抜けている。

ディアーナの髪は淡く光り、夜の風景を照らしている。

「僕は霊体だからね。ごめん、雨は予想外だった」

「水の精霊が暴れている……」

「だけど、なんで夜に来るんだよ。」

昼の間、寝ている時に杭を心臓に打ち込むのが、一番のドラキュラの退治方法だ、

ってディアーナが言ったのに」

「昼間に来てもドラキュラの隠れ場所なんて分からないよ」

「本人に直接会え。その方が手っ取り早く解決できるだろう」

（確かに早く解決できるかもしれないけど……）

勇氣は酷く不安になった。

しかも目の前の城が予想以上に大きかったのでさらに不安が募った。

目の前に建つ城。

周囲を見張る塔を持った建物は、現代なら七階建てくらいのビルの高さがあるが、

窓は小さく数も少ない。

「なんで、こんなに窓が少ないの？」

勇気は素直に疑問を口にした。

「ここは城砦だ」

「何それ？」

「人が住むけど、砦でもある城の事だよ」

「そっか、高い建物にして窓も少なければ敵が入ってこられないものね」

「ああ、そうだね」

「逆に、囚われた敵が逃げ出す事も難しいぞ」

「え？　じゃ、もし僕達がドラキュラに捕まったら……う？」

「旗は立てるな、少年！　間違いなく回収されるだろう！　さあ、ゆくぞ！　少年！」

ディアーナはそう言つて、城の入り口に向かう。

それを追つて、勇気、キユウ、ノノは大木の下から飛び出した。

3
— ドラキュラ城

正面の重たい木の扉は上に向かって尖った形だ。

大型の手漕ぎボートが縦に置いてあるように思えた。

勇気は大きく深呼吸をして強張る心を解し、そして、覚悟を決めて拳で扉を叩こうとする。

「勇気、手で叩いても中には聞こえないよ。その金属のノッカーを叩くんだ」
「殴打するとうわけだな」

ノッカーには不気味な蝙蝠の顔型の金属製の扉の飾りがあり、

口からは同じく金属で出来た輪がぶら下がっている。

「その輪で叩くんだよ」

「はあっ！」

「おねえちゃん！」

ディアーナは勢いよく重い扉を開けた。

すると、扉の奥の暗闇の中から、頭の禿げた小太りな男が出てきた。

白いシャツに裾の長い黒い背広を着ていたが、シャツは染みだらけで、

背広もところどころが破けて薄汚い。

男の手にしたランプの灯りで、夜でもそれははっきり見えた。

「ド、ドラキキュラなの……？」

背後のキユウに向いて、震える声で勇氣は尋ねた。

「怖がらなくていいよ。彼はドラキキュラの召し使いだ」

「このあたしが、両手の剣で貫いてやろう……」

「おちついて、おねえちゃん」

レイピアを抜こうとしたディアーナを、ノノは落ち着かせる。

「美味そうだな……へへへっ」

下品な笑い声が扉の方から聞こえた。

「ほう、あたしを美味そうだと言ったな。お前の口にはさぞかし妖精の肉は合うだろう。

だが食すのならば、お前と同じ肉を食すがよい」

召し使いは「しまった」とばかりに口に手を当てたが、

直ぐに召し使いは覚えてきた台詞を思い出したようだ。

「お待ちしておりました。雨の中をわざわざお越しくださり感謝いたします。

そう言えって、ご主人様は言ってたんだ。そうだ、これで間違っていないぞ、へへへ

へっ」

召し使いは間違えずに言えた事で悦に入っていた。

「キユウ、これはどういう事なの？ 僕達が来る事を知ってたの？」

「何も言うな。ドラキュラには全てお見通しなんだ。下手な事をするとな命を無くすよ」

キユウは背後から囁いた。

「そうだ。ご主人様は全てお見通しだ。だから、俺の事をバカ、バカ言いやがる」

「どうやら召し使いにもキユウは見えていて、声も聞こえるようだ。」

「彼は人間だが、半分吸血鬼にされてる」

「なるほど……半怪というわけか」

キユウは召し使いの首筋の傷跡を見て言った。

「勇気が目を凝らすと、確かに召し使いの首に花恋と似た傷があった。」

「雨に濡れた服を着替えて大広間にいらしてください、という事だよ」

ランプを揚げた召し使いに促されて、勇気とキユウ、デИАーナとノノは城の中に入った。

「閉じ込められた。もう逃げられないんだね」

「はっ、それがどうした。後で破壊すれば良いだろう？」

「あたしは風を操る者。竜巻は扉を飲み込み、壊すであろう」

「デイ、デИАーナ……」

勇氣は、湧き上がる不安と恐怖を抑える事は難しかった。

こんな時でも物騒な事を言うデイアーナもまた、人ではなかった。

召し使いに案内された勇氣、デイアーナ、ノノと霊体のキユウは城の中を歩いた。

狭い場所なので、ノノは飛ばなかった。

ところどころに置かれたランプや蝋燭だけで照らされた内部は薄暗い。

木の根に白い壁の部屋があったかと思うと、剥き出しの石で作られた廊下や階段があった。

ドラゴンや様々な怪物を退治するゲームに出てくる世界だと勇氣は思った。

しばらく廊下を歩くと、音楽がかすかに響いてきた。

「この音楽は？」

勇氣が思わず疑問を口にした。

「今夜は前祝いのパーティーを開催しているのですよ。へへへっ」

「前祝いつて、なんの前祝いなんですか？」

「そんなの知らないよ。俺には何も教えてくれねえんだよ。」

「ご主人様は俺をバカにしてるんだよ。まったく！」

召し使いはそう言うのと、ペツと廊下の床に唾を吐いた。

「汚いな……お前も汚くなるが良い」

ディアーナは風を呼び、召し使いを軽く吹き飛ばした。

しばらく歩くと音楽がはつきりしてきて、人々の騒めきも聞こえてきた。

そして、召し使いは廊下の突き当たりの扉の前で立ち止まり、

勇気、ディアーナ、ノノ、キュウに振り向いた。

「こちらが大広間です。どうぞ、お入りください。へへへっ」

そして、召し使いは扉を開ける。

「これは……！」

「舞踏会ではないか！」

勇気は思わず息を呑んだ。

華やかに着飾った老若男女が、音楽に合わせて踊っている。

金髪の頭を南瓜のように束ね、足が隠れるくらいに長いスカートを穿いた女性。

肩まである髪を束ね、スカートのような服を着てタイツを穿いている男性。

ピンク、オレンジ、様々な色の衣装だが、

デザインはどれも似ていて、色も鮮やかさに欠けていた。

「醜い。なんと醜い舞踏会だ。華やかなりしものであろう。このあたしが吹き飛ばして

みせる」

「おねえちゃん、めをさまして！」

ディアーナが呪文を詠唱しようとする、ノノが止める。

「あたしは目覚めている。それがどうした？」

「おちついてよ！」

「彼女の言う通りだ、少し落ち着け」

「……むう」

ディアーナは不満げな表情になると、大人しくなった。

それにしても、こんな嵐の夜にこれだけ大勢の人がどこから集まってきたのだろう。

「ねえ、キユウ、この人達は……？」

「彼らはドラキュラの仲間だ」

「仲間って？」

「ドラキュラに血を吸われて、吸血鬼になってしまった人間だよ」

ドラキュラを慕う貴族や名士達なのだという。

勇気が戸惑っていると、二人の貴婦人が近寄ってきた。

「あなた達は伯爵が招いたという大事なゲストね。でも、あなた達は汚い。」

「……さあ、踊りましょう」

一人の貴婦人が勇気に手を差し出し、もう一人の貴婦人がキユウを踊りに誘う。

ディアーナとノノは、相手にされなかった。

「さあ、いらつしやい。楽しいわよ」

「どうしよう?」

「機嫌を損ねないのが一番だよ。ここにいる連中は君の血が欲しくて仕方ないのだからね」

「時代は妖精より人間か」

驚いている間もなく、貴婦人に誘われて勇氣は踊りの輪の中に入った。

といつても踊りは分からないから、貴婦人に付いているだけだ。

しかし、キユウはもう一人の貴婦人に触れる事なく、その周りを優雅に舞っていた。

「キユウはどこで踊りを覚えたの?」

「昔だよ」

「昔つて?」

「勇氣、こうなつたら楽しむのが一番だ」

「まったく、話を聞かない奴だな……」

「君が言うな」

キユウはニコニコと笑顔を絶やささない貴婦人の周囲をますます華やかに舞う。

すると突然、音楽が止んだ。

「伯爵です! へへへっ」

大広間の一番目立つ出入り口の脇に立った召し使いが声を上げた。

人々は踊りを止めて、出入り口に向いた。

人々は固唾を呑んで出入り口を見つめる。

耳目が集まる中、オールバックで青白い顔の紳士が、マントを翻して颯爽と現れた。

勇気、キユウ、ノノも男を見て息を呑んだが、デイアーナは対照的に飢えた目をして

いた。

ドラキュラだ。

「おお、伯爵ー」

周囲の人々が跪く。

ドラキュラは、集まった人々を満足げに見回す。

「今夜、集まつてくださった皆さんに深く感謝する。

この催しが大変に素晴らしい出来事の前祝いなのはご存じだろう。

まずは乾杯をしよう。皆さん、杯を手に取るのだ」

召し使いがトレイに載せた杯を参加者に渡して歩いた。

「伯爵、ありがとうございますー」

「感謝しますー！ 伯爵」

杯を受け取った参加者達は、それぞれに伯爵に頭を垂れる。

そして、ドラキュラの脇に立った召し使いも、最後の杯を自分用に手に持ち微笑んだ。それを見たドラキュラは眉間に皺を寄せた。

「馬鹿か！」

ドラキュラは召し使いの杯を奪い取った。

「あ！ ご主人様！」

「お前如きが、一緒に祝うなどあり得んぞ！」

召し使いはドラキュラを唾然と見た。

しかし、城主はお構いなしに、参加者に見えるように杯を高々と掲げた。

「さあ、皆さん、乾杯をしよう！ 乾杯っ！」

「乾杯！」

杯を頭上に掲げた不死者達の声が、大広間に響いた。

だが、トレーだけを虚しく持つ召し使いは、脇に立つドラキュラを憎々しげに睨みつけていた。

ドラキュラは柄の中身を一気に飲み干すと再び参加者に語りかける。

「さて、本日の前祝いを飾る素晴らしいゲストが四人も来てくださっている」

ドラキュラは、勇気、キュウ、ディアーナ、ノノを真っ直ぐに見据えた。

その視線を邪魔しないように、二人の少年と女の前の人々がどいていく。

ドラキュラは四人に軽く会釈する。

「ようこそお越し下さいました。私はドラキュラ、伯爵です。

よろしくお願ひします。勇氣君とそのお友達さん」

黒マントの男は顔を上げるとにやりと笑った。

「なんで、あの男は僕の名前を知ってるの？ ねえ、どうして？ キユウ」

「勇氣、落ち着け」

二人は囁き合った。

ダイアーナは、レイピアを抜こうとしている。

「ほほう、勇氣君の後ろにいる怪はキユウという名前なんですね」

「しまった！」

「恐れる必要はありません。今宵は存分に楽しみましょう」

青白い顔をした伯爵はそう語ると、四人にゆっくりと近づいて来た。

「Wind Blast」

ダイアーナは呪文を詠唱し、風を飛ばして攻撃する。

風はドラキュラに当たるが、ドラキュラにとってはかすり傷にしかならなかった。

（そうだ！ 十字架だ！）

「ああああ！」

勇氣はポケットから銀の十字架を出す。

周囲の人々が悲鳴を上げたが、ドラキュラはお構いなしに四人に近づいて来る。
「来るな！」

迫ってくる長身の男に、勇氣は十字架を見せつけるように振った。

しかし、ドラキュラは不敵な笑いを浮かべるだけだ。

「信仰心のない君がそんな事をやっても無意味だよ」

「やはり、現代の者では不可能か！ ブラックコートではなかったな」

そう言うと、ドラキュラは勇氣の手の十字架を握った。

勇氣はなすすべもなく十字架を奪い取られ、ドラキュラの手から煙が上がり、

銀の十字架は溶けてしまった。

啞然とする勇氣の背後でキユウが呟く。

「やはりか……」

肩を落としたキユウが、今度はハツとする。

「勇氣、ニンニクだ！」

シヨックで呆然としていた勇氣が、もう一方のポケットからニンニクを出した。

周りにいた人々は本性を現した。

牙を剥き、目を真っ赤に変えて、三人を威嚇する。

「なんだ、その汚らわしいものは！」

「よし！ 勇気、杭になるものを探すんだ！」

ニンニクの効力にドラキュラも怯む。

叫ぶキユウの横で、ドラキュラも声を荒らげた。

「おい！ その臭くて汚らわしい植物を奪え！」

「え？ 俺がですか？ 俺もこの植物は嫌いですよ。へへへっ」

召し使いも尻込みしている。

「それは魔を払うからか」

「馬鹿！ お前は半分人間だろ！ ニンニクは怖くないはずだ」

「なんで、馬鹿、馬鹿、言われるんですかね」

召し使いはブツブツ言いながら、近くにあった食事前のナイフを手にした。

一方、勇気はニンニクを振り回しながら、大広間を杭になる物を探してうろうろしている。

ディアーナは呪文を唱え、ドラキュラの動きを制限する。

すると、召し使いが走ってきた。

「おい、あんた、そんなものは捨てるんだよ。へへへっ」

召し使いは勇気の肩を掴むと、首筋にナイフを突きつける。

「くそ、劣勢か」

「キユウ、どうしよう?」

「これは笑えないね」

召し使いにまんまとニンニクを奪われ、勇気は肩を落とした。

そのナイフはすぐに、ダイアーナによって落とされたが……。

「皆さん、お騒がせして申し訳ありませんでした。」

その二人のゲストには地下の牢屋に入ってもらいます。さあ、舞踏会の続きを楽しんで下さい」

ドラキュラはそう告げると、勇気とキユウを睨みつけた。

4 — 囚われた勇氣とキユウ

地下牢では、灰色の生き物が床を走った。

「わあ、ネズミ！」

勇氣は部屋の隅に飛び退いた。

地下の牢屋は岩肌が剥き出しになり、とても居心地が悪かった。

勇氣は周囲を見回した。

鉄格子の向こうにある松明の灯りだけでボンヤリと照らされる牢屋内。

窓もなく逃げ出しようがなかったが、勇氣は、はたと閃く。

「キユウの身体は雨が通り抜けるんだから、ここから抜け出せるでしょ？ 何とかなら

ないの？」

「僕が抜け出したところで何もできないからね……」

「じゃ、僕達はここから一生逃げ出せないの？」

「自分達だけじゃない。見捨里市も心配だ」

「え？」

勇氣は不安げに牢屋の天井を見上げた。

「……ドラキュラめ。大人しくしないのか？」

大広間では舞踏会がまだまだ賑やかに開催されている。

それを満足げに見ていたドラキュラが、一際目立つ出入口から出て行く。

廊下を歩き、階段を上ると、そこは豪華な書斎だ。

ドラキュラは書斎を抜けて、奥の扉を開けた。

薄暗い部屋があり、何匹もの蝙蝠が飛んでいて、しかも×印状の罅が中空に浮いていた。

ディアーナは双剣を構え、ノノと共に対峙している。

黒マントの紳士は蝙蝠達に指示を出す。

「行け！」

「待て！」

「やめて!!」

蝙蝠達が、中に入っていく。

ディアーナは追いかけようとするが、ノノがバリアを張ってディアーナを止める。

「いまはドラキュラさんをやっつけるのがさきだよ！ みすてりしに行くのは、まだだ

よー！」

「……すまなかった」

夜の見捨里市。

中空に×印状の罅が現れる。

「キィキィ！」

「キキ、キィキィ！」

何匹もの蝙蝠が罅から舞い出てくる。

学校帰りの男子高校生グループが、その羽音に気づいた。

「なんだ、あれ？」

「嘘、蝙蝠？」

「蝙蝠なんて初めて見たよ」

そんなやり取りをしながら、彼らはスマホで写真や動画を撮り始めたが、

蝙蝠達は単に宙を舞っているだけではなかった。

「キィキィ！」

彼らは高校生達に向かって急降下していく。

スマホ撮影に夢中になっていた高校生達は、逃げ遅れてしまった。

「わあ！」

彼らの首に止まった蝙蝠は、すかさず噛みついた。

「痛いっ！」

「止めろ！」

「なんなんだ、こいつら！」

高校生達は振り払おうとするが、蝙蝠は執拗に首筋に牙を立ててきた。

同様の蝙蝠襲撃事件は、見捨里市のあちこちで起きていた。

夕飯の食材の買い物に出た主婦、会社帰りのサラリーマン、午後の診察を終えた高齢者。

人々は蝙蝠を珍しいと思つて最初は眺めるが、その隙に襲われていた。

一方、ドラキユラ城の部屋では、デイアーナとノノが奮闘していた。

罫が音を立て、×印から黒い煙が湧き出る。

「うわっ！」

ドラキユラは蝙蝠を役使し、ノノにけしかけるが、ノノは素早く飛んで攻撃をかわす。

続けてもう一匹の蝙蝠がノノに襲い掛かる。

「きゃっ!!」

ノノは何とかギリギリでかわすも、その隙に蝙蝠がノノの背中に飛びかかる。

しかし、大声を出して蝙蝠を怯ませ、高く飛んで蝙蝠の攻撃をかわした。

ノノの身体に小さな羽が舞う。

これも、彼女が人ならざる者だからなのだ。

ノノは鳥に変身し、素早くその場を離れて、蝙蝠やドラキュラと距離を取った。

「みずとかぜのじょういせいれいよ、こくうよりきたりてさばきをふるえ！ I n d i

g n a t i o n

「ディアーナは呪文を唱えて、落雷を起こす。

それは、外で鳴っている雷よりも遙かに大きい、天の意志そのものであった。

蝙蝠は彼女の攻撃一発で黒い煙になつて消滅した。

にも拘わらず、舞踏会は相変わらず続いていた。

それは、ディアーナとノノが、結界を張っているためであつたが……。

「さあ、後はお前だけだ」

「ふふ……女二人だけで、私を倒せるとでも？」

やがて舞踏会が終わり、すっかり夜も更けていた。

嵐もいつの間にか収まり、厚い雲の間から星が見え始めていた。

「今までで最高の舞踏会だった」

「おかげでこんな時間まで楽しんでしまった」

「早く帰らないと夜が明けてしまう」

「この世ならざる者達にとつてよほど楽しい一夜だったのだろう。

彼らは闇の中に三々五々消えていった。

地下の牢屋にいる勇気とキユウも、舞踏会が終わった事は雰囲気で分かった。

しかし打つ手を思いつかず、二人は項垂れるばかりだ。

「ね、キユウ、何かできる事はないの？　今までは何とか乗り越えてきたじゃない」

「そうだよな」

腕を組んだキユウは、しばらく唸った。

「……あ、上手い言葉が浮かんだよ」

「え？　ホントに？　流石、キユウだね」

勇気は明るい顔でキユウを見つめ返した。

「四面楚歌^{しめんそか}」

「そんな言葉は知らないけど、何とかなるんだね」

「『四面楚歌』とは、四方を敵に囲まれてどうにも動きようがないって意味なんだ」

「……」

「中国の『史記』という歴史書に書かれていた戦の物語から生まれた言葉なんだ。

今の僕達の状況にピッタリだろ」

「ねえ、キユウ、要するに誰も助けに来ないし、僕達は何もできないって事だよね」

「確かにそうだけど……いや、エルフと翼ある者が頑張っている。彼女達に期待しよう」

その時、牢屋の鉄格子の鍵が開く音が響いた。

そちらを見ると、召し使いが立っていた。

「ご主人様がお呼びだよ。へへへっ」

二人は顔を見合わせた。

5 — ドラキュラとのゲーム

召し使いに連れられて書齋に行く勇氣とキユウ。

そこでは、ドラキュラと、デアーナと、ノノがいた。

デアーナとノノは、疲労から顔色が悪くなっている。

「窮屈な思いをさせてすまなかった。私達に舞踏会を邪魔されたくなくてね。

でも、あの女二人は荒っぽかったな。お腹が減っているだろう。さあ、座って

テーブルに料理が並んでいた。

食事を食べるように促すドラキュラ。

「と言つても、霊体のキユウ君はお腹が減る事がないから食事は無用だね」

キユウは小さく笑った。

顔色が悪い黒マントを纏った男は、何でもお見通しのようだ。

一方、勇氣が牢屋にいる間、空腹を感じたのは確かだが、

この状況で食べ物など喉を通るはずもない。

「ご馳走なのに食べたくないのかい？ それとも、毒が入っていると不安になっているのかね？」

勇氣は何も答えなかった。

「私はそんな無粋な事はしないよ。」

主として同じものを食べて毒が入っていないのを証明したいのだが、

私の主食は君達人間と違うんでね、その失礼を許して欲しい」

ドラキュラはテーブルの上の純金の杯を手に取って赤い液体を一口飲む。

その赤い液体が赤ワインでないのは、勇氣にも直ぐに察しが付いた。

「実はこの土地の主食はほとんど飲み尽くしてしまつてね。」

この杯に入っているのは動物のものなんだ。

ところが、先日ある少年に出会つたら、

時空を超えれば新鮮な主食が簡単に手に入ると教えられたのだよ。

少年は時空の出入り口を作ってくれた。その代わり、私は少年の望みを叶える事に

なつた」

「少年」の言葉に険しい表情になるキユウ。

勇氣も江戸時代に行った時の事を思い出した。

(きつと、お雪ちゃんを騙した太郎と同じ少年だ！)

勇氣は背後を向いた。

「キユウ、その少年は何者なの？」

勇気が尋ねるが、キユウは黙って首を横に振るだけだ。

「キユウは何かを隠している……勇気にはそうとしか思えなかった。これを見るがよい」

ドラキュラが指を鳴らし、召し使いがテーブルに黒い鈴を置いた。銅製と思われる手のひらサイズの鈴を見て、勇気は首を傾げた。

「これは、何？」

背後のキユウの顔が強張ったのが、勇気には分かった。

ドラキュラはソファから立ち上がり、勇気の近くに寄ってくる。

「少年から状況を教えられて、これが有効だろうと探してきたんだ」

ドラキュラが黒い鈴を手にして振る。

しかし、何も起きず、キユウはホツとする。

「この鈴は私が振っても効果が無い。

でも、勇気君、君が振ると絶大な効果を発揮するはずなんだよ」

そう言って、ドラキュラは勇気に黒い鈴を渡した。

「さあ、振ってみなさい」

「でも……」

「早くしろ！」

ドラキュラが牙を剥き出しにして、真っ赤な目で迫ってくる。

勇気はその恐怖に耐えられず、つい鈴を振ってしまふ。

「勇気！ 止めてくれ！」

勇気は慌てて鈴を振るのを止めた。

突然、ドラキュラの嫌らしい笑い声が響いてくる。

「なるほど、やはり効果絶大だ！ 勇気君が振ればその幽霊を消滅させる事が出来るんだ」

高らかに笑うドラキュラに、勇気は困惑するしかない。

「キユウ、どういう事なの？」

キユウは胸を押さえながら、肩で息をしている。

話すのも苦しいのだろうか。

すると、ドラキュラの笑い声が止まり、異様な目を勇気に向けてきた。

「勇気君、ゲームをしよう」

「ゲ、ゲーム？」

「なあに、簡単なゲームだよ。勇気君、君にある選択をしてみようと思うてね」

ドラキュラが指示を出すので、召し使いが書斎の奥の扉を開けた。

隣の薄暗い部屋に大きな罫が浮いていた。

その罅の中に見捨里市の風景が見える。

ある家の二階の窓の奥に、羽心が眠るベッドが見える。

「羽心ー！」

勇気は思わず声を上げたが、その声は羽心には届かなかつた。

デイアーナは、ぶつぶつと呪文を詠唱していた。

夜の見捨里市、風が羽心の部屋の窓ガラスを撫でている。

それに紛れて、か細い声が聞こえてきた。

「……うらら……ちゃん、うらら……ちゃん」

ベッドの上で静かに寝息を立てていた羽心が目を開けた。

「……羽心ちゃん」

やはり聞こえる。

(こんな時間に、なんで……?)

そう思ったのは、聞き覚えのある声だったからだ。

ベッドから降りた羽心は、ゆっくりと窓に近づいた。

「えっ……?」

「羽心ちゃん……」

窓下からパジャマ姿の少女がニヤニヤと笑いながら自分を呼んでいた。

少女は羽心の姿を見ると、さらにニヤニヤと笑って名前を呼ぶ。

「嘘!? 花恋ちゃんなの……?」

花恋の声なのに、闇の中に立つ少女は眼鏡を外していて彼女に思えない。

「眼鏡、どうしたの?」

「羽心ちゃん、お願いだから窓を開けて。これからご主人様が来るのよ」

「花恋ちゃん! 何言ってるの?」

訳が分からず窓を開ける羽心は、空に大きな×印状の罅が浮かんでいるのに気づいた。

それを罅越しに見たドラキユラは、笑い声を上げた。

「羽心に何をやる気だ!」

「だから、ゲームだよ」

「この少年を押さえていろ」

勇気に笑いかけたドラキユラは、召し使いに言いつける。

「え? この子の血を吸ってもいいんですかい? へへへっ」

「バカ! 押さえていろと言っただけだ」

ドラキユラは怒鳴った。

召し使いは悲しい表情を見せたが、勇気を押さえ込んだ。

「さあ、久しぶりの旅だ。楽しみだ」

「何する気だ？」

ドラキュラはマントを翻した。

召し使いの腕の中でもがく勇氣は、ドラキュラに叫んだ。

マントを蝙蝠の羽のように羽ばたかせて、ドラキュラは罅の中に入っていく。

「羽心、逃げるんだ！」

勇氣が叫んでも羽心には聞こえない。

そして、ドラキュラは羽心の部屋に舞い降りた。

「きゃあああ！」

「さあ、私の目を見たまえ」

悲鳴を上げる羽心の口をドラキュラは素早く押さえると、優しく呟く。

思わず目を見た羽心は、あっという間にドラキュラの術にかかってしまう。

「羽心！ 目を覚ませ！」

勇氣は叫ぶが、それを遮るように少女の不気味な声が響く。

「羽心ちゃん、あなたも私の仲間になるのよ」

「花恋ちゃんも目を覚ますんだ！」

下から見上げていた花恋が微笑む。

勇気は叫ぶが、罅の向こうのドラキュラは微笑みながら見返すだけだ。

「勇気君、君には2つの選択肢がある。」

君がその鈴を振れば、私はこの少女の血をいただくのを諦めよう。

だが、その鈴を振るつもりがないなら、この若くて綺麗な血をいただくよ」
ドラキュラは大きく口を開いて牙を剥いた。

羽心の首筋に今にも噛みつきそうになる。

「止めろ！ 止めてくれ！ 羽心、目を覚ますんだ！」

召し使いの腕の中で必死にもがいて叫ぶ勇気。

しかし、ぼんやりとした羽心の耳には勇気の叫び声は聞こえない。

ドラキュラは不気味に笑う。

「叫んでも無駄だよ。この子には何も聞こえないよ」

ドラキュラの牙が羽心の首筋に近づく。

「ゆ、ゆう、き……！」

未だにぜいぜいと荒い息をするキユウが、声を絞り出した。

「勇気！ ドラキュラを倒さない限り、羽心ちゃんの術は解けない。その鈴を振るんだ！」

キユウが勇気に厳しい表情で言う。

「そんな事をしたらキユウが……!」

勇気は手にした鈴を見る。

勇気は究極の選択を迫られた。

「僕は……僕は……」

その時だった。

「うああああああああ!!」

突然、ドラキュラが真つ赤な炎に包まれた。

ドラキュラの服が燃え、焼かれ、ドラキュラは頭を抱えて苦しみ出す。

一体誰がやったんだ、と向こうを見ると、ディアーナが笑みを浮かべていた。

「ディ、ディアーナ!? その炎、どうやって……!」

「火炎呪文、インフェルノだ。」

エルフは禁忌とする炎だが……ドラキュラを倒すためだ、仕方あるまい」

「さつきぶつぶつ言ってたのは……呪文を唱えていたからか……!」

「さあ、後はお前がやれ! 黒い鈴は投げ捨てろ!」

「ああ!」

ディアーナが放った炎が消えると同時に、勇気は黒い鈴を投げた。

×印状の罅の中に鈴が勢いよく入り、それが×印のトンネルの中を通過していく。

そして、見捨里市の×印状の罅から鈴が飛び出し、鈴は、見事にドラキキュラの顔面にぶつかった。

「わあぎやあー！」

ドラキキュラが仰け反る。

やがてドラキキュラの顔は今まで見た事もない悍ましい形相に変わった。

鋭い牙がグツと伸び、普段の倍に広がった赤い目がギョロリと勇気を睨みつけた。

「ぐううっ、うううううううー！」

地獄の底で呻くようなドラキキュラの声が罅越しに響いてくる。

勇気はその凄まじい顔と声に心臓が止まりそうだ。

身が竦んでしまうが、仲間達がいる前で逃げてはならない。

怒ったドラキキュラは罅を抜けて勇気に飛びかかってきた。

「ああああー！」

今度は勇気が仰け反った。

ドラキキュラは、勇気的首筋に牙を剥き、噛みつきこうとする。

「止めろっ！」

「ガアアアアッ！」

キユウが叫んで、ドラキキュラに飛びつくが、すり抜けてしまう。

勇気的首筋にドラキュラが大きく口を開けて牙を立てようとした……。
「うっぐぐぐぐ！」

その時、ドラキュラの口にニンニクが突っ込まれた。

ドラキュラがもがき苦しむ。

それは、勇気が持ってきたニンニクだ。

勇気から取り上げたニンニクを、召し使いが突っ込んだのだ。

悶えるドラキュラは、勇気から離れる。

ニンニクを吐き出すが胸をかきむしつてのたうつ。

「お前、裏切ったな！」

召し使いはドラキュラに幻滅していたのだ。

「いつもバカ、バカ、と馬鹿にしやがって！ いい気味だ！ へへへっ！」

瞬間、カーテンの隙間から光が差し込んできた。

朝日が昇ったのだ。

「勇気！ 日光だ！」

勇気は慌てて窓に走った。

それに気づいたドラキュラが叫ぶ。

「何をする気だ！ 止めろ！」

勇氣はテーブルの上に駆け上がり、そこから水泳の飛び込みでもするようにジャンプした。

「やめろっ！」

ドラキキュラは叫んだ。

だが、勇氣の身体全体の重みでカーテンは窓から剥がされた。

朝日が窓から一直線にドラキキュラに降り注ぎ、ドラキキュラから青白い炎が上がる。

「嫌だ！ そんな！ この私が！ 嫌だ！ いやっ！ い！ ウボアー！」

ドラキキュラは、みるみるうちに青白い炎に包まれる。

そのまま黒い煙になって、ドラキキュラは消滅した。

朝日が書齋全体を照らした。

隣の部屋の×印状の罫も無くなっていた。

「私は、なんでこんなところに？ しかも、こんな汚らしい服を着て……」

ボンヤリと佇んでいた召し使いがハツとして、狐につままれた表情で狼狽える。

そんな男に、勇氣は声を掛ける。

「あの、すみません。首筋を見せてもらえませんか？」

「は？ なんだね、君は？ この城の城主に向かって首筋を見せろだと？ 失礼な！」

男はプリプリと怒って書齋から出て行った。

だが、勇氣とやり取りをしている間にキユウが男の首筋を見ていた。
「嘔み傷は消えてたよ」

キユウは勇氣にニツコリと微笑んでそう伝えた。

四人はドラキュラを倒す事ができて、ホツとする。

「見捨里市は元に戻ったはずだ。さあ、帰ろう」

キユウはグローブを嵌めた左手を壁にかざすと、勇氣がそれを制した。

「待って！ あの黒い鈴はなんだったの？ 伯爵の言つてた少年は何者なの？」

キユウは観念したように軽く溜息をついた。

「あの少年の名は邪鬼。僕は、あいつを倒すために君の下へ来たんだ。

そして、『黒い鈴』について説明をしたら、君に、全てを話さなければならぬ——」

キユウはそう言うのと、グローブを嵌めた手で『時のトンネル』を作り始める。

「カオスゲート
時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな光の渦ができた。

キユウ、勇氣、ディアーナ、ノノはその中に入った。

静まり返った明るい部屋、床には灰が積もっていた。

それを少年の足が踏みつけ、灰が日射しの中で輝く埃となつて舞う。

「口ほどにもないとは、この事だね」

片目を包帯で隠した少年——邪鬼は溜息をついたが、しばらくすると冷たい笑みを浮かべた。

「何故、私、こんなところに……？」

その頃、花恋が羽心の家の前で狼狽していた。

その首筋から傷は消えている。

「花恋ちゃん！」

羽心も、何故自分が窓際に立っているのか理解できなかつた。

ふと足下を見下ろすと、見慣れない「黒い鈴」が落ちている。

羽心は、怪訝な表情でそれを拾った。

「何、これ？」

e p i s o d e 3 — B o n d s S u n a n d

M o o n 〱 未知の恐怖との遭遇

1 — 少年と黒い鈴

ドラキュラを倒してから一週間後の午前2時。

路地裏の建物の中で、ダイアーナとノノはジャネットに叱られていた。

「あれほど迷惑をかけるなど言ったのに、ドラキュラとの戦いで派手に暴れ回ったようですね」

「……申し訳ありません」

ダイアーナはジャネットに謝っている。

ドラキュラとの戦いで派手に力を使ったせいで、怪がいる時代だけでなく、見捨里市にも影響を及ぼしていた。

幸い、ドラキュラを撃退した事で魔力も綺麗さっぱり消えたが、

魔法を使ったという事実だけは残っていた。

ジャネットは溜息をついた後、ダイアーナとノノを指差してこう言った。

「ディアーナ、ノノ、あなた達には5日間の謹慎処分を与えます。

それまではこの建物から出ない事。分かりましたね？」

「なんで、ノノまで……？」

「ディアーナを止められなかった責任です」

「そ、そんなあ……」

連帯責任という事で、しょんぼりするノノ。

「よって、怪の調査には、彼が行ってもらいます」

そう言っつて現れたのは、緑の髪と瞳を持つ、狼の耳と尻尾を生やした男だった。

「よっー！」

「……あなたは？」

「俺はアプリル・フェルナンデス。人狼だ」

「うえ……」

要するにワーウルフなのか、とディアーナは吐きそうになる。

だが、謹慎処分を受けたため、今は文句を言えなかった。

「ん？ お前らは行かないのか？」

「実は、ドラキュラと戦って、謹慎処分を受けちゃって……」

だから5日間、この建物から出られないんだな、とアプリルは理解した。

「ノノも、連帯責任として今日は怪の調査ができない。それを察したアプリルは、頷いた。

「分かった。お前らが行けないなら、俺が代わりに行ってやる」

「……ありがとう、アプリルおじちゃん」

「じゃ、待つてろよ！ 怪って奴、調査するぜ！

「っていうか、おじちゃん、じゃないんだけどね」

「そう言つて、アプリルは調査に向かうのだった。

そして、見捨里市は月曜日の朝を迎える。

「よし、授業を始めるぞ」

6年2組の教室に、担任の原末先生の声が響いた。

1時間目は国語の授業だ。

真之勇氣は体育の次に国語が好きだったが、今日はまるで集中できなかった。ずっとある事を考えていたのだ。

（あれから、もう一週間近く経つんだね……）

勇氣は先日、ダイアナ達と共にドラキュラと戦い、見事倒す事ができた。

怪の力によって操られていたクラスメイトの桐谷花恋や見捨里市の人達も、助ける事ができた。

それ以来、怪現象は起きていない。

本来ならホツとするところだが、勇氣は心が休まらなかった。

ドラキュラを倒した後、キユウは『邪鬼』という少年と『黒い鈴』について話をした。一週間経つた今でも、その話が信じられなかったのだ。

勇氣はぼんやりと窓の外を眺めると、その時の事を思い出した。

『一連の騒動は、全て邪鬼の仕業なんだ』

時のトンネルを抜けて、書齋に戻ってきたキユウは、宙に浮かびながら勇氣にそう言った。

『仕業って、見捨里市に怪の力が漏れ出してる原因っていう事？』

『ああ。邪鬼の持っている刀は、×印状の罅を作る事ができるんだよ』

キユウの嵌めたグローブが時のトンネルを作り出すように、

邪鬼も、時代を超える罅を作り出す事ができるといふのだ。

『そんな！ だけど、どうしてこの町を？』

『それは……』

勇氣には、何故邪鬼が見捨里市を狙って怪現象を起こすのか全く分からなかった。

すると、キユウは言いかけて首を横に振った。

何か思うところがあるのだろうか。

『このまま邪鬼を放っておいたら、見捨里市が怪によつて大変な事になるのは間違いない』

『大変な事……』

勇気はごくりと唾を飲んだ。

もし、ドラキュラを倒せていなかったら、今頃、町中の人々が吸血鬼になっていただろう。

『どうすればいいんだよ』

『君が何とかするしかない』

戸惑う勇気の傍に、キユウがスウーツと降り立った。

キユウは、真剣な表情で勇気をじつと見つめる。

『何とかって……？ 僕だつてこの町を守りたいけど』

メデューサを皮切りに様々な怪と出会ってきた。

そのたびに恐怖で心臓が何度も止まりそうになった。

そんな怪を操る少年がどれほどに恐ろしい存在かは想像さえ出来ない。

勇気の不安に気づいたキユウは、僅かに笑った。

『大丈夫。僕がついてる。一緒に戦えば、邪鬼を止める事ができるよ』

キユウはグローブを嵌めた左手を握り拳にして、勇気の目の前に突き出す。

勇氣はキユウの唐突な仕草の意味が分からなかった。

キユウはにこりとして左手の拳をさらに突き出す。

そこで勇氣は気が付いた。

グータッチ、というスポーツ選手がよくやっている挨拶だ。

何かをやり遂げた時にやるが、友情や絆を確かめ合う意味もある。

勇氣はとても嬉しくなった。

慌ててグローブを嵌めた右手を握り締めると前に突き出すが、

キユウは幽霊なので実体が存在しない。

二つの拳はぶつからずに、勇氣の拳がキユウの拳の中にスウーツと入ってしまった。

そして二人のグローブに付いた羅針盤のマークが、重なって一つになった。

『キユウは月のマークで、僕は太陽のマーク……』

『太陽と月。昼と夜。つまり、僕らは表裏一体の関係なんだ』

しっかりと語るキユウの声は、何十歳も年上のような深みがあった。

それを聞き、勇氣の心に立ちこめていた不安が、さっと散っていった。

幽霊のキユウは、物に触る事ができない。

キユウの代わりに、勇氣は色々な道具を使って怪と戦ってきた。

仲間もいるし、一人で戦ったわけではない。

『僕達は二人で一つなんだね!!』

勇気の言葉に、キユウは真剣な目つきで頷いた。

勇気もキユウの目を真つ直ぐに見て頷いたが、キユウの表情が直ぐに曇った。

『どうしたの?』

『えっ、ああ……』

そう言いながら、霊体のキユウは背を向けるとまた天井の方に音も無く上がってしまつた。

勇気に不安な表情を見せなくなつたようだ。

『まさか、邪鬼がああ鈴を手に入れていたとは思わなくてね』

『それって、ドラキュラが僕に振らせた鈴の事?』

背を向けていたキユウが振り向き小さく頷いた。

『あれは、オシリスの鈴と言って、

僕のような幽霊がああ鈴の音を聞くと、苦しんだ拳句、消滅してしまうんだ』

『えええ?』

『ちなみにオシリスは、エジプト神話に出てくるあの世を治めている神様だよ。

ツタンカーメンを倒しに行った時の事を思い出してごらん』

『……あ』

勇気がドラキュラに言われて鈴を振った時、キユウは確かに苦しんでいた。

『それで、あのまま鈴を振ってたら、キユウ、本当に死んじゃったの?』

『僕は幽霊だから元々死んでるよ。』

ただ、消滅して、二度とこの世に現れる事はできなくなるだろうね』

『そんな!』

勇気はゾツとした。

『邪鬼は、余程僕の事が邪魔なんだろうね』

『鈴を持って邪鬼が現れたらどうしよう……急に鈴を振られたりしたら……』

不安に俯く勇気を、キユウは明るく励ます。

『大丈夫、君が振らなければあの鈴はただの鈴だ』

『どうして?』

『あの鈴は、君のような特別な力がある人間が振らないと効果がないんだ。』

だから、邪鬼はドラキュラに言って君に鈴を振らせるように仕向けたんだよ』

『そうだったんだ……』

オシリスの鈴を持って邪鬼が現れたとしても、

勇気さえ振らなければ、キユウが消滅する事はない。

『僕、絶対振らないよ! もし100万円くれるって言われても振らない!』

『当たり前だろう。1億円で1兆円でも振ってもらったら困るよ』

キユウはそう言つて笑うと、いつもの優しい表情に戻つた。

キユウとのやり取りを思い出していた勇氣は、はたと重要な事に気がついた。

(そういえばあの鈴、どこに行つたんだろう……)

確かあの時、ドラキュラに向かつて鈴を投げつけて、×印の罅に入つて……。

「ねえねえ、勇氣、ねえつてば、ねえ」

ふと、誰かの呼ぶ声が聞こえた。

ハツとして教室を見ると、斜め後ろの席に座っている羽心がこちらを見ていた。

「また、変な夢見てたんでしょ？」

「え？」

「だって、さつきからずっとボオーツとしてたもん」

羽心は、黒板に教科書の詩を書き写している原末先生にバレないように、小声で尋ねた。

勇氣は時々ボオーツとする事がある。

そういう時に限つて、変な夢を見てしまうのだ。

しかし、今回は夢を見ていたわけではない。

「違うよ、ちよつと考え事をしてたんだ」

「勇気が？ 今日の給食に何が出るのか考えていたとか？」

「そんな事じゃない」

怪を倒せば怪現象は消え、それが起きた事も人々の記憶から消え、全てが元に戻る。ドラキュラに襲われた羽心も、当然その事を忘れてしまっていた。

(羽心は気楽でいいよなあ)

勇気は相変わらず苦勞を分かってくれない羽心に、小さな溜息をついた。

「ところで、話があるんだけど」

「話って、今授業中だよ」

「今じゃなくてもいいんだけど、ちょっと相談したい事があつて」

羽心は、困つたような表情を浮かべていた。

いつも明るい羽心にしては珍しい。

「どんな話なの？」

勇気は少し心配になり、羽心に尋ねた。

と、その時、大きな人影が二人の間に立った。

「真之、そんなに私の授業は退屈かね？」

「えっ、あ、退屈じゃないです」

慌てて答える勇気に呆れながら、原末先生は羽心の方を見た。

「真之が授業に集中していないのはいつもの事だが、白鳥、君もとはな

羽心は、勇気と違って勉強がよくできる。

いつもは授業も真面目に受けていて、先生からの評価も高い。

「ごめんなさい」

素直に謝る羽心に、原末先生もそれ以上何も言えないようだ。

「まあ、分かればよろしい。二人とも、ちゃんと授業に集中するように。詩の朗読をするぞ」

原末先生はそう言うのと、教壇に戻ろうとした。

「先生！」

突然、窓側の一番前の席に座っていた男子生徒が手を挙げた。

「どうした？ 朗読してくれるのか？」

「そうじゃないです。外から、変な臭いがするんです！」

「何だって？」

原末先生は男子生徒の傍に行くと、開いている窓から顔を出し、臭いを嗅いだ。

勇気も、傍の窓を開け、鼻をヒクヒクさせてみた。

「ホントだ……」

原末先生は頭を捻った。

「なんだ、この刺すような臭いは……」

クラスメイト達は次々に窓を開けて臭いを嗅いだ。

おかげで、教室の中に妙な臭いがどんどん充満していく。

「何だか、頭が……」

「うん、気持ち悪くなってきた……」

女子生徒が声を上げたのを聞いて、原末先生が慌てて声を上げた。

「とりあえず、みんな窓を閉めるんだ。今日は少し風が強いからそのせいだろう」

勇気も顔を顰^{しか}めながら、皆と同じように窓を閉めた。

だが、羽心だけは、窓の外を見ながら、何故か神妙な表情になっていた。

「もしかしたら、あの現象は……」

2 — 謎の火の玉

その頃、アプリルは、見捨里市の異臭事件を調査していた。

「うえ……確かに臭いぜ」

アプリルは鼻をつまみながら調査していた。

人狼であるアプリルは、嗅覚も鋭いため、異臭を敏感に感じてしまうのだ。

彼はディアーナと違って頭が悪いため、慎重に調査せず、ガシガシ行ってしまう。

「つたく、誰がやったのか全然分かんねえー！」

……あ、そういえば、書齋に色々と情報があるってあの女は言ってたな。

よし、行ってみるか！」

アプリルは調べた後、書齋に向かうのだった。

放課後、勇氣は羽心と一緒に家に帰っていた。

あれ以降、奇妙な臭いは漂ってこなかった。

「朝のあれは何だったのかな？」

「体育の授業で運動場にも出たけど、全然臭わなかったよね」

勇氣は不思議に思いながら首を傾げる。

すると、ふと何かに気付いたらしい羽心が立ち止まった。

「もしかして……」

「何が、もしかして、なんだよ？　ってか、僕に相談したい事があつたんだよね？」

羽心は真剣な表情で呟いた。

勇気が授業中に聞いた言葉を思い出すと、羽心は慌てて首を横に振った。

「あれは別にいいの。勇気に相談しても、多分分らないと思うから」

「分らない？」

「とにかく、大丈夫だから。それじゃあ」

羽心はそう言うのと、そそくさと駆け出して去ってしまった。

「なんだよ、まったく」

相談相手として頼りにならないと思われたのだろうか？

確かに、小さな頃から羽心は「しっかりしたお嬢ちゃんね」と大人達に褒められていた。

それに比べて、自分はそんな事を言ってもらえなかった記憶がない。

だが、最近では怪狩りを始めてから、少しは頼りになる存在に成長できたような気がしていた。

(怪を倒すと記憶が消えてしまう羽心にはそれが分かってもらえないのが、辛いところ

だけど)

勇氣は溜息を漏らしながら、家に到着すると、玄関のドアを開けた。

家に入ると、電話の呼び出し音が鳴っていた。

慌てて出ると、それは母親からだった。

「勇氣、悪いけど買い物行つてきてくれる?」

「お母さん……。僕、今帰つたばかりなんだけど」

「しようがないでしょー。」

夕飯の材料を買つて帰るつもりだったけど、仕事が忙しくなつちやつたのよ」

それを聞いた勇氣は心の中でぼやいた。

(はあく……。みんなの町の平和を守つてる僕に対して、扱いが悪すぎるよ……)

だが、母親の次の言葉を聞いて少し気が変わった。

「天ぷらにするつもりで、ある程度の用意はしてあるの。勇氣は天ぷら、大好きでしょ」

「?」

「え? 天ぷら……」

確かに、天ぷらは好きだし、特に母親の揚げたての天ぷらは大好物だった。

熱々の天ぷらを想像しただけで、香ばしい衣と具の美味しさが口の中に広がった。

母親は看護師の仕事で忙しいのに、たまに手料理を作つてくれる。

母親の天ぷらを食べられる機会を逃したくない。

「うん、分かったよ。何を買ってくればいいの？」

勇気は電話の脇にあるメモ帳に買い物リストを書きつけていった。

その異変が起きたのは、スーパーで買い物を済ませ、再び家の玄関を潜った時だった。

「これって！」

刺すような臭いが鼻を刺激した。

授業中と同じ臭い、いや、あの時よりももっと強烈な臭いだ。

「えっ？」

勇気はその臭いがどこからするのか、周りを見回した。

その時、30mほど向こうの道路に、炎が立ち昇った。

そして空から、真っ赤に燃えた火球が飛んできた。

「うわああー！」

火球は近くの家の庭に落ちて、炎を噴き上げた。

見ると、いくつも火球が飛んでくる。

火球は次々と地面に落ち、至るところから炎が上がった。

「ど、どうなってるの？」

勇気はあまりの恐怖で逃げる事もできず、その場で震えた。

そんな勇氣に向かつて、火球が飛んで来る。

「うわあつ！ 嫌だ！ 来ないで！ うわつ、わあああ!!」

火球は勇氣の目の前に迫った。

「いたたた……」

勇氣は頭に軽い痛みを感じた。

見ると、目の前に玄關のドアがある。

どうやら、ドアに頭をぶつけたようだ。

「火の玉は？」

勇氣は空を見たが、どこにも火球はない。

周りを見るが、炎も上がっていない。

野菜などが詰まった買い物袋が手の先で揺れている。

勇氣はハツとなると、慌てて家に駆け込む。

書齋の前までやってくると、勢いよくドアを開けた。

「よっー！」

「やあ、一週間ぶりだね」

天井近くに浮いたキユウが振り向いて言った。

キユウは高い位置にある窓から外を眺めていたのだ。

書齋は半地下だから、壁の上の方に窓はあった。

また、見慣れない男が立っている。

「き、君は？」

「俺はアプリル・フェルナンデス。あんたは誰だい？」

「真之勇気です」

「女の子だったら歓迎してたがね」

「……。話をするよ。キユウ、また夢を見たんだ」

勇気はキユウに夢で見た内容を話そうとした。

すると、キユウがスウーツと勇気の目の前に下りてきて、口を押さえる仕草をした。

「言わなくても分かるよ」

「どうして分かるの？」

キユウは背後の高い位置にある窓を指差した。

窓の外の空に小さな×印の罅が浮かんでいた。

「な？ 罅？」

「この罅が現れて、奇妙な臭いが漂い始めたからね。

放っておくと、数日後には君が見た夢が現実のものになってしまうよ」

「予知夢かよ。ガキは勘が鋭いからな」

「アプリルさん！」

アプリルは男性には冷たかった。

「ええと、とにかく、見捨里市が火の玉で焼き尽くされちゃうなんてダメだ！」

「火の玉？」

「そうだよ。火の玉が飛んでくる夢を見たんだ」

キユウは険しい表情になって思案した。

「知られているのは臭いだけなんだが、実はもつと恐ろしい存在なのかも知れない」

「だったら、なおさら早く怪を倒さなくっちゃ！」

「だろーな。俺もついていくぜ」

勇気は買い物袋を机の上に置いて、グローブを嵌めた。

アプリルも冒険の準備をした。

「だけど、今回はかなり手強そうだ。それに、武器になるものも今のところ思いつかない」

「おいおい、まともに戦えるのは俺だけかよ……」

アプリルが溜息をつくくと、キユウは買い物袋を覗き込んだ。

「ところで、これは？」

「今夜はお母さんが天ぷらを揚げてくれるんだ。南瓜、玉葱、春菊」

かぼちゃ

たまねぎ

「いや、そうじゃない」

袋の中の食材の説明を始めた勇気を、キユウが遮った。

袋の一番底にある箱にキユウは興味を持っていた。

「それは『テンプラステルン』っていつて、揚げ物の油を捨てる時に使うんだ。

この粉を入れると、鍋の油がゼリーみたいに固まるんだよ」

「へえ。なるほどね……油の凝固剤か」

勇気が袋から取り出すと、キユウは興味深そうに箱の注意書きを眺める。

「これが使えるかもしれない」

「え？ テンプラステルンが？ それを怪のいる時代に持つて行くって事？」

「その通り。さあ、早く」

キユウは浮かびながら、勇気の傍に寄った。

勇気はそれを確認すると、書齋に隠していた靴を手に取り、キユウの傍に立つ。

「アプリルも、勇気とキユウの前に立った。」

「へえ、何も言われなくても準備できるようになったんだね」

「当たり前だろ。でも、心の準備は全くできてないよ」

「そういうのは、勇気さえあれば何とかなるものさ」

「おいおい、俺は無視なのかよ」

無視されたアプリルは、ちよつとだけイラつと来た。

キユウは楽しげに微笑みながら、目の前の壁を見た。

「さあ、怪を倒しに行くよ。——怪狩りの時間だ！」

キユウはグローブを嵌めた左手を、壁の前にかざし、呪文を唱えた。

「時空貫通」
カオスゲート

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

キユウとアプリルが、光の渦の中に消えた。

勇気も、渦の中に飛び込んだ。

「んんんん！」

「ひょー、楽しいぜー」

時のトンネルの中を飛んでいく。

やがて、トンネルの奥に、道路が見えてきた。

「うわつと！」

「よつと」

勇気は尻もちをつかないようにとバランスを取りながら、トンネルの外に出た。

アプリルは、人狼らしく身軽に動く。

二人は道路の上に綺麗に着地する。

「上手く出られるようになったじゃないか」

「流石に僕だつて慣れるよ」

宙に浮かんだキユウが、グッドの意味で親指を立てた。

時代を超えたのは、今回で7回目だ。

「だけど、キユウは……？」

勇気とアプリルの目の前には、樹木や草の緑で彩られた町が広がっていた。

時刻は夕方のように、薄暗くなり始めていた。

周りの風景を見て、勇気は首を捻る。

長く延びた道路を挟んでポツンポツンと家々が点在していて、

勇気の知っている家の形とは随分違っていた。

家自体が大きく、広い庭は芝生になっていて、

家の前に止まっている車も、普段見慣れている車とは違い、何だか古めかしい形をしていた。

「キユウは、1952年のアメリカだよ」

キユウはフワフワと宙に浮かびながら、二人にそう言った。

3 — 保安官との出会い

「アメリカ……」

また外国に来た、しかも70年近く前だ。

「正確には、アメリカのウエストバージニア州ブラクストン郡フラットウツズ。

って言ってもよく分からないよね」

「長ったらしいぜ」

「まあ、場所はともかく、今から一週間後の9月12日の夜、

この町の丘に、通称『3メートルの宇宙人』が現れるんだ」

「宇宙人???」

勇気とアプリルは思わず素っ頓狂な声を上げた。

「『フラットウツズ・モンスター』とも言ってるね。世界中で話題になった怪だよ」

「おいおい、何だよそれ」

「フラットウツズ・モンスター」

1952年のアメリカ合衆国ウエストバージニア州で、

夜空に光る正体不明の物体の目撃情報が相次いだ。

その後、UFOが墜落したと思われる場所へ様子を見に行った近隣住民によれば、現場には焼け付くような不快な臭いが立ち込めていたらしい。

さらに、その場には「シューツ」と音を立てる謎の生物がいた。

玉葱のような頭に大きな光る目を二つ備えた丸い顔で、

その姿はまるで巨大な梟ふくろうのようだったという。

この怪物は、見つかった地域の名前を取ってフラットウッズ・モンスターと呼ばれ、日本でも「3メートルの宇宙人」として話題になった。

(3メートル? 玉葱のような頭に、梟のような姿?)

アプリルの頭が混乱する。

「今回の怪は、宇宙人かよ」

「『もし宇宙に我々しかないなかったらスペースがもつたいない』、

カール・セーガンはそう言った」

「え? カール……」

「誰だよ、そいつ」

「アメリカの有名な天体物理学者だよ。」

英語の『SPACE』には『宇宙』と『空間』の意味があるから、その二つを掛けた言葉なんだ」

「はあ……？」

勇気とアプリルはきよとんと聞き入った。

「地球は太陽の周りを回る惑星で、太陽系の一員に過ぎない。

そして、太陽系は1000億個の星を抱えた銀河系の一員に過ぎない。

それなのに、地球にしか生物がないなんてむしろおかしいだろ？」

「はあ、まあ……でも、だったら宇宙人が地球にいるって事なの……？」

「いや、カール・セーガンは地球に別の星の知的生物が来ているとは言っていない。

でも、恐ろしい怪がいるのは確かだ」

勇気はそれを聞き、持っていたテンプラステルンをチラリと見た。

（こんなので倒す事ができるのかな……）

何だか不安な気持ちになる。

しかし、今さら怪狩りをやめるわけにはいかない。

怪を倒さない限り、元の時代には戻れないのだ。

ディアーナがいれば途中撤退できるのだが、生憎、彼女は現在謹慎中だ。

「だけど、ちよつと待って」

勇気はふと、ある疑問を抱いた。

「どうして、12日に来なかったの？」

フラットウッズ・モンスターが現れたのは、一週間後の12日なのだ。「この町に一週間もいるのか?」

すると、キユウは首を横に振った。

「別に、一週間ものんびりしているつもりはないよ。今日でよかつたんだ。

今日の夜、フラットウッズ・モンスターが初めて現れるからね」

「どういう事だよ」

「世間的には9月12日に現れた事が有名だけど、実は9月5日の夜にも現れているんだ。

ただ、その時は目撃者も少なく、みんな信じなかつたんだよ」

キユウは、周囲を見渡した。

「この付近の丘に現れるはずだ」

アプリルと勇気も周囲を見回す。

キユウは今日を選んだ理由を力強く言う。

「人々がまだパニックになつていない今日なら、

被害者を出す事なく、怪を倒す事ができるはずだ」

「そこまで計算してたんだ……」

キユウは、被害を最小限に食い止めたいと思つているのだ。

怪を倒せば全て元に戻るが、それでも人が傷つく姿は見たくない。

勇気もアプリルも、それは同じだ。

「ん？」

三人の傍に、一台の車が止まった。

「おい、坊や達、こんなところで何をしてるんだい？」

車を運転していた男性がドアを開けて下りてきた。

車の側面には『S H E R I F F』の文字が大きく記されている。

「シエリフだよ。つまり保安官だね」

キユウは勇気の耳に囁いた。

制服のお腹がズボンのベルトの上からはみ出している太った男性が近づいてくる。

その胸には星型のバッジが付いていた。

アメリカは日本より大きいので、警察官の他に、地域を守る保安官という仕事がある。

そんな話を聞いた事があると勇気は思った。

「この人が保安官なんだ……」

勇気はキユウだけに囁いていたつもりだったが、それは巨体の男性にも聞こえてい

た。

「その通り、俺は保安官だ。だから尋ねるが、君達は何をしている？」

「えっと、僕は、あの」

困った勇氣は助けを求めて背後をチラリと見たが、キユウも上手い言葉が見つからない。
い。

「アプリルには、気づいていなかった。」

「見ての通り、ここは小さな町だ。俺はこの辺りに住んでいる子供は全て覚えている。」

君達の顔は初めて見たな。名前は？」

「アプリル・フェルナンデスだぜ」

「し、し、真之勇氣です」

「シンノウウキ？ 変な名前だな」

「ちよつと遠いところから来て……」

「遠く？ それはご苦労様だな」

保安官は優しく接してきたが、酷く疲れた顔をしている。

今日は、余程忙しかったのだろう。

看護師の仕事をする夜勤明けの母親の顔に似ていた。

そんな時に下手な事を言うと、母親はムツとした顔でキツイお説教を始める。

だが、目の前の太った男性は、腰にピストルをぶら下げた保安官だ。

勇氣は緊張して急にドキドキしてきた。

「あ、その……」

「まさか、家出とかじゃないよな？」

保安官の声のトーンがさつきより低くなった。

既に家出と決めつけているのだろう。

そんな相手に、見捨里市を救うために未来の日本から来ました、と言っても通じるはずがない。

「どうしよう？ 助けてよ！」

思わず背後のキユウを振り向き、囁いてしまった。

それが失敗であり、保安官の疑いをますます深めた。

「さつきからチラチラと後ろを気にしてブツブツ言ってるのは何故かな？」

「あ、そ、それは」

幽霊のキユウの姿が見え、声が聞こえる人間は、勇気と退魔師だけだ。

保安官はじつと勇気を睨みつけた。

「まさか、目から光線を出す気じゃないだろうね？」

「ヒーローかい？」

「冗談だよ」

「君もワシントンDCの事件は知ってるだろ？」

「何だそりゃ」

「ホワイトハウスの上を幾つもの怪しい光が飛び交ったあの事件だよ。」

あれ以来、アメリカ中が空飛ぶ円盤や宇宙人に怯えてる。まったく、バカバカしい！
そう吐き捨てた保安官は、自分の腕のバッジと腰のホルダーを指差した。

「だがな、俺はこのバッジをして、ピストルを持っている。それがどういふ事か分かるか？」

「あんた自身で町を守るのか？」

「その通り！ 俺はどんな相手だろうと、この町の平和を乱す者は絶対に許さん！
相手が宇宙人であっても、そして君のような子供と狼であつてもね」

保安官は皮肉な笑みを顔に浮かべた。

「今日は忙しくて昼飯を食い損ねたんで、機嫌が悪い。」

君達のせいで面倒になるのは避けたいんだ。分かるね？」

保安官は、勇気達を再び疑つて見つめた。

勇気は何とか自分の状況を説明したいが、それは無理というものだ。

「えっと、あの……その……」

ついキユウを頼つて背後を見てしまう。

保安官の目つきがさらに険しくなった。

「後ろに何かあるんだ？ とにかく、保安官事務所に来なさい」

保安官は勇気の腕を掴んで、車へ引っ張った。

「えっ、あの、ちよつと！」

「今説明したように、俺は機嫌が悪い。素直に言う事を聞くんた」

「でも、僕には用事が。だから、あああ」

キユウは宙に浮かびながら、連れて行かれる勇気を見て項垂れた。

「うゝん。流石にこれは笑えないね」

「俺達も追いかけてようぜ」

「ああ」

保安官は勇気を助手席に押し込むと、ドアを力任せに閉めた。

そして車の腕を回って、運転席に向かって巨体を動かした。

頭につばの広い帽子を被っていなかったら、力士にしか見えないと勇気は思った。

アプリルは、車を走って追いかけていた。

「キユウ、ワシントンDCの空飛ぶ円盤事件って何？」

勇気は前を向いたまま後部座席のキユウに語りかける。

「僕達が来ている今は1952年の9月だけど、その2ヶ月前の7月に、

ワシントンDCの上空を幾つもの怪しい光が飛び交う事件があったんだよ」

「そんな事があったの？」

「それで、宇宙人の侵略だつて大騒ぎになったんだ。

21世紀になった現在では自然現象の悪戯だと言われてるけどね」

「あつ、そうかい」

ガチャと運転席側のドアが開いて保安官が太った身体を乗せてきた。

その体重で車が運転席側に傾く。

「さて、変な名前の坊や。出発だ」

保安官はエンジンを掛けると、車のアクセルを踏んだ。

4
— アメリカの町

暮れなずむ田舎道を車が走る。

周囲には人家がポツンポツンと点在するだけで、風景のほとんどは牧場の草原か山の木々だ。

勇気はキユウを気にはいけなないと、只管正面を見て助手席に座っていた。

アプリルは、繰り返し追いかけている。

すると、背後から声が語りかけてきた。

「勇気、このまま市街地に行つてしまつたら、モンスターから離れすぎて倒すなんて無理だ。」

トイレが我慢できない、と言うんだ」

勇気は前を向いたまま軽く頷くと、隣で運転する保安官を見た。

「あの、すみません。トイレに行きたいんです。車を停めてくれませんか？」

「トイレ？ 保安官事務所まで我慢しなさい」

機嫌の悪い保安官は素っ気ない。

「でも、漏れそうです。我慢できません！」

勇氣は股間に手を当ててもぞもぞしながら言つてみた。

「なあ、君を他の悪人と一緒にしたくないが、

こういう時にトイレに行きたいと言う奴に限つて、逃げ出す事を考えてるんだ。

申し訳ないが、我慢しなさい」

勇氣のガツカリと同時に、背後からも落胆の溜息が聞こえた。

「あーあ」

「これは笑えないね」

その時、保安官の方から大きな音が響いた。

びっくりして勇氣が保安官を見ると、再び音が鳴った。

保安官のでっぷりとしたお腹が鳴っているのだ。

「くそ！ 腹が減りすぎてるんだ」

そう言つた保安官は帽子の上から頭をかいた。

さつきまでの厳しさが形無しだと照れたのだろう。

車の前方には『ナンシーのキッチン』の看板がライトで照らされている。

若い女性が食べ物の載つた皿を、可愛いポーズで運んでいる絵が描かれていた。

この絵の女性がナンシーなのだろう。

「仕方ない。君はトイレ、俺は食事だな」

保安官は道沿いの食堂にハンドルを切った。

「ぶわっ、はははっ！」

テーブルを挟んで座った保安官が大声で笑った。

何故かという、勇気が今までの経緯を正直に話したからだ。

フラットウツズ・モンスターが現れる場所から遠く離れてしまったら怪を倒しようがない。

怪を倒さないと見捨里市を救えないのだ。

「勇気、これは正直に話すしかないね」

「保安官もこの町を守ろうとしてるし、話は分かるみたいだぜ」

キユウのその提案に勇気も納得したのだ。

話をするタイミングは、保安官のお腹がいっぱいになり始めてからにしたのだが……。

涙を流して大笑いする保安官は、目の前に置かれた7本目のホットドッグに手を掛けた。

「それで、君は、そのキユウという幽霊の少年と、アプリルという狼と一緒に、

ここに現れるモンスターを倒しに来たというのかい？」

「そうです」

勇氣は消え入りそうな声で答えた。

全く信じてくれない保安官に、途方に暮れていたのだ。

「しかも、未来の日本から来たんだろ？ いやー、これは笑えるなあ」

「だよなー」

保安官は笑いながらホットドッグの真ん中のソーセージの挟んである部分を少し膨ら
いた。

普通はソーセージにケチャップやマスタードを付けるが、

保安官は、テーブルの上に置いてある砂糖をサラサラとかけるのだ。

（ホットドッグに砂糖をかけるなんて……）

（味覚が変わってるな）

勇氣は気持ち悪いと思ったし、保安官が太っている理由も分かった気がした。

でも、今はそんな事はどうでも良い。

保安官に勇氣、キユウ、アプリルがここに来た理由を信じてもらい、

ここから解放されるかが重要だ。

「それにしたって、こんな小さな町に宇宙人が何をしに来るといふんだね。

まったく、俺の子供の頃は嘘をつくにしてももう少しマシな嘘をついたものだぞ」

保安官は呆れた様子で、砂糖がけの特製ホットドッグを頬ばった。

店内のラジオから音楽が流れており、

三味線のような音色の楽器が奏でる軽快なメロディーに乗せて歌手が歌っている。

『カントリー&ウエスタン』というアメリカの民謡だろう。

勇氣は、父親の書齋のCDプレイヤーで聴いた事がある。

もう店内に入って30分近く、こんな聴き慣れない音楽を耳にしていた。

何組かいた客は既に帰り、店内には、勇氣達と店員の女性しかいなかった。

(嘘なんかじゃないのに……)

窓の外は日が落ち、暗くなっている。

フラットウツズ・モンスターはもうすぐ現れるはずだ。

(どう説明したら信じてくれるだろう……)

勇氣もアプリルも背後のキユウも解決策が見つけれなかった。

アプリルはあまり度数が高くない酒を飲んでおり、

困った勇氣は目の前に置かれていたオレンジジュースを一気に飲み干した。

すると、空になったコップに女性の手がピッチャーからジュースを注いだ。

「この子は別に、何も悪い事してないんでしょ？」

この店を経営するナンシーだ。

看板では若い女の子だが、本物は白髪交じりのおばさんだ。

「だけど、ナンシー、この子は自分の後ろにキユウという幽霊の友達がいると言うんだよ」

「こんにちは」

「「え？」」

ナンシーは勇気の背後をじっと見て微笑んだ。

勇気、キユウ、アプリルは声を上げた。

「ナンシー、君には幽霊が見えるのか？」

保安官も目を丸くした。

そんな勇気達の反応にお構いなく、ナンシーはキユウの方を見て話しかけようとする。

勇気もキユウもアプリルも、話を通じると期待して見返した。

「久しぶり、私のバニーちゃん。子供の時はいつも遊んでくれてありがとう」

「バニーちゃんって誰だ？」

保安官がナンシーに尋ねる。

「ああ、バニーちゃんっていうのはね、私以外には見えなかった大切な友達よ。

子供の時はそんな空想の友達がいるものよ。そうよねえ？」

そう言ったナンシーは、勇気の頭を撫で始めた。

(僕は空想の友達と遊ぶほど幼くないよ！)

(でも、お前はガキだしなあ)

勇氣はナンシーの対応にムツとしたが、口には出さなかった。

アプリルは、勇氣を子供扱いしていた(実際、子供だが)。

「ナンシー、君はいいからカウンタに戻って」

「はいはい」

笑いながら去って行くナンシーを、保安官は笑って見送る。

(これから恐ろしい事が起きるのに……)

どうすれば良いか分からない勇氣とアプリルは腕を組んだ。

さつきまでは聴き慣れない音楽と想っていたラジオの音楽が鬱陶しくなってくる。

「勇氣、アプリル、ラジオだ！」

背後からキュウが語りかけてきた。

「フラットウツズ・モンスターが現れる前に電波障害が起きたらしい」

「ん？ つまり、モンスターがやって来る前にラジオが聴けなくなったのか？」

「ラジオは5分間、聴けなくなったそうだ。それに、地震も起きたそうだ」

「フラットウツズ・モンスターが現れる前に地震も起きたんだね？」

「そうだ。それを保安官に伝えるんだ」

「保安官にラジオが聞こえなくなる事と、地震が来る事を伝えれば良いんだね？」
「そうだ」

勇気は保安官に向き直るとその事を伝えようとした。

「保安官さん、よく聞いてください。これからラジオが……」

「あの奇妙な独り言は聞こえてたよ」

保安官はやれやれと首を振った。

厄介な子供と狼に出会ってしまったとうんざりしたのだろう。

「あらっ、どうしたのかしら？」

「どうしたんだ？」

カウンターにいたナンシーが声を上げた。

保安官が立ち上がって顔を向けると、ナンシーはラジオを指差した。

「ラジオが、急に聞こえなくなったの」

ラジオのスピーカーからは、ノイズだけが響いていた。

「さっきまで音楽が流れてたよね？」

「ナンシー、急にラジオが壊れただけなんじゃないのかい？」

「そんなはずないわ。先月買い替えたばかりなのよ」

その言葉に、キユウはハツとなった。

「来るぞ！」

「えええ!!？」

瞬間、床が大きく揺れた。

5 — 頭上の脅威

「地震よ！」

「違う！ ただの地震じゃない」

ナンシーが叫ぶと、キユウが首を横に振った。

「な、な、なんだと？」

「これはただの地震じゃないってキユウが言ってる」

「まさか？ これがさっき言っていたラジオの故障と地震……？」

勇気が保安官に声をかけると、保安官はおろおろとした。

「行くぞ！」

「ああ！」

キユウとアプリルはドアの方へと飛んで行った。

「ちよつと待って！」

勇気も慌てて後を追おうとするが、そんな勇気の肩を保安官が掴んだ。

「君、どこに行く気だ！」

「地震だったら外に出るのは危ないわ。カウンターの下に隠れて」

ナンシーがカウンターの傍に立って勇気を呼ぶ。

勇気は保安官の手を振り払った。

「これはただの地震じゃない！」

「これが君の言うモンスターの仕事なのか？」

保安官のその言葉を聞いたキユウは勇気に向いた。

「そうだ！ でも勇気の夢の通りなら、

フラットウツズ・モンスターは僕が知っているよりも恐ろしい怪だ！」

キユウの声は勇気とアプリル以外には聞こえない。

勇気は保安官に絶対に信じて欲しいと願って言う。

「キユウが知っているよりも恐ろしい怪なんです。ここの町が燃えちゃうんです！」

「なんだと？ 燃えるってどういう事だ？」

保安官は勇気をまだ信じ切れなかった。

「説明は後です！ 絶対に倒さない！」

勇気は、そのまま外へと飛び出した。

「燃えるってどういう事なの？」

「君のバニーちゃんは空想だったんだろ？ でも、あの子の話は空想じゃないのかもしれない」

ナンシーは怯えながら、保安官の方を見る。

保安官は勇気が出ていったドアの外を見て、唇を噛んだ。

「急がなくなつちや！」

「だな！」

勇気は、キユウと、アプリルと共に、怪がいるであろう丘へ向かった。

すると前方から、一人の女性が走ってきた。

「助けて！」

「どうしたんだ？」

サンダルを左右逆に履いているため、余程慌てて出てきたのだろう。

アプリルが声をかけると、女性は来た道を指差した。

「家の裏にある森の上に、変な光が落ちたのが見えたの！」

彼女の家は、丘の上にあるらしい。

「どうやら、この人が最初の目撃者らしいね」

キユウが女性を見ながら言う。

「光って、まさかもう火の玉が、か？ おい、避難しろ！」

やがて前方に、丘の上にぽつんと建っている一軒家が見えてきた。

家の向こうには、森が広がっている。

「さっきの人の家のようだね」

「怪は、あの森の中にいるんだよな？」

勇氣は、テンプラスチックを強く握り締めると、意を決して森の中へ入った。アプリルも、後に続いた。

森の中は、梟の声だけが静かに聞こえていた。

明かりはなく、真つ暗だ。

「懐中電灯を持ってきたらよかった……」

「だよなあ」

勇氣とアプリルは、足場を確かめるように、慎重に前へと進んで行く。

「ねえ、怪はどこなの？」

「さあ、この辺りだと思っけど」

「どこにいるんだよ……」

三人は周りを見るが、それらしき気配はなく、火球の光も全く見当たらない。

「もしかして、もう町の方へ行つたのかも……」

「おい、不安になるな！」

勇氣は最悪の事態を想像して、唾をぐくりと飲み込んだ。

アプリルはそんな彼を勇氣づけようとすると、地面がまた大きく揺れた。

「うわー！」

「!?」

次の瞬間、上空から押し付けるような強い風が吹いた。周りの木々が激しく揺れる。

勇気が驚いて顔を上に向けると、夜空に眩い光が現れた。

それは、大きな丸く赤い物体だ。

「あれってー！」

「UFO（じゃねえか）!!」

勇気が読んだ怪奇現象の本に載っていたイメージイラストとそっくりだった。

「どうやら、僕達の立っているこの場所に着陸するようだね。」

僕は幽体だから平気だけど、君達はこのままだと押し潰されちゃうよ」

「はあ?」

勇気とアプリルは逃げようとするが、押し付ける風が強くて上手く走れない。

二人はバランスを崩し、地面に転んでしまった。

UFOが迫ってくる。

「あああー！」

「ちっ……っ……！」

アプリルは舌打ちして、立ち上がった後に身構えた。

「勇気は何とか立ち上がったものの、またバランスを崩してよろけてしまう。」

「勇気、それは流石に笑えないよ！」

「分かってるってば！ ああ、あああ！」

UFOが今まさに着地しようとする。

瞬間、誰かが勇気の腕を強く引つ張った。

轟音と共に木々が押し倒され、UFOが森に着陸した。

同時に、揺れが収まった。

「勇気！ アプリル！」

キユウは浮かびながら二人の姿を捜すが、どこにも見当たらない。

「そんな！ 勇気！ アプリル！」

「ここ、ここだよ……」

「俺は平気だぜっ」

声のした方を見ると、勇気とアプリルはUFOの傍にある草むらに隠れていた。

「無事だったんだね！」

「ああ、保安官が助けてくれたんだぜ」

二人の後ろでは、荒い息をついた保安官が地面に伏せていた。

彼がとつさに勇気の腕を掴んで、UFOの着陸を避けたのだ。

「君の話信じられない。いや、君達と背後のキユウ君を信じるよ」

保安官は起き上がりながらUFOを見て、目をパチクリさせた。

「でも、これは、信じられない!」

「僕だって、数ヶ月前まで信じられなかったけど、怪は本当に存在してるんです!」

「ああ……この世界とは常識が違うんだな」

勇気は立ち上がると、UFOの方を見た。

すると、UFOの機体の底の一部が、ゆっくりと開いた。

「隠れるんだ!」

「人間はそうだろうが、俺は逃げも隠れもしない。さあ、かかってこい!」

「……」

キユウの言葉に息を呑んだ勇気は、

保安官を連れて近くの岩の隣に慌てて隠れ、岩の背後からそつと覗く。

アプリルは狼の姿に変身し、咆哮して前に立つ。

UFOは、学校の教室の一番後ろから黒板を見たくらいの位置にあった。

機体から開いた部分は、幅の広い滑りのようなスロープになった。

そこに緑のスカートのような下半身が下りてくる。

腰の両側には異常に長い手の指が見えてきて、骸骨のような細い腕と肩も見え始めた。

大きな襟がついた分厚い鎧のような緑の上半身が露わになってくる。

そして、一番上には玉葱のような頭に、大きな鼻のような目があった。

「あ、あれが……!」

「あれが!」

「あれが?」

勇気もアプリルも保安官も同時に眩き、アプリル以外、慌てて口を塞いだ。

その得体の知れない存在は、奇妙な音を発して大きな目を怪しく白く尖らせた。

今まで戦った怪とはまるで違う。

3 m近くある、異形の物体。

勇気達が戸惑っていると、キユウが口を開いた。

「あれが、フラットウツズ・モンスターだ!!」

6 — 保安官の決断

「つたく、フラットウツズ・モンスターめ……」

奇妙な音を響かせるフラットウツズ・モンスターは、周囲を伺っている。

勇氣達は岩の陰でなおさら身を縮め、アプリームは愚痴を吐いている。

その時、勇氣は気付いた。

保安官の頭は岩の隣に隠れているが、大きなお尻がはみ出ている。

「保安官さん、お尻を引っ込めて！」

「無理を言うな！ この岩が小さすぎるんだ！」

「これぞ頭隠して尻隠さず、つてか」

その時、フラットウツズ・モンスターが急に動きを止めた。

目を点滅させながら、こちらに向いてくる。

「勇氣達に気付いたのか？」

「しっ！ そうじゃない。何かしようとしてるんだ」

キユウが勇氣に囁いた。

すると、フラットウツズ・モンスターの顔が小刻みに揺れ、目の下に口が現れた。

その口が大きく開いた瞬間、口から液体が放出された。

アプリルは攻撃をかわして、フラットウツズ・モンスターを爪で切り裂くが、フラットウツズ・モンスターはすぐに再生する。

また、液体は岩まで飛んで来る事はなかったが、勇氣は強烈な臭いに鼻と口を塞いだ。
「これって！」

教室に漂ってきた臭いだが、あの時よりも、もつと強烈だ。

「なんだ、この臭いは！」

「頭が痛いぜ……」

強烈な臭いに保安官もゴホゴホとむせ、アプリルは頭がクラクラする。

フラットウツズ・モンスターは、不気味な音を立てながら、森の中を動き始めた。

その音を聞いた勇氣は、校外学習で自動車部品工場に行った時を思い出した。

部品を造る工作ロボットがこんな音を立てていた。

今まで見た見た怪とはまるで違うと感じたのは、生き物ではなかったからだ。

「よりによって、どうしてこんな町に攻めてくるんだ」

保安官は、腰につけたホルダーから、ピストルを取り出した。

「何するつもりですか？」

「決まってるだろ！ あれを倒すんだ！」

「ああ、頼りになるぜ、保安官さんよお！……つくう」

保安官は、岩から出ると、ピストルを構えて狙いを定めた。

「一発で仕留めてやる！」

保安官は引き金をしつかりと引く。

ピストルの反動が保安官の腕を小さく跳ね上げ、

銃弾が辺りを見回していたフラットウツズ・モンスターの身体に直撃する。

だが、まるで水滴が弾かれるかのように、銃弾がその場に落ちた。

フラットウツズ・モンスターの身体には、傷一つ付いていないようだ。

「そんな馬鹿な？」

「ちっ……」

保安官が唾然となり、アプリルが舌打ちする。

キユウはその様子を見て、小さく首を横に振った。

「やはり歯が立たないか……」

フラットウツズ・モンスターがゆっくりこちらを向き始めた。

「やばいよ！……どうやって倒すんだよ！」

勇気がそう言うのと、キユウは勇気の顔を見た。

「だから、あれを持ってきたんだ」

「ああっ！ テンプラステルン！」

「それをモンスターの口に投げつけるんだ！」

一週間後の9月12日にフラットウツズ・モンスターに出会った家族や近所の子供達は

オイルを撒き散らしていたと証言してるんだ。ヤツが口から出しているのは油の一種のはずだ」

「なるほど！ これで固めるって事か！」

勇氣は、持っていたテンプラステルンの箱を開けた。

いくつかのビニール製小袋に白い粉が入っていた。

この小麦粉のような白い粉末がテンプラステルンで、ビニールの封を開けないと意味がない。

勇氣は小袋の先端を切って、モンスターに向かって投げつけたが、

粉末は空に飛散して、全くモンスターに届かない。

「駄目だ！ 粉だから届かないよ！」

「うあっ！」

フラットウツズ・モンスターが、口からオイルを放出しながら、ゆっくりと近づいて来る。

「勇気はひとまず逃げる！ 俺は引きつけるからな！」

アプリルの提案を保安官に告げた勇気は、走り出した。

保安官もそれを追って走る。

「さあ、来い！ フラットウツズ・モンスター!!」

勇気は走りながら考える。

「この粉を何かに付けて投げないとあいつには届かないよ」

すると、脇でゼイゼイと走っていた保安官が顔を向けた。

「要はそのテンプラなんとかをアイツの口に放り込めればいいんだろ？」

「そうですけど……!!」

「俺の好物を思い出せ！」

「あ、そうか！」

勇気は保安官がホットドッグにたっぷり砂糖を挟んでいたのを思い出した。

切り込みを入れたホットドッグのパンにこのテンプラステルンを挟めば、

モンスターの口に投げ入れられるかもしれない。

「ナンシーの店に取りに行くんだ！」

保安官は立ち止まると、近づいてくるフラットウツズ・モンスターに向いた。

アプリルの攻撃により、フラットウツズ・モンスターはボロボロだ。

「早く行け！」

保安官は、再びピストルを構えた。

「保安官！ ピストルは効かないよ！」

「分かつてるさ。でも、君に言っただろ」

保安官は銃口の狙いを定めてから言葉が続ける。

「どんな相手だろうと、この町の平和を乱す者は絶対に許さん、と」

そう言うのとピストルの引き金を絞り、三発続けて弾丸が発射された。

三発とも、緑の不気味な胴体が跳ね返した。

しかし、フラットウツズ・モンスターの気を保安官に惹きつけるには充分だった。

その後、アプリルは爪でフラットウツズ・モンスターを切り裂く。

「保安官！」

「早く、ナンシーの店に行け！」

保安官は自分の巨体、アプリルは自身の肉体を、勇気とは逆方向に走らせた。

「勇気、走るんだ！ 保安官とアプリルは囿になってくれてるんだ。

彼らの勇気を無駄にするんじゃない！！」

「……わ、分かった！ 保安官、アプリルさん、待ってて！ すぐ持ってきて来るから！」

キユウが勇気に怒鳴ると、勇気は叫んで駆け出した。

7 — 町を守るヒーロー

「ホットドッグ用のパンをくださいー！」

勇気は、食堂に駆け込むと、カウンターにいたナンシーに向かって叫んだ。

店には、丘から逃げて来たあの女性も避難していた。

「何があつたの？」

「森の方からまた音がしたわよ？」

ナンシーと女性は勇気に歩み寄ろうとするが、それよりも早く、勇気はナンシーの傍に走った。

「今は事情を説明している暇はないんです！」

早くしないと保安官が大変な事になっちゃうんです！」

「保安官が？」

勇気の真剣な表情を見て、ナンシーは頷いた。

ナンシーは厨房から調理用のパンの入った箱を持ってきて、勇気に渡した。
「ありがとうございます！ 二人とも、外に出ないでくださいー！」

勇気はパンの箱を抱えて、店を飛び出した。

「保安官さん！ アプリルさん！」

森に戻ってきた勇氣は、保安官とアプリルを捜した。

異臭が立ち込めているが、保安官もアプリルも、

そしてフラットウツズ・モンスターの姿も見当たらない。

「どこに行つたんだ？」

「勇氣、空を見るんだ」

キユウに言われて空を見ると、×印状の罅が浮かんでいた。

「まさか、フラットウツズ・モンスターは見捨里市に行つたんじゃ？」

「いや、まだ罅は小さいからそれはない。この森にいるはずだ。」

とにかく、『テンプラスチック』をパンに詰めよう」

「う、うん……」

勇氣はパンの切れ目の間に、テンプラスチックの粉末をサラサラと流し込んで詰めていった。

一つ、二つ、三つ……10個ほどのテンプラスチック・ホットドッグが完成した。

「よし！ 行こう！ 勇氣」

勇氣は全身に力を入れて緊張しながら、森の中を進む事にした。

「ひゃああー！」

突然、何かが勇氣に向かつて飛んできた。

勇氣はフラットウツズ・モンスターだと思い、

とつさに頭を抱えて身を屈めたが、襲つてこない。

顔を覆つた両腕の隙間から恐る恐る上を見ると、一羽の鼻が飛んでいた。

「な、なんだ、鼻か……まったく、怖がらせるなよな」

勇氣は、ホッと胸を撫で下ろす。

その時、ツーンと何かが臭つた。

「キユウ、変な臭いがする。今までとは違う臭いだ」

理科の実験で油に火を付けた時に嗅いだ臭いだ。

「勇氣、気をつけろ！ 危ない！」

突然、火球が飛んできた。

キユウの声で勇氣が飛び退くと、火球が近くに落ち、火柱が上がった。

火柱の向こうに、勇氣達の方を見ているフラットウツズ・モンスターの姿が浮かび上がった。

「勇氣！ 特製ホットドッグを！」

勇氣はホットドッグの詰まつた箱を抱えた。

フラットウツズ・モンスターは奇妙な音を立てながらこちらに近づいてくる。

「そうか、あいつは火の玉を撃つのにチャージが必要なんだ。

次に撃ってきた後にホットドッグを口に投げ込むんだ！」

「分かったよ。でも、ここからじゃ、投げても届かないよ」

「充分に引きつけるしかない」

フラットウッズ・モンスターは、

火球のチャージ音と自分自身の駆動音を響かせながら森の中を進んでくる。

「勇気、慌てるなよ。充分に引きつけて、火の玉を撃たせるんだ」

「でも、近くから撃たれて、逃げられるかな？」

「やるしかない！」

あと5、6歩も近づけばホットドッグを投げても届く距離に近づいてきた。

「勇気、撃つてくるぞ！」

勇気は逃げ出したい恐怖を振り払い、モンスターの口を睨んだ。

開いた口の中には飛び出す直前の火球が見え始め、勇気は身構えた。

その時、近くの茂みが揺れる音が響いた。

フラットウッズ・モンスターの口から火球が発射され、茂みの中に火柱が上がった。

「うわああ！」

悲鳴と共に、茂みの中から保安官の巨体とアプリルの肉体が転がり出てきた。

「二人とも！」

「おお、こんなに走ったのは久しぶりだ」

勇気はホツとして汗だくのアプリルと保安官に抱きついた。

「勇気、のんびりするな！」

勇気は特製ホツトドッグを手に持った。

「アプリル、これをあいつの口に投げ込むんです」

「テンプラなんとかを中に挟んだんだな」

アプリルは、特製ホツトドッグに手を伸ばした。

「えっ?」

勇気が振り返った瞬間、機械の手が伸びて来た。

いつの間にか、フラットウツズ・モンスターは背後に近づいていた。

「わあああ！」

勇気は叫んだ。

フラットウツズ・モンスターは、勇気の腕を掴むと、口を大きく開けた。

「勇気、早く口の中に特製ホツトドッグを投げ込め！」

「そんな事を言われても！」

勇気はフラットウツズ・モンスターに腕を掴まれ、手を動かす事ができない。

「放せっ！ 放せええっ！」

異臭のする口が勇気に迫る。

すると、人影がフラットウツズ・モンスターの腕に覆いかぶさった。

「そいつを放せ！」

アプ Ril・フェルナンデスだ。

彼が全体重をかけると、フラットウツズ・モンスターが少し傾いた。

その手が、勇気から離れた。

「勇気、今だ！」

「はいいい！」

勇気は、テンプレステルン入り特製ホットドッグを

フラットウツズ・モンスターの口に投げ込んだ。

「よし！ 俺も！」

「いくぜ！」

保安官も特製ホットドッグをモンスターの口に投げ、アプ Rilも続けて投げつける。

フラットウツズ・モンスターの身体が、大きく揺れ動く。

「全部、投げ込むんだ！」

「もちろん！」

キユウに言われるまでもなく勇気、アプリル、保安官は、特製ホットドッグを、次々と相手の口に投げ込む。

フラットウツズ・モンスターの鼻のような目が激しく点滅し、その場でクルクルと回り始めた。

勇気と保安官は慌ててモンスターから離れ、アプリルも素早く離れた。

「どうなってる!？」

「油が固まり始めたんだ！」

アプリルが不安そうに叫ぶと、三人の脇に浮かぶキユウが答える。

キユウのその言葉は保安官には聞こえなかったが、

目の前の光景を見れば、勇気が伝える必要も無かった。

大きな二つの目玉を様々な色に点滅させるフラットウツズ・モンスター。

ネズミ花火が地面を飛び回るように滅茶苦茶に動く。

フラットウツズ・モンスターは地面に倒れ、その音と共に大きな目玉の光が消えた。

「い、い、いつを、倒せたのか……う。」

保安官がフラットウツズ・モンスターの方を見つめる。

キユウとアプリルが深く頷いた。

勇気は、そんな保安官を見て笑顔を浮かべると、「はい」と答えた。

保安官は勇氣に手を差し出した。

「俺の町を救ってくれてありがとう」

勇氣は少し戸惑ったが、直ぐに保安官の手を握った。

「一つ謝らせてくれ」

「何をですか？」

「真之勇氣、君の名前は変じやない。とても良い名前だ」

勇氣と保安官は笑い合った。

やがて、フラットウツズ・モンスターの身体が黒い煙となって辺りに飛び散り、そして消える。

UFOも、同じように黒い煙になって、消滅した。

「これにて一件落着！」

「うーん、今日も平和だねえ」

寂れた食堂では、保安官がコーヒーを飲んでいた。

「この町はいつも平和でしょ」

ナンシーはラジオの前に座って音楽を聴きながら、笑う。

店には、丘の上に住んでいる女性の姿もあった。

それは、いつもと変わらない風景だ。

「勇氣、キユウ、アプリルは、丘の外から丘越しにその様子を見ていた。よかった……」

怪を倒した事により、保安官の記憶は無くなったため、今は勇氣とアプリルを見ても誰だか分からない。

二人はそれが少し寂しかったが、今夜の出来事があるうがなかるうが、この町のために必死に働いている保安官を憧れの眼差しで見た。

「この町のヒーローだね……」

勇氣は、この町を守るために戦った保安官のような人間になりたいと思った。「なれるよ」

ふと、キユウが言った。

「え？ 僕、何も言っていないけど……」

「言わなくても分かるよ。君なら、きつとなれる」
キユウは優しい笑みを勇氣に見せた。

「さあ、戻るよ」

「あ、う、うん！」

「よし！ デイアーナとノノに報告するぜ」

勇氣は、丘から離れると、キユウ、アプリルと共に元の時代に戻る事にした。

その頃、見捨里市のある家では、白鳥羽心が小さな溜息をついていた。

（結局、勇気に相談できなかつたなあ）

羽心は、自室の机の椅子に座り、落ち込んでいるようだった。

（最近、何かがおかしい気がする……）

羽心はふと、窓の方を見る。

一週間前、何故か夜に花恋が窓の下にやってきた日。

その日に何か、重大な事があつた気がする。

「×印……」

そう、また×印状の罅に関係していた気がする。

それは、ぼんやりとした記憶だったが、羽心には夢ではないという確信があつた。

羽心は、机の一番上の引き出しをじっと見つめる。

周りを見て、誰もいない事を確認すると、その引き出しをゆっくりと開けた。

そこには、『黒い鈴』……オシリスの鈴が入っていた。

episode 3 | Bonds Sun and
Moon 呪いの雨
1 | 降ってきた異物

「……ん？」

朝、白鳥羽心が起き上がると、目の前に手紙が届いていた。

羽心がそれを開くと、そこにはこんな文章が書かれていた。

オシリスの鈴の在り処が見つかりました

それは、特別な能力を持った人間のみに使用できるものです

あなたが何者なのかは、私は調べていませんが

その鈴は、決して使用しないでください

ジャネット・デイ・アルク

「オシリスの鈴……？ ジャネット……？」

羽心には何が何だか分からなかった。

しかし、知らない人から手紙が届いても、決して反応してはいけない、

と羽心は覚えているため、羽心は手紙をゴミ箱に捨てた。

その行為が羽心自身を苦しめる事になるのは、彼女はまだ、知らなかった。

「なあ羽心、何を調べてるんだ？」

日曜日、勇氣はいつものように父親の書齋にいた。

隣には、羽心がいる。

最近、羽心は書齋にやってきては、本や資料を見て何かを調べていたのだ。

「何って、多分勇氣に言っても分からないわよ」

「怪奇現象の話？ だったら僕、結構詳しくなったんだよ」

怪狩りを始めてからというもの、勇氣は時間さえあれば怪奇現象の本を読むように

なった。

羽心には敵わないが、それでも以前より怪奇現象の話ができるはずだ。

しかし、羽心は首を横に振った。

「それでも、勇氣には分からないわよ。……だって、私もさっぱり分かってないんだも

ん」

羽心はそう言うのと、再び本を読み始めた。

(なんだよそれ)

羽心は何か悩んでいるようだが、それを全然話してくれない。

(羽心って、肝心な時に限って、一人で悩んじゃうタイプなんだよな……)

小学2年生の時、学校の遠足で山に登ったが、

羽心は水筒を忘れてしまった事を誰にも言わなかった。

先生に叱られると思ったのだ。

勇気がそれに気づいて、バレないようにお茶を分けてあげたからよかったものの、

そのまま山を登っていたら、羽心は脱水症状を起こして倒れていた事だろう。

(心霊写真の撮影とかUFO探しとか、くだらない事だとすぐ声をかけて来る癖に。

まあ、僕も僕で、羽心に相談できない悩みがあるんだけど……)

勇気はキユウに、邪鬼の事を聞いて以来、彼が何者なのか調べるようになった。

邪鬼がただの人間のように思えなかったのだ。

しかし、いくら本や資料を調べても、それらしいものは見つからなかった。

(そもそも、邪鬼って鬼の事だよな……?)

図書館でたまたま手に取った仏像の本に、『邪鬼』という鬼の彫刻の写真が載っていた。

邪鬼というのは、祟りを起こす神で、妖怪とも物の怪とも言われているらしい。

もしかしたら、邪鬼は怪なのかもしれない。

(だけど、だったらどうしてキユウは、怪って言わなかったんだろう?)

今まで出会った怪物達の事を、キユウは怪と呼んだ。

だが、邪鬼と、エルフだけは怪とは呼んでいなかったのだ。

「はあく」

勇気は羽心の横で大きな溜息をついた。

すると、ノック音がしてドアが開き、母親が部屋に入って来た。

「勇気、お友達が来てるわよ」

「えっ、誰だろう?」

今日は、羽心がいつものように勝手に書斎に来た以外、特に誰とも遊ぶ約束はしていなかった。

母親は勇気に近づくと、にやにやと笑った。

「羽心ちゃんって可愛い彼女がいながら、ホント、隅に置けないわねえ」

「はあ? 羽心はただの幼馴染だろ。って言うか、誰が来たの?」

「桐谷さんよ」

「桐谷さん?」

羽心がその名前を聞き、顔を上げた。

「勇気、花恋ちゃんと遊ぶ約束してたの?」

「遊ぶ約束なんてしてないけど……」

桐谷花恋……同じクラスで図書委員の花恋の事だ。

今まで、花恋と休日遊んだ事などない。

「何の用だろう？」

とりあえず、勇気は花恋を書斎に招く事にした。

「はあく、ようやく謹慎は解除か」

「ディアーナ、よく我慢できたな」

謹慎処分を解かれたディアーナは、アプ Ril と共に怪奇現象の調査をしていた。

「空からヤドクガエルが降ってくる怪奇現象ねえ」

「確かにあれは、危険な蛙だよなあ」

「……ん？」

ディアーナが地面を見ると、それは宝石だった。

「あら、宝石？ 蛙しか降ってこないと思ったのに」

ディアーナは落ちた宝石を拾った。

アプ Ril もいくつか拾って、鞆の中に入った。

「つまりこれは、蛙以外にも何か降ってくるって事なのか？」

「多分……」

ディアーナとアプ Ril は、町中を歩いていく。

すると、二人は勇気と出会った。

「あれ？ ディアーナさんに、アプリルさん？ 何をしていたの？」

「『さん』はいらねえよ。俺達は空から何かが降ってくる怪奇現象を調査していたんだ」

「……？」

「そんなわけで、あたしも書齋に行かせて」

「ああ、いいけど……」

見捨里市だけでは何も分からないので、結局、最終的には書齋に行く事になった。

そして、ディアーナとアプリルは書齋にやってきた。

そこには、既に花恋がやってきていた。

「わー、凄いいー！」

書齋にやってきた花恋は、部屋にある数々の本を見て、一瞬で虜になったようだ。

「花恋ちゃんも怪奇現象とかが好きなのね」

「えっと、そういうのはよく分からないけど、学者の人とか研究者の人のお部屋が大好き

なのー！」

花恋は、本棚の周りの前で息を大きく吸い込んだ。

「うーん、いい匂い。本のインクの匂いって、何故か心が落ち着くわよね」

「そうかな？」

「そうよ！ 勇気君、いいなあ、こんな素敵なお部屋があつて！ あつ、写真撮つていい？」

「う、うん、別にいいけど」

「ホント！ やつたあ！」

花恋はポケットからスマホを取り出すと、部屋の写真を撮り始めた。

「きゃ〜！ 凶鑑もいっぱいある！ 素敵〜！ 最高すぎる〜！」

花恋は眼鏡の奥の目をきらきらと弾かせながら、本棚に並べられた凶鑑を写真に撮りまくる。

「花恋ちゃんって、こんななんだったんだ……」

「何だか意外よねえ」

「そうね」

「あー、ちよつとうるせえなあ」

花恋は普段は大人しい女の子だが、どうやら本を見ると性格が変わつてしまいうらしい。

本当は注意したいアプリルだったが、女好きな彼にはできず、耳を塞いで愚痴るしかなかった。

やがて、花恋は満足したのか、写真を撮り終え、勇気にお礼を言った。

「……それで、花恋ちゃんはどうして僕の家に？」

「あつ、そうそう、羽心ちゃんに見てもらいたいものがあつたの！」

花恋は羽心の家を訪れたものの、勇気の家遊びに行っていると聞き、こちらに来たらしい。

「これなんだけど」

花恋は二人にスマホの画面を見せると、動画を映した。

それは、どこかの公園のようだ。

大学生ぐらいの女性が、カメラで自分の姿を写しながら楽しそうに喋っていた。

「ここって、パンダ公園……だよな？」

勇気は、画面の隅に、バネのついたパンダの遊具が三つ並んでいる事に気づいた。

パンダ公園は、町外れにある小さな公園だ。

同じパンダの遊具が並んでいるので、みんな昔からそう呼んでいた。

「この動画を撮ってるのは、近所に住んでるお姉さんなの」

女性は、ネットで動画を配信しているらしい。

三つもあるパンダの遊具を面白く思い、紹介動画を配信しようと思ったという。

「それで、この動画がどうかしたの？」

羽心は首を傾げる。

パンダ公園の事を知らない人が見たら面白いかもしれないが、
勇気達には特に目新しさはなかった。

すると、花恋が急に真顔になった。

「見てほしいのは、この後なの」

動画の中で、女性はカメラで自分の姿を撮りながら、パンダの遊具に乗ろうとしていた。

その時、後ろで何かが落ちる音がした。

「何だろう?」

女性はそう言いながら、何気なくカメラを後ろに向けた。

すると、地面に何かが落ちている。

女性はカメラを向けながら、ゆっくりと近づいた。

「えっ?」

それは、宝石だった。

「どうして?」

女性はそう呟くと、何かに気づいたのか、カメラをふと、空に向けた。

瞬間、空から数え切れないほどの宝石が降って来た。

「きゃー!」

カメラが大きく揺れる。

画面に、地面に落ちた色とりどりの宝石が映る。

「こんなのあり得ない！」

動画は、女性の叫ぶような声で終わっていた。

「何だよこれ……？」

空から宝石が降って来るなど、絶対にあり得ない。

「もしかして、ドッキリ動画？」

女性が、花恋を驚かせるために偽物の映像を作ったのではないだろうか？

「そうじゃないと思うわ。だって、お姉さん、私の前で本気で驚いてたもん」

映像を撮ったのは、つい30分ほど前なのだという。

女性は、公園から逃げると、すぐに花恋の家に駆け込んで来たらしい。

花恋が以前、不思議な現象に詳しい友達がいると話していたのを思い出し、

これが何なのか知りたいと思ったというのだ。

「不思議な現象……」

それを聞き、勇氣はハツとなった。

それは、恐らく怪の仕業だ。

すると、画面をじっと見つめていた羽心が口を開いた。

「これって、『フアフロツキーズ』かも」

「フア、フロ？ ツキーズ？」

「知っている……」

「それ、本に載ってたよね？」

戸惑う花恋とは違い、勇氣にはその言葉に心当たりがあった。

最近読んだ怪奇現象の本に載っていたからだ。

勇氣は本棚からその本を取り出すと、ページを開いた。

「あつたー」

くフアフロツキーズく

「空からの落下物」を意味する「フォールズ・フロム・ザ・スカイズ」の略語。怪雨とも言われ、常識では考えられないものが空から降ってくる現象である。

1578年、ノルウエーで、鼠の雨が降った。

1793年、日本で、動物の毛の雨が降った。

1861年、シンガポールで、魚の雨が降った。

1890年、イタリヤで、真っ赤な血の雨が降った。

1901年、アメリカで、蛙の雨が降った。

「こんなに記録があるなんて……」

「ヤドクガエルや、宝石だけじゃなかったのね……」

勇気はごくりと唾を飲み込む。

ここに書かれている事は、恐らく本当の事なのだろう。

一方、羽心は真剣な顔つきになっていた。

「……もしかしたら、また」

羽心は呟くように言うが、勇気にはその声は聞こえていなかった。

「花恋ちゃん、そのお姉さんに会わせて!」

羽心は持つてきていたポーチを手にとると、出かける用意をした。

「勇気も来るでしょ?」

「えっ、僕も?」

「もしかして怖いのか?」

「怖くはないけど」

フアフロツキーズが起きたのは、恐らく怪の力のせいだ。

だったら、女性に会っている時間はない。

「ごめん。僕はここに残るよ!」

残って、やらなければならぬ事がある。

だが、そんな勇気の気持ちちを羽心は当然分かってくれないようだ。

「もう、ホントに勇気は勇気ないんだから！　じゃあいいわよ！　花恋ちゃん、行こう」

羽心はうんざりして、部屋から出て行ってしまった。

「あつ、ちよつと！」

勇気があるから残ったのに……。

閉められたドアの前で、誰もその気持ちをつかってくれない。

「僕にはちゃんと分かっているよ」

ふと、背後から声があった。

勇気が振り返ると、そこにはキユウが立っていた。

2 — 呪われ人

「キユウ、いたんだね！」

勇気が驚きながら尋ねると、キユウは優しく笑った。

「彼女達がいたから、出にくくてね」

「別に出てきても、羽心達にはキユウは見えないだろ」

「それはそうだけど、いると君達とゆっくり話もできないし、

時のトンネルを開く事もできないだろ」

「赤文字！ ……じゃない！ キユウ、この宝石を見て！」

「ああ、羽心ちゃん予想通り、ファフロツキーズだ」

「空から何かが降ってくる現象ね。一部では奇跡『東方非想天則』の東風谷早苗のスペル

カード、奇跡「ファフロツキーズの奇跡」。って呼ばれてるけど」

勇気はそれを聞き、慌てて棚の下に隠していた靴を手を取った。

「だったらすぐに行かなきゃ！ 今回はどんな武器を持って行けばいいの？」

「へえ、随分やる気だねえ」

「当たり前だろ。」

羽心の性格なら、お姉さんから話を聞いたあと、きつとパンダ公園に行くと思うんだ」
その時、また怪現象が起きて、それに巻き込まれてしまったら……。

「なるほど、確かに彼女ならその可能性があるね。」

フアフロツキーズは生き物や宝石が降ってくるだけじゃない。

宝石よりもっと大きな石や鉄の塊が落ちてくる事もある」

「そんな！」

もし、そんな物に当たったら、怪我だけではすまない。

「早く怪を倒すわよ。宝石は拾いたいけどね」

「ああ、もちろんそのつもりだ」

キユウはそう言うと、机を指差した。

「今回の武器は、机の一番下の引き出しに入ってるよ」

「分かった！」

勇気は机に駆け寄ると、引き出しを開けた。

そこには、ゴムのついたYの字形の木製の棒が入っていた。

「あ、スリングショットだわ！ でも、あたし達はあまり使わないし、アプリルは……」

「おい、俺を遠回しに馬鹿にするな」

「とにかく、スリングショットっていうのはね……」

ディアーナは、スリングショットの使い方を勇気に教えた。

スリングショットは、Yの字形の部分についているゴムに弾をセットして、ゴムを引っ張り、手を離す。

すると、ゴムが戻る力で、弾が勢いよく飛んでいき、対象物を攻撃する事ができるのだ。

「僕の子供の頃は、みんなパチンコ……エルフが言ってるスリングショットで、空き缶とかを撃って遊んでたんだけどね」

「子供の頃？ 今も子供だろ？」

「あ、ああ、そうだったね。とにかく、それを持って行くよ。」

弾は向こうで小石とかを拾っても利用すればいいから」

「う、うん！」

「まともな武器が手に入ってよかったわね、勇気」

スリングショットは、武器らしい武器と言っていいだろう。

勇気は、右手にグローブを嵌めると、スリングショットを握り締め、キウウの傍に立った。

ディアーナとアプリルも、準備をする。

「さあ、怪を倒しに行くよ。……怪狩りの時間だ！」

キユウはグローブを嵌めた左手を壁の前にかざし、呪文を唱えた。
「カオスゲート時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

キユウ、ディアーナ、アプリルが、光の渦の中に消えた。

勇気も、渦の中に飛び込んだ。

「んんんん！」

「ばびゅーん！」

「飛んでいくわよー！」

光のトンネルの中を飛んでいく。

やがて、トンネルの奥に、干し草の山が見えてきた。

「わっ、ちよ、ちよっと！」

トンネルを出ると同時に、勇気、ディアーナ、アプリルは干し草の山の中に頭から突っ

込む。

「んん、ぶはっ！」

勇気は慌てて、干し草から顔を出した。

ディアーナとアプリルは楽しそうな顔をしていた。

「もう、なんだよー！」

その時、何かが勇氣の顔を舐めた。

「ひゃあああ！」

「あ、馬だわ」

思わず仰け反り、逃げるように干し草山から這い出る。

干し草の傍に顔を向けると、そこには馬が立っていた。

勇氣、ディアーナ、アプリルが着地した場所は、どうやら馬小屋のようだ。

「よかつたじゃないか。馬に懐かれて」

「人間なのに……」

キユウが馬の背に座るように浮かびながら笑う。

「嬉しくないよ！ 顔を舐められたんだよ」

勇氣は服で顔を必死に拭きながら立ち上がった。

「それで、ここはいつの時代なの？」

「ここは、19世紀のイギリスの田舎の村だよ」

「イギリス……」

「スリギイ……」

「逆から読むな」

三人が馬小屋から出て村を見ると、三角屋根のレンガ造りの家がいくつか建っている

た。

「わああ〜」

時刻は昼間。

村は山の麓にあり、綺麗な川も流れている。

以戦、ネツシーのいるイギリスのネス湖へは行った事があつたが、

あの時は森と湖しか見なかつた。

ここはそれとは違い、おとぎの国に來たような気分になる。

勇氣、デアーナ、アプリルの三人はその風景を楽しげな様子で見つめていた。

「景色を楽しめる余裕が出てきたようだね」

「ええ、素晴らしい景色ね」

「だけど、住んでる人達が素晴らしいかどうかは分からないよ」

「どういう事？」

勇氣が首を傾げた瞬間、数人の村の人達が傍にやつてきた。

「お前、どこから來た？」

先頭にいた恰幅のいい中年の男が、勇氣を睨みつける。

男は何故か、鍬を構えていた。

他の人達も鎌や鋤などの農機具を構え、怒りに満ちた表情を浮かべていた。

「どうなってるの?」

勇氣は戸惑いながら、目を開けると、空を眺めた。

すると、空に赤い雲が浮かんでいた。

「来るぞ!」

次の瞬間、無数の拳大の石が、まるで雨のように降り落ちて来た。

ファフロツキーズだ。

馬小屋の屋根にいくつも石が当たる。

「うわっ! わっ!」

勇氣は傍にあったブリキのバケツを手に取り、頭に被ると身を縮める。

ディアーナとアプリルは、何とか敏捷な動きで逃がっている。

「怖がってる場合じゃない。ファフロツキーズを倒すんだ!」

「倒すって、どうすればいいんだよ?」

空には赤い雲しか見えない。

怪がどこかから雲を操っているというのだろうか?

すると、キユウが赤い雲を指差した。

「雲をよく見るんだ!」

勇氣はその言葉を聞き、恐る恐る雲を見る。

「ああっ！」

雲の真ん中に、赤い目が見えた。

「あの赤い目が弱点だ！」

「あそこにスリングショットを撃つのだよ！」

瞬間、石の雨が止んだ。

同時に、赤い雲がゆっくりと動き出した。

「今よ！」

「だけど、また石が降ってきたらどうすればいいんだよ？」

「その時は、エルフ達のように上手く避けるんだ」

「避けるって、僕、体育は好きだけど、運動神経はあんまり良くないんだよ！」

「それでも君がやらなきゃ、誰が怪を倒せるっていうんだ！」

時空を超えたのは、見捨里市を怪から守るためだ。

放っておいたら、羽心はパンダ公園に行つて大変な事になってしまうかもしれない。

「あたしよ！」

「俺だ！」

「いや、怪を倒せるのはいつだって人間だ」

ディアーナとアプリルは叫ぶが、キユウは首を横に振った。

「怪を倒せるのはいつだつて人間……。ここに居る人間は、僕しかない……。やらなきや！」

勇氣は立ち上がると、スリングショットを強く握り締め、山の方へと動いて行く雲を睨んだ。

「あいつは、僕が倒す！」

勇氣は、バケツを投げ捨てると、馬小屋から飛び出した。

「なるべく高い場所から撃つんだ！」

キユウが傍を飛びながら指示を出す。

前方を見ると、山の頂上へと続く坂になった山道が見える。

雲はその山道に沿って、ゆっくりと動いていた。

「あそこの上からパチンコを撃てば……」

目玉に弾が届くだろう。

勇氣は、山道を一気に駆け上がった。

だがその時、前方に生えていた木の陰から、数人の若い男性達が飛び出してきた。

「くそつ、こつちに来たぞ！」

「早く逃げろ！」

「ああもう、邪魔するな！」

どうやら、ファフロツキーズが現れた時に家まで戻る事ができず、木の陰に隠れていたようだ。

男性達は物凄い勢いで山道を駆け下り、勇気の方へと迫って来た。

「えっ、あ、ちよつと!」

「どけ!」

「邪魔だ!」

「あ、あああ!」

「うわわ!」

勇気は走って来た男性達にぶつかり、その場に倒れる。

その衝撃でスリングショットを地面に落とした。

倒れた拍子に、勇気はスリングショットをお尻で踏みつけてしまった。

「あああ!」

お尻を上げると、スリングショットはバラバラになっていた。

「お前らのせいで武器が壊れたじゃねーか!!」

「ひい……っ!!」

アプリルが男性達に向かって叫ぶ。

男性達は彼の怒号に耐え切れず、恐怖でへたり込んだ。

その時、ファフロツキーズの動きが止まった。

赤い目が、ジロリと勇氣達を睨んだ。

次の瞬間、ファフロツキーズが勇氣達の方に迫ってきた。

「わああ！ こつちに来たよ！」

「チツ……。こうなったら、俺が撃ち落として……！」

アプリルが無茶をしようとした、その時。

「こつちよ！」

突然、女性の声が響いた。

山道の横にある茂みを見ると、青いスカーフを頭に巻いた女性が立っていた。

「早く走って！」

女性は、大きく手招きする。

勇氣は、訳が分からないまま、全力で彼女の方へ走った。

「そのまま走り続けて！」

「は、はい！」

「隠れながら走れば、呪いの雲を撒く事ができるから！」

「は、はい！」

（また隠れたり逃げたりするのは……）

(真つ向から立ち向かわないのかよ、と言いたいが、奴はただの人間だからな)

女性は、身を屈めて蔑みの中に隠れながら必死に走る。

勇気も同じ姿勢になりながら、彼女の後に続いた。

デイアーナとアプリルは、心の中で悪態を吐きながらも勇気を追いかけた。

3 — 新しい武器

「ここまで来れば、もう大丈夫よ」

しばらく走った後、女性は一立ち止まり、勇気、ダイアーナ、アプリルを見た。

山の方を眺めると、ファフロツキーズはいつの間にかいなくなっていた。

「どうやら、上手く撒いたようだ。」

「助けてくれてありがとうございます」

「そんなかしこまらなくていいわよ。私は、リサ」

「あつ、僕は勇気です」

「あたしはダイアーナよ」

「俺はアプリルだ」

「よろしくね、勇気君、ダイアーナさん、アプリルさん」

勇気達がいるのは、村の外れのようにだ。

川沿いにポツンと小屋のような小さな家が建っている。

「あれが私の家よ。入って」

勇気、ダイアーナ、アプリルは頷き、リサと共に家へと入った。

「走って疲れてるでしょ。飲み物を持って来るわね」

「あつ、ありがとうございます」

「だから、そんなに気を遣わなくていいから」

リサは微笑みながら、部屋の内奥へと歩いて行く。

勇気はひとまず、傍にあつた椅子に腰を下ろした。

家の中には、木製のテーブルと椅子が四脚、それに柵があるだけだ。

置き物も飾りらしい飾りもなかった。

部屋も、調理場と奥にもう一部屋あるだけのようだ。

「さっきの人達とは違って、随分優しい人だね」

ふと、キユウが壁を通り抜けて、部屋の中に入って来た。

「辺りを調べてみたけど、ファフロツキーズは消えたみたいだよ」

「助かったって事？」

「今はね。だけどすぐにまた現れるだろう」

勇気は、あの雲の真ん中にあつた赤い目を思い出した。

形らしい形をしているのは、あの目だけだ。

全く正体が掴めない、謎の怪だ（まあ、怪は謎だらけだが）。

「ファフロツキーズって、どんな怪物なの？」

「怪物なんかじゃないよ」

「えっ？」

「あれは本来、存在しているだけの怪なんだ。」

意思も目的もなく、ただ物を吸い上げては雨のように降らす」

「言ってみれば、台風と同じような自然現象。要は魔導みたいなものよ」

「そうなんだ。だけど、僕達の方を睨んだよ？」

「それに、人がいるところを狙って石を落としてたような気がするぜ」

勇気とアプ ril がそう言う、キユウは急に険しい表情になった。

「邪鬼の仕業だよ。」

「どういふ風にやったのかは分からないけど、人間を襲わせるように仕向けたんだ」

「どうしてそんな事を？」

「決まっているだろう。見捨里市に向かわせるためだ」

キユウは勇気をじつと見つめた。

「罫は、怪や怪の力に襲われた人々の恐怖によって大きくなるんだ」

「だから、人々から慕われる奴は、怪とは呼ばないのか」

「そうだよ。そして、大きくなれば、ファフロツキーズそのものが見捨里市に行く事がで

きる。

そうすれば、怪の力だけの時よりも何十倍もの被害を与える事ができる」

「それって……」

勇気は、見捨里市を襲ったメデューサの事を思い出した。

あの時はすぐに倒せたが、もし逃がしていたら、町中の人達が石にされていただろう。邪鬼が何故見捨里市に怪を送ろうとしているのかは分からないが、

野望を食い止めなければ大変な事になる。

勇気は、ゴクリと唾を飲み込み、ディアーナとアプリルも険しい表情になった。

「あらっ、辛そうな顔して、もしかして怪我をしたの？」

リサが飲み物を持ってやって来た。

「そうじゃありません……あつ、そうじゃないよ。ちよつと考え事をしてて」

「そう、よかった。家にいれば呪いの雲からは身を守れるはずだから」

リサは、「どうぞ」と飲み物を勧めた。

勇気、ディアーナ、アプリルはお礼を言い、一口飲んだ。

ただのぬるい水のようなだが、全力で走り続けていた三人にはありがたかった。

「ところで、勇気君、ディアーナさん、アプリルさんはこの村の人じゃないわよね？」

リサはもう一つの椅子に腰を下ろすと、勇気をじろじろと見つめた。

綺麗な青い大きな目に見つめられると、何だか照れてしまう。

だが、勇氣はすぐに頭を振り、冷静なフリをした。

「遠いところから来たんだ。この村に用事があつて」

「そうなのね。もしかして、村の人達に変な事言われた？」

「変な事？」

「お前も呪われ人だな、と」

「やっぱり……」

リサは悲しそうな表情になつた。

「あの人達、私達のせいで呪いの雲が現れたと思つているの」

「どういう事？」

「……」

勇氣が首を傾げ、ディアーナが不快な表情になると、キユウが口を開いた。

「村の人達は勇氣達に呪われ人だと迫つた時、お前もつて言つてたよね。」

つまり、勇氣以外にも原因になる人間がいるという事だよ」

「それじゃあ、あなたも呪われ人つて言われたの？」

「ええ……」

その理由をリサは話した。

リサは、かつて両親と兄と共にサーカス団の一員として、

様々な町や村を旅していたのだという。

しかし母親はこの時間軸で3年前に亡くなり、兄もショックのあまり自殺し、リサは父親と二人つきりになってしまふ。

さらにこの村の近くを通りかかった時、父親が病気になってしまったので、リサは父親の看病をするためにサーカス団を辞め、二人でこの村で暮らす事にしたのだ。

「だけど、私とお父さんがこの村に住むようになってから、

あの呪いの雲が現れるようになって……」

そのため、村の人達は、二人が呪いの雲を連れて来たのではと思うようになったというのだ。

「なるほど、だから呪われ人か……」

「呪われ人って何?」

キユウが納得した様子で頷き、ディアーナはキユウに問いかける。

「この時代はまだ、田舎の方では迷信が強く信じられていたんだ。

天災や疫病が起こる度に、他所よそから来た人間のせいせいにされて、

彼らは不当な差別を受けていたんだよ」

「それって魔女狩りじゃない! まだこの時代魔女狩りは18世紀頃、科学の発達で終

わりを迎えた。勇氣達がいる時代は19世紀。にもやつてたの？ 信じられない！」

「ああ、魔女狩りと同じだ。」

人間というのは、恐怖に直面すると普通では考えられないような行動を取ってしまうんだ。

恐怖は、人を狂わせる……」

それを聞き、勇氣はハツとした。

農機具を構えていた村の人達は、皆、怒りに満ちた表情をしていた。

全ては、恐怖に怯えていたせいだったのだ。

彼らは恐らく、普段は優しくて善良な人々なのだろう。

しかし、ファフロツキーズのせいで恐怖に支配され、人を信じられなくなってしまうのだ。

「誤解を解くためには、ファフロツキーズを倒すしかない」

「あの目玉を狙えば、倒せるんだよね……？」

だが、どのような武器があれば目玉を狙う事ができるのか、勇氣には分からなかった。

「ねえ、さつきから誰と喋ってるの？」

ふと、リサが首を傾げながら勇氣に言った。

「ええつと……」

「あー、リサ人間だしなー」

リサは退魔の力を持たない人間なので、キユウが見えないのだ。

「ところで、目玉を狙えば倒せるってどういう事？」

「あ、それはつまり……」

少年説明中……

「そうだったのね」

「だけど、そのための武器を壊しちゃって」

「目玉を狙える武器があれば、呪い雲を倒す事ができるのね？」

勇気が頷くと、リサは何かを思いついたのか、奥の部屋の方を見つめた。

すると、奥の部屋から、一人の白髪の男性が現れた。

「リサ、これを使おうと思っっているんだらう？」

「お父さん！」

リサの父親のようだ。

父親は、持っていた『弓』と『矢』を見せた。

「話は聞かせてもらったよ。これなら、呪い雲の目玉を射貫けるんじゃないのかね？」

父親はフラつきながら勇気に尋ねる。

「お父さん、寝とかなきや駄目でしょ」

「分かつてるんだが、お前がこれ以上みんなに責められるのを見たくはないんだよ」
「私は大丈夫だから」

リサは、フラつく父親の肩を抱きながら、奥の部屋に連れて行った。

「弓か。確かにあれなら、パチンコより正確に目玉を射る事ができるね」

キユウは笑みを浮かべるが、勇気は困ったような顔をした。

「そんなの僕には無理だよ！」

去年の夏休み、勇気は羽心と近くの神社で行われた夏祭りに行った事があった。

そこで、おもちゃの弓を使った射的をやったのだ。

「羽心は全部的に当てたけど、僕は一本も当たらなくて……」

羽心が一等賞の豪華お菓子の詰め合わせセットをゲットしたのは対照的に、

勇気が得た賞品は、参加賞の10円ガム一つだけだった。

勇気にとって、それは苦い思い出だ。

「勇気、君は肝心な時にいつも残念な事を発表するね」

「まったく……」

「こればかりはしようがないだろ。人には得意な事と苦手な事があるんだから」

「だったら、私に任せて！」

見ると、奥の部屋から戻って来たリサが、勇気の方を見ながら弓を構えていた。

「ちよ、ちよつと、リサさん！」

次の瞬間、リサは勇氣とディアーナに向かって矢を放った。

「ひゃあああ！」

勇氣の真横の壁に、矢が突き刺さる。

「どう？」

「どうつて、危ないよ！」

勇氣がリサに文句を言うと、キユウが壁を見ながら微笑んだ。

「彼女、かなりの腕前だね」

「えっ？」

壁を見ると、小さな○印が描かれていた。

矢は、その中心に見事刺さっていたのだ。

「私、サーカス団にいた時は弓を使った芸を披露していたの」

「えっ、そうだったの？」

「弓使いのリサつて言つて、サーカスでは結構人気者だったのよ」
アーチャー

リサは、弓をバトンのように軽やかに回転させ、ウインクした。

弓を見たディアーナは、興味を抱く。

「ちよつと貸して」

「いいわよ」

ディアーナはリサから弓を借り、構えた。

そして、勇気の頭ギリギリに矢を放った。

「ぎゃあああ！ やめろ!!」

「エルフは弓術に秀でているの。だから、あたしとりサが呪いの雲の目玉を狙うわ」

「えええ？ じゃあ、僕とアプリルはお留守番？」

「そうみたいだね」

「危険な目に遭わないように、あたしがリサを守るわ。」

一人の間を守れなくて、町のみんなを守るわけがないでしょ？ だから、行ってくるわ」

ディアーナがリサの方に歩み寄ろうとすると、突然、誰かが家のドアを激しく叩いた。

「だ、誰?!」

ディアーナは、急いで身構えた。

4 — 戦う女達

「開ける！ いるのは分かつてるぞ！」

外から男の声が響く。

ダイアーナはレイピアとダガーを構え、睨みつけている。

リサは戸惑いながら、ドアの傍にやって来ると鍵を開けた。

すると、外から男の手が勢いよくドアをこじ開け、身体を強引にねじ込んだ。

「みんな見ろ！ 俺の言った通り、ここにいたぞ！」

鍬を振り上げて襲いかかろうとしてきた恰幅のいい男だ。

彼の後ろには、農機具を持った村の人達が大勢集まっていた。

皆、勇気達を見て、怯えながらも、怒りに満ちた表情を浮かべている。

「ちよつと、勝手に入らないでよ！」

「五月蠅い！ まさか、新しい呪われ人を呼ぶとはな！」

男達は農機具を構えたまま、家に乗れ込んで来た。

「きゃー！」

「リサー！」

ディアーナはリサの傍に駆け寄る。

リサは男達を睨みつけた。

「何度言ったら分かつてくれるの！」

私もお父さんも、それにこの子達だって、呪いの雲とは何の関係もないの！」

「ふん、そんな事信じられるか！」

「そうだ！ あんた達が来たせいで、この村は呪われたんだ！」

「余所者を村に住まわせるんじゃないやなかったわ！」

「みんな！ こいつらを倒せば呪いの雲も消えるはずだ！」

「おおお！」

男達は、持っていた農機具を大きく振り上げた。

ディアーナは仕方がない……とレイピアを抜こうとした。

だがその時、外から一人の男の子が家の中へ駆け込んで来た。

「おじさん、大変だ！」

男の子は恰幅のいい男の元へ走った。

「呪われ雲がまた現れたんだ！ だけど、ハリー達がまだ川の方において！」

「何だって!?!」

男は急に狼狽える。

「どうやら、ハリー達はまだ小さい男の子らしい。」

「さあ行くわよ、リサ！」

「ま、待て！ 逃がすと思ってるのか！ この呪われ人が！」

「ディアーナはリサに声をかけると、家を出ようとした。」

「男が慌ててドアの前に立ち、ディアーナ達を捕まえようとする。」

「しかし、ディアーナはそんな男の手を振り払い、睨むように見つめた。」

「あなた達、そんな事を言ってる場合じゃないでしょ！」

「このままじゃ、ハリー達が死んじゃうかもしれないのよ！」

「ハ、ハリー……」

「その言葉に、男は動けなくなる。」

「男は、最悪の事態を想像し、青ざめていた。」

「あたしもリサも、この村のために戦おうとしてるのよ！」

「だから、みんなはここで避難しなさい！」

「あの呪いの雲は、あたし達が絶対に倒すわ！ リサ、行くわよ！」

「ええ！」

「ディアーナとリサは、外へと飛び出した。」

「その頃、勇気、キュウ、アプリルの三人は……。」

「大丈夫かな、ディアーナ？」

「信じるよ、勇気、キュウ。俺達は仲間だろ？」

「仲間……」

アプリルは笑顔で、勇気の肩に手を置く。

キュウの肩にも手を置こうとしたが、幽霊である以上、触る事はできない。

「うん。ディアーナとリサさんは、僕の……いや、僕達の仲間だ。」

二人を信じられないなんて、僕には、できないよ」

「そうだ。自分を信じるだけじゃなくて、他人を信じる事も大事だよ。」

あの二人なら、必ず、フーフロツキーズを倒す事ができる……」

三人は戦う女達を信じ、家の中で帰りを待っていた。

その頃、見捨里市では、羽心、花恋、ノノが、パンダ公園の前までやって来ていた。

「羽心ちゃん、大丈夫かな？」

「わからないよ……」

羽心は、花恋とノノと共にフーフロツキーズの動画を撮った女性に会ったものの、

彼女は動画に録画されていた以上の情報は知らなかった。

そのため、公園に行き、詳しく調べようと思ったのだ。

「何か危ない事が起きたら、すぐに逃げるから。花恋ちゃんは入り口で待っててもいい

わよ」

「そんな。羽心ちゃんだけ行かせるなんてできないよ！」

「ノノも、うららおねえちゃんと、かれんおねえちゃんといっしょにいく！」

花恋とノノは少し怯えながらも、一緒に付いて行く気のようにだ。

「ありがとう。ちゃんと私が守るからね」

羽心は、そんな花恋とノノに笑みを見せ、公園の中に足を踏み入れた。

すると、三つ並んだパンダの前に人だかりができていた。

「おい、凄いぞ！」

「わあ、綺麗！」

「誰かが落としたのか？ これだけあれば一つぐらい持つて帰つてもバレないよな？」

人々の前には、いくつもの宝石が落ちていた。

「ちよつと、危ないですよ！」

羽心は慌てて傍に駆け寄ると、彼らをその場から離れさせようとした。

「おい、何するんだ？」

「邪魔しないでよ！」

しかし、彼らは宝石を拾うのに夢中で、全く離れようとしなかった。

「羽心ちゃん、どうしよう……」

「このままじゃ危険よね」

「うん……」

本当にフアフロツキーズだとしたら、寶石以外にも色々降ってくる可能性がある。

「えっ?」

瞬間、羽心の全身がゾクリとした。

上空に何かの気配を感じ、羽心は慌てて空を見た。

すると、上空に×印状の罅が浮かんでいた。

「あれはー!」

その形状を見た瞬間、羽心の頭の中に、洪水のように記憶が雪崩れ込んだ。

窓の下から呼ぶ声、×印状の罅、そして、襲い来るドラキュラの牙……。

羽心はハツとして目を見開いた。

「……そうだ、私、ドラキュラに襲われたんだ」

夢などではない、現実の出来事だ。

「え……何?」

「おねえちゃん……? おもいだしたの……?」

花恋とノノは羽心の方を見て首を傾げる。

「ノノちゃん、花恋ちゃん、みんなも……隠れなきゃ! 早く!」

羽心はそう言うと、花恋とノノの手を取った。

また、ドラキキュラが罅から出てきて襲ってくるかもしれないのだ。

「おねえちゃん！ どうしたの!?!」

「空に罅があるでしょ！ あそこからドラキキュラが出て来るのよ!」

「罅？ きゃ！ 何あれ?」

花恋は手を引つ張られながら、空を見た。

その声に驚き、宝石を拾っていた人々は空を見上げた。

「何だよ、あの罅!」

「黒い煙が出てるわよ!」

「みんなも逃げて! このままだと怪物に襲われちゃうから! ノノも、公園からすぐに出て!」

「いや! ノノ、にげたくない! ノノ、みんなをまもる!!」

ノノは鳥に変身し、羽心の前に立った。

5 — 奇跡の弓矢

「よし、これで大丈夫ね」

数分後、二人は何か町の人達を全員避難させる。

そして、ファフロツキーズに挑む体勢を取った。

「ノノちゃん、そつちに飛んで！」

「♪~~~~♪♪~~~~♪♪~~~~」

ノノは羽心の指示のもと、ファフロツキーズが落としてきたレンガを歌声で撃ち落とす。

羽心は非力だが、自分のために何かできないかと考え、ノノを後方支援する事にした。

「きゃっ！」

「♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~」

ファフロツキーズは石をたくさん落として羽心を攻撃する。

石が命中して傷を負った羽心の前にノノが現れ、歌を歌って羽心の傷を癒す。

すると、怒った(?)ファフロツキーズはレンガをノノ目掛けて落とし、

空を飛んでいたノノを撃ち落とした。

「ノノちゃん!!」

羽心は傷ついたノノに近付き、手当てしようとした。

しかし、ノノは「気にしないで」と言うように飛び上がり、身体を光らせて自らの傷を癒した。

彼女の戦いを見た羽心は、真剣な表情で頷いた。

「ノノちゃんも……町を守りたいのね。」

……そうよ。町を守りたいという気持ちは、私だって同じよ!

勇気がいなくても見捨里市を守る事を、証明しなくちゃね!」

一方その頃、19世紀のイギリスの村では、デイアーナとリサが走っていた。

山の方には、×印状の罅が浮かんでいた。

「リサ、雲は山の方にいるみたいよ!」

「山? ハリー君達は川の方にいるって言ってたわよ?」

「ほら、空に罅があるでしょ?」

「えっ? きゃ、何なの、あの罅?」

リサ達はフアフロツキーズに恐怖し、今まで罅の存在には気づいていなかったらしい。

「雲は、あの近くにいますよ!」

ディアーナはそう言うと、山道を駆け上がった。

「助けて！」

坂の上から声がした。

数人の子供達がいる。

「ハリー！」

ディアーナが大きな声で呼ぶと、赤毛の男の子が顔を向けた。

「助けて！　呪われ雲が追いかけて来るんだ！」

「どうやら、ファフロツキーズから逃げようとしたものの、逃げ切れず山の方へ来たらしい。」

「結果的に好都合ね。この高さからなら、目玉を射貫けるはずよ」

「来たわ！」

木々の上をゆっくりと、ファフロツキーズが動いている。

赤い目が、ジロリとディアーナ達の方を睨んだ。

「みんなは木の陰に隠れて！」

ディアーナはハリー達にそう言うと、彼らが避難するのを見届け、リサの横で身構えた。

「リサ、頼むわよ！」

「ええ」

リサは、ファフロツキーズに向けて弓を構える。

ディアーナはその姿を固唾を呑んで見守る。

だが、ファフロツキーズが二人の真上にやって来て、雲の中が赤く光った。

次の瞬間、無数のレンガが、二人の頭の上に降り落ちた。

「きゃっ！」

ディアーナとリサは素早く避ける。

しかし、互いの身体がぶつかり、リサが転んでしまった。

そんなリサの目の前にレンガが降って来た。

「リサ！」

「きゃー！」

レンガはリサの目の前の地面に落ちた。

幸い、怪我はしていないが、レンガが落ちた拍子に舞い上がった砂が、リサの目に入
た。

「め、目が……」

「リサ、しっかり！」

ディアーナはリサの手を掴み、起き上がらせたが、目は上手く開かないようだ。

「これじゃあ、呪いの雲が見えないわ……」

「ううっ……」

フアフロツキーズは赤い目で睨み、さらに何かを落とそうとしていた。

ディアーナは意を決して、リサの方を見た。

「リサ、あたしが目になるわ」

「お願いよ、ディアーナさん！」

ディアーナはそう言うと、リサの背中に身体を寄せ、後ろから弓を持った。

リサは目を瞑り、ディアーナに委ねながら、ゆつくりと弓を構えた。

「かぜのせいはいよ、このやをみちびきたまえ」

ディアーナは呪文を唱えながら、フアフロツキーズの赤い目に狙いを定める。

フアフロツキーズは赤い目を大きく見開き、雲の中に赤い光が走る。

ディアーナは矢を赤い目に向けた。

「Shoot Arrow」

ディアーナが叫んだ瞬間、リサがフアフロツキーズに向かって矢を放った。

それは、一瞬の出来事だった。

空に、風を纏った一筋の閃光が走った。

追うように顔を動かしたディアーナは、閃光の行方を見てハッとした。

ファフロツキーズの赤い目の真ん中に、見事に矢が刺さっていたのだ。

「よし、命中したわ！」

ディアーナは笑顔でリサに声をかける。

だがその時、ファフロツキーズが大きく揺れ動き、レンガを落として来た。

「危ないっ！」

ディアーナはリサの身体を掴むと、その場から離れた。

彼女達が立っていた地面に、次々とレンガがめり込む。

ディアーナはリサを掴んでそれを避ける。

ファフロツキーズはさらに激しく揺れ動いていた。

雲の中に赤い光が何本も走る。

光は交差し、インクの染みのように赤い雲をさらに赤く染めていく。

ファフロツキーズの目が、黒い煙となって飛び散り、そして消えた。

雲も消滅し、空には青空が広がった。

「さあ、勇気とキュウとアプリルに報告しなくちゃ！」

ディアーナはそう言って、リサと共に勇気達を迎えに行った。

6 | 諦めない心

「勇氣……勇氣……」

誰かの声がする。

勇氣が目を開くと、目の前に羽心が立っていた。

「どうして、羽心が？」

そこは、どこかの学校のグラウンドのようだ。

いつの間にか、現代に戻って来ていたらしい。

羽心は何故か勇氣を見ながら、身体を震わせていた。

「どうしたの？」

羽心は手に何かを持っているようだ。

しかし、暗くて何を持っているのか分からない。

「ねえ、羽心？」

勇氣は心配になり、羽心に近づこうとした。

「勇氣、目を覚ますんだ」

「ただいまー！」

ハツとして我に返ると、目の前にキユウとディアーナの顔があつた。

「うわ、びつくりさせないでよ」

「びつくりしたのはこつちだよ。いきなりボオーツとして」

「えつ、ボオーツと？」

周りを見ると、勇気はまだ19世紀のイギリスの村にいた。

「フアフロツキーズは？」

「あたしとリサが倒したわ」

ディアーナが顔を上げ、村の方を見ると、村の人達に囲まれているリサの姿があつた。

「まさか、また襲おうとしてるんじゃ？」

「そうじゃなさそうだぜ」

見ると、村の人達は優しそうな表情で、リサと話をしていた。

「お父さんが病気なんだって？　じゃあ、これを食べて栄養つけなきゃ」

恰幅のいい男が、息子のハリーと一緒に、籠に入った野菜をリサに渡している。

他の人達も、ワインやパンを渡していた。

「皆さん、ありがとう」

「いやあ、困った時はお互い様だよ」

恰幅のいい男達が微笑む。

リサは目に涙を浮かべて彼らにお礼を言っていた。

「怪が消えた事で、恐怖もなくなり、リサさんも呪われ人と言われずに済むようになったんだ」

「そっか、よかつた〜」

勇気はリサの幸せそうな表情を見て、心からホツとした。

デイアーナとアプリルは、満面の笑みを浮かべた。

「邪鬼がどれだけ怪を使って人々を恐怖に陥れようとも、絶対に諦めちゃいけない。

諦めなければ、きっと元に戻せる。みんなを救う事ができるんだ」

「うん……」

リサ達を見ながら、勇気は見捨里市も守らなければと改めて思った。

「だけど、さつき変な夢を見たよ?」

勇気はふと、先程見た夢をキユウに話した。

少年説明中……

「羽心ちゃんが……?」

話を聞いたキユウは、顎に手を当てて何かを考える。

「現実になるかも知れない夢だったらおかしいよね?」

怪は倒したので、羽心が何かに巻き込まれる事はもうないはずだ。

今、勇気が見たのはただの夢だったのだろう。

勇気は納得して笑うが、キユウは何故か笑っていないかった。

だがその事に、勇気、ディアーナ、アプリルは気づいていない。

「さあ、勇気、ディアーナ、アプリル、そろそろ帰ろうか」

「うん、そうだね」

「……」

勇気、ディアーナ、アプリルは、村の人達と楽しげに話しているリサの笑顔を見ながら、

キユウと共に見捨里市に帰る事にした。

その頃、見捨里市では、羽心が×印の罅が消えた空を指差していた。

「見て、ノノちゃん！ ×印の罅が消えているわ！」

「ほんとだ！」

「羽心ちゃん！ ノノちゃん！」

しばらくすると、花恋が羽心とノノの傍にやってくる。

その表情は、普段通りの笑顔だった。

「大変だったのよ、花恋ちゃん！ 私達、ファフロツキーズと戦ったんだから！」

×印の罅から色々と落ちてきたのよ！」

「ファフ……何？ ×印の罅って、何？」

「え……？」

花恋は、ファフロツキーズについての事も、罅を見た事も、何故か忘れてしまった。

「何が起こったんだ？」

「私、何をしてたのかしら……」

「お姉さん！」

そして、避難していた人達も戻ってきたが、全員、全てを忘れていた。

「ねえ、さつき、宝石が落ちてきたでしょ？」

「ぼとぼとぼと、って！」

「宝石……？ 知らないわね……」

それは、動画を撮影していた女性も例外ではなかった。

「ちよつと、動画を見せてください」

「え、い、いいですけど」

羽心はお姉さんからスマホを借りて、アルバムを開く。

しかし、女性が撮ったはずの動画は、いつの間にかなくなっていた。

「おかしいわね……。さつきまではあったのに……」

「……終わったら、返しなさい」

「はい」

確かに、パンダ公園に宝石が降って来た動画は、消えてしまっていた。

まるで、フアフロツキーズの事が、無かった事になったように。

羽心はスマホを女性に返した後、神妙な面持ちでノノと花恋にこう言った。

「……ノノちゃん、花恋ちゃん。少ししたら私、勇気に話を聞いてくるわ」

「おねえちゃん……?」

「羽心ちゃん……?」

「絶対に勇気は、何かを知っているはずだから」

episode 3 | Bonds Sun and

Moon 〽 動く死体

1 | 奇妙な動物

「勇気君、もうすぐ到着するよ」

勇気と羽心は、クラスメイトの服部誠と共に、道路を歩いていた。はつとりまじ

ディアーナ、ノノ、アプリルも、調査目的で彼らに同行していた。

「へえ、この辺りって住宅地になってたんだ……」

勇気は辺りを見回す。

六人は今、隣町にやって来ていた。

30分ほど前、勇気は学校の授業を終えて、家へ帰ろうとしていた。

すると、羽心が誠と喋っている声が聞こえて来た。

「二階堂君って、あの天才少年の？」

「そう。僕、同じ塾に通ってて、最近友達になったんだ」

二階堂とは、隣の小学校に通っている二階堂健太郎にかいどうけんたろうの事である。

父親は有名な生物学の大学教授で、母親も大きな病院に勤務している有名な医者だった。

本人も頭が良く、天才少年として新聞やテレビに何度も出た事がある有名な名人だ。

誠の話によると、そんな二階堂から昨日、ある話を聞いたという。

「二階堂君、今まで誰も見た事のない動物を作ったんだって」

「動物を作る？」

「なんだ、そりゃ」

勇氣は、その不思議な言葉に疑問を持ち、誠達の下へ行つた。

「ねえ、作るってどういう事？」

「それは、僕にもよく分からないけど」

「珍しい動物を飼ってる、っていうわけじゃなさそうね……」

羽心はそう言うと、誠の方を見た。

「ねえ、二階堂君に会えるかな？」

「羽心、何言ってるんだよ」

また、羽心の好奇心が出たようだ。

勇氣は呆れるが、羽心の顔は何故か険しかった。

「羽心……？」

「何か隠してるのか？」

勇気がその顔を見て首を傾げていると、誠が口を開いた。

「だったら今から行ってみる？ 二階堂君、いつでも見に来ていいよって言ってたんだ」

「そうなの？ じゃあ、行きましょ」

「勇気君も行くだろ？」

「えっ、僕も？」

勇気は誠の方を見た。

羽心は既に帰る準備を始め、早く行きたがっているようだ。

「ええっと、僕は、あの、その……」

勇気は、「行くよ」と答えるしかなかった。

ディアーナ、ノノ、アプリルは、もちろん、頷いた。

勇気は道路を歩きながら、前方を歩く羽心を見つめた。

羽心が行くと言っているのに、自分だけ帰るわけにはいかない。

（だけど、動物を作るってどういう事なんだろう……）

いくら考えてもさっぱり分からなかった。

その時、勇気は、道路にできた水たまりに足を踏み入れてしまった。

ディアーナとアプリルの服に、汚れがつく。

「ああ、まったくも〜」

「あたしの服が汚れたじゃない」

昨日の夜、突然大雨が降り出し、雷が鳴り響いた。

そのせいで水たまりができたのだろう。

季節は秋で、台風シーズンだ。

勇氣は濡れた靴を振ると、水たまりに注意しながら、再び道路を歩き出そうとした。

「ねえ、あれ」

ふと、羽心が前方の道路を指差した。

見ると、花恋が道路の隅にしゃがみ込み、何かを見ていた。

「何してるんだ？」

どうして隣町に花恋がいるのだろうか？

勇氣は不思議に思いながら、羽心、ノノと共に花恋の傍に歩み寄った。

「かれんちゃん、どうしたの？」

「あつ、勇氣君、羽心ちゃん、ノノちゃん」

花恋は、目の前にある家と家の間の狭い隙間の方を指差した。

「あそこに、変な動物がいるの」

「変な動物？」

「多分、犬なんだけど……だけど、何だか変なの」
「えっ？」

勇気、羽心、ノノは、隙間を覗き込む。

隙間の奥に、一匹の犬が蹲っていた。

毛は薄汚れていて、死んだような目をしている。

捨て犬だろうか？

だが、何かがおかしい。

なんと、犬の身体に『羽』が生えていたのだ。

「何だよあれ？」

「きもちわるい……」

勇気が驚き、ノノが顔を青ざめると、塀の上から鳴き声がした。

「ニャアアアアア」

ハツとして顔を上げると、塀の上に猫がいる。

犬と同じように薄汚れ、死んだような目をしているその猫にも、羽が生えていた。

「どうなってるんだよ」

勇気が狼狽えながら横を見ると、羽心が空を見たまま呆然となっていた。

「勇気、あれ……」

羽心は怯えた表情で空を指差す。

勇気は訳が分からないまま、空を見た。

「ああ！」

空に、羽を生やした無数の犬や猫が飛んでいた。

「ウウウウウ、ワン！」

隙間にいた犬が、勇気達に向かって吠えた。

次の瞬間、塀の上にいた猫や、空を飛んでいた犬猫達が、一斉に勇気達の方へ飛んで来た。

「きゃあ！」

「勇気、どうにかして！」

「どうにかって、そんな事言われても！」

勇気の顔目掛けて、羽の生えた犬猫が襲いかかって来る。

「やめろ！ うわ！ うわあ！ 助けてえええ！」

「……ゆうきおにいちゃん！」

「えっ？」

突然耳元で声が響き、勇気は顔を上げる。

横に、ノノが立っている。

「羽の生えた犬と猫は？」

勇氣は身構えて空を見るが、誰もいない。

五人のいる場所は、隣町の住宅地だ。

花恋もどこにもおらず、代わりに、前方に誠の姿が見える。

「ええつと……」

「おにいちゃん、ポオーツとしてたよ？」

「ポオーツと……」

道路には水たまりがある。

どうやら、水たまりに嵌って再び歩き出そうとした直後から、夢を見ていたようだ。

勇氣には不思議な力があり、起きるかもしれない光景を夢で見ることができると。

襲って来た犬や猫は、あり得ない姿をしていた。

（あれって、怪、だよね……？）

しかし、勇氣はすぐに首を捻った。

（だけど、あんな怪、いたかな？）

書齋で読んだ怪奇現象の本の中には、羽の生えた犬や猫の怪などいなかったのだ。

その時、勇氣はハツとした。

（もしかして、二階堂君の言ってた、今まで誰も見た事のない動物って……）

あの犬や猫は、二階堂が作った動物なのかもしれない。

(それって、二階堂君が怪を作ったって事?)

意味が分からないが、何だか胸騒ぎがする。

「ねえ、大丈夫かな……」

ふと、羽心がそう言った。

何故か不安そうな顔をしている。

「大丈夫って、何が?」

「二階堂君の家に行くの。……もしかして、変な怪物とかに襲われたりしないかしら?」

「怪物?」

怪の事だろうか?

だが、怪を倒せば、怪の起こした全ての事はリセットされる。

羽心がその存在を覚えているはずがないが、

ノノは、ファフロツキーズの件で思い出した事を知っていた。

「うららおねえちゃんはね……」

それを勇気に伝えようとすると、羽心が頭を振った。

「変な事言っちゃったわね。気にしないで」

羽心は無理に笑うと、再び歩き始めた。

(羽心が怪の事を覚えてるなんて、あり得ないよね……?)

(ちがうよ、ゆうきおにいちゃん。うららおねえちゃんは、おもいだしたんだよ)
考えすぎだろう。

勇気はそう思うと、羽心を追うように後に続いた。

ノノの思いは、届かないまま……。

2 — 秘密の実験室

「ハイ」だよ」

住宅地をしばらく歩いた後、誠が立ち止まった。

道路の向こうに、二階堂が通っている小学校が見える。

隣町は駅を挟んだ反対側にある。

勇気は普段あまりこちら側に来た事がなく、この小学校も初めて見た。

「学校帰りの二階堂君を待つって事？」

てつきり家に直接行くものだと思っていた勇気は、戸惑いながら誠を訪ねた。

「違うよ。二階堂君の家は、学校のすぐ傍にあるんだ」

誠は、目の前に見える3階建てのビルを指差した。

「ここが二階堂君の家だよ」

「そうなんだ。何階に住んでるの？」

「何階とかじゃないよ。このビルが二階堂君の家なんだ」

「えええ〜！」

「……何が言いたいわけ？」

驚く勇氣をよそに、誠は入り口にあるインターフォンを鳴らした。

「お金持ちだとは聞いてたけど、まさかここまでとは」

勇氣がそう言うのと、羽心は訝しげな表情でビルを見上げた。

それに気づいた勇氣は、羽心に声をかけようと思つたが、

その時、インターフォン越しに男の子の声が聞こえた。

「やあ、服部君じゃないか」

「突然ごめん。あのさ、昨日言っていた動物を見せてほしいんだけど」

「もちろん！ 上がってよ！」

「えっ、あ、ああ」

勇氣は、羽心とちゃんと話ができないまま、ビルの中へと入った。

ディアーナとノノは「失礼します」と言ってから入った。

ドアを開けて中に入ると、大きな玄関が広がっていた。

物はほとんど置かれておらず、家というより会社のように見える。

やがて目の前にあるエレベーターのドアが開き、

マッシュルームヘアの、頭の良さそうな顔をした男の子——二階堂が出てきた。

「彼らは、服部君の友達かい？」

二階堂は、まるで物を品定めするような目つきで勇氣と羽心を見回した。

「二階堂君の動物の話をしたら、二人が見てみたいって言ったんだ。

連れて来ちゃ駄目だったかな？」

「そんな事はないよ。見てもらう人数は多い方がいいからね。

なんて言ったって、あの動物は僕の自慢の作品だから」

「作品？」

「アプリルは二階堂が何を言っているのか全く分からなかった。

二階堂は、エレベーターに乗るように言うと、自分の部屋があるという3階に連れて行った。

「ここが、僕の部屋だよ」

3階には、広いリビングがあった。

ソファアールがあり、大きなテレビもある。

勉強机の横には本棚があり、科学や医学の難しそうな本が並んでいた。

「3階は全部、僕専用の部屋なんだ」

二階堂の両親は仕事が忙しく、いつも夜遅くにしか帰って来ないのだという。

二階堂はいつも下の階にはほとんどおらず、この部屋で過ごしているらしい。

「凄い部屋だねえ。二階堂君の学校の友達が羨ましいよ。」

「こんなお家に毎日遊びに来られるんだもんね」

誠が部屋を見て微笑んだ。

だが、二階堂はそんな誠を見ながら目を細めた。

「友達？ そんなの僕にはいないよ」

「えっ？」

「学校みんなは子供っぽくて、話をしても全然楽しくないんだ。塾でも同じだよ。

服部君は科学が好きだから、他の友達とは少しは違うけどね」

「そ、そうなんだ」

「……」

誠は、どう答えればいいのか分からないようだ。

「まあ、僕は君達と違って天才だから。君達にはこの苦勞が分からないだろうね」

二階堂は声を上げて笑った。

そんな二階堂を見て、勇気は戸惑い、デイアーナは蔑む。

今まで、ここまで自分に自信を持った同級生に会った事がない。

その時、羽心が一步前に出た。

「何それ？ 天才ってそんなに凄いわけ？」

羽心は眉間に皺を寄せて二階堂を睨んでいる。

腹が立っているようだ。

「ちよつと、うららおねえちゃん！」

ノノは、羽心を落ち着かせようとした。

しかし、二階堂は苛立ちながら、そんな羽心を睨み返した。

「じゃあ教えてあげるよ。僕が君達と違ってどれだけ凄いかって事を」

二階堂はほくそ笑みながら、部屋の奥にあるドアをゆつくりと開けた。

「さあ、見てごらん。ここが僕の秘密の実験室だよ」

二階堂は、部屋の明かりをつけた。

瞬間、部屋の奥から何かが羽ばたく音がした。

「何?」

勇気とノノは思わず身構える。

一方、羽心、ディアーナ、アプリルは部屋の中に入ると、目を大きく見開いた。

「何なの……あれ」

「どうした、羽心」

勇気と誠も部屋に入った。

部屋には、隅に大きな檻が置かれていて、中で猫が飼育されていた。

だが、ただの猫ではない。

猫の身体に、羽が生えていたのだ。

「何だよこいつは！」

「見て分からないのかい？　僕が作った新しい動物だよ」

「作った？」

だから、二階堂は作品と言っていたのだ。

「だけど、これって……」

夢で見た不気味な動物達と同じだ。

すると、誠が二階堂の傍に詰め寄った。

「新しい動物なんか作れるわけないだろう！」

「そりゃあ、君達には無理だろうね。だけど僕は、作れる力を手に入れたんだ」

「力だって？」

「ああ、死骸を繋ぎ合わせて、新しい動物を作る力」

二階堂は、檻の前に立ち、羽の生えた猫を見た。

「一週間ぐらい前だったかな。交差点で猫が車に轢かれて死んでいるのを見つけたんだ。」

ちようどその時だったよ。僕の頭の中に何かが入り込んだんだ」

それこそが、死骸を繋ぎ合わせて生き返らせる事ができる力だった。

二階堂は、公園で死んでいた鳩を見つけて猫の死体と繋ぎ合わせ、生き返らせたとい

うのだ。

「それって、キメラゾンビ？」

「昨日、やっと完成したんだけどね」

「何言ってるんだよ?? どうやったのか分からないけど、こんなの良くないよ！」

誠は二階堂をじつと見つめた。

「良くない? この素晴らしい力が？」

「死んだ動物を生き返らせるなんて素晴らしくなんかない! こんな事、すぐやめるんだ！」

「死者蘇生はこの世界でも禁忌なのね」

誠は二階堂の肩を掴もうとしたが、二階堂は誠の手を叩くように振り払った。

「くそつ、君も僕を理解してくれないのか！」

「誠！」

二階堂は、誠を突き飛ばした。

ディアーナが誠に駆け寄る。

二階堂は「ふん」と鼻を鳴らした。

「君なら僕の研究を理解してくれると思ったのに。だから家に来てもいいよって言ったのに。」

それなのに……それなのに……。

だったら、もういい！ 君達なんか、こいつの餌になればいいんだ！」

二階堂は、檻の入り口を勢いよく開いた。

次の瞬間、羽の生えた猫が飛び出してきた。

「ニャアアアアアアアア！」

「みんな逃げろ！」

「あたしがやるわ！」

勇気とディアーナは羽心達に向かって叫んだ。

二階堂の力は、怪の力によるものだ。

その力によって生み出された猫に襲われたら、ただでは済まないだろう。

「だけど、勇気」

「いいから、羽心！」

「無理に戦わないの！」

勇気は誠、羽心、ノノ、アプリルと共に、部屋から飛び出した。

「せいっ！」

「ニャ!？」

「しよくぶつのせいれいよ、そのうでをのばしかのものじゆうをからみとれ！」

nding」

ディアーナは猫に先制攻撃を仕掛けた後、束縛魔法で猫の動きを封じ、駆け出した。勇氣達は、部屋の隅にある階段へと走ると、そのまま一階へ駆け下り、家の外へと出る。

そして、そのまま一心不乱に走り続けた。

やがて、勇氣達は自分達の住む町へと戻ってきた。

「誠君、家に帰ったら絶対外に出ちゃ駄目だよ！」

「勇氣……」

羽心は何かを言おうとしたが、それよりも早く勇氣が喋った。

「羽心も家にいるんだ！」

「だけど……」

「いいから！」

勇氣は必死の形相で羽心を見つめる。

羽心はそんな勇氣に何も言えなくなり、黙って頷いた。

「後は、あたし達が何とかするわ！」

「……あの、ディアーナ、それ、僕のセリフだけど」

誠は戸惑いながらも、家へと帰った。

羽心も勇気を心配そうに見つめながら、家へと戻る。

「それでいいんだ」

羽心達が羽の生えた猫に襲われる前に、怪を退治しなければならぬ。

勇気は、デイアーナ、ノノ、アプリルと共に家へ駆け込むと、書斎のドアを開けた。すると、既に部屋の中にはキユウが待っていた。

3 — 天才すぎる科学者

「ねえ、大変なんだ！」

「実はかくかくしかじか」

勇氣とディアーナは、先ほどの出来事をキユウに話した。

ノノとアプリルは、既に来ている。

「なるほど、危ないところだったね」

「あの怪は何なの？」

「羽が生えた動物は、ペガサスがいるけど……どう見てもアレは、ペガサスじゃないわよね」

「動物の怪じゃないよ。今回の怪は、フランケンシュタインだ」

「それって、のしのし歩くあの怪物の？」

怪奇現象の本に載っている有名な怪物だ。

だが、キユウは首を横に振った。

「フランケンシュタインは怪物の名じゃない。

フランケンシュタインは、怪物を作った大学生の名前で、

フルネームはヴィクター・フランケンシュタインだ」

赤文字という事は、真実だ。

「えっ、大学生の名字がフランケンシュタインで、名前はヴィクターなの？」

「長い年月の中で色々な事が勘違いされたんだよ」

「へえ、物語の人物も怪になるなんてね」

デИАーナは、ジャネットとツタンカーメンを思い出した。

フランケンシュタインは小説の存在が実体化した存在であり、

二人と同じような存在だと思っているのだ。

「とにかく急ごう。フランケンシュタインは、ある意味ドラキュラより厄介だ。」

同じ陣営『Fate/Apocrypha』では、ヴラド三世とフランケンシュタイ

ンは同じ黒の陣営。になった事はあるけどね」

「ドラキュラよりも……？」

「同じ陣営……？」

勇気は、想像しただけでゾツとする。

デИАーナは、同じ陣営という意味が分からなかった。

「武器は何を持っていけばいいの？ 今度は絶対に落としたり壊したりしないよ！」

勇気は真剣な表情になると、部屋を見回した。

「武器はないよ」

「へっ?」

「フランケンシュタインは、まだ人間だからね」

「どういう事?」

「生きた人間も怪になる可能性がある」

「魔術師や超能力者も、広い意味では怪なのね」

「ま、そうかもしれないね。」

今回は、上手く説得して怪にならないように彼を止めるんだ。さあ、行くよ」

「はいはい、ヴィクターを止めに行くのね」

「ディアーナは二つ返事で引き受けた。」

「キユウはグローブを嵌めた左手を壁の前にかざし、呪文を唱えた。」

「カオス・ゲート
時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

キユウ、ディアーナ、ノノ、アプリルが、光の渦の中に消えた。

勇気も戸惑いながらも、右手にグローブを嵌め、隠していた靴を持つと、

急いで光の渦の中に飛び込んだ。

「んんんん!」

「わーい！」

「ひゃーっ！」

「気持ちいいぜー！」

光のトンネルの中を飛んでいく。

やがて、トンネルの奥に、地面が見えてきた。

四人が地面に綺麗に着地した瞬間、頭の上に閃光が走った。

夜空に轟音が鳴り響いた。

雷が落ちたのだ。

「うわっ！」

「きゃあー！」

勇気とノノは慌てて身を縮めた。

そこは、風が吹き荒れる夜の町の中だった。

ディアーナとアプリルは、物怖じせず立っている。

「(トト)はど(トト)なの？」

勇気は手で雨を防ぎながら、宙に浮かぶキュウの方を見た。

ノノはバリアを張り、雨を防いでいる。

「ここは、19世紀のドイツのバイエルンにあるインゴルシュタットという町だよ」

「また19世紀?」

「ああ。ファフロツキーズの時とは違って、ここは大学もある都会だけどね」

それを聞き、勇氣、ディアーナ、ノノ、アプリルは町並みを眺めた。

暗く大雨も降っているので遠くまでは見えないが、

キユウの言うように、舗装された道路に沿って建物がどこまでも並んでいた。

「ヴィクター・フランケンシュタインは、あのアパートに住んでいる」

キユウは、前方に見える屋敷のような建物を指差した。

「あそこの最上階で、彼は、今まさに死体を生き返らせようとしているはずだ」

「ええええ?」

勇氣は二階堂の事を思い出した。

二階堂は猫と鳩の死骸を繋ぎ合わせて、新しい動物を作り出した。

「けど、死体っていうのは……」

キユウは、死骸ではなく、死体と言った。

勇氣は、その意味を尋ねようとキユウの方を見た。

瞬間、再び稲妻が走り、轟音が鳴り響いた。

「わっ!」

「きゃあ!」

「怖がってる場合じゃない」

「だけど……」

「嵐が予想より早く来ている。早くしないと取り返しつかない事になるぞー！」

キユウはそう言うのと、アパートの方へと飛んで行った。

「あつ、待ってよー！」

「行くわよ、勇氣ー！」

まだヴィクター・フランケンシュタインをどう説得すればいいのかわからない。

だが、考えている余裕などなさそうだ。

早くしないと大変な事になるのは四人にも理解できた。

「ああ、もうー！」

勇氣は無我夢中で走り出すと、ディアーナ、ノノ、アプルと共にアパートに飛び込んだ。

「……だー！」

最上階までやってきたキユウは、ドアの前で立ち止まった。

必死に階段を駆け上がった勇氣は、息を切らしながら周りを見回す。

ディアーナ、ノノ、アプルは警戒しながら身構える。

最上階には、部屋は一つしかないようだ。

ドアを見ると、僅かに開いていた。

「さあ、早く」

「う、うん……」

勇気はごくりと唾を飲み込むと、ドアをゆっくりと開けて、中に入った。

ディアーナ、ノノ、アプリルも入った。

「くらい……わい……」

部屋の中は薄暗かった。

目を凝らして見ると、人が暮らしている家とは思えなかった。

部屋の真ん中に、小さな潜水艦のようなタンクが置かれている。

タンクには様々なパイプやコイルが繋がっていた。

壁際には大きな棚がいくつも並んでいて、器具が乱雑に置かれている——まさしく実

験室だ。

部屋の奥から誰かが咳き込む声が聞こえた。

見ると、窓の傍で、白衣を着た一人の男が、机の上に置かれた器具をせわしなく調整していた。

「あの男が、ヴィクター・フランケンシュタインだ」

キユウが勇気の横に浮かびながら言う。

「彼が……」

「何だか気持ち悪いわね……」

大学生と言っていたので、まだ若いはずだ。

しかし、髪は乱れ、異常なほど頬が痩せこけていた。

咳き込むたびに、身体が大きくフラつき、今にも倒れそうだ。

だが、ヴィクター・フランケンシュタインは怪ではなく、人間そのものだ。

「あ、あの……」

「誰だ？」

勇氣は勇氣を出して、ヴィクター・フランケンシュタインに声をかけた。

瞬間、窓の外に稲妻の閃光が走った。

光に照らされたヴィクター・フランケンシュタインは、睨むように勇氣達を見た。

目はギラつき、血走っている——明らかに、普通の人間とは思えない。

「みんな、見かけない服装だな。」

あの少年の言った通り、時代を超えて、この僕の研究を止めに来たんだな？」

「あの少年って！」

「邪鬼の事だね」

キユウがそう言うと、ヴィクター・フランケンシュタインはにやりと笑った。

「邪鬼。確かそんな風な名前だったな」

「えっ？ どうしてキユウの言った事が？」

「人間じゃないの？」

退魔の力がなければ、人間にはキユウは見えないはずだ。

キユウは険しい表情でヴィクター・フランケンシュタインを見つめた。

「思った以上に、怪になりつつあるようだ」

「それって、半怪になってるのね？」

「ディアーナの言葉にキユウは頷く。」

半分怪になっているため、ヴィクター・フランケンシュタインにはキユウが見えるのだ。

勇気は危険を感じ、ディアーナ、ノノ、アプリルと共に身構えた。

そんな四人を見て、ヴィクター・フランケンシュタインは笑った。

「カッカッカ、何を恐れているんだい？ 怪になれば神にもなれる。」

現に僕は生死だつて意のままにできるんだ！」

「ヴィクターおにいちゃん、このせかいだと、それはありえないよ」

「あり得ない？ あり得ないのは僕の素晴らしさを理解しない君達の方だ！」

ヴィクター・フランケンシュタインは大きな声を出すと、激しく咳き込んだ。

「どうやら、彼は病に侵されているようだね」

「ああ」

キユウの言葉に、ヴィクター・フランケンシュタインは不気味な笑みを見せた。

「僕のこの身体はもつてあと半年だろう。だから必死に研究に打ち込んだ。

だけど、誰もこの天才である僕の研究を理解しようとしなかったんだ」

「研究……それに天才って……」

ヴィクター・フランケンシュタインの言っている事は二階堂そっくりだ。

すると、キユウが口を開いた。

「君が会った少年は、ヴィクター・フランケンシュタインと似ている部分があった。

だから、ヴィクター・フランケンシュタインから漏れ出した力の影響を受けて、

動物を生き返らせる事ができたんだ」

「そんな……」

「ヴィクター。あなたは、おかしい研究をしたのね」

勇気は怯え、ディアーナは反対する。

一方、ヴィクター・フランケンシュタインはその話を聞き、ますます笑みを浮かべた。

「おかしい研究じゃないよ？」

その時、勇気達の傍にあった四角い箱のような物体が揺れ動いた。

勇気がハツとしてその物体を見ると、それは檻だった。

檻の中に、羽の生えた犬がいた。

「ウウウウウ、ワン！」

「うわあつ！」

「やめてっ！」

勇気は思わず仰け反り、ディアーナはレイピアで動物を突く。

二階堂の家にした不気味な動物と同じだ。

「カツカツカ。君達が下らない事ばかり言うものだから、『27号』が怒っているようだな」

「27号？ これってもしかして死骸を繋ぎ合わせたんじゃ？」

「その通り。だがそれは、あくまで僕の研究の過程でしかない。」

君達には今から始める最終実験の証人になってもらうよ」

ヴィクター・フランケンシュタインはそう言うと、タンクの前に立った。

瞬間、窓の外に稲妻が走り、部屋が照らされ、タンクの中が見えた。

「あああ！」

「これが……あなたが作った、理想の人間なの……？」

タンクの中には、こめかみにボルトが刺さった、継ぎ接ぎだらけの大男が眠っていた。

4 — 生き返った怪物

「大変だ！」

「怪物がいるわ！」

勇気とディアーナはタンクの傍に駆け寄る。

タンクは緑色の液体で満たされていた。

大男は酸素ボンベもつけずにその中にいたのだ。

しかし、タンクに触れようとする勇気を、ヴィクター・フランケンシュタインが遮った。

「28号に触るな！」

ヴィクター・フランケンシュタインは血走った目で、勇気とディアーナを睨んだ。

すると、キユウとノノが勇気の傍に飛んで来た。

「フレッシュ・ゴレムだわ！」

「あれは人間じゃない。繋ぎ合わされた死体だ」

キユウはアパートに入る前に、彼が死体を生き返らせようとしていると話していた。

「そっか、人間の死体だから、死骸とは言わなかったんだ……」

「……きもち、わるい……」

「死体から作ったのが、その木偶の坊なのか」

勇気はキユウの言った言葉の意味をようやく理解した。

ノノは気持ち悪さで吐きそうになり、

アプリルは鋭い目でヴィクター・フランケンシュタインを睨む。

「だけど、死体なんて……。人を殺したって事だよね……」

勇気は怯えた目で、ヴィクター・フランケンシュタインを見つめる。

だが、ヴィクター・フランケンシュタインは怒鳴った。

「何を言ってる！ 完璧な人間を作ろうとしている僕が、人を殺すなんて事するわけないだろ！」

「美しいとか、そういうのは度外視なのね」

「じゃあ、どうやって死体なんかを……」

「勇気、君のいる時代では考えられないが、この時代のヨーロッパでは、

研究のためなら死体のパーツを手に入れる事はそれほど難しい事じゃないんだ」

「そ、そうなの？」

自分のいる時代とは全く違うため、勇気は恐ろしさを感じた。

ダイアーナとアプリルは、顎に手を当てた。

そんな中、ヴィクター・フランケンシュタインは、タンクの中の大男を見た。

「どうだい、素晴らしい身体だろう。この肉体なら熊にだって負けないし、豹よりも速く走れる」

「生き返らせるの？ 人道に反するわ！」

「ディアーナがそう言うのと、目の前の男は蔑んだ目で彼女を睨んだ。

「何だ、君も周りの下らない奴らと同じなのか。」

やはり、天才であるこの僕の考えは理解できないようだな」

「天才……ねえ。確かに、あなたは『天才』よ。」

でも、そういう考えは、あの子みたいな普通の人には理解できないって事も知ってるわよね？」

「はは、そうか。君はそんな意見を言ってきたか。」

僕の事を理解してくれたのは、あの邪鬼という少年だけだったな。

彼は罅の向こうには、僕のような天才を理解する素晴らしい世界があると教えてくれたよ」

次の瞬間、ヴィクター・フランケンシュタインは窓の外を見た。

勇気達も釣られるように窓の外を見る。

「ああっ！」

外に、×印状の罅が浮かんでいる。

罅は、既に人が入れるほど大きくなっていた。

「そんな！」

勇気は焦りながらヴィクター・フランケンシュタインを見る。

「あっ！」

ヴィクター・フランケンシュタインはいつの間にか銃を取り出し、銃口を勇気達に向けていた。

「ヴィクター！」

「フランケンシュタインさん！」

「動くな！」

ヴィクター・フランケンシュタインは銃口を向けたまま、布がかかった物体の傍まで移動した。

「さあ、最後の実験を始めよう！」

そう言つて布を取ると、太いホースでタンクに繋がっている、電極が付いた椅子があった。

肘かけのところには、レバーもある。

ヴィクター・フランケンシュタインは、銃を構えたまま、

金属でできたヘルメットのような物を被ると、その椅子に座った。

「まさか、あれは」

「ほう、分かったようだね。タンクの中のこの身体には、まだ、一番大切なものがなくてね」

「どういう事だ？」

アプリルが首を傾げると、ヴィクター・フランケンシュタインは不気味な笑みを浮かべた。

「頭脳だよ。今からこの装置を使って、僕の頭脳をこの身体に移すんだ」

瞬間、ヴィクター・フランケンシュタインは激しく咳き込んだ。

身体が大きく揺れ、銃口が下がった。

「今だ！」

「う、うん！」

「ああ！」

勇気、ディアーナ、ノノ、アプリルは、

無我夢中でヴィクター・フランケンシュタインの元へ走った。

「くそっ！」

ヴィクター・フランケンシュタインは慌てて銃を構えようとするが、

それよりも早く、勇氣とアプリルがその腕を掴んだ。

「は、離せ！」

「離すもんか！」

「ヴィクター……やめるんだな」

ヴィクター・フランケンシュタインの腕は、枝のように細い。

二人が腕を捻ると、ヴィクター・フランケンシュタインは銃を床に落とした。

「捕まえるんだ！」

「ああ！」

勇氣とアプリルはヴィクター・フランケンシュタインの身体を押しさえようとする。

「邪魔をするな！」

だが、ヴィクター・フランケンシュタインは力を振り絞って勇氣を突き飛ばした。

ヴィクター・フランケンシュタインは急いで肘かけのところに付いていたレバーを握った。

アプリルは寸でのところで、ヴィクター・フランケンシュタインの腕を掴む。

「やめろ!!」

「完璧な肉体を手に入れれば僕に弱点はなくなる！」

今まで馬鹿にして来た奴らを見返す事ができる！

さあ、見ろ、これが天才の作った最高傑作だ!!」

ヴィクター・フランケンシュタインは高笑いしながら、

アプリルを突き飛ばした後、レバーを引いた。

天井が開き、強い雨と風が部屋に入ってきた。

「くっ!」

勇氣は立ち上がると、ヴィクター・フランケンシュタインの元へ駆け寄ろうとする。

しかし、キユウが前を塞ぐように飛んで来て声を荒らげた。

「近づくな! もう間に合わない!」

稲妻が、勇氣達のいる建物につけられた避雷針に落ちた。

大男が眠るタンクと、ヴィクター・フランケンシュタインが座る椅子が揺れ動く。

ヴィクター・フランケンシュタインが被っているヘルメットからは、激しく火花が飛

び散った。

「アアアアアア!!」

椅子の上のヴィクター・フランケンシュタインは悲鳴を上げると、頭をガクンと垂ら

した。

そして、全く動かなくなった。

「フ、フランケンシュタインさん……?」

「ヴィクター……」

「どうしたんだ……う？」

勇氣は近づこうと思ったが、キユウの方を見て動くのを躊躇った。

キユウ、ディアーナ、アプリルは険しい表情で、タンクをじつと見つめた。

勇氣とノノは視線だけを動かし、タンクを見る。

すると、タンクに入っていた大男が目を開いた。

「わっ！」

その迫力に勇氣は思わず仰け反る。

大男は手を伸ばし、タンクの蓋を開けた。

「ウウウ、アアアア」

唸り声を上げながら、大男がゆっくりと出てくる。

こめかみに刺さったボルトから、小さな火花が飛び散っている。

「ボクの……名ハ……ヴィクター……フランケン……しゅタイン」

「ヴィクターの意識だけが、怪物の中に移動したのね」

「ええっ」

「あれはもう人間じゃない。……怪だ」

ヴィクター・フランケンシュタインは、フラフラと窓際まで動くと、罅を見た。

「スバラしい……世かいへ……」

「止めなきや！」

「ああ！」

勇気、ディアーナ、ノノ、アプリルは怪になった男の下へ駆け寄ろうとした。

「ジャマを……スるナア！」

男は傍にあつた大きな柵を軽々と掴むと、勇気の方へ放り投げた。

「うわっ！」

「危ない！」

「オオオオツ」

柵が勇気の傍に勢いよく飛んで来るが、ディアーナが風を操つて柵を防いだ。

ヴィクター・フランケンシュタインは獣のような声を上げると、周りの物を破壊し始めた。

「彼はただの怪物になったようだね。実験が完璧じゃないのに完成を急いませいだ」

「そんな！」

「全て、邪鬼の仕業だ。」

邪鬼はただ、ヴィクター・フランケンシュタインを怪にして暴れさせたかっただけなんだ」

「それって……」

邪鬼はヴィクター・フランケンシュタインの事を理解してくれていたわけではない。利用していただけだ。

「オオオオオオオオ」

ヴィクター・フランケンシュタインは窓を開けると、罫に向かってジャンプした。

そのまま、罫の中に消える。

「ああー！」

「追いかけるんだ！」

キユウが罫に向かって飛んだ。

「でも、罫は窓の外だよ！」

「窓の外だろうが宇宙の果てだろうが、今ジャンプしなければ全てが終わってしまうぞ！」

罫の向こうには見捨里市がある。

もし、みんなが大男になったヴィクター・フランケンシュタインに襲われたら……。

「あああ！ 分かったよ！ んん！」

「あたし達が、ヴィクターを阻止するわ」

勇気は歯を食いしばって窓からジャンプすると、罫の中へと飛び込んだ。

ディアーナ達もまた、彼の後を追うのだった。

5 — 見捨里市の戦い

(これがあれば大丈夫よね……)

日が落ちて夜になろうとしている見捨里市の町を、白鳥羽心が歩いていた。

羽心は、辺りを警戒しながら、勇気の家を目指していた。

手には、母親が愛用しているピンク色のテニスラケットがある。

羽の生えた猫が襲って来たら、このラケットで戦おうと思っていたのだ。

勇気の家までは、歩いて3分もかからない。

羽心はラケットを構えながら、少しずつ早足になっていた。

(勇気は、絶対何か知ってるわよね……)

二階堂が作った羽の生えた猫から逃げる際、

いつもの勇気とはまるで違うその姿に、羽心は違和感を抱いたのだ。

(それに、あの×印の罅にしたって……)

羽心は先日、ファフロツキーズを調べようとして、パンダ公園で奇妙な罅を目撃した。

そして、ノノと共に、ファフロツキーズと戦った。

しかししばらくすると、ファフロツキーズに関する出来事が全て無かった事になって

いた。

勇氣も、まるで何事もなかったかのように、フアフロツキーズの事を何も話さない。羽心は自分が夢でも見たのかと思ったが、

今回、羽が生えた猫を見てそれが夢などではなかった事に気づいた。

ドラキュラの時といい、フアフロツキーズの時といい、

何故かみんな、いつの間にか忘れてしまっているのだ。

(この町で、何かが起きてる……)

そして、恐らく勇氣は、その事を知っているのに、知らないフリをしている。

羽心はどうしてもそれを勇氣に聞きたいと思い、勇氣の家に行こうとしていたのだ。

「白鳥羽心さんだね」

道路の角を曲がろうとした時、背後から声がした。

羽心が振り返ると、そこには、包帯で片目を隠した着物姿の少年、邪鬼が立っていた。

羽心はその異様な出で立ちに戸惑い、ラケットを構えた。

すると、邪鬼はにっこりと笑った。

「どうして、私の名前を知ってるの？」

「警戒しなくていいよ。僕は君の、いや、君と真之勇氣君の味方だから」

「勇氣の？」

「彼の様子が最近おかしいだろう?」

「どうして、その事を知ってるの?」

羽心はラケットを下げながら、邪鬼に訪ねた。

「僕は彼の事をずっと心配してたんだ。このままだと、勇気君は死んでしまうかもしれないから」

「死んでしまう……?」

羽心は全身が凍りつくような恐怖を感じた。

邪鬼は微笑みながら、そんな羽心の目の前までやって来ると、顔をじつと見つめた。「君なら彼を救える。この僕が、その方法を教えてあげるよ——」

罫から飛び出した勇気、デイアーナ、ノノ、アプリルは、地面に綺麗に着地した。

「(っ)は……」

見上げると、見覚えのある建物がある。

二階堂の3階建ての家だ。

「あそこ(っ)を見ろ!」

宙に浮かんだキユウが、一番上の部屋を指差した。

二階堂の部屋の窓が、粉々に割れている。

「恐らく、ヴィクター・フランケンシュタインの仕業だろう」

「そんな！」

勇氣は、あそこが二階堂の部屋である事をキユウに話した。

「二階堂君はフランケンシュタインさんに襲われたんじや？」

「多分な」

勇氣とアプリルがそう言うと、一つの人影が現れた。

「みんな！」

「どうしてここに？」

誠は、家へ帰ったはずだ。

すると、誠は焦った表情で勇氣を見た。

「あの後、家に帰ったんだけど、二階堂君の事がどうしても心配で……」

それで様子を見に来たのだという。

「だけど、二階堂君が変な大男に連れて行かれちゃったんだ」

誠は、二階堂の家の隣にある小学校の傍までやって来た時、

大男に捕まえられた二階堂を見たのだという。

追おうと思ったが、一人では怖くてどうすればいいのか分からなかったらしい。

「そんな時、家の方から声がして……」

「まさか、ヴィクターが来てるの!？」

ディアーナは小学校の方を見た。

このままでは二階堂が危ない。

「誠君はどこか安全なところに隠れてて！」

「あたし達が止めるわ！」

勇気、ディアーナ、ノノ、アプリルは、学校へ向かった。

学校のグラウンドの遊具の傍に、二つの人影が見えている。

二階堂と、大男になったヴィクター・フランケンシュタインだ。

「お、お前は、誰だ……？」

二階堂はその異形の姿に驚きながら、壁際に追い詰められていた。

「お前ハ……カヲ得た……ダカラ……仲間マダ」

「仲間……」

ヴィクター・フランケンシュタインの肩には、二階堂が作った羽の生えた猫が乗っている。

「今から……死体ヲ……用イる……。ツナギ合わせて……アタラシい……人間ヲ作ルンダ」

ヴィクター・フランケンシュタインが咆哮すると、

こめかみに刺さったボルトから火花が飛び散った。

「うわああ！」

二階堂は腰を抜かすかのようにその場にしゃがみ込むと、震え出した。

「た、助けて！ 僕は人間なんか生き返らせたくない！」

「ナゼダ……。コノ身体ヲミろ……。スバラしいダろ」

「素晴らしい？ これが……。？」

ヴィクター・フランケンシュタインは荒く息をしながら、二階堂に迫った。

二階堂は恐怖で目に涙を浮かべながら、ヴィクター・フランケンシュタインを見つめた。

「こんな人間じゃない！ ただの怪物じゃないか！」

「かい物……。？」

次の瞬間、ヴィクター・フランケンシュタインが暴れ出した。

肩に乗っていた羽の生えた猫が地面に落ちる。

ヴィクター・フランケンシュタインは壁を殴り、次々と破壊していく。

「ひいひい！ ひいひい！」

流石の二階堂も、あまりの恐怖で悲鳴を上げ続けた。

ヴィクター・フランケンシュタインは、傍にあつた鉄棒を掴むと引っこ抜き、持ち上げた。

「ボクハ……人間を作ったンダ……！」

ヴィクター・フランケンシュタインは鉄棒を二階堂の方へと投げた。

「かぜのせいはいよ、みえざるしようげきを！ Wind Blast」

その時、突風が起こり、鉄棒が吹き飛ばされる。

デИАーナが魔法を使ったのだ。

さらに、勇氣、ノノ、アプリルがやって来る。

デИАーナはヴィクター・フランケンシュタインを見て、決意が漲った。

アプリルは狼、ノノは鳥の姿に変身し、ヴィクター・フランケンシュタインに挑む。

「ひっ！」

「姿が何であれ、アプリルもノノも、あたし達の味方よ」

勇氣は二人の姿を見て震えるが、デИАーナは真剣な表情で双剣を構えた。

「♪♪♪♪♪」

ノノはヴィクター・フランケンシュタインに歌を歌うが、

ヴィクター・フランケンシュタインには効かなかった。

「かぜのせいはいよ、みえざ……きやあ！」

「♪♪♪♪♪」

デИАーナが呪文を詠唱しようとする、

ヴィクター・フランケンシュタインが彼女に向かって殴りかかってきた。

しかし、ノノの歌声でバリアが張られ、ディアーナに攻撃が届く事はなかった。

「かぜのせいはいよ、みえざるしようげきを！ Wind Blast」

ディアーナは改めて呪文を唱え直し、ヴィクター・フランケンシュタインに双剣を向ける。

すると、双剣から無数の風の刃が飛び、ヴィクター・フランケンシュタインを切り刻んだ。

だが、ヴィクター・フランケンシュタインはけろつとしている。

「効いてない!？」

「いや、平気な顔をしているだけだ。そらっ!」

Aprilも爪で切り裂くが、やはりヴィクター・フランケンシュタインは応えていない。

「チツ……」

「もうやめるんだ!」

勇気は上半身を起こすと、ヴィクター・フランケンシュタインを睨む。

しかし、ヴィクター・フランケンシュタインはさらに激しく暴れた。

「ゼン員……死体ニシテやる！ ボくの……実ケン材料ニなレ!」

フランケンシュタインは壁を破壊し、その破片を勇気達の方へ向かって投げようとした。

勇気はそれに気づくが、避ける余裕はない。

「危ねえ！」

とつさにアプリルは二階堂に覆いかぶさると、

背中をヴィクター・フランケンシュタインの方へ向けた。

「俺が相手だ！」

アプリルは、自ら二階堂の盾になる決心をしたのだ。

ヴィクター・フランケンシュタインは、破片を大きく振りかぶった。

「やめろー！」

突然、誠が現れ、ヴィクター・フランケンシュタインにタツクルした。

その衝撃で、ヴィクター・フランケンシュタインが一瞬よろめく。

投げた破片のコースがずれ、破片は勇気達の横に落ちた。

「ジャマダー！」

「わっ！」

ヴィクター・フランケンシュタインが誠を払いのけると、

誠はまるで人形のように地面を転がった。

「服部君！」

「やめろ……」

二階堂が叫ぶ。

誠はボロボロになりながらも、ヴィクター・フランケンシュタインを睨んだ。

「二階堂君に……酷い事をするな！」

誠は立ち上がると、ヴィクター・フランケンシュタインに立ち向かおうとした。

しかし、身体が言う事を聞かず、その場にまた倒れる。

「服部君！」

二階堂は誠の元へ駆け寄った。

「服部君、どうして僕のために？」

「そ、そんなの決まってるよ……」

誠は二階堂を見つめた。

「だって、友達だから」

「服部君……」

誠がそう言つて微笑むと、二階堂の目から、涙が流れた。

「オオオオオオオオ」

ヴィクター・フランケンシュタインが咆哮し、誠達を睨む。

「勇氣！ 二人を助けるんだ！」

「うん！」

「ええ！」

キウウの声を待たず、勇氣達は二人の元へ駆け出す。

だが、勇氣はどう戦えばいいか分からない。

その時、勇氣はヴィクター・フランケンシュタインの傍にいる、羽の生えた猫の姿を見た。

猫は飛ぼうとしているが、羽ばたくだけで上手く飛ぶ事ができない。

（さっき落ちた時、怪我でもしたのか？）

勇氣がそう思っていると、ヴィクター・フランケンシュタインが声を上げた。

「ソッチじゃナイ！ や、ヤメろ！」

勇氣が顔を上げると、ヴィクター・フランケンシュタインは、

何故か自分の身体を壁にぶつけていた。

ヴィクター・フランケンシュタインが壁にぶつかる身体を手で押さえようとす。

こめかみに刺さったボルトから火花が激しく飛び散っている。

「まさか、あれって……」

勇氣はヴィクター・フランケンシュタインと飛べない猫を交互に見て、ハツとした。

「もしかして、上手く身体を制御できないのでは？」

猫が飛べないのは、落ちて怪我をしたわけではないのだろう。

ヴィクター・フランケンシュタインの身体と同じように、

飛ぶという命令が羽に上手く伝わらないのだ。

二階堂の話によると、羽の生えた猫が飛行したのは、2日前。

フランケンシュタインの怪物に至っては、頭脳が移ったのは今さっきだ。

「キユウー！」

ダイアーナはキユウにその事を話した。

キユウは勇気の隣に降り立つと、

ヴィクター・フランケンシュタインのこめかみに刺さったボルトをじつと見つめた。

「……どうやら倒す方法があるようだ。二人でやれば、きつと成功する！」

「……あたし達は？」

「もう、大丈夫だよ。下がって」

「ええ……」

ダイアーナ、ノノ、アプリルは下がり、勇気とキユウの戦いを見守った。

「二人で……」

「ああ、ヴィクター・フランケンシュタインには僕が見えているだろ。」

やっと、君と一緒に戦う事ができるよ」

「キユウ……」

キユウは勇気に微笑みを見せると、どう戦うかを耳打ちした。

「えっ、そんな方法で？」

「簡単だろう？」

「う、うん……」

それで倒せるとは思えないが、キユウが言うなら間違いないだろう。

勇気はグローブを嵌めた右手を強く握り締めると、傍に落ちていた壁の破片を手にとった。

「やろう！ キユウ！」

次の瞬間、勇気とキユウはヴィクター・フランケンシュタインのもとへ走った。

「何々」

ヴィクター・フランケンシュタインは顔だけを二人の方へ向ける。

しかしそこには、キユウしかいない。

「オオオオ！」

「今だ！」

ヴィクター・フランケンシュタインは、キユウを捕まえようとした。

叫んだ瞬間、キュウの体が二つに分かれた。

いや、キュウの体に重なっていた勇氣が真横へ飛び出したのだ。

キュウはそのままフランケンシュタイン目掛けて、真っ直ぐに猛進する。

「オオオ、オオオオオ!!」

突然の出来事に、ヴィクター・フランケンシュタインは慌てて勇氣の方を見る。

だが、身体は全く反応せず、そのままキュウを捕まえようとして前に出た。

刹那、ヴィクター・フランケンシュタインはバランスを崩し、大きくよろけた。

勇氣はそんなヴィクター・フランケンシュタインに向かって、破片を振り上げた。

「食らえ!!」

次の瞬間、勇氣は持っていた破片で、

ヴィクター・フランケンシュタインのこめかみに刺さっているボルトを力いっぱい殴

りつけた。

ボルトが外れ、火が飛び散る。

「オオオオオオオ」

ヴィクター・フランケンシュタインは慌ててこめかみを押さえようとするが、

身体が全く言う事を聞かなかった。

「オオオオオ! 頭が……あたまが!」

ヴィクター・フランケンシュタインのこめかみから火が激しく飛び散り、顔が苦痛で歪む。

「オオオオオオオオ、あたまが……アタマガ……ワレルウウ！」

ヴィクター・フランケンシュタインの頭から黒い煙が出る。

身体からも、同じように煙が出た。

「そ、そんな！ いやだ！ アア、アアアアアア!!」

ヴィクター・フランケンシュタインの全身が、黒い煙となって飛び散り、消えた。

羽の生えた猫も黒い煙となって、そして消えた。

「やった。倒したんだ……」

「よく頑張ったわね、勇気……」

勇気はその光景を見つめながら、そう言葉を漏らした。

ディアーナは珍しく、勇気を褒めていた。

「上手く行ったようだね。やはり、あの頭のボルトが弱点だったようだ」

「だけど、キユウ、いくらなんでも無茶だよ。捕まったら握り潰されてたよ」

「僕がかい？ 僕は幽霊だよ。捕まえる事なんて不可能さ」

キユウは笑いながら、勇気の身体に触れようとして、手がすり抜ける事をアピールした。

「だけど、ヴィクターは憐れだったね……」

キユウはふと、ヴィクター・フランケンシュタインが消えた場所を見つめた。
全ては、邪鬼のせいだ。

「フランケンシュタインさん……」

「ヴィクター……」

勇気はやるせない気持ちになると、奥歯を噛みしめた。

e p i s o d e 3 — B o n d s S u n a n d
M o o n ‹ ターニングポイント
キユウ

「二階堂君、大丈夫かな」

「彼ならきつと大丈夫だよ。誠君を家に誘っただろう」

夜の小学校に、勇気、キユウ、ディアーナ、ノノ、アプリルがいた。

怪を倒した事により、記憶がリセットされ、何事もなかった事になったのだ。

二階堂と誠は、何故自分達が小学校にいるのかも分からないまま、帰って行った。

「そう言えば……」

先ほど、二階堂は帰りながら、誠に家がすぐ近くにある事を話した。

「僕、二階堂君と色々話をして、友達になりたいんだ。今度遊びに行きたいな」

「えっ?」

二階堂は誠のその言葉に驚いたような表情になったが、すぐに笑みが零れた。

「あ、うん。いいよ。遊びに来て」

二階堂はそう言うのと、嬉しそうに誠と一緒に去って行った。

「多分、二人はこれから本当の友達になれるよね」

「ええ」

勇気が二階堂の家の方を見る。

「ディアーナは小さく頷いた。

「それにしても、君は本当に勇敢になった」

キユウは勇気をじっと見つめた。

「たとえ武器がなくても、知恵と勇気があれば、怪はきつと倒せる。

知恵はまあ、まだまだだけど、勇気、君は誰よりも勇気を持っている」

「キユウ……」

何だか照れるが、キユウに褒められると嬉しい。

勇気は、これからもキユウと、後、三人の仲間ディアーナ、ノノ、アプリル。と共に

怪狩りを続けて行きたいと思った。

「僕、頑張るよ」

「ああ、期待してるよ」

勇気とキユウは微笑むと、家へ帰る事にした。

「随分仲が良いじゃねえか」

「こんなのが人間に認識できないなんて、訳が分からないわね」

「??」

デイアーナ、ノノ、アプリルは、そんな二人を見守っていた。

「待って！」

デイアーナが歩みを止めると、突然、鈴の音が響いた。

「えっ？」

勇気は、鈴の音がした方を見る。

すると、オシリスの鈴を持った羽心が立っていた。

「羽心、それは！」

「勇気、私が助けてあげるからね！」

羽心は激しくオシリスの鈴を鳴らした。

「ぐあっ！」

キユウが苦しみ出し、その場に膝をつく。

「「キユウ！」」

「キユウおにいちゃん！」

「勇気、そこに悪霊がいるのね！」

羽心はさらに激しくオシリスの鈴を振った。

「やめろ！」

勇気は慌てて羽心を止めた。

「なんで、そんな事をするんだよ！」

「勇気を救うためのなのよ！」

「何言ってるんだよ！」

戸惑いながらも、勇気はキユウの傍に駆け寄った。

「キユウ、しっかりして！」

「おにいちゃん！ おねえちゃん！」

キユウの身体からは黒い煙が出ている。

「邪鬼……まさか……彼女を騙して……利用したのか……」

キユウはそう言うと、羽心の後ろを睨んだ。

そこには、邪鬼が立っていた。

「ど、どうしてあの子が鈴を使ってるの!？」

「言ってなかったようだね。白鳥羽心にも、特殊能力がある。それが、彼女が鈴を使った

理由さ」

「お前が、邪鬼……」

勇気とアプリルは怒りの表情、ディアーナとノノは戸惑いの表情で邪鬼を見つめた。

羽心は状況が理解できず、オシリスの鈴を持って、勇気を見ながら身体を震わせていた。

勇気がフアフロツキーズ異変で見た夢の光景そのものだ。

邪鬼は不気味に微笑みながら、羽心の前に一瞬手をかざすと、羽心がその場に倒れた。

「おい、彼女に何をした!」

「安心していいよ。この子はただ気絶させたただけだ。」

それにしても、こんなに上手くいくとはねえ。これで、邪魔者はいなくなる!」

邪鬼はキユウを見る。

キユウの身体からさらに黒い煙が出ている。

「ゆ、勇気……」

「キユウおにいちちゃん、しっかり!」

「諦めろ。そいつはもうおしまいだよ。残念だねえ」

勇気の中で、何かが弾け飛んだ。

「うああああ!」

「ふざけんなあああ!」

「勇気、アプリル、やめなさい!」

感情に任せて勇気とアプリルは邪鬼に殴りかかる。

しかし、邪鬼はひらりと避け、嘲笑いながら刀を抜く。

「君達もここでおしまいにするかい？」

そう言つて、邪鬼は刀を振りかぶり、勇気とアプリルを斬ろうとした。

「がっ！」

瞬間、キユウが間に飛び込み、刀が命中する。

斬られた場所から、黒い煙が漏れ出すように流れる。

「キユウ！」

「ゆ、勇気……」

キユウは、最後の力を振り絞り、グローブを嵌めた左手を邪鬼の方へかざした。

すると、邪鬼が逃げるように後ろへ飛び、距離を取った。

「真之勇氣、ディアーナ、ノノ・オーガスタ、アプリル・フェルナンデス、命拾ひしたよ
うだね。

だが、君達だけじゃどうする事もできない。見捨里市は、もう終わりだよ——」

「そうはいかないわ！」

邪鬼は刀を空間に振るい、罅を作る。

その時、飛んできたナイフが邪鬼の右腕を掠めた。

そのナイフを投げたのは、ディアーナだった。

「く……っ！」

「これはあたしからの手土産よ。いい？ 見捨里市は終わらないわ。

絶対に、あなたの好きにはさせない！」

「……攻撃を許してしまったか。でも、君は絶対に許さないよ……！」

邪鬼は顔を歪ませてディアーナを睨みつけるも、ディアーナは全く怯まなかった。

そして、邪鬼が悔しそうに罅の中に飛び込むと、罅は消えてしまった。

「……」

「キユウ……」

「……おにいちゃん……」

キユウはその場に崩れるように倒れる。

「キユウー！」

勇気はキユウを支えようとするが、すり抜けて掴む事ができない。

キユウは黒い煙を出しながらも、勇気をじっと見つめ、僅かに口を動かした。

「ゆ、勇気……君が……ディアーナ達と……一緒に……この町を……守る……んだ……」

次の瞬間、キユウが煙のように消えた。

「そんな！ キユウー！ キユウー！」

「うそだっ!!」

勇気とノノが共に叫ぶ。

地面に、キユウが嵌めていた漆黒のレザーグローブだけがぽつんと落ちている。

「キユウ！ 僕達は二人で一つだろ!!」

勇気はそう叫ぶと、その場で泣き崩れた。

S i d e S t o r y

盗賊達のスープ作り

見捨里市のどこかに、四人の怪が集まる。

紫のショートヘアに同色の瞳、小柄な身体とは裏腹に大きな尻尾を持つ、栗鼠りすの獣人、麗羅。

セミロングの黒髪を持つ、腰に片手剣を携えている剣の付喪神、つるぎ。

背中に蝶の羽、頭に触覚が生えた蝶の妖蟲、揚羽。

金髪碧眼の、男性とも女性ともつかない中性的な美貌の魔術師、カリオストロ。

どうやら、彼らは怪とはまた違う、あるものに触れようとしているのだ。

「どうやら、南瓜がなかなか割れないみたいだね」

「それは、こんな南瓜なのかい？」

そう言つて、つるぎは巨大な南瓜を引っ張り出してきた。

その大きさは彼と比べると一目瞭然であり、高さも5 m程はあるだろう。

「よし、割るよー」

麗羅は硬い南瓜に向けてナイフを投げつけた。

だが、ただのナイフであるため、硬い南瓜には弾かれた。

「ちっ！」

「えいっ！」

「爆炎符！」

麗羅がナイフを回収した後、カリオスト口は炎の術式が刻まれた符を取り出して、硬い南瓜に投げるが、明後日の方向に飛んだ。

だが、炎で風が舞い、揚羽が呼び出した鱗粉は硬い南瓜にかかった。

「でやああああっ！」

そして、つるぎが本体の剣で硬い南瓜に斬りかかると、南瓜はどこかに飛んでいってしまった。

「はあ……どうしてくれるんだろうねえ。せつかく、この南瓜でスープを作ろうと思っただのに」

「え……なんでそんな事を今更言うの？ そんなの聞いてなかったよ〜！」

「南瓜は調理に不可欠だからな」

慌てている揚羽とは対照的に、カリオスト口は冷静だ。

「アタイはやだなく、だって面倒くさいし」

「そうしたら、ご飯抜きになっちゃうけど、それでいいのかな？」

「え？ ご飯抜き？ やだやだ！」

「だったら探すしかないようだね。よし、行くよ！ みんな！」

「おーっ！」

「……おーっ」

こうして、四人は南瓜の行方と、スープの材料探しをする事になった。

麗羅の大きな尻尾が、風に揺れていた。

「あっちの方に、南瓜が飛んでいったみたいだね」

「どうやら、南瓜は南の方へと飛んでいったようだ。」

かなりの距離を飛んでいったようで、探すなら、もう少し念入りに探す必要がある。

「とりあえず、人間のふりをしなくちゃね。アンタはカリオスト口の服の中に隠れてるんだよ」

「はーい」

揚羽はカリオスト口のローブのポケットに隠れ、麗羅は変装道具を取り出して人間に変装した。

ただ、流石に大きな尻尾は隠せないようだ。

「お前、人間なのになんで尻尾が生えてるんだ？」

「まさか、怪物なの？ やだ、怖い！」

「……つるぎ」

「ああ……。南瓜はどこに行つたのか分かるかい？」

つるぎは爽やかな笑みを浮かべて、見捨里商店街の人達に聞き込む。

その結果、謎の飛来物が、見捨里商店街からさらに南に行つたところに落ちたという。

「南瓜の位置は分かつたから、早く行こうか」

「待ちな、つるぎ。ここ最近、ゴ布林とやらが色んな物を盗んで困っているみたいだ。

盗賊としてウチは許せないね！ つるぎ、アンタにこれをやるよ」

そう言つて麗羅が渡したのは、試作品の強力な宝石だ。

これはゴ布林にのみ効果がある宝石であり、どこから麗羅が盗んできたものらしい。

「剣が得意なアンタなら使えるはずだろう？ 遠慮なく貰つておくれ！」

「ああ、ありがとう」

南瓜の位置が分かつたので、次に、四人はスーパに合う具材を盗みに行つた。

麗羅は音を立てずに忍び寄り、いい出汁が取れる魚を盗む。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ちよつと五月蠅いなあ……!」

揚羽が畑に行つて人参を盗もうとすると、気を失うかのような奇声を発した。

だが、揚羽は何とか耐える事ができたようだ。

最後に高級チーズを盗もうとすると、ゴブリンに襲われ、逆に盗まれてしまった。

「はっ！」

「くっ！」

「しまった！」

つるぎが一体を仕留めて高級チーズを手に入れたが、

残ったゴブリンは南の見捨里公園に逃げていった。

四人が見捨里公園へと向かうと、そこには地面にめり込んだ巨大南瓜があった。

「うわあ……」

「ここに南瓜があったのか……」

麗羅とつるぎは哑然としている。

カリオストロのポケットから出てきた揚羽も、あまりの南瓜の大きさにぼかーんとしていた。

すると、南瓜の上から声が聞こえる。

「ご苦労だったね、盗賊達」

声の主は、包帯で片目を隠した着物姿の少年、邪鬼だった。

麗羅はナイフを構え、つるぎも剣を抜こうとしている。

「アンタ、こんなところにウチらを呼んで何をしようとするんだい？」
「決まっている、君達をここで終わらせるためさ！」

邪鬼が南瓜を刀で斬りつけると、辺りの景色が変わっていき、異界へと変貌していく。すると突然、南瓜の蔓が急成長し、絡みつき、四本足になった。

南瓜は足で身体を地面から引っこ抜くと、ハロウインの南瓜のような顔を作り出し、麗羅達に襲いかかってきた。

「さあ、南瓜の餌になるんだね」

「あ、待ちなさい！」

邪鬼は刀で×印状の罅を作り出すと、その中に逃げていった。

「逃がさないんだから！」

揚羽が追いかけてようとすると、先ほど逃がした二体のゴブリンと、

邪鬼が呼んだと思われる下級雪精と鬼が立ち塞がる。

「ああ〜ん！ どうして邪魔するの〜！」

「今は南瓜をどうにかするのが先だろ！」

「ケケケ！」

「キキキ！」

二体のゴブリンはカリオストロと麗羅に石を投げつけてくる。

二人は器用に攻撃をかわした。

すると、オバケ南瓜は蔓を伸ばして麗羅を縛ろうとする。

「こんなもの……ぎゃっ!？」

麗羅は柔軟な身体で一本の蔓をかわすが、残りの蔓が彼女の身体に絡みつき、締め付けた。

蔓はギリギリと麗羅の身体を締め付けていく。

「このやろっ、放せ!」

麗羅はナイフを操って必死で蔓を解こうとする。

数分後、戦闘不能ギリギリで何とか蔓から解放された。

「はあ、はあ、はあ……っ」

麗羅は青い顔をしながら下級雪精にナイフを投げたが、弱っていたため攻撃は当たらなかった。

「よくも私に術を当てたな。許さんぞ」

「アタイの攻撃も当たらないよ!」

揚羽が放った鱗粉も、ゴブリンはかわす。

麗羅はカリオスト口をパクパクさせながら「たすけて」と言う。

それを読み取ったカリオスト口は麗羅に近付き、治癒魔術を使う。

「そこか！」

その時、つるぎがカリオストロと鬼の間に割って入り、剣で鬼の棍棒を受け止める。つるぎはすぐさま標的をゴブリンに切り替え、斬りつけた。

オバケ南瓜は再び麗羅に蔓を伸ばしたが、麗羅は隠し持っていた煙玉を投げ、目晦ましをして攻撃をかわした。

「まったく、うざったいねえ！」

「キヤーツ!!」

「ケケケ!!」

ゴブリンは揚羽に石を投げつけて攻撃する。

オバケ南瓜は巨大化して蔓を伸ばし、つるぎ、揚羽、カリオストロを縛ろうとしたが、三人は何とか攻撃をかわした。

麗羅は薬を服用して体力を回復した後、下級雪精に向けてナイフを投げる。

「剣が、力を貸すだろう！」

さらに、麗羅の攻撃はつるぎの技によって強化され、下級雪精の身体を易々と貫いた。すると、下級雪精は雪を降らせ、ゴブリンの体力を回復した。

「お願いだよ、動かないで！」

揚羽は羽を飛ばたかせ、毒を纏った鱗粉をオバケ南瓜にかけ、毒を浴びせた。

「ブラインドー！」

カリオストロは魔術でゴブリンに目晦ましをかけ、つるぎがゴブリンを切り裂く。オバケ南瓜はつるぎを蔓で縛ろうとするが、本体の剣には当たらなかつたため、ダメージは受けず、さらにオバケ南瓜は毒で弱っていった。

「ケケケ！」

「キキキ！」

「くっ！」

ゴブリンはつるぎに連続で石を投げつける。

「キャーッ!!」

オバケ南瓜は巨大な蔓で揚羽を連続で打ち据える。

先程自身に毒を浴びせたのか、攻撃は非常に激しかった。

「せいっ！」

麗羅が下級雪精の急所にナイフを突き刺し、下級雪精は黒い煙になって消滅した。

揚羽は自身に応急丸薬を使って体力を回復した後、鱗粉でゴブリンを弱らせ、直後に麗羅がナイフを投げてとどめを刺した。

「今度こそ……仕留める！」

カリオストロは護符に術式を刻み、オバケ南瓜に向かって投げつける。

魔力を纏った符が弾丸となってオバケ南瓜を貫き、オバケ南瓜の動きを制限する。
「そんな攻撃、当たらないよ！」

麗羅は鬼の攻撃を煙玉で回避し、ナイフを投げて反撃する。

オバケ南瓜は徐々に毒の効果で弱くなっていくが、攻撃は逆に激しくなった。

続けて麗羅は鬼にナイフを投げ、その攻撃はつるぎの技で強化された。

「アタイだって、みんなの役に立つ！」

揚羽は空を飛びながら鱗粉をばら撒いていく。

カリオスト口も魔術でオバケ南瓜を攻撃し、オバケ南瓜の体力は残り僅かになった。

今がチャンス、とつるぎは剣に力を込める。

「とどめだ！」

「こつちだよ！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

麗羅の援護のおかげで、つるぎの攻撃はオバケ南瓜に命中。

剣により真つ二つに切り裂かれ、オバケ南瓜は一際大きな叫び声を上げた。

オバケ南瓜の身体から黒い煙が現れ、黒い煙は空の彼方に消えていった。

これで、戦いは終わったのだ。

「……………ようやく、終わった、か……………」

オバケ南瓜を討ち果たし、オバケ南瓜は元の巨大南瓜に戻った。ただ、先程の戦闘のおかげか、南瓜は真つ二つに砕けていた。

これならば、料理しやすいだろう——揚羽が入れた毒があるが。

「で、毒はどうするんだ？」

「私が抜こう、美味しい南瓜スープができるぞ」

どうやら、毒抜きはカリオストロがやってくれるようだ。

世界一の魔術師である彼（？）なら、南瓜に入った毒も抜けるだろう。

麗羅、つるぎ、揚羽は頷いて、カリオストロの提案を承諾した。

その後、麗羅達は持ち帰った南瓜と集めた材料で南瓜のスープを作るのだった。

同時に、邪鬼に対する怒りも増すのだった。

クリスマスマスパニツク！

ここは、見捨里市のどこかの路地裏。

今日は12月24日、クリスマスイヴ。

明日のクリスマス会をやるために、日中から準備で慌ただしい。

部屋は綺麗に飾り付けられ、クリスマスツリーも綺麗に飾り付けられている。机を繋げた長テーブルには、チキン、美味しそうな料理、シャンパン、

大きなホールケーキなどがたくさん置かれている。

「さあ、明日のクリスマスパーティーに向けて、準備するよ！」

「おーっ！」

「つまみ食いはするんじゃないよ」

「食べ過ぎもな」

栗鼠の獣人、麗羅と蝶の妖怪、揚羽の女性の怪は主に飾り付けを担当する。

料理を担当するのは、つるぎとカリオストロの男性の怪なのだ（カリオストロは性別不明だが）。

つるぎとカリオストロは、最年少の揚羽に注意をしていた。

「ん? なんだい?」

四人が思いたい楽しんでると、突然、窓にベシヤツと何かが張り付いた。

よく見るとそれは、パイ投げ用のパイだった。

「一体どこから飛んできたんだろう?」

空中にいる揚羽がパイを見ていると、今度はテーブルがガタガタと揺れ始める。

「な、何?」

「揚羽君、キミは下がってくれ」

「こ、怖いいいい! アタイ、パイに襲われちゃうの!」

「その心配はなさそうだが、念のため、油断大敵だ」

カリオストロが念のため、護符を何枚か持って身構える。

揺れがピタリと止むと、テーブルの上のケーキからいきなり不気味な足がいくつも飛び出し、

ケーキのスポンジ部分は大きく裂ける。

「キシヤアアアア!!」

「きやああああああ!!」

ケーキは奇声を上げ、揚羽は驚いてつるぎの後ろに隠れる。

それを合図のように、扉からも窓からも、奇声を上げるケーキが侵入し、四人に襲い

掛かった。

「こ、これって怪だよな!? 怖いよ、怖いよ!」

「揚羽! アンタは後ろで援護しな! どうやら、ヤツらはウチらに敵意があるみたいだね!

こうなったら、戦うしかないみたいだよ!」

そう言つて、麗羅は何本かナイフを取り出す。

「怖いけど、アタイも戦う!」

つるぎも身構えたのを見た揚羽は、みんなで怪になつたケーキと戦つた。

「ヤツは術に弱いみたいだよ!」

麗羅は。パイケーキ・怪の特徴を一瞬で見破る。

「ウチは術が使えないから、これで我慢だけどね!」

麗羅のナイフが、パイケーキ・怪に刺さる。

揚羽は空を飛んで、パイケーキ・怪の頭上に鱗粉をばら撒く。

「せい! ……固いね」

つるぎの剣は、パイケーキ・怪には届かなかつた。

パイケーキ・怪は意外に頑丈な身体をしている。

「爆符」

カリオストロは魔力を込めた護符を投げ、パイケーキ・怪にぶつけて小さな爆発を起す。

麗羅の言う通り、パイケーキ・怪に術攻撃は効果的なようだ。

「ガアアアアアアア！」

「そんなへなちよこ、効かないよ！」

麗羅は高く飛び上がり、シヨコラケーキ・怪のチョコ攻撃をかわす。

「ぐっ！」

つるぎはシヨコラケーキ・怪のチョコマシンガンを何とか剣で防御する。

だが、防御しきれない分はそのままつるぎが食らった。

「ひゃっ!?!」

「危ないっ！」

パイケーキ・怪が大量の砂糖爆弾を麗羅に飛ばしてくる。

つるぎは麗羅を庇い、代わりに攻撃を受ける。

「ぐっ！ うっ！ うあっ！」

砂糖爆弾の攻撃を食らったつるぎの身体が苦痛に歪む。

いくら頑丈な付喪神でも、こればかりは耐えられないようだ。

「……………つるぎ……………あまり許したくはないね」

つるぎの苦しそうな様子を見た麗羅は真剣な表情になり、シヨコラケーキ・怪を睨みつける。

「どうやら、このシヨコラケーキは近付いて攻めた方がいいみたいだね」

麗羅は素早くシヨコラケーキ・怪に接近し、ナイフで切りつける。

「これで、おしまーい！」

揚羽は弱っているパイケーキ・怪に鱗粉をかけ、無力化した。

つるぎはシヨコラケーキ・怪を剣で斬りつけ、

カリオストロが魔力のこもった符を投げて爆発させる。

シヨコラケーキ・怪はチヨコを麗羅とつるぎに飛ばすが、

麗羅は攻撃をかわし、つるぎは剣で防ぐ。

「守れ」

パイケーキ・怪の体当たりをカリオストロは防御魔法で防ぎ、

衝撃波を放ってパイケーキ・怪を吹き飛ばした。

「こいつ、なつかなか攻撃が届かないねえ！」

麗羅はシヨコラケーキ・怪をナイフで斬りつけるが、スポンジの効果で攻撃が届かない。

揚羽はパイケーキ・怪に鱗粉をかける。

「確かに、このケーキは堅いな」

つるぎの剣も、シヨコラケーキ・怪のスポンジの効果で届かない。

揚羽はパイケーキ・怪に鱗粉をかける。

「確かに、このケーキは堅いな」

「術を使うべきだな」

つるぎの剣も、シヨコラケーキ・怪のスポンジの効果で届かない。

カリオストロは薬を飲んで体力を回復した後、

呪文を書き込んだ符をパイケーキ・怪に投げ、符から電撃が放たれる。

シヨコラケーキ・怪は大量のチョコレートを麗羅、つるぎ、揚羽に飛ばす。

「うわああー！」

「きやああー！」

「ぐっ……！！」

攻撃は全員に命中した。

麗羅は煙玉と柔軟な身体で避けようとしたものの、あまりに量が多くて避けられなかった。

「あああつー！」

さらに、パイケーキ・怪は刺激的なタックルでつるぎを吹っ飛ばした。

その衝撃で、つるぎが剣の姿に戻ってしまう。

(た、助けてくれ、麗羅……)

「しょうがないねえ！ 剣つてものは、使われてこそ剣だからさ！」

剣に戻ったつるぎを、麗羅が手に取る。

麗羅は鋭い目でシヨコラケーキ・怪の弱点を見極め、狙いを定めてシヨコラケーキ・怪を突く。

「とどめだ」

カリオストロがたくさんの符をパイケーキ・怪に投げつけると、

パイケーキ・怪は符に飲み込まれて消えた。

シヨコラケーキ・怪は反撃のために麗羅とカリオストロを襲うが、

麗羅はつるぎを上手く操り、ダメージを受けてもらう。

「揚羽、頼むよ！」

「おーけー！」

「いくよ、つるぎー！」

「やあーっ！」

揚羽はシヨコラケーキ・怪に鱗粉を振り撒き、動きを止める。

麗羅は光の速度で動いてシヨコラケーキ・怪に斬りかかり、シヨコラケーキ・怪を吹

き飛ばす。

そして、残りのシヨコラケーキ・怪も麗羅とつるぎの連続攻撃で倒されるのだった。「ふう……ようやく終わったみたいだね」

襲ってきたケーキ達は麗羅達に倒され、ただのケーキになった。

しかし、外から阿鼻叫喚が聞こえている。

どうやら、騒ぎは見捨里市全体に及んでいるようだ。

四人は異変を解決するため、クリスマスが無事に過ごすため、見捨里市へ繰り出した。

「な、なんだいこれは!？」

「クリームまみれだねえ」

四人が目にしたのは、自走するケーキ達の群れに襲われ、

クリームまみれとなった街の住人達だった。

その光景を見た麗羅は、思わずゲラゲラと笑う。

「面白い光景だね! このままでいいんじゃないかい？」

怪とはいえ、こんな面白い被害も出すんだしき!」

「……いや、これ以上被害を出すべきではない」

カリオストロの言う通り、怪現象を治めなければ見捨里市は大変な事になる。

「仕方ないねえ! ほら、つるぎ! 一緒に調査するよ!」

「ああ」

つるぎは人間の姿に戻り、この怪現象の調査を始めた。

「それで、キミはどんな事をされたんだい？」

「顔面にパイをぶつけられたんだ」

つるぎの調査により、原因が分かった。

甘味を身体にぶつけられるという行為が、無差別に行われているようだ。

ただ、子供への攻撃はしていないようであり、呪いの類とも取れるだろう。

「なるほど、そういう事だったのか」

ケーキ達はどんどん増殖しているが、知性はほとんどなく、恐らく母体となるのがいるという。

母体さえ倒せばこの騒ぎは治まるだろう。

「その前に、怪になったシヨコラケーキとフルーツタルトを倒しておかないとね」

つるぎは剣の付喪神の本能なのか、はたまた自分の意思なのか、

シヨコラケーキ・怪とフルーツタルト・怪を倒したかった。

カリオストロから許可をもらい、つるぎはシヨコラケーキ・怪とフルーツタルト・怪を倒した。

そして、情報収集を再開して、母体の居場所が分かった。

「どうやら、この異変の母体は見捨里公園に陣取っているようだ。今から向かえば捕まえられるかもしれない。」

「場所は見捨里公園だよ！ 邪鬼って奴をとつちめないとね！」

「そうだね、麗羅。キミに判断を任せるよ」

「あま〜いクリスマスパーティーを楽しみたいな〜！」

「私もこの戦い、負けるわけにはいかない」

麗羅達は、母体ケーキが隠れている見捨里公園へと足を踏み入れた。

すると、周囲の景色が一変し、見える景色全てがお菓子に変わっていく。

その奥に鎮座する、高さは10m以上の巨大なケーキに、少年——邪鬼が立っていた。

「やはり来たみたいだね」

「アンタ、また騒ぎを起こしたみたいだね」

麗羅はたくさんナイフを構えている。

邪鬼に対する敵意は強い。

「どうだ？ 僕の最高傑作の式神は。」

これでクリスマスに浮かれている人間どもを恐怖に陥れてやるよ」

「グゴアアアアアアアアアアアア!!」

そう言うのと、邪鬼は怪のケーキに命令した。

すると、巨大なケーキは巨大な足で地面を踏み鳴らし、大きな口で咆哮を上げながら四人に襲い掛かった。

「楽しいクリスマスを、邪魔されてはたまらない。この異変、スマートに解決させてもらうよ」

「遠距離攻撃に弱いみたいだよー」

麗羅は獣の瞳で、巨大ケーキの弱点を見破る。

すぐに麗羅は巨大ケーキにナイフを投げるが、巨大ケーキはスポンジの力で攻撃を防いだ。

巨大ケーキは高く飛び上がり、麗羅、つるぎ、カリオストロを押し潰す。

「ぐへえー！」

クリームのせいで、麗羅達は動きが鈍った。

「身体が動かない」

つるぎは剣を振ったが、身体が麻痺しているためまともに攻撃は通らなかった。

「も〜う！ 許さな〜い！」

巨大ケーキの攻撃から逃れた揚羽は空高く飛び、鱗粉を巨大ケーキにばら撒いて動きを止める。

だが、巨大ケーキはスポンジの力で揚羽の攻撃を防いだ。

スポンジでできているため、巨大ケーキには炎が効果的なのだ。

「うわっ、やるねえ!」

弱点を突かれて起こった巨大ケーキが、カラメルの弾丸を麗羅に乱射する。

麗羅は腕を十字にして攻撃を防いだ後、丸薬を飲んで体力を回復し、

ナイフを投げたが、巨大ケーキはスポンジで彼女の攻撃を防いだ。

「むっ、攻撃か!」

「わわっ、カリオストロちゃん、危ないよ!」

揚羽は背中の中の羽を飛ばたかせてカラメルの弾丸を吹き飛ばす。

直後に鱗粉をばら撒いて、巨大ケーキを弱らせた。

「カリオストロちゃん、脆いから、アタイが守らないと!」

「そうだね」

本当は揚羽も脆いのだが、失礼だと思つたつるぎは口に出さなかった。

「呪縛符!」

「銘刀の魂よ、ここに」

「そら!」

カリオストロは呪文を書き込んだ護符を巨大ケーキに張りつけ、巨大ケーキを束縛する。

麗羅はつるぎの援護を受け、巨大ケーキにナイフを投げる。

「とどめだよ！ いっけえー！ー！ー！！」

そして、揚羽がばら撒いた鱗粉が、巨大ケーキに全てかかる。

それが、致命傷になり――

「グゴアアアアアアアアアアアアアアア!!」

巨大なケーキは巨大な咆哮を上げ、地に倒れ伏し、ただのケーキの塊になった。

気が付くと、邪鬼の姿は無く、また逃げられてしまったようだが、

辺りの景色が元の見捨里公園に戻っていく。

空はすっかり暗くなり、優しい月が辺りを照らしている。

ふと、空から白いものがふわりと降ってくる。

どうやら、ホワイトクリスマスになりそうだ。

その舞い散るものが、甘くなければ……。

「あ、あははははは………」

空から雪のように舞い散る粉砂糖。

遠くのビルによじ登り、未だ奇声を上げている巨大ケーキ。

四人のクリスマスは、まだまだ先になりそうだ。

e p i s o d e 4 | S t a r o f H o p e

勇気の始まり

助っ人参戦

路地裏の建物では、ディアーナが悲しい顔でジャネットに報告していた。

「……あの幽霊は、とうとう消えてしまったのですね。」

私の警告も、彼女の耳には届かなかったのですね……」

ジャネットは、自身が羽心に送った警告が届かず、落胆していた。

「うららおねえちゃん、せつかくがんばったのに、ゆうきおにいちゃんがないちゃった」

「頑張ったとは、何の事ですか？」

「あのね……」

ノノは、ファフロツキーズ異変で羽心と共に戦った事をジャネットに説明した。

幼女説明中……

「それは素晴らしい活躍でしたね」

羽心は今まで、勇気と共に異変を解決した事はなかった。

異変が起こった時、いつも勇気に止められ、異変解決後は記憶を失っていたからだ。しかし、彼女は見捨里市で起こっている異変に徐々に気付いていった。

そして、羽心はフアフロツキーズ異変で今までに忘れていた事を全て思い出し、自分も見捨里市を守りたいと思うようになった。

自分でもできる事をやろう、と考えた羽心は、

フアフロツキーズにノノと一緒に防戦とはいえ勝利したのだ。

その後、フランケンシュタイン異変で勇気に話を聞こうとした羽心だったが、

自身が特殊能力を持っている事を知らず、邪鬼に言われるがままに黒い鈴を使った。

その結果、キュウは黒い煙になって消滅してしまった、というのが報告内容だ。

「事情は大体分かりました。どうやら、私も手を打つ必要があるようです」

「手?」

「助っ人を呼ぶのです」

「えっ?」

ジャネットが用意している助っ人とは、一体誰なのか。

ディアーナが首を傾げていると、彼女の後ろにあつたドアの中から、男が現れた。紫色の肌にスキンヘッド、身体には奇妙な模様があり、左目は眼帯で隠れている。

男は淡い漆黒のオーラを身に纏っており、威厳ある佇まいだった。

「ふわああ……儂はチエイニーじゃ。む……？ 儂を起こしたのはもしやお主か？」
「そうですか」

チエイニーという男はジャネットを見てそう言う。

彼の眼は、寝ぼけ眼で半分しか開けていない。

ジャネットに起こされるまで、ずっと、眠りについていたのだ。

「何故儂を起こしたのじゃ？」

「真之勇氣という少年の力になるためです。

白鳥羽心という少女が鈴を振った事で、彼の相棒であつた幽霊は消えました。

彼は、二重に苦しんでいる事でしよう」

「……それで呼び出したのじゃな」

「はい。……命じます、どうか勇氣の力になってください」

「仕方あるまい。お主がそう言うのならば、行つてやろう」

チエイニーは渋々ながらも、ディアーナ達に協力する事にしたのだった。

「これからよろしく頼むわよ、チエイニー」

「ああ！ 力になってやろう！」

「いつしよにがんばろうね、チエイニーおにいちゃん！」

一方その頃、真之勇氣側は……。

「うううっ」

目の前で幼馴染の勇気がのたうちながら泣いている。

(もしかして、私は騙されたの?)

勇気を助けるつもりだったのに、私は逆の事をしてしまったの?)

「そんな……私、私は……!」

羽心はどうしたらいいか分からなくなった。

「勇気! 勇気!」

羽心が立ち上がろうとすると身体がふらついた。

這ってでも勇気の傍に行きたかったが、足下がおぼつかない。

「勇気! ごめんなさい! 私はきつと酷い事を……!」

羽心は前に歩くつもりだったが、足がよたついて路面に落ちていた鈴を蹴った。

「あ!」

羽心は身を竦めたが、後の祭りだ。

清らかな音は、勇気にとっては忌まわしい響きでしかない。

めそめそと泣いていた勇気は、とつさに両手で耳を塞いだ。

「やめて! やめてくれっ!」

勇気は耳を塞いだまま立ち上がると、夜の通りを脱兎の如く走り去った。

「待って！ 勇気！ 勇気！」

羽心は叫んだが、長年の友達の前中は闇の中にあつという間に消えた。

「勇気……ごめんなさい」

今度は羽心が泣き崩れた。

物心ついてからこんなに泣いたのは初めてだった。

羽心は涙を堪えようと膝を抱えた。

そして、ふと気づいた。

勇気のいた場所に、何かが落ちているのを……。

「勇気！ どうしたの？」

看護師の母親は、幸運にもその夜、仕事が入っていなかった。

扉を開けた母親の胸に、勇気は飛び込んだ。

温かい胸に顔を埋めるといくらか安心した。

しかし、せきを切ったように感情が溢れ出してくる。

涙が止めどなく流れて、肩を震わせて勇気は泣いた。

母親のシャツが勇気の涙でみるみる濡れていく。

「お母さん、ごめんなさい。ごめんなさい」

何故か何度も謝った。

母親のシャツを汚してしまったからではない。

今までの事やキウウの事を、どう説明すればいいのかわからなかったからだ。

キウウの姿は、自分とダイアーナ達以外には誰にも見えていなかった。

そんな見えない友達と、メデューサーやネツシー、ドラキュラと戦って、

見捨里市を守ったなんて、誰が信じてくれるだろうか。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

勇気は同じ言葉を繰り返す事しかできない。

それがもどかしくて、情けなかった。

そして、大切な仲間を失った事が、何よりも辛かった。

そんな勇気の頭を母親は優しく撫でてくれた。

「何があつたかわからないけど。大丈夫よ。よしよし、大丈夫だからね」

母親は何も分かっていないだろう。

だけど、その言葉で勇気はやっと気持ちちが落ち着いた。

どつと疲労感が全身に広がり、意識が遠くなる。

深い深い底なし沼の中に吸い込まれていくような感覚が襲ってきた。

夜の道を歩いていたダイアーナ、ノノ、チエイニーは、泣いている羽心と出会った。

「おなじ女子が泣いておるのう」

「ちよつと、あなた！ 何があったのよ！」

「じ……実はね……」

最初は見下していた羽心だったが、泣いている彼女を見て、放つてはおけなかった。

羽心は泣きながら、ディアーナに説明した。

少女説明中……

「勇気が目に見えない悪霊に取り憑かれていると思つて、慌てて鈴を振つた結果がこれなのね」

「うん……勇気を救うために、悪霊を払いたくて……でも……」

「おねえちゃん……」

「あの包帯の少年に騙されたとはいえ、キユウが見えなかったとはいえ、

私はなんて事をしてしまったの……！」

ディアーナの言う通りだ。

羽心は黒い鈴を振つて、勇気の友であったキユウをこの手で消してしまった。

その事を羽心はとても悔やみ、勇気と同じように泣いた。

目の前にいる長身の女性とスキンヘッドの男はどこか威圧感があり、

羽心はそれに竦んで、それ以外の事は何も言わなかった。

だが、長身の女性——ディアーナは意外な言葉を言った。

「でも、あたしはあなたに責任は取らせないわ」

「どうして？」

「あたしにはあなたの気持ち、分かる気がする。ちゃんと、自分の罪を認めただから」
まじし
 「真に悪しき者は、自身の罪すら認めぬからな。」

それに引き換え、お主は自身の罪を認めただのじゃ。儂はお主を許してやろう」

「でも、あなた達が許したって勇気が許すわけないでしょ！」

だが、羽心を説得するには至らなかった。

困ったディアーナ、ノノ、チェイニーだったが、

その時、チェイニーが羽心に手を伸ばし、鋭い声でこう言った。

「こんな事で泣くとは、情けない！」

お主の幼馴染の勇気は言うほど弱くはない！

それを証明するためにも、儂と共に行くがよい！」

チェイニーは、沈んでいる羽心を叱咤激励した。

一見気難しく見えるチェイニーだったが、話してみると、意外と気さくな男だった。

泣き止んだ羽心は、彼を信じて、チェイニーの方に手を伸ばした。

チェイニーの手は、ごつごつとして固かったが、ぬくもりがあった。

「……ところで、お主の名は？」

「白鳥羽心よ。あなたは？」

「濃はチエイニーじゃ」

翌日、自分のベッドで目覚めた勇氣は、窓に射し込む光の強さに違和感を覚えた。

日曜日でも、こんな日差しの中で目覚めた事はない。

机の上の時計を見るとお昼が近かった。

とつくに学校の授業は始まっているが、起き上がる気になれなかった。

階段を上ってくる足音が聞こえ、やがて母親が入ってきた。

「あら？ 目が覚めた？」

「お母さん……」

母親は勇氣の机の上に目玉焼きやサラダの載ったトレイを置いた。

「しっかり食べないと元気にならないわよ。食べてね。」

それと、学校には休むって連絡を入れておいたから。心配しなくて良いわよ。

でも、今日は病院が忙しくて、どうしてもお休みが取れないから出かけるけど許してね。

あの病院、看護師の数を増やして欲しいのよね。じゃ、今日はゆつくりしてなさいよ」

母親は一気に喋ると、部屋から出て行こうとした。

「お母さん、待って。学校にはなんて連絡したの？」

「あ、遠いところに住んでるお祖父ちゃんが亡くなったって伝えた。

往復に二日はかかるから、三日間は休みますって言っておいたから」

「でも、お母さんのお祖父ちゃんも、

お父さんのお祖父ちゃんもずっと前に亡くなってるんでしょ？」

「学校には分からないわよ」

そう言うと、母親は再び部屋から出て行こうとした。

「ねえ、お母さん、昨日、何があったか知りたくないの？」

扉の外に出ようとしていた母親はゆっくり振り返った。

「お父さんに仕事の事を尋ねても、私には全然理解できなかったからね。

だから、尋ねるのを止めちゃったの」

そして母親はにっこりと微笑む。

「勇気、あなたはお父さんの子よ。最近、お父さんにとっても似てきた気がするの。

昨日の事を詳しく教えてくれても、きつと私には理解できないと思う。

じゃ、仕事に行かないと」

母親は、階下にせわしなく下りていった。

考古学者だった父親は世界の不思議な事柄を調べていたが、10年前、出張中に事故

死した。

小さかった勇氣は父親の記憶がないし、母親に「似てきた」と言われてもピンとこない。

それに、そんな事は今の勇氣にはどうでもいい事だった。

今はとにかく休みたかった。

何も考えたくなかった。

勇氣は再び眠りに落ちた。

勇氣は夢を見た。

スマホで倒したメデューサ。

崖から落としたネツシー。

説得をした雪女。

ヘリウムガスの缶を飲ませたツチノコ。

油の凝固剤で機能停止させたフラットウツズ・モンスター。

キユウと一緒に戦ってきた『怪狩り』の様々な記憶が夢に現れては消えた。

それらはキユウ（と仲間達）がいたから倒せたのである。

だが、キユウはいなくなってしまう。

「ゆ、勇氣……君が……ディアーナ達と……一緒に……この町を……守る……んだ……」

突然、キユウの最後の言葉が夢の中に響いた。

はっと目を覚ました勇氣は眩く。

「僕とディアーナ達だけじゃ無理だよ」

そして、一日が経った。

勇氣は何もする気が起きず、ベッドの中でほとんどを過ごしていた。

「ゆ、勇氣……君が……ディアーナ達と……一緒に……この町を……守る……んだ……」

キユウの言葉が何度も思い返されていた。

家の前の道の子供達のお喋りが通過していく。

夕方の小学校の下校時間だった。

母親がお祖父ちゃんのお葬儀で三日間は休むと学校に伝えたから、今日までは休めた。

でも、明日には学校に行かないとならない。

だけど、そんな事ができるだろうか？

勇氣は布団の中でもぞもぞと身体を動かすと、マットの隙間に手を差し入れた。

そこに、太陽のマークのついたレザーグローブを隠していたのだ。

母親には見せたくなかった。

それを手に取ると、再び仰向けになり顔の上にかざして眺めた。

「月のマークのついたキユウのグローブはどこに行ったんだ？」

キユウが煙となって消えた夜の事は思い出せなかった。

あまりにシヨックが大きすぎた。

(もしかして書齋に……?)

ふと思ひ立ち、勇氣は久しぶりに自分の部屋から出る事にした。

勇氣は二階から一階への階段を下りると父の書齋へ向かった。

今日は、母親は仕事に行っていて、家には勇氣一人だった。

半地下になっている父の書齋に入るために、短い階段を下りた。

骨格標本や動物の剥製、呪いの宝石や人形などが飾られた父の書齋。

本棚には世界の密教や呪術の研究本から、

超常現象、心霊現象などの書籍がぎっしりと並んでいる。

以前は怖くて入れなかつた部屋だったが、

キユウと出会つてからは様々な世界への入り口になった。

部屋を見回していると、何故かキユウがいるような気がした。

「ねえ、キユウ、君のグローブはどこにやったの?」

そう問いかけてみたが、返事はなかつた。

ポンツと太陽のマークのグローブを木製の机の上に乱暴に置いた。

(僕一人で、見捨里市を守るなんて無理だ。ディアーナだつて……)

肘掛けの付いた父親の椅子にドスンと座つた。

家のチャイムが鳴った。

勇気は出る気はなかった。

何しろ、お祖父ちゃんの葬儀で遠いところに行っているはずなのだ。

ところが、チャイムはリズムカルに鳴り続ける。

(この鳴らし方は……)

そう思つて身構えていると案の定、羽心の声が聞こえてきた。

「ねえ、勇気、いるんでしょ？ お祖父ちゃんの葬儀だなんて嘘でしょ？」

(羽心があの鈴さえ振らなければ……)

「羽心、ごめん」

勇気は両手で耳を塞いだが、またチャイムが鳴った。

書斎の中の勇気は、羽心が諦めるまで耳を塞いで椅子に座り込む事にした。

「いるんでしょ？ 昨日も来たんだけど出てくれなかったよね。電話をしても繋がらな

いっ」

玄関のドア越しの羽心の切実な声が、開け放たれた書斎のドアの中にも響いてくる。

羽心の声は通りが良い。

勇気の塞いだ耳にも、かすかながらに侵入してくる。

「ねえ、私、謝りたいの。でも、よく分からない事ばかりだからさ。」

「どう謝ればいいのか分からないの。お願いだから、ちょっとでいいから教えて欲しいの」

「彼女は既に説得したぞ。その扉を開けよ！」

羽心の言葉が突然途切れた。

（諦めたの？）

勇氣は耳を塞ぐ両手を緩めた。

ところが、玄関のドアを通して羽心の声が再び響く。

「あのさ、これ持ってきたんだ。黒い鈴。音が出ないようにテープで留めておいた。

でも、これって、凄く貴重なものなんじゃないの？

何か凄い秘密が隠されてるんじゃないの？」

しかし、勇氣はあの黒い鈴を二度と見たくない。

「もう、止めてくれ！」

勇氣は小声で叫ぶと再び耳を塞ごうとした。

しかし、羽心の次の言葉でそれを留めた。

「後さ、手袋が落ちてたから、それも持ってきたんだ」

「手袋だった？」

書齋の中の勇氣は思わず呟いた。

勇気が玄関のドアを開けると、羽心は笑顔になった。

彼女の隣には、ディアーナ、ノノ、そしてチェイニーがいた。

「やっぱりいたんだ！ それに思ったより元気そうだね！ 良かった！」

「心配しておったぞ、羽心が」

いつもの羽心の強引さに、勇気は小さく溜息をつく。

「それよりも手袋って？」

「あ、これよ」

羽心はランドセルの中から、透明のビニール袋に入った手袋を出した。

それは、月の羅針盤が付いたレザーグローブだった。

「間違いなくキユウのだ」

グローブを受け取って思わず呟く勇気に、羽心がかさず質問を投げかける。

「ねえ、そのキユウって言うのが、勇気に取り憑いていた幽霊なんですよ？」

キユウが煙になってしまった要因を作った羽心に、勇気はまともに答える気はなかった。

それを察した羽心は次の質問を繰り返してくる。

「あの包帯の少年は、私にも特別な力があるみたいだって赤文字で言ってたけど、それってどういう事なの？」

勇氣も邪鬼のその言葉が引つかかっていたが、それは勇氣にも分からない。

「さあね。とにかく、もう用は済んだだろ」

「あ、ゆうきおにいちゃん！」

勇氣はそう言うのと、玄関のドアを閉めた。

「ちよつと待つてよ。この黒い鈴はどうするの？」

羽心はドアをドンドンと叩いたが、勇氣は無視した。

「ねえ、明日は学校に来るの？ ねえ、勇氣！」

玄関のドア越しの羽心の声を気にせず、勇氣は書齋に入った。

そして、書齋のドアも閉めた。

もうこれで羽心の声も聞こえない。

勇氣はビニール袋の中から漆黒のレザーグローブを出すと、

机の上に置いてあったもう一つのグローブの脇に並べた。

勇氣は何かを期待して左右が揃ったグローブを見つめる。

勇氣が嵌めていた太陽の羅針盤のグローブと、キユウが嵌めていた月の羅針盤のグ

ローブ。

半地下の書齋の窓は壁の少し上の方にある。

そこに夕日が射し込んできた。

太陽を覆っていた雲が晴れたのだ。

そのオレンジ色の光が左右のグローブに降り注いだ。

太陽と月の羅針盤が美しく輝いて見える。

「え？」

勇気がちよつと驚いたのは、二つの羅針盤の針が動いた気がしたからだ。

太陽と月の羅針盤が、お互いを意識し呼び合っているように感じられる。

それを見て勇気は微笑んだ。

何故か自信が湧いてきたからだ。

とても小さな自信だが、これからも何とかやっていけそうな気持ちになってきた。

何故なら。

(きつとキュウは見守ってくれてるんだね)

これからも自分の住むこの町を守っていけるかもしれない。

何とかなるかもしれない。

そう思えたからだ。

勇気は明日、学校に行こうと決意した。

episode 4 | Star of Hope

森に棲む者達

1 | 見捨里市大パニック

「ふわあああ〜」

夜に歩いたせいで、ダイアーナは欠伸びしてしまった。

だが、そんな彼女にも、ジャネットは容赦なく仕事の内容を言う。

「突然ですが、あなたとチエイニーに仕事があります」

「なあに〜？ ジャネット〜」

ダイアーナが眠そうな声で言うと、ジャネットはダイアーナを指差してこう言った。

「あなたの種族である『エルフ』の本来の意味は分かりますか？」

「エルフ〜？ 森の民でしょ〜？」

元いた世界では、エルフは森の民と呼ばれている。
アルカディア

ダイアーナはそう答えたが、ジャネットは首を横に振った。

「いいえ、違います。今回は、本来の意味の『エルフ』が怪奇現象を起こすのです。」

その調査に向かつてください」

「え？ な、何〜？」

「ゴブリンも、トロールも、ピクシーも、全てが『エルフ』なのです。

……チエイニーには分かりますよね？」

「うむ」

チエイニーは、エルフという言葉の意味を理解しているようだ。

デイアーナは訳が分からず、首を捻った。

「とにかく、私の仕事内容は以上です。デイアーナ、チエイニー、行ってきなさい」

「は〜い……」

「いってらっしや〜い！」

「いってらっしや〜い」

ノノとアプリルに見送られながら、デイアーナとチエイニーは仕事をしに行くのだった。

その頃の勇気である。

三日間も休んでしまった後の学校の授業は、居心地が悪かった。

休む前、原末先生の算数は分数の掛け算の勉強をしていたが、

今はややこしい割り算に進んでいた。

勇気にはよく分からなかったので、溜息をついて頭をかいた。

先生がコツコツ、コツコツと黒板にチョークで式を書き始める。

理解できない式をノートに写すのが面倒くさくなり、勇気は教室の窓の外を見た。

校舎の三階からは見捨里市の住宅街が見える。

建ち並ぶ一軒家と五、六階建てのマンションの中に巨大なボールのようなガスタンクがある。

(なんで、町の真ん中にガスタンクなんてあるんだろう?)

勇気はいつもそう思うが、それ以上深く調べる気もなかった。

とにかく今は平和な町の風景だ。

青空を綿菓子のような雲が幾つものゆっくと流れている。

この空に突然×印状の罅が入り、世界の様々な怪が襲ってくるはずだ。

(やっぱり僕一人では守れないかも……)

そう思うと、勇気の心はどんよりと曇る。

勇気は窓とは反対側を見た。

少し離れた席に羽心が座っている。

一生懸命にノートを取っていた羽心が、勇気の視線に気づいてこちらを見た。

勇気はハツとして気ままずく視線を外す。

朝の登校で勇氣は羽心に、挨拶をしたただけだった。

(今までの事を説明しないと……。でも、羽心があの鈴を振ったから……)

キユウの事を考えると複雑な気持ちになるが、彼女は何も知らなかったのだ。

邪鬼に騙されて勇氣を助けようとして鈴を振っただけなのだ。

それなのに、羽心を恨むような気持ちを持つべきじゃない。

それは分かっているのだが、勇氣は心の整理が付かなかった。

その時……。

「え？ 何これ？」

背後から女の子の声が聞こえた。

振り向くと、クラスメイトの花恋が、顔の前で掌を上に向けていた。

上から降ってくる何かを受け止めようとしている。

「あ、なんだこれ？」

「え？ 嘘？」

「静かにしろ！」

教室の様々なところから声が上がった。

黒板にチョークを走らせていた原末先生も振り向いたものの、奇妙な光景に手を差し

出した。

花恋が、的確な表現をする。

「これ、ラメみたい。金色で綺麗ね」

「ラメってなんだよ？」

花恋の横の男子が尋ねる。

「女の子がほっぺにキラキラした粒みたいなお化粧してるのを見た事ない？」

「化粧品かよ？」

「化粧品的事じやないけど、フランス語でキラキラしたものの事をいうのよ。」

英語だとグリッターっていうんだけど、スパンコールと混同する人も多くて」

「ああ、もういいよ」

その男子は花恋の解説を遮った。

教室後方の二人がそんなやり取りをしている間もそれは降っていた。

勇気も目の前で掌を上に向けた。

金色の粒子が皮膚の上に散っている。

突然、足音のような奇妙な音が響いた。

「きゃあああ！」

勇気の背後にいる花恋が悲鳴を上げた。

「嫌だっ！」

怯えて立ち上がった花恋が、窓際に走った。

なんと、花恋の机が勝手に動いていた。

まるで犬が走るように机は四本の脚で花恋に突進した。

「いやあー！」

悲鳴を上げる花恋に、勇気は息を呑むだけだった。

その時、羽心が叫んだ。

「逃げて!!」

羽心の声に反応し、花恋は間一髪で机を避けた。

机はそのまま窓を突き破り、落ちていく。

不意に、奇妙な笑い声が教室中に響いた。

皆がぞつとして教室内を見回した瞬間、

筆箱や教科書やノートが宙を飛んで皆に襲いかかってきた。

悲鳴を上げて逃げ惑う児童達。

筆箱は蓋を、ノートや教科書はページを羽にして飛んでいる。

机や椅子が犬や猫のように教室を走り回る。

勇気は窓側に追い詰められた。

「嫌だあー！ あっち行け！」

叫んでもお構いなしに近寄ってくる机や椅子。

勇気は窓の外を見た。

パニックになってるのは学校だけではなかった。

灰色の瓦が住宅の屋根からカラスのように飛び立ち、人々を襲っていた。

マンションの窓を破って飛び出したテーブルが、ペガサスのようにいななきながら飛んでいく。

町中が大混乱だ。

「大変だ！」

そして勇気は、息を呑んだ。

町の真ん中のガスタンクに、空飛ぶ瓦、いなくなきテーブルが攻撃を仕掛けていた。

「ダメだ！ 爆発する！ 見捨里市がメチャメチャになる！」

ガスタンクが、大爆発を起こす。

「わあああ！ 助けて！ キュウウウ！」

2 — 謎の金の粒子

「こらっ、真之！」

突然、声が響き、勇氣はハツとした。

目前に、原末先生が立っていた。

勇氣は椅子に座っている。

6年2組の教室だ。

「真之、お前はどこにいるか分かるか？」

「それは……」

勇氣の額には、今見た怖ろしい光景のせいで汗が噴き出していた。

それを袖で拭うと、周囲を見た。

窓の外は平和そのものだ。

ガスタンクも静かに町の中にある。

そして教室のクラスメイト達が、勇氣を見てクスクスと笑っていた。

「学校の6年2組の教室です」

「そうだ。『助けて、キユウ』とはなんだ？」

「あの、それは……」

「三日も休んで、すっかり気が抜けてしまったんじゃないのか？」

クラスメイト達がどつと笑う。

その中に一人だけ、笑わずに勇気を見つめる少女……羽心がいる。

原末先生の問いに答える事はなかったが、その視線は感じ取っていた。

チャイムが鳴り、休憩時間になった。

勇気は早退しようかと悩んだ。

見捨里市がメチャメチャになる夢を見たのだ。

放っておけば現実になるだろう。

しかし、肝心のキユウはいないのだ。

キユウが嵌めていたグローブを嵌めれば、自分が『時のトンネル』を作れるのだろうか？

か？

それに、たとえトンネルを作れたとしても、どこに行けばいいのか？

見捨里市を破壊するのが、どんな『怪』なのか全く見当が付かない。

勇気は自分の机で頭を抱えた。

「ねえ、勇気」

「え？」

勇気が顔を上げると、羽心が話しかけてきていた。

「あのさ、さつきはキユウさんの夢を見てたんでしょ？」

羽心が『キユウさん』と『さん』付けをしてきた事に、勇気はちよつと驚いた。

だが、羽心なりに最大限に気を遣っているのだろう。

「羽心には関係ない事だよ……」

勇気は羽心から視線を外して答えるが、それでも羽心は臆せず話しかけてくる。

「あのさ、勇気にちよつと話したい事があるんだ」

勇気は羽心を見ずに再び答える。

「あの『黒い鈴』なら適当に捨ててよ。ごめん、僕、ちよつとトイレに行きたいから」

自分を助けてくれようとしたけど、キユウを消してしまった要因を作ったのは羽心

だ。

彼女を責めるべきでないのは、分かっている。

だが、こんな辛い気持ちをコントロールする方法は大人になっても分からないだろう。

勇気はそそくさと教室から廊下に出た。

休み時間を賑やかに過ごす男子や女子の間を縫って勇気はトイレに向かう。

それを羽心が背後から追いかけてきた。

「勇氣！ ちょっと待ってよ！ 『黒い鈴』の事じゃないの！ 違う話なの！」

「僕は何も聞きたくないんだ！」

勇氣は吐き捨てるように言うと、小走りになった。

慌てた羽心は、勇氣の背中に怒鳴った。

「私、昨日、金色の粉が降るのを見たの！」

周囲の生徒が驚いて羽心を見たが、最も驚いたのは勇氣だった。

「え？」

勇氣が振り向くと、羽心が近寄ってきた。

「ねえ、さっきの授業中に夢を見たんでしょ？ そこに金色の粉が出てこなかった？」

「え？ なんてそんな事を？」

「だって、前から変な夢を見るって言ってたでしょ？」

勇氣はそれに答えるよりも、もっと大事な事を尋ねる事にした。

「その金色の粉はどこを見たの？」

「昨日の夜、寝ようと思ったら、外から変な声みたいなのがしたのよ」

「どんな音？」

「キヤキヤキヤっていう笑い声みたいなの」

勇氣は先程の夢の中で聞いた声を思い出して生唾を飲んだ。

「それで？」

「窓を開けて外を見たら金粉みたいなものが降ってたの。」

空をよく見たら、×印状の小さな罅みたいのが見えた気がして……」

「小さな罅が……？」

「その罅は雲に隠れて見えなくなっただけ……。私、とても怖くなって……」

勇気はじつと考えてから羽心に提案をする事にした。

「今日、学校が終わったらうちに来てくれない？」

羽心のそれまでの不安げな表情がぱっと明るくなる。

「もちろんよ」

3 — 妖精事件

「それで、ここで怪奇現象について調べた後、その怪つて奴がいる時代のところに行くの」

「ふむ、なるほど」

ディアーナは、チエイニーに異変解決の手段を言った。

今、二人は勇氣の家の前にいる。

勇氣の家の書齋には、怪奇現象や超常現象に関する資料がたくさんある。

中には、幻想郷同人ゲーム『東方Project』の舞台。や運命の戦い成人ゲーム『Fate』シリーズ。児童書であるこの小説の原作とは水と油。に関するものも眠っていて、

ディアーナはそれを見ると「あつ！」と既視感を抱く。

「勝手に入ってるみたいだけど、勇氣達は気付いていないみたいで」

ある意味ラッキーね、と笑うディアーナ。

「この怪奇現象はエルフが起こしてるって言ってたけど、エルフって何？ 森の民じゃないの？」

「話してやろう。……エルフというのは、『妖精』じゃ」

「そうだったのね！　じゃあ、この怪奇現象って妖精が起こしたものの?!」

妖精という言葉聞いて、ディアーナは途端にテンションが上がった。

「あたし、嬉しい！　今度は楽に解決ができそう！　よし、そうと決まれば早速書齋に……」

「……娘よ、周囲に迷惑がかかっておるぞ」

「あ」

チエイニーと騒いでいるディアーナの周囲には、何人も人が集まっていた。

ディアーナは顔が赤くなり、ペコリ、と謝った後、チエイニーと共に静かに書齋に向かった。

学校から一緒に下校した勇気と羽心は、勇気の家書齋にいた。

羽心は、調査をしていたディアーナとチエイニーを発見した。

「えっ、ディアーナさんにチエイニーさん、いたの?」

「あちゃあ、気付かれたか」

「娘よ、鋭いな」

ディアーナとチエイニーは羽心に気づかれてしまったようだ。

「気を取り直して……」

少年説明中……

「つまり、私達の住んでいる見捨里市に世界中の怪が襲ってきていて、キユウっていう幽霊と勇氣は、それと戦ってたって事なのね……？」

「あたし達も忘れないでよね」

不思議な事が大好きな羽心も、流石に直ぐには受け入れられなかった。

自分に納得させるように勇氣の説明を改めてまとめた。

勇氣は頷く。

心の中に疑問が浮かんだ。

「でも、そのキユウって子は誰だったの？」

「何って？」

「だって、自分は幽霊だって教えてくれただけなんですよ。」

『キユウ』って名前も勇氣の名をもじっただけだし……」

大切な親友を疑うような事を言う羽心に、勇氣はちよつとむつとしたが、

羽心に言われた通りだ。

キユウについて何も知らなかった事に、今更気づいた。

勇氣は小さな溜息をついて、今言える事だけを言う事にした。

「僕にはつきり分かるのは、邪鬼のせいだから見捨里市がメチャメチャになるとい

う事だよ」

「邪鬼のせいで町がメチャメチャに……」

「娘、気を落とすでない」

まんまと騙された羽心は、あの男の子ならばやりかねないとゾツとした。

チエイニーは肩を落とそうとする羽心の肩に手を置く。

羽心は目の前の机の上に置かれた一对のグローブを見つめた。

「キユウさんは月の羅針盤のグローブを嵌めて、『時のトンネル』を作り出して、

勇気は太陽の羅針盤のグローブを嵌める事で『時のトンネル』に入る事ができる」

「うん」

頷く勇気は、その一对のグローブを手にとって不安な表情になった。

(キユウ達と一緒に戦ってきたのに、キユウがいなくてもできるのかな……?)

心の声が呟いていた。

「ねえ、大変!」

羽心が不意に声を掛けてきた。

勇気が見ると、羽心は書斎の少し高い位置にある窓を見上げていた。

窓の外にあの粒子が降っている。

勇気、羽心、デИАーナ、チエイニーは窓に近づきガラス越しに空を見上げた。

薄い雲がかかる午後の空に僅かな×印状の罅が見える。

「仕事が間に合わなくなるわね」

「でも……」

ディアーナはじつと空を見ている。

勇気はキラキラと光る不気味な雨のようなものを前にして途方に暮れた。

「この金粉みたいなのはなんなんだ？」

「う〜ん」

隣の羽心が、人差し指で額をトントンと叩き始めた。

羽心は昔から何かを思い出そうとすると、こういう仕草をするのだ。

「あ、これって、もしかして、宇宙ホタルかも？」

「え？ 何それ？」

「宇宙艦から捨てられた水がなんか、宇宙空間でかき氷みたいになって、

それに日光が当たると、ホタルみたいに見えるのよ。

「だけど、ここは宇宙空間じゃないからね。それは違うよ」

「羽心は自分で言い出した事を、自分で否定して納得してしまう時がある。

「ねえ、羽心。何か他に思い当たるものはないの？」

「う〜ん」

羽心は、再び人差し指で額をトントンと叩いて、記憶を探った。

「そうだ！　もしかすると……」

「何？」

「これは、鱗粉っていつて、蝶々や蛾の羽に付いてる粉よ」

「じゃ、今降ってるのは蝶々か蛾のせいなの？」

「ううん、きつとこれはそれじゃない」

羽心はそう呟くと書斎の本棚に目を走らせ、一冊の本を手にした。

それは『世界の妖精大事典』という英国の翻訳本だった。

羽心はそれをパラパラとめくる。

「これよ」

ふと、羽心はあるページで手を止めた。

【妖精が蝶々の鱗粉のような粉を振り撒き、それが不思議な力を起こす事もあるという話もある。

最も有名なのは、「ピーター・パン」に登場するティンカー・ベルだ】

その文章の脇に、妖精達の様々なイタズラの絵が描かれていた。

鱗粉の魔法に掛かって様々な物が生き物のようになっていた。

薪が歌って踊っている絵。

レンガに羽が生えて飛んでいる絵。

足の生えた箒が人々を追いかけ回し、空飛ぶ雑巾が主婦の顔をゴシゴシと拭いていた。

その様子を、背中に羽の生えた小さな妖精達が笑って見ている。

妖精は女も男も、子供も大人も耳が尖っている。

「じゃ、今起きてる事は、この妖精達の仕業なんだね」

「多分そうよ」

「だって、ジャネットがエルフって言ってたしね」

「でも、どこに行つて妖精と戦えばいいんだ？」

「それは、きつとここよ。妖精が世界中で話題になったのは、この時よ」

羽心は事典のページをさつとめくった。

「コティングリーの妖精事件」という項目だった。

くコティングリーの妖精事件く

1917年、イギリスの田舎の村・コティングリーで、エルシーとフランシスという二人の親戚同士の少女が、森で妖精と出会い、写真を撮ったという事件が起きた。

やがて、神秘的な現象や事柄を研究する神智学者、

エドワード・L・ガードナーという人物が調査に乗り出した。

ガードナーがエルシー達にカメラを渡して写真を撮るように言うと、彼女達は新たに妖精の写った写真を3枚も撮ってきたのだという。

そしてそれを見て、ガードナーの知り合いで、

以前から妖精騒動に興味を持っていた作家のコナン・ドイルが「本物」だと断定したのだ。

その結果、1920年には国中で大騒動になった。

このページにはその問題になった写真も掲載されていた。

森の中で微笑む少女の白黒写真。

その少女の周りを羽の生えたバレリーナのような妖精達が踊るように囲んでいる。

写真に写っている少女の名前はフランシス・グリフィス。

そして、写真を撮ったのはエルシー・ライトとなっている。

二人は従姉妹同士だという。

「コナン・ドイルって、『シャーロック・ホームズ』の作者だよね？」

「ええ、彼は神秘的なものが好きで、研究をしていたらしいわ」

「そうなんだ……」

「む？ 『この写真の妖精は絵である』と書いておるぞ」

「そう。この写真は作り物なのよ。」

でも、エルシーとフランシスは自分達が本当に妖精に会った事を信じてもらいたくて、

嘘の写真を撮ったんだって」

「それって、つまり、妖精は本当にいたという事なんだね」

「エルシーとフランシスは全部で5枚の写真を撮っていて、4枚は嘘だと認めたの。」

でもね、最後の1枚は本物だと死ぬまで言っていたそうよ」

「そうなんだ……。やっぱり妖精はいるんだね」

「コティングリーの妖精事件か……」

勇氣は机の上のグローブを見てゴクリと生唾を飲んだ。

自分が見捨里市を守らないとならないが、

キユウがいない状態で戦わないとならないと思うと不安が全身を駆け巡った。

「勇氣、1920年のイギリスよ」

「え？ うん……」

しばらくくすると、羽心は月の羅針盤のグローブを手を取って勇氣に差し出した。

勇氣がグローブを受け取らないので、羽心は首を傾げた。

「勇氣、どうしたの？」

「え？ いや、その……ちよつとトイレに……」

勇気は書齋を出て行くとした。

「勇気！ まさか、ビビってるんじゃないでしょうね？」

「え？ 僕がビビる？ あはは……。そんな事あるわけじゃないか」

「キユウさんは、この町を守るのは勇気とディアーナ達だけだって言ってたんですよ？」

「あはは。そうだね。もちろん、僕だけがこの町を守るんだよね」

「あたしも忘れないですよ」

勇気は頭をポリポリと搔いてから再び書齋を出ようとする。

すると、羽心が尋ねてくる。

「ねえ、キユウさんのグローブを嵌めれば、時のトンネルっていうのが開くんじゃよ？」

「え？」

勇気が立ち止まり振り返ると、羽心が月の羅針盤のグローブを嵌めようとしていた。

それを見た瞬間、勇気は何故か急に頭に血が上った。

「やめろ！ それはキユウのグローブだ！」

その凄い剣幕に羽心は驚いて、月の羅針盤のグローブを机の上に戻した。

勇気は机に走り寄るとグローブを握り締める。

「これはキユウのグローブなんだ。キユウが僕達を守るために嵌めたグローブなんだ」
手にしたグローブをギユツと握る勇氣。

その姿から、勇氣にとってキユウがとても大切な存在だったのは充分に理解できた。

羽心は胸が熱くなった。

「だったら、勇氣はキユウさんの言葉をしっかりと守らないとダメじゃない！」

羽心は強い口調で言った。

勇氣はその言葉で決断ができた。

「……そうだね。羽心の言う通りだね」

「さ、行きましようか」

「儂も忘れるでないぞー」

勇氣は月の羅針盤のグローブを鋭く見つめた。

そして、グローブの中に自分の左手を滑り込ませた。

5本の指がするりと入った。

掌と甲に生地が綺麗にフィットする。

右手で左の手首のフックをカチリと嵌める。

ふらついていて羅針盤の針がピタリと動きを止めた。

勇氣は左手に今まで感じた事のない、力が漲るみなぎのを感じた。

「よしっ！ 羽心、やってみるよ。時のトンネルを開けてみる」

羽心は頷くと、勇氣の背後に身を隠すように回った。

ディアーナとチェイニーも、勇氣を見守っている。

勇氣は左手を壁に向かってかざした。

そして、息を大きく吸い込むと、目を大きく見開き、呪文を唱えた。

「カオス・ゲート
時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

「よし！ できた！」

「これが、時のトンネル……」

噂には聞いていたが、このようなものだったとはな」

羽心とチェイニーは唖然としながら、目の前に現れた渦を眺めた。

「じゃ、行ってくる」

勇氣は書齋に置いてある怪狩り用の靴を手にした。

その時、羽心が太陽の羅針盤のグローブを右手に嵌めようとしているのに気づいた。

「え？ 羽心、何してるんだよ？」

「決まってるじゃない。私も行くのよ」

「何言ってるんだ。これは僕の仕事だ」

「あたしとチェイニーもジャネットから言われたんだから」

「これはコテイングリーの妖精の仕業だつて教えてあげたのよ。私も行く権利があるわよ」

「ダメだ！ 羽心には危険だよ！」

勇気は羽心の手から太陽の羅針盤のグローブを奪うと、

ディアーナとチェイニーと共に時のトンネルの渦に飛び込んだ。

「あ、待つてよ！ 勇気！」

羽心もトンネルに飛び込もうとした。

「きゃっ！」

トンネルの入り口は既に閉じて壁になっていた。

羽心は跳ね返されて尻もちをついた。

「いたたた……」

どうやらグローブを嵌めた者が入ると、すぐに閉じてしまうようだ。

「そんな……」

羽心は悔しそうな表情で、壁を見つめた。

「私も……勇気の力になりたいのに……」

一方、勇気、ディアーナ、チェイニーは、光のトンネルの中を飛んでいた。

やがて、光のトンネルの奥に、森が見えてきた。

「あそこか！」

勇気、デイアーナ、チェイニーは飛びながら体勢を整える。

三人は地面に綺麗に着地し、すぐさま、靴を履いた。

勇気は太陽の羅針盤のグロープも持ってきたので、それも嵌めた。

「よしっ！」

これでいつでも怪と戦える。

準備は万端だ。

だがその時、勇気はある事に気づいた。

「あああ！ 武器がない！」

「何やってんのよ………!!」

4 — 二人の少女

「キユウ、どうしよう？ 僕のバカバカっ！」

森の中で、勇気は自分の頭をポコポコと叩いた。

ディアーナとチェイニーは、はあ、と溜息をついている。

（どうやって妖精を倒せばいいんだ……？）

今までずっと、キユウが怪の弱点となる武器を教えてくれたし、

戦闘能力が高いディアーナ達も同行している。

だからこそ、怖がりながらも勇気は勇気を出して、怪狩りを行う事ができたのだ。

「妖精の弱点……妖精の弱点……」

勇気はこの時代で武器を入手しようと思った。

しかし、妖精にどんな弱点があるのかさっぱり分からなかった。

（こうなったら、何でもいいから武器を……）

勇気は武器になるものを見つけようと周囲を見渡す。

だが、森の入り口で武器になりそうな物といえば木の枝くらいだ。

「あれ？ こっこって、コテイングリーって村だよね……う！」

「そうじゃが、何故人が集まっておる？」

チエイニーの言う通り、田舎の村にも関わらず、何故か人々で溢れ返っていたのだ。

「5時間もかけて来たというのに、どういう事なんだ？」

「コナン・ドイルさんは嘘つきなのか？」

「私、妖精を見たかったわ！」

「俺だつて！ 捕まえて売れば金持ちになれるからな！」

人々は、帽子を被ったスーツ姿の紳士に詰め寄っていた。

「皆さん、落ち着いて。私はあなた達にこの村へ来てくださいとは一言も言つてませんよ」

「はあ？ 何言つてるんだ？」

「あなたとコナン・ドイルさんが、ここに妖精がいるつて言つたんでしょ！」

「まさか、お前達だけで妖精を捕まえて大儲けするつもりか！」

「そうじゃありません！」

「じゃあ、どういう事なんだよ、ガードナーさん！」

「ガードナー？」

恐らく、彼は妖精事件を調査した神智学者のエドワード・L・ガードナーだろう。

ガードナーが調査をし、コナン・ドイルが「本物」だと断定した事によつて、

大勢の妖精を探しに村へやって来たようだ。

(なんか、これってあの時にそっくりよね……)

ディアーナは、以前、時空を超えて行ったツチノコ異変の光景を思い出した。

時代も国も異なるが、人々が好奇心や欲望を丸出しにして群がる姿はとても似ている、

ディアーナは不快な気分になった。

その時、勇気達の前を、二人の少女が通り過ぎて行った。

一人は勇気よりも年上の少女で、もう一人は年下のように見える。

「あの子は確か……」

勇気が二人を見ていると、彼女達は森の入り口までやってきて、コソコソと喋り出した。

「エルシーお姉ちゃん、ほんとに行くの？」

「ええ。フランシス、あなただって妖精達がみんなに捕まっちゃうのは嫌でしょ」

「えっ？」

その言葉に、勇気は驚く。

二人の少女は、そんな勇気と付添人に気づく事なく森の中へと入って行った。

「今のって……」

エルシーとフランシス。

コティングリーの森の中で、妖精の写真を撮った従姉妹の少女達だ。

「森に行つたつて事は……」

「もしかして、妖精に会おうとしているのかもしれないわ……ちよつと、何をするの、勇氣？」

勇氣は慌てて落ちていた太い木の枝を拾つた。

「これでも、ないよりはマシだよね……」

「何するのよ、やめなさいよ！」

「だって、武器がないと戦えないし……行くよ」

ディアーナは勇氣を止めようとするが、勇氣は彼女を無視していた。

勇氣はそれを手に、急いで二人の後を追つた。

「まったく、キュウ以外に仲間を信じないのかしら？」

「弱い癖に意地を張る、というのが、人間じゃからな」

ディアーナとチエイニーも、愚痴を吐きながら彼の後を追つた。

森の中は、あちこちに木洩れ日差が差していた。

村の騒がしい雰囲気は嘘のように、静寂に包まれている。

小川があり、透き通つた澄んだ水が緩やかに流れている。

小川の中に目をやると、小さな魚達が泳いでいた。

どこかから、鳥のさえずりが聞こえる。

「ふう……落ち着くわね。懐かしいわ」

幻想的で美しい空間。

こんな森なら本当に妖精が棲んでいてもおかしくないと勇気は思った。

ディアーナも「帰らずの森」の光景を思い出して思わず休憩してしまう。

「お主、異変を解決するのではないのか？」

「あ、忘れてた！」

だが、妖精事件を解決するために、長く居座つてはいけなない。

やがて、少し離れた場所から、声が聞こえてくる。

「みんな、どこにいるの？」

「お願い、出てきて」

勇気達は、声のした方に近づくと。

すると、小川の傍にある岩場の前に、エルシーとフランシスが立っていた。

（妖精を呼んでるんだよね……？）

（多分ね……）

勇気達は二人にバレないように、さらに近づこうとした。

が、勇氣は落ちていた枝を踏んでしまい、音が響いた。

瞬間、エルシーとフランシスが勇氣達の方を見た。

「あ、えっと、違うんだ」

勇氣は必死に言い訳をしようとするが、

エルシー達は枝を武器のようにして持つている事に気づき、身構えた。

「お兄ちゃん、妖精さん達を捕まえに来たの？」

「フランシス、下がって！」

「ちよ、ちよつとやめて。話を聞いて！」

エルシーは傍にあった石を拾うと、勇氣を睨みながら振り上げる。

勇氣は枝を投げ捨てると、手を挙げて、攻撃の意志がない事をアピールした。

「あなた、この村の子じゃないわよね？」

エルシーは石を振り上げたまま、勇氣に尋ねる。

「う、うん。遠いところから来たんだ」

「遠いところ？ やっぱりお兄ちゃん、妖精さんをつままえようと思ってるんですよ！」

「違うって、僕は妖精を倒しに来たんだ！」

「あつ、それは言っちゃいけない言葉よ！」

勇氣の言葉に、上のエルフであるディアーナは口にかみさつと手を当てる。

「ご、ごめんなさい。……ねえ、ディアーナ、代わりに話してくれる？」
「分かってるわよ。」

あのね、勇気が夢で見た妖精が、魔法の鱗粉で悪い事をしようとしたんだって」

「何よそれ……？」

「そんな悪い妖精さん、この森には一人もないよ」

妖精達は悪戯好きだが、みんな陽気で明るく、人に危害を加える事などないという。
特徴としては、幻想郷の妖精とほぼ変わりがないようだ。

「妖精は不気味な笑い声を上げないもん！」

「そ、そうなんだ……」

やはり、エルシー達が知っている妖精は全く別の種類のようなのだ。

チエイニーは「だろうな」と頷く。

(ならば、見捨里市で鱗粉を撒いておる妖精はどの妖精なのじゃ……?)

チエイニーは困惑した。

あの妖精達は、他の時代に存在していた妖精達だったのだろうか？

「わっ！」

突如、勇気の目の前を、羽の生えた物体が飛んで来た。

虫が飛んできたのだと思ひ、勇気は手で払おうとする。

すると、その物体がひらりと避けた。

「あつぶないナ、何するんだヨ！」

「えっ？」

そこにいたのは、妖精の男の子だ。

耳が尖り、緑の衣装に身を包み、腰にはポーチを着けている。

ピーター・パンとティンカー・ベルを足して2で割ったような容姿だ。

「プーカ！」

エルシー達が声をかけると、プーカと呼ばれた妖精は、

猛スピードで二人のもとへ飛んで行った。

「おお、エルシーにフランシス。オイラは疲れたヨ」

プーカはフランシスに飛びついた。

「疲れたって、どうしたの？ 彼の妖精さん達はどこにいるの？」

「まあ、話すのも面倒くさいって言うカ……。って、それ、くるみパンだよネ？」

「え、うん」

「おおお、オイラの大好物じゃないカ！」

プーカはフランシスからくるみパンを奪うように取った。

パンは自分の身体と同じぐらいの大きさがある。

プーカは、それを幸せそうな笑みを浮かべながら、一気に食べ切った。

「うくん、美味しい。やっぱりくるみはパンと一緒に食べるのが一番いいねエ。」

フランシス、もう一個ちょうだい！」

「う、うん」

「そんな事より、プーカ！ みんなはどこなの！」

「みんな？ あああ、そうだった」

面倒臭そうに答えたプーカは、フランシスからくるみパンを受け取るとまた食べ始めた。

「困ったもんだヨ。人間どもを退治するって皆が夢中になってるんだ。」

それって絶対に間違ってるからやめ口、って説得したんだけどダメでネ。

もうすぐ総攻撃を始めるヨ」

「総攻撃って……？」

「気にするなヨ。バカはバカ同士で戦えばいいんだヨ。」

妖精を捕まえようとする人間もバカだし、

そんな人間どもをやっつけようとするオイラの仲間もバカだからネ」

「そんな……」

そう言葉を漏らしたエルシーは、この騒動について吐き出すように語り出した。

「私達はプーカや他の妖精さん達に本当に会ったのに、誰も信じてくれなかったの。だから、妖精の絵を描いてそれを切り抜いて、ヘアピンで地面に留めて写真を撮ったの。」

パパやママや友達が信じてくれれば良かっただけなのに……」

言葉に詰まったエルシーに代わってフランシスが続ける。

「まさか、コナン・ドイルさんまで写真を見るなんて考えてなかったもの……」

従姉妹の少女二人は戸惑った表情でお互いの顔を見て、小さく頷いた。

「まあ、妖精達は写真に撮られるのがイヤだからネ。」

だからって、嘘の写真を撮ったのは失敗だったナ」

「ごめんなさい……」

エルシーとフランシスはしよんぼりとプーカに謝った。

「でも、今一番の問題は、

オイラの仲間が、刀を持った変な男の子の話でますます人間に不満を持つちまった事だナ。

人間なんて、どうせすぐに色んな事を忘れちゃうからネ。

放っておけばオイラ達妖精の事だって忘れちゃうんだからサ」

「はあ……。って」

プーカはむしやむしやとパンを食べながら持論を語った。

「刀を持った変な男の子?」

「それって!」

勇気達がプーカ達の傍に駆け寄った。

「その男子は、片目に包帯を巻いていたのじゃな」

「キミ、だレ? どうしてそれを知ってるんだヨ? あ、もしかしてあいつの仲間なんだナ?」

「仲間なんかじゃない! 僕は邪鬼に利用された怪を倒さないといけないんだ。

あいつは、僕が一番倒したい相手だ!」

「あたし達も仕事があるの。それだけよ」

勇気達は、プーカを真剣に見た。

「プーカ、あたしの説明をよく聞きなさい。あなたの仲間はずっと邪鬼に騙されているのよ。

邪鬼は怪を別世界に送り込んで、世界をボロボロにしようとしているのよ。

でも、その割に邪鬼は全然あたし達の前に姿を現さないのよね。

ラスボスっていつもこんな感じなのかしら?」

「あの少年が信用できないのは直感で分かったヨ。でも、オイラの仲間はすっかり信じ

ちまつた。

でもなんで世界をメチャメチャにしようとしてるんだ？」

「そんなの、あたしは知らないわよ。」

でも、あたし達は勇気って子が住んでる町を守るためにわざわざ遠い世界から来たの

よ。ね？」

「うん」

勇気は天空を見上げて指差した。

その右手には太陽の羅針盤のグローブが嵌められている。

それを見たプーカはハツとなり、さらに勇気の左手を見た。

そこには月の羅針盤のグローブが嵌められていた。

「キミ、そのグローブはどこデ……？」

「は？ このグローブがどうかしたのか？」

「それはキミの物力？」

「そうだ。大切な友達が僕にくれたんだ」

プーカは左右のグローブをじっと見つめた。

その時——茂みの中から甲高い笑い声が聞こえてきた。

「待って！」

「えっ?」

勇気が声のした方を見ると、茂みが激しく揺れ動いている。

次の瞬間、地響きが起き、フランシスはエルシーに抱きついた。

「何なの、この音は?」

「ついに総攻撃を始めたんだ」

妖精達の不気味な笑い声に混ざって、鈍い地響きが近づいている。

「キヤキヤキヤキヤキヤキヤ」

辺りの草木が激しく揺れる。

「一体、何が起きるんだ」

震える声で勇気がプーカに尋ねた。

「魔法の鱗粉だヨ。鱗粉は様々な物を生き物に変えて、操る事が出来るんだヨ」

「それで木々を生き物に?」

「そう。凶暴な生き物にネ」

勇気達がよく見ると、森が動いている。

背の高い様々な木々が巨人のように歩き、小川を横切つていこうとしている。

草木のかぶり物をしたゾウやキリンの大群が歩いているようだった。

木々の上にはキラキラと輝く鱗粉が降り注いでいた。

羽を飛ばたかせて鱗粉を散らしている妖精達の姿は真っ赤だった。

「妖精って、あんな怖い姿をしてるんだね」

勇気はゾツとした。

「いや、普段はあんなじゃないヨ。みんな憎悪に取り憑かれてるんだ」

「ねえ、妖精さんと歩く木はどこに向かっているの？」

エルシーは不安になってプーカに尋ねる。

「それは、もちろん、ここに集まった人間達を踏み潰しに向かっているんだ。

そして、ここの村の建物を全部潰す気だヨ」

「え？ そんな！」

フランシスとエルシーはショックを受けた。

「それだけじゃないヨ。ここの村を壊した後には、×印状の罅の向こうの町を壊しに行く

ヨ」

「まさか、それって！」

今度は逃げ切れない。

こんな時、今まではキユウが上手いアイデアを出してくれた。

「キユウ！ どうしたらいいんだよ？ 助けてえ！」

勇気は思わず叫んだ。

しかし、キユウはいないのだ。

ディアーナがそんな勇気を呆れた目で見ていた時、

五人の上に巨大な木の根っこが覆いかぶさろうとした。

「あつー！」

その時、羽の生えた大きな丸太が飛んできた。

それは巨大なトンボのようでもあった。

勇気、ディアーナ、チェイニー、エルシー、フランシスは、

羽の生えた丸太にすくい上げられ、巨木の根に踏み潰される事はなかった。

「わあ！ なんだこれ！」

「すごいー！」

勇気が驚いて見渡すと、

自分とディアーナとチェイニーと二人の少女が空を飛んでいる事に気がついた。

巨大なトンボのような丸太がせわしなく羽を動かして飛んでいるのだ。

「キミ達、乗り心地はどうだい？」

空飛ぶ丸太と並んでプーカが飛んでいた。

「これは、何が起きてるんだ？」

「キミ達を救っただけさ。森の中に倒れていた丸太にこれを一振りかけてネ」

そう言うプーカの羽ばたく羽からキラキラと輝く鱗粉が散った。

魔法の鱗粉で丸太を空飛ぶ生き物に変えたのだ。

「なんて素敵なの！」

「やっぱり妖精さんって最高！」

エルシーとフランシスは死にかけて事をすっかり忘れて、目を輝かせた。

「じゃが、ずんと飛んでいるわけにはゆかぬな」

チエイニーが目を下に向けると、巨人のような木々が村に向かっていた。

「何とかして食い止めないと！」

「オイラに考えがあるんだ」

「なんじゃ？」

「長老に会いに行くんだ。もう一度、長老を説得してみるヨ」

5 — 妖精を説得せよ

勇氣達は森の上を飛んでいた。

「エルシーお姉ちゃん、あれ、見て！」

「何？」

エルシーはフランシスの指差す方向を見た。

勇氣、ディアーナ、チェイニーもそこを見下ろした。

すると、プーカが飛びながら悲しげに言葉を発する。

「これが、人間達の仕業だよ」

皆が見下ろした場所には、ゴミが散乱していた。

木々は踏まれ、草木も倒れていた。

よく見ると、それは一ヶ所だけではない。

至るところで、同じような光景が広がっていたのだ。

「オイラ達を捕まえようとして、人間達が森を滅茶苦茶にしたんだ」

「それって……」

村にいた人々の事だ。

「あいつら、オイラ達を出てこさせようとして、次から次に斧で木を切り離したんだぜ」
勇氣達は最初、この森が幻想的で美しいと思つた。

だがそれは一部だけで、森の多くが人々に汚されてしまつていたので。

「はあ……。だから、あなたの仲間は……」

ディアーナには、妖精達が人間に怒るのも仕方がないと思えた。

同時に、同族としてそれに対する同じ怒りを抱く。

「全部、私達のせいよ……」

エルシーが呟いた。

「私達があんな偽物の写真さえ撮らなければ……」

「エルシーお姉ちゃん……」

「いつまでもそんな事を気にするのはバカのやる事だヨ」

見た目は可愛い妖精なのに、プーカは厳しい事を言うと思つた。

ディアーナは、一刻も早く仕事を終わらせなければ、と思つた。

それは、チエイニーも同じ気持ちだ。

「キャキャキャ」

背後から甲高い笑いが聞こえた。

ハツとして振り返ると、真つ赤な妖精達が飛んできていた。

「くっ、しっかり掴まれ！」

プーカは勇氣やエルシー達に指示を出した。

そして、自分の羽を今まで以上に強く羽ばたかせた。

無数の鱗粉が散り、羽の生えた丸太に掛かる。

その途端、丸太の羽も物凄い勢いで羽ばたき始め、空飛ぶ丸太がスピードアップした。

「わあああああ！」

「「「きゃあああ！」」」

「ふぬうううう！」

勇氣、ディアーナ、チエイニー、二人の少女はそのスピードに悲鳴を上げた。

「しっかり掴まるんだ！ 落ちるなヨ！ オイラがあいつらを引き離ス！」

プーカは追ってくる真つ赤な妖精達に向かおうとしたが、

後方からも何かが飛んできた。

それは別の妖精達だ。

勇氣達を乗せた空飛ぶ丸太は違う方向へ逃げようとするが、そこにも妖精達がいた。

「これじゃあ逃げられない！」

勇氣達は、四方を妖精達に囲まれてしまった。

「キャキャキャ キャキャキャ」

真つ赤な妖精達は不気味に笑い、徐々に迫つて来る。

「このままじゃ襲われちゃう！」

叫ぶ勇氣の周りを、プーカはぐるりと回つた。

そして、勇氣の肩に止まる。

「ねえ、キミ達はローラーコースターに乗つた事があるかい？」

「え？」

「私、乗つた事がないの。乗つてみたい」

「あ、あたしもない。一度乗つてみたいんだ」

「あたしも！」

「悪くないぞ」

エルシー、フランシス、ダイアナ、チェイニーはすぐに答えた。

「ぼ、僕は何度か乗つてるけど、あんな怖い物は嫌いだよ」

勇氣は怯えた口調で答えた。

「君は嫌いなんだネ。じゃ、これから好きになりなヨ」

プーカは悪戯つぽい笑いを浮かべた。

彼が自分の羽を軽く羽ばたかせると、鱗粉が散つて丸太に掛かつた。

「えっ？」

次の瞬間、空飛ぶ丸太は真下に落ちた。

周りにいた妖精達の顔から突然消える、五人を乗せた丸太。

キヨロキヨロと見回して「キャキャッ」となっている妖精達。

五人を乗せた丸太が空気を切り裂いて真下に落ちていく。

「ぎゃああああああああ！ 助けてえ！」

勇気が悲鳴を上げた。

「わあああああ！」

「あはははははっ！」

「楽しいわよ！」

エルシー、フランシス、デイアーナが喜び、チェイニーは無心で丸太に乗っている。

そして、プーカは強烈な風を受けながらも、勇気の背中に余裕で座っていた。

やがて五人を乗せた丸太は、妖精達が操る巨人のような木々の先頭の前に来ると、

ピタリと宙で止まった。

「ぬわあああ！」

目の前に勇気達を乗せた丸太が現れて驚いたのは、

赤黒くて長い顎鬚を伸ばした年寄りの妖精だった。

「なんジャ！ お前達ハ！」

真つ赤な顔で赤黒い顎鬚の妖精は勇氣達を睨みつける。

この老人が長老のようだ。

「人間じゃナ！ やつつけるのジャ！」

長老は巨人のような木々に命令をする。

「長老、やめてください！ オイラですヨ！ プーカですヨ！」

勇氣の肩にいたプーカが叫んだので、巨人の木々の動きは止まった。

「ぬおオオ！ 何故人間と一緒にいるのジャ？」

「聞いてください。人間全員が悪いわけじゃないんです」

「その話は聞き飽きたゾ！」

「でも、人間を全部倒すなんて考えるのはおかしいです」

「人間がこの森の木々を切り倒し、ゴミを散らかし、滅茶苦茶にしたんだ。

この森の平和を守るためには人間を倒すしかないのジャ」

長老は後ろに控える真つ赤な妖精達を見た。

「さア、皆のもの、人間を倒すのジャ！」

長老は自分の羽を激しく羽ばたかせて鱗粉をさらに散らした。

巨人のような木々が行進を始めた。

「長老、やめてください！」

「プーカ！ どうすればいいのよ！」

「長老もみんなも、憎んだり、嫌ったりする悪い感情に囚われてるだけなんだ。

あの少年に騙されて、憎む心が大きくなっただけなんだ！」

「うるさい！ あの子が言っている。人がいなければ森は平和になるのじゃ！」

プーカは顔を歪めて呟いた。

「ダメだ。止められない。長老もみんなも『憎しみの化け物』になつてル」

エルシーとフランシスは肩を寄せ合った。

「エルシーお姉ちゃん、このままじゃ、村が無くなっちゃう」

「お母さんやお父さんはどうなっちゃうの？」

二人は泣き出した。

それを見た勇氣も、絶望的な気分になり呟いた。

「コティングリーの村だけじゃない。僕の見捨里市も無くなってしまう」

「……仕方ない」

「あのね、チエイニー……」

デイアーナは小声でチエイニーに話した。

すると、チエイニーは頷いて勇氣にこう言った。

「勇氣、協力せよ」

「え？　なんで……」

チエイニーは妖精達を止めるべく、意を決して、自分の血液からメイスを作り出す。「儂が其奴等の頭に一発くれてやろう」

「え！　殴つて解決？」

「話が分からないのには、これが最適だからね」

「やめろおおおおおお!!」

勇気が止めるのも空しく、チエイニーは妖精達に向けてメイスを振り下ろした。

衝撃波がメイスから飛び、憎悪の塊の真つ赤な妖精と、

それに操られた巨人のような木々にぶつかった。

そして……静寂が訪れた。

「あ、あのく、妖精のみんな、えつと、えつと、なんというか、そのく。」

僕もさつき森が壊されているのを見た。だから、人間を憎む気持ちは分かるけど……。

邪鬼という悪い心を持った少年に騙されてるといふか。

その少年の言葉で憎しみが膨らんでしまっただけだと思うんだよねえくく」

勇気はそこまで語ったところで、今までと雰囲気がつつかり変わっている事に気づいた。

長老が、じつと見ている。

正気に戻った長老が、勇気をじつと見ている。

しかし、それは勇気の顔ではなく、その両手だった。

「そのグローブはどこで手に入れられたのジャ？」

「え？ このグローブ？ 僕の大切な友達からだけど……」

「そのグローブを持てるのは、特別な方だけジャ」

「特別な方？」

「そうジャ、特別な方だけがそのグローブを嵌める事ができる。

あなたも、あなたの大切な友達も特別な方ジャ」

「はああ」

勇気は狐に抓まれた気分だ。

「特別なあなたが言う事が正しい。わしらは間違つておつタ」

長老は背後に控える妖精達を見回した。

「皆のもの、よく聞ケ！ わしらは憎しみの化け物になっていたのジャ！」

そう聞いた妖精達の身体から突然、黒い煙が出始めた。

一人一人の妖精達の身体から黒い煙が立ち、黒い煙が風になびき散っていく。

今まで憎悪の赤に染まっていた妖精達の身体が美しく透き通るような白や緑や青に

変わった。

長老の赤黒い顎鬚も、白く綺麗な顎鬚に変わった。

「おお、良い気分じゃ。あなたのおかげで元に戻れたわい。感謝しますぞ」

「……あの、元に戻したのは僕じゃなくて、チエイニーなんですけど……」

長老は勇気に礼を言い、白、緑、青の妖精達も勇気に頭を下げた。

「よし、じゃ、みんな、森に帰るんだー！」

「はい、了解じゃ」

プーカが朗らかに言うと、長老と妖精達は森へ戻っていく。

一方、勇気達の背後にいた二人の少女はぼんやりしていた。

「エルシーお姉ちゃん、あたし達、なんでこんなところにいるんだろ？」

「私にも分からないよ」

エルシーとフランシスは今までの事を忘れたようだ。

プーカが勇気達の傍にブーンと近づいてきた。

「憎む心が怪だったんだ。ありがとウ。キミ達のおかげで仲間が元の妖精に戻ったヨ」

プーカはホツとして勇気、ディアーナ、チエイニーを見る。

「でも、どうして……」

勇気は不思議な気持ちで両手のグローブを見た。

「ディアーナとチェイニーも、グローブを覗いている。」

「それは、特殊能力を持つ人だけが嵌める事ができるのね」

「色は怪を象徴する漆黒。怪を倒した時に現れる煙と同じじやな」

「みんな集まって！」

村の広場で、エルシーがフランシスや子供達を集めていた。

「さあ、今から私が妖精のお話をしてあげるわよ！」

エルシーはそう言つて、妖精が描かれた絵を見せた。

「どうやら紙芝居のようだ。」

「エルシーお姉ちゃん、妖精さんってほんとにいるのかな？」

「フランシス、そんなの決まってるでしょ。妖精は、きつといるわ！」

その言葉を聞き、フランシスは笑顔になる。

エルシーはそんな彼女を見て微笑み、紙芝居を始めた。

勇気、ディアーナ、チェイニー、プーカは、少し離れた場所からその光景を見ていた。

「ほんとに、二人の記憶からはオイラ達の事は消えたんだナ……」

「可哀想に……」

「じゃが、それも宿命なのじゃよ」

チェイニーは空を見てそう呟いた。

プーカは勇氣から、怪を倒した後、

人々の中からその出来事の記憶が消える事を教えてもらっていた。

「やはり、伝説の通りだな……」

「それって、どういう事？　というか、何故、プーカ……プーカ達はリセットされないんだ？」

「妖精も怪だからネ」

「そーなのかー『東方紅魔郷』のルーミアのセリフ、キユウの嘘つき」

「でもさ、大体、なんで、みんなは僕のグローブを見て元に戻ったの？」

プーカは、勇氣の両手をまじまじと見つめていた。

「世の中には信じられない、こんな事があるんだヨ」

プーカはそう言うと、着けていたポーチから何かを取り出した。

それは、およそ小さなポーチには入り切らないような物体だ。

「漆黒のレザーグローブ!!」

それは、あの漆黒のレザーグローブだった。

勇氣の嵌めているものとそっくりなグローブだが、一ヶ所だけ違っている。

プーカがポーチから取り出したのは、星の羅針盤が付いたグローブだった。

「このグローブはオイラ達妖精が編んだものなんだヨ」

勇氣は目を丸くした。

上の妖精ハイエルフのディアーナは「そうね」と呟いた。

そして、ディアーナ達は路地裏に帰って、今回の事をジャネットに報告した。

「以上が、今回の仕事の内容じゃ」

「報告ありがとうございます。……なるほど、あの三つのグローブは妖精が作ったものでしたか」

「そうなのよ。妖精エルフつてさあ、なんだかんだで不思議な存在なのよね！ あたしみたい
に！」

ディアーナは胸を張ってジャネットにそう言った。

ノノとアプリルが拍手して、チエイニーも「あっぱれ」と言う。

「ようやく、私が言った事が分かりましたか。私としても本当に嬉しいです。

これからも仕事、よろしくお願いしますよ！」

「はい！（これって使い走り……？）」

（じやろうな……）

地底の王国

1 | 三つ目のグローブ

コテイニングリー妖精事件が解決してから数日後。

路地裏の建物で、ジャネットは何かを呟っていた。

「……ああ、地上以外が騒がしい。これはどういう異変なのだろうか」

その独り言は、ノノとチエイニーには聞こえなかつたが、

聴力が良いディアーナとアプリルには聞こえていた。

「ここ以外で異変が起こってるって事か？」

「そうです」

「地上以外って事は……安直だけど、地下だろうな」

「そうです」

「そうかよ」

「どうやら、次の異変は地下で起きているようだ。」

元いた世界にも地下世界はあるしね、とデイアーナは呟く。

「地下は地上よりも危険です。空気が薄く、定期的に酸素を供給しなければなりません。さらに、地下に潜む者もこちらの命を狙ってくるでしょう。」

私は地上でしか戦っていなかったもので、地下はこのようなイメージしかありませんが」

ジャネットから地下世界の説明を聞くデイアーナ。

そして、仕事に行くのは誰なのかとジャネットに聞く。

「今日もあたしとチェイニーが行くのか？」

「あなたと助っ人が行かなくて、どうしてあの少年を助けるのですか。」

いいですか、拒否権はありませんよ。必ず、あの少年を助けてください」

「分かったわよ」

「この役目、引き受けさせてもらおう」

デイアーナは渋々依頼を受け、チェイニーはやる気満々で依頼を引き受けた。

「プーカ、ちゃんと説明をしてくれ！」

その時、勇気は家の書斎にいた。

部屋の中には、小さな妖精・プーカが飛んでいる。

プーカは、何故か太陽や月のマークのグローブとそっくりなグローブを持っていた。

星のマークのグローブ。

勇気はそれが何なのか聞くために、プーカを見捨里市に連れて来た。

プーカが飛びながら勇気を見ると、ふと視線をドアの方へ向けた。

「話すのは別にいいけど、彼女は一体誰なんだイ？」

プーカは書斎の入り口に立っている人物を見た。

羽心である。

勇気と一緒に時空を超えようと思ったものの、それができず、

戻って来るのを待っていたというのだ。

流石に追い出す事はできない。

「彼女は白鳥羽心、僕の幼馴染だよ」

そんな羽心が、ふと口を開いた。

「プーカ、あなたは妖精なんでしょ？ どうしてグローブを持つてるの？」

勇気が知りたいように、羽心もその事を知りたいようだ。

プーカはそんな羽心をじろじろと見ると、小さく頷いた。

「キミは人間の中ではまだマシな方だねエ」

「マシって……」

羽心はどう答えればいいのか困惑する。

プーカはそれを見て微笑むと、腰につけたポーチの中からグローブを取り出した。羽心は、それを食い入るように見つめた。

「本当に星のマークがついてる。つていうか、そんな小さなポーチにどうやって入れたの？」

どう折り畳んでも、小さなポーチの中にグローブは入らなそうだ。

疑問に思う羽心を、プーカはフツと鼻で笑った。

「これは『王様のポーチ』と言って、

どれだけ入れてもいっぱいにならない不思議なポーチなんだ。

簡単に言うるとよ……なんとかってヤツだ。

オイラは妖精族の王子だからネ。代々王家に伝わる宝物を持っていて当たり前だろウ」

「妖精族の王子？」

「プーカが？」

勇気と羽心は、プーカを見ながら目をパチクリさせた。

「おいおい、何だいその驚き方ハ？ これだから人間は見る目がなくて困るんだ」

プーカは呆れた様子で息を吐いた。

「でも、あの長老の方が偉そうだったよ」

「仕方ないヨ、長老はオイラより何百年も長く生きてる偉い妖精だからネ
プーカにはプライドの高さが感じられた。

「そんな事より、そのグローブは何なんだ？」

王様のポーチや王子という説も興味深いが、知りたいのはそれではない。

勇気は太陽のグローブと月のグローブをポケットから取り出すと、星のグローブと見比べた。

やはり太陽と月のマークのグローブと同じで、違うのは、羅針盤のマークだけのようだ。

「これは右手用か……」

他にもグローブがあるなど、キュウは何も言っていなかった。

「どうして君がこれを持っているんだよ？」

「そりゃあオイラが妖精族の王子だからサ」

「それはさつき聞いたよ。

僕が知りたいのは、どうして王子だったらこれを持っているのかっていう事だよ」

「どうして？ そのグローブは妖精族の王様が作った物だからに決まっているじゃないカ」

「ええええ？」

真実の赤文字を見て、勇氣は驚きの声を上げる。

一方、羽心がプーカに語りかけた。

「じゃあ、そのグローブはあなたが作ったわけじゃないって事？」

「オイラにはこんな物を作れる才能はないヨ。グローブを作ったのは先祖の王様サ。

大昔の事だから、どれだけの数を作ったのかは分からないけど、

特別な力を持った人間のある家族だけが、そのグローブを嵌めて時空を超える事ができたんだ」

「特別な力って……」

また、プーカが赤文字で言った。

それは、勇氣や羽心の持っている力の事なのだろうか？

「だけど家族って、私と勇氣は家族じゃないわよ？」

「キユウだって家族じゃないし、そもそも幽霊だったよ？」

勇氣と羽心に血縁関係はない。

キユウも、グローブを嵌めて時空を超える事ができたのだ。

「そんな事、オイラに聞かれても分かるわけないだろ」

プーカは星のマークのグローブを持って飛びながら、机の上に降り立った。

「古い古い言い伝えだから、オイラはグローブについてこれ以上の事は分からないヨ。

「だけど、妖精族にはこんな伝説があるんだ」

かつて、「異能」と呼ばれる力を持った人間のある家族が、

妖精族の王からいくつかのグローブをもらった。

彼らはそのグローブを嵌め、怪と人間に災いをなす邪悪な者と戦い、そしてこの世界を救った。

「ただの昔話だと思ってたけど、まさかホントに、他にもグローブが存在しているなんてネ」

プーカは勇気を持っている二つのグローブをまじまじと見つめた。

「怪と人間に災いをなす邪悪な者は、この世界では『邪鬼』と呼ばれている」

羽心は青文字で呟く。

「だけど、怪にも災いをなすってどういう事なの？」

羽心が首を傾げると、勇気が口を開いた。

「邪鬼は妖精達を凶暴にして、僕に襲いかからせた。

あいつは人間に災いをなす邪悪な者であると同時に、

怪にとつても邪悪な者なのかもしれない……」

その言葉に、プーカが頷く。

勇気は、コティングリーの村で起きた出来事を羽心に話した。

すると、羽心の表情が一気に曇った。

「そんなのって酷過ぎる……」

羽心は邪鬼のやった事を知り、シヨックを受けたようだ。

「邪鬼……。あいつの目的は何なんだ……?」

何者なのか、何故見捨里市を狙うのか、全く分からない。

こういう時こそ、キユウが必要だった。

だが、彼はもういない。

「くっ……」

勇気は歯がゆい気持ちになる。

一方、羽心はそんな勇気を見ていた。

「勇気……」

誰にも聞こえないように、かすかに呟く。

羽心は、プーカが持っている星のグローブを、ただじつと見つめた。

2 | 温泉騒動

翌日、学校が終わり、勇気と羽心は一緒に帰っていた。

「学校というのはなかなか面白いところだね」

胸ポケットの中から、プーカが顔を出す。

プーカは学校に付いて来ていたのだ。

「プーカ、教室の中で飛んじや駄目よ」

「そうだよ。もうちよつとで原末先生に見つかりそうだっただろ。」

見つかったいたら、大騒動になってたんだぞ」

「オイラは妖精族の王子だぞ。見つかるようなへマをするわけないだろ」

プーカは全く悪びれる様子がなかった。

勇気はプーカに呆れる。

その時、羽心が前方を指差した。

「ねえ、あれ、原末先生じゃない？」

「えっ?」

勇気が前を見ると、横断歩道のところに原末先生が立っていた。

何故かソワソワしながら、信号が変わるのを待っているようだ。

「先生、何をしてるんですか？」

勇気達は気になって傍に駆け寄ると声をかけた。

「おお、真之に白鳥か」

「先生、もう帰るの？」

学校の先生はもう少し遅い時間に帰るものだと思っていた。

「そうじゃない。職員室でネットを見ていたら、この町のとんでもないニュースがあつてな。」

「それでちよつと見に行つてみようと思つたんだよ」

「ニュース？」

「ああ、見捨山で『温泉』が湧き出たんだ」

「ええええ？」

見捨山とは、見捨里市の外れにある小さな山だ。

しかし、温泉など今まで一度も湧き出た事はなかった。

「ねえ、勇気。温泉つてそんなに簡単に湧き出すものなの？」

「よく分からないけど、簡単じゃないと思うよ」

勇気は以前、テレビで温泉の掘り方を紹介する番組を見た事があつた。

温泉の源泉は地下の奥深くにあり、掘り出すためには地面を何kmも掘らなければならぬ。

「あの、原末先生。その温泉って、どこかの会社が掘ったって事ですか？」
温泉を掘るためには大規模な工事が必要である。

だが、見捨山で温泉を掘っているなど聞いた事がなかった。
すると、原末先生が首を大きく横に振った。

「誰かが掘ったんじゃない。昼間、急に地面から湧き出たらしいんだ」
「急に？」

勇気が驚くと、プーカがポケットの中から喋った。

「怪しいねエ」

「プーカ、喋っちゃ駄目だって」

勇気は慌ててポケットの中のプーカを小声で注意する。

プーカはそんな勇気を見つめた。

「勇気くん、これは怪の仕業かもしれないゾ」

「えっ？」

驚く勇気の横で、羽心が小さく頷いた。

「私もそうかもって思った」

「羽心……?」

「温泉が急に湧き出す事はある得ない事じゃないけど、見捨山も見捨里市の一部でしょ」
「あつ……」

この町では、邪鬼の作った罫のせいで怪現象が起きる。

「勇気、行つてみましょう」

「あ、ああ!」

勇気は戸惑いながらも、羽心と共に原末先生に付いて行く事にした。

「それで、この山に行くの?」

「温泉が湧いたらいいからのう。ここで休息するのも良いぞ」

見捨山で温泉が湧き出た事は、デイアーナとチエイニーも知っていた。

二人はそれを調査するために、見捨山に行こうとしていた。

ノノは空を飛べるのだが、二人は飛べないため、徒歩で向かった。

「あくあ、ノノがついていけばよかつたのにねえ」

「文句を言うでない。ジャネットは儂を、勇気の力になるために呼んだのじゃ」

チエイニーは、勇気の騎士になるためにジャネットが呼んだのだ。

だが、地下は地上より危険だとジャネットは言っていた。

そんな場所に二人だけで勇気と同行するのは、自殺行為かもしれない。

しかも、キユウは消え、羽心もきつと勇気が同行を阻止するかもしれない。こんな調子で怪狩りができるのか、ディアーナはちよつぱり不安になった。だが、不安だからこそ、ディアーナはある事をしようとした。

「勇気に、後で何か言いましょう」

「皆さん、押さないで！」

見捨山に到着した勇気達は、峠道を上った。

すると、途中の少し開けた場所に、大勢の野次馬が集まっていた。

一角に数人の警察官が立っていて、それ以上先へは行かせないようにしている。辺りからは、硫黄の臭いが僅かに漂っている。

どうやら、警察官達が立っている向こうに、湧き出た温泉があるようだ。

「うくん、これじゃあ肝心の温泉が見えないなあ」

原末先生は真面目な性格だが、意外とミーハーな一面もあるようだ。

「……原末先生、どうにかして温泉まで行けないですか？」

「真之、警察官がああやって立っているという事は、危ないからそうしているんだ。

これ以上は近づかない方がいい」

原末先生は、教師らしい答えを言った。

いつもは短気な性格をしているが、こういうところだけは尊敬できる。

「だけど、勇氣。もう少し近くまで行かないと、怪現象かどうか分からないわよ？」
「羽心が勇氣に顔を近づけて小声で言う。」

「それはそうだけど……」

勇氣も同じ意見だが、原末先生がいる限り、これ以上は近づけそうにない。

「ふう〜、人間というのはホント、情けないねエ」

「プーカ、出ちゃ駄目だつて」

プーカが、勇氣の胸ポケットから飛び出した。

勇氣はプーカを捕まえると、慌てて原末先生から離れた。

「おい、何するんだヨ」

「それはこっちのセリフだよー」

「せっかく、頼りないキミ達の代わりに、」

オイラが怪現象かどうか調べてあげようと思ったのにサ」

「えっ？」

勇氣が手を緩めると、プーカは再び宙に浮かんだ。

「プーカ、どうやって調べるっていうのよ？」

傍にやってきた羽心が首を傾げながら尋ねる。

すると、プーカは呆れ顔で溜息を漏らした。

「ふう〜。キミ達、オイラの羽は何のためについていると思ってるんだイ？」

そう、空を飛ぶためだよ。身体もキミ達より小さいし、頭もキミ達よりイイ。

つまり、オイラは誰にもバレずに温泉の近くまで行く事ができるんだ」

「確かに、そう言われればそうかもしれないわね……」

「頭がいいのは関係ないと思うけど……」。

って言うか、飛んで行って方が一誰かにバレたらどうするんだよ？」

周りには大勢の人達がいる。

皆、スマホで写真や動画を撮っているのだ。

「おいおい、オイラを誰だと思ってるんだイ。妖精族の王子だよ。」

見つからないように、ちゃ〜んといい道具を持っているに決まっているだろ」

「道具？」

妖精族の王族に伝わる透明になれるマントとかだろうか？

「これさえあれば、絶対に誰にもバレないゾ！」

そう言っつて、プーカはポーチの中から、葉っぱで作った『傘』を取り出した。

「ええつと、それをどうやって使うの？」

「こうやって使うんだヨ」

プーカは、傘を開くと、前に向けて身体を隠した。

「ほら、これで葉っぱが浮いてるように見えるだロ」

確かに、空中に葉っぱで作った傘が浮いている。

だが、傘の下からは、しっかりとプーカの足が見えていた。

「あのねえ、プーカ、こんなものが浮いてたら余計目立ちちゃうと思うよ」

「勇気くん、キミは分かかってないねエ。」

コティングリーの森では、これで一度も人間達に見つからなかったんだゾ」

「ええつと、それは多分……」

コティングリーの森は自然が多く残された森だ。

葉っぱで身を隠せば見つけにくくなるだろう。

だが、今いる場所は舗装された山道で、葉っぱが浮いているとかなり目立つ。

「よし、キミ達はそこでお手玉でもして待っていてくれ」

「あつ、ちよつと！」

勇気は慌てて止めようとしたが、プーカは羽をパタパタと動かしながら、

警察官が立っている方へと飛んで行ってしまった。

「お手玉って何だよ、見つかったらほんと大変な事になっちゃうんだぞ」

「その時は、人形型の小型ドローンですって言い張るしかないわね」

「あのねえ」

プーカもプーカだが、羽心も羽心だ。
しかし、こうなったらプーカに頼るしかなかった。

3 — 起こり始めた異変

「はあ、はあ、着いた！ こ、これが温泉？」

「じゃが、少々障害が見受けられるのう」

ようやく、ディアーナとチェイニーは見捨山に着き、勇気達と合流した。

確かにチェイニーの言う通り、見捨山で温泉が湧き出ていたが、大人達が立ち塞がっていた。

ディアーナはまず、勇気に事情を聞こうとする。

「勇気、何があつたか説明してくれない？」

「うん、分かった」

少年説明中……

「普段は温泉が湧かない場所で、いきなり温泉が湧いた。どこかで聞いた事があるわね」
ディアーナは勇気の説明を聞いて、ある場所で起きたある異変『東方地霊殿』と重ね合わせた。

「それで、今、何をしてるところなの？」

「今、プーカが調査に行ってるよ」

「ええ！ 見守りましょうか！ 妖精として！」

「……静かにして、ディアーナ」

プーカは、葉っぱの傘で身を隠しながら、

少しずつ山道を塞いでいる警察の方へ近づいた。

皆、温泉を見たくて、空中に浮かぶ葉っぱの傘と、

そこから出ている足には気づいていないようだ。

プーカは人々の間を抜け、そのまま温泉があるであろう方向へ向かって行った。

突然、何かが足に当たった。

プーカが傘から顔を僅かに出して確認すると、

そこにはツルツルとした石のような物体があった。

「何だこれハ……？」

プーカはその物体を指先でツンツンとつついてみる。

すると、物体が大きく揺れ動いた。

それは、野次馬の中にいたおじいさんの頭だ。

「どうして葉っぱが宙に？」

おじいさんは宙に浮かぶ葉っぱを見て、目をパチクリさせていた。

「やばー！」

プーカは慌てて葉っぱで身を隠したまま逃げ出す。

だが、今度はおじいさんの近くにいた原末先生の顔が迫ってきた。

「うわッ！」

「ぬおおお！」

プーカは原末先生の頭を踏み台にして、さらに逃げる。

原末先生は驚きながらも宙に浮かぶ葉っぱを目で追うが、

プーカは既に野次馬の中に紛れ込んでしまっていた。

「な、何だったんだ、今のは……？」

おじいさんと原末先生は、キョトンとした表情でプーカが飛んで行った方向を眺めていた。

「……………」

その時、勇氣、羽心、ディアーナ、チェイニーの鼻にツンとする刺激が走った。

硫黄の臭いが急に強くなったのだ。

ディアーナはこの場にアプリルがいなくてよかったアプリルは狼の獣人なので、嗅覚が鋭い、と思った。

「風のせいかな？」

勇氣はそう思うが、風は全く吹いていない。

「おおお、これはどういう事だ？」

「原末先生、どうしたんですか？」

すると、野次馬の中で動画を撮っていた原末先生が声を上げた。

勇氣、羽心、デアーナ、チェイニーは傍に歩み寄る。

「あそこを見ろ！ アイドルの月村レーナちゃんがいるぞー！」

「誰？」

月村レーナというのは、大人気のアイドルグループのメンバーだ。

勇氣と羽心は、何故そんなアイドルがここにいるのか不思議に思いながら、

原末先生が見ている方向を見た。

デアーナとチェイニーは全く知らないため、ぼかーんとしていた。

だが、そこには、普通のおばさんが立っているだけだ。

勇氣達は周りを見るが、月村レーナなどどこにもいなかった。

「先生、レーナちゃんなんかいないわよ」

「大体、アイドルがこんなところにいるわけじゃないですよ」

勇氣達がそう言うと、原末先生が顔を向けた。

「んん？ ここにも月村レーナちゃんがいるじゃないか！」

原末先生は、何故かデアーナを見てそう言った。

「ちよつと、あたしは、その、月村なんとかじゃないわよ！」

「何言ってるんだい。どう見ても月村レーナちゃんじゃないか！」

「どうなってるんだ？」

勇気が戸惑っていると、野次馬の中にいた制服姿の女子高生が傍に駆け寄ってきた。

「あの、菊山淳司君ですよね？」

「へっ？」

菊山淳司というのは、今一番人気のある若手俳優の名前だ。

「私、ファンなんです！ 握手してください！」

「ほへっ、あの、その？」

女子高生は勇気と握手をしようとする。

勇気は戸惑いながら、女子高生から離れた。

見ると、周りの人達もおかしな事を喋っていた。

「俺、君の歌、毎日聞いているんだ！」

「私、あなたの映画見に行きました！」

「きやく、憧れのあなたにこんなところで会えるなんてびっくりだわ！」

人々は周りにいる人達を見て、興奮しているようだ。

「何なのじゃ、これは……」

「分からない。だけどこれは普通じゃない！」

勇気達はますます戸惑う。

すると、そんな四人の下にプーカが戻ってきた。

「大変だゾ！」

プーカは葉っぱの傘で身を隠すのも忘れて、勇気達の方へ一直線に飛んできた。

「プーカ、みんなにバレちゃうだろ！」

「そんな事言ってる場合じゃない！」

「どういう事？」

「温泉の傍に、罅があつたんだ！ あの×印状の罅が！」

それは、邪鬼が作り出した罅だ。

「……そうか」

チエイニーの顔が険しくなる。

羽心は原末先生達を見た。

「勇気、臭いのせいよ。先生達がおかしくなったのは臭いが原因なのよ！」

硫黄のような臭いが強くなった直後、原末先生達は、

周りの人々がアイドルや憧れの人物に見えるようになった。

紛れもなく、これは怪現象の影響だ。

このままでは大変な事になる。

「急がなきゃ、間に合わなくなる！」

「ゆくぞ！」

勇気とチエイニーは、慌てて駆け出した。

「かぜのせいはいよ、わがこえにおうじ、このものたちをあくむよるときはなちたまえ！」

Breeze Care

デイアーナは風の精霊を呼び出し、優しい風を吹かせて硫黄を吹き飛ばす。

これで何とか幻覚は治まったが、もちろん、これだけでは解決しない事は知っていた。

デイアーナは双剣に手をかけ、素早く駆け出した。

「おい、どこに行くんだ？」

「家の書齋よ。怪狩りに行くつもりなのよ！」

羽心はそう言いながら、ふと何かを思うと、プーカの方を見た。

「プーカ、あなたにお願いがあるの！」

「お願い？」

羽心は真剣な表情になると、プーカが提げている王様のポーチを見つめた。

4 — 羽心の決断

家へ帰ってきた勇氣と、ディアーナ、チェイニーは、書齋に駆け込んだ。

勇氣は太陽と月のグローブを両手に嵌めると、壁に近づき、時のトンネルを開こうとした。

すると、羽心が部屋に駆け込んできた。

「ちよつと待つて！」

「羽心。だから君は——」

「私も行くわ！ 私もこの町を守りたいの。」

この部屋で勇氣の事を待つているだけなのはもう嫌なの！」

羽心は勇氣をじつと見ている。

「だけど……」

勇氣は、羽心を危険な目には遭わせたくない。

何より、二人は少しずつ仲の良さが戻ってきていたが、それでもぎこちなさは残っていた。

「どうして、あの子を連れて行きたくないの？」

「だって、羽心はキユウじゃないから、足手まといになるかもしれないだよ！」

確かに羽心は怪奇現象に詳しいけど、キユウの方が……」

「キユウキユウと、五月蠅いわね。」

いい加減にしなさい！ あの子の代わりになれるのは、羽心しかないのよ！」

「羽心は、キユウの代わりになんか出来ないよ！」

勇気とディアーナは言い争っている。

「羽心とプーカはその様子を見て、少し呆れていた。」

「時空……」

勇気は壁に向かって手をかざして、呪文を唱えようとした。

だが、羽心が駆け寄り、後ろから勇気の肩を掴んだ。

「待って！」

「羽心は連れて行かないってば！ ここで待ってて！」

「そうじゃなくて、今回の怪現象をどんな怪が起こしたのか分かってるの？」

「え？」

「そう言われれば、そうじゃな」

勇気はその事をすっかり忘れていた。

怪現象を起こした怪が分からなければ、時空を超える事はできない。

「ええっと、今回の怪は……」

硫黄のような臭いによって、今見ている人が別人の姿に見える怪現象を起こす怪。そんなものは全く分からなかった。

「くつ、ボオーツとして夢を見たら分かるかもしれないのに」

「えっ、そうなの？」

「じゃあ、今すぐボオーツとしなさいよ！」

「今から？」

「早くしないと大変な事になっちゃうでしょ！」

放っておいたら、町中がパニックになってしまう。

「わ、分かったよ。ええい、こうなったら——！」

勇気は夢を見るために、ボオーツとしてみる事にした。

「ボオーツ〜」

口を開け、全身の力を抜く。

「ボオーツ〜、ボオーツ〜」

さらに脱力する。

だが、意識すればするほど逆にボオーツとなどする事ができなかった。

「ううう、やっぱり無理だよ！」

「当然じゃろう。意識して無意識になる事など、不可能じゃからな。

儂も予知ができれば、勇氣の力になれたのじゃが……」

チエイニーの言う通りだ。

彼は予知能力を持っていたようだが、今は力をほとんど使えないようだ。

このままでは、怪の手がかりを得る事ができない。

「どうしよう……」

勇氣は頭を抱えてしまった。

そんな勇氣と羽心の前を、プーカが飛んでいる。

「情けないねエ。キミ達、どんな怪なのか分からないのかイ？」

「ああ、だから困ってるんだろ」

勇氣の言葉に、プーカはにやりと笑った。

「オイラはねえ、今回の怪現象が、どんな怪が起こしたもののなのか分かるヨ」

「えっ？」

「プーカ、ホントに分かるの？」

「ああ、オイラは妖精族の中で一番怪に詳しいからネ」

「ふーん。で、どんな怪なの？」

「——これは恐らく『地底人』の仕業ダ」

「知ってるわ。それって、地底に住んでるあの地底人って事よね？」

「ああ、あいつらは人を捕まえては食べる凶暴な奴らだ」

「人を食べる？ そんなのって！」

勇気は思わずゾツとして、プーカからさらに話を聞こうとした。

一方、羽心は何を思ったか、部屋を見回した。

そして、傍にあつたりユツクを手に取ると、部屋に置かれていた物を次々に入れていった。

「羽心、何してるんだよ？」

「さあ、行くわよ！」

「行くって？」

「さつきも言ったでしょ。私も怪狩りに行くわ！」

羽心は隠し持っていた靴を見せた。

「だから、羽心は連れて行かないってば！ そもそもグローブは渡すつもりはないから！」

グローブを装備するか、異次元の旅人でなければ、時のトンネルを潜る事はできない。勇気は、グローブを守るかのように両手を後ろに隠した。

「そんな事しなくても、それは奪わないわよ」

羽心は微笑むと、ポケットの中からある物を出した。

それは、星のグローブだ。

「どうしてそれを？」

星のグローブは、プーカが王様のポーチにしまっていたはずだ。

勇気はプーカの方を見た。

「いやあ、羽心チャンに貸してくれて頼まれてね」

「貸しちゃ駄目だよ！」

「どうして？」

「だって、羽心を巻き込みたくないんだもん！」

「勇気クン、彼女にも手伝ってもらった方がいいゾ。」

キミは少しは勇気があるみたいだけど、今いち頼りないからねエ」

「頼りないって……」

「何よりも羽心はやる気満々だもの。やっと一緒に戦えるんだもの！」

そうじゃなかったら、羽心は勇気のところに来ないわよ！」

そんな事ない、と勇気は言おうとしたが、

前回、キユウがいない状態で怪狩りを行い、散々な目に遭った。

それを思い出すと、否定する事ができなくなってしまう。

「勇気、これはあなただけの問題じゃないの。」

私にも特殊能力がある、って邪鬼が赤文字で言っていたわ。

それはつまり、私にもこの町を守る使命があるって事よ」

「どんな能力なのかは分からないけど、役に立つ事は確かだと思うから！」

「それに……直接ではないとはいえ、私はキユウさんを消してしまった。」

だから、私……ディアーナさんが言っていたみたいに、キユウさんの代わりになりたいから」

「それは……」

羽心はどうしても、キユウを消した責任を取りたいようだ。

ディアーナとチェイニーが許したとはいえ、それでもまだ心残りがあるようだ。

女性二人の迫力に、勇気は言葉が詰まる。

「ここまで来たら連れて行くしかないと思うネ」

プーカはそう言いながら、勇気の傍に飛んできた。

「まあ、安心しろ。オイラも付いて行ってあげるから」

「お主の幼馴染がこれだけ真剣に頼んだのじゃ。断る理由など、存在せぬ」

「プーカ、チェイニー……」

「ちなみに、王様のポーチはグローブと同じ素材だから、

オイラはグローブがなくても時のトンネルを潜れるヨ。じゃあ、よろしく
プーカはそう言うのと、勇気の胸ポケットに入った。

「仕方ない……」

羽心の決意は、本気だった。

こうなったら、同行させる以外に選択肢はない。

「僕から離れちゃ駄目だからな！」

「分かっているわよっ！」

勇気は諦めると、壁に近づき、左手をかざして呪文を唱える事にした。

「カオス・ゲート
時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

「行くよー！」

勇気、ディアーナ、チェイニーは、光の渦の中に飛び込む。

「よし、私も……」

羽心は星のグローブを嵌めようとした。

だが、意気込みとは裏腹に、手が震え、なかなかグローブを嵌める事ができなかった。
相手は凶暴な地底人だ。

正直、行くのは怖い。

だけど。

「ああもー！」

羽心は震える手の甲をもう一方の手で叩いた。

「私だって、できるんだから！」

そう言うのと、羽心は星のグローブを嵌めた。

次の瞬間、勇気を振り絞って、渦の中に飛び込んだ。

「きやああああああ！」

羽心は、光のトンネルを足をばたつかせながら飛んでいた。

目が回り、頭が回る。

スカイダイビングなんてやった事はないが、もしやったらこんな感じかもしれない。

羽心は混乱しながらも、そんな事を考える。

「きやああ！ 何なのよー!!」

やがて、光のトンネルの奥に、岩場が見えてきた。

羽心は勢いよく地面に尻もちをついた。

「あいたた……」

そんな羽心の傍に、勇気、ディアーナ、チエイニーがやって来た。

「最初はやっぱりそうなるわよね」

「なんか、スカイダイビングをやったみたいだったんだけど」

「ああ。僕も最初はそう思った。まあそのうち慣れるよ」

勇気が先輩風を吹かす。

羽心はそんな勇気に少しイラっとしたが、それよりも周りの景色が気になった。

「ここは、どこなの……？」

周りは岩だらけだ。

四人は、どこかの岩場の一角にいるようだ。

すると、勇気の胸ポケットから顔を出していたプーカが答えた。

「ここは、数万年前のとある山の中だネ」

「数万年前？ えええ!!」

5 — 地下の町

「勇氣は今まで色んな時代に行ったが、数万年も前の時代に来たのは初めてだった。

「地底人はそんな昔からいたの？」

「ああ。人間がまだ文明すら築いていない時から、あいつらは存在していたんだ」

「プーカは勇氣の胸ポケットから飛び出すと、前方を見つめた。

「恐らく、地底人はあの奥にいろ」

「えっ？」

「勇氣達が顔を向けると、そこには洞窟があつた。

「あいつらは真夜中になると、あそこから時々地上に出て来るんだヨ」

「地上に？ 一体どうして？」

「人間を捕まえるためダ。人間を食べるって言ったただロ」

それを聞き、勇氣、羽心、デИАーナ、チエイニーの表情が一気に強張る。

「プーカは怯える四人をよそに、宙に浮きながら鼻をヒクヒクさせた。

「うん。今のところ臭いはないみたいだナ」

「プーカ、何してるのよ？」

「ああ、硫黄の臭いをチェックしてるんだ。

あいつらはあの臭いで、ターゲットとなった人間に、

自分達の姿を『好きな相手』や『憧れの相手』のように思わせるんだ。

そして油断したターゲットを、自分達の棲み処に連れて行くんだヨ」

「それって……」

見捨山で目撃した光景だ。

原末先生達は、周りの人々が好きな人や憧れている人に見えてしまい、混乱してしまつたのだ。

「やはり、あれは幻覚だつたつてののか」

「じゃあ、もし見捨里市に地底人が現れたら……」

×印状の罅が広がり、地底人が見捨里市に来るようになったら、

怪の力によつて町中の人々が幻覚を見て地底人が襲つてきても逃げる事も身を護つたりもせず、

アイドルや俳優だと思つて近づいて、全員捕まってしまうだろう。

「『そんな事、絶対にさせないわ!』」

「僕だつて、そんな事はさせない!」

「僕も仕事じゃからな、手は抜かん!」

羽心とディアーナは声を上げ、勇気とチエイニーも力強く言う。

「行こう。洞窟の奥へ！」

勇気、羽心、ディアーナ、チエイニーは覚悟を決めると、

地底人を倒すために、洞窟の中に入って行った。

洞窟の中は、暗くジメジメしていた。

地面も壁も石や岩がむき出しになっていて、慎重に歩かないと転んでしまいそうだ。

先頭を歩く勇気は、懐中電灯を持っていた。

先ほど書齋で羽心がリュックに詰め込んだ物の中に、懐中電灯があったのだ。

羽心は他にも色々な物をリュックに入れていられるらしいが、

どんな物があるのかは教えてくれなかった。

勇気はそんな羽心に戸惑いながらも、懐中電灯で洞窟を照らしながら奥へ進んで行った。

ちなみに、ディアーナには暗視があるので問題はない。

「洞窟に入って随分経つけど、まだ着かないの？」

後ろを歩く羽心が、勇気の胸ポケットの中にあるプーカに尋ねた。

下っているのか上っているのかよく分からない。

だんだん不安になってきたようだ。

「どれぐらい歩くのかは、流石のオイラにも分からないネ。

だけど、あいつらはもつともつと奥にいるはずだ」

「どうしてそんな奥に？」

洞窟の奥で暮らしていたら人間を捕まえに行く時に不便なのではと、勇氣は思った。

「決まっているだ口。あいつらは、地上の世界とは別の『地底の王国』に住んでいるんだ
 ㊦」

「地底の王国？」

「キミ達は『地球空洞説』っていうのは知ってるかい？」

「え？ 何それ？」

「確か、世界の不思議の本に載ってたわねえ……」

羽心は、以前本で読んだ事があった。

く地球空洞説く

地球空洞説とは、地球の内部が空洞になっていて、

そこにもう一つの世界が広がっているというものである。

そこには、地球の表面に住む我々の世界と同じように、

植物が生い茂り、動物が暮らしているのだという。

さらには、文明が築かれていて、

人間のような存在がその世界を支配しているとも言われている。

19世紀から20世紀にかけて、

アジアのどこかに『アガルタ』という地下都市が存在するという噂が広がった。

また、イギリスの作家、ジェームズ・ヒルトンは、小説の中で、

アガルタと同じように地下にある『シャングリラ』という王国を紹介し、

これも本当にあるのではと噂されるようになった。

一説には、地上のどこかに、地底の王国へと繋がる入り口があると言われている。

「確か、ハレー彗星を発見したエドモンド・ハレーも、地球空洞説を発表した事があったはずよ」

「そう、アンダーダークと同じなのね」

「だけど、地底人はほんとにそんな地底の王国に住んでるの？」

「勇気が尋ねると、プーカは大きく頷いた。

「ああ、地下に町があるらしい。」

もつとも、キミ達のような高度な文明を築いているわけではないけどネ。

どちらかというとオイラ達妖精族のような素朴な文明に近いかな。

まあ、せいぜい捕まって食べられないようにする事だネ」

その言葉に、勇気、羽心、デИАーナは改めて地底人に恐怖を感じた。

チエイニーも油断は決してしないと心構えをする。

「と、とにかく進もう」

「え、ええ……」

四人は気を引き締め直すと、洞窟をさらに進んで行った。

「えっ？」

長い坂を下りた瞬間、前方にぼんやりとした光が広がっているのが見えた。

「あれは何だ？」

「光、よね……？」

勇気と羽心が食い入るように見つめると、プーカが胸のポケットから飛び出した。

「どうやら着いたようだね。恐らく、あそこが地底の王国だ」

「あそこが……」

勇気、ディアーナ、チエイニーは緊張が高まる。

そんな中、羽心は背負っていたリュックを降ろし、何かを取り出した。

「ようやく出番のようね……」

そう言つて、羽心はリュックから『ヘッドライト』を取り出した。

「羽心、それって書斎にあった？」

「ええ、地底人と戦うために持ってきたの」

「戦うために？ あああ！」

そう言えば、怪の弱点が何なのか全く考えていなかった。

「どうしよう！ 弱点が分からないと倒す事ができないよ？」

勇気が焦ると、羽心がリュックを突き出した。

「そのためにこれを持ってきたのよ」

リュックの中には、書齋にあったペンライトや、

スイッチを押すと全身がピカピカと光るロボットなどが入っていた。

「プーカから怪の正体が地底人って聞いた時、武器が必要だと思ったの。」

地底人っていうぐらいだから、地底に住んでるでしょ。だったら『光』に弱いと思っ

たのよ」

「確かにそうかも……」

「おお、羽心チャン、鋭いネ。あいつらの弱点は光だ。」

洞窟から出てくるのも暗くなった真夜中だけだからネ」

(ま、あたしは光魔法、ちよつと使えるんだけどね)

どうやら、羽心は勇気に言われなくても怪の弱点である武器を用意していたようだ。

「だけど、いくら光るからってロボットのオモチャは役に立たないと思うよ」

「そ、それは、転ばぬ先の杖よ。世の中、何が起きるか分からないでしょ」

「はあ……」

勇気は自分が持つている懐中電灯を見る。

これも羽心が事前に用意した物だ。

もし懐中電灯がなかったら、真つ暗な洞窟を進まなければならず、途中で転んで怪我をしていたところだろう。

勇気は羽心の機転に感心すると同時に、自分の事を情けなく思う。

だがその時、羽心を見てある事に気づいた。

羽心の手が震えていたのだ。

たとえ武器を用意したとしても、相手は凶暴な怪だ。

強がってはいるが、恐怖を感じているのだろう。

勇気も最初の怪狩りではただただ怯えていた。

相手はメデューサだった。

あの時は訳も分からず夢中で戦ったが、思い出すたびに今でも震える。

羽心がここまで付いて来ただけでも十分勇気のある行動だったのだ。

「羽心、後は僕に任せて」

勇気は優しい表情でそう言った。

すると、羽心は首を横に振った。

「大丈夫。私だつてできるんだから」

「だけど……」

羽心が無理をしている事が、勇気には手に取るように分かる。しかしここで言い争っている場合ではない。

恐らく、羽心はちゃんと覚悟を決めてここにいるのだ。

「分かった……」

勇気は静かにそう言うと、坂を下りる事にした。

「羽心、震えてるの？ 武者震い？」

「儂らは、人間の気持ちなど理解できぬな……」

「どうしたの、二人とも？ 早く行くよ？」

「はーいー！」

ディアーナとチェイニーはしばらくの間、止まっていたが、勇気に言われて歩き出した。

「ここが、地底の王国……」

四人が坂を下りると、広い空間に出た。

そこには、文字通り町があった。

岩で作られた四角い建物がいくつも見える。

ビルのような大きな建物はなく、どれも小屋のような小さな建物ばかりだ。

壁には光藓が生えていて、それがこの空間をぼんやりと照らしていた。

小屋以外の構造物はないようで、地面も岩がゴツゴツとしている。

プーカの言う通り、人間のような高度な文明を築いているわけではなさそうだ。

「地底人は何処いずこじゃ?」

勇氣達は目を凝らして、辺りを見た。

しかし、地底人の姿はどこにもない。

勇氣、羽心、デイアーナ、チエイニーは、恐る恐る傍にある建物に近付いた。

建物には窓らしい四角い穴があり、中を覗けるようになっていた。

勇氣達はそれぞれ懐中電灯とヘッドライトを照らし、中を覗き込んだ。

小屋の中には部屋が一つしかない。

勇氣と羽心は隅々まで光を当てるが、地底人の姿はない。

「どうなってるんだ……?」

勇氣達は他の建物の中も確認してみるが、どこも同じだった。

人間ほどではないにせよ、文明を築いているのだ。

それにも関わらず、まるでこの町は廃墟のようになっていた。

「(イイ)には、地底人は住んでいないんじゃないの?」

「ああ。どうもそうみたいだな」

勇氣、羽心、ディアーナ、チエイニーは、

どうなっているのかプーカに尋ねようとした。

すると、建物の角から声が響いた。

「おい、ここにきてくれ！」

プーカの声だ。

いつの間にか、別の場所を見回っていたようだ。

「プーカ！」

地底人に襲われたのかもしれない。

三人は慌てて建物の角へと走った。

だが、角を曲がった瞬間、勇氣達は目を大きく見開いた。

そこには……無数の骨が散らばっていたのだ。

6 — もう一人の勇氣

「きゃあー！」

羽心は思わず目を背ける。

書齋にある骨格標本は平気だが、本物を見るのは初めてだった。

捕らえられた人間の骨なのだろうか？

しかし、勇氣は転がっていた骸骨を見て違和感を抱いた。

大きさは人間の骸骨と同じぐらいだったが、明らかに動物の頭のような形をしていたのだ。

「これは……？」

周りを見ると、他の骨も同じような形をしていた。

「これは、地底人の骨のようだね……」

プーカが骨を見ながら言う。

「これが全部、地底人の骨？」

「ああ、どうやら仲間を食糧にしたようだ」

「そんな……」

勇氣はその言葉に唾然となる。

「それって、共食いつて事？」

羽心が尋ねると、プーカは頷いた。

「恐らく、この辺りの人間が少なくなつたんだらう。

地底人は他の動物も食糧にするけど、それもいなくなつたんだヨ」

「だから、地底人は仲間を襲い、食糧にしたつてわけね」

「それで、廃墟みたいになつてゐるつて事……？」

勇氣は呆然としながら町を眺めた。

町の大きさから推測すると、100体ぐらいがここには住んでいたはずだ。

プーカは、地底人は凶暴だと言つていた。

彼らは食糧がなくなつた時、仲間と助け合うのではなく、争つてしまつたのだ。

「じゃあ、ここにはもう地底人はいないつて事なのか？」

「そうだとしたら、何故ここに来てしまつたのだらう？」

その時――

勇氣、ディアーナ、チエイニーの鼻を、強烈な臭いが刺激した。

「これは――」

「まずいわ、あれを嗅いだら――」

三人は一瞬で険しい表情になると、鼻と口を塞いだ。山で嗅いだ、あの硫黄のような臭いだ。

しかもあの時よりも強烈な臭いを漂わせている。

「羽心、鼻と口を塞……」

勇氣は羽心にも顔を向けた。

すると、羽心は鼻と口を押さえる事なく、少し離れた場所を見ていた。

「羽心！」

勇氣は驚きながらその方向を見る。

「あああ！」

そこには、人影が立っていた。

人間と同じぐらいの大きさが、全身が毛で覆われ、手は異常に大きかった。

その顔は、モグラそっくりだ。

「地底人だ!!」

地底人は毛に半分隠れていた目をギョロりとさせた。

「羽心、光を当てるぞ！」

勇氣は羽心にそう指示を出し、地底人に懐中電灯の光を当てようとした。

しかし、そんな勇氣の前に、羽心が何故か立ち塞がった。

「勇氣、いつの間にかそんなところに移動したの？」

「えっ？」

羽心は、真之勇氣地底人の方を見ていた。

「あ、明かりがあると眩しいわよね」

ヘッドライトの光を手で遮る真之勇氣地底人を見て、羽心は慌ててライトを外すと、明かりを

消した。

そして、そのまま真之勇氣地底人の方へと走って行った。

「ちよつと、羽心！」

「幻覚を見てるんだ！」

羽心は地底人が発する硫黄のような臭いをまともに嗅いでしまった。

そのせいで、地底人が勇氣に見えていたのだ。

「羽心、しつかりするんだ！」

地底人勇氣は羽心に駆け寄ると、彼女の腕を掴んだ。

彼を見た羽心は、悲鳴を上げる。

「僕だよ！ 勇氣だよ！」

「来ないで！ 地底人！」

「わっ！」

羽心が暴れ、勇氣は思わず手を離す。

そして、振り払われた衝撃で、懐中電灯を落としてしまった。

懐中電灯の光が、落ちた衝撃で消えた。

「何するのよ!!」

「落ち着け、幻覚を見ていただけじゃ」

思わず双剣を抜くディアーナを、チエイニーが何とか制止させる。

「とはいえ、光源がなければ地底人には立ち向かえぬ。何か手段は無いか……」

「あたしに任せて!」

ディアーナは何かを閃き、勇氣達のところに走った。

「儂も向かう! 一人で行くでないぞ!」

「そんな!」

勇氣は慌てて懐中電灯を拾い、スイッチを押すが、全く反応がない。

懐中電灯を落としたせいで、壊れてしまったからだ。

「助けて、勇氣!」

羽心は逃げるように、真之勇氣地底人の方へと走って行く。

幻覚を見ている彼女には地底人が勇氣に、勇氣が地底人に見えているのだ。

「羽心、そっちは僕じゃないってば!」

「やばいゾ。このままじゃ羽心チャンが連れ去られてしまウ」
町はかなり広い。

連れ去られてしまったら、捜すのに時間がかかる。

その間に、もし地底人に羽心が食べられてしまったら……。

「羽心！」

勇気は懐中電灯を諦め、羽心の下へ駆け出した。

だが、岩や石だらけの地面はぼんやりとしか見えず、上手く走れない。

「うわー！ うわああー！」

勇気はバランスを崩し、その場に倒れてしまった。

「いざという時に頼りにならないんだからー！」

「あの小娘は、勇気と逆じやのう」

ディアーナとチエイニーは、羽心の方に向かって走った。

彼女を幻覚から救い、共に戦わせるために。

一方、羽心はもう一人の勇気の下へ辿り着いた。

「勇気、一旦逃げるわよー！」

羽心は目の前に立っている『勇気』の腕を掴むと、その場から離れようとした。

その時、前方の壁に×印状の罅があるのが見えた。

「勇氣、罅よー！」

羽心は隣にいる『勇氣』に叫ぶ。

全ての元凶は、あの罅なのだ。

しかし、隣にいる『勇氣』は、何故か罅を見て喜んでいた。

「勇氣……？」

羽心はふと、『勇氣』の腕を掴んだ手に違和感を抱いた。

「何だか……毛むくじやらなんだけど……」

羽心は、ゆっくりと隣にいる『勇氣』の腕を見た。

「ガアアアアアッ！」

雄たけびのような声を上げ、モグラのような顔をした怪物——地底人が口を開いた。

「きゃあああー！」

我に返った羽心は、咄嗟に持っていたヘッドライトのスイッチをつけようとしたが、

地底人がそれを手で叩き落とした。

「きゃあー！」

「羽心！」

勇氣は立ち上がり、再び走り出す。

だが、間に合いそうにない。

地底人は雄たけびのような声を上げながら、さらに口を大きく開いた。羽心がまさに、食べられそうになった時だった。

「ひかりのせいれいよ、やみをうがつそのかがやきによりてわがてきをやきころせ!

B r i g h t B o m b

ディアーナが光の精霊を召喚し、光速で地底人にぶつけたのだ。

光は何よりも速いため、遠くからでも確実に攻撃を与える事ができる。

これで、時間稼ぎをする事に成功した。

「羽心!」

勇気は羽心の傍まで駆け込むと、地面に落ちていたヘッドライトを取る。

同時に、ディアーナとチェイニーも到着した。

「落ち着いて! 地底人を倒すのよ!」

「み、みんな……」

ディアーナが強く叫んで混乱している羽心を落ち着かせる。

そうだ、地底人を倒して見捨里市を守るんだ……と羽心は混乱から立ち直る。

「よし、行くわよ!」

「ええ!」

「ひかりのせいれいよ、やみをうがつそのかがやきによりてわがてきをやきころせ!

B r i g h t B o m b

ディアーナは光の精霊を呼び出すと、

光の精霊は光の玉になって地底人目掛けて体当たりし、激しい爆発を起こす。

勇氣、羽心、チェイニーはその隙に地底人に接近した。

「さて、儂も力を振るわせてもらおうかのう！」

そう言つてチェイニーは自身の血液からメイスを作り、地底人に思いつき振り回した。

メイスは命中し、地底人は吹っ飛ばされる。

「……自分の血から武器を作るの？」

羽心はチェイニーの戦闘スタイルに呆然とした。

すると、地底人が立ち上がり、腕を大きく振り下ろした。

「かぜのせいはいよ、きたりてたてとなり、われにとびくるものをそらせ！ Wind

Guard

ディアーナは風の精霊を呼び出し、風の障壁を張つて攻撃を防ごうとする。

だが、地底人の腕力は凄まじく、障壁をいとも簡単に破壊し、腕は振り下ろされた。

「嫌ああああ！」

瞬間、羽心は激しく身体をよじり、その場に倒れた。

衝撃で、リュックの中に入っていた物が地面に散乱する。

その中には、ロボットのオモチャもあった。

地面に転がった拍子にスイッチが入り、ロボットが音を立てて光った。

ロボットから大きな音が鳴り響き、赤、青、緑と、カラフルな光が点滅する。

「グギャハガツ!!!」

それを見て、地底人は慌てて羽心から離れた。

どうやら、このような光や音を見た事がなく、パニックになっているようだ。

「今じゃ、勇気!」

とどめを刺すなら、今だ。

勇気はチェイニーの掛け声と共にヘッドライトのスイッチをつけると、光を地底人に向けた。

「ギャガグア!!!」

地底人の身体から黒い煙が漏れ出す。

黒い煙は散っていき、やがて地底人は消えた。

「羽心、大丈夫か!」

「ゆ、勇気……」

勇気は、戸惑う羽心に手を差し伸べる。

羽心はそんな勇氣を見ながら、その手を握り締めた。

「ディアーナとチェイニーも武器をしまい、二人の様子を微笑ましく見守る。壁にできた罅が、消えていく。」

四人はそんな罅を、ただじつと見つめていた。

「温泉が湧いたという騒動は、なかった事になったのね？」

「山も元通りになっっているわね……」

見捨里市に戻ってきた勇氣達は、町並みを見ていた。

皆、いつもと同じように、夕方のひと時を過ごしている。

「ああ。怪が消えれば、その怪が起こした全てはリセットされるからね」

「覚えているのは、特別な力を持った者だけ……」

羽心がそう言うのと、勇氣は小さく頷いた。

「それにしても、地底人が勇氣クンに見えちゃうなんてネ」

プーカが宙に浮かびながら、羽心に言った。

「だけど、どうして僕だったんだ？」

勇氣が首を傾げて、ふと羽心の方を見た。

「確か、地底人が見せる幻覚は——」

「あああ、それはもういいから！」

羽心は急に顔を真っ赤にすると、手をぶんぶんと振った。

「そんな事より！ 勇気、気を抜いちや駄目だからね！」

「あ、ああ、それはもちろん分かってるよ」

勇気は険しい表情になった。

これで終わりというわけではない。

「あいつはきつと、この町をまた……」

勇気はそう思うと、拳を強く握り締めた。

それを見て、羽心も真剣な顔つきになる。

邪鬼は怪を役使して、必ず、この見捨里市を襲って来るだろう。

(その時、私は……)

羽心は勇気と同じように、拳を強く握り締めた。

ディアーナとチェイニーも、ジャネットの仕事のためにと気を引き締めるのだった。

とある場所。

真夜中の暗闇の中に、一人の人物がいた。

黒い着流しが風になびいている、片目を包帯で覆った少年——邪鬼だ。

邪鬼の目の前には、巨大な影が立っていた。

獰猛な獣のような影をしていて、邪鬼を威嚇している。

そんな影を見て、邪鬼は優しく微笑んだ。

「君にも力になって欲しいんだよ」

次の瞬間、邪鬼は巨大な獣のような影を睨んだ。

すると、獣のような影は急に大人しくなった。

「いい子だね」

邪鬼はにやりと笑う。

しかし、すぐに険しい表情になった。

「それにしても、まさか真之勇氣達がここまでやるとはね。

……だけど、これ以上はもう邪魔をさせないよ。

魔術師キャスターの英霊スライが与えた、この傷の分も、お返しさせてもらおうよ。ふっふっふっふ」

邪鬼はディアーナによって負った傷がある右腕を撫でる。

暗闇の中に、邪鬼の不気味な笑い声が響き渡った。

平安の恐怖

1 | 夜のジョギング

夜、一人の若い女性が道路を走っていた。

ピンク色のトレーニングウェア姿で、ピンク色のスパッツを穿いている。

キャップもシューズもピンク色だ。

やがて、公園にやってきた女性は、ベンチの前で止まった。

「ふう〜」

大きく息を吐き、両手を上へ伸ばし、アキレス腱を伸ばす。

この場所で5分ほど休憩するのが彼女のルーティンになっていた。

夜の公園は、静まり返っていた。

大きな公園なので、犬の散歩をしている人や、

同じようにジョギングをしている人をよく見かけるが、今夜はいないようだ。

(あと2kg、痩せなくっちゃ)

女性は、自分のお腹を指でつまむ。

ジョギングを始めて二ヶ月、毎日一時間ほど走る。

おかげで3kg痩せた。

目標の5kgダイエットまで、もうひと踏ん張りだ。

女性は、ふとポケットにしまっていたスマホを取り出した。

画面には、若い男性がテニスラケットを持って微笑んでいる写真が写っている。

(5kg痩せたら、山下君に告白するんだ……)

女性は、大学で彼と同じテニスサークルに入っている。

知り合って半年以上が経つ。

いつの間にか彼の事が好きになっていた。

(頑張らなくっちゃ)

女性はやる気になると、スマホをしまい、ジョギングを再開しようとした。

「ヒョー ヒョー」

突然、どこからか不気味な音が聞こえてきた。

「えっ?」

女性は一瞬、それが何なのか分からなかった。

だがすぐに、生き物が発する鳴き声だと気づいた。

(だけど、他の鳴き声なの?)

犬とも猫とも違った。

鳩やカラスだろうか?

「ヒョー ヒョー」

また鳴き声が聞こえた。

今度は、先程よりはつきりと聞こえる。

(鳩とかカラスなんかじゃない……)

鳴き声は、地を這うような低い唸り声だ。

今までこんな鳴き声は聞いた事がない。

女性は何だか怖くなる。

早くここから立ち去った方がいいと思い、慌ててその場から駆け出そうとした。

その瞬間――

「ううー!」

女性は、急に寒気を感じた。

全身が震え、意識が朦朧とする。

まともに立っている事ができない。

「た、助けて……」

女性は助けを求めろ。

だが、周りには誰もいない。

「だ、誰か……」

彼女はよろよろとよろめくと、そのままその場に倒れてしまった。

一方、路地裏の建物では、ジャネットが神妙な面持ちで顎に手を当てていた。

「どうやら、また怪奇現象が起きたようですね……」

「ジャネット、それを起こしてるのはどんな怪なのよ？」

「分かりません」

「え？」

「だから、分かりません」

「どうやら、ジャネットにも怪の正体は分からないようだ。」

正体不明の怪という事だろうか。

「それはどういう事なのじゃ？ 教えよ」

「あまりにも分からない部分が多すぎるのです。だから、正体は分からないのです。」

今まではそういう特徴だからそうだ、だからこういう怪なんだ、

と分かったのですが……あまりにも特徴が分からなさ過ぎて……」

「どうやら、この怪奇現象を起こしている怪は、」

ジャネットでも事前調査できないほどお手上げのようだ。

「それで、あたし達が怪について『また』調査に行くのね？」

「お願いします……」

ディアーナとチェイニーは、怪を調査するため、路地裏の建物を出ていくのだった。

「正体が分からないのは、怪らしいといえづらいけど……」

「あの女が知らないようなら、儂らで調べるしかなさそうじゃのう」

「チェイニー、あの女じゃなくて、ジャネットだからね」

「ねえ、羽心ちゃん、『大草原の小さな本屋さん』どうだった？」

翌日の放課後。

羽心は、花恋と一緒に学校から帰っていた。

『大草原の小さな本屋さん』とは、先日花恋が貸してくれた小説のタイトルだ。

花恋が言うには、今まで読んだ小説の中でベスト5に入るお気に入りらしい。

「大草原の中で、仲良く家族で本屋さんを経営するなんて、とっても素敵な話よねえ」

「う、うん、凄くいい小説よね」

羽心は無理に笑顔を作って答えた。

(ホントは、まだ全然読んでないんだけど……)

花恋が貸してくれる本は、いつも面白いものばかりだ。

『大草原の小さな本屋さん』の小説も、借りた時はすぐに読もうと思っていた。

しかし、勇気の様子がおかしい事に気づき、その後、様々な騒動に巻き込まれてしまった。

(まさか、私が本当に怪と戦う事になるなんて……)

羽心は初めて時空を超えて怪狩りを行った。

今でも自分が数万年前の世界に行った事が信じられない。

何とか地底人を倒す事ができたが、次にいつ新たな怪現象が起きるか分からなかった。

正直、怖い。

だが、逃げるわけにはいかない。

(私だって、この町を守る一員なんだから……)

前回はほとんど役に立たなかったが、次こそは役に立ちたいと思っていた。

「羽心ちゃん？」

いつの間にか、花恋が覗き込むように羽心を見ていた。

「どうしたの？ ボォーッとしてたよ」

「え、あ、ええつと……」

考え事をしていてたせいで、道の真ん中で立ち止まってしまっていたようだ。

(こんなところでボォーツとしちやうなんて、何だか勇気みたい)
羽心は苦笑いを浮かべた。

今日、勇気は学校が終わるとすぐに帰ってしまった。

母親の仕事が休みなので、外食に行くという。

勇気の母親は看護師の仕事をしている。

夜勤もあり、毎日忙しそうだ。

たまの休みを勇気は楽しみにしていたのだ。

(口には出さないけど、勇気、お母さんの事大好きだもんね)

今頃もう出かけているかもしれない。

羽心は微笑ましく思いながら、花恋と再び歩き始めた。

すると、前方に、信じられないものが現れた。

のんびりと空を飛ぶ、プーカだ。

プーカは、自分と同じぐらいの大きさのパンを抱えるように持っていた。

「プーカ！」

羽心は思わず声を上げた。

「プーカ？」

花恋が首を傾げながら、プーカの方に顔を向けようとする。

「あああ、花恋ちゃん、ストップ！」

羽心は慌てて花恋の前に立つと、両手をぶんぶんと上下に動かした。

「羽心ちゃん、何してるの？」

「えっ、ええつと、手の運動！ あっ、ほら、そこのお花、綺麗よ！」

羽心は、プーカとは反対の位置にある家の庭を指差した。

「あっ、ほんと、綺麗ねえ」

「うんうん、お花つて癒されるわよねえ」

羽心はチラチラと、プーカの方を見る。

プーカはそのまま飛びながら道路の角を曲がり、見えなくなつた。

「花恋ちゃん、私ちよつと用事思い出しちゃつた。ここでバイバイするわね」

「えっ、用事つて？」

「それはええつと、あ、そう！」

知り合いのおばさんに犬の散歩を頼まれて、これから行かなくちゃいけないの」

「そうなんだ！ 私、ワンちゃん好きだよ。一緒に散歩したい！」

「え、えつと、その犬、凄い人見知りで、知らない人がいると一歩も動かなくなつちゃう

のよ」

「そうなんだあ」

ガツカリする花恋を見て、羽心は何だか心が痛む。

しかし、仕方がない。

「人見知りが直つたら、一緒に散歩しようね！」

羽心はそう言うのと、花恋と別れた。

（プーカのせいで、花恋ちゃんに嘘をついちゃったじゃない！）

羽心は頬を膨らませながら道路を走り、プーカを捜した。

「あつー！」

すると、前方の家の塀の上に、プーカがちよこんと座っているのが見えた。

「うくん、まさかこっちの世界にも、くるみパンがあるなんてネ」

プーカは幸せそうに微笑むと、くるみパンを一口食べた。

「プーカ、何してるのよー！」

「おく、羽心チャン。何って、散歩に決まっているだろウ」

「散歩って、外に一人で出ちゃ駄目って言ったでしょー！」

勇気達が学校に行っている間、プーカは書齋で待っているはずだった。

しかし、プーカは首を大きく横に振った。

「おいおい、オイラは妖精族の王子だよ。」

どうして人間であるキミ達の言う事を聞かなくちゃいけないんだイ？」

「あのねえ」

プーカが見つかってしまうと、現代世界に妖精がいる、と大騒動になるだろう。その事をプーカは全く分かっていない。

プーカは笑顔のまま、くるみパンを食べ切った。

「いいから、帰るわよ」

羽心はプーカを連れて帰る事にした。

その時、羽心達の方へ、勇気、デイアーナ、チエイニーが走って来た。

三人は何故か険しい表情をしている。

「デイアーナとチエイニーは仕事だろうけど、おばさんと食事に出かけたんじゃないの？」

しかし、母親の姿はない。

「もしかして、オイラ怒られるのか？」

プーカは羽心の肩に掴まると、隠れるかのように身を縮めた。

「羽心チャン、怒られないようにオイラをフォローするんだ」

「どうして私が？」

「人間も妖精も困った時には助け合うものだよ」

「まったく」

プーカは完全に勇気に怯えているようだ。

羽心は呆れながらも、小さく息を吐いた。

「私も一緒に謝ってあげるから」

プーカはやんちゃかつ無駄にプライドが高いが、悪い妖精ではない。

邪鬼を倒そうとしている勇気達を手伝ってくれているのだ。

羽心は目の前まで勇気、ディアーナ、チェイニーが来るとプーカを庇うように立った。

「あのね、プーカは悪気があつたわけじゃ……」

「そんな事より、羽心！ 怪現象が起きたんだ！」

「正体不明の怪が、襲ってくるわよ！」

「えっ？ えええ？」

2 — 怪の正体

羽心は勇氣、デイアーナ、チエイニーと共に、怪現象が起きたという緑丘公園に向かつていた。

「昨日、公園でジョギングをしていた女の人が急に倒れたんだ」

勇氣は走りながら、羽心達に説明をした。

勇氣によると、母親が働いている病院に、女子大生が運び込まれたらしい。

高熱で苦しんでいたのだという。

彼女は朦朧とした意識の中で、「公園で不気味な鳴き声を聞いた」と言ったのだ。

「ヒョー ヒョーつていう鳴き声だったらしいよ」

「何それ？」

そんな鳴き声、聞いた事がない。

「ヒョー ヒョー、カ。流石のオイラもそれだけじゃ分からないナ」

プーカは羽心の肩に捉まりながらそう言う。

「とにかく、公園に行ってみるしかない」

勇氣は母親からその話を聞いて、いても立つてもいられなくなったらしい。

そして、外食に行くのをやめて、公園を見に行く事にしたのだ。

「勇気くん、キミは人間にしては珍しくなかなか偉いじゃない力」

その話を聞いて、プーカが褒める。

だが、勇気は表情一つ変えず首を横に振った。

「偉いとか偉くないとかは関係ないよ。この町は、僕が守らなきゃ！」

勇気は険しい表情のまま言った。

「キユウが消えてから、僕、ずっと不安だったんだ……」

だけど、この前、地底人を倒して、僕でもやれると思っただんだ」

勇気は、走りながら拳を固く握り締める。

自分の力に自信を持っているようだ。

「勇気……」

（困った時は相談すればいいのに……）

（それが人の弱さなのじゃよ）

羽心はそんな勇気を見て不安そうに呟き、デイアーナとチエイニーも心の中で何かを思う。

やがて、勇気達の前に緑丘公園が見えてきた。

「確か、この辺りだよ」

勇氣達は、公園のベンチの傍へやってきた。

羽心以外の三人は、母親から、女性が公園のどの辺りで倒れたのか聞いていたのだ。
「罅は……」

まるで探偵のように、勇氣、デイアーナ、チェイニーは辺りを見回す。
だが、どこにも罅は見当たらない。

周りには犬の散歩をしている人や、ジョギングをしている人がちらほら見える。

「このままだと、彼らも怪現象の影響を受けちゃうかも……」

勇氣達は近くの茂みに入り、必死に罅を探した。

一方、羽心はそんな勇氣をじつと見ていた。

「羽心ちゃん。キミは手伝わないのかい？」

「えっ、あ、うん、そうね、手伝わなきゃね」

羽心が茂みの方へ行こうとすると、ふと、プーカが口を開いた。

「何か悩みでもあるのかい？」

「えっ？」

「オイラは妖精族の王子だゾ。人間の考えてる事なんかお見通しサ」

「そ、そうなんだ……」

羽心は少し呆れながらも、プーカに見つめられて何かを言おうとした。

しかし、すぐに首を横に振った。

「別に何でもない」

羽心は、ある事ですつと悩んでいた。

だが、それはプーカに相談する事ではない。

「罅を探しましょう」

羽心はそう言うと、茂みの中へと入って行った。

「羽心、そっちはどうだ？」

「ええつと、こつちにはなさそうねえ」

「プーカは？」

「うくん、こつちにもないみたいだね」

「ディアーナとチェイニーは？」

「見当たらないわ」

「こちらもじゃ」

勇気達は公園のベンチの周りをくまなく調べた。

罅があれば、女性が倒れたのは怪現象が原因という事だ。

「ねえ、これだけ探して見つからないって事は、女性は怪現象とは関係なかったんじゃない？」

「い？」

羽心は、木の幹を見ている勇氣に言った。

既に日が落ち、辺りは薄暗くなっている。

夜になると、探すのはさらに難しくなるだろう。

「勇氣クン、ここは一旦家に帰った方がいいよだね」

プーカは大きく息を漏らしながら、勇氣の方へ飛んで行った。

すると、勇氣がプーカを睨むように見た。

「ダメだ！ 怪現象の確率が1%でもある限り、放っておく事なんかできないだろ！」

「そ、それはそうだけどサ……」

プーカは勇氣の力にたじろぎ、思わず目を逸らした。

羽心もそんな勇氣の様子に戸惑いを覚えた。

勇氣は、何があっても怪からこの町を守りたいのだ。

（プーカは『放っておく』なんて一言も言っていないのに）

ディアーナは勇氣に対し苛立っていた。

キユウが消滅した後になくなった事が、彼女にとつては不快だったらしい。

「早くしないと、また夜になって被害者が出るかもしれない……」

勇氣は険しい表情になると、また罫を探そうとした。

「夜だつテ？」

プーカが顔を上げ、勇気の方を見た。

「ああ。お母さんが言ってたんだ。」

女性が変な鳴き声を聞いて倒れたのは、夜、ジョギングでここに来た時だった。

「そうか。それなら分かるヨ」

プーカは急に明るい表情になった。

「プーカ、怪が何なのか分かったの？」

「ジャネットでも分からなかった、正体不明の怪。その正体が判るのね！」

「ああ。夜、変な鳴き声で鳴いて、人を病気にする。怪現象を起こしたのは、『鶴』だね」

「鶴！ それって、あの槍を持つてる女の子『東方星蓮船』の封獣ぬえ。よね？」

「違うと思うけど」

く鶴く

鶴は、『平家物語』などに出てくる怪物である。

平安末期、夜な夜な、二条天皇の住む御所に鶴が現れては、不気味な鳴き声で鳴き続けた。

鶴は、顔は猿で、胴体と脚は虎、尻尾は蛇の形をしているらしい。

二条天皇は恐怖から病になり、寝込んでしまったという。

そして、二条天皇を救うために、都で一番の弓の使い手である武将の源頼政が選ばれ、

家来の猪早太と共に、鶴を弓で射って退治したというのだ。

「猿で虎で蛇の獣って事か……」

「なんだか、フラットウツズ・モンスターみたいよね」

まさに怪物のような怪だ。

想像しただけでゾツとするが、怖がっている場合ではない。

「よし、怪狩りに行こう」

「ええ」

勇気はディアーナとチェイニーと共に、書齋に戻ろうと思った。

だが、走り出そうとした足がすぐに止まった。

「だけど、鶴の弱点って何なんだ……？」

弱点になる物を持って行かなければ、まともに戦う事ができない。

プーカは既に分からないといった様子で首を横に振っている。

ディアーナとチェイニーも、弱点をよく知らないようだ。

勇気は羽心の方を見た。

しかし、羽心も首を捻って困った表情を浮かべていた。

「今回は私も分からないわ。源頼政が弓で倒したって事は、矢が弱点って事かしら？」

「矢か……」

ファフロツキーズの時は、リサとディアーナが弓を使って倒した。

そのため、あの時も今も、勇氣は全く弓を射れる自信がない。

「あつ、だけど、羽心とディアーナは得意だよね？」

去年の夏休み。

近くの神社で行われた夏祭りで、勇氣は羽心と一緒に弓を使った射的を楽しんだ。

勇氣は一本ものに当たらなかつたが、羽心は一等の的に当たつたのだ。

そして、ディアーナは上のエルフであるため、劍術だけでなく弓術にも秀でている。

「当然よ」

「そりゃあ、勇氣よりは上手だけど、あの時使つたのはオモチヤの弓よ？」

「それでも僕より得意だろ。この近くの高校に『弓道部』があつたはずだ。

弓を貸してもらえるかも」

「弓道部？ それって凄く長い弓よね？　ますます自信ないけど」

「無理なら、あたしがやるしかないの？」

「えつ、ええつと」

羽心は戸惑いながらも、勇氣を見た。

「参加できると思う……」

「よし、借りに行こう！」

今ならまだ学校で部活をやっているかもしれない。

勇氣達は急いで高校へ向かおうと思った。

その時、勇氣はふと周りの景色を見て、目を大きく見開いた。

いつの間にか、夜になっている。

「どういふ事？」

先程まで、まだ夕方だったはずだ。

いくら何でも急に夜になるわけがない。

瞬間、勇氣はハツとした。

これは、夢を見ているのだ。

「みんな！」

遠くから羽心の声が聞こえた。

「羽心！」

勇氣は声のした方へ走る。

すると、月明かりに照らされた芝生の上に、羽心が立っていた。

彼女の周りには、数人の袴を着た高校生が倒れている。

弓道部の部員達のような。

芝生の上には弓や矢が散乱していて、矢はそのほとんどが折れていた。

「どういう事だ？」

勇気が戸惑っていると、羽心が呟いた。

「そんな、矢が効かないなんて……」

羽心は全身を震わせ、怯えきつている。

「矢が効かない？」

勇気が首を傾げた瞬間、上空から不気味な音が響いた。

「ヒョー ヒョー」

勇気がハツとして顔を上げると、空中に奇妙な影が浮かんでいる。

顔は猿、身体と脚は虎、尻尾は蛇の化け物――

「鶴だ！」

その大きさは、ゆうに10mを超えている。

想像だにしていなかった巨大さに、勇気は思わずたじろいだ。

と、尻尾の蛇がうねうねと動き、勇気の方を見た。

「勇気！」

羽心は、勇気がいる事に気づき、声を荒らげた。

その声に反応し、今度は頭の部分の猿が羽心を見て大きく口を開いた。

「逃げろ、羽心！」

勇気が叫ぶと、尻尾の蛇が勇気に襲いかかる。

同時に、頭の猿が鳴き声を上げ、羽心達に襲いかかった。

「うわああ！」

「きゃああ！」

勇気と羽心は悲鳴を上げてバラバラの方向へ逃げた。

だが何故か、鶴は追って来なかった。

勇気が恐る恐る顔を上げて、空中を見ると、

鶴の身体が頭の猿と尻尾の蛇に引つ張られ、動けなくなっていた。

「これって……」

「——勇気！」

耳元で大きな声がして、勇気は我に返った。

「えっ、あ……」

目の前に、羽心、ディアーナ、チエイニー、プーカがいる。

周りを見ると、公園のベンチの近くだ。

日が落ち、薄暗くなっているが、まだ夜にはなっていない。

「もしかして、僕、ボオーツとしてたの？」

「ええ、夢を見てたんでしょ？」

「あ、そうだ！ 矢が弱点じゃなかったんだ！」

勇氣は、夢で見た状況を羽心達に話した。

「おいおい、それは本気でやばいゾ」

「どういう事なの？」

「ちよつと待つて」

プーカは怯え、ディアーナは戸惑うが、羽心が口を挟んだ。

「夢から覚める前、鶴が急に動かなくなったって言ったわよね？」

「えっ、あ、ああ。僕と羽心が鶴の猿の顔と蛇の顔に襲われそうになった時だよ」

「その時、私達はバラバラの方向に逃げたのよね？」

「ああ、そうだけど」

羽心は人差し指で額をトントンと叩くと、次の瞬間、勇氣を見た。

「もしかして、鶴の頭の猿と尻尾の蛇を別々の方向に動かせばいいんじゃないの？」

頭の猿と尻尾の蛇は、それぞれ個別の意思を持っているようだ。

反対方向に動かせば、身体が引つ張られ動けなくなるのだ。

「なるほど、確かにそれはありかも」

「ええ、きつと鶴を倒せるわ！ 勇氣、今から鶴との戦い方を青文字で言うわ。」

鶴は異なる部位を持っているため、部位を別々に動かせば、動きを止める事ができる」

勇氣と羽心が鶴の弱点に気づいた、その時。

「おい、あれを見ろ！」

突如、プーカが声を上げた。

勇氣、羽心、ディアーナ、チェイニーがプーカの方を見ると、彼は宙を見ていた。

「あつー！」

いつの間にか、宙に×印状の罅が浮かんでいた。

「そうか。夜になったから……」

鶴は、夜に現れる怪だ。

怪現象も、夜にだけ起こるのだろう。

「羽心、プーカ、ディアーナ、チェイニー、急ごう！今夜中に鶴を倒すぞ！」

勇氣はそう言うと、家へ向かって駆け出した。

ディアーナとチェイニーも、彼の後を追っていった。

3 — 平安の都へ

「あら、もう帰ってきたの？」

勇気達が家へ帰って来ると、勇気の母親が出迎えた。

「花恋ちゃんのお家で勉強会をしてたんじゃないの？」

「えっ、それはええつと……」

どうやら勇気は母親に嘘について、罅探しに出たようだ。

「お婆さん、勉強会はやってるわ。」

だけど勇気、教科書を持って来なかったから取りに帰る事になって」

羽心が笑って説明をした。

「あら、そうなの。勇気、勉強会に教科書忘れちゃ駄目でしょ」

「えっ、あ、うん、そうだね」

「羽心ちゃん、勇気にみっちり算数を教えてあげてね」

「はい。任せて！」

母親は羽心の言葉に安心して、リビングへと戻って行った。

「ふう、危なかったわね」

勇氣の母親に怪しまれたら面倒だ。

「羽心、いくらなんでも、僕、教科書を忘れたりしないよ」

「しようがないでしょ。嘘をつくしかなかつたんだから」

「嘘ならもうちよつとマシなものを……」

「ああんも、そんな事より、猿と蛇をどうやって別々の方向に動かすか考えなきゃ」

「そ、そうだよね……」

夢の中では、頭の猿と尻尾の蛇が別々に襲いかかろうとして、動けなくなっていた。

「確か、猿と蛇を同時に動かせる方法があれば……」

「それって、同時に気を引くって事よねえ……」

「う〜ん」

勇氣と羽心が考えていると、胸ポケットからプーカが顔を出した。

「そんなの簡単だよ。食べ物で釣ればいいのさ」

「食べ物？」

「そっか、それはいい手かも！」

猿と蛇にそれぞれ好きな食べ物を見せれば、それを食べようと動き出すだろう。

反対方向に誘えば、身体が引つ張られ動かなくなるはずだ。

「そのような単純な作戦など通用せぬよ」

だが、チエイニーはプーカの提案に反対した。

いくらなんでも、あんな怪に単純な作戦が通用するのかな、と。

「あたしが魔法を使えば、鶴なんて一殺よ」

「でも、僕達は魔法を使えないし、魔法だつて万能じゃないだろ？」

「それも一理ある。今回はお主らの意見を採用しよう」

「ありがとう。ええつと、猿の好きなものつて言えば……」

「そりゃあ、もちろんバナナよ！」

羽心の言葉に、勇氣は大きく頷いた。

「バナナは家にあるよ。後は蛇の好きなものと言えば……」

「それは、ネズミとかだネ」

プーカが自信満々に答えた。

蛇は、ネズミや鳥のヒナを襲つて呑み込むのだ。

「ネズミつて、そんなの持つていけないよ！」

ドラキュラの時同様に、勇氣は残酷なものが苦手だ。

「……あー」

その時、勇氣は柵の一角に目を留めた。

そこには、仔ウサギの置物が飾られていた。

父親がどこかで買ってきたものだ。

とても精巧に作られていて、本物の仔ウサギのように見える。

「これなら、蛇を上手く誘導できるかな？」

「おお、ありだと思うヨ。蛇は仔ウサギも襲ったりするからネ」

「よーし」

勇氣は、キツチンにバナナを取りに行くと、両手に太陽と月のグローブを嵌めた。

「何としても、怪を倒さないとね……」

羽心は、机の引き出しを開ける。

そこには、星のグローブが置かれていた。

勇氣は星のグローブを羽心が嵌める事は認めたが、普段は書斎の机にしまっているのだ。

「勇氣……」

羽心は勇氣の方を見た。

彼は余程、羽心を戦わせたくないのだろう。

認めたくない理由でもあるのだろうか、と羽心は思っていた。

「羽心、早く用意して！」

「う、うん……」

「ノノとアプ Ril はあたしを信じてる。仕事仲間が、待っている！」

だから、二人の期待に応えるためにも、あたしは絶対に仕事を成功させる！」

「仕事仲間、か……」

準備を進める勇気を、羽心はじつと見つめる。

何かを言おうとしたが、やはり言えない。

羽心は、無言のまま星のグローブを右手に嵌めた。

ディアーナとチェイニーも仕事の準備をした。

「よし、行くこう」

勇気はバナナと仔ウサギの置物を右手に持つと、壁に近づき、左手をかざして呪文を

唱えた。

カオス・ゲート
「時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

勇気、ディアーナ、チェイニーは、光の渦の中に飛び込む。

羽心もごくりと唾を呑み込むと、その後続いた。

「んんんん！」

羽心は、光のトンネルの中で必死にバランスを取る。

目が回る、頭が回る。

それでも歯を食いしばり、前を見つめた。

やがて、光のトンネルの奥に、地面が見えてきた。

「きゃー！」

羽心は悲鳴を上げそうになるが、全身に力を入れ、何とか上手く着地をした。

「へえ、綺麗に着地できたじゃないか」

プーカが浮かびながら褒める。

「そ、そりゃあ2回目だからね」

羽心は立ち上がると、勇気の方を見た。

勇気、デИАーナ、チエイニーは既に身構え、周りを確認していた。

時刻は、夜。

目の前に大きな屋敷が見える。

どうやら、羽心達はその屋敷の庭に立っているようだ。

「だけど、ここってどこなの？」

平安時代に来たはずだ。

しかし、屋敷も庭もあまりにも広すぎた。

暗いのでよく分からないが、明らかに普通の人が暮らす家には見えない。

羽心達の後ろには、池が見える。

木々が綺麗に剪定されていて、月明かりに照らされた庭は絵画のように美しい。

「勇氣、ここで本当にいいのよね？」

「あ、ああ、多分間違いないとは思うけど……」

「相手は鶴なのよ？ あたしに倒せるのかしら？」

「儂には見えぬな……」

勇氣も自信がなさそうだ。

ダイアーナとチエイニーも、鶴という怪に困惑する。

だが、来てしまった以上は、他に行く事もできない。

「とりあえず、鶴を探さなきゃ」

「鶴じゃと!？」

勇氣がそう呟くと、突然、暗闇から男性の声が聞こえた。

誰かが勇氣達の方へと近づく。

その人が持っているものが月明かりに照らされ、僅かに光った。

それは、刀だった。

「お主達、何者じゃ？」

「な、何だよ、こいつハ？」

「何じゃ、今のは？」

暗闇から、甲冑を着て刀を構えた男性が現れた。

プーカは慌てて勇気の胸ポケットの中に避難する。

男性はこの時代にいないはずのプーカを見ていた。

「あつ、えつと、今のは動く人形です！」

「はあ？ 何を言っておる？ そもそも、お主達どうやってこの御所に忍び込んだのじゃ？」

「御所？ それって天皇が住んでるところよね？」

「そうか、だからこんな広い屋敷だったんだね」

勇気は改めて屋敷を見て、その広さに納得した。

男性はそんな勇気の方に顔を向けた。

「それよりもお主、先ほど鶴と言ったな？」

「あつ、うん」

「やはりそうか。お主達、その珍妙な服から察するに、鶴の家来じゃな！」

男性は勇気を睨むと、刀を振り上げた。

「え、ああ、ちよつと！」

勇気は自分達の事を説明しようと思ったが、

振り上げられた刀を見て身体が竦み、声が出なくなってしまった。

「成敗いたす！」

「んんん！」

斬られる——！

勇気がそう思った瞬間、誰かが前に立った。

「待ちなさい！ あたし達は鶴の家来じゃないわよ！」

ディアーナだ。

勇気を救うために、ディアーナは咄嗟に間に入ったのだ。

男性は真剣な表情で訴えるディアーナを見て、刀を下ろした。

「家来ではない？ それはどういう事じゃ？」

「あたし達は、鶴を倒すためにここに来たのよ！」

上妖精説明中……

ディアーナは、このままでは見捨里市が鶴のせいで大変な事になってしまいう事を話した。

「なるほど、そうじゃったのか。お主達、皆を救うために鶴と戦おうと思っておるのじゃない」

男性は、ディアーナの説明に納得し、感心しているようだ。

「ならば、目的はわしらと同じという事か」

「同じ?」

「じゃあ、ええつと、あなたは……」

勇氣と羽心は、男性を改めて見てハツとした。

「もしかして、あなたは源頼政さん?」

病に倒れた二条天皇を救うために、家来の猪早太と共に鶴退治を行った、

都で一番の弓の使い手である武將だ。

「僕、あなたの事を本で読んだ事があります!」

「堂々と鶴と戦うなんて凄いわ!」

怪狩りを行う者にとつて、怪を倒した事のある人間は憧れの存在だ。

勇氣と羽心は目を輝かせながら、男性を見た。

しかし、彼は困惑したような表情を浮かべた。

「わしが、源頼政様じゃと……?」

「えつ?」

その時、池の方から声がした。

「おおい、早太。鶴の家来はもう倒したか?」

見ると、池の傍にある大きな松の木の後ろに、誰かが隠れていた。

早太と呼ばれた男性は、その人物を見て呆れ顔になった。

「あなたがそんなところに隠れてどうするのですか。頼政様！」
「えっ、あの人が？」

見ると、頼政は弓を持っていた。

都一の弓の使い手は、松の木の後ろに隠れながら、ふるぶると震えていたのだ。

4 — 特別な矢

「早太、鶴退治はこの子達に任せて、わしらは帰ろう！」

勇氣達が鶴を倒しに来たと知った頼政は、猪早太の腕を引つ張った。

「しかし、頼政様！」

「しかしじゃない。わしの言う事が聞けぬというのか？」

「そ、それは……」

家来である猪は頼政に強く言えないようだ。

「何だか、本に載つてた話と大分違うんだけど……」

勇氣は羽心にそう言う。

本の中では、頼政が弓で鶴を倒したと書かれていた。

だが、どう考えても目の前にいる頼政では、鶴を倒せるとは思えなかった。

「あの、頼政さんは都で一番の弓の使い手なんですよね？」

「わしがか？」

頼政は急にオロオロし始めた。

「わしは弓の使い手なんかではない。」

戦の時、あまりの怖さで弓を闇雲に射ったら、それがたまたま全部敵に当たっただけなのじゃ」

「全部って」

「滅茶苦茶ラッキーだったって事よね」

「おかげでそれ以来、皆がわしの事を都一の弓の使い手だと言うようになって、

今回だって、熱を出して体調が悪いと嘘をついて断ろうと思つたのに、

一族の者達が勝手に鶴退治を承諾してしまつて」

頼政は泣きそうな顔で、大きな溜息をついた。

「わしは、こんな事、嫌なのじゃ……」

どうやら、頼政は全く頼りにならないようだ。

「意外に彼はビビリだったのね」

「まあ、元々弓では鶴は倒せないもんね」

羽心が勇氣に小声で言う。

夢の中で、弓道部の部員達が鶴に向かって矢を放つたようだったが、全く効かなかつたのだ。

「僕が何とかするしかない——」

勇氣は、持っているバナナと仔ウサギの置物を見つめた。

「僕が……」

羽心がふと、眩くように言った。

「どうした、羽心？」

「えっ、あ、ええっと、あのね……」

羽心はずっと思っていた事を話そうと思った。

しかし、プーカが勇気の胸ポケットの中からひよつこりと顔を出し、先に喋った。

「ところで、一つ質問していいかな？」

「プーカ、君は隠れていた方がいいってば」

「いやいや、キミ達はどうも頼りにならないと思つてネ」

「頼りにならない？」

勇気、羽心、ディアーナ、チェイニーは、頼政達から少し離れると、プーカを見た。

「それで、質問つて何？」

「キミ達は鶴と戦う時、バナナと仔ウサギの置物を匣に使うんだ口？」

「うん、そのつもりだけど」

「だけど、それで鶴の興味を引いたとして、その後、一体どうやって倒すつもりなんだイ

？」

「その後……？」

勇気が首を傾げると、次の瞬間、ハツとした。

「どうやって倒せばいいんだ？」

猿の頭と蛇の尻尾を別々の方向に移動させれば、身体は動けなくなる。

だがそこから、どうやって鶴を倒すのか全く考えていなかった。

「はあく、やっぱりそうか。まったく、人間って奴は肝心なところがダメだよなあ」

「勇気、本当に何も考えていなかったのか？」

「い、いや、動けなくなれば、倒すチャンスができると思つて」

「それはそうだけど、どうやって倒すのよ？」

「制約さえなければ、あたしが魔法で倒したのにね」

鶴に決定的なダメージを与えないと、倒す事など不可能だろう。

ディアーナは強力な魔法が使えるが、あくまで彼女は引き立て役なのだ。

「どうしよう。完璧な作戦だと思つたのに」

「何かアイデアを考えましょう。私も力になるから！」

羽心はそう言うが、勇気には全くその声が届いていないようだった。

「僕が何とかしなくちゃ、僕が何とかしなくちゃ……」

「勇気……」

羽心は寂しそうな表情で、そんな勇気を見つめた。

すると、怒りを抑えられなくなったディアーナが、勇気の顎を掴んで上げ、平手打ちをした。

大きな音が平安の都に響く。

「痛っ！ 何するんだよ、ディアーナ！」

当然、勇気は痛みに怒るが、ディアーナは動じずに勇気を真っ直ぐ見てこう言った。

「あなた一人でかっこつける気なの？ あたしならともかく、あなたはまだ子供でしょ？」

「君に僕の何が分かるんだ！」

勇気はディアーナに向かって叫ぶが、彼女は首を横に振った。

「分からないわよ。あなたがそんなだと、誰も分からないわよ。」

勇気、羽心が何のためにあなたについてきたのか、分かっているの？」

「……」

「だんまりね？ 羽心は鶴の動きを止めるための作戦を考えてきたのよ。」

羽心はあなたの力になりたくて同行したのよ。」

アプリルが言った事を思い出してちょうだい。あたし達は、一緒に怪狩りをする仲間なのよ。」

「羽心が来た意味を無駄にしようとするあなたに、怪を狩る資格はない！」

ディアーナは毅然とした表情で、勇気に説教をした。

「勇気は反論しようとしたが、あまりに理路整然としているために、全く反論できなかった。」

すると、猪が勇気達の傍にやってきた。

「お主達、鶴の動きを止められるというのか？」

「あ、はい。止める事まではできると思っています」

「ならば、鶴を倒す事ができるぞ」

「えっ？」

猪は頼政の方を見た。

「頼政様、彼らと協力すれば、必ずや鶴を倒せます！」

猪はそう言うのと、満面の笑みを浮かべた。

しかし、勇気、羽心、ディアーナ、チエイニーは困った顔をした。

「あの、それって弓で矢を射って倒そうと思ってるって事ですよね？」

「弓は強い武器だけど、鶴はそれじゃあ倒せないのよ？」

勇気達が進言すると、猪はニカッと笑った。

「相手は化け物じゃ。普通の矢では倒せぬ事ぐらいわしらにも分かっておる。

だから、『特別な矢』を用意したのじゃ」

「特別な矢？」

勇氣達が戸惑っていると、猪は頼政の下へと戻り、彼が持っていた矢を見せた。「この矢の鏃やじりには、強力な毒を塗っておる。

どんな動物でも、この矢が刺されれば倒す事ができるのじや」「毒か、確かにそれなら効果あるかも」

「だけど、相手は怪よ？」

羽心が疑問に感じると、プーカが猪達には聞こえない小さな声で喋った。

「効果あると思うヨ。鶴は猿と虎と蛇が合体した化け物だからネ」

生き物の身体をしているのであれば、最も効くはずなのだ。

「そっか、それなら矢が武器になるわね」

「ああ、これで鶴を倒せる！」

「頼政様。やりましょう！ あなたの弓で鶴を倒すのです！」

猪は強い口調で頼政に言う。

だが、泣きそうな表情のまま首を大きく横に振った。

「そんなの無理じゃ！ わしには化け物なんかと戦う勇氣などない！」

「頼政様……」

「早太、幼き頃から共におるお前なら、わしの事をよく知っておるだろ？」

口先だけは一人前じゃが、本当は刀も弓もまるで扱えん事を。だから逃げよう！」

頼政は、猪の腕を掴んで逃げようとした。

瞬間、勇気が声を上げた。

「いい加減、勇気を出してよ！」

僕だつて怖いけど、戦おうと思つてるんだ！」

頼政は、昔の勇気そっくりだった。

そんな頼政を見て、勇気は我慢できなくなつたのだ。

猪は頼政をじつと見つめた。

……」

「早太……？」

「あなたは明るくて優しい。一緒にいるとわしは楽しくなるのです。」

だから、わしはあなたが鶴退治に選ばれた時、御伴おともをすつたのです。

わしだつて、あの少年達と同じように化け物を相手にするのは怖い。

命を落とすかもしれません。しかし勇気を出して、あなたを守りたいと思つたのです

！」

よく見ると、猪の手や足は震えていた。

彼もまた、鶴との戦いにずっと怯えていた。

怯えながらも、頼政を守るために、勇気を奮い立たせていたのだ。

「猪さん……」

勇気は猪達をじつと見つめた。

そして、羽心、ダイアーナ、チエイニーもそんな猪を見て何かを思うと、小さく頷いた。

「頼政様、戦いましょう。必ずわしらは勝てるはずですよ」

猪は、頼政に手を差し出した。

「早太……」

頼政は泣きそうな顔で、猪を見た。

その時。

「ヒョー ヒョー」

上空から、不気味な声が響いた。

勇気達は空を見る。

そこには、×印状の罅が浮かんでいた。

そしてその横に、真つ黒な塊があった。

「あれは！」

「ヒョー ヒョー」

黒い塊の一部が、四本の虎の脚になる。

脚の上に虎の身体の形が作られる。

次の瞬間、猿の頭と蛇の尻尾が現れた。

「鶴だ！」

「来たわね！」

「相手になってやろう！」

勇気の声が、御所の庭に響いた。

ディアーナとチエイニーは、それぞれ身構える。

「勇気、バナナを貸して！」

「バナナを？ 猿の頭と蛇の尻尾は僕が引き付ける！」

「何言ってるの、同時に引き付けないと意味がないでしょ！」

その言葉に、勇気はハツとした。

「確かに、羽心チャンの言う通りだね」

プーカは、勇気の服の胸ポケットから出ると、飛びながらにやりと笑う。

「そ、それはそうだけど……」

勇気はどう答えればいいのか分からなくなってしまう。

そんな勇氣に、羽心は手を差し出した。

「だから、バナナを貸して！」

ディアーナさんが言ってたでしょ！ 何のために私がいると思ってるのよ！」

「羽心……」

勇氣は戸惑いながらも、羽心にバナナを渡す。

羽心はそれをしっかりと受け取った。

「同時に行くわよ」

「え、あ、ああ、分かった！」

勇氣は自分の頬を叩き、気合いを入れ直した。

「やるしかないのう」

「頼政さん、鶴の動きが止まったら弓を射ってください！」

勇氣は頼政達の方を見てそう言った。

だが次の瞬間、驚く。

なんと、頼政と猪がいつの間にかいなくなっていたのだ。

5 — 鶴を狩る者達

「いきなり消えたですって？」

「あやつらは何を考えておるのじゃ……？」

「そんな事、僕にも分からないよ！」

「なんでこんな事になるのよ……」

「おいおい、これは本気でやばいゾ！」

羽心、勇気、ダイアーナ、チェイニーは、予想外の展開にパニックになっていた。プーカは飛びながら焦る。

「そんな事、分かってるわよ！」

「そうだよ！ 一体どうやって倒せば——」

猿の顔が、勇気達の方をじろりと睨む。

蛇の尻尾もうねうねと動き、顔をこちらに向けて、舌を出して威嚇した。

瞬間、勇気と羽心は急に寒気を感じた。

「これって——」

「ああ、このままじゃ僕達も病気になる！」

「ここは、この魔法を使うわ。かぜのせいはいよ、やさしきかぜでかものたちをやまいよりもりたまえ。Air Screen」

ディアーナは風の精霊を召喚し、風の膜を張って勇氣達を病から守った。

これで鶴が勇氣達を病にする事はできなくなつた。

「鶴は空を舞う以上、倒すためには、動きを止めるしかないのう」

「ええ！」

「ヒョー ヒョー」

鶴が雷を纏つて勇氣達の方へと襲いかかつてきた。

体当たりが命中すれば大ダメージは避けられない。

勇氣達は同時に動いた。

チエニーは血液のメイスを持ち、勇氣とプーカは素手で、蛇の尻尾の方へ。

羽心はバナナ、ディアーナは双剣を持って、猿の頭の方へと走る。

猿の顔と、蛇の尻尾がそれにそれぞれ反応した。

「ヒョー！」

「きゃー！」

猿の頭が声を上げながら、羽心が持っているバナナを食べようとする。

羽心はその迫力にたじろぎながらも、必死に距離を取る。

「シルフィードエツジ！」

ディアーナは、双剣に風を纏わせて振り下ろし、衝撃波で鶴を攻撃した。

一方、蛇の尻尾は空中でうねうねと動きながら、勇気を睨んだ。

「ほらっ、これが欲しいんだろ！」

勇気は仔ウサギの置物を見せる。

蛇の尻尾はそれに反応し、細い舌を出した。

だが次の瞬間、蛇の尻尾は顔を背けた。

「どうして？」

「どうやら本物だと思っただけ。オイラに任せろ！」

プーカは羽を震わせ、鱗粉を仔ウサギの置物に振り撒いた。

刹那、仔ウサギが身震いした。

プーカの力で生き物のようになったのだ。

「どうだい。これで鶴も興味を持つだろ！」

「うん、プーカ、凄いよ！」

喜ぶ勇気を見て、プーカは鼻高々な表情になる。

しかし次の瞬間、仔ウサギはびよんびよんと跳ねると、茂みの中に消えてしまった。

蛇の尻尾は顔を背けたままで全く気づいていない。

「あちやく、これはますますピンチだね工」

「そんな！ どうするんだよ！」

一方、猿の顔は怒ったような表情になり、鋭い牙を剥き出しにして声を出す。

「ちよつと、猿ってこんな牙があつたの？」

羽心は恐怖を感じながらも逃げ続け、ちらりと勇気達の方を見た。

「あつ！」

何故か、尻尾の蛇が羽心の方を見ている。

「やはり、鶴には通用しなかつたか……」

チエイニーは自身の悪い予感が的中し、頭に手を当てた。

「羽心！」

「せいやつ！」

このままでは鶴の動きを止められないどころか、羽心が襲われてしまう。

ディアーナは前に立って、鶴に風の刃を放って引き付けている。

「蛇の注意をこつちに……！」

勇気は仔ウサギの置物の代わりになるものを探すが、そんなものどこにもなさそうだった。

さらに、鶴が雷を落として勇気を攻撃してくる。

「うわっ、わわっ！」

勇気は何とか攻撃をかわすが、このままでは鶴を倒す事ができない。

「もしかしたら……！」

その時、勇気は空中を見て、目を大きく見開いた。

目の前に、プーカが浮かんでいたのだ。

「プーカって、妖精族の王子なんだよね？」

「ああ、キミ達より偉い存在だよ」

「それって頼りになる存在って事でもあるよね？」

「ああ、もちろん。キミ達よりずっと頼りになる」

プーカが胸を張って答えると、勇気は顔をヌツと近づけた。

「だったら、このピンチを救えるのは君しかない！」

「ハッ？」

「プーカ、君に蛇の頭の気を引いてほしいんだ！」

「気を引ク？ お、おい、それってオイラが囷になるって事力？」

「さつき、プーカのせいで仔ウサギの置物がどこかに行っちゃったでしょ」

「そ、それは。オイラはよかれと思っテ……」

「プーカ、ううん、プーカ王子、お願い！ 君にしかできない事なんだ！」

「オイラにしかできないイ……？」

プーカは急に嬉しそうな笑みを浮かべた。

瞬蔵、蛇の尻尾が勇気達の方を見た。

すると、プーカが蛇を睨み返した。

「ふん、妖精族の王子がお前なんかにはびびるとでも思っているの力！

仔ウサギを逃がしたのも作戦の内だゾ！」

とても作戦の内とは思えないが、プーカは蛇の尻尾に向かって勢いよく飛んでいった。

「羽心、今だ！」

勇気が叫ぶ。

羽心はそれを聞き、とっさに持っていたバナナを自分の後ろへ投げた。

猿の頭が虎の身体を大きく動かす。

その身体が、羽心に勢いよくぶつかろうとした。

「危ない！」

チエイニーがギリギリで羽心を庇い、倒れる。

「まだじゃ、まだ諦めぬ！」

「チエイニー！」

勇氣は羽心とチエイニーの下へ駆けようとするが、その時、「あつ」と声を出した。羽心がバナナを投げたおかげで、猿の頭が動き、蛇の尻尾が勇氣達に届かなくなったのだ。

蛇の尻尾は宙を飛ぶプーカを呑み込もうとしている。

猿の頭は地面に落ちたバナナを拾おうとしている。

それぞれ反対方向に動こうとして、鶴の動きは完全に止まったのだ。

「よくやったぞ、子供達よ！」

突然、池の方から声が聞こえた。

見ると、池の傍にある大きな松の木の上に、頼政と猪がいる。

「あんなところに逃げてたのか？」

「違うと思うわ……」

勇氣がそう言うと、羽心がよろよろと顔を上げて言った。

チエイニーも、ゆっくりと身体を上げる。

デイアーナも勇氣達に合流した。

「あれは、逃げたのではない……。弓で射るために、高い場所に登ったのじゃ」

猪は木を登る頼政の足を押さえ、落ちないように補助していた。

頼政はそんな猪に支えられ、枝の上に立った。

「鶴よ！ 我が矢を喰らうがよい！」

頼政は鶴を睨むと、弓を構え、そして矢を放った。

毒が塗られた矢が、鶴の虎の身体に突き刺さる。

「ヒュー！」

猿の頭と、蛇の尻尾が暴れ回る。

鶴の全身から黒い煙が漏れ出す。

猿の顔と、蛇の尻尾はさらに暴れるが、だんだん動きが鈍くなっていった。

黒い煙は四散し、やがて鶴が消えた。

同時に、空中に浮かんでいた罫も消えた。

勇気達は、見事、鶴を倒す事ができたのだ。

翌朝。

京の都に朝日が昇った。

勇気、羽心、ディアーナ、チェイニー、そしてプーカは、

町の一角から都の人々の姿を見ていた。

皆、何事もなかったかのように、平和な一日の始まりを迎えている。

その中には、頼政と猪の姿もあった。

「早太、わしはだな、朝から無性に弓の稽古をしたくなかったぞ」

「本当ですか！ 頼政様がそんな事を言うなんて、わしは嬉しいです！」
勇氣達の前を、二人が通り過ぎる。

鶴に関する記憶は二人の記憶から消えていたものの、その姿は、仲のいい親友そのものだった。

「ま、一時はどうなる事かと思っただけだ」

「何とか倒せてよかった……」

ディアーナと勇氣は鶴を倒せてホッとしていた。

「オイラの活躍があつてこそだけどネ」

プーカは仔ウサギを逃がした事はまるでなかったかのように、

宙に浮かびながら自信満々の様子で髪をかき上げた。

「まあ、結果的には確かにその通りかも。プーカは僕達のヒーローだよ」

「ヒーロー？ お、おう、いつでも頼りにしていいゾ」

「仕事は成功に終わったようじゃな」

プーカは妙に照れながらも、笑顔になった。

チエイニーも一仕事を終えて、安心したようだ。

「……勇氣……」

羽心は、そんな勇氣達をじつと見ていた。

彼女はずっと思っていた事を話そうと思い、ゆっくりと口を開く。

するとそれよりも早く、勇気が喋った。

「ねえ、羽心。お願いがあるんだ」

「お願い？」

「ああ、星のグローブは、羽心にずっと持っておいてほしいんだ」

「私が、グローブを？」

戸惑う羽心を、勇気はじつと見つめる。

「僕、地底人を倒してから、一人でも怪狩りができると思ってた。

だけど、ディアーナのおかげで仲間の大切さがやつと分かったんだ。

ディアーナ、君が与えた痛みとありがたみは、忘れないよ。本当にありがとう」

「あ、あの時は、ただ思った事をそのまま言っただけよ」

ディアーナは顔が赤くなって、プイッと向こうを向く。

「そして、羽心……」

「勇気？」

「僕と君は同等だよ。だから、僕と一緒にこれからも戦おう！」

それは、羽心がずっと言いたかった事だ。

羽心は見捨里市を守りたかった。

それと同じぐらい、勇気に仲間として認めてほしかったのだ。

「あ、当たり前でしょ。」

「勇気は最近ちよつとは頼りになるようになったけど、やつぱりまだまだ心配だからね！」

羽心もプーカと同じように妙に照れながら、笑顔になった。

勇気もそんな羽心を見て苦笑いを浮かべた。

「さあ、帰ろう」

勇気はそう言うと、ゆっくりと歩き始めた。

その時――

「……？」

勇気は、自分が森の中にいる事に気づいた。

「どうして？」

先程まで京の都にいたはずだ。

周りを見るが、羽心、デイアーナ、チエイニー、プーカがいない。

ふと、前方の開けた場所を見ると、そこには大きな物体があった。

石を積み上げて造った、ピラミッドのような建築物である。

だが、エジプトにあるピラミッドとは形が全く違っていた。

中央に、大きな階段があり、頂上に神殿のようなものがある。

その神殿の前に、一人の人物が立っていた。

「あれは……」

勇気は目を凝らして、その人物を見た。

そして、目を大きく見開いた。

神殿の前に立っていたのは、赤髪に鋭い目をした少年……。

「キユウ!!」

勇気は思わず叫んだ。

キユウはそんな勇気に気づいたのか、顔を向けた。

その口元がゆつくりと開き、勇気に向かって何かを言おうとした。

「——勇気!」

勇気がハツとして我に返ると、目の前に羽心、ディアーナ、チェイニー、プーカの姿があった。

「()は……?」

「何言ってるのよ、京の都よ」

「勇気くん、どうしたんだい、急にポオーツとしテ」

「ポオーツと……?」

今、勇気が見たのは、夢だった。

だが、ただの夢ではない。

「あそこに行けば、もしかして……」

勇気はポケットの中から、月のグローブを取り出した。

あのピラミッドのような場所に行けば、キユウと会う事ができるのかもしれない。

キユウは、消えてなどいなかったのだ。

「キユウ！」

勇気は目に嬉し涙を溜めながら、月のグローブを強く抱きしめた。

S i d e S t o r y

路地裏暮らしも悪くない？

見捨里市の路地裏。

普段、デИАーナら怪と、裁定者の英霊ジャネットはこの建物でひっそりと暮らし、怪奇現象が起こった時は調査し、勇気達と共に時空を超えて怪を狩っている。

路地裏と言うと汚いイメージを思い浮かべるが、

家事担当のキキーモラ、パーシャが毎日掃除しているため意外と綺麗だ。

ちなみに、調査手当はジャネットがフランスのお金を、

製作担当の透明人間、ナタリアが開発した自動換金装置により円に換えている。

「こちらは調査手当です」

「大事に使うんだよ」

ツタンカーメンが見捨里市に現れるのを防いだデИАーナとノノは、

ジャネットから調査手当の20000円を貰った。

「それにしても、怪奇現象がよく起こる見捨里市の割に、ここは安全なんだねえ」

「それを言うのはいけませんよ」

ナタリアはやれやれといった声色をしていた。

ジャネットは歩いて、ディアーナとノノの前に立つ。

「この仕事、どうでしたか？」

「楽しかったわよ。まあ、欲を言うなら、ジャネットも付き合っただけで私が出たら処罰の対象となるのをお忘れですか！」

ジャネットは強大な力を持ち、表に出たら目立ってしまう。

なので、彼女は路地裏の建物から出る事ができないのだ。

「そして、ノノもお疲れ様でした」

「ありがとう！」

「それでは二人とも、二日のお休みを取ってください」

「やったあ！ あそぼー、あそぼー！」

休みが貰えて大喜びするノノ。

対照的に、ディアーナは難しい顔をしていた。

「でも、エルフや獣人が見捨里市を堂々と出歩いたら、バレちゃわない？」

「誰が『見捨里市に出る』と行ったのですか？ この路地裏を歩き回りますよ。」

「といつても、パーシヤのおかげで綺麗ですし、店は充実していますよ」

「感謝します」

メイド姿のパーシャがお辞儀をする。

路地裏なのに店が充実しているなんておかしい、とディアーナが頭を捻ると、調合担当の三毛猫の獣人、小春が小声で説明した。

「ジャネット様が所持している金剛石の指輪のおかげです」

「ええ。指輪は時の流れからこの路地裏を守り、周囲の光景が広がったように見せかけます。」

ただ、邪悪なものと繋がっていますので、公然とは使えません……」

ジャネットの指には、ちかちかと光が灯っていた。

「こんなに綺麗な光なのに」

「邪悪なものが滅びる時、この光もまた消え、人ならざる者の時代は終わります」
時代が下るにつれて、地球から人ならざる者の姿はどんどん去っていった。

表で楽しく過ごしていた人ならざる者達も、現代では路地裏でしか姿を見かけなくなつた。

そして、路地裏にもまた、衰退の時が訪れようとしていた。

「とはいえ、わたし達の時間は、まだ続いています」

「じゃあ次の異変が起こるまで、あたしとノノは自由に過ごせるって事なのね」

「ええ。充実したお休みを、楽しんでくださいいね」

ジャネットがディアーナとノノに微笑む。

路地裏での食事や買い物、建物で何かするなど、時間の許す限りは好きな事ができる。調査だけでなく、休息もディアーナ達には必要なのだ。

「それでは、お休みなさい」

「おやすみなさい！」

ディアーナはジャネットが用意した部屋に戻った。

「人間が怪になる事もあるらしいから、

英霊も人を傷つけたり恐怖に陥れたりするようであればそれはもう怪としか言えないのね」

ディアーナは目を閉じて、眠りについた。

次の怪が何なのかは知りたいが、今はまず、休もうと思った。

さて、ここで路地裏にいる三人の後方支援者を紹介しよう。

まず、製作担当のナタリアは、透明人間の女性だ。

姿を見る事はできないが、そのために知覚されずに移動でき、

戦闘もそれなりに出来る偵察兵である。

手先も器用なので、路地裏の製作を担当しているわけだ。

次に、家事担当のパーシャは、キキーモラというロシアの妖精だ。

普段は献身的な性格をしているが、ある言葉を言われると乱暴者になってしまう困った女性だ。

戦闘能力は無く、普段は路地裏を掃除しながら、怪達に料理を振る舞っている。

最後に、調査担当の小春は、三毛猫の獣人で「忍びの者」だ。

忍びの者と言えど本質的には盗賊と同じである麗羅達とは異なり、正真正銘のくノ一である。

普段は見捨里市の商店街の薬屋で働く、笑顔かつ丁寧な人物だが、

仕事の時になると一変し、素早い動きで小太刀を使い標的を仕留める。

「それじゃ、行つてきますー！」

「いつてらっしやい」

普段着に着替えた小春と別れたディアーナとノノは、早速路地裏に出た。

「わあっ、凄いわねー！」

路地裏の中は、とても明るい光景だった。

アルカディア出身のディアーナは、懐かしそうな顔をしていた。

「アイーダの酒場」と看板に書かれた建物や、冒険の疲れを取るためのレストラン、

ファンタジーグッズを売っている建物などなど。

ジャネットが嵌めた指輪のおかげで、まるで剣と魔法の世界のようになっていた。

「アイーダの酒場」と看板に書かれた建物や、冒険の疲れを取るためのレストラン、ファンタジーグッズを売っている建物などなど。

さらには、洞窟やジャングル、山岳、闘技場など、冒険者が喜びそうな場所がたくさんあった。

（あたしも故郷に帰りたい気持ちはあるんだけど、ここで暮らすのも悪くないかもね。

ジャネットもノノも優しいし、ナタリアもパーシャも綺麗だし、

ここの路地裏に広がる風景は、あたしが元いた世界とそっくりだし……）

異次元の旅人であるディアーナは、ファンタジー世界から現代世界にやってきた。

この世界では科学の発達と引き換えに、奇跡も魔法も失われている。

自分が魔法を使えたり、異種族であつたりする事を、一般の人に知られてはならないのが常識。

だがこの路地裏は、強力な攻撃魔法を使っても誰も咎める事はない。

現代世界に残された、最後の聖地なのだ。

そしてその聖地もまた、終わりを迎えようとする。

緩やかな滅びは、ハイエルフと同じ道だった。

それでも、彼女はこの世界で暮らしたかった。

この世界の事を、もっと知りたかったのだ。

「じゃあ、まずはここに行きましよう！」

「うん！」

二人が最初に行った場所は、「ドキッ！ 罨だらけの森」。

ここにはたくさんさんの罨が仕掛けられていて、きちんと調べなければ引つかかってしまう。

「うわ、何これ、引つかかっちゃいそう」

二人の前には、無数の蜘蛛の巣があつた。

ノノは飛べるが、ディアーナは飛べないため、この通路は迂回した。

「ここにはどんな罨があるのかしら」

ディアーナが足元を調べてみると、鳴子の罨が仕掛けられていた。

ここを通つたら、敵に気づかれてしまうだろう。

ノノは空を飛んで楽々回避したが、問題はディアーナだ。

ディアーナはゆっくり、ゆっくりと歩く。

「あつ！」

しかし、うっかり鳴子を鳴らしてしまい、音と共にボムロックが四体現れた。

ボムロックは笑っているが、刺激すれば爆発するだろう。

ディアーナはそつとボムロックの後ろを通り抜けた。

「今度はスライム？」

「きもちわるいなあ、もう」

ボムロツクを通り抜けたと思つたら、今度は道を巨大なスライムが塞いでいた。身体を伸ばして取り込み溶かす強敵であり、女性が最も嫌う怪でもあった。

ディアーナとノノは迂回したが、さらに遠回りせざるを得なかった。

しかも、遠回りした先の通路には、獲物を眠らせるガスが漂っている。

そこも迂回した先に、ボムロツクがいた。

「戦わずして抜けるには、こうするしかないのよ」

「えっ、ちよ、ちよっとー」

ディアーナは直感を生かし、怪に遭遇せずに罠を次々に潜り抜けていく。

酸を吹き上げる間欠泉、棘つき茨で覆い尽くされた通路、怪がひしめき合う部屋、泥の沼など。

それらを全て突破し、ディアーナとノノは出口に着いた。

「もう、あそこには二度と行きたくないわ……」

罠だらけの森は、ディアーナにとって嫌なものであった。

製作者は女性に何らかの恨みがあるのだろうとディアーナは思っていた。

「ディアーナおねえちゃん、ここにいこう？」

「そ、そうね」

気を取り直して、ノノに誘われて次に行った場所は、湿地。

ここには森ほどの畏はなく、二人は安心して入る。

湿地には既に二人の怪がいて、四人で行動するようだ。

「わっ！」

突然、周囲の光景がぐにやりと歪んだ。

四人はワープゾーンに飲み込まれようとしたが、素早く動いてワープゾーンを回避した。

進んでいくと、一定の間隔で転がる巨石が行方を阻む。

ディアーナは軽く飛び越え、ノノ達も後に続いたが、五体のガーゴイルが姿を現した。ナイフを持った妖精がガーゴイルに飛びかかり、ガーゴイルの急所を突く。

「きゃっ！」

ガーゴイルはディアーナに素早く襲い掛かり、ディアーナを爪で切り裂く。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

だが、一体一体は弱かったため、ノノの歌によって一掃された。

そして、ガーゴイルを撃退すると、湿地の奥からジャイアント・ローパーが姿を現した。

名前の通り、非常に巨大なイソギンチャクの姿をした怪だ。

攻撃力だけでなく毒液も放つため、最も出会いたくない怪と言えるだろう。

「やるしかないわよー！」

ディアーナは双剣を構え、ジャイアント・ローパーに突っ込んでいくが、触手で双剣攻撃を防がれる。

だが彼女のおかげで隙ができたようで、

ナイフを持った妖精がジャイアント・ローパーにナイフを突き刺す。

「やめてえっー！」

ジャイアント・ローパーはノノ目掛けて毒液を飛ばし、彼女の身体を毒に侵す。

毒に侵されたノノの顔色が青くなっていく。

刀の付喪神が自分の刀に炎を纏わせ、ジャイアント・ローパーを斬りつけて爆発を起す。

炎はジャイアント・ローパーの身体を容赦なく包み込み、大ダメージを与える。

「♪♪♪♪♪」

ノノは歌って自分にかかった状態異常を取り払う。

妖精がジャイアント・ローパーの背後に回り込み、ナイフで触手を切り裂く。

「とどめよ、ライトニング・スラッシュー！」

そして、ディアーナと刀の付喪神の一閃によって、
ジャイアント・ローパーは真つ二つになった。

(……湿地にこんな魔物、いたかしら?)

何とかジャイアント・ローパーを倒したディアーナ。

仲間に助けられたが、文句は決して言わなかった。

怪狩りというのは、仲間がいるからこそできる事だと思っ
ているからだ。

最後に行つた場所は、遺跡。

ここには獣人の格闘家とオークの槍使いがいた。

(うーん、オークってあまりいい印象はないわ。でも、文句を言
つてる暇はないわね)

どうも、ディアーナはオークを嫌っているようだが、ここで喧嘩
をしては意味がない。

ディアーナ達が遺跡に入ると、アッシュモンスターとリビング
グアーマーが現れた。

「♪♪♪♪♪♪♪♪」

ノノは魔力のこもった歌を歌う。

音の振動によってアッシュモンスターとリビンググアーマーの防
御力が減少する。

アッシュモンスターは灰を飛ばすが、ディアーナは双剣で攻撃を
防ぐ。

格闘家と槍使いがリビンググアーマーに突つ込んで攻撃し、リ
ビンググアーマーをバラバ

ラにした。

「ライトニング・スラッシュユ！」

最後はディアーナの双剣によってアッシュモンスターは真つ二つになった。

精霊魔法を得意とするエルフだが、ディアーナは若いために剣術も秀でているのだ。

「見て、あれ！」

ディアーナ達が歩いていると、六体の岩飛ばしがこちらを迎え撃とうとしていた。

もしディアーナが気付いていなければ、こちらに不意打ちを仕掛けてきただろう。

そのおかげで、格闘家と槍使いは岩飛ばしに先制攻撃をする事に成功し、

ディアーナも双剣で岩飛ばし達をまとめて貫く。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

ノノは彼女ららしからぬ激しい歌声で、岩飛ばしの防御力を減らす。

槍使いは岩飛ばしの攻撃に対し反撃し、ディアーナとノノは攻撃を食らうが、

ノノの歌声で体力を回復した。

「ライトニング・スラッシュユ！」

雷を纏ったレイピアとダガーが岩飛ばし達を貫く。

直後にディアーナは水の精霊魔法を唱え、岩飛ばし達を流して壁に叩きつけた。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

ノノの歌声が、岩飛ばし達の戦意を大きく削ぎ、一体の岩飛ばしが戦意を喪失して立

ち去る。

その後、槍使いが岩飛ばしの攻撃に対し反撃し二体を倒した。

ノノは歌って自分の傷を癒しながら攻撃し、槍使いと格闘家も岩飛ばしの体力を削る。

「これで、とどめよ!!」

そして、ディアーナが風の精霊魔法で岩飛ばしを一掃し、戦闘は終わった。

「さて、この辺にはもう、敵や罠の気配はないわね」

周囲には敵や罠の気配はなかった。

ディアーナ達は先に進むと、有毒ガスを噴き出す場所に差し掛かり、ディアーナ達は迂回する。

そして迂回した先に、遺跡のボス・デーモンの姿があった。

強敵だが、皆で協力すれば倒せない敵ではない。

ディアーナとノノはそれぞれ身構えて、デーモンに戦いを挑んだ。

「せいやあっ!」

「~~~~~」

格闘家とディアーナはデーモンに突っ込んで攻撃する。

ノノは歌声で味方の士気を上げた。

「ナイス、ノノ！」

ディアーナは水の精霊を呼び出し、大波でデーモンを流し、槍使いも追撃する。
「きゃっ！ このおっ！」

直後にディアーナはデーモンの爪を受け、傷を負う。

ディアーナは双剣を振り、デーモンに反撃した。

槍使いもデーモンの攻撃に反撃し、ノノは歌でディアーナを回復させる。

そして、格闘家がデーモンに突っ込んで連続攻撃を行い、デーモンを撃破した。

「あゝ、遊んだ遊んだ！」

「たのしかったねー！」

ディアーナとノノは、意気揚々と遺跡を出た。

見捨里市では絶対に楽しめない冒険だったため、二人の機嫌はとても良い。

「なんだか、楽しんだらお腹空いちちゃったわ」

「じゃあ、レストランにいこー！ いこー！」

「ふふ、そうね。何を食べようかしら」

そうして、二人は疲れを取るため、レストランに行くのだった。

全てが終わった時、この路地裏もやがては衰退して消える。

だが、この世界で過ごした事は、無駄ではない。

ディアーナはしばらくの間、見捨里市での時を楽しむのだった。

裏切りの忍び達

それは、麗羅達がまだ、邪鬼に従っていた時の話である。

「ふっふっふ。今回、君達はこの怪の力を見捨里市に呼び込んでほしいんだ」

麗羅達は、邪鬼から依頼を受けていた。

彼が見捨里市に送ろうとしている怪は、古代中国の四凶の石柱「饕餮」である。

饕餮とは、牛の身体、人の顔、虎の牙を持つ魔神であり、胎児のような鳴き声を発するという。

魔神だが、その姿を彫り込んだプレートは「厄を食う」という意味で魔除け効果を持つとか。

「……饕餮、ねえ。ヤツは凶暴だよ？ アンタだけで何とかなるのかい？」

「そんな事を言わなくても、僕には『力』がある」

「饕餮を従わせる力かい？」

「まあ、そういう事になるね。君達は恐怖をばら撒いて、見捨里市を混乱させるんだよ」

「ああ、分かっているさ」

そう言って、麗羅はナイフを構えて敬礼した。

つるぎ、揚羽、カリオストロも彼女と同じように敬礼する。

邪鬼は「いい駒だ」と思っていたが、まだ四人は知る由もなかった。

その後、麗羅達は見捨里市を混乱させるため、×印の罅を広げる作業を行った。

揚羽とカリオストロが攪乱し、麗羅とつるぎが物理的手段で脅迫に及んでいる。

おかげで×印の罅は大きく広がっていった。

饕餮が見捨里市に現れる準備ができていた。

ここで、饕餮によって起きた小さな異変を見てみよう。

人間が突然意識不明で倒れ、病院に運ばれるという事件が相次いだ。

仕組みとしては、饕餮が意識を食い、昏睡状態に陥らせるのだ。

医者は生命活動に異常がないため、手の施しようがないという、恐怖を広めるのに最適だった。

そして、とうとう饕餮が見捨里市に現れた。

その時――

「君達、ご苦労だったね」

刀を持った邪鬼が、麗羅達の前に現れた。

カリオストロは護符を何枚か所持しており、つるぎは自身の剣を握り締めている。

「ボク達は饕餮を呼んだ。これから見捨里市は暗き闇に落ちるだろう。それでいいのか

いっ。」

「ああ、それでいいんだ。……怪を呼んでくれてありがとう。君達は、もう用済みだよ」
そう言つて、邪鬼は刀を抜き、つるぎに振り下ろそうとした。

すると、つるぎは劍の姿に変化し、カリオストロの手に渡つて邪鬼の刀とぶつかった。
「待て、用済みとはどういう事だ？」

「文字通り、見捨里市を混乱させた時、君達は必要ないつて事さ」

「何……！」

騙されていた事を知り、齒を食いしぼるカリオストロ。

邪鬼とカリオストロは鏢迫り合いを続けている。

「……そういう事だつたんだね」

麗羅はナイフを取ると、邪鬼に向かつて投げつけた。

邪鬼は鏢迫り合いを解き、ナイフの柄を握り、麗羅が投げたナイフを地面に捨てる。

麗羅は舌打ちし、再びナイフを構え直す。

「ウチらは元々捨て駒だったのかい、だったら殺すしかないようだね」

怒りの表情になつた麗羅は、邪鬼に対し殺意を向ける。

揚羽も「許せない！」といった表情をしていた。

四人は邪鬼に敵意を向けていた。

すると、邪鬼は刀を持っていない左手を掲げて、この場に饕餮を呼び出した。

「君達は饕餮の餌になるがいいさ！」

「待って！」

邪鬼はそう言った後、刀を振って×印の罅を作り出し、その中に逃げ去った。

揚羽は追いかけようとしたが、×印の罅はすぐに消えてしまった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

饕餮は唸り声を上げて、麗羅達に襲い掛かろうとした。

怪現象を止めるために、この怪を麗羅達が倒さなければならぬ。

「責任を押し付けてさよならするなんて、卑怯だね」

「もう！ 逃げないでよー!!」

「愚痴を吐く暇があったら、コイツを倒すんだよ！」

「は、はーい!!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「うっ……」

饕餮は揚羽に突っ込んでいき、彼女を「食う」。

揚羽は重圧を受け、魔力が流れ出る感覚を感じる。

「そらっ!!」

揚羽は何とか空を飛んで、饕餮に鱗粉を振り撒いて防御を弱める。

麗羅は饕餮の防御が薄い部分を見極め、そこに向かってナイフを投げつける。

「ゆくぞ、爆炎符！」

カリオストロが投げた護符が饕餮に命中するが、饕餮は暴れ回って護符を振り払う。

護符は地面に落ち、そこから爆発した。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「この程度……」

饕餮がカリオストロを「食う」。

カリオストロは護符を使って攻撃を防いだ。

「つるぎ！ あそこが弱点だよ！」

「この攻撃、受け切れるかい？」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

麗羅が饕餮の弱点を指摘し、つるぎがそこを剣で突くと、饕餮は苦しそうな叫び声を上げた。

そして、黒い弾をばら撒いて麗羅、つるぎ、揚羽にダメージを与えた。

「この程度でウチを殺そうってのかい。甘いね！」

「怪は力ある怪の攻撃でも倒せるんだよ！」

麗羅は丸薬を飲んで体力を回復した後、ナイフを投げ、揚羽は毒の鱗粉をばら撒く。カリオストロ口は揚羽に治療符を投げて傷を癒した後、魔力を込めた符を投げつけ、束縛する。

「キミには倒れてもらわないと困るんでね」

つるぎは剣で饕餮を一閃、返す刀でもう一度斬りつけた。

饕餮はつるぎを食おうとしたが、つるぎが剣を使って攻撃を防ぐ。

「えーい！」

「そこだね！」

揚羽が羽を飛ばたかせて饕餮に鱗粉を撒いた後、

麗羅は揚羽の鱗粉がたくさんかかった部分をナイフで突き刺す。

「爆炎符」

「さあ、もうそろそろ終わりにしてもらおうよ」

カリオストロ口は炎の術式を込めた符を饕餮に投げて燃やし、つるぎが剣で饕餮を切り裂く。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「わっ！」

「きやあー！」

「これは痛いね……」

追い詰められた饕餮は『発狂』し、一時的に能力を大きく強化した。

そして不意打ちで麗羅、つるぎ、揚羽を「食い」、一時的に能力を減退させる。

だが、ここまで攻撃が強くなったという事は、饕餮の体力も残り僅かになったという証だ。

「キミの刃に幸あれ」

つるぎは剣の付喪神として、銘刀の魂を麗羅に分け与え、麗羅のナイフの威力を強化する。

「そっだー！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

麗羅が両手に装備したナイフが、饕餮の急所に突き刺さる。

とどめを刺すならば、今がチャンスだ。

「生まれ変わる時は、良き者に生まれ変わるんだよ」

つるぎは本体である剣を鞘に納めた後、一瞬で抜き、饕餮を切り裂いた。

彼の決意がこもった刃は、凶悪な怪すらも、真つ二つにした。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

そして、饕餮は黒い煙になって、この世界から消滅した。

「邪鬼君……彼は美しくなかったね」

「美しくなかったって？」

「怪は人を恐れさせるようなものではない。それを、邪鬼君は無理矢理恐れの変化に変わった。」

「饕餮も、邪鬼君そのものである『悪意』を食う事だつてあるからね」

「饕餮は何でも食う怪だが、それは悪しきものも食うという意味でもある。」

「怪というのは、少し不思議なものだというのが、つるぎの考えなのだ。」

「そして、つるぎは真剣な表情で言った。」

「麗羅君、逃げよう。彼と関わったら、こつちまで悪に染まってしまう」

「逃げる……そうだね、ウチはそれが得意だからね。よし、みんなで逃げよう！」

「こうして、麗羅、つるぎ、揚羽、カリオスト口は邪鬼を裏切り、

見捨里市で盗賊に身をやつすようになった。」

「怪が人間社会で暮らすためには、隠れて過ごすのが怪の「常識」だからだ。」

「当然、邪鬼は彼らを裏切り者として殺そうとしているようだが……それはまた別の話である。」

Wonder Dream

前編

「ひと時の夢に癒されてみませんか？」

町の暮らしの日常を離れて、たまには気分転換に素敵な夢はいかがでしょうか。
私は、どこかの夢の中であなたと出会った事があります。

夢というのは、ここではない地の記憶を写し取ったものです。

夢の中の出来事は、夢から覚めた時に全て無かった事になります。

夢の中で何をして、元の世界に影響を与える事はありません」

—— オープニングフェイズ1 上のエルフは夢を見る——
かみ

「ふわあああ……」

「ディアーナおねえちゃん、あさからおつきなあくびしてるね。どうしたの？」
「眠れないのよ」

最近、あたしは寝付けないでいる。

理由は、ここ最近、同じ夢ばかり見ているからだ。

「ノノは？ 寝付けない事、ある？」

「ううん」

「アプリルとジャネットはどうなの？」

「変な夢なんて、見ないなあ」

「私も、変わった夢は見ませんよ」

ノノに聞いてみると、彼女は首を横に振った。

アプリルと、リーダーのジャネットも首を横に振る。

どうやら、奇妙な夢を見ているのは、あたしだけのようだ。

早めに対策を立てなければ、寝不足で調査に支障が出てしまう。

そこで、あたしは未来予知ができる彼に相談する事にした。

「チェイニー、あなたに相談があるの。ここ最近、あたしは変な夢を見るのよ。

白い影とか、チャージャーゲームとか、不幸になる、とか」

あたしは原因を調べるため、チェイニーに夢の詳細について聞いた。

すると、ふむ、とチェイニーは顎に手を置いた。

「それは、間違いなく怪奇現象じやな。儂が見た映像の中にも、お主の夢は無かったぞ」

「え………？」

チェイニーの予知が届いていない？

これはどういう事なのだろうか、とあたしは話を続けた。

すると、チエイニーは神妙な面持ちでこう言った。

「お主の夢について、もう一度、具体的に聞かせてくれぬか？」

「え、ええ」

あたしはチエイニーに、夢の内容を具体的に話した。

「……どうやらお主の夢は、何者かに干渉を受けているようじゃな」

チエイニーは、夢がどんなものなのかをあたしに言った。

つまり、これはただの夢ではない、という意味だ。

一体、誰がそんな事をしたのか、あたしは知りたくてたまらなかつた。

「……じゃあ、直接夢を見に行きます」

ここであたしができる事は、一つ。

あたし自身が夢の中に入って、異変を解決する事だつた。

「うむ、よく言った。では、これを授けよう」

チエイニーは、あたしに魔法の睡眠薬を渡した。

これを飲むと、夢の世界に入る事ができる。

夢の途中で起きれば意味がないので、これを飲んで犯人を捜しに行くのだ。

「では、健闘を祈るぞ、デイアーナよ！」

「……はい！」

あたしは覚悟を決めて、魔法の睡眠薬を飲んだ。

まどろみの中で、ぐるぐるぐるぐると何かが渦巻いていく。何が渦巻いているのかは、あたしにも分からなかった。でも、これだけは分かる。

これからあたしは、夢の世界に行こうとしているのだ――

――オープニングフェイズ2 闇医者は夢を見る――

オレの名はレイモンド、通称「レイ」。

都市伝説に苦しむ者を救済している闇医者で、

どんな患者でも詮索せずに面倒を見るのがオレの理念だ。

しかしその名は知られておらず架空の人物と言われている。

まあ、実在するかどうか分からない都市伝説を専門としているし、何よりも無免許医だからな。

町に患者の姿はどこにもない。

都市伝説は、粗方なくなつたという事だろう。

いや、あの赤いフードの男が、都市伝説と戦っているのかもしれない。

オレはまともに顔を見た事がないが、黒いフードの女と姿は似ていたようだ。

もしかすると、関係者なのかもしれないな。

「ん？ あれは……蝶か？」

ふと、大きな蝶が空を舞っているのを見た。

モルフオチョウでもないし、アレキサンドラトリバネアゲハともまた違う。

オレがその蝶を見ると、急に眠くなってきた。

「ああ、なんだろうな、眠い、眠い、ね、む、い……」

そして、オレは抵抗できずに、眠りに落ちた。

「ひと時の夢を、楽しんでください」

——ミドルフェイズー　そして、夢の中——

「うあ……。ここは……どこ？」

どうやら、あたしは夢の世界に来てしまったみたいね。

頭がぼやーつとして、集中できない。

「えーつと……夢の中で変な声が聞こえてきて、

誰かが夢に干渉しているってチエイニーが言ってる……」

あたしはこれまでの出来事を思い出す。

誰かのせいで、あたしは同じ夢ばかり見させられている。

でも、誰が夢に干渉しているのかは分からない。

だから、チエイニーが作った薬を使って、あたしは夢の中に入る事を決めたの。

そしたら、あたしが来たのは、夢の中の見捨里市だった。

誰があたしの夢に干渉しているのか知りたかった。

「ん?」

見捨里市を歩いていくと、あたしは黒い服を着た男と出会った。

とても有名な漫画に出てきそうな人だったわ。

「あなたは誰なの?」

「名前は自分から名乗るものだ」

「……あたしはディアーナよ」

あたしが男に自分の名前を名乗ると、

男は頷いて「レイモンド」と名乗った（通称は「レイ」っていうんだって）。

どうやら、彼は医師免許を持たない……要するに非正規の医者らしい。

何となく胡散臭いけど、あたしも放浪の身だし、偉そうな事は言えないわ。

「あたし、今朝から同じ夢ばかり見ているの。だから、夢の中に入って解決したいのよ」

「そうか……オレも、旅先で奇妙な蝶を見て、この夢を見たんだ」

「はっ!?!」

レイまで同じ夢を見たの!?!

これはただ事じゃないわね。

早く、夢を見せている奴を倒しに行かなきゃ!

ドラキュラとかネツシーとか、そんな奴に並ぶほど強い『怪』って、どこにいるのかしら?」

「レイ、早く調査に行くわよ!」

「待て、早まるな。冷静になれ。勢いのままに突き進んだら異変は解決できないぞ?」

「……そうね」

レイの言う事は、正論だ。

あたしは仕方なく、情報収集のために彼と共に見捨里市を歩くのだった。

「ねえねえ、公園にいた変な生き物、あれ何だったのかな?」

不意に、少女の話した声があたしの耳に届いた。

見ると、傍にあるファストフード店の前に、制服を着た女子高生がいた。

ケースに入ったテニスのラケットを持っていて、部活帰りのようだ。

「あたし、襲われるかと思った」

「私も。『ナーデーヤー』って不気味な声で鳴いてたもんね」

「ナーデーヤー?」

そんな鳴き声をする生き物は、あたしも全く知らなかった。

でも、あたしには確信がある——あたしは彼女達に駆け寄った。

「その公園ってどこなの!？」

聞いた事のない鳴き声。

そして、人間に襲いかかろうとした。

考えられる可能性は一つ——この夢を見せている、怪だ。

あたしは少女達からどの公園で見たのかを聞くと、慌てて駆け出した。

逆に、レイは冷静に、ゆっくりと歩いた。

怪は邪鬼という少年によって、とある地球にある見捨里市にやって来る。

怪がもたらす現象は変な鳴き声、奇妙な音や臭い等、大抵は小さな異変から始まる。

(もしかしたら、怪のせいであたしは変な夢を見ているかもしれないわ)

多分、あたしが見る夢に干渉してるのは、怪だと思う。

人を不幸にする力を持った怪かしら?

だけど、あたしがする事はただ一つ。

(この夢の謎を解いて、脱出する事よ!)

あたしは拳を強く握り締め、レイと一緒に町外れにあるパンダ公園にやってきた。

女子高生達は、ここで怪を見たらしい。

すると、あたしとレイは茶髪に緑の瞳の少年、勇気と出会った。

「勇気! あなたに話があるの! この夢を見せてるのは、誰?！」

「な、ななな何!？」

いきなり話しかけられた勇氣が、驚いて尻餅をついた。

あたしは悪い事をしてしまったから、謝り、そして勇氣に落ち着いて事情を話した。

「なるほど……君達もこのおかしな夢を見たんだね。あれ? そこにいるおじさんは、誰?」

「オレはまだ26歳だから、おじさんじゃないぞ」

レイは勇氣に「おじさん」と言われてちよつと傷ついたようだ。

そりやそうよ、レイはまだ若いもの。

「オレの名前はレイモンド、レイと呼んでくれ」

「改めて、僕は真之勇氣といます」

レイと勇氣は互いに自己紹介をした。

夢の中だけど、勇氣とレイって、小学生と無免許医だから、水と油……なのかしらね。
「まったくもう、怪はどこに居るのよ?」

あたし達は辺りを見渡したけど、どこにも怪らしきものはいなかったわ。

幸い、公園にはあたし達以外には誰もいない。

あたし達は、女子高生達が怪がいたと言っていた、水道のところまでやって来た。

怪は、ここで水を飲んでいたらしい。

でも、水道の傍の茂みを探しても、それらしき生き物はいなかった。

「もう、どこかに移動したのか？」

「そう言えば、どんな姿をしているんだろう……」

先ほど女子高生から聞いたのは、公園で怪らしき生き物の鳴き声が出たこと、その生き物が水を飲んでいただけだ。

「ちゃんと聞いておけばよかったわ……」

もう少し、きちんと調査するべきだったわ。

あたし達は、周囲を見回しながら公園を出た。

その時、ブレーキ音とホーンが響いて、あたし達の目の前に『車』が迫ってきた。

「きゃっ！」

怪を探すのに夢中になって、赤信号なのに、道を渡ろうとしてしまったのだ。

あたしは風の魔法を使って一瞬だけ宙に浮き、レイを連れてすぐさま退避した。

でも、勇氣には届かない……！

夢の中とはいえ、死んだらもう戻れなくなるかもしれない……！

「勇氣、逃げて!!」

あたしは勇氣に向かってそう叫んだ。

その時、誰かが勇氣の腕を引いた。

勇気が歩道に引き戻され、尻餅をついたその時、目の前を車が通過していった。どうやら、間一髪で誰かが助けしてくれたのだ。

「まさか、あいつは……」

助けてくれた相手は、レイが知ってる相手らしい。

「あ、あの、ありがとうございます！」

勇気が礼を言うと、赤いフードの背中が立ち止まった。

レイが知ってるって事は、レイと同じ世界に住んでる子かしら。

早く夢を見せてる怪を探さなきゃ。

「ちよつと待ちなさい」

あたしは少年の前に回り込んだ。

「あたし、夢の中に潜む怪を探しているの。」

この変な夢を見せてるのは、もしかしたら怪じゃないのかって

「怪って？」

その少年は、中学生の姿をしていた。

どうも冷たそうな雰囲気、親しみやすそうには見えなかったわ。

もつと、こう、熱い感じだと思ったのに。

「怪というのは何だ？」

「あつ、えつと」

赤いフードの少年が、あたしに質問を繰り返してきた。

まあ、無理もないわよね。

この世界の一般人に『怪』と言っても通じるわけがないんだから。すると、少年はあたしをじつと見つめて、ふと小さく笑った。

「……怪、か。君は、怪というものを追っているんだね」

「そうよ。で、あなたは何を追ってるの？」

「僕が追っているのは、『都市伝説』だ」

「都市伝説？」

出会った事はないけど、町で噂されている不可思議な現象や怪物、怪人の事だと本にあつたわ。

怪は昔から伝わるもの、都市伝説は現代人の噂から生まれたもの。

だから、都市伝説は怪と似ているけど、全く別物なのよ。

「話に割り込ませてもらってすまないが、オレはそいつに傷つけられた奴を治している」なるほど、だからレイは無免許なのね。

都市伝説を専門とする医者なんて、そうそういないものね。

「でも、都市伝説は単なる噂でしょ？」

あたしは疑問を投げかけたが、少年はそれには答えない。

「僕は都市伝説の呪いを回収するために、町から町へと旅をしている」

「回収？」

あたしには、その言葉の意味がピンと来なかった。

でもそれは、あたしが怪を『狩っている』のと同じだろうと思ったわ。

どうやら、彼はまた何かの理由があつて都市伝説を『回収』しているようね。

レイは難しい顔をしていたみたいだけど、今は気にしないでおきましょう。

「あなたにとつての都市伝説は、あたしにとつての怪。一緒に探しましょう」

あたしは笑みを見せて、少年に手を差し出した。

「その必要はない」

「へっ？」

少年は、あたしと握手をする事なく歩き出した。

「ちよ、ちよつと！ 力がないと一人は危険よ！」

「危険なんかじゃない」

「だけど、仲間がいた方がいいわよ！」

「君とは知り合つたばかりだ」

「ま、あなたはあたし達の事、よく知らないもんね。あつ、あたしはディアーナよ。」

こっちはレイモンド、通称レイ。こっちの子は真之勇氣よ」

「僕がいつ名前を聞いた？」

「冷たいわね」

あたしはそう吐き捨てながら、レイ達と共に少年を追った。

レイは少年を見て険しい顔をしながらこう呟いた。

「お前が人を助けるより呪いの回収を優先するから、オレの仕事が増えるんだ。

オレはもう、二度と仕事はしたくないのに……」

「仕事はしたくないって、どういう事？」

あたしが首を傾げていると、勇気が声をかけた。

「……あの、僕の出番は？」

「今回はあたしが主役よ？」

後編

——ミドルフェイズ2 都市伝説の正体は——

「ねえ、どこに行くつもりなの？」

「教えてよね」

しばらくして、あたし、勇気、レイは無言のまま前方を歩く赤いフードの少年に声をかけた。

すると少年は立ち止まり、周囲を眺めた。

「公園にいなかったという事は、恐らくこの辺りにいるはずだ」

「この辺り？」

見ると、先程の商店街に戻って来ていた。

「まさか、都市伝説の怪物はあの子を襲おうと思ってるんじゃない？」

公園で目撃した少女達を追って、ここまで来たのかしら？

早く探さないといけないわ。

あたし達がそう思って駆け出そうとすると、少年は首を横に振った。

「あいつは人を襲ったりしない」

「あいつ?」

どうやら少年は、怪物の事を以前から知っているようだ。

因縁の相手——ますます、一人で戦うのは危険だわ。

「君が何て言おうが、僕も力になる」

「一緒に戦うわよ!」

「……頼む」

あかし達は真剣な顔つきになると、少年の方を見た。

「あれ?」

しかし、少年はいつの間にかいなくなっていた。

「ちよ、ちよつと?」

あかし達は辺りを見渡す。

すると、少年は商店街の裏にある細い路地に入ろうとしていた。

「ちよつと、一人じゃ危険よ!」

あかし達は少年の傍に走る。

だが、少年は何も答えず、路地へと入って行った。

「ああんも〜!」

「もうちよつと明るくなればいいのに」

勇気も仕方なく後に行く。

細い路地は、商店街に並んでいる飲食店の裏口になっていて、生ゴミを捨てるためのゴミバケツがいくつも置かれていた。

汚い臭いが飛び交うわね……あたし達が住む路地裏とは、大違いだわ。
「多分、ここにいるはずだ」

少年は歩きながら、ゴミバケツの蓋を開けて、中を確認していった。

「その中にいるの？」

「ああ、あいつは多分何人もの人達に姿を見られたはずだ。

だから、どこかに隠れなければと思ったんだ」

「それが、ゴミバケツの中って事？」

「あいつは、妙にゴミバケツの中が好きなんだよ——」

「そう……」

どういふ怪物なのか、ますます分からないわ。

怪と都市伝説の怪物は、やっぱり全く違うみたいね。

というより、そもそも都市伝説そのものが比較的新しいから、

人間の主観が色々と混ざってるのよね。

「だが、ゴミバケツの中が好きなら、変な臭いがしそうだな」

レイはそう言いながら、目の前にあったゴミバケツの蓋を開けた。

「ナーデーヤーー！」

突然、ゴミバケツの中から何か飛び出してきた。

サッカーボールぐらいの丸く黄色い物体。

その鳴き声は、女子高生達が言っていた声そのものだ。

「……」

「あなたが、変な夢を見せている都市伝説の怪物ね！」

あたしと勇気とレイは、少年を守るように身構えた。

しかし、そんなあたしの肩を少年は後ろから軽く触った。

「大丈夫だ」

少年は、怪物の方へと近づく。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「勝手にどこかに行かないでもらえるかな。——ジミー」

「ジミー？」

あたし達が戸惑いながら怪物を見ると、

それは、黄色いフードを被った、人間の顔をした犬だった。

「これって、何……？」

その言葉に、ジミーが反応した。

「これってなんや？ 俺は物やないで。俺は人面犬のジミーや！」

「わつ、人間の言葉を喋った！」

「当たり前や、俺は元々人間なんや」

「あら、獣人だったのね」

なんだ、ジミーって獣人だったのね。

てつきり、異形だと思っただけど……。

でも、だとしたら、夢を見せているのは誰なの？

「だけどさつき、ナーゲーヤーって」

「はあ？ 俺は『なんでやねん！』って言ったんや！」

どうやら、それが鳴き声のように聞こえただけらしい。

公園で女子高生達が聞いたのも、同じ言葉だろう。

ただの勘違いだったのね……はあ、あたしの努力は何だったのよ。

「まったく、俺は変な臭いなんかせえへんで。そもそも、ゴミバケツが好きなのやない。
い。」

今回も、公園から商店街まで来たらず子供達に見つかりそうになって、

それでバケツの中に慌てて逃げただけや！」

ジミーはゴミバケツの中が好きだと言われた事を気にしているようだ。

そんな彼の前に、赤いフードの少年が立った。

「それで、もう機嫌は直ったのかい？」

「そ、それは……」

ジミーは急にシユンとして、頭を下げた。

「俺が悪かった。たまには遊園地に行っても羽を伸ばそうなんて言つて。そりゃあ怒るよな。」

しかも俺、急に怒られたから逆ギレして、お前とはもうコンビ解消やなんて言うてもうて」

「どうやら、二人は相棒らしい。」

喧嘩をして、少年のもとからジミーが逃げ出してしまったようだ。

「俺、自分が情けないわ。お前に心配させて……」

ジミーがそう言うと、少年の口元が僅かに緩んだ。

「別に心配はしてないよ。君は僕のもとへ必ず帰つて来てくれるから」

その言葉に、ジミーは目を潤ませる。

「あ、当たり前やろ。俺はいつもお前と一緒にや！」

ジミーは笑顔で言うと、少年の足に嬉しそうに身体を擦りつけた。

でも、一つだけ解決していない問題がある。

それは、夢を見せている都市伝説の怪物の事だ。

「話は変わるけど、肝心の元凶はどこにいるの？」

「……そんなに夢の謎を解きたいんだね。だったら、僕と一緒に行こう」

「よし！ 都市伝説回収、見せてもらうわよ！ ね、レイ、勇気？」

「……うん」

「……ああ」

——クライマックスフェイズ 決戦——

あたしは、少年と勇気とレイと一緒に、この夢を見せている都市伝説の怪物を探した。

夢の中なのに、意識がはっきりしている。

やっぱり、これは都市伝説の呪いによって生まれた夢なんだ。

周りには誰もいない。

多分、都市伝説の怪物が周りの人を遠ざけたんだと思う。

そうよね？

あたし達が町の奥まで行くと、本を持った男の姿がいた。

でも、その男は黒い煙に包まれていて、まるで怪のようだ。

……この姿、もしかして……。

「あなたは……都市伝説『夢男』!」

「その通り。夢の中で相手を殺して、それを回避したら『夢と違う事をするな』と言う怪物だ」

勇気はごくり、と唾を呑む。

直接あたし達を殺しに来た怪はそこそこ多いが、こんな方法で殺しにかかるのは初めてだ。

「この夢から覚めるには、どうすればいいの？」

ううう、分からないわ、こうなったらこの旋風剣で……」

「やめろ」

そう言ってあたしが旋風剣を取り出すと、レイモンドがあたしを止めた。

「夢の中で死んでも意味はない。夢から覚めるには、こいつを倒すしかない」

「倒すって……どうやって!？」

「君達は奴を引き付けるんだ。弱った時に、僕が回収する。時間はない、やるんだ!」

「え、ええええええ!？」

あたし達は少年に言われるがままに、都市伝説「夢男」と戦った。

「オオオオオオオオオオ!!」

夢男はレイに向かって闇の波動を放つ。

レイはメスを巧みに操って、夢男の攻撃を打ち消した。

「みずのせいれいよ、わきあがるすいりゆうとなりててきをのみこめ！ Aqua Spread」

あたしは周囲に漂う水の精霊に呼びかけ、夢男に大量の水を放った。

水は夢男の身体を飲み込み、動きを鈍くする。

「浄化する！」

レイはメスを抜き、夢男に斬りかかる。

夢男はまたもや攻撃をかわしたが、それはフェイントだった。

「喰らえ！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

レイのメスが、夢男の身体を貫く。

呪いを浄化する力を込めており、夢男には効果的だった。

「ぼ、僕だって！ 怖いけど、戦うぞ！」

勇気は落ちていたレンガを拾って、怖がりながらも夢男に近付いてそれで殴った。

随分と都合の良い展開なこと。

「オオオオオオオオオオオオ!!」

夢男が強大な力を拡散し、広範囲に効果を与える。

攻撃を食らったたら、ただではすまないかも……!!

「ひかりのせいはいよ、かたきまもりをわれらに! Ether Armor」

あたしは光の精霊に呼びかけ、せめて勇氣だけでも守ろうと思った。

力は少年とあたし、レイに影響を及ぼし、勇氣は光の壁によって守られた。

「みずのせいはいよ、わきあがるすいりゆうとなりてきをのみこめ! Aqua Spread」

あたしの水魔法が当たって、夢男が水に飲み込まれる。

もう少して、奴にとどめを刺せそうだ。

「……頼むわよ!」

「ああ!」

少年は男を睨むと、真っ赤な手帳を取り出し、開いた。

「セラテイロノ セツウイロノ シャ・エイ」

少年は呪文を唱える。

解

次の瞬間、男から奇妙なマークが現れ、キラキラと輝き、

開かれたページに反転して写し取られた。

男は黒い霧になり、この世界から消え去った。

「……終わったのね」

「ああ、終わった……」

都市伝説との戦いは、終わった。

世界の風景が、どんどん歪んでいく。

やはり、この夢の世界は、あいつが作ったものみたいだ……。

「……あくまでもこれは夢の中だから、僕達の世界には影響がないけれど。」

君達と戦えて、本当によかった」

どうやら、少年はあたし達と一緒に行動できて、本当に嬉しかったらしい。

まあ、本当に嬉しいかどうかは、定かではないけれど。

「行こう。次の町へ」

「ああ、そうやな！」

少年とジミーはその場から立ち去ろうとする。

そんな二人を、あたしはじつと見ていた。

すると、少年がふと、あたし達の方を見た。

「僕の名は千野フシギ。キミ達に出会えて楽しかったよ」

フシギという子は笑みを浮かべて、ジミーと共に去って行った。

「千野フシギ……」

あたしには、彼が何者なのかは分からない。

でも、一人じゃない。

フシギにはジミー、あたしにはノノ、アプ ril、チエイニー、ジャネットという仲間がいる。

仲間という大切な存在がいれば、きつと、どんな困難でも乗り越える事ができるだろう。

「次に目が覚めたらそこはあなた達の部屋、今回はここでお別れです。

また、どこかの夢で会いましょう……」

—— エンディングフェイズ 彼女は目覚める ——

「はあ、はあ、はあ」

あたしはようやく、長い夢から覚めた。

汗をびっしょりかいた。

ある意味で、とんでもない夢だった。

「随分うなされていたようじゃの。一体何があったのじゃ？」

「あ、チエイニー」

あたしは夢の内容を、チエイニーに話そうとした。

でも、霧がかかったみたいに、夢の内容は思い出せない。

夢にしてははつきりとしたのに、何故か思い出す事はできなかつた。

「えーっと、赤いフードの少年が夢に出てきた、って事は思い出せるけど、彼が元凶？

ああ、もう、何も思い出せないわよ……！」

こうなつたら、また休むしかないか……。

「変な夢を見ませんように！」

それ以降、あたしは変な夢を見る事はなくなつた。

でも、またその夢は見るかもしれない。

その時はきつと、楽しい夢になる事を願っている。

e p i s o d e 5 | T h e a p p r o a c h i n

g n i g h t m a r e 〽 彷徨う怪達

1 | 奇妙な男女

「あの夢は、一体何だったんだろう……」

放課後。

勇氣は、学校から帰って来ると、いつものように書齋にこもっていた。

傍には本が何冊も積み上がっていて、その山を見て勇氣は溜息を漏らす。

先日、勇氣は奇妙な夢を見た。

それは、邪鬼によって消されてしまったと思われていたキユウが、

ピラミッドのような建築物の頂上にある神殿の前に立っているというものだ。

キユウは勇氣の方を見て、何かを言おうとしていた。

彼が何を言おうとしていたのかは分からない。

「だけど、あれはただの夢じゃない……」

キユウはあの神殿の前で、勇氣が来るのを待っているのかもしれない。

勇氣は夢を見てからというもの、毎日父親の書齋で怪奇現象や超常現象の本を調べ、あの建築物を見つけ出そうと思っていた。

しかしどれだけ調べても、全く手がかりは得られなかった。今日も成果はゼロだ。

「もしかしたら、キユウはあそこに捕らえられていて苦しんでるのかも」

一刻も早く、あの建築物を見つけ出してキユウを助きたい。

それなのに手がかりがない。

勇氣は、日に日に焦るようになっていた。

「まあまあ、落ち着いテ。焦っても何もいい事ないと思うゾ」

プーカが飛びながら、ドアの隙間から部屋に入ってきた。

くるみパンを大事そうに抱えている。

「プーカ、また勝手にリビングに行ったの？」

「安心しろ。キミのお母さんには見つからないようにパンを取ったから」

「見つからないって、あのねえ！」

プーカは、目を離すとすぐにリビングへ行ってくるみパンを取って来る。

最初はバレないように必死に隠れながら移動していたが、最近は堂々と家の中を飛んでいる。

「お母さんに見つかったら、何て言えばいいんだよ」

「だから大丈夫だった。見つかったら見つかったで、友達になればいいだけだしネ」
「友達って。怪と人がそう簡単に友達になれるわけがないだろ！」

幻想郷じゃあるまいし、プーカを見たら、母親はきつと悲鳴を上げるだろう。

「今度からくるみパンが欲しい時は僕に言って。取って来るから」

勇気は溜息交じりにそう言った。

その時、ドアが開いた。

「やばい！」

勇気は母親が入ってきたのだと思い、飛んでいるプーカを掴むと、ポケットに入れた。

「いやあ、今日は天気がよくて暖かいねえ。あつ、ポケットには何も入ってないよ。

ちよつと寒いかもって思って、手を入れてるだけだから」

勇気は下手な作り笑いをしながら、ポケットに入れた手をアピールする。

すると、入ってきた人物が大きな溜息を漏らした。

「言ってる事が滅茶苦茶なんだけど」

「えっ？」

ドアの前に立っていたのは、羽心だった。

「おい、妖精をいきなりポケットに突っ込むのはよくないゾ！」

プーカが怒りながらポケットから出て来る。

「いやあ、あの、あはは。ところで羽心、今日はどうしたの？」

勇気は笑って誤魔化しながら、話題を変えた。

すると、羽心は険しい表情になった。

そんな羽心を見て、勇気はハツとする。

「まさか」

「そう、そのまさかよ」

羽心は勇気をじつと見つめた。

「町にまた、怪現象が現れたわ」

その頃、ディアーナとジャネットは、見捨里市に襲撃してくる怪の話をしていた。

それは、見捨里市に襲撃してくる怪の話である。

だが、危機感を抱く勇気達とは裏腹に、ディアーナとジャネットは楽天的だった。

「ジャネットはフランスの英雄だっけ？」

あたし、イギリスに行った事はあるけど、フランスに怪なんていたかしら？」

「遠回しに私を見下す気ですか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

ディアーナはネットシー、ファフロツキーズ、コテイングリーと、

かつてフランスと敵対していたイギリスに行く事が多かったため、

フランスに怪は存在しないのかと思っていた。

ジャネットはかつての事を思い出して眉を擡ひそめる。

「人間でも怪になる事はありますか？」

「あるわ」

「なら、ジルも怪の素質はありますね」

「ジル」とは、童話「青髭」のモデルになったと言われている、ジル・ド・レイの事だ。

ジャネットことジャンヌ・ダルクの戦友だったが、

彼女が魔女として火炙りとされた事から正気を失い、狂ってしまったのだという。

「じゃあ、ジルもツタンカーメンみたいに、怪になる可能性はあるのね？」

「絶対にないと言い切れません。……ところで、話は変わりますが」

「何？」

「ディアーナ、今日は仕事を休んでも構いませんよ」

「ホント？ やったあ！」

ジャネットから休息を貰って、喜ぶディアーナ。

「その代わり、仕事に行く人は自分から立候補してもらいますよ」

つまり、今日の仕事は立候補制である。

行くのも自由であり、行かないのも自由なのだ。

「じゃあ、ノノがいく!」

最初に立候補したのは、ノノだった。

彼女は鳥に変身する事で高い飛行能力を得る事ができ、歌を歌って味方を鼓舞する事ができる。

サポート役としてこれほど役に立つ怪はいない。

「儂も行こう、ノノだけでは不安じゃからな」

次に立候補したのは、チェイニーだった。

ノノはまだ幼いため、怪の中でも攻撃力と実力が高い彼が同行する事にしたのだ。

「よろしい、ノノとチェイニーが行くのですね」

「うん! ジャネットおねえちゃん、ノノ、がんばって『かいがり』するからね!」

「一刻も早く事件を解決する事、それが儂らの仕事じゃ」

元氣いっぱいなのノノと、落ち着いた様子のチェイニー。

対照的だが、怪狩りに向かう気持ちは同じだ。

「じゃあ、あたし達は留守番ってわけね」

「怪我するんじゃないぞ、ノノ、チェイニー!」

デイアーナとアプリルは、今日は路地裏の建物で留守番する事になった。

二人は勇気と羽心、そしてプーカに同行しようとするノノとチェイニーを笑顔で見送った。

「あ、そういうえば、ジャネット……どんな怪が出てくるか、分かっているの？」

「ええ、私には御見通しですよ」

ジャネットはにつこりとダイアーナに微笑んだ。

「ここが現場よ。あら、ノノちゃんにチェイニーさんも来てるのね」

勇気は羽心と共に、住宅地の路地にやってきた。

既に現場には、ノノとチェイニーも来ている。

「うん。ノノ、しごとしにきたんだ」

「ノノだけでは心許ないからもう」

昨日ここで、部活帰りの三人の中学生が奇妙な男女に襲われそうになったのだ。

「その二人は死んだような青色の顔をしていて、

フラフラと歩きながら、中学生を捕まえようとしてきたらしいの」

「怪の力を受けてそうなったって事なのかな？」

「さあ、それはまだ分からないけど」

「青色の顔ねエ」

プーカは四人の傍を飛びながら、「うーん」と唸った。

「プーカ、どんな怪の力か知ってるの？」

「勇気クン、まあ待つんだ。焦っても何もいい事ないと思うゾ」
「？」

「またそのセリフ？」

「とりあえず、調べてみましょう」

「あ、うん、そうだね」

勇気達は路地を歩き出そうとした。

「助けてえ！」

突然、路地の向こうから、一人のおばさんが走ってきた。

「どうしたんですか？」

「変なカップルがいたの！」

「それは、青い顔のフラフラと歩く人か？」

チエイニーの言葉に、おばさんは何度も大きく頷いた。

「路地を曲がったところにいたわ！」

「羽心！」

「ええ！」

「いっくよー！」

「……だー！」
勇氣、羽心、チェイニーは同時に角へと走り、ノノは鳥に変身して空を飛んだ。

勇氣達は路地の節を曲がると、身構えながら道路を見た。

しかし、誰もいない。

「移動したのかしら？」

「まだ近くにいるはずだ」

三人はさらに路地を歩き、ノノは空を飛び続ける。

「えっ？」

角のところで、一人の男の人が蹲っていた。

「あの人、何だかヤバそうだな」

「もしかして不気味な男達に襲われたのかも！」

勇氣達は男の人の下へ駆け寄った。

「あの、大丈夫ですか？」

「救急車、呼んだ方がいい？」

勇氣と羽心は、男の人の様子を確認しようと顔を覗き込んだ。

「……！」

瞬間、三人は目を大きく見開いた。

男の人の顔は、死んだような青色だったのだ。

「アアアアア」

男はフラフラしながら立ち上がると、唸り声を上げながら手を伸ばし、勇気達を捕まえようとしてきた。

「こいつが不気味な男だ！」

勇気達は、慌ててその男から離れようとする。

だがその時、羽心の背中が誰かとぶつかった。

見ると、背後に死んだような青色の顔をした女が立っていた。

「ウウウウウ」

女は虚ろな目で呻き声を上げながら、羽心を捕まえようとする。

「嫌あああ！」

「やめてっ！」

ノノは変身を解除し、女を蹴り飛ばす。

「はやく、にげて！」

「場合によっては戦いも必要じゃな」

チエイニーは血液から槍を生み出し、女を突き刺す。

「ウウウウ」

女が怯んだ隙に、勇氣と羽心、チェイニーはその場から駆け出し、ノノは空を飛んだ。

「何なんだ、あの怪現象は？」

「勇氣、見て！」

羽心は走りながら、空を指差した。

「ああ！」

空に、×印状の罅が浮かんでいる。

罅の中で、黒い煙がゆらゆらと揺らめいていて、罅はかなり大きくなっていた。

その罅の中から、何かが這い出ようとしていた。

「アアアアア」

それは、青色の顔をした不気味な人間だ。

「あれは怪現象じゃない！ 怪そのものだゾ！」

プーカが四人にそう言った。

「ジャネットはお見通し……分かっていたのじゃない……」

チェイニーがそう呟くと、罅から這い出た不気味な人間が、地面に落ちる。

不気味な人間は、フラフラとしながら立ち上がると、勇氣達の方へと歩いてきた。

「逃げろ！」

勇氣は羽心達を連れて、走り出した。

「怪が直接こっちの時代に出て来たってことか」

「ねえ、邪鬼の力が強まってるんじゃないの？」

「……」

「そんな！ だけどあれは何なんだ？」

勇気の焦る声に、プーカが反応した。

「思い出したゾ。あれは『ゾンビ』ダ！」

「それって映画とかドラマに出てくるあのゾンビって事？」

「テレビ？ 映画だっテ？ それはよく分からないけど、奴らはゾンビで間違いないゾ」

プーカの言葉に、羽心は走りながら頷いた。

「死んだような青色の顔に、虚ろな目、それにフラフラとした歩き方。」

プーカの言う通り、あれはゾンビよ」

「くっ、ゾンビが来るなんて……」

「えー、じゃあディアーナおねえちゃん、こなくてよかったのかな」

「暢気に言ってる場合じゃないだろ！」

メデューサがこちらの世界に来た時以来の重大事件だ。

このままでは、見捨里市がゾンビだらけになってしまう。

「羽心、家に戻るぞ！ どんな怪か分かれば倒す事ができるはずだ！」

「フノたちも、いくよー！」

怪を倒せば、全てが元に戻る。

町に現れたゾンビ達も消えるのだ。

勇気達は家へと向かった。

2 — 小さな町

勇氣達は家に帰って来ると、書斎に駆け込んだ。

「ゾンビの弱点……ゾンビの弱点……」

「燃やせばいいのじゃがな……」

勇氣達は、倒すための道具を探す。

すると、プーカが口を開いた。

「ゾンビの弱点は頭だゾ」

「頭？」

勇氣と羽心は同時に首を傾げた。

チエイニーは、うむ、と頷いた。

「儂の槍さえあれば、ゾンビを一撃で仕留められるぞ」

「その前に、どうすればいいんだよ」

「そうだ！ 音はどうかしら？」

羽心が勇氣達を見た。

「音ってどういう事？」

「以前本で読んだ事があるの。」

ゾンビには意思はなくて、ただ音の鳴る方に動く習性があるって」

「そう言われれば、確かに意思はなさそうだったよね」

「でしょ。音を鳴らして上手く誘導して、チェイニーさんが頭を攻撃した後、

海や池に沈めれば倒せるんじゃない？」

「なるほど。羽心チャン、ナイスアイデアだゾ！」

「儂も手伝うぞ」

「音か……」

勇気は書斎の中を眺めた。

すると、棚に飾られていたある物が目に留まった。

「これならいけるかもー！」

それは、民芸品の『横笛』だ。

「いいわね。笛なら遠くまで音が聞こえるものね！」

「ノノもうたえるから、うたうよ！」

横笛とノノ、二つの音があれば、ゾンビを撃退できるはずだ。

勇気は両手に太陽と月のグローブを嵌めると、横笛を手に取った。

「羽心もー！」

「うん！」

羽心は、ポケットから、星のグローブを取り出す。

そして、それを右手に嵌めた。

「よし、行くっ！」

プーカが勇気の服の胸ポケットに入る。

勇気は、壁に近づくと、左手をかざして呪文を唱えた。

「カオス・ゲート
時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな光の渦ができた。

勇気、ノノ、チエイニーは、光の渦の中に飛び込む。

羽心もそんな勇気達を見ながら、その後が続いた。

勇気、羽心、ノノ、チエイニーは、光のトンネルの中で必死にバランスを取る。

目が回るし、頭が回る。

それでも四人は前を見つめた。

やがて、光のトンネルの奥に、地面が見えてきた。

「はっ！」

勇気、羽心、ノノ、チエイニーは、綺麗に着地をした。

「おお、見事だねえ！」

「完璧でしょー！」

羽心は勇気のポケットから顔を出した。プーカに、笑顔でピースをした。ノノとチエイニーも、笑みを浮かべる。

一方、勇気は周りの景色を確認していた。

「ここはどこなんだ？」

照り付ける太陽の下、見渡す限り荒れた大地が広がっていた。

遠くに、道路が見える。

道路は果てしなく真っ直ぐ伸びていて、車は走っていない。

かなりの田舎のようだ。

「ねえ、あそこー！」

羽心は、道路の向こうを指差した。

そこには、いくつかの家が見えていた。

「行ってみよう」

勇気達は、慌てて駆け出した。

「ここは、町だよね……っ！」

建物の傍までやってきた勇気達は首を傾げた。

小さな家が、ポツンポツンと10軒ほど建っている。

その家の近くに車が止まっているが、人の姿はない。

「町にしては小さすぎるような気がするけど」

その時、建物の隣から、ワンピースを着た、勇気達と同じぐらいの歳の少女が現れた。

「あなた達は誰？」

「ええつと、僕達は……」

「もしかして、あなた達も親を連れ戻しにきたの？」

「なに、おやを？」

「『あなた達も』とは、どういう意味じゃ？」

チエイニーが尋ねると、少女は正面に見える一軒の家を見た。

「私のパパ、あそこで『宇宙人ホテル』を経営しているの」

「宇宙人ホテル？」

家の前には看板があり、宇宙人のようなイラストが大きく描かれている。

「ええつと、ここはどこ？」

「どこって、レイチエルの町よ」

「レイチエルって言われても、流石にそれだけじゃ分からないよ」

勇気が困った顔を見ると、隣にいた羽心が口を開いた。

「宇宙人……レイチエル……そっか、ここがどこか分かったかも」

「えっ? どこなんだ?」

「『エリア51』の近くよ!」

「えええ!」

「なるほど」

勇気は驚きながら羽心を見た。

「それって、宇宙人の秘密基地があるって軍の施設だよね?」

「そう、アメリカで有名なUFOスポットよ!」

勇気も世界の不思議に関する本などで、その名前を何度も見た事があつた。

「エリア51」

アメリカのネバダ州にある空軍基地。

この基地の近くでは、UFOの目撃情報が多く、軍と宇宙人が極秘に手を組み、

UFOの飛行実験を行っているのでは、と噂されている。

一般人は近づくとできず、もし禁止エリアを越えて侵入すると、

警備員に発砲される恐れもあるという。

「私には、エリア51の近くに、UFO好きの人達が作った町があるって書いてあつた

よ」

「そう、それがこのレイチエルの町よ」

羽心の言葉に、少女は大きく頷いた。

話を聞くと、彼女はアリスといい、勇気達より1歳年下だった。

今は、1990年らしい（つまりアリスの生年は1979年）。

2、3年ほど前から、この辺りでUFOがよく目撃されるようになり、

エリア51が注目されるようになったという。

アリスの父親は、元々アリス達家族と一緒にサンフランシスコで暮らしていた。

だが、2年前にUFOブームを知ると、一人でレイチエルの町に引っ越してしまい、

ホテル兼お土産屋を始めたのだという。

「パパ、すぐに帰るって言ったんだけど」

2年経っても、全然帰って来る気配がないという。

そのため、アリスと母親が呼び戻しにきたのだ。

「2年も帰って来ないなんて、随分いい加減なお父さんね」

羽心は、アリスの父親の行動に呆れる。

その中、勇気は苛立ったような表情を浮かべた。

「家族が待ってるのに帰って来ないなんて、そんなのよくないよ」

「勇気……」

勇気の父親は、勇気が2歳の時、出張中に事故に遭って死んでしまっていた。

勇氣は今でも父親に会いたいと思っていた。

そのため、家族のもとへ帰らないアリスの父親の行動に腹が立ったのだ。すると、宇宙人ホテルから二人の大人が出てきた。

「ママ、パパ！」

アリスは二人に声をかける。

「どうやらアリスの母親と父親のようだ。」

「アリス、あなたからも言つてちょうだい。この人、宇宙人は本当にいるつて言うのよ！」

「ええ？　パパまだそんな事言つてるの？」

「アリス、パパはここに住んでよく分かつたんだ！」

「この世の中にはね。僕達がまだ知らない存在や現象がたくさんあるんだ。」

「軍は何かを隠してゐるつて、ポールが言つていたからねえ」

「ポール？」

「ああ、この町に住んでいるバンドマンだよ！」

父親は少し離れた場所に見えるトレーラーハウスを指差した。

「ポールは自分の作つた音楽を宇宙人に聞かせるために、この町に引越してきたんだよ。」

トレーラーハウスは完全防音になっててねえ、

彼は毎日『宇宙人ラブラブロック』という歌を練習しているんだよ」

「何それ？」

「ポールが作った名曲さ。宇宙人も地球人もみんなラブラブでロックを歌おう」

「この町のみんなは宇宙人が大好き」

「みんなだいすきうちゅうじん」

父親はノリノリで歌を歌う。

ノノもそれに合わせて歌った。

「何だか妙にテンションが高い人だね……」

勇氣達は、戸惑いながら父親を見た。

「おや、君達は観光客かい？」

「うん！」

父親は満面の笑みを浮かべて、勇氣達の下へやってきた。

「お土産にエリア51クッキーはどうだい？ 宇宙人キーホルダーもあるよ！

今なら三つ買ったら一つオマケするよ」

「かうかう！」

「いや、ええっと、その」

そんな父親を見て、アリスが声を上げた。

「もうパパ、やめて！ 宇宙人なんかいるわけないでしょ！」

あなた達からもそんなのいないって言ってあげて！」

アリスはそう言うが、勇気は困ったような表情を浮かべた。

「エリア51にUFOとか宇宙人がいるかどうかは分からないけど、

この世の中には僕達がまだ知らない存在や現象があるのは事実だよ」

勇気は、キユウと出会い、今まで様々な怪と遭遇してきた。

「地底人とかもいたもんね」

羽心もその時の事を思い出して、身震いした。

「宇宙人はまだ出会った事はないけど、宇宙人型のロボットは会った事があるよ」

それは、フラットウツズ・モンスター・の事だ。

「ノノ、とりさんだよ」

「儂は神じゃがな。エルフや英霊もいたぞ」

「それに、オイラもいるしネ」

プーカが勇気の服の脇ポケットから顔を出して笑った。

「おおお、何だいそれは〜？」

「えっ、あ、いやあ、ただのオモチャです！」

勇気は慌ててプーカをポケットの中に押し込んだ。

「君が出てきたら話がややこしくなるだろ……！」

「いやあ、ついアピールしたくて」

「何なのよ！」

突然、アリスが声を荒らげた。

「あなた達もここに来てるって事は、宇宙人が好きって事だもんね！」

アリスは勇気達を睨んだ。

「えっと、僕達は宇宙人が好きじゃなくて」

「そうよ。怪奇現象全般が好きなだけよ！」

「羽心！」

「もういい！」

アリスは頬を膨らませると、母親の傍に駆け寄った。

「ママ、帰ろう。パパなんか知らない！」

「アリス、いいの？」

「いい！ 早く帰ろう！」

母親は戸惑いながらも、仕方なく帰る事にした。

「羽心、余計な事言っちゃだめだろ」

「私は正直に言っただけよ」

「ああもう！」

「……交渉失敗じゃな」

勇気は、アリスの父親の方を見た。

「とにかく、二人を引き止めて下さい。これじゃあ、本当に家族と会えなくなっちゃいますよ！」

家族がいつまでも一緒にいられるとは限らない。

父親のいない勇気には、それが痛いほど分かっていたので。

しかし、父親は明るい調子でこう言った。

「そんな事より、今は君達がお土産を買う事の方が重要だろ〜！」

「えええ？」

「君達、今夜この町に泊まるだろ？ だったらウチに泊まったらどうだい？」

親御さんはどこにいるのかな〜？」

父親はアリス達を放って、勇気達に営業を始めた。

「何なんだ、この人……」

「アリスちゃんが怒るのも無理ないわよね」

勇気と羽心は、父親の態度にゲンナリしてしまう。

その中、プーカがポケットの中から小声で話しかけてきた。

「ところで、ゾンビはどうなったんだイ？」

「そう言われれば！」

時空を超えてこの場所に来たのは、ゾンビを倒すためだったのだ。

「ゾンビなんてどこにもいないわよね？」

「あの、この辺りでゾンビを見ませんでしたか？」

勇気は父親に尋ねた。

「ゾンビ？ おいおい、この辺りでって、まさかゾンビがいるのかい？」

「ええ、多分いるはずなんです」

「おおお、それは凄イ！ 宇宙人にゾンビ！ これはさらに儲かるぞお！」

父親は一人で盛り上がった。

「商売の事ばかりじゃな……」

「だけど、ゾンビの事は知らないようね。この辺りにいるわけじゃないのかも」

「だったら、どうして時のトンネルが繋がった先がここだったんだ？」

「えー、わからないよ」

勇気達はどこを探せばいいのか分からなくなってしまうた。

「大変よ！」

その時、アリスと母親が走って戻ってきた。

「どうしたの?」

勇気が尋ねると、二人は道路の方を指差す。

何台もの車が列になって道路を走っているのが見えた。

どれも物々しい雰囲気を漂わせた緑色の大型車だ。

「どうして軍の車が?」

父親は目をパチクリさせた。

「軍って、アメリカの軍って事?」

「油断禁物じゃぞ」

勇気達が戸惑っていると、軍の車が町の入り口で停車した。

そして、銃を持った兵士達が降りてきた。

3 — 現れたゾンビ達

「全員、油断するな！」

髭を生やした大柄な男が、兵士達に言った。

「どうやら隊長のようだ。」

「勇気、あれ何？」

「そんなの分かるわけではないよ」

「ただならぬ雰囲気じゃな……」

「こわいよお……」

勇気達は戸惑いながら、兵士達を見ていた。

すると、少し離れた建物の裏手から、一人の青年が現れた。

青年は、フラフラとよろめくように歩いている。

その顔は、青色だった。

「いたぞ、ゾンビだ!!」

隊長が叫んだ。

「ウウウウウ」

「アアアアアアア」

気が付くと、他の場所からも次々とゾンビが姿を現す。

その数は、20人を超えていた。

「おお、凄い！ 凄いぞお！」

アリスの父親が興奮する。

「おじさん、逃げて下さい！」

「いや、だけど本物のゾンビだよ！」

「いいから、襲われちゃいますってば！」

「まもれなかつたら、しんじやうよ！」

勇気は父親の手を引っ張ると、アリス達と共に宇宙人ホテルへと走った。

プーカの羽が光り輝き、ノノは飛んでいる間に何かを集めたくなり、

チエイニーを礼拝する人々がちらほらと現れた。

「ゾンビがこの世にいるなんて！」

ホテルに逃げ込んだアリスの父親は興奮していた。

「ママ、怖いよお」

一方、アリスと母親は恐怖で震えていた。

「勇気、ノノちゃん、チエイニーさん、早くあいつらを倒さなきゃ！」

「あ、ああ！」

勇氣は横笛、チエイニーは血液の槍を握り締めると、父親の方を見た。

「この辺りに海とか池はありませんか？」

横笛を吹き、ノノが歌い、チエイニーもゾンビ達をそこまで誘導するのだ。

だが、父親はブンブンと頭を大きく横に振った。

「この辺りは荒野だ。あるのは砂漠ぐらいだよ」

「えー」

「それじゃあゾンビ達を倒す事ができないわよ!？」

「これは本気でやばいゾ」

勇氣の服の脇ポケットの中で、プーカも戸惑う。

その時、入り口のドアが開いた。

「きやああ！」

アリスは、傍の棚に置いてあった宇宙人キーホルダーを掴むと入り口に向かって投げた。

「あいたた！ やめろ！ 私だ！」

よく見ると、入り口にいたのは隊長だった。

「くそつ、こんなの想定外だ！」

隊長は荒く呼吸をしながら、入り口のドアを閉めた。

「あの、外はどうなつたんですか？」

勇気が尋ねると、窓の外を確認したノノが声を上げた。

「たいへん！ みんなつかまつてる！」

「えええ？」

勇気、羽心、チエイニーは窓に駆け寄ると、外を見た。

兵士達はゾンビに捕まり、一箇所に集められていた。

「くうう、射殺してはならんと上から言われたせいだ」

隊長が苛立ちの表情を浮かべた。

「それって、生きて捕まえるって事ですか？」

「ああ。銃は全て麻酔銃だ。だが、奴らはそう簡単には麻酔が効かん。

そのせいで、我々はまともに戦えなかつたんだ」

隊長はアリスの父親を見た。

「電話はどこだ？」

「ええつと、そのレジの横ですけど」

「ゾンビの癖に調子に乗りおつて！ 援軍を呼んで殲滅させてやる！」

「何、殲滅じゃと？ 流石の軍も、そうせざるを得なかつたか」

チエイニーは歯を食いしばり、槍を握る力を強める。

電話をかけていた隊長が、「どういう事だ？」と声を上げた。

「電話が通じんぞー！」

「何だつて？」

父親は受話器を受け取ると、耳に当てた。

だが、電話は全く音がしないようだ。

「パパ、あれ！」

勇気達と反対側の窓を見ていたアリスが声を上げた。

「どうした？」

父親が駆け寄り、外を見ると、切れた電話線が木の柱にぶら下がっていた。

「これじゃあ電話ができないぞー！」

「ぬううう、ゾンビ達の仕業だ！」

隊長は苛立ちながら壁を激しく叩いたが、それを聞いた勇気は首を傾げた。

「ゾンビが電話の線を切ったって事？」

ゾンビって意思もなく、ただフラフラしながら人間を襲うだけだよな？」

「じゃきにあやつられてるのかな？」

ノノは首を傾げるが、考えていても仕方がない。

「とにかく、早く連絡をしてください！ スマホなら電話できるでしょ！」
勇氣はそう提案した。

据え置き型の電話が通じなくても、スマホなら通じるはずなのだ。

だが、隊長達はきよんとした顔になった。

「スマホ？ 何だそれは？」

「ええつと、だから電話ができる、ケータイみたいなもので」

「ケータイ？」

隊長達はますますきよんとなった。

「勇氣、この時代にはまだスマホもケータイも普及してないわよ」

「ああつ、そうだった！」

「これが、ディアーナの言っておった、時代の壁か」

今は1990年だった。

勇氣は以前、母親から電話の歴史を聞いた事があった。

この時代は、スマホはおろかケータイも普及していなかったのだ。

「ぐぬぬぬ、我々がゾンビ如きに負けるとは……」

隊長は苦々しい表情を浮かべた。

そんな中、チエイニーはある事が気になった。

「お主……もしやゾンビを知っておるのか？」

隊長はまるでゾンビの存在を以前から知っているような口ぶりだったのだ。すると、隊長が急に焦ったような顔になった。

「そ、それはだな」

隊長は言うのを躊躇するが、羽心やアリス達がじつと見ている事に気づいた。そんな彼らを見て、隊長は戸惑うが、やがてゆっくりと口を開いた。

「あれは、ゾンビは……我が軍の研究対象になっているのだ」

隊長は、ホテルの中に飾られている宇宙人グッズを見つめた。

「君達は何も分かっておらん」

「分かっている……？」

勇気達が困惑していると、羽心が一步前に出た。

「まさか、エリア51にいるのは、宇宙人じゃなくてゾンビだったって事!？」

その言葉に、隊長は小さく頷いた。

「我々は奴らを捕まえ研究していた。だが、施設から逃げ出してしまったんだ」

「なんでにげちゃったの？」

「それはだな……」

「誰か助けてくれ！」

突然、窓の外で悲鳴が上がった。

見ると、長い髪をしたおじさんが、ゾンビ達から逃げていた。

「ポール！」

アリスの父親がおじさんを見て叫ぶ。

「ポールって、宇宙人ラブラブロックの？」

「どうやら、トレーラーハウスから出て来て来ってしまったようだ。」

「勇気、何とかしないと！」

「分かってるよ！ だけど、どうやってゾンビ達を倒すんだ？」

沈める場所なんかない

「んだぞー！」

「沈める場所？」

アリスの父親が勇気達の方を見た。

「君達はさつき、海とか池がないか聞いてきたよねえ？」

「あれは、ゾンビ達を沈めるためだったのかい？」

「そうです。誘導して沈めれば、ゾンビを倒せるんです！」

勇気の言葉に、父親は「うーん」と唸った。

「海や池じゃないけど、『砂地獄』なら近くにあるよ」

「えっ！」

砂地獄とは、砂でできた底なしのような場所である。

一度入ってしまうと、身体が沈んでいき、脱出する事は困難だ。

「勇気、それだったらゾンビ達を沈められるかも！」

「うんうん！ オイラもありだと思おうぞ！」

「僕も手伝うぞ！」

「ノノも！」

「あ、ああ！」

迷っている暇はない。

勇気は父親に砂地獄のある場所を聞くと、一同を見た。

「今からゾンビを誘導します！ その隙にポールさんや兵士のみんなを避難させてくだ

さい！」

「まさか、君がゾンビと戦うというのかね？」

隊長が驚きながら尋ねると、勇気ははつきり「はい」と答えた。

「僕達は、そのために来たんです！」

勇気、羽心、ノノ、チェイニーは互いの顔を見る。

次の瞬間、四人は同時に前を向くと、ドアを開け、勢いよく外に飛び出した。

4 — ゾンビ達のリーダー

「来るな！ ひいいい！」

ゾンビ達は、逃げるポールを追いかけていた。

「勇気、早く笛を！」

「ああ、分かった！」

勇気とノノはゾンビ達の方を見た。

「さあ、こつちを見ろ！」

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

ノノが歌った後、勇気は横笛を構え、吹き口に口を当てた。

—フウ〜フフフウ〜

しかし、笛は全く鳴らなかった。

「早くせい！」

「う、うん！」

—フヒ〜、フフフ〜

「冗談はよして！」

「冗談なんかじゃないよ。よく考えたら、横笛なんか吹いた事なかった！」
「ええええ〜！」

「はあ？」

「リコーダーと同じ吹き方でいいと思ってたんだけど」

「縦笛と違つて、横笛は吹くのにコツがいるのよ！」

「コツつて言われても」

ゾンビ達はポールを捕まえようとする。

勇気は焦れば焦るほど、ますます笛を吹けなくなつた。

「おい、どうするんだヨ！」

「必死にやつてるんだつてば！」

「ああんもう！」

羽心が横笛を奪うように手に取つた。

ゾンビ達を見ながら、横笛を構える。

「羽心、もしかして吹けるの？」

「ええ、こういうのは得意なの！」

「流石羽心ちゃん！」

羽心は吹き口に口を近づけた。

だがそれを見て、勇氣は慌てて声をかけた。

「まずは吹くところを拭かないと!」

「そんな事してる場合じゃないでしょ!」

「だけど!」

「ああもうつたらもう!」

羽心は面倒くさそうに服の袖で吹き口を拭いた。

「これでいい!?!」

「うんうんうん!」

「まったく!」

羽心は呆れ顔になりながらも、改めて横笛の吹き口に口を近づけた。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

—ピュウピュウウウ—

ノノの歌声に乗り、綺麗な音色が辺りに響く。

途端に、ゾンビ達の動きがピタリと止まった。

「ウウウウウ」

「アアアアア」

ゾンビ達が羽心とノノの方を見た。

「やったゾ！」

「羽心、ノノ、あいつらを誘導するんだ！」

羽心は頷くと、笛を吹き、砂地獄のある方向へと移動する。

ノノも、空を飛びながら羽心を追いかける。

ゾンビ達は、その音と歌声に導かれるかのように、フラフラしながら付いてきた。

それを確認し、アリスの父親がホテルから飛び出した。

「ポール、大丈夫かい？」

「あいつら何なんだよ〜！」

父親は、ポールをホテルに避難させようとした。

しかしその時、目の前の建物の上に、金髪の男のゾンビが姿を現した。

「ガアアア!!」

金髪のゾンビは、他のゾンビ達に向かって叫ぶ。

瞬間、ゾンビ達の動きが止まった。

「ウツウウウ」

「アアアアア」

ゾンビ達は、金髪のゾンビの方へと歩いて行った。

「どうして？」

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

羽心は笛を吹き、ノノは歌い続けるが、ゾンビ達は全く反応しない。すると、ホテルから出てきた隊長が叫んだ。

「奴だ！ 奴がゾンビ達を逃がしたんだ！」

「逃がしたって、あれもゾンビよね？」

「隊長さん！ どういう事なんですか？」

勇気が尋ねると、隊長は怯えながら話をした。

「昨日の夜だ。一人の少年がエリア51に現れたんだ」

「ふむ」

「そいつはあの金髪のゾンビに何かをしてすぐに消えた。」

その後、金髪のゾンビがリーダーのようになったんだ！」

「リーダーって」

他のゾンビ達は、意思もなくなつただ人間に襲いかかるだけだ。

だが、金髪のゾンビはまるで意思を持っているように見える。

「だから、電話の線も……」

勇気は、電話線が切られていた理由をようやく理解した。

「だけど少年って。それってまさか」

勇気は隊長を見つめた。

「そいつは、着物を着ていて、片目に包帯を巻いてませんでしたか？」

「どうしてそれを知っているんだ？」

「やっぱり！」

少年は、邪鬼だ。

「邪鬼が金髪のゾンビに言っつて、人間を襲わせるように仕向けたんだ！」

金髪のゾンビは勇気達を見る。

その上には、×印状の罅が浮かんでいた。

金髪のゾンビは建物から飛び降りると、集まってきたゾンビ達の前に立った。

「ガガアア!!」

金髪のゾンビが叫ぶと、ゾンビ達は一斉に隊長の方を見た。

「む、何だ？」

ゾンビ達が一斉に隊長に襲いかかった。

「くそつ、やめろ！」

「隊長さん！」

「くろう、生け捕りになどしてる場合じゃない！」

隊長は銃を取り出し、ゾンビ達を撃とうとした。

だが、その手をゾンビ達に押さえられてしまった。

「くそ、離せ！ うわ、やめろ！ うわああ！」

隊長はあつという間にゾンビ達に取り囲まれ、見えなくなった。

「ガガアアア！」

金髪のゾンビの声が響くと、ゾンビ達はアリスと母親にも襲いかかろうとした。

「きゃあああ！」

「嫌、来ないで！」

「アリスちゃん！」

勇気達は慌ててアリスのもとへ向かおうとする。

だがそれよりも早く、アリスの父親が走った。

「僕の家族に何をするんだ!!」

父親は取り囲んでいたゾンビ達を引き剥がすと、アリスと母親を守るようにして立った。

「パパ！」

「アリス、お前達は僕が絶対に守る！」

父親は勇気達を見た。

「君達、早くゾンビを！」

チエイニーは血液から創造した槍を金髪のゾンビに突き刺す。

頭は狙えなかったが、致命傷を与える事ができた。

「ほくら、オイラを捕まえてみろく、ベロベロバク！」

「ガアアツ！」

金髪のゾンビはプーカを捕まえるのに夢中になる。

「今よ！」

チエイニーはタイミングを見計らって槍を構えると、

羽心の指示で金髪のゾンビ目掛けて突き刺した。

槍は金髪のゾンビの頭部に突き刺さり、

さらに神の殺意によって威力を高め、金髪のゾンビは倒れた。

「何とか倒せたね」

勇気、羽心、ノノ、チエイニー、プーカは、

作戦通り、ゾンビ達を砂地獄に誘い、次々と沈めていった。

砂地獄からは黒い煙が出た。

勇気達は見事、ゾンビ達を倒す事に成功したのだ。

「それにしても、アリスちゃんのお父さんは、結構勇気あるわよね」

町へと戻りながら、羽心は命がけでアリス達を守ろうとした父親に感心していた。

「何だかんだ言っても、いいお父さんなのかも」

「改心したのじゃな」

羽心とチエイニーの言葉に、勇氣は頷く。

「僕もあんなお父さんがいればいいなあと思って思ったよ」

2歳の時に死んでしまった父親の事は、写真でしか知らない。

だが、アリスの父親と同じように、家族思いで優しくったはずだと、勇氣は思った。

やがて、勇氣達は町に戻ってきた。

すると、ポールのトレーラーハウスの前に兵士達が集まっていた。

「何だろう?」

勇氣達が駆け寄ると、兵士達に囲まれ、金髪のゾンビが倒れていた。

身体から黒い煙が出ている。

どうやら、他のゾンビ達が消え、金髪のゾンビも同じように消えようとしているよう

だ。

「やった! 我々の勝利だ!」

「隊長、やりましたね!」

「ああ、ゾンビの癖に調子に乗るからだ!」

隊長達はゾンビに勝つ事ができ、大喜びしていた。

アリス達家族や、ポールも、その後ろで喜んでいる。

そのなか、金髪のゾンビがふと、勇気の方を見た。

「コノ世界ハ……才前達ダケノ……物デハナイ……」

「しや、喋った？」

「アノ少年ハ、我々ニトツテ……神ダ……」

「えっ」

金髪のゾンビの全身から、黒い煙が漏れ出す。

黒い煙は四散し、金髪のゾンビも消えた。

空に浮かんでいた×印状の罅も消える。

「神とは、どういう事じゃ……」

羽心、プーカ、ノノ、チェイニーは、勇気の方を見た。

「邪鬼が、怪にとつて神……？」

勇気は、険しい表情になると、金髪のゾンビが消えた地面をただじっと見つめるのだった。

episode | The approach in
 g n i g h t m a r e } 呪いの歌声
 l | 謎の歌声

真夜中。

小学4年生の田山守は、薄暗い家の廊下を歩いていた。

(こんな時間にトイレに行きたくなっちゃうなんて)

去年まで、夜中にトイレに行きたくなったら、

隣の部屋で寝ている母親を起こして、付いて来てもらっていた。

しかし、もう4年生だ。

守は、トイレぐらい自分一人で行かなければならないと思うようになっていた。

階段を下り、1階へとやって来た守は、しんと静まり返った薄暗いリビングを見る。

何だか怖い。

いつも見ているリビングとはまるで違うように思える。

(早くトイレに行こう)

守はできるだけだけ周りを見ないようにして、足早にトイレの方へと向かった。

その時、微かに、女の人の歌声が聞こえて来た。

(どうしてこんな時間に?)

歌声は、キッチンの方から聞こえる。

(お母さんが歌っているの?)

母親も目が覚めて、お茶でも飲みにも1階に下りて来たのだろうか?

「お母さん……?」

守は戸惑いながらも、キッチンを見た。

だが、キッチンは真つ暗で、誰もいなかった。

「気のせいだったのかな……?」

見ると、キッチンの窓が少し開いている。

風が吹いて、それが歌声のように聞こえただけなのかもしれない。

「もう、驚かささないでよ……」

守は、窓を閉めようと傍に近づいた。

すると、また歌声が聞こえた。

声は、窓の外からしているようだ。

(誰が歌ってるの?)

守の家は、住宅地の真ん中にある。

夜中に外で歌を歌っている人など今までいなかった。

守は何だか怖くなり、窓を閉めて、キッチンから出ようと思った。

だが、窓を閉める事ができなかった。

その歌声に、何故か惹かれてしまったのだ。

どこの言葉なのかは分からない。

透き通るような女の人の声で、心の奥の奥まで響く。

守は導かれるかのように、裏口のドアから外へと出た。

だが、道路には誰もいなかった。

守は耳を澄ませながら、聴いて行く。

いつの間にか、うっとりとした表情になっている。

やがて、歌声が少しずつ大きくなってきた。

「近くに……」

守は期待に胸を膨らませながら、だんだん早足になる。

ついには、走って女の人を探し始めた。

歌声は、さらに大きくなる。

前方に横断歩道が見える。

あの横断歩道の近くで歌っているようだ。
守は微笑みながら、そこまで辿り着いた。
しかし、そこにも誰もいなかった。

「どうして?」

歌声ははつきり聞こえている。

この近くに必ずいるはずだ。

「どこにいるの? ねえ、出て来て」

守は必死に女の人を探した。

「あつ!」

横断歩道の傍に、空き地がある。

空き地の奥の方で、誰かが座っていた。

(もしかして歌ってる人かも!)

守はそう思うと、空き地に入り、その人の傍に駆け寄った。

「あの!」

背中を向けて座っているその人に近づくと、

やっと会えた。

守は嬉しくなって満面の笑みを浮かべた。

しかし、その表情はすぐに固まった。

そこに座っていたのは、警察官の男の人だったのだ。

「あ、あの、何をしてるの？」

守は警察官に声をかけるが、全く反応しない。

「あの……」

守は戸惑いながら、肩を触ると、警察官はそのまま地面に倒れた。

「あっ！」

警察官は、眠っていた。

倒れても全く目を覚まさない。

「どういう事？」

守が動揺していると、ふと、近くに数人の影が見えた。

目を凝らして見てみると、近所の人達だ。

彼らは、警察官と同じように、パジャマを着たまま倒れて眠っていた。

「みんな、どうしたの？」

守は慌てて彼らの傍に走った。

「ねえ、大丈夫？ 起きて！」

守は彼らの身体を揺さぶる。

だが、彼らは全く目を覚ます気配がなかった。

「どうなってるの?」

守は、恐ろしくなつて空き地から出ようとした。

「フッフ」

突然、女の笑い声が聞こえた。

守はハツとして、その声が聞こえた方を見た。

「何、あれ……?」

空中に、×印状の罅が浮かんでいる。

その罅から、黒い煙が漏れていた。

「フッフ、フッフ」

罅から笑い声が聞こえ、やがてそれは歌声に変わった。

「あ、あああ」

守は逃げ出そうと思うが、何故か身体が動かない。

歌声が、心の奥の奥まで響く。

気が付くと、守はまたうつとりとした表情になっていた。

「何だか……僕……」

守はその場に蹲ると、深い眠りに落ちてしまった。

「うっ……うっ……泣かせてくれるじゃねえか……」

路地裏で、アプリルは本を読んで泣いていた。

本の表紙には、たくさんの涙がついている。

「何々……えーつと、『人魚姫』？ あ！」

ディアーナが表紙を見ると、それは「人魚姫」の本だった。

海底にある人魚の国、その王の末娘として生まれた人魚姫は、難破船にいた王子を救出する。

王子に恋心を抱いた人魚姫は、声と引き換えに人間になる薬を魔女からもらう。

だが、そのせいで王子に思いを伝えられず、王子は隣国の王女と結婚する事になってしまう。

それを阻止するためには姉からもらったナイフで王子を殺めなければならなかったが、

人魚姫にはそれができず、海の泡になってしまった。

「でも、人魚姫は本当に死んだわけじゃないわ。

人魚姫は精霊に生まれ変わって、この世界を見守っているのよ……ってナタリアが言ってたわ」

ちなみにこの本を貸したのは、ナタリアである。

ジャネットが怪奇現象の発生を予知し、その怪に関係のあるものを路地裏に出すのだ。

命令してばかりの印象が強いジャネットだが、彼女自身が赴くと処罰の対象になるため、

代理人であるディアーナ達に指示を出しているのだ。

「それで、怪奇現象と何の関係があるんだよ」

「ディアーナ、以前、雪女と会った事がありましたよね。」

あの時、ディアーナは雪女を倒さずに、別の世界に送りましたよね」

「えっ、あ、それは」

「神が定めた台本を歪めれば、世界にも歪みが生じてしまいます」

以前、ディアーナは雪女を止めるため、勇気とキュウと共に江戸時代に行った事があ

る。その時、巳之吉とお雪の悲しい姿を見たディアーナは激怒して、

お雪を無理矢理妖怪屋敷に連れて行ったのだ。

「今回の事を繰り返さないように私はこの本を出しました」

ジャネットは、ディアーナが問題行動を起こさないように「人魚姫」の本で戒めをするという。

ドラキュラとの戦いで謹慎処分を受けたディアーナは、痛いほど分かっていった。
「……分かったわ。軽率な行動は慎む」

下手に怪に同情すると、ろくでもない事が起きるのは明らかだ。

ディアーナはできる限り、仕事で被害を小さくする事を決めた。

「そういえば、人魚って不思議な種族なのよね。水中で力が増したり、歌声で魅了したり」

「うた……うーん、ノノとおなじ」

人魚の歌声は船を沈めると言われている。

きつと、今回の怪奇現象も、それに関係のあるものだろう。

そう思ったディアーナは、今回の仕事を受けようとしていた。

「あたし、仕事に行つてきます」

「待ちなさい。『あの時』のように、問題行動を起こさないと誓えますか？」

「……誓います」

ディアーナは小声でそう言ったが、ジャネットは信頼していなかった。

すると、アプ Ril がディアーナの傍にやってきて、彼女の肩に手を置く。

「大丈夫だ、俺がついているから安心しな」

「アプ Ril……」

彼ならば、この怪奇現象を止められるかもしれない。
ディアーナは安心して頷き、アプリルと共に路地裏を出ていくのだった。

2 — 覚めない眠り

「どうしたんだよ、ディアーナ。元気ないな」

「あ、アプリル？」

現場に出かけようとしたディアーナとアプリルだったが、

アプリルはディアーナに元気がない事に気づく。

「……人魚姫……」

ディアーナはジャネットが渡してくれた本の内容を思い返していた。

確かに本当に死んだわけではなかったが、王子と結ばれなかった事を悲しんでいた。

だが結末を変えてしまえば、ジャネットから謹慎処分を食らってしまう。

問題行動を起こしたくない、だが人魚も救いたい、

二つの感情がディアーナの中をせめぎ合っていた。

「一体どうしたら、あたしのモヤモヤがすつきりするのかしら」

ディアーナが呟くと、アプリルが彼女の肩に手を置いた。

「だから、俺がついてるんだよ」

「アプリル？」

「どんな事があっても、仲間がいるから共に戦える。

ま、お前が女の子だから、っていうのもあるけどな」

「それが本音なのね」

ふふつ、と吹き出すディアーナ。

溜まつていたモヤモヤが、一気に吹っ飛んだような気がした。

「ありがとう、アプリール。あたし、自信がついたわ。絶対に、人魚を探すんだから」

「ああ！ その意気だぜ！」

「ここにもないみたいね」

日曜日。

羽心は図書館にいた。

勇気が見た、ピラミッドの頂上にある謎の神殿について調べていたのだ。

しかし、オカルト、歴史、建築物などの本を調べても、

どこにもそのような神殿は載っていないかった。

(やっぱり、考えられるのは一つよね……)

羽心は図書館から出ると、広場のベンチに腰を下ろした。

勇気は家の書斎の本をたくさん調べた。

羽心は、近くの図書館だけではなく、隣町の図書館や、ネットまで調べた。

それでも全く手がかりがない。

つまりあの神殿は、まだ発見されていない未知の建造物である可能性が高いのだ。

(そういう意味でいうと、これも未知の物よね)

羽心はポケットの中から黒い鈴を取り出した。

「オシリスの鈴」といい、羽心は以前、邪鬼に騙されて、

この鈴をキユウに向かって鳴らしてしまった。

今は音が出ないようにテープで止めてあるが、

鈴は特別な力を持つ者が振ると、幽霊を消滅させる事ができる。

キユウが消えた原因でもあるので、勇気はそれを受け取ろうとしない。

そのため、羽心がずっと預かっていた。

(この鈴の事も、勇気には内緒で調べてたのよね……)

だが、手がかりはなかった。

プーカにも鈴の事を尋ねたが、全く知らないという。

「特別な力かあ」

プーカの先祖の王様が作ったグローブを嵌めて時空を超えられるのも、

特別な力を持つ人間だけなのだという。

(だけどどうして、私と勇気だけ特別な力があるの?)

羽心は、ポケットにしまっている星のグローブを見つめた。

プーカは以前、妖精族に伝わるグローブの伝説を教えてくれた。

かつて、「異能」と呼ばれる力を持った人間のある家族が、

妖精族の王からいくつかのグローブをもらった。

彼らはそのグローブを嵌め、怪と人間に災いをなす邪悪な者と戦い、そしてこの世界を救った。

（あれってどういう事なんだろう。大体、私と勇気は家族なんかじゃないし……）

分からない事が多すぎる。

「ああんもう」

羽心は頭を振った。

「羽心ちゃん」

不意に、後ろから声がした。

振り返ると、傍に友達の花恋が立っていた。

「羽心ちゃんも本を借りに来たの？」

花恋はトートバッグを持っている。

「どうやら、図書館で本を借りたらしい。」

「花恋ちゃんって、ほんとに本が好きだよねえ」

「うん、私、本があればそれだけで毎日幸せだもん！」

「毎日幸せかあ。いいなあ」

羽心は微笑むと、黒い鈴をポケットにしまい、花恋と一緒に帰ろうとベンチから立ち上がった。

すると、花恋は急に辺りをキョロキョロ見回した。

そして、近くに誰もいない事を確認すると、羽心に顔を近づけた。

「さつき、図書館で本を探してる時、変な話を聞いちゃったんだ」

「変な話って？」

「駅の向こうの小学校の男の子達だと思っただけど、

同じ学校の子が寝たまま目を覚まさないんだって」

「えっ？」

「しかも、その子だけじゃなくて、何人も同じように眠ったままの人がいるらしいよ」

「それって……」

羽心は、険しい表情で花恋を見た。

「その子達、どこにいるの？ 話が聞きたい！」

「うーん、このくるみパンもなかなかいけるゾ」

住宅地の道路。

プーカは、勇気の肩に乗りながら、チョコのついたくるみパンを食べていた。

勇気は母親に頼まれ、スーパーに買い物に行っていたのだ。

「チョコとくるみの絶妙なハーモニー。これはまさにくるみパンのレポリューションだゾ」

まるでグルメ番組のレポーターのようなプーカの発言に、勇気はうんざりする。

「それを買うために、わざわざ駅前のパン屋さんまで行ったんだよ」

「感謝してるヨ。お礼に一口あげただロ」

「半分ぐらいは欲しいんだけど」

勇気はそう言いながらも、ふと真面目な表情になった。

「ねえ、プーカ。この前のゾンビの事、どう思う？」

「どう思うってなんだイ？」

「ゾンビは確かに人を襲う怖い怪だよね。」

「だけど、だからと言って捕まって実験体になっていいわけじゃないと思うんだ」

勇気は、金髪のゾンビが最後に言った言葉が気になっていた。

「『コノ世界ハ、才前達ダケノ物デハナイ』。」

金髪のゾンビは、『アノ少年ハ、我々ニトツテ、神ダ』とも言ってたよね？

もしかして邪鬼は、怪達の味方なのかも」

勇気はその事をずっと考えていた。

しかし、プーカはくるみパンを食べるのをやめると、

勇気よりも真面目な顔つきになり、首を大きく横に振った。

「あいつは、オイラ達の味方なんかじゃない！」

プーカの仲間達は、邪鬼に唆されて、人間達を襲った。

そして、危うく死んでしまうところだったのだ。

「あいつは、オイラ達の味方のフリをして、

ただ単にオイラ達に人間を襲わせたかっただけなんだ！」

プーカの顔は、怒りに満ちていた。

「プーカ……」

軍がゾンビ達を実験体に使っていたのは許せない。

だがそれを利用して、ゾンビ達に人間を襲わせるのは話が違う。

「それに、勇気くんはこの町を守らないといけないんだ口？」

「それは……」

キユウと交わした大事な約束だった。

その約束を守るために、勇気は時空を超えて怪と戦い続けていたのだ。

「そうだよね……。うん、僕と羽心だけしか、この町を守れないんだもんね」

「勇気は改めてその事を思いながら、道路の角を曲がった。

「やつと帰ってきた！」

「……」

家の前に、羽心、ダイアーナ、アプリルが立っていた。

「あ、ダイアーナにアプリル」

「……」

ダイアーナとアプリルに表情はなく、どこか物憂げだった。

「それと、羽心、どうしたの？ 今日には図書館に行つてたんじゃ？」

「その用事は収穫ゼロで終わったわ。だけど、別の収穫があったの」

「えっ？！」

「謎の女の歌声で、何人も人が眠つたままになつてゐるらしいの」

羽心は、図書館にいた男の子達から聞いた話をした。

眠つたままの人は10人以上いるらしい。

しかしあまりにも奇妙な事件なので、警察はまだ世間に発表していかないのだという。

「だけど、どうして女の歌声が聞こえたつて分かつたんだ？ みんな眠つたままなんだ

よね？」

みんな眠つたままなら、話は聞けないはずだ。

すると、羽心は待つてましたとばかりにその答えを言った。

「新聞配達のおじさんが、それを見てたんだって」

おじさんは、微かに歌声を聞き、その場所へと向かった。

そこは住宅街の空き地で、大勢の人が眠っていて、傍に男の子がいたのだという。

やがて、その男の子は、歌声を聴きながら蹲ると、眠ってしまったらしい。

おじさんもだんだん眠くなってきたが、その時、歌声が聞こえなくなったというのだ。

「それで、おじさんだけは無事だったの」

「そうなんだ。……歌声か」

「ノノに似てるわね」

勇気は、以前、怪奇現象の本で、人を歌声で眠らせる怪がいた事を思い出した。

ディアーナとアプリルは、事前にそれを知っていた。

「あれは確か……」

勇気はその怪を思い出し、羽心の方を見た。

「あれ？」

目の前にいたはずの羽心、ディアーナ、アプリルがいない。

「どこ行ったんだ？」

勇気は辺りを見回すが、どこにもいない。

「どうなってるんだ？」

その時、大きな音が響いた。

3 — 歌声の正体

—ブウウウ

道路の向こうで、車のクラクションが鳴っている。

「何だろう?」

勇気が音のする方へ走ると、一台の車が止まっていた。

駆け寄ってみると、運転席に座っている男の人が、

上半身をハンドルに付けたまま動かなくなっていた。

どうやらそのせいで、クラクションが鳴り続けているようだ。

「大丈夫ですか?」

勇気は、開いている車の窓から、男の人の肩を揺さぶる。

男の人は、眠っていた。

「しっかりして下さい!」

勇気は男の人の上半身を起こし、ハンドルから離すと、声をかけた。

男の人は全く目を覚まさない。

その時、車に付いていたテレビに、見捨里市の駅前が映し出された。

「皆さん、信じられない光景が広がっています！」

レポーターは、カメラに向かって必死に訴える。

カメラは駅前の風景を映した。

そこには、数え切れない人々が倒れていた。

「何故か、人々が眠ったまま目を覚まさないのです！」

レポーターは倒れている人達に声をかける。

しかし、誰も目を覚まさない。

「これは一体どういう事なんでしょうか？」

瞬間、レポーターはハツとして、空を見上げた。

「えっ、歌が……」

カメラマンが反応して、空にカメラを向けようとした。

と、その瞬間、画面が大きく揺れた。

―バタンッ

カメラが地面に倒れる。

画面には、男の人が倒れたまま眠っている姿が見切れている。

「斎藤さん？」

レポーターが男の人の傍に駆け寄り、肩を揺さぶる。

どうやら彼がカメラマンのようだ。

だが、すぐにレポーターも動きが鈍くなっていた。

「な、何……これ……」

レポーターはゆつくりと目を閉じる。

そしてそのまま動かなくなった。

「怪の力だ！」

勇気は、車から顔を出すと、空を見上げた。

「あっ！」

空には、大きな×印状の罅が浮かんでいた。

黒い煙が漏れ出し、女の笑い声が聞こえてきた。

「フフフ、フフフフ」

やがて、笑い声は歌声に変わった。

「聴いちゃ駄目だ！」

勇気は慌ててその場から逃げ出した。

必死に走り、家の前まで戻って来る。

ドアを開け、家の中に飛び込んだ。

「ああっ！」

玄関に、羽心と母親が倒れていた。

二人は眠ったまま、全く動かない。

「そんな！」

その時、開いていたドアの外から、歌声が聞こえて来た。

「駄目だ！」

勇気はドアを閉めようとする。

だが、だんだん力が入らなくなる。

「駄目だ……寝ちゃ……駄目だ」

懸命に耐えるが、勇気は目を開け続ける事ができなくなってしまう。

「このままじゃ……町が……」

勇気は、そのままその場に崩れるように倒れてしまった。

「勇気、しっかりして！」

ハツとして我に返ると、羽心が顔を覗き込んでいた。

「え、羽心、眠ってたんじゃない？」

「何、言ってるの。眠ってなんかないわよ」

「ええつと、もしかして僕、ブーツとしてたの……う？」

羽心、プーカ、アプリルは大きく頷き、ディアーナは小さく頷いた。

「じゃあ、さつき見たのは夢って事……」

あれは未来に起きるかもしれない出来事だったのだ。

思い出すだけで、ゾツとする。

「何とかしなくっちゃ!」

「そうだゾ。今回の怪は多分」

プーカがその名前を言おうとすると、それよりも早く勇気が口を開いた。

「今回の怪は、恐らく『人魚』だ!」

「そう」

「おお、知ってたのかイ!」

勇気は以前、本で読んだ事があった。

く人魚く

人魚は、上半身が人間、下半身が魚の伝説の生き物だ。

その多くは女の人の姿をしていて、船を見つけると、歌を歌うのだという。

その歌声は、美しく、船乗り達を魅了するらしい。

しかし、その歌声を聴くと、船は遭難してしまうという伝説がある。

「ああ、マーメイドなのね」

「みんなが眠ったままなのは、人魚の歌声のせいだったってわけね」

「ああ！」

「人魚かあ。だけど人魚の弱点って何かしら？」

「歌声が聞こえていたわよね」

「歌……歌……そうだ！」

勇気はハツとすると、羽心の方を見た。

「歌声を封じれば倒す事ができるかも！」

「そうかしら？」

「人魚は歌声以外の力は、人間とそんなに変わらないからねエ」

「だけど、どうやって歌声を封じればいいんだ？ 口にテープをするわけにもいかない

し」

勇気がそう言うと、羽心が「あつ」と声を上げた。

「だったら逆はどう？ 私達がイヤホンをつけて歌声が聞こえないようにするの」

「なるほど、それ使えるかも！」

「家からイヤホンを持って来るわね。だけど、一個しかないわよ」

「大丈夫。確か、ウチにもお父さんが使ってた古いヘッドホンがあるから！」

勇気と羽心は別れると、それぞれイヤホンとヘッドホンを用意する事にした。

残ったディアーナとアプリルは眩く。

「あの子、人魚姫の話を知ってるのかしら？」

「……だとしても、問題行動は起こすなよ」

「お母さん、お父さんのヘッドホンはどこ？」

勇気は家のリビングに駆け込むと、掃除をしていた母親に声をかけた。

「なあに、音楽でも聴くの？」

「えっ、あ、うん、何か急に聴きたくなつて」

母親は掃除機を止めると、「ちよつと待つてて」と言い、二階の寝室に向かった。

そしてしばらくすると、灰色のヘッドホンを持って下りて来た。

「寝る前に音楽を聴く時、これを使っているのよ」

「お母さん、音楽なんて聴くんだけ」

「お父さんがよく聴いていたから、いつの間にか習慣になつててね」

「そうだったんだ」

そんな話、初めて聞いた。

「壊しちゃだめよ」

「分かつてる」

勇気が母親からヘッドホンを受け取ると、玄関のドアが開き、

羽心、デИАーナ、アプリルが入つて来た。

「おばさま、こんにちは！ 勇気と一緒に書斎で調べ物しますね！」

「えっ、ええ」

「お茶は大丈夫です！ お菓子も今日は我慢します！」

「わ、分かったわ」

一方的に話す羽心に母親は圧倒される。

そんな母親をよそに、勇気と羽心は書斎に入った。

「羽心、イヤホンはあつた？」

「ええ、ばっちりよ！」

羽心はワイヤレスイヤホンを見せた。

「よし、行こう」

勇気は両手に太陽と月のグローブを嵌めた。

羽心も星のグローブを嵌め、勇気の横に立ち、

プーカは勇気の服の胸ポケットの中に顔まで隠れ、ディアーナとアプリルは身構える。

勇気は、壁に近づくと、左手をかざして呪文を唱えた。

「カオスゲート
時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

勇氣、ディアーナ、アプリルは、光の渦の中に飛び込む。羽心もその後続いた。

やがて、勇氣、羽心、ディアーナ、アプリルはトンネルを抜け、砂浜に着地をした。しかし、砂に足を取られ、倒れそうになる。

「わ、ほっ、やあっ！」

羽心はそれでも何とかバランスを保ち、砂浜に立った。

アプリルは華麗に着地する。

一方、勇氣とディアーナはよろけていた。

「きゃっ！」

「わわ！ うわわわ！」

そのまま、勇氣とディアーナは前のめりの状態で砂浜に倒れそうになる。

「のああ！」

倒れる寸前、プーカは慌てて服の胸ポケットから飛び出し、ディアーナは風の魔法を使う。

「急に倒れたら、オイラが潰れちゃうだろ！」

「そんな事言ったってしょうがないだろ」

勇氣は身体を起こすと、顔をあげて周りを見た。

周りは砂浜になっていて、その向こうに海が広がっている。

砂浜には小さな船がいくつも置かれていた。

「ここに、人魚がいるって事だよね？」

「そうだな」

勇気は砂を払いながら立ち上がり、羽心達にそう言った。

すると、砂浜の向こうに、数人の男の人達が走っている姿が見えた。

「急げ！ 遅れると怒られるぞ！」

「ああ、領主様は怒ると怖いもんな！」

「領主様？」

「その地域を支配してる人って事ね。とりあえず行ってみましょ」

「あ、ああ！」

勇気達は男の人達を追った。

4 — 青年と人魚

男の人達を追って砂浜から出ると、小さな村があつた。

レンガ造りの家が並び、車などは走っておらず、代わりに馬車が入っていた。

「ヨーロッパのどこかの町みたいだね」

「馬車があるって事は、時代は中世のようね」

「フランス……?」

「おい、あそこ!」

勇気の服の胸ポケットに戻っていたプーカが、前方を指差した。

そこには広場があり、10人ほどの男の人達が集まっていて、先程の人達の姿もあつた。

彼らの前には、豪華で派手な服を着た、太った中年の男が立っていた。

「領主様、一体何の用でしょうか?」

先程の男の人の一人が太った中年の男にたずねる。

「どうやら中年の男が領主のようだ。」

「諸君に集まってもらったのは他でもない。」

「この村に隠れているある生き物を見つけてほしいのだ！」

「ある生き物？ 飼っていた犬とかですか？」

「そうではない。私の家の者達を襲った、憎き人魚だ」

「人魚！！」

アプリルは思わず大きな声を上げた。

領主がそれを聞き、アプリルを睨んだ。

「君はこの村の人ではないな？ 何か知っておるのか？」

「それを聞いてどうする」

アプリルが睨むと、羽心が笑いながら領主に話しかけた。

「そんなの知るわけじゃないじゃないですか」。

人魚なんておとぎ話の中だけの話だと思つてたから、びつくりしちやったんですよ」

「……そうだな」

アプリルと羽心が下手な作り笑いをすると、領主は「フン」と鼻を鳴らした。

そんな中、村人の一人が口を開いた。

「だけど領主様。人魚なんてほんとにいるんですか？」

村人達は皆、首を傾げていた。

すると、領主は眉間に皺を寄せて、地面を何度も足で踏んだ。

「この領主である私が嘘をついてるとでも言うのか！」

領主は怒りながら村人達に迫る。

「す、すいません、領主様！」

「信じます！　怒らないで下さい！」

村人達は慌てて謝った。

「け、けど、ほんとにいたとして、

人魚の歌を聴いたら、眠ってしまつて永遠に目が覚めなくなるんですよね？」

「俺、そんなの嫌だ！」

「僕も死にたくないよ！」

「ええい、五月蠅い！」

領主はまた地面を何度も足で踏んだ。

「奴はそれで私の家の者達を眠らせてしまった！　だが歌う前に捕まえればいいだけだ

！

私のやる事に反対するつもりか!？」

領主は村人達を睨みつける。

村人達はその迫力に何も言えなくなつてしまつた。

その時、広場の向こうから声がした。

「おい、人間みたいな魚がいるぞ！」

「何だと？」

領主は声のした方を見ると、ニヤリと笑った。

「お前達、人魚だ！ 絶対に逃がすのではないぞ！」

「は、はい！」

領主は村人達を連れ、その場から走り去って行った。

ディアーナはレイピアとダガーを抜こうとする。

「私達も行きましょ！」

「あ、ああ」

だが、勇気とアプリルは何故か首を捻っていた。

「どうしたの、勇気、アプリルさん？」

「声がしたのは村の中からだったよね？」

「人魚は、水がなくては生きられないのでは？」

「そう言われれば……」

村を見る限り、川も池もなさそうだ。

「じゃあ、さっきの声は何だったの？」

羽心がそう思っていると、広場の傍に立っていた木の隣から、一人の青年が出て来た。

「上手くいったようだな……」

青年は、走って行く領主達の後ろ姿を見て、微笑む。

そしてそのまま、領主達とは反対方向へ走って行った。

「お、あいつは人魚の恋人かい？」

「おいおい、何だか怪しいゾ」

「ざっきの声、あの人だったんじゃないのかしら？」

「領主達を騙したって事？」

勇気達は、走って行く青年の姿をじっと見つめた。

青年は、村外れの小さな小屋の前までやって来た。

辺りをキョロキョロ見回して、誰もいない事を確認すると、素早く小屋の中に入った。

「セイレ、上手く行ったよ！」

小屋の中には、網やオールが置かれていた。

部屋の一歩奥に、布で仕切られている場所があり、青年はそこを見ていた。

—パシヤ　パシヤ

布の向こうで水を弾く音がする。

青年は満面の笑みを浮かべると、ゆつくりとその布を取った。

そこには、水を張った大きな桶がある。

その桶の中に、美しい人魚がいた。

「ヨハン、ありがとう」

セイレと呼ばれた人魚は、ヨハンに微笑む。

—パシヤ パシヤ

嬉しそうに尾ひれが動き、水が何度かはねた。

「おー、可愛いねえ」

アプリルが呟いた瞬間、入り口で音がした。

—ドントツ

「わあああ!!」

次の瞬間、勇気、羽心、ディアーナ、アプリルが倒れそうになりながら小屋の中に入ってきた。

「勇気、押さないでよ! バランス崩しちゃったでしょ!」

「押さないよ! 羽心が勝手に倒れちゃったんだろ!」

「喧嘩しないでよね」

どうやら、四人は隠れて中の様子を見ていたようだ。

「くっ、セイレは渡すものか!」

ヨハンは四人を見て声を荒らげると、傍にあつたオールを手にして、大きく振り上げ

た。

「待ちなさい、あたし達は領主の仲間じゃないわよ！」

「じゃあ君達は誰なんだ？」

「あたし達は、怪を倒すためにこの時代に——」

そこまで言つた時、ダイアーナはふと、ヨハンの後ろにいるセイレを見た。

セイレは、震えていた。

その身体は、あちこち怪我をしている。

「どういう事？ その傷、大丈夫なんですか？」

心配する勇気を見て、ヨハンは驚く。

羽心も同じように心配していた。

ダイアーナはセイレに近づくと、回復魔法を唱えて傷を癒す。

「な、何なんだ、君達は」

ヨハンは戸惑いながらも、振り上げていたオールを下ろした。

しばらくして。

領主の仲間ではないと分かってもらつた勇気達は、ヨハンから話を聞く事にした。

勇気達が思つた通り、ここは中世のヨーロッパだった。

ヨハンは、この村で漁師をしているのだという。

二日前、いつものように漁を終えて家に帰ろうと思っていると、浜辺に倒れているセイレを見つけたのだ。

セイレは領主達に襲われ、怪我をしてかなり弱っていたらしい。

「最初は人魚を見て恐ろしく思ったんだけど、何だか放っておけなくて」

ヨハンは、自分の漁の道具を置いていたこの小屋にセイレを連れて来ると、寝ずに看病を続けていたのだという。

「ヨハンのおかげで、私は助かったの」

「セイレ、好きだよ」

「ええ、ありがとう、ヨハン」

セイレは柔らかな表情で、ヨハンに微笑む。

ヨハンもそんなセイレに優しい笑みを返した。

アプリルはそんな二人を、諦め混じりの声で応援した。

「いいカツプルになるんだぞ」

「アプリル……?」

一方、勇気と羽心はそんな二人をじっと見ていた。

「ねえ勇気、この人達って……」

彼らは人間と怪だ。

しかしまるで、恋人同士そのものだった。

「俺も、人間が好きだったんだ。とつくに諦めたんだがな」

「アプリル……ほんとに、彼女を倒さないといけないの……？」

「だけど、領主の家の人達を襲ったって言うし」

すると、セイレが勇気の方を見た。

「襲ってきたのは彼らの方なの。私を捕まえて見世物にしようとしてきて」

「えええ？」

「どうやら、そんな領主達から逃げるために、歌を歌って抵抗したようだ。」

「悪いのは、領主達って事よね……」

「ディアーナが呟く。」

「それは……」

「勇気はどう答えればいいのか分からなくなっちゃった。」

と、突然、入り口で物音がした。

ハッとして見ると、入り口に数人の男が立っている。

先程、領主のもとに集まっていた村人達だ。

「ヨハン、そいつを渡せ！」

男達は小屋に飛び込んで来た。

「だが断る！」

瞬間、ディアーナは風の魔法で男達を吹き飛ばす。

「ヨハン、セイレ、逃げるわよ！」

「あ、ああ！」

ヨハンは布を掴むと、桶の中の水に浸し、セイレの身体をその布で包んだ。

「セイレ、少しの間我慢して！」

ヨハンは布で包まれたセイレを抱き上げる。

それを見て、羽心は勇気の方を見た。

「ヨハンさん達を守って！」

「え、でも！」

「早く！」

「わ、分かったよ！」

勇気は傍にあった網を手に取り、それを男達に向かって投げた。

「おい、やめろ！ うわっ！」

「くそ、取れない！」

男達は網に絡まり、パニツクになる。

「今だ！」

勇氣達は、セイレを抱きかかえたヨハンと共に、小屋から逃げ出した。

5 — 迫りくる領主達

「ありがとう、助かったよ！」

勇氣達は、村から少し離れた場所にある小さな砂浜まで逃げて来た。

「ここは、村でも俺と親友のミハエルしか知らない秘密の漁場なんだ」

周りにはいくつも岩があり、砂浜はその隙間に隠れるようにあった。

この周辺に魚が集まって来るのだという。

砂浜のあちこちに、ヨハン達が使っていたであろう魚の道具などが置かれていた。

ヨハンは、布に包まれたセイレを見た。

「すぐに海に浸けてあげるからね」

ヨハンは波打ち際へと行くと、セイレをゆっくりと海の中に降ろした。

「ありがとう、ヨハン」

「苦しかっただろ。もう大丈夫だよ」

その光景を、羽心とアプリルは嬉しそうに見ていた。

そんな羽心に、勇氣は話しかける。

「ねえ、羽心。僕達は人魚を倒しに来たんだよね？」

それを聞いた羽心は、神妙な顔つきになり、小さく頷いた。

「だけど、二人を見てたら助けなきやつて思ったの」

羽心は勇気をじつと見つめた。

「セイレさんは、悪い怪なんかじゃない。勇気だつてそう思うでしょ?」

「そ、それは、そう思うけど……」

セイレは怪だが、一人の女の人にしか見えない。

すると、プーカが勇気の服の胸ポケットから飛び出した。

「怪だつて、人間と同じだヨ。悪い奴ばかりじゃない」

「プーカ」

「オイラだつて、とつても素敵ないい怪だ」

「素敵かどうかは分からないけど、確かに悪い怪じゃないよね」

勇気の言葉に、プーカはニツコリと笑った。

「その生き物は何だい?」

ヨハンが、プーカを見て目をパチクリさせていた。

「あつ、えつと、彼は……」

「オイラはプーカ。妖精族の王子だヨ!」

プーカは、パタパタと羽を動かしながら、ヨハン達のそばまで飛んで行った。

「よろしくネー！」

「え、は、はあ」

プーカはヨハンに手を差し出す。

ヨハンは戸惑いながらも、プーカと握手をした。

「可愛い、妖精さんね」

セイレはクスクスと笑った。

その姿を見て、勇氣、羽心、デイアーナ、アプリルも心が和む。

だが、アプリルはすぐに笑顔が消える。

「人魚姫の話……知ってるのか……？」

アプリルの眩きは、聞こえない。

「けど、だったらどうして見捨里市に歌の力が？」

勇氣はセイレに、人魚の歌の力が×印状の罅を通って町に来てしまった事を話した。

しかし、セイレはその話を聞いて首を傾げた。

「確かに、歌には人間を眠らせてしまう力があるわ。だけど、×印状の罅というのは何か

しらっ？」

「邪鬼という少年に会いませんでしたか？」

そいつがあなただをたぶらかして、人魚の力を利用してしているんです」

「邪鬼？ そんな少年は会った事がないけど」

「目に包帯をしてて着物を着て刀を持った少年です」

「私には覚えが……だけでももしかしたら——」

「きいいく、全部あの領主のせいだ。ギャフンと言わせてやル！」

プーカは宙に浮かびながら、拳を握り締めた。

「ふん、私をギャフンとだと？」

「えっ？」

勇氣達が振り返ると、そこには領主と村人達がいた。

「どうしてここが？」

焦るヨハンを見て、領主はニヤリと笑った。

「彼が教えてくれたのだよ。秘密の砂浜があるとね」

領主の後ろには、オドオドとしている小柄な青年が立っていた。

「ミハエル！」

ヨハンの親友で、この砂浜を知っているもう一人の人物だ。

「ミハエル、どうして教えたんだ！」

「だ、だって、領主様の命令は絶対だから。それぐらいお前だって分かるだろ？」

「ふん、馬鹿な奴だ。人魚など退治されて当然の存在なのだぞ」

領主は村人達と共に、ジリジリと近づいて来た。

「勇気！」

羽心は焦った表情で勇気の方を見た。

ディアーナとアプリルは、身構えている。

「あ、ああ……」

勇気はセイレとヨハンを見る。

そして、領主と村人達を見た。

「僕は……」

次の瞬間、勇気はディアーナ達と共にセイレ達を守るように、領主達に向かって構えた。

「そこなくっちゃ！」

「いいぞ、やっちゃエー！」

羽心も隣で構える。

プーカも勇気の肩にしがみつき、応援した。

「くうう、妖精に人狼までいたとは。忌々しい怪物どもめ」

「オイラ達は忌々しくなんかないゾ！」

「そうよ！」

「怪物が人間様に意見する気か？　子供達よ。お前達もその男と同じで怪物の味方という事だな。」

「いいだろう、こいつらを全員捕まえるのだっ！」

領主の命令を受け、村人達が一斉に駆け込んで来た。

ディアーナが双剣を振ろうとした時。

―パシヤツ

少し離れた海面で何かが跳ねた。

「あれは―！」

セイレと同じ美しい人魚だ。

「もう一匹いたのか―！」

領主が苛立ちながら海の方を見ると、人魚は傍の岩場に腰を下ろした。

「聴くがよい。愚かな人間達よ―！」

人魚はそう言うと、大きく息を吸い込んだ。

「やばい！　歌を歌う気だゾ―！」

プーカの言葉を聞き、勇気、羽心、ディアーナ、アプリルはハツとした。

慌ててヘッドホンとイヤホンを耳に着け、ディアーナとアプリルも耳を押さえる。

「ヨハンさんも耳を押さえて―！」

「えつ、あ、ああ！」

ヨハンが耳を押さえた瞬間、人魚の歌声が響いた。

「ル〜、ラララ〜♪」

その美しい歌声に、村人達は思わず立ち止まり、聴き入る。

「おい、お前達、何をしている！ 早く捕まえるのだ！」

領主は村人達に怒鳴りつけるが、だんだん動きが鈍くなっていた。

「何か……眠くなつて、きたぞ……」

領主はうつとりとした表情になった。

「あ、あああ……」

次の瞬間、領主は眠りに落ちると、そのまま前のめりに倒れた。

村人達も次々と眠り、倒れていく。

「これは……？」

それを見て、ヨハンは戸惑う。

その中、セイレが人魚の方を見て叫んだ。

「姉さん、やめて！」

6 — 真つ白な泡

「姉サンだつテ？」

プーカがその言葉に驚いていると、歌が止まった。

「お、おい、もう大丈夫だゾ！」

プーカの手振りを見て、勇気と羽心はヘッドホンとイヤホンを外す。

「おい、大変ダ！ あの人魚はセイレちゃんのお姉サンみたいだゾ」

「えええ？」

勇気達は人魚の方を見た。

だが、人魚は海に飛び込み、姿を消した。

「どこに行くつもりだ？」

勇気達は、海面を見つめる。

しかし、どこに人魚がいるのか分からない。

すると、セイレの傍の海が水しぶきを上げた。

海中から、姉の人魚が姿を現した。

「セイレ、何故人間などといえるのだ！ 裏切るつもりか！」

人魚はセイレの腕を掴んだ。

「裏切るのなら、私がお前を抹殺してやる！」

人魚はそのままセイレを海の中に連れ込もうとした。

「きやあ！」

「セイレ！」

ヨハンがセイレの手を握った。

「人間、その手を離せ！」

人魚はセイレを掴んだまま、強引に泳ごうとする。

「ああっ！」

ヨハンはその勢いにバランスを崩し、海の中に入って行ってしまった。

「ヨハンさん！」

勇氣達は、慌ててヨハン達を追って、波打ち際を走る。

だが、人魚の泳ぎは速く、徐々に砂浜から離れて行く。

「ヨハン、危ないわ、手を離して！」

「離すもんか！ セイレ！ があ、がああ！」

ヨハンは辛うじて水面に顔だけを出しているが、

これ以上深くなれば、最早抵抗するのは不可能だ。

「このままじゃヨハンさんが大変な事になっちゃうゾ！」

「分かつてるってば！」

勇気とアプリルは波打ち際を必死に走り、ヨハン達を追いかけるが、どうすれば助けられるか全く分からなかった。

「飛んで行ければ助けられるのに！」

「飛んで行ければ？」

勇気とアプリルの後ろを走っていた羽心が、ふと砂浜を見た。

そこには、ボロボロになったロープが捨てられている。

ヨハンが捨てた漁の道具だ。

それを見て、羽心はハツとなった。

「プーカ！」

羽心はロープを手にとると、勇気の肩にしがみついているプーカを見た。

「ロープを持って、ヨハンさんのところまで行って！」

「オイラがあそこニ？」

「これはあなたにしかできない事なのよ！」

「オイラにしか……」

プーカは、にやっと笑った。

「しようがないナ。妖精族の王子の力を見せてやるゾ」

次の瞬間、プーカはロープを掴むと、ヨハン達の方へ飛んで行った。

「羽心、一体何なの？」

「いいから見てて！」

羽心は、プーカの持つて行ったロープの一方の端を握り締めていた。

「ヨハンさん！」

「プーカ！」

プーカは猛スピードでヨハン達の下へ辿り着いた。

「何をするつもりだ？」

人魚が睨む。

その中、羽心が砂浜から声を上げた。

「ヨハンさん、そのロープを身体に巻いて！」

「ロープを？」

ヨハンは訳も分からず、プーカの持つていたロープを身体に巻いた。

一方、それを見た勇気とアプリルはハツとした。

「そうか！ ロープを引っ張るんだね！」

「その通り！」

勇氣、ディアーナ、アプリルは羽心の持っていたロープの端を持った。
「んんんん!!」

勇氣、羽心、ディアーナ、アプリルはロープを引っ張る。

「な、何だ」

人魚は急に前に進めなくなった。

「勇氣、もつと引っ張って!」

「ああ! ふんんん!」

勇氣、羽心、ディアーナ、アプリルはさらにロープを引っ張る。

「セイレを、返せ……!」

ヨハンはセイレの手を強く握りしめていた。

「く、く、あああ!」

次の瞬間、人魚がセイレを離れた。

「今だ!」

勇氣達はさらに勢いよくロープを引っ張った。

ヨハンとセイレは波打ち際まで戻ってきた。

「羽心ちゃん、オイラやったヨ!」

「うんうん、偉い!」

「ヨハンさん、セイレさん、大丈夫ですか？」

勇気の言葉に、二人は笑顔で頷いた。

「許さん——」

近くの岩場から、声が響く。

いつの間にか、セイレの姉が岩場に座っていた。

「あの少年の言つた通りだ。人間など生かしておくべきではない」

「あの少年？ そうか、お前が邪鬼と会っていたのか！」

罅から漏れ出した人魚の力は、姉の人魚の力だったのだ。

「あの少年は私に言つた。妹を傷つけた人間達を、黙って放っておくのかと」

人魚の上に、×印状の罅が現れ、黒い煙が漏れ出す。

「私は人間を許さない！」

人魚は目を赤く光らせると、大きく息を吸い込んだ。

「姉さん、やめて！」

「耳を塞ぐんだ！」

勇気は、羽心、ディアーナ、アプリル、ヨハンに叫んだ。

刹那、人魚の歌声が響く。

勇気達はそれぞれ耳を塞ぐ。

だが、耳を塞いでも、歌声が聞こえて来た。

「ル〜、ラララ〜♪」

「どうして?」

「あの少年のおかげだ!」

罅から漏れる黒い煙が、人魚を包み込んでいた。

「私は、力を増した。より多くの人間を永遠に眠らせるために!」

人魚は目を赤く光らせながら、さらに歌を歌った。

「ル〜、ラララ〜♪」

「勇気、ディアーナさん、アプリルさん、このままじゃやばいわよ!」

「逃げろ!」

勇気達はヨハン達を連れて、その場から離れようとする。

だが、動けなくなってしまう。

歌声が、心の奥の奥まで響く。

勇気達はその声に聞き惚れてしまったのだ。

「おい、勇気くん、羽心ちゃん、ディアーナ、アプリル、しっかりしろ!」

「何だか、いい歌かも……」

「私、眠くなってきたわ……」

勇氣と羽心は、うっとりとしながら、その場に膝をつく。

「ダイアーナとアプリルは抵抗していたが、ヨハンも、フラフラとよろめき出した。
「ヨハン！」

「セイレが名を呼ぶが、ヨハンの目は今にも閉じそうだ。」

「セ…………イレ…………僕は…………君を…………守る…………」

「愚かな人間どもよ！ 永遠の眠りにつくがいい！」

人魚はさらに目を赤く光らせ、大きく息を吸った。

「やるなら、あたしが…………」

「ダイアーナが双剣を抜こうとした時、アプリルがダイアーナを止める。」

「何をするのよ、アプリル！」

「ジャネットが言ってただろ！ 問題行動を起こすなと！」

「ダイアーナは雪女を独断で救出、ドラキュラを見て暴走する、
という問題行動を起こしたため、二度としないと誓った。」

「アプリルによって気付いたダイアーナは、はっと手を止める。」

「……………そうよ」

「セイレは人魚を睨んだ。」

「確かに、姉さんの言うように、悪い人間はいっぱいいる。」

だけど、だけど、いい人間だつてたくさんいるの！

だから、私の大切な人をこれ以上傷つけないで！」

セイレは、大きく息を吸った。

そして、歌を歌った。

「ラララ、ルルララ、♪」

「その歌は!!」

人魚はその歌を聴き、動揺する。

それは、哀しそうな歌声だった。

耳を塞いでいる勇氣達にもはつきりと聞こえた。

だが、勇氣達は全く眠くならなかった。

「何なんだ、この歌は……?」

勇氣がそう呟いた瞬間、岩場にいた人魚が悲鳴を上げた。

「セイレ! どうして? 私はお前の事を! があああつ!」

人魚は悶えながら、身体から黒い煙を出した。

黒い煙は四散して、そのまま人魚も消えた。

一方、セイレも歌うのをやめ、その場に倒れた。

「セイレ!」

「何をしたんだ!」

「今のは……禁断の歌……。聴けば、人魚は死んでしまうの。歌った本人でさえも……」

「本人でさえも?」

「ああつ!」

セイレは苦しそうな表情を浮かべる。

「セイレさん!!」

勇気達はセイレの下に駆け込む。

「セイレ! セイレ!!」

ヨハンはセイレを抱きしめて、必死に名前を呼んだ。

「短い間……だったけど……あなたに会えて、よかつた……」

「セイレ、しっかりとしろ!」

「ヨハン、私……あなたの事が——」

「セイレ!」

セイレは、ヨハンの腕の中で、泡となって消えた。

それは、今まで見た事のないぐらい、穢れのない真つ白な泡だった。

「……だから言つただろ。人間と怪の恋は必ず、破れるつて」

アプリルはヨハンにそう、吐き捨てた。

彼の目には、涙が浮かんでいた。
しばらくして。

勇気、羽心、ディアーナ、アプリルは、村を歩いてきた。
全てが元に戻り、村人達はいつもと同じ生活を送っていた。

「ほんと、領主様はすぐ怒るから嫌だよな」

「おいおい、そんな事聞かれたら、また怒鳴られるぞ」

村人達は笑いながら、勇気達の傍を歩いて行った。

「結局、あの領主も無事で、何も覚えてないのよね？」

「ああ、人魚がいた事も、人魚を傷つけた事も何も」

「一般人には、分からないだろうな……」

恐らく、領主はまた人魚を見つけたら殺そうとするだろう。

「オイラ、何か納得できないゾ……」

勇気の服の胸ポケットの中で、プーカが怒ったような顔をした。

勇気、羽心、ディアーナ、アプリルも、プーカと同じ気持ちだった。

やがて、勇気達は秘密の小さな砂浜にやって来た。

砂浜には、青年——ヨハンがいた。

ヨハンはおんやり海を眺めていた。

そこへ、ミハエルが通りかかった。

「おい、ヨハン、何してるんだ？」

ミハエルが尋ねると、ヨハンは「さあ」と答えた。

「よく分からないけど、ずっと海を見ていたくて。見てると、何故か心が温かくなるんだ」

「ヨハンさん……」

セイレも、姉の人魚も、悪い怪などではなかった。

それなのに、二人とも消えてしまった。

「こんな悲しい事は、もう二度と繰り返しちゃいけないんだ」

海の上には太陽が浮かんでいる。

太陽は、砂浜を眩しく照らしていた。

勇氣達はいつまでも、ヨハンを見つめ続けていた。

「人魚は本当に死んだわけじゃない。精霊に生まれ変わって、今でも、あたし達を見守っている。」

ナタリアが、教えてくれたんだもの」

episode 5 | The approach in
 g n i g h t m a r e ㄱ 死者と話せる発明
 l | あの世との通信

—カチツ!

皺の刻まれた男性の手がスイッチを入れた。

—キュッ!

テーブルに置かれた金属製の四角い装置に電流が流れる。

その装置は跳び箱の一番上の段くらいの大きさだ。

側面にはいくつかのレベルメーターが付いている。

それらの針がキュツと大きく振れた。

—ジジッ!

装置の上には鹿の角のような形の金属棒が突き出ている。

その棒と棒の間に小さな青白い火花が散った。

周囲の空気が微かに対流を始める。

これは何かを送受信するためのアンテナなのだ。

スーツに身を包んだ老紳士は異様なアンテナをしつかりと見つめた。

そして、小さく頷く。

準備が整ったようだ。

老紳士は装置から突き出したラツパ状の金属に顔を近づけた。

広がった方に口を寄せているので、ラツパを逆から吹こうとしているように見える。

「ハロー、ハロー、聞こえるかい？」

ラツパ状の金属の中に語りかけると、今度はそこに耳を向けた。

老紳士は真剣な表情で何かが見こえるのを期待して耳を澄ます。

しかし……。

—ジジジッ、ジジッ!

頭上のアンテナが小さな火花と共に立てる音が響くだけだ。

老紳士は先程と同じようにラツパ状の金属に口を剥けた。

「ハロー、ハロー、聞こえるかい？」

老紳士は何度も語りかける。

「ハロー、ハロー、メアリー、聞こえるか？　メアリー、聞こえるなら返事をしてくれ」

そして、また耳を傾ける。

—ジツ、ジツ……ジジツ、ジツ……

装置の上に伸びたアンテナに、小さな火花が散り、苛立つ音を立てる。

老紳士の顔の皺と、白髪が火花に青白く照らされた。

「……ダメか……」

溜息をついた老紳士は、ネクタイを緩めた。

彼はどんな時でもスーツをきつちりと着ていた。

徹夜の仕事をしようとして、スーツのまま作業テーブルの上で寝てしまう事も度々だった。

今日も深夜になっていた。

この研究室には老紳士がぼつんといるだけだ。

彼はラップパ状の金属が付いた四角い装置を見つめて肩を落とした。

「やはり上手くないかない。すまん。メアリー」

老紳士は目の前に置いた写真立ての中の女性を見つめる。

そこには若く美しい女性の姿があった。

「諦めるのは早いですよ。良い方法があります」

不意に少年の声が響いた。

老紳士は驚いて、声の方へ顔を向ける。

「誰だ？」

研究室の戸口に見慣れぬ少年が立っている。

「お前は誰だ？　ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！　どうやって入った？」

少年はそれには答えずに部屋にゆっくりと入って来た。

長い髪で顔が半分隠れている。

老練士は不気味に思い、じつと見つめた。

「あなたは今、『霊界通信機』を作ろうとしてるんですよね？」

その言葉に老練士は心臓が止まりそうになった。

「えっ？　な、何故、それを？」

霊界と通信する装置の開発の事は、まだ誰にも話していなかったのだ。

「どうして、君は知ってるんだ？」

老練士に近づいてくる少年は答える代わりに提案をする。

「僕が手伝えれば通信だけでなく、霊界と交流もできるようになりますよ」

「何だって？」

「亡くなったメアリーさんに会う事だつてできるようになる」

「メ、メアリーと……？」

老練士の声が上がった。

彼がこの装置の開発に夢中になっていたのは、新たな発明のためではなかった。それ以上の理由があったのだ。

「本当にメアリーに会えるというのか？」

髪で顔が半分隠れた少年を睨みつけていた老紳士の目つきが変わった。

少年はニヤリと笑うと、部屋に置いてあるもう一つの装置を見た。

大きなレンズが付いた箱状の装置は、頑丈な三脚に取り付けられている。

「これが映画を誕生させたカメラなんですね」

「ああ、そうだ。だからなんだ？」

「このカメラを利用するんです。そうすれば、あなたはメアリーさんに会えます」

「え？ 本当か？」

少年は力強く頷いた。

「あなたは再び凄い発明をします。そしてメアリーさんに会える」

それを聞いた老紳士の顔に自信がみなぎってきた。

「よし、じゃ、直ぐに開発に取りかかろう」

「もちろんです。でも、超自然のパワーを注入しないとならないですけどね」

「え？ 超自然のパワーだって……」

老紳士は思案して眉間に皺を寄せた。

さて、その頃の路地裏である。

「ジャネット、これから見捨里市に来る怪、分か……」

ディアーナが「怪」と言った途端、ジャネットがディアーナを睨みつけた。

「怪じゃないの？」

「私と同じ、英霊です」

そう言つてジャネットが出したのは、ライオンの絵『Fate/Grand Order』のエジソンの頭。だった。

「ライオン？　なんでライオンの絵を出すのよ」

「それは自分で考えてくださいね」

ジャネットは口に入差し指を充てる。

一見すると、怪とは全く関係のない情報のように思えるが……。

「それで、今回の仕事は、誰が行きますか？」

「はいっ！　あたしが行きます！」

ディアーナは真っ先に挙手した。

自分も英霊として召喚されたのだから、同じ英霊が行くのがいいとか。

「元気がいいですね。よろしい」

前回、ディアーナは問題行動を起こさなかったので、

ジャネットは彼女が仕事に行くのを許可した。

「では、私達は応援していますよ」

「いつてらっしや〜い！」

「いつてきま〜す！」

皆に見送られて、ダイアーナは路地裏を後にした。

ダイアーナを見送った後、ジャネットの笑顔が消える。

「どうしたんだ、ジャネット？」

「……何やら不吉な予感がするので。これはいよいよもって、私が動くしか……」

「ちよつと、やなこといわないでよ、ジャネットおねえちゃん」

「あ、え、いえ、何でもありませんよ？」

ノノの心配に対し、笑みを浮かべるジャネット。

それは作り笑いであったが、ノノには分からなかった。

2 — 金曜日の放課後

「え？ どういう事？ 花恋ちゃんの家のテレビがいきなり3Dになったの？」

「そうなの。映画館の3D映画みたいになったの」

金曜日の放課後の教室で、羽心は花恋に奇妙な話を聞かされていた。

「でも、3D映画ってメガネをかけるよね？ メガネをかけたの？」

「ううん、違う」

花恋は首を横に振って詳しい説明を始めた。

「昨日は『世界の恐怖動画連発』って番組を見てたのね」

「ああ、年に1、2回放映してる番組ね」

「え？ 羽心ちゃんも見たの？」

「見てない。だってネットで見られる動画を紹介してるだけなんだから」

そう答えてから羽心は、花恋をきよとんと見つめた。

何しろ、花恋は幽霊だけの宇宙人だのは全く信じないタイプなのだ。

「花恋ちゃんが、そんな番組を見るのが不思議なんだけど？」

「パパが好きなよ。あんな動画は嘘に決まってるし、私はそういうの嫌いだもん」

「あ、そうだよね。それで……」

「私は近くで本を読んでいたの。」

「そしたら、いきなりパパが『なんだこれ！』って言うから、テレビを見たの。そしたら……」

花恋は不意にゾツとした表情で口を噤んだ。

昨夜の事を鮮明に思い出したのだ。

「花恋ちゃん、大丈夫？」

羽心が声をかけると花恋は我に返った。

「あ、ごめん。それでテレビを見たの。」

「そしたらまるで3D映画みたいに幽霊が画面から浮き上がって見えたの」

「ええ？ どういう事？」

理解できない羽心の疑問に、花恋は強い口調で答える。

「ほんとなのよ！」

「だけど、花恋ちゃんの知らないうちに3Dテレビに買い替えたんじゃないの？」

それを完全否定するように花恋は首を大きく横に振った。

「『買い替えてない』って、パパもママも言うのよ」

自分の事が信じられずに俯く花恋だが、羽心も考え込んでしまい、何も言えなくなっ

た。

「何、どうしたの？」

暗い表情の二人を見て、勇気とディアーナが声をかけてきた。

「花恋ちゃんちのテレビが突然、3Dになっちゃったんだって」

「へえ、3D映画は見た事あるけど、テレビは見た事ないんだよね。」

昔は3Dテレビがいっぱい売られてたらしいけどね」

「何それ……」

その話は勇気の口から出た途端に跡形もなく消えてしまう。

羽心と花恋の耳に入らなかつたのだ。

二人は、「うくん」と唸って俯いているだけだ。

「何をどうしたら3Dになったの？」

ディアーナは花恋に、テレビが3Dになった理由を聞き出した。

すると、花恋は頷いて、ディアーナにだけ事情を話した。

「幽霊が画面から飛び出した？」

「うん、そんなの信じなかつたけど、確かに幽霊が画面から出たの」

「映像の幽霊なんて、気味悪いわね」

「あのおく」

キユウも幽霊だが、あちらは「実際の」幽霊である。

映像の幽霊は、流石のディアーナも気味悪がった。

話を聞いてもらえなかつた勇氣は、二人の顔を恐る恐る覗き込んだ。

「あ！ いけない！」

「わあ！ 何々？」

突然、花恋が我に返って声を上げた。

目を白黒させる勇氣にはお構いなしに、花恋はランドセルを掴んだ。

「今日は塾なんだ」

「忘れてちゃダメじゃん！」

「うん、急いで帰らないと！」

羽心も我に返り、花恋は慌てて教室を飛び出していく。

その背中を見送つた羽心が勇氣を見た。

「ところで、明日の見捨里名画館には、勇氣ももちろん行くわよね？」

羽心の唐突な質問に、勇氣はきよとんとした。

「見捨里名画館って昔の映画ばかり上映してる古い映画館だよな？ え？ なんて？」

勇氣のその言葉を聞いた羽心は、呆れた様子で声を潜めた。

「勇氣、『怪』についてもっとしっかり勉強しないと駄目でしょ？」

「うん。まあ、そうだけど……」

先日、人魚を倒してからというもの、

勇氣は怪について今まで以上に深く考えるようになっていた。

セイレも、姉の人魚も、悪い怪ではなかった。

人間が捕まえようとしたせいで、逃げるために怪の力を使ったただけだったのだ。

「怪って、本当に悪い存在なのかな……？」

勇氣はふと、羽心にそう言った。

羽心はその言葉を聞き、真剣な表情になった。

「それは、私にもよく分からないけど……」

どうやら、羽心も前回の戦いから悩んでいるようだ。

しかしすぐに首を横に振った。

「よく分からないけど、私達は見捨里市を守らないといけないでしょ。」

「だったら、できる事は何でもしておかなきゃ」

「そ、それは……」

プーカもゾンビの話をした時に同じ事を話していた。

デイアーナやノノ、アプリルにチエイニーも、悪い人物ではない。

「やっぱりそうだよね……」

怪が本当に悪者なのかどうか分からないが、

邪鬼は怪の力を利用して、この町を襲おうとしている。

勇氣と羽心は、そんな邪鬼の野望を絶対に食い止めなければならないのだ。

ディアーナも路地裏を守るために、彼らと共に戦っている。

「だけど、怪の勉強と名画館の映画と何が関係してるの？」

「だから、怪の映画が上映されるのよ」

「怪の映画って……？」

「それは観てのお楽しみよ」

勇氣は意味がよく分からなかったが、羽心と映画を観に行く事にした。

その時、後ろからディアーナの声が聞こえてきた。

「あたしを無視しないでよね」

「あ」

3 — 怪の映画上映

翌日の午後。

見捨里名画館の前に来た三人だが、勇氣は上映案内を見て目を丸くした。

「ええ？ 何、これ？ 怪って、怪談映画って事？」

「映画かあ、あたしにはよく分かんないけど見たいわねえ」

「そう、勉強になるでしょ。ディアーナさんも映画を見るのは初めてよね」

入り口には『四谷怪談』のポスターが貼ってあった。

それを見て、勇氣は急に震え出す。

「怪談映画って、つまり、昔の日本のホラー映画だよね。」

しかも、『四谷怪談』はその中でも一番有名だよ。あの、僕は……」

後ずさりを始めた勇氣の腕を、羽心が掴んだ。

「ほら、勇氣、行くわよ！」

「いや、僕は、やっぱり帰るから……」

「鶴やゾンビと戦って散々怖い目に遭ってきたのに、なんでそんなに怯えてるのよ？」

「だってさ、戦う時は必死だから怖がる暇もないけど映画は大人しく観てないといけな

いんだよ。

絶対に怖いから目を瞑ってるよ」

「この映画は50年くらい前の作品よ。今の3D映画のホラーに比べたら大した事ないわよ」

「3D映画って何ダ？」

「あたしもさっぱりだわ」

勇気の上着の胸ポケットから突然、プーカが顔を出した。

「3D映画を知らないの？」

勇気と羽心は声を揃えて驚いてしまった。

「なんだヨ！ オイラは100年も前から来たんだ。知らないのが当たり前だロ？」

「あたしだって、この世界の事はよく分からないし……」

「あ、そうよね。立体映画よ。映像が飛び出てくるの」

「へえ、凄いな。映像が飛び出すんだ」

「でも、この映画は飛び出さないわよ。50年前の映画だから」

「でも、オイラにとっては50年も未来の映画だヨ。楽しみだなア」

プーカは目をキラキラとさせた。

「よし、じゃ、プーカのためにも頑張って映画を観るのよ。勇気、行くわよ！」

羽心は勇気の腕を改めてしっかり掴んだ。

「あ、ちよつと！ ねえ、助けて……」

勇気は引きずられるように劇場に連れて行かれる。

「いつだって、あたしは忘れない……」

ディアーナもある事を眩きながら、劇場に入った。

「わア、スクリーンが大きい！」

「おオ、色が付いてるゾー」

「えエ？ 音が出てるヨ」

映画が始まると勇気のポケットの住人はすっかり興奮していた。

何しろ、プーカの時代の映画は白黒で、音も無かったのだ。

「しーっ！ 静かにしなさい！」

「おお、宝具『Fate／Grand Order』のエジソンの宝具「W・F・D」は映画のような演出。でもあったわね」

勇気の隣に座っていた羽心がプーカを睨みつけて、囁き声で注意する。

ディアーナはのんびりと映画を観ていて、勇気は目を瞑っている。

「勇気！ 映画を観てないじゃない！」

勇気は、目を閉じたまま答える。

「大丈夫だよ。『四谷怪談』の内容なら知ってるもの。」

お父さんの書齋にあった何かの本で紹介されてたからさ」

「勇氣！」

羽心はついムツとしたが、「しっ！」と後ろの席の客が注意してくる。

自分こそ五月蠅くなっていた羽心は首を竦め、そんな羽心を勇氣は小さく笑った。

すると、プーカが奇妙な事をほつりと囁く。

「オイラには、この映画は立体的に見えるゾ」

「そう？」

50年前の映画が3Dなわけがない。

(怖いから、立体的に見えるのかな?)

勇氣は気になって目を開けたくなった。

(でも、映画を観たら絶対に怖いよな……)

父親の書齋で読んだ『四谷怪談』の解説文を勇氣は思い返した。

怪談の定番中の定番で、江戸時代に起きたとされる事件を基にして創作された物語だ。

それが歌舞伎や落語で人気になって、現在までに様々な映画やテレビドラマにもなった。

出世欲に取りつかれた夫の伊右衛門の仕打ちによつて、妻のお岩は命を落とす。しかし、お岩は亡霊となつて伊右衛門に復讐するという内容だ。

(これだけ知つてるんだから映画を観る必要はないよね。目を閉じてよう)

怖がりの勇氣は何があつても映画を観ないと改めて決めた。

何しろ、台詞や音からして既に怖い。

それだけで充分だった。

目を閉じたまま時間が流れていく。

やがて……。

「いえもんさまあああー！」

いよいよクライマックスになつたようだ。

「お岩さんの亡霊が出てきたヨ」

「説明しないでいいよ」

勇氣は絶対に目を開けないように両手で目を塞いだ。

「でも、凄く怖くなつてきたヨ」

「ほう?」

「分かつてるつてば!」

「でも、お岩さんが劇場の中に出てきて歩いてるヨ」

(そんな、バカな……?)

「えっ?」

隣から羽心の荒い息遣いが聞こえてきた。

「羽心、どうしたの?」

勇気は顔を覆う指の隙間から隣の席を見た。

『怪』の勉強になるとこの映画に誘ってきた羽心がすっかり怯えている。

しかも、周囲から観客のどよめきが起き始めた。

「嘘だろ?」

「どういう事なの?」

「なんだ、あれ?」

そう言つて観客達は身を縮めている。

「いえもんさまあああ! うらめしやあああ!」

一際大きく響いたお岩の声に、勇気は驚いて手を下ろして目を見開いた。

「な、なんだ!」

思わず声を上げてしまう。

なんと、お岩が場内を歩いていたので。

おぞましい表情と動きで観客に迫ってくるお岩。

「勇気はゾツとし、ディアーナは風の刃を放つが、風の刃はお岩をすり抜ける。実体がないの?」

「羽心! これ、何?」

「観てなかったの? お岩さんがスクリーンを抜け出して来たのよ!」
「え? これって3D映画じゃないノ?」

プーカの疑問に勇気が答える。

「3D映画でも、登場人物が客席を歩き回る事なんてないよ」

勇気、羽心、プーカは突然の事に混乱するばかりだ。

ディアーナは、歯を食いしばっている。

「いえもんさまああ! うらめしやああ!」

再びお岩が不気味な台詞を場内に響かせた。

「みんな、逃げるのよ!」

叫んだのは羽心だ。

その言葉で観客はドツと立ち上がった。

「きゃあああ!」

「わああああ!!」

観客は場内後方の扉に僕も、私も、と走る。

その中に、勇氣、羽心、ディアーナも加わった。

二箇所しか無い後方の扉に皆が殺到したので、押し合いへし合いになる。

「皆さん、落ち着いてください！」

「お客様！ 落ち着いて！ 落ち着いて！」

異常事態に気づいた劇場スタッフ達がロビーから声を掛けた。

しかしパニックが収まる様子はない。

—ガバツ！ ドンツ！

観客が扉を勢いよく開けてスタッフを押し倒した。

パニックになった人々がロビーを走る。

—ドドドドツ！

その中に勇氣、羽心、ディアーナもいた。

4 — 飛び出す幽霊達

三人は見捨里市の外に飛び出してくる。

日が落ちた夕方の町は薄暗い。

街灯が点き始める中を、蜘蛛の子を散らすように逃げる観客達。

勇気、羽心、デアーナも走る。

「何これ!？」

「え!? うわあ! 3Dみたいだ!」

「実体がないから、あたしの攻撃が効かないわ!」

町の片隅でスマホの動画を見ていた大学生の男女が悲鳴を上げた。

勇気、羽心、デアーナは思わず立ち止まって大学生の男女を見る。

その周囲に人々が集まってきていた。

「え? 嘘!？」

大学生の男女の持つスマホを覗き込んだ人々が青ざめる。

「心霊スポットを紹介してる動画が立体的に見えるぞ!」

それを聞いた人々が自分達のスマホやタブレットを取り出す。

大学生が見ているのと感じ動画を見始めた。

「なんだこれ？ 不思議だ！」

「スマホで3D映像なんて出来るの？」

人々は感心して見入った。

ところが……。

—ピュツ！ シュルシュル！

スマホの中から女の長い髪の毛が飛び出して、画面を見ていた人々に絡みついた。

「きゃあああああ！」

「わあああああ！」

心霊スポットに居た女の幽霊の髪が飛び出してきたのだ。

—ガバツ、ザツ！ ガシツ！

画面の大きなタブレットからは女の幽霊の手が飛び出して人々の顔を掴んだ。

「ぐあああああ！」

顔を掴まれた男性はもがき苦しむ。

「何が起きてるんだ？」

「何なのこれ？」

その光景を呆然と見ていた勇気と羽心が思わず眩いた。

ディアーナは、相変わらず悔しそうに歯を食いしばっている。実体がないため、攻撃が効かないためだ。

顔を掴まれた男性が、タブレットから伸びた幽霊の手を振り払う。逃げる男性はタブレットを投げ捨てた。

それが羽心の目の前に落ちる。

「いやー！」

タブレットから伸びた幽霊の手が羽心の足を掴もうとした。

「羽心、危ないわー！」

ディアーナはタブレットを蹴り飛ばして、羽心の腕を引いた。

「ディアーナさん、ありがとう！」

礼を言った羽心は、上空を見てはっとした。

「見てー！」

見捨里市の空に小さな×印状の罅が浮いていた。

「くそっ！ やっぱりか！」

勇気が苦々しく言う。

プーカが勇気のポケットから顔を出した。

「キミ達の出番じゃないか？」

「よし、羽心、ディアーナ、行こう！」

走り出そうとした勇氣とディアーナだが、羽心はまだ空の罅を見ていた。

そこから射した光が見捨里名画館の周囲を照らしている。

光に照らされた場所は、長方形に明るい。

「あの光、映写機の灯り……」

「は？」

「映写機……」

勇氣には羽心の独り言が理解できなかつたが、ディアーナは理解していた。

はつきりしているのは、この町がピンチだという事だ。

「急ごう！ 幽霊達が見捨里市に出て来る前に怪を倒さない」と

勇氣は羽心とディアーナと共に、通りを走った。

「今度の怪はお岩さんだよね？ 江戸時代に行けばいいよね？」

勇氣は走りながら羽心に尋ねた。

一刻も早く『時のトンネル』に飛び込みたかつた。

しかしそのためには、あらかじめ行き先を決めておかないとならない。

だが、羽心は意外な答えを返し、ディアーナは首を横に振る。

「お岩さんじゃない気がする」

「ええ、ジャネットと同じかも」

「なんだよ、それ。映画にお岩さんが出てきたんだよ」

「スマホやタブレットから出てきたのはお岩さんじゃないわ」

「そうだけど……。じゃあ、僕達は『時のトンネル』でどこに行けばいいの？」

「とにかく、書齋に急ぎましょ！」

家に辿り着いた勇氣が鍵で玄関扉を開ける。

そして、羽心とディアーナと三人で家に走り込んだ。

母親は仕事に行っていて留守だ。

一階を走り抜けると、半分地下室になった父親の書齋に急いで入った。

書棚の前に立った羽心は、本を見回しながら勇氣に尋ねる。

「ねえ、勇氣。罫から射してた光が、映写機の灯りみたいじゃなかった？」

「言われてみれば、映画館の一番後ろからスクリーンに向かって出てる光に似てた」

「そうでしょ」

「映写機、ねえ。英雄が開発したらしいけど」

羽心は書棚の一点に目を留める。

「あ、これよー！」

羽心は『エジソン』の本を書棚から取り出した。

「エジソンが蓄音機や白熱電球、それに映画を発明したのは知ってるでしょ？」
 「ううん、まあ、本で読んだけど……」

「実は映画の作品もいっぱい作ってるのよ」

「ええ？ そうなんだ」

「それに、『霊界通信機』も作ろうとしていたのよ」

「え？ 『霊界通信機』？ それって一体何なの？」

「霊フォン、死者と通信できる奴よ。ほら」

勇気に羽心はエジソンの本の一部を見せた。

くトーマス・エジソンく

トーマス・エジソン（1847～1931）は、蓄音機、白熱電球、映写機などを発明した。

1891年に発表した最初の映写機はキネトスコープという名前で覗きメガネ式だった。

その後、フランスでスクリーンに映像を映すシネマトグラフが開発された。

それに刺激を受けたエジソンは、

やはりスクリーンに映像を投影するヴァイタスコープを発明した。

これらが現在の映画に発展した。

エジソンは1893年に自身の映画スタジオを設立。

そこで約1200本の映画作品を生み出している。

晩年には『霊界通信機』の発明に挑んでいた。

勇気は頭の中を整理しようとした。

「つまり、エジソンは自分で映画作品をいっぱい作ってて、『霊界通信機』も作ろうとしていた。

×印状の罅からは映写機のような光が射していて、

お岩さんや様々な幽霊が映画や動画から現れた」

「今回の怪を作り出しているのはエジソンよ」

「エジソンが怪……?」

「はあ? ツタンカーメンはともかく、彼はれっきとした英雄なのよ? あり得ないわ」

「ディアーナは勇気の発言を否定する。」

「とにかく、エジソンの研究所に急ぎましょ」

「でも、ディアーナが英雄って言ってたエジソンなんて倒せないよ」

「勇気くん、バカだな。エジソンを倒すわけにはいかないよ」

「でも、武器は……?」

「武器はないヨ。説得するんだヨ」

プーカが勇気に的確な助言をする。

「『霊界通信機』の発明をストツプさせるんだヨ」

「そういう事よ」

「なるほど、そうだね。分かった」

勇気は強く頷く。

「オイラも手伝うヨ」

「1920年代だから、プーカの時代に逆戻りよ。でも、アメリカだけど」

「霊フォン、見たいわね」

「それは楽しそうダ」

勇気、羽心、ディアーナは小さな仲間の協力を心強く思った。

勇気は両手に太陽と月のグローブを嵌めた。

羽心は、ポケットから、星のグローブを取り出して、右手に嵌めた。

「よし、行こウー！」

「ええー！」

プーカが勇気の胸ポケットでしつかり身構える。

勇気は、壁に近づくと、左手をかざして呪文を唱えた。

「カオス・ゲート
時空貫通」

5 — 発明王の研究室

アメリカ、ニュージャージー州のウエストオレンジ。

陽光が煌めき、鳥がさえずっている。

そこに、突如、光の渦が出来た。

—ゴオオオ—！

渦の中から勇氣、羽心、ダイアーナが飛び出てくる。

—スタツ！

三人はバランス良く地面に着地した。

「羽心、上手くなったね」

「勇氣だって、今回はピタリと着地したじゃない」

「うん、地面がしっかりしてるからね」

「ふふつ、霊フォンに英雄かあ」

手入れのされた芝生の上に三人は立っていた。

ここは大きな会社の敷地の中だ。

目の前にはレンガ造りの赤茶色の三階建ての建物が建っている。

「エジソンさんの研究室はこの建物の中にあるの？」

勇気は羽心に尋ねた。

羽心はエジソンの本をしつかり読んでいて、ここに一番詳しいのだ。

「違うの。この建物全部が研究室なのよ」

「え？」

「陣地作成『F a t e』のキャスターのクラススキルの一つ。自分に有利な陣地を作る。に道具作成『F a t e』のキャスターのクラススキルの一つ。魔力を持つ道具を作る。らしいわね」

「この敷地全部がエジソンさんの会社のものなのよ」

三階建てのビルは学校の校舎くらいの大きさだ。

勇気はさらに辺りを見回す。

敷地の中には黒いゴツゴツした大きな倉庫がある。

「見捨里小学校の敷地と同じくらいの広さがあるよ」

「発明家って聞くと、コツコツ一人で研究してるイメージだものね」

「凄いなあ……」

「おい、キミ達、感心してる場合じゃないゾ」

勇気の胸にいるプーカが急かしてきた。

勇氣、羽心、ディアーナは、本来の目的を思い出して、三階建ての研究室の入り口に向かった。

重たい鉄扉で閉ざされていて容易に入れそうにない。

しかし、こういう時に物怖じしないのが羽心だ。

すかさず鉄扉を拳で叩き始めた。

—ドン、ドン、ドン！

「すみませーん！ すみませーん！」

—ドン、ドン、ドン！

しかし、誰も出てくる気配が無かった。

羽心はムツと膨れた。

三人は途方に暮れて、建物を見回した。

レンガの壁面に嵌められた鉄枠の窓ガラスの中で働く多くの人々が見える。

しかし、窓はきつちりと閉じられており、忍び込むのは不可能だ。

「どうする、勇氣？」

「うん、どうしよう……」

「こじ開けるわけには、いかないしね」

三人は頭を抱えた。

すると、突然……。

—ウイイイン！ ギギギイイイ！

勇氣、羽心、ディアーナはびっくりして音の方を見た。

昔の蒸気機関車を一回り大きくしたような、黒いゴツゴツとした倉庫が動き出していた。

「な、なんだ！ あれ！ 倉庫が回ってる！」

「わあ、凄いわね！」

勇氣とディアーナが思わず声を上げた。

今度は黒い倉庫の上部が……。

—パカッ！ キキキイイイ！

不気味な音と共に建物の上の口が開いた。

「うわああ！」

「凄い!!」

ディアーナが歓喜し、勇氣は腰を抜かし、

プーカはポケットから飛び出して勇氣の頭にしがみついた。

「勇氣もプーカも、そしてディアーナさんも落ち着きなさい！」

強い語気で三人を諫めたのは羽心だ。

「あれは撮影スタジオなのよ」

「さ、撮影……？ ス、スタジオ？」

「そうよ。」

エジソンさんは、直射日光をスタジオに入れるために建物全体が回転して、天井が開くスタジオを作ったそうよ。これがきつとそうよ」

「ふーん」

すっかり怯えた勇氣だが、建物の下の地面が回転するように作られているのに気づいた。

「そうか。よし、オイラが確かめてやるヨ」

プーカが勇氣の下から舞い上がった。

妖精族の王子はそのプライドの高さに見合った度胸もある。

こういう時は本当にありがたい仲間だ。

空中から黒い建物の口の部分を見つめるプーカ。

その口の中に何人かの人間が大きな箱状の物を囲んでいるのが見えた。

プーカは、箱状の物を確認するために近づく。

それは、大型のカメラで、その前にちようど光が射し込んでいる。

「やっぱり、（こ）は撮影スタジオなんだナ」

レンズの方に「えい！ えい！」と、何かに向かって気合いを入れている痩せた男がいる。

それを老紳士がカメラで撮影して、その脇には髪で半分顔を隠した少年が立っていた。

「何を撮影してるんだ？」

プーカはもつとよく見たくて口のように開いている窓に近づいた。

よく見ると、男の人が気合いを入れているのは何種類かのパンだった。

その中にはプーカの大好物があった。

「あ、くるみパン！ うまそウー！」

つい大きな声が出てしまった。

その瞬間、髪で顔を半分隠した少年がスツとこちらを見上げた。

「やばー！」

プーカは慌てて物陰に隠れた。

「見つかってないよネ。大丈夫だよネ。よし、三人に報告ダ」

下で待つ勇氣、羽心、ディアーナの方に向かって飛び立った。

「やっぱり撮影スタジオだったヨ。」

年のいった男の人がカメラを回して、痩せた男がパンに向かって気合いを入れてた

「ヨ」

「その年のいった男の人がきつとエジソンよ」

「でも、男の人がパンに向かつて気合いを入れてたつてどういう事？」

理解できない勇氣は、隣の幼馴染を見たが羽心も首を振るだけだ。

「あ、それと、髪のを垂らした少年もいたネ」

「少年……」

「ディアーナは不安を感じて眩いた。

「とにかく、スタジオを訪ねましょ」

「了解ダ」

プーカは勇氣の胸ポケットに隠れた。

そして、黒いスタジオに向かつて勇氣、羽心、ディアーナは歩き始めた。

「バンッ！」

スタジオの扉が突然開いた。

びっくりして立ち止まる勇氣達。

「何するんですか？」

建物の中から痩せた男が突き飛ばされるようにして出てきた。

「ほら、これがギャラだ！」

「ひでえな」

遅れて出てきた老紳士が札束を瘦せた男の足下に投げつけた。

瘦せた男は札束を拾ったものの口元を歪める。

「エジソンさん、これは約束よりも安すぎます」

「お前みたいないんちキ超能力者にはこの程度の金で充分だ！ さつさと帰れ！」

「今日は調子が悪かっただけです。明日なら絶対に上手くいきますから」

「何日やったところで、手を触れずにパンを宙に浮かすなんて事はできない癖に！」

「このインチキのバカが！ 俺の会社の敷地からさつさと出て行きやがれ！」

「けっ！」

瘦せた男は悪態をつけて足早に敷地から出て行った。

「あれが、英雄なの？ プレジデントではなくて？」

勇氣と羽心は、凄い剣幕で喧嘩している大人を見て、身が縮んでしまった。

立派な偉人の発明王がこんなに激しい性格の人だったのが信じられなかった。

「この人、エジソンさんだよね？」

「そうよ。今出て行った男の人がそう呼んでたじゃない」

「……英雄、英雄、英雄……」

ひそひそと語り合う勇氣、羽心、ディアーナにエジソンが気づいた。

「お前らは何だ？」

エジソンの怒声が飛んできた。

「え？ あ、あの……」

気が動転してしまつて直ぐに答えられない勇気だが、こういう時はやはり羽心が頼もしい。

「私達、エジソンさんにお話があつて来たんです」

「俺に話だと？ 子供だからつて騙されないぞ！」

大人に頼まれて俺の発明を盗みに来たスパイだろ？」

「違います！ スパイなんかじゃないです！」

即座に羽心は答えたが、エジソンは聞く耳を持たない。

「出て行け！ 出て行かないなら子供でも容赦をしない。警察を呼ぶぞ！ さつさと出てけ！」

さつさきの痩せた男とのやり取りでエジソンはよほど気が立っているのだろう。

「警察……？」

「警察だつてさ」

恐くなった勇気と羽心はその場を離れようとするがダイアーナは怯まず「待つて」と制止する。

「おい！ キミ達はなんのために、わざわざこんなところに来たんだヨ」
声を響めたプーカの苦言が聞こえてきた。

「それはそうだけど……」

勇気はどうすればいいか分からなかった。

エジソンに事情を説明して『霊界通信機』の発明をストップさせないとならないのだ。
ところが、そのエジソンは物凄い剣幕で怒っていて、取り付く島がない。

勇気は羽心を見て、その顔にも同じ考えが書かれていた。

「少し時間を置いた方がいいと思う」

いつもの羽心らしくない眩きだ。

「おい！ その間に見捨里市が大変な事になっちゃうゾ！」

「力づくで止める訳にはいかないしね」

プーカの苛立ちは小声でも充分に分かる。

その時……。

「エジソンさん、その子達にも協力してもらいましょーよ」

「!!」

勇気達は声の方を見た。

エジソンの背後から出てきたのは、髪の毛で顔を半分隠した少年だった。

その数分前。

「お前みたいなインチキ超能力者にはこの程度の金で充分だ！ さっさと帰れ！」

「今日は調子が悪かっただけです。明日なら絶対に上手くいきますから」

「何日やったところで、手を触れずにパンを宙に浮かすなんて事はできない癖に！」

このインチキのバカが！ 俺の会社の敷地からさっさと出て行きやがれ！」

髪の毛で顔を半分隠した少年は、スタジオの中で笑いを堪えていた。

エジソンの怒りっぷりがおかしかったのだ。

偉人として世界から尊敬される人物が、実はこんなに感じの悪い人間なのだ。

困った事に折角訪ねてきた大事な客も追い出してしまいそうになった。

「出て行け！ 出て行かないなら子供でも容赦をしない。警察を呼ぶぞ！ さっさと出

てけ！」

これは「まずい」と少年は表に出る事にしたのだ。

「エジソンさん、その子達にも協力してもらいましょうよ」

「え？ なんだって？」

エジソンは少年の方を振り向いた。

「スパイだったらこんな堂々と訪ねてきませんよ。それに……」

顔を半分隠した少年はエジソンをスタジオの中に誘った。

そして、勇氣達に聞こえないように耳打ちする。

「あの少年の胸の中と、女性の中には、僕達の研究で一番欲しいものが入ってますよ」
「なんだ？」

エジソンも小声で答えた。

「超自然のパワーです」

「え？」

「妖精とエルフですよ。さつき飛んでいるのを見たんです」

「妖精？」

エジソンはスタジオの戸口の陰から外にいる突然の訪問者を覗く。

勇氣の胸の辺りを見ると上着が内側から動いた。

ポケットの中の居心地が悪くて、プーカが身体の向きを変えたのだ。

「コナン・ドイルさんが本物だと認めた妖精と同じ種類ですよ。」

どんな超能力者よりも強い超自然パワーを持っていますよ。」

だからそれを吸い取ればあなたの発明は完成しますよ」

エジソンはこの少年を100%信じる気にはなれなかった。

しかし映画のカメラと開発途中の『霊界通信機』を接続したら、

今までよりも良い結果が得られるようになったのだ。

今は少年の話聞いておいた方が良いと思えた。

「そうか、なるほど。分かった」

エジソンは頷くと踵を返して再び表に出て行った。

少年は満足げにエジソンを見送り、その視線は外で待つ羽心に向いた。

勇気の胸のプーカと、ディアーナだけでなく、羽心にも少年は特別な興味を持ったようだ。

「いや、すまなかった。

さっきの男があまりに役立たずだったんでつい機嫌が悪くなっちゃってしまっただけ。

未来を支える君達のような子供の訪問は大歓迎だ。さあ、中に入れてくれ」

「え？」

勇氣、羽心、ディアーナはエジソンの態度が豹変した事に目を疑った。

「さあ、中に入れてくれ。ここはスタジオなんだから。映画の撮影風景も見せるよ。さあ、どうぞ」

勇氣、羽心、ディアーナはエジソンを怪しく思った。

「ねえ、勇氣、なんか変だよな」

「ああ、そうだよな」

「邪鬼に苛立ってるの？」

三人が戸惑っている、ポケットの中の住人が再び苛立った。

「ほら、何してるんだヨ。キミ達は『霊界通信機』の発明をストップさせに来たんだロ？」

その言葉を聞いて勇気、羽心、ディアーナは踏ん切りが付いた。

「エジソンさん、ありがとうございます」

「でも、あたし達はあなたに話をしたい事があつて来たのよ」

「ああ、さつきもそう言っていたな。まあ、話はスタジオの中で聞くよ。さあ、入って入って」

エジソンはニコニコと勇気、羽心、ディアーナを手招きする。

「羽心、行こう」

「うん」

三人はエジソンのスタジオの中に入ってしまった。

一方、髪で顔を半分隠した少年は二人に背を向け、ディアーナに殺意を向けた。

「真っ黒」

スタジオに入った羽心は、第一印象をそのまま声に出した。

「ああ、真っ黒な方が、カメラで写す対象が目立つんでね」

そう話すエジソンは、スタジオに入ってきた勇気の胸の辺りをじつと見ていた。

そこには身を潜めたプーカがいるのだ。

エジソンは、勇氣、羽心、ディアーナがスタジオに入ったのを見届けると、出入り口の鍵を静かにかけた。

しかし、勇氣、羽心、ディアーナはある装置に気を取られていて気づかなかつた。

「これね！」

ディアーナは思わず声が出てしまう。

「驚いたかね。これで映画というものが撮れるんだよ。凄いだろ」

勇氣、羽心、ディアーナの目の前に大型カメラがあつた。

しかし、カメラには不似合いな太いコードが何本も繋がっていた。

そのコードは棺桶を縦に立てたような奇妙な大きな箱に繋がっている。

「これは？」

「いいところに気づいたね。今はカメラ以上の装置になっているんだ。これはなんだと思う？」

「エジソンさん、僕達はこの装置についてお話がしたくて……」

エジソンは自分の発明品の説明に夢中になっていて勇氣の言葉が耳に入っていない。

「これは霊界と交流するための装置だよ。長年の夢だった装置がもう直ぐ完成するんだ」

エジソンはそう言って棺桶のような箱の前に歩み寄つた。

「その少年のおかげだよ」

エジソンは箱の扉を開けた。

そこには×印状の罫があつた。

「これは！」

目を丸くする勇氣と羽心。

瞬間、ディアーナは双剣を抜く。

顔を半分隠していた少年が髪のをかき上げた。

包帯で片目を隠した少年だった。

「来たわね、邪鬼!!」

6 — プーカの危機

「来たね。この傷の分、お返しさせてもらおうよ」

邪鬼は傷ついた右手をディアーナに見せる。

キユウが消える時、ディアーナが投げたナイフが命中した場所だ。

「なっ!!」

邪鬼の、包帯に隠されていない目が勇氣、羽心、ディアーナを睨みつけた。

「うっ!」

「止めて!」

「くっ……!」

勇氣と羽心はのけぞった。

催眠術に掛かったように二人は動けなくなつた。

ディアーナは何とか、抵抗している。

「身体が動かない!」

もがいても無駄だった。

邪鬼は勇氣の胸の中にいたプーカをつまみ上げた。

「何するんだ！」

抵抗するプーカを、邪鬼はエジソンに突き出した。

「エジソンさん、さあ、こいつを早く」

エジソンは大きな透明な瓶の蓋を開けた。

邪鬼がすかさずプーカをその中に入れた。

「おい！ 何するんだ！」

プーカがいくら暴れても固い瓶は割れそうにない。

「プーカに何するのよ！」

ディアーナは叫ぶ。

エジソンは、プーカの入った透明な瓶を勇氣達が大型カメラだと思っていた装置の前に置いた。

エジソンは得意げに説明を始めた。

「これはカメラを改造して作った超自然パワーを吸い出す装置なんだよ」

「超自然パワーを吸い出すって、どういう事だ？」

勇氣が思わず叫んだ。

「超自然パワーをこの装置に注入すれば、

×印状の罅から死んだ者達の魂がこの世に現れる事が出来るというんだ。

つまり、『靈界通信機』を超えた『靈界交流機』だよ」

「僕とエジソンさんの共作だよ」

邪鬼が落ち着いた口調で説明を付け足してきた。

「何だつて？ エジソンさん！ そいつに騙されちゃダメだ！」

勇氣はエジソンに怒鳴ったが効果は無かった。

エジソンは装置の準備に夢中になっていた。

透明な瓶の中に閉じ込められたプーカに、カメラのレンズを向けた。

「やめろお！」

「やめてっ！」

叫ぶ、勇氣と羽心。

だが、エジソンはお構いなしにスイッチを入れる。

—ガチャ！

—ギユイイイイン！

装置に電気が流れ始める。

「遂に、私の夢の発明が完成するぞ！」

「オイラに何するんだ!？」

プーカが叫ぶが、厚いガラスでできた瓶の中からの声ではくぐもってしまう。

「おい！ 止めろ！」

—ギユユユイイイイン！

プーカの身体が怪しく光り出した。

「ぎゃアアア！」

プーカの超自然パワーが吸い出され始める。

「止めろ！ 止めろ！」

「プーカ！ しつかりして！」

勇気と羽心が叫ぶ。

「今、あたしが助ける！」

ディアーナはプーカが捕まった場所に突っ込んでいく。

このままでは、プーカが死んでしまう。

「邪魔者ね？ させないわ！」

幽霊が襲いかかるが、ディアーナは次々と切り伏せていく。

「ぎゃああアアア！ たすけてえエエエ！」

「お願い、止めてっ！」

羽心はあらん限りの声を振り絞って叫ぶ。

「エジソンさん！ なんて、霊界交流機なんて作る必要があるんだ!？」

勇気は怒鳴る。

「私は24歳で最初の結婚をした。

でも、私は仕事に夢中になりすぎて、ほとんど家にも帰らなかつた。

恐らく、そのために妻のメアリーは心を病んだんだ。身体を壊して彼女は死んでしまった。

私はメアリーに謝りたいんだ。

それだけじゃない、自分の研究のために私は様々なものを犠牲にしてきた。

そんな者達を呼び戻して謝りたいんだ」

「だけど、そのためにプーカを殺すなんておかしいじゃない！」

「そうよ！」

羽心は涙ながらに怒鳴り、ディアーナは幽霊を斬り続ける。

「いや、何かを成し遂げるためには多少の犠牲は仕方ないのだ」

「ぎゃあアア！ た、た、たすけてえエエ！」

プーカは苦しむ。

一方、棺桶状の箱の中の罅は大きくなっていく。

「あ、あ、あな……な」

微かな女性の声が聞こえた。

「おお！ メアリー、もう直ぐだ」

「あ、あ、あな、あなた……」

大きくなった罅の中にボンヤリと女の姿が浮かんだ。

「おお！ メアリー！ 戻ってきてくれたんだね」

エジソンは涙ぐんで、棺桶状の箱に近づく。

「メアリー！ おお、メアリー！」

「あ、あ、あなた、あな……あな……」

「メアリー、私だよ。メアリー！」

「あ、あ、あ……あ……あ……あ……」

「メアリー？ メアリー……？」

「あ、あ、あ……あ……あ……」

メアリーは壊れた機械のように「あ、あ」と繰り返すだけになった。

「どうしたんだ？ 何がいけないんだ？」

エジソンは装置のつまみやレバーをいじって調整を始めた。

しかし……。

「あ、あ、あ……あ……あ……あ……あ……」

罅の刻まれたエジソンの手が霊界交流機のスイッチやレバーを調整する。

だが、メアリーは相変わらずだ。

しかも、メアリーの像は蜃気楼のように揺れ、言葉もよく聞き取れなくなっていく。

「あ……あ……あ……あ……あ……」

メアリーの声も像も消えていく。

「何故だ？　メアリー！　メアリー！」

エジソンが呼びかけても、メアリーはどんどんあやふやになっていく。

「これはどういう事だ？」

エジソンは険しい表情で邪鬼を睨みつけた。

「どうやら、あの小さな妖精ではパワー不足のようですね」

邪鬼は瓶の中のプーカをちらりと見た。

「た……た、助けてエエ……」

プーカは叫ぶ力さえ失っている。

幽霊を斬り続けるディアーナだが、彼女の動きは疲れから鈍っていた。

勇気がエジソンに強く語りかける。

「エジソンさん！　僕はあなたについての本を読みました。

あなたのお母さんは、皆が喜ぶ事をしなさい、といつもあなたに言っていたんですよ

？

その言葉を信じて様々な発明をしてきたんでしょ？

死者の魂を無理矢理呼び戻すなんて間違ってるんだ！」

エジソンは固く目を閉じた。

勇気が語った母親の話が心に響いたようだ。

さらに羽心が涙ながらに訴える。

「そうよ。どんな事情があつたにしても死を迎える事は運命なのよ。

メアリーさんが病気になつて死んだのも運命だったんです。

それを受け入れるしかないんですよ。死者を生き返らせるのは間違つてます。

今、生きている命を大切にしないとダメです。プーカを助けてください！」

息も絶え絶えになっているプーカを羽心は見た。

「プーカ、死んじゃダメ！ 頑張つて！」

「た……タ……すけてエ……」

虫の息になり始めたプーカにエジソンは歩み寄つた。

「すまない！ 俺が間違つていた！」

エジソンはスイッチを切ろうと霊界交流機に向かつた。

「エジソンさん、まさかスイッチを切ろうなんて思つてないですよね」

邪鬼が装置の前に立っていた。

「お前は！」

エジソンはカッとなって邪鬼に飛びかかった。

邪鬼とエジソンが揉み合う。

その瞬間、邪鬼のパワーが緩んだようだ。

「あ、身体が動く！」

「私も！」

勇気と羽心の身体は自由になった。

勇気はスイッチを切ろうとするが、エジソンを押しつけた邪鬼が、「やめろ！」と飛びかかってきて、勇気は邪鬼に突き飛ばされた。

「邪鬼！ 何する気だ？」

「一気にパワーを吸い取ってやる！」

邪鬼は霊界交流機のパワーを最大にアップさせた。

これではプーカは絶対に死ぬだろう。

「させないわ……！」

「ぐっ……！」

ディアーナは疲れながらも右手を邪鬼に向け、

ゆつくりと接近して彼の身体にレイピアを突き刺し、プーカの入った瓶を左手で取っ

た。

「はははっ！ 油断大敵だよ……！」

「何ですって……!!?」

「ディアーナが歯を食いしばると……。」

「きゃー！ いやあー！」

羽心の悲鳴だ。

「どうしてもこの子が必要なんでね」

不敵な笑いを浮かべた邪鬼が羽心を抱えていた。

「邪鬼！ 何をするのよ!？」

「ナイフで切った後、剣で刺すなんて、乱暴だね。君はますます、殺したくなつたよ」

邪鬼はディアーナのレイピアを抜き、鋭い目でディアーナを睨む。

そして、箱の中の×印状の罅に羽心を抱えて飛び込んだ。

「羽心！ 羽心っ!!」

「待ちなさい……!!」

勇気とディアーナも罅に飛び込もうとした。

だが……。

——バリバリッ！

霊界交流機がスパークした。

「ドドドドツッ！ バキバキバキツッ！！

棺桶状の箱も鳴動して火花が散った。

「わあああ！」

勇氣は火花を避けるために腕で顔を覆い、ディアーナは蹲る。

霊界交流機も棺桶状の箱も壊れた。

「あいつがパワー全開にしたからだ！ 過電圧でショートしたんだ！」

「なんて事！ エジソンさん、早く直して！」

「いや、残念だが、これは直せない」

「じゃ、羽心は？ 羽心をどうやって助ければ？」

エジソンは辛い表情で首を振った。

「せめてどこに行ったか分からないの？」

「私には……申し訳ないが、分からない」

首を振るエジソンの言葉を聞いて愕然とする勇氣。

ディアーナも、邪鬼を殺せずに齒を食いしばる。

「ゆ、勇氣くん……」

ディアーナはそつとプーカを降ろす。

プーカは、透明の瓶に入ったままになっていた。

「プーカ……」

勇気は歩み寄ると瓶の中からプーカを抱き上げた。

「プーカ……プーカ……」

羽心が心配で、勇気はプーカを心配する事が上手くできない。

ディアーナも、幽霊を斬ったのと邪鬼を刺したために疲れてしまった。

「オ、オイラは大丈夫だ」

「あ、あたしも……」

「ほんとに……?」

「オ、オイラと一緒に捜そう」

「あたし……は……」

「え?」

「羽心ちゃんと一緒に捜そう」

「あたし……邪鬼……殺したい……」

プーカとディアーナは辛そうにしながらも勇気に言う。

「だけど、どうやって捜すんだよ? しかも、邪鬼を殺すなんて、無茶な」

「絶対に殺すんだから、絶対絶対絶対絶対」

「羽心チャンがグローブを着けているなら、見つけられるサ。

オイラの先祖がグローブを作ったんだからネ。しばらく休んで体力を戻さないとならねえ」

プーカは死にかけたのだから当然だ。

勇気は頷いたが、心は焦っていた。

(急いで羽心を捜さない)

(あたしも……休まなきゃ……ね……)

—ゴオオオ—

勇気の父親の書齋に光の渦が出来た。

勇気とデアーナが戻ってきて、デアーナは疲れながら路地裏に戻った。

胸ポケットでは妖精族の王子がぐったりと寝込んでいる。

勇気は父親がコレクションしていたミニチュア家具のベッドを棚から引っぱり出した。

それを本棚の本と本の間の目立たないところに置いて、プーカを寝かしつけた。

「プーカ……ゆっくり休めよ」

すると、ガチャと玄関の扉が開く音が書齋に響いてきた。

母親が仕事から帰ってきたのだろう。

しかし、その様子はいつもと違っていた。

「大変！　大変！　テレビ！　テレビ！」

母親の声が書斎の前を通過して、リビングに小走りで向かっていった。

「お母さん、どうしたの？」

勇気は書斎を出るとリビングに向かった。

―カチツ！

勇気がリビングに入るのと同時くらいに母親がテレビのスイッチを入れた。

「帰る途中でスマホを見たら、大ニュースがネットで騒がれてたのよ」

アナウンサーが「今、入ってきたニュースです」と断っている。

「海外のいくつかの有力メディアの報道によりますと、

海底火山の噴火によって、大西洋に大陸の一部が浮上したという事です」

そのアナウンスに続いて、ヘリコプターから撮られたであろう映像が映し出された。

そこには様々な遺跡があった。

その形でも目を引くものがある。

石を積み上げて造ったピラミッド状の建築物だ。

だが、エジプトにあるピラミッドとは形が全く違っていた。

中央に大きな階段があり、頂上に神殿のようなものがある。

「これって！」

勇気は思わず声を上げた。

「何？ どうしたの？」

「あ、ううん、何でもない……」

口を噤んだ勇気だが、内心はドキドキしていた。

（これって、『鶴』を倒した後に見た夢の場所……。キユウがいたあの場所とそっくりだ！）

その頃、路地裏では……。

「お疲れ様です、ディアーナ」

「な、何とか、止めたわ、でも……」

「話は後でゆつくりしますからね」

ジャネットは微笑みながら、ディアーナをゆつくり休ませた。

しかし、すぐにジャネットの笑みが消える。

「……どうとうアレが浮上したようですね。」

もしかしたら彼は、これが狙いだっただのかもしれない」

「どうしたんだ、ジャネット？」

アプリルがジャネットに聞くと、彼女はすつくと立ち上がり、こう言った。

「私も、皆さんと一緒に戦います」

そして、もう一つの路地裏で、四人の怪が決意を固めていた。

「いよいよ奴が動き出したのかい。これは、ウチらも動くべきだね」

かつて邪鬼に仕え、今では袂を分かちぬ麗羅、つるぎ、揚羽、カリオストロ。

彼が本格的に姿を現したのならば、討ち取るチャンスだ。

「ようやく現れたか、チャンスだね」

「アタイ、絶対に負けないよ！ 邪鬼、やっつけるからね！」

「いい研究になりそうだな」

邪鬼に立ち向かおうとするのは、勇気達だけではなかった。

彼をライバルと認識している者達でもある。

S i d e S t o r y

魔女っ子マギ・プリズム

ここは、日本のどこかにある見捨里市。

その名の通りミステリーな場所であり、ちよつと変わった事件が起こる事で知られています。

白鳥羽心はこの町に住む12歳の女の子。

弓道に長け、命中率はそれなりに高いようです。

「羽心ちゃん、上手ね」

「えへへ、ありがとうございます」

同級生に褒められた羽心は、ちよつぴり顔が赤くなりました。

ですが、これで慢心しては腕が鈍ってしまいます。

羽心が弓を構え、もう一度、的を狙おうとした時。

「な、何、今の音？」

突然、地震が発生しました。

「うわー！ ば、化け物ー!!」

「助けてー！！」

会場の外から悲鳴が聞こえました。

羽心は「ちよつと待つて」と言つて弓を置いた後、悲鳴が聞こえた現場に向かつていききました。

「助けてえー！！！！！！！！！！」

「勇気！！」

見ると、羽心の幼馴染、真之勇気が謎の魔物に捕らえられていました。

勇気はもがいていますが、魔物はがっちりと彼を掴んでいます。

魔物の前には、たくさんの人々が倒れていました。

きつと彼らは魔物に倒されてしまったのでしよう。

「そのの化け物！ 勇気を今すぐ離しなさい！」

「我を化け物と言いおつて。我が名はバアルなり」

魔物はバアルと名乗つた後、勇気を掴んで空高く飛びました。

「バアル！ もう一度言うわ、今すぐ勇気を離しなさい！！」

「そうはいかん、これから執り行う大事な儀式のために必要なのな……さらばだ」

「いやあー！！！！！！！！！！」

「待ちなさー！！！！！！！！！！」

羽心はバアルを追いかけますが、バアルは魔物を放った後、空高く飛んで去っていき
ました。

「ケケケ！ バアル様には近づけないぞ！」

「くっ……どうすれば……」

羽心は生身で魔物と戦う事ができません。

魔物はじりじりと、羽心の前に近付いていきます。

「ゲーーーーーッ!!」

「きゃああああ!!」

魔物が羽心に飛び掛かってきた、その時。

「そこまでだ、悪しき魔物ども!!」

「ゲッ！」

小さな妖精が魔物に向かって強い光を放ちました。

光を浴びた魔物は怯み、その隙に、妖精は羽心のところに行きました。

「キミの名前は？」

「し、白鳥……羽心」

「羽心ちゃんだね。ボクは魔法の国の使者。」

実はキミに、この町を守ってもらうために魔女っ子になってほしいんだ」

「わ、私が魔女っ子に……?」

町を守るために、魔女っ子になれと言われた羽心。

戸惑う彼女でしたが、そうしている間に魔物はゆっくりと起き上がり、

羽心を攻撃しようとしてました。

「隙ありー!!」

「羽心ちゃん! この腕輪を身に着けて『マギ・プリズムライト』って叫んで!」

妖精から腕輪を渡された羽心は、意を決して呪文を唱えました。

「マギ・プリズムライト!!」

呪文を唱えた瞬間、腕輪についた宝石から白い光が放たれ、羽心を包みました。

「な、なんだこの光は……!」

光が消えた後、羽心はフリルがついたセーラー服を模した衣装を身に纏い、

手には弓を持っていました。

弓道で使いそうな弓ですが、それよりも小さく、ファンシーでした。

「これは……?」

「さあ、弓を引いて、あいつを撃つんだ!」

「わ、分かった……!」

羽心は弓を構え、魔物に狙いを定め、矢を放ちました。

すると、矢は光に変わり、魔物を貫きました。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

光の矢に貫かれた魔物は悲鳴を上げ、黒い煙になって消滅しました。

戦いを終えた羽心は、元の格好に戻りました。

「おめでとう、炎の魔女っ子・ウララちゃん」

「わ、私が魔女っ子?」

急に魔女っ子として町を守る事になった羽心は戸惑いました。

ですが、魔王に勇気がさらわれたという事実は変わりません。

「でも……私、勇気を助けたいのよ。町を守るなんて、そんな……」

「勇気って?」

「私の幼馴染よ。勇気、魔王にさらわれちゃったの。だから、私が助けに行かなくちゃって」

魔王にさらわれた幼馴染の少年を助けない。

それが、羽心が戦う理由の一つでした。

「ご存じのようだけど、

この世界にやって来た魔物は魔女っ子に変身しないと攻撃が効かないんだ」

「分かったわ」

「魔王バアルには四人の配下『四天王』がいる。こいつらをやつつけければ魔王の道が開かれる。」

でも、四天王に一人で挑むのは危険だから、まずは仲間を探してこよう」

「そうね！ 勇気……待っててね、絶対に助けるから！」

こうして羽心は、さらわれた勇気を助けるため、魔女っ子としての使命を負いました。

羽心が見つけた魔女っ子仲間は、雷の魔女っ子・蒲谷亜衣、

水の魔女っ子・桐谷花恋、風の魔女っ子・黒木桜の三人です。

彼女達を仲間にした羽心は、四天王が居を構える場所に行きました。

四人の連携によって四天王とその配下の魔物は次々に倒れ、

ついに四人は魔王バアルが待つ城に辿り着きました。

「勇気!!」

空中に浮いていた勇気は、虚ろな表情をしていました。

どうやら、敵の術にかかってしまったようです。

「こやつは相当な力を秘めていてな。魔界と地上を繋ぐ扉を完全に開く事ができるのだ」

もし魔王バアルの力で魔界の扉が開いてしまえば、地上は魔物で埋め尽くされてしまいます。

そうはさせまいと、羽心、亜衣、花恋、桜は身構えましたが、魔王バアルは笑っています。

「四人だけで我に勝てると思ってるのか？ 絶大な力を持つ、この魔王バアルに？」

「確かに一人じゃ敵わないと思うけど……みんなで力を合わせれば、勝てるわ！」

絶対にこいつを倒して、勇気を助けるわよ!!」

流石に魔王と呼ばれるだけあって、魔女っ子達は魔王バアルに苦戦しました。

あらゆる属性の魔法を使えるため、弱点を突いたり突かれたりしました。

ですが、魔女っ子達は決して諦めず、隙を伺いながら魔王バアルを攻撃しました。

「これで終わりよ、マギ・プリズム・シユート!!」

「ギヤアアアアアアアアアアア!!」

そして、羽心の矢が決め手となり、魔王バアルは叫び声を上げ、黒い煙になって消滅しました。

ついに羽心は勇気を助ける事ができました。

四人の魔女っ子は魔界に繋がる扉を閉め、見捨里市に平和が戻りました。

「なんて小説を書いてみたんだけど、どう？」

そう言つて、ディアーナは自分が書いた小説を羽心に見せる。

タイトルは「魔女っ子マギ・プリズム」だった。

「私が活躍してるからこれはこれで面白いわ」

「でしょ。変身ヒロインは酷い目に遭いやすいから、こういう小説を書いてみたかったの」

パチン、とウインクするディアーナ。

「ディアーナさんって文章の才能があるのね」

「そうね。出版はしないけど、たまにこういうのを書くわよ」

「今度、花恋ちゃんに読ませようかしら」

ちなみに、この小説の魔女っ子は、このような武器を使います。

白鳥羽心：弓と炎魔法

蒲谷亜衣：格闘技と雷魔法

桐谷花恋：短剣と水魔法

黒木桜：槍と風魔法

e p i s o d e 6 — T r u t h o f J a k i

〜 動き回る炎

1 — 羽心はどこに？

翌日。

「ええーっ!? ジャネットも一緒に行くの!？」

「はい」

今まで指示を出していただけのジャネットが、前に出ると聞いて、

一番驚いたのはディアーナだった。

「アレが地球に浮上したという事は、私もそろそろ動かなければと思ひまして」

ジャネットは真剣な表情でディアーナに話す。

「でも、ジャネットは指輪を持つてるんでしょ？ そうしたら路地裏は、どうなっちゃう

の?」

路地裏はジャネットの指輪のおかげで安全に保たれている。

ジャネットが出ていけば、路地裏が邪鬼に襲われるかもしれない、とディアーナは読

んだが、

ジャネットは首を横に振った。

「あ、いえ、正確に言う私の分身が行くので、本体はちゃんと路地裏に残ってます」
「なんだ、そうだったのね」

拍子抜けするディアーナ。

だが、海底に没した大陸が浮上し、邪鬼も動き出した事に変わりはなかった。
ジャネットは意を決して、立ち上がる。

「英霊、ジャネット・デイ・アルクが命じる。見捨里市を邪鬼から解放せよ！」
ジャネットは鋭く大きな声で、この場にいる仲間達に指示を出した。

(まったく、ジャネットってば、本当に強いわね)

さて……あたしは、あの子の力にならなくちゃね)

その頃、勇氣は父親の書齋に飛び込んでいった。

「プーカ！ プーカ！ キュウが戻ってきたんだ。

キュウがいれば百人力だよ。きつと羽心も助けられる」

勇氣は弾む声で思った事を説明しながら、太陽と月のグローブを手に嵌めた。
そして、月のグローブを嵌めた左手を壁にかざした。

しかし、何も起きない。

(月のグローブが作り出すトンネルは『時のトンネル』なんだ……)

勇気は頭を抱えてその場にしゃがみ込んだ。

「そうだ。僕はなんてバカなんだ……」

そう呟いて肩を落とす。

(電車や飛行機に乗るみたいに、同じ時代の場所を移動するだけなんてできないんだ)

そんな事も知らずに勇気はトンネルを使ってきた。

邪鬼が作り出す×印状の罅が出現すれば、その場所には行ける。

だが、ただ海に出現した神殿に行きたいと思っても不可能だ。

勇気は力なく立ち上がると、小さなベッドに寝るプーカを見た。

妖精の超自然パワーを奪われたプーカは熟睡している。

その寝顔を見て、勇気はエジソン研究所で起きた事を思い返す。

見捨里市を救うために発明王エジソンの元に跳んだ勇気、羽心、ディアーナ、プーカ

だったが、

そこに、邪鬼がいたのだ。

邪鬼はエジソンに取り入っていて『霊界交流機』を開発させていたが、

それを完成させるには、妖精の超自然パワーが必要だった。

邪鬼の罠に嵌った勇気と羽心は身動きが取れなくなり、さらにディアーナも戦わさ

れ、

プーカは『霊界交流機』のためにパワーを吸い出されてしまう。

命を落としそうになったプーカを、ディアーナが間一髪で助けたが、

邪鬼は何故か羽心を連れてどこかに逃げてしまった。

その直後、『霊界交流機』が故障して、羽心を助けに行く事も出来なくなった。

(羽心はどこに連れて行かれたんだ……?)

しかも邪鬼は「どうしてもこの子が必要なんでね」と言っていた。

(何故羽心が必要なんだ……?)

悩む勇氣は、目の前の小さなベッドにいる妖精の王子を見る。

プーカは「羽心チャンがグローブを着けているなら、見つけられるサ」と言ってくれ

た。

(本当に見つけられるんだろうか?)

不安と謎で混乱するばかりだったが、勇氣には何も出来なかった。

2 — 学校にて

翌朝。

「おはよう。勇氣君、大丈夫？ 顔色が良くないよ」

学校の教室に入ってきた勇氣を見たクラスメイトの桐谷花恋が、心配そうに話しかけてきた。

「あ、うん。昨日、あまり眠れなかったんだ」

「ああ、そうだよ。湖の真ん中にあんな大陸がいきなり出現したんだものね。」

ビックリして、うちも家族全員で夜中までテレビやインターネットを見てたもの」「うん、そうそう。僕もビックリしちゃって」

そう答えた勇氣は教室を見回した。

クラスメイトの皆も、やはり海に出現した大陸の話題で持ちきりだった。

だが、勇氣は、教室の真ん中辺りの誰も座っていない席に近づいた。

そこが羽心の席だからだ。

しばらくしたら授業が始まる。

しかし、目の前の羽心の席は空席のままだ。

そして、担任の原末兼太先生が不安げな表情で教室に入ってきて来て、きつとこう言うだろう。

「白鳥羽心さんが行方不明になつたらしい」

クラスメイト達は「ええ？」と驚いてぎわつくに違いない。

その時、勇気も一緒に驚くべきなのか？

それよりも本当の事を説明するべきなのか？

(でも、本当の事を説明しても誰も信じないよな)

羽心の席を見つめながら、そんな事を考えた。

と、その席の前に、クラスメイトの志水拓馬がやって来た。

「おはよう」

と、拓馬は羽心の座にあつさり座つた。

「えい！ 拓馬君、なんでそこに座るんだよ！」

羽心を心配する勇気は、つきついい口調になつた。

「は？ なんでつてなんだよ！ ここは僕の席じゃないか！」

普段は優しい拓馬がムツツとして言い返してきた。

「何言つてんだよ！ ここは羽心の席じゃないか！」

「うららら？ 誰だそれ？」

「白鳥羽心だよ！」

「しらとりうらら？ それって誰だよ？ おい、勇氣君、大丈夫か？」

「大丈夫か？ それは僕が言いたいよ！ 何、寝ぼけてるんだよ！」

つい声を荒らげてしまった勇氣に、花恋が慌てて近づいた。

「ねえ、勇氣君、朝から変な事で喧嘩しないでよ」

「変な事って……。だって、拓馬君が羽心の事を知らないとか言うから……」

拓馬を指差しながら花恋の方に向く勇氣。

花恋が奇妙な顔で勇氣に疑問をぶつけてきた。

「うららって誰？ そんな人、私、知らないけど……」

勇氣の頭の中は真っ白になった。

「花恋ちゃんも知らない……？？？ そんな？」

勇氣はクラスメイト達を見回す。

全員が勇氣をきよとんと見つめていた。

誰も白鳥羽心を知らない。

明らかにそんな表情をしている。

するとチャイムが鳴って、原末先生が入ってきた。

「皆、おはよう」

クラスメイト達は席に着いたが、勇氣は先生のもとに飛んでいった。

「先生！ 先生！ 先生は羽心を知ってますよね？ 白鳥羽心です」

原末先生は勇氣を見た。

「真之、早く席に座れ。授業が始まるぞ」

しかし、勇氣は食い下がる。

「白鳥羽心を知ってますよね？ このクラスの子です」

原末先生は眉間に皺を寄せる。

「真之、早く座るんだ。しらとりうらら、なんてこのクラスにはいないぞ」

「えっ」

勇氣は呆然となった。

ふらふらと自分の席に向かい、そして力なく座った。

（何故だ？ 何故、誰も羽心を知らないんだ？）

勇氣はプーカに話しかけてみようと思ひ、胸のポケットに触れた。

しかし、ポケットには何も入っていなかった。

（そうだ。プーカはまだ書齋で寝てるんだ……）

勇氣はぼんやりとしてしまい、その日の授業は何も頭に入らなかった。

放課後。

校門を出てきた勇氣は、とぼとぼと家に向かった。

道すがらどうしたらいいか分からなくなり、泣き出しそうになった。

羽心は邪鬼に連れ去られ、皆は羽心の存在さえ忘れている。

(『不甲斐ない』って難しい言葉は、きつとこういう時に使うんだろうな)

どうしようもない絶望的な状況なのに、自分には何もできないので嘆くしかない。

「そうね」

そんな時、ディアーナが現れて勇氣に近づき、ぱん、と勇氣の頬を軽く右手で叩いた。彼女は勇氣を心配して、ジャネットと共に勇氣を探しに来たのだ。

「ディアーナ、それに、お姉さんは……」

「ジャネットです。それ以外は語りません」

「あなたがそんなんだと、あたしも落ち込んじゃうわ。」

あの子が言った事、忘れたとは言わせないわよ」

— 邪鬼がどれだけ怪を使って人々を恐怖に陥れようと、絶対に諦めちゃいけない。諦めなければ、きつと元に戻せる。みんなを救う事ができるんだ。

何があつても決して諦めてはいけないと、ファフロツキーズの時にキユウが言った。

その事を、ディアーナは改めて勇氣に教えてあげたのだ。

「邪鬼が絶望を与えたなら、今度はやり返すのよ」

「……やり返すつて、僕は君と違つてまともに戦えないんだよ……」

ディアーナとしては単なる一方的な心配に過ぎないのだろう。

しかし、もう一度叩いてくれたおかげで、勇気はほんの少しだけ立ち直つた。

勇気はやがて家に辿り着くと、鍵を開け、家に入った。

看護師として働く母親は、今日は夜まで帰つてこない。

書斎ではまだプーカが寝ているはずだ。

「プーカ、具合はどうだい?」

本棚の本と本の間が目立たないところに置いてあるベッドを覗き込んだ。

「え? プーカ?」

プーカがいなかった。

「プーカ!? プーカ!」

「静かにしなさい」

羽心だけでなく、プーカまで消えてしまつたのか?

不安がドツと押し寄せて、妖精の王子の名前を呼ぶ声が裏返つてしまう。

「勇気クン、そんな慌てるなヨ。女子にも負けるのか?」

部屋の隅の棚から声が聞こえた。

女子というのは、ディアーナとジャネットの事だ。

「プーカ！ 心配させるなよ。もう大丈夫なの？」

棚の上に座ったプーカはくるみパンを食べていた。

「お腹が減ってキッチンまで行ったら、このパンがあつて助かったヨ」

勇気は嬉しくなつてプーカに近づく。

「ああ、元気になつたんだね。良かった！」

「オイラは妖精族の王子だゾ。そう簡単にはへこたれないヨ」

くるみパンを頬張りながら、プーカは微笑む。

不安だらけだった勇気の心は、かなり明るくなつた。

「あ、そうそウ、海に大変なものが現れたんだネ。テレビで見たヨ。なんだろう、あれハ？」

「プーカにも何の大陸か分からないの？」

「うん、全然。あんな神殿は初めて見たヨ」

「ジャネットは知ってるわよね？」

「ええ」

すると、勇気は一呼吸置いて尋ねる。

「ねえ、プーカ、僕の質問に答えて欲しいんだ」

「質問つテ？」

プーカはくるみパンをむしゃむしゃ食べながら聞き返してくる。

「うん、大事な質問だよ。しつかり聞いて欲しいんだ」

「うん？　なんだイ？」

「プーカは、羽心を知ってるよね？」

くるみパンを食べていたプーカの動きが止まった。

「え？　何それ？」

「だから、プーカは羽心を知ってるよね？」

プーカはきよとんと勇氣を見て答える。

「知ってるに決まってるだロ」

勇氣は安堵の溜め息をついた。

そして、そんな質問をした理由を説明した。

「それは、多分、邪鬼が羽心チャンを連れ去ったからだヨ」

「どういう事？」

「怪を倒したら怪の存在を忘れちゃうだロ？」

「羽心チャンを連れ戻せばきつとみんなは羽心チャンを思い出すヨ」

「そうか。そうだよね」

プーカは身体の元気を、そして勇氣は心の元気をなくしていた。

しかし、お互いかなり元氣を取り戻してきた。

デイアーナとジャネットは、そんな二人を見守っていた。

(何としてでも……)

(勇氣と羽心を助けましょう)

3 — 炎の正体は？

その夜、ディアーナとジャネットが路地裏に戻った後。

母親は『カヤの木・焼き鳥』を買って帰ってきた。

見捨里市には樹齢500年のカヤの木がある。

その前に店を構えている焼き鳥屋なのだ。

見捨里市で一番美味しいと評判の焼き鳥で、勇気も大好きだった。

それをおかずにして母親は夕飯の用意をする。

食卓を目の前にして、勇気は母親に尋ねてみた。

「ねえ？ 白鳥羽心って子を知ってる？」

「え？ さあ、そんな子は知らないわ」

「そう。分かった。ありがとう」

羽心は小さな時から勇気の家遊びに来て、いつも父親の書齋で本を読んでいた。

そんな羽心を母親は微笑ましく眺めていた。

勇気は、その母親の姿を見るのが好きだった。

小さな時に父親を亡くした寂しさを、羽心が埋めてくれていたのだ。

勇気にとって羽心は家族の一人だった。

(なんとしてでも羽心を見つけ出して、連れ戻さないと！)

勇気はそう誓うと、焼き鳥の串を口に頬張った。

(うん？ これ、苦い？)

色々な事があつたせいで味覚がおかしくなっているのだろう。

何しろ『カヤの木・焼き鳥』は、大ベテランの店主が焼いているのだ。

こんなに苦いはずがなかった。

ところが……。

「なんか苦いね」

母親も一口食べてそう言った。

「お母さんもそう思うの？」

「うん、そりゃ、そうよ。なんかちよつと焦げてるっぽいよね」

勇気が焼き鳥をじつと見ると、肉の一部が少し黒くなっている。

「あ、焦げてる」

母親も肉をじつと観察した。

「本当ね。焦げてる。あのお店でこんな事は初めて。取り替えてもらおうかしら？」

「いいじゃん。食べられないほど焦げてるわけじゃないし」

「勇気がそれで良いならお母さんも食べちゃうけど……」

母親は納得が行かない表情だったが、勇気は食事を済ませた。

—ウゝ、ウゝ、ウゝ、カンカンカン

消防車のサイレンの音が響いてきたのは、勇気が二階の自分の部屋に入った時だった。

火事が起きた時は「ウゝ、カンカンカン」、火事が収まった時は「カーン、カーン」と、間延びした鐘の音が二回鳴らされると学校で教わった。

どこかで火事が起きたのだろう。

勇気は不安になって窓を開け、夜の町を見回した。

だが、赤く染まる場所は見つけられない。

(きつと大きな火事じゃないんだよね)

勇気が窓を閉めようとする、隣の家の浴室の小窓から小さな悲鳴が聞こえてきた。

「あちちちちっ！」

隣の家のおじさんの声だ。

その声はおばさんに文句を言い始める。

「おい！ 風呂が熱すぎるぞ！ これじゃ火傷するぞ！」

「え？ いつもの温度設定よ。そんなに熱くなるなんて、おかしいわね」

返答するおばさんの声が聞こえた。

きつと給湯器が故障でもしたのだろう。

「わあ！ おい、ヤモリがいるぞ！」

「え？ ヤモリなら家を守ってくれるんだからいいじゃない！」

「いや、違うな。トカゲだな。とにかく、風呂の外に出してやろう。わあ！ あちちちっ！」

「今度はどうしたの？」

「トカゲの体がえらく熱かったんだ」

熱い風呂場にいたのでトカゲの体も熱くなったのだろう。

勇気はそう考えて窓を閉めてベッドに入った。

少女の長い金髪が揺れている事に気づかず。

ベッドの上でハッと目覚める勇気。

胸騒ぎを覚えて、明るくなり始めた窓の外を見た。

早朝の空に×印状の罅が浮いていた。

その×印がオレンジ色に輝きメラメラとしている。

弱火にしたガスコンロから、ちよろちよろと火が出ているような感じだ。

「大変だ！」

何が起きているのかを確かめるために、勇氣は寝間着のまま外に飛び出した。そして、×印を目指して走った。

そこは樹齢500年のカヤの木のの上だった。

(あれ？ 焦げ臭い！)

木が燃える臭いがした。

勇氣がカヤの木の根元を見ると、小さな炎がオレンジ色に揺らめいていた。

「大変だ！」

慌てて炎に近づいて足で踏んで消そうとした。

だが、その小さな炎には、四本の足と尻尾が生えていた。

「なんだ、これ！ わぁ！ あちい！」

「触らないで！」

ディアーナに言われて自分の足を炎から避けた勇氣は、気づいた。

「これ、トカゲだ！ 体が燃えてる！」

しかも……。

—ボオ！

口から小さな火を噴いて、カヤの木を燃やそうとしているのだ。

トカゲを捕まえようとしたら火傷してしまう。

「これは……」

ディアーナが呟くと、今度は焼き鳥の臭いが漂ってきた。

『カヤの木・焼き鳥』が、こんな早朝なのに開いている。

小さな店なので開け放たれた戸の中が丸見えた。

店主が一生懸命に串に刺された鶏肉を焼いていた。

「てやんでえ！　なんで焦げるんだ！」

俺の腕がなままったなんて言わせないぜ！　練習あるのみだ！」

『カヤの木・焼き鳥』に「焦げてるぞ」とクレームがいっぱい入ったのだろう。

焼き鳥を上手く焼き上げるために、店主は徹夜して練習していたのだ。

しかし、それは上空の罅から来たであろう火を噴くトカゲのせいに違いはない。

店主は練習に夢中になっていて、トカゲに気づいていない。

「違うわよ、腕がなままったんじゃないわ！」

ディアーナは勇気と共に店に飛び込むと叫んだ。

「お客さん、まだ開店前だ。後で来てくれ」

「だから、火蜥蜴のせいよ！」

ディアーナは店主を店から連れ出して、トカゲを見せようとした。

しかし、店主は「何するんだ！」と動かない。

その瞬間、焼き鳥を焼く炎が勢いを増した。

「わあ！　また焦げちまった！　なんでだ!？」

店主は嘆くばかりで、焼き鳥の脇に原因がいる事に気づかなかつた。

あの体全体が燃えるトカゲが、いつの間にか店に入っていたのだ。

「オジさん、こいつのせいなんだよ!」

店主は勇気が指差した先のトカゲを見た。

その瞬間、トカゲが火を噴いた。

「わああ!」

ビックリして外に飛び出した店主は、空に浮かぶ罫に気づいた。

ディアーナはこの事態に気づいているのか、髪が光り輝いている。

「ええ！　あれはなんだ?」

「あそこから火を噴くトカゲが出てきたんだよ!」

勇気がそう言った直後、

—ポオオオオオ!

強烈な炎の音が背後から響いた。

四人が振り向くと、幾つもの小さな炎が店を焦がしている。

「え!?!　一匹じゃないの!?!」

「そうよ。ここは、あたしが食い止めるわ。……大人しくなりなさい」

十数匹のトカゲが火を噴いていて、ディアーナが彼らを宥めようとする。

—ボツボウツ！ メラメラメラ！ メラメラメラ！

『カヤの木・焼き鳥』が燃えてしまった。

「ぬわああああ！ 俺の店がああ！」

店主は滝のような涙を流しながら地面に崩れた。

「オジさん、しつかりして！ ここは危ない！ 逃げるんだよ！」

勇気は泣き咽ぶ店主に肩を貸して走った。

ディアーナは、トカゲを宥めるために何度か対話し、ようやく事は収まった。

「あれは、あたしの友。怪じゃないわ」

「ディアーナ、行きましょう」

店主を安全な場所まで連れて行った勇気は、決意を固めた。

「急いであの怪を倒さないと！」

「違うわ、あたしの友よ」

怪を「友」と言うディアーナを、勇気は理解できなかつた。

いつもの服に着替えた勇気が、書斎のドアを勢いよく開けた。

まだ寝ていたプーカがビックリして飛び起きる。

「ディアーナとジャネットは、少し呆れていた。

「勇気クン、こんな朝早くからどうしたんだイ？」

「×印状の罅から出てきた怪」

「訂正。友」

「……のせいで、焼き鳥屋が燃えちやっただ」

「え？ いつもの勇気クンの夢なんじゃないノ？」

「夢なんかじゃないよ！」

勇気はプーカに窓の外を見るように指さした。

プーカは羽を飛ばたかせて窓まで来る。

空にちよろちよろとした炎が漏れ出す罅が浮かんでいた。

「あ！ 本当ダ！」

「トカゲが火を噴いたんだ。それに全身も燃えているようなんだ。なんの……友なの？」

「あたしは魔法を使う時、色んな精霊に力を貸してもらっているわ」

「精霊？ そっか、友って言ったのはそれが理由だったんだね」

メデューサにあんな強い竜巻をぶつけたのも、ディアーナの魔法だったっけ……と思
い出す。

「だから、あたしはこの友を知ってる。名前はサラマンダーよ」

「え？ それって、『ドラゴン』みたいなトカゲの事？」

「炎の精霊よ。エルフはあまり呼ばないけど。」

とにかく、×印を作ったのは奴だから、サラマンダーのもとに行けばあの子がいると思わよ」

「そうだっ！ 羽心！」

サラマンダーにすっかり気を取られて、大事な羽心の事を忘れていた自分に腹が立つた。

ディアーナも、エルフの精霊使いである事に気が付いた。

「よし！ プーカ、ディアーナ、ジャネット、行こう！」

勇気は月のグローブを嵌めた左手を構えた。

それを見たプーカが左手の前に飛んできた。

「勇気クン、慌てるなヨ！ サラマンダーを大人しくさせる道具を持っていかないと」

「あ、そうか。何を持っていけば良いんだ？」

「相手は火だからネ」

「水かい？」

「いや、それは行った先にあると思うヨ」

「あたしがいるから大丈夫でしょ？」

こつちには、精霊の力を使う魔法使い・ディアーナがいるから、
「ヌルゲー」になる。
「じゃ、あれだね！」

勇気は自分の部屋から、以前、買ってもらった大きな玩具を持ってきた。

「それは水鉄砲ですか？」

「そうだよ。大型タンクが付いていて、連射できて、遠くまで水が飛ぶんだ」

勇気はアクション映画の主人公のように大型水鉄砲を構えてみせた。

「それを使うのですか」

「これがあれば、あんな小さなサラマンダーなんてすぐに倒せるよ」

「だから、倒すんじゃないの。大人しくさせるの」

「分かってるよ」

「では、出撃です！」

頷いたプーカが勇気の胸ポケットに入って身構える。

勇気は、壁に近づくと、左手をかざして呪文を唱えた。

「カオスゲート時空貫通」

4 — 青年タケルと少女ミヤズ

—ゴオオオー!!

どこかの草原に光の渦ができた。

そこから勇気とディアーナがスツと出てきて、ピタリと着地した。
ジャネットは鎧のせいで少しよろめく。

平坦な場所に降りたが、そこは山の中腹だった。

「……ここが、舞台なのね」

ディアーナは、ここが古代の日本である事を理解した。

「プーカ、ここは、どこ?」

「オイラにも分からないヨ」

勇気は周囲を見回した。

森に囲まれ、目の前には小川が流れている。

「とにかく、水鉄砲の水には困らないね」

「そうね、精霊の声も聞こえるし」

勇気は早速、大型水鉄砲に水を吸わせた。

冷たい水が気持ちいい。

もし家族旅行などで来たら、楽しい登山コースになりそうだった。
ところが……。

「う、うう、う〜」

不気味な声が近くから聞こえた。

大型水鉄砲を手にした勇氣は、慌てて物陰に隠れた。

ディアーナとジャネットは身構え、勇氣は小声でポケットの妖精に尋ねる。

「プーカ、これはサラマンダーの声かい？」

「そんなの分からないヨ。本物のサラマンダーには会った事がないんだから」

「珍しいわね」

「オイラでも知らない事はあるんだゾ」

勇氣は大型水鉄砲を構えて様子を見た。

「誰か、助けてくれ〜！」

すると、男の弱り果てた声が響いてきた。

「え？ 人間？」

勇氣は物陰から出て、その声の元を捜した。

「助けてくれ〜！ 溝に落ちて出られなくなっただんだ！ 誰か助けてくれ〜！」

草原から森に入つてすぐの溝に、声の主はいた。

泥まみれになつた男が横たわっている。

20代前半くらいの青年だ。

「あら、こんなところに人がいますね」

ジャネットが声を掛けると、「良かった！」と青年は声を上げる。

「この溝に気づかず足を滑らして落ちたんだよ。」

でも、泥でぬかるんでるから上に上がれなくなつたんだ」

それを聞いたディアーナは、ロープになるようなものはないかと見回した。

すぐ近くの大木に、しっかりとしたツタが巻き付いていた。

ディアーナはそれを大木から剥がし、勇気に渡す。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

勇気はディアーナが渡したツタを束ねた。

ツタや草からロープを作る方法は、父親の書齋にあつた本で読んだ事があつた。

それが役に立った。

やがて、青年が勇気の手製ロープを頼りに溝から這い上がってきた。

「ありがとう」

青年は礼を言うと、疲れ切った様子で座り込んだ。

「何故こんな場所に一人でいたのですか？」

そうジャネットに尋ねられた青年は、厳しい目つきで腕を上げた。

「そうだ。こんなところで休んでちゃダメなんだ」

ジャネットの質問には答えずに、青年は辛そうにしながらも立ち上がった。

「何があつたのですか？」

「君に説明している暇なんてないんだ。僕の大切な妹の命が危ないんだからな」

「なら、私も同意します。妹はどうになりましたか？」

ジャネットがニコリと微笑むと、青年は立ち止まった。

「妹は火龍にさらわれたんだ」

「火龍とは……サラマンダーですか？」

「さ、さ、皿回し？ 失礼だぞ？ お前のくだらない話に付き合う余裕は無い。

一刻も早くミヤズを助けないと！」

「……おかしいですね。日本に西洋の精霊はいないはずなのに」

ジャネットが呟く中、青年は機嫌が悪くなつて足早に歩き出した。

「子供は足手まといだ！ 付いてくるな！」

いきなり高圧的な態度で勇気を振り払った。

「ディアーナとジャネットは、青年の様子に嫌な気分になった。
「ちよつと、待つんだ！」

勇気のポケットから声が響いた。

「妹さんを助けるのに、オイラは役に立つと思うゾ」
「なんだって？」

青年が勇気に向き直った途端に、プーカがポケットから飛び出した。

「わあ！　なんだお前！」

「オイラは妖精族の王子だよ。こつやつて空中を自由自在に飛べるんだ」
プーカは青年の周りをぐるぐると回つて見せた。

「あわわわわ！」

「あんたが行けない場所にオイラは自由に行けるんだ。便利な存在だよ」
「わあああ！」

青年は怯え出して、身を縮めるようにしやがみ込んだ。

「ディアーナは青年の肩を掴み、暴れないようにした。

「偵察も出来るし、本当に便利なんですよ、プーカは」

「なんなら、あたしもジャネットも戦えるわよ」

勇気とジャネットは青年に歩み寄つた。

しやがみ込んだ青年は、ひょうたん形の水筒の中身をごくごく飲んでいた。しかし、それは水ではなさそうだ。

「……お酒？」

「五月蠅い！」

青年は勇気を険しい表情で睨みつけた。

「あ、ごめんなさい！ 失礼な事を尋ねてしまったようで……」

勇気が慌てて謝ると、青年はやがて気の抜けたような表情になった。

「いや、僕の方こそごめん。」

妹を助けると言って村を出たけど、正直に言うのと、僕は昔から気が小さくてね。

それで、つい威張ったふりをしてしまおうし、水筒にも酒を入れてきたんだ」

正直に話をする青年に、勇気は好感を持った。

青年は自分の頭の上を飛ぶ妖精を見る。

「プーカ？」

「オイラの名前だ。そして、オイラと一緒にいるのハ……」

「あたしは、ディアーナよ」

「ジャネット・デイ・アルクです」

「僕の名前は真之勇気です。妹さんを一緒に助けに行きましよう」

「勇氣くん、ディアーナさん、ジャネットさんか。」

でも、僕の妹をさらったのは火龍で、君の友達をさらったのは邪鬼という少年だろ。相手が違うぞ」

「違うけど、関係はあるわ。とにかく、妹のいる場所に向かう間に説明するから」

青年は勇氣、ディアーナ、ジャネット、プーカを改めて見てから頷いた。

「僕の名前はタケルだ」

その名前を聞いた三人は、しつかり青年の姿を見た。

ゆつたりとした白いズボンとシャツを着て、頭の両側に長い髪を束ねていた。

(この衣装とこのヘアスタイルは大昔の日本の偉い人だ。そんな人を僕は助けたんだ……)

勇氣はつい見入ってしまう。

「どうした？」

タケルの問いに勇氣はニコリとして答える。

「じゃあ、これからはタケル兄さんと呼びますね」

「まあ、いいだろう。君は命の恩人だからな」

タケルはニコリと頷いた。

「むっ、あたしでも姉さんと呼ばれた事はないのに」

ディアーナは二人を見て、少し嫉妬していた。

5 — サラマンダーの洞窟

タケルに先導されて歩く勇氣、ディアーナ、ジャネット、プーカは、山の麓にあるタケルの村の話を教えてもらった。

さらわれたタケルの妹はミヤズという名前で、10歳以上も年下の妹だという。

「タケル兄さんの村では時々、サラマンダーに襲われて誰かがさらわれてるんですね」

「そうなんだ。でも、村人は抵抗しない」

「何故ですか？」

「皆は神隠しだと思ってて、諦めてる」

「戦わないのですか？」

「神には逆らえないからね。でも、神様がこんな事をするはずがない。

ミヤズを誘拐するなんて……」

タケルは言葉を詰まらせた。

勇氣は何も言えなくなり、ディアーナとジャネットは拳を握り締める。

「酷い話だな」

勇氣のポケットの中のプーカも、タケルが可哀想で、そう呟くのが精一杯だった。

「誰かが助けに行かないなんて、どうかしてますよ」

「あたしだったら真っ先に行くわよ」

ディアーナとジャネットは、自身が戦えるのもあって、何もしない村人に苛立つのだった。

やがて三人の人間と二人の妖精のチームは、

森を抜けて、肌が剥き出しになった険しい斜面を登り始めた。

「この斜面を登り切ったところに火龍の巣があるはずなんだ」

歩いて登れる斜面ではあるが、その勾配はかなり急なのでジグザグに歩くしかなかつた。

「ぜえ、ぜえ」と荒い息を吐き始める勇氣とジャネット。

特にジャネットは鎧を着ているので、かなり歩きにくいようだ。

「頑張レ、頑張し、勇氣クン！」

ポケットから顔を出したプーカが応援をしてくれる。

しかし、勇氣は馬鹿にされているようでムツとした。

「こら、五月蠅いよ。プーカは、ポケットに入ってるだけじゃないか」

「オイラはこれから、きつといっぱい飛ぶ事になるんだ。今は休んでおかないとネ」

「今はプーカを信じなさい、勇氣」

「おい、着いたぞ」

先頭を歩いていったタケルが振り向いて小声で伝えてきた。

立ち止まったタケルの前方に、洞窟の入り口らしきものがある。

中は暗くて見えないため、デイアーナは光の精霊を召喚しようとするが、見つかるのを危険視して呼ばなかった。

「ここが、火龍、君達の言うサラマンダーの巣だ」

すると、突然、洞窟の入り口がオレンジ色に光った。

—ボオオオオオ

巨大な炎が洞窟から吹き出てきた。

「わあー」

勇気達は身を伏せる。

「僕が見たサラマンダーは、小さなトカゲだったんだよ。」

それなのに、なんでこんなに大きな炎を吐くんだよ？」

勇気はプーカを責めるように小声で質問した。

タケルに聞こえて欲しくなかったからだ。

「そんなの、オイラだって知らないヨ。本物のサラマンダーを見るのは初めてなんだから」

「あたしも、こういうサイズは見た事がないわ」

「プーカ、でも、これはヤバいよ」

「勇気クン、オイラもそう思うヨ」

サラマンダーは勇気達に気づいたのだろうか。

いずれにしても、洞窟の中に入ったら間違ひなく焼け焦げてしまう。

「くそっ！ これじゃ、ミヤズを助けるなんて無理だ。いや、もしかしたら既にミヤズは……」

タケルは歯ぎしりをし、やがて大粒の涙を流し始めた。

「ミヤズ………！ ミヤズ………！」

洞窟の中に聞こえないように、タケルは声を押して殺して泣いた。

そのタケルの姿が、勇気にはとても切なく見えた。

「いい加減にして」

それを見過ごせなかったディアーナはタケルの頬を右手で叩き、

タケルを無理矢理泣き止ませた。

「何回叩いたら気が済むの？ こっちの手も痛くなっちゃうわ」

「ディアーナさん……」

鋭い目でタケルを見つめるディアーナ。

その表情に怒りこそないものの、確実に良い機嫌ではなかった。

プーカはその姿を見て、自分が役に立つとタケルに自信満々で言った事を思い出した。

「オイラが見てきてやるヨ」

プーカはすかさず勇気のポケットから飛び出した。

「おい！ プーカ、危険だぞ」

「やめなさい、プーカはタケルのためにやっているんだから」

勇気が小声で引き留めるが、デイアーナは勇気を制止し、その間にプーカは洞窟に向かった。

ーブーン、バタ、パタ、パタ

プーカは洞窟の入り口まで飛んで行って、一旦縁に身を隠して中を覗き込んだ。

しかし、中は暗くてよく見えなかった。

「仕方ない。静かに入るゾ」

プーカはなるべく音を立てないように、羽をゆつくりと羽ばたかせて中に進んだ。

今、炎が吐かれたので、洞窟の中は暑かった。

もしここでまた炎を吐かれたら、プーカは一瞬で焼け焦げてしまうだろう。

洞窟に入っていくプーカを見届けたタケルは、赤くなつた頬を撫でている。

「君は、気が強いんだな。大人にも平気でものを言える上に、折檻までできるなんて」「そうじゃないの、あなたの無様な姿を見たくないだけ。」

それに、あたしはあなたより長生きしてるのよ」

一方、洞窟の中ではプーカが慎重に飛んでいた。

—パタ……パタ……パタ……

静かに羽ばたいて、プーカは洞窟の奥へと進んでいく。

—スー、スー、スー

息をするような音が聞こえてきた。

プーカはゆっくり慎重に闇の中を進んでいく。

—スー、スー、スー

さらにハッキリと息が聞こえてきた。

プーカは目を凝らす。

闇の中で何かがゆつくりと上下に動いているのが見えてきた。

なるべく羽音を立てないように近づいていく。

動いているのは薄黄緑色の大きな身体だった。

二階建ての家くらいの大きさがあつた。

(こんなに大きいのか……)

洞窟の闇の中で、眠っている姿が見えてきた。

(これがサラマンダーなのカ。眠っている間は炎がないんだナ)

サラマンダーは常に炎を纏っているイメージだが、眠っている時に炎は無いのだ。

(これは大きな情報だゾ)

そう思ったプーカは辺りを見回した。

肝心のミヤズは無事なのだろうか。

と、洞窟はさらに奥まで続いている。

(よし、行ってみよウ)

眠るサラマンダーの上を通り過ぎて、プーカはその奥に静かに飛んでいく。

—パタ……パタ……パタ……

プーカはなるべく音を立てないように洞窟を進んだ。

しばらくすると、地面に横たわる小さな人影が見えてきた。

プーカは背後のサラマンダーを気にしつつ、その人影に慎重に近づく。

8歳くらいの少女が、剥き出しの岩の上に横たわっている。

プーカはその子の顔の前に降り立った。

ハッと少女が目を覚ます。

「あなたは？」

サラマンダーに聞こえないように少女は囁き、プーカも囁き返す。

「オイラはプーカ。君はミヤズかい？」

「そうよ」

「タケル兄サンが洞窟の入り口まで来てるヨ」

「え！ お兄ちゃんが！」

ミヤズの声が思わず弾んだ。

「しっ！」とプーカが窘める。

「でも、あの火龍に見つからずに入り口に行くなんて無理よ」

途端に肩を落とすミヤズ。

「分かってル。でも、逆にこの奥に進んだら出口があるんじゃないのかい？」

ミヤズは首を振った。

「行ってみたら、小さな火龍達が入りしているところがあつたの。」

でも、凄く小さくて、そこから出るなんて無理だつたの」

プーカはハツとした。

「もしかして、その出口は×印状だったかい？」

「そうよ。どうして知ってるの？」

「説明は後だヨ。とにかく、オイラだけでは助けられない。一度戻るから、静かにしてる

んダ」

「うん。でも、早く助けに来てね」

「もちろんだヨ。すぐに助けに来るかラ」

プーカはそう告げると、音を立てずに飛び立った。

未だに眠るサラマンダーの前を、静かに横切つていくプーカ。

—スー、スー、スー

サラマンダーは寢息を立てている。

ふと、ミヤズが気になった。

プーカは振り向いてミヤズの様子を伺った。

ミヤズは大人しく横たわっているようだ。

—ゴツン！

余所見をしていたプーカは壁にぶつかってしまった。

プーカはバランスを崩して地面に落下する。

—トテツ！

プーカが地面に落ちて音を立てた。

小さな身体がぶつかっただけだが、静かな洞窟の中では、その音は大きく響く。

(しまっター！)

プーカは心の中で叫んで、目の前で眠るサラマンダーを見た。その目が開いた。

(まずイ！)

プーカは飛び立とうとしたが、焦ったので羽が思うように動かない。

サラマンダーは目の前の小さな妖精を見つけると、身体全体が徐々にオレンジ色に光り始める。

プーカはそれを目の前で見て慌てた。

「大変ダー！ 超高速で逃げるゾー！」

ハッキリ声を出し、自分に向かって宣言したプーカは飛び立った。

ーブーン！ パタパタパタ！

生まれてから今まで出した事のないスピードで、洞窟の入り口に向かうプーカ。

背後から奇妙な音が響いてきた。

ーオオオオオー

プーカは、怖ろしくて振り返る気になれない。

その音の正体は、サラマンダーの身体にエネルギーが漲る音に違いなかった。

「急ゲ！ オイラー！」

自分を鼓舞するプーカは、必死に羽ばたく。

入り口はもうすぐだ。

次の瞬間……。

——ドオオオオオ!

爆音が響き、背後から熱が迫ってくる。

「あわわワツッ!」

プーカは洞窟の外に飛び出した。

プーカを心配して洞窟の様子を見ている勇氣、ディアーナ、ジャネット、タケルが目に入った。

「勇氣クン! タケル兄サン! ディアーナ! ジャネット! 気をつけろ!」

プーカの忠告に驚いた勇氣とタケルが、物陰に隠れた。

ディアーナとジャネットは力を解放し、二人のいる場所にプーカも続いて隠れる。

その直後……。

——ボワツ、ドオオオオオ!

炎が洞窟から吹き出して来た。

「「うわあ!」」

「……っ!」

勇氣とタケルとプーカが叫んで身を縮め、ディアーナとジャネットは攻撃を防ぐ。

五人の周りが炎で焼かれた。

「あちちちっ」

勇気はその熱さに思わず声を出す。

しかし、幸いに誰も火傷をする事はなかった。

「ミヤズチヤンは洞窟の奥にいたヨ」

「本当か？ 無事なんだな？」

「オイラは嘘は言わない」

「だったら、なおさら急いで助けないと！」

プーカの報告に、焦りを募らせるタケル。

「でも、洞窟に入れるのはここしか無いみたいなんだ」

「じゃ、どうやって助ければいいんだ？」

「戦えばいい」

ドシンツ、ドシンツ、ドシンツ

ディアーナが双剣、ジャネットが旗を構えると、洞窟の中から大きな足音が聞こえてきた。

「サラマンダーが出てくるゾー！」

プーカの声に、勇気、タケル、ディアーナ、ジャネットが洞窟を見つめる。

—ドシンツ、ドシンツ、ドシンツ

サラマンダーが入り口に姿を現した。

オレンジ色の炎を身に纏った火龍。

傍にいただけでその熱が伝わってくる。

サラマンダーは、入り口を塞ぐように立ち止まった。

誰も洞窟に入れないようにしている。

「先手必勝！」

ダイアーナは剣を抜き、ジャネットに鼓舞されながらサラマンダーを貫いた。

勇気は背負っていた大型水鉄砲を手を取った。

そして、サラマンダーに向けて狙いを定めた。

—シュツ！ シュツ！ シュツ！

引き金を引くと、勢いよく水が連射された。

サラマンダーに辿り着く前に地面に散ってしまう水もある。

それでも、多くの水がサラマンダーに命中した。

しかし……。

—ジュツ！ ジュツ！ ジュツ！

—シュワアアア！

効果は無く、まさに焼け石に水で、すぐに水蒸気になってしまふ。

さらに悪い事に、勇氣達はサラマンダーに睨みつけられた。

「ヤバい！ タケル兄さん！ プーカ！ デイアーナ！ ジャネット！」

勇氣の声で、皆は今までよりもっとしつかりした物陰に逃げ込んだ。

デイアーナとジャネットは逃げも隠れもせず戦った。

その直後、サラマンダーが口を開いた。

「ボワツ、ドオオオオ

炎が飛んでくる。

三人は物陰で必死に身を縮め、デイアーナも攻撃をかわしながら魔法で攻撃していく。

「デイアーナ！ そちらに攻撃を！」

ジャネットは旗を持ちながらデイアーナを応援した。

炎の塊が過ぎ去っていく。

勇氣は大型水鉄砲を再びサラマンダーに向けた。

「スウウ、スウウ！」

水がなくなっていた。

「ダメだ！ どこかに水はないの？」

岩場の洞窟前には水はなかった。

勇気はタケルの水筒に目を向けた。

「タケル兄さん、その水筒の中身をこのタンクに入れて！」

勇気は大型水鉄砲のタンクの蓋を外して、タケルの前に差し出した。

「え？ でも、これは水じゃなくて酒だぞ」

「そうだけど、ここには水がないんだ。妹さんを助けるために何もしいよりはいいでしょ？」

「分かった」

タケルはタンクの中に水筒の中身を流し込んだ。

勇気はタンクの蓋をしつかり閉じると、再びサラマンダーに大型水鉄砲を向けた。

— シュツッ！ シュツッ！

銃口から酒が発射された。

サラマンダーに辿り着かず地面を濡らす酒もある。

それでも、ほとんどの酒は命中した。

ところが、酒は水とは全く違う反応を示す。

— ボワッ！ ボワッ！ ボワッ！

サラマンダーに掛かった酒はますます炎を強めた。

「しまった！ 酒は逆効果になるのに、なんで気づかなかったんだ！」
「え？ どういう事？」

「僕が持つてきたのは強い酒だ。酒は燃えるんだよ」

「ええ！ そんなの知らなかった」

「……ここには水の精霊はいないのよね」

勇氣は目を丸くし、ディアーナも無力感を感じる。

すると、サラマンダーの身体の炎がふっと収まった。

「何？ どうしたの？」

勇氣は呟く。

その目の前で、サラマンダーが地面に散った酒を舐め始めた。

次の瞬間、サラマンダーは再び燃え盛る。

オレンジ色の炎が赤い炎に変わり始めた。

「これは、ヤバいよ！」

勇氣達は慌てて物陰にしっかり隠れる。

きつと特大の炎が襲ってくるに違いない。

勇氣は身を丸め、ディアーナとジャネットも身構えるが……。

—オヨヨヨヨ、オヨヨヨヨ

奇妙な鳴き声が聞こえてくる。

「え？」

勇気が顔を上げてサラマンダーを見ると、すっかり炎が赤くなつてフラフラとしていた。

「どういう事？　まるで酔つたみたいだ」

勇気の呟きに、タケルはハツとして語り出した。

「以前、サラマンダーが村を襲つた時、酒蔵を襲つた事があるんだ。

サラマンダーは酒を飲んだ後、村を襲うのをやめて、フラフラしながら山に帰って行つたんだ」

「つまり、酒が好きなの？」

「多分そうだ」

「だったら、この大型水鉄砲の酒でおびき出せば、

洞窟の入り口から引き離す事が出来るんじゃない？」

「勇気くん、それは良いアイデアだぞ」

勇気とプーカのやり取りを聞いていたタケルは、さらにハツとした。

「そうだ。この洞窟の裏側は切り立った崖なんだ。で、その下には池があるんだ」

「その池に落とせば火は消えるよね」

「勇気クーン！」

「よしー！」

勇気はプーカと目を見合つて頷いた。

ディアーナとジャネットも彼らを見て頷く。

するとプーカはタケルを見た。

「洞窟の中はオイラが案内するゾ」

今度はタケルが頷いた。

—シュツ！ シュツ！ シュツ！

勇気の大型水鉄砲から発射される酒。

ディアーナの剣術と魔法、ジャネットの応援。

—ボワツ！ ボワツ！ ボワツ！

サラマンダーがますます赤く燃え、切り刻まれる。

—オヨヨヨ、オヨヨヨ

奇妙な声を出してフラフラするサラマンダー。

それを見た勇気は、物陰から飛び出して洞窟の裏側に回る道を走った。

「おーい、こっちだぞー！」

そう呼びかけつつ、シュツと酒をサラマンダーの少し前に飛ばした。

サラマンダーはフラフラと勇氣の方に歩き出し、洞窟の入り口が開いた。

「よし！ 行くヨ！」

プーカに促されてタケル、ディアーナ、ジャネットは洞窟に向かった。

勇氣はサラマンダーの少し前に酒を噴霧していく。

フラフラと付いていくサラマンダー。

『馬の鼻先にニンジンをごら下げる』という言葉を誰かから聞いた事がある。

ニンジンが好きな馬は、それを食べようとして前進するが、

ニンジンが馬の背中から伸びた竿の先に付いているので、馬と一緒に移動してしま
う。

だから幾ら走っても食べる事が出来ず、馬はとにかく必死に前に進むだけになる。

勇氣はサラマンダーに対してまさに同じ事をしているのだ。

「おーい、こつちだぞ」

勇氣は洞窟の裏側に向かってサラマンダーを誘導していく。

「こつちだぞ！」

背後から付いてくるサラマンダー。

—オヨヨヨ、オヨヨヨ

(よし！ この調子で付いてくれば大丈夫だ！)

勇氣は自信を持ったが……。

—オヨヨヨヨ、ボツ、ドオ！

「わあ！ あちい！」

勇氣の背中が熱くなった。

振り向くと、酔ったサラマンダーが貧弱な炎をあらぬ方向に吐いていた。

「ダメだ！ そんなに酔ったらダメだよ！」

「酔わせるなんてあいつじゃない」

「混乱していますね……」

—オヨヨ、ボツ、ヨヨヨ、ボツ、ドオ、ドオ！

サラマンダーは千鳥足になり、右へ左へフラフラしてなかなか前に進まない。

しかも、今来た道に戻ろうとし始めた。

「おい！ おい！ ダメだ！ 戻るなよ！」

一方、洞窟の中ではプーカがタケルを案内していた。

—ブーン、パタパタパタ！

サラマンダーがいなければお構いなしに音を立てて飛べる。

「ミヤズチャンは洞窟の奥にいるヨ」

—ザワザワザワツ、ビツ、ビツ、ビツ

洞窟の奥に向かおうとするプーカだったが、不気味な音が、洞窟の暗闇から響いてきた。

「プーカ、この音は？」

タケルがゾツとして尋ねてきた。

「ミヤズちゃんは、一番奥に小さなサラマンダーがいっぱいいるって言ってたんだけ。なんだって？　じゃ、ミヤズは？」

タケルは闇の中に闇雲に走り出した。

「ミヤズ！　ミヤズ！　お兄ちゃんだぞ！」

「タケル兄サン！」

プーカは慌ててタケルを追いかけた。

「ミヤズ！　お兄ちゃんが助けに来たぞ！」

タケルは叫びながら奥に向かった。

「お兄ちゃん！」

突然、少女の声が響いた。

「ミヤズ！　良かった！」

巨大なサラマンダーがいなくなったので、ミヤズが自ら洞窟の入り口に向かってきたのだ。

タケルとミヤズは、走り寄って抱き合った。

「お兄ちゃん！」

「ミヤズ！ 無事で良かった！」

「お兄ちゃん、でも……！」

ミヤズは背後の暗闇に振り返る。

—ザワザワザワツ、ボツ、ボツ、ボツ

小さなサラマンダーが何匹も火を噴きながら走ってくるのが見えた。

「タケル兄サン！ ミヤズチャン！ 急いで外へ行くんだヨ！」

プーカが二人を促し、タケルとミヤズは慌てて入り口に走り出した。

勇気は大型水鉄砲の中の酒をサラマンダーの鼻先に放つ。

—シュツ、シュツ！ オヨヨ、ボツ、ヨヨヨ、ボツ！

「やるわね！」

ディアーナも双剣から風の刃を飛ばし、サラマンダーを切り裂く。

酔ってふらつくサラマンダー。

だが、やっと勇気の誘導する方に向かってくるようになった。

「よし！ こっちだ！」

—シュツ シュツ！

勇氣は大型水鉄砲から酒を発射させながら走る。

「こつちに来るんだ！」

やがて勇氣、デИАーナ、ジャネットは切り立った崖の上に出た。

下を覗くと池があつた。

『時のトンネル』を抜けて降り立った場所にあつた小川は、

きつとこの池から延びているのだろう。

背後を振り返ると、サラマンダーが勇氣達に向かつてフラフラと歩いてくる。

「さあ、大好きな酒を飲みたかつたらここまで来るんだ」

勇氣は崖の外側に向かつて、水鉄砲の中の最後の酒を発射した。

— シュツツツ！

サラマンダーはそれを飲もうとして走り込んで来る。

勇氣は素早く横に逃げた。

するとサラマンダーはまんまと洞窟の外に飛び出した。

足をばたつかせるサラマンダー。

— オヨヨヨヨヨ

池に向かつて落ちて行く。

— バッシャー—

崖の下で水しぶきが上がった。

— シュウウウー！

サラマンダーが纏っていた炎が消えていく。

やがてその飛沫に変わるように黒い煙が上がってきた。

それを見た勇氣、デИАーナ、ジャネットはホツと息をついた。

「終わった」

「大人しくさせたかったのに」

洞窟の中を入り口に向かって走るタケルとミヤズ。

そして、宙を飛ぶプーカが二人に声を掛ける。

「急げ！」

— ザワザワザワツ、ボツ、ボツ、ボツ

背後から追ってくる小さなサラマンダー達。

ところが……。

— シュツウー！ シュ、シュツウー！ シュツウウウー！

小さなサラマンダー達が、黒い煙となって消えていった。

プーカはその様子を見つめる。

「よし！ 勇氣くん、デИАーナ、ジャネットが怪を倒したんだ！」

「え？」

走っていたタケルとミヤズが立ち止まり、振り返った。

追いかけてきた小さなサラマンダー達が、確かに消えていた。

「お兄ちゃん……」

ミヤズは信じられない表情でタケルを見る。

「ミヤズ、助かったんだ」

「ホントに？」

「ああ、良かった」

タケルとミヤズの年の離れた兄妹は、しっかりと抱き合う。

そこへ、勇気、ディアーナ、ジャネットがやって来て、抱き合う二人を見た。

「二人が再会できて、良かった」

「ああ、オイラも嬉しいヨ」

「そうね……あら？」

ディアーナは地面に何かが落ちているのに気づく。

「ちよつと、これ、何？」

勇気は地面を見てハツとした。

「これは……」

勇気はそれを拾い上げた。

それはなんと、羽心の『星のグローブ』だった。

「羽心だ！」

勇気は洞窟の中へ羽心を捜して走り出す。

「羽心！ 羽心！ どこだ？」

「勇気クン、待ちなヨ！」

宙を飛ぶプーカは、勇気の目の前に回り込んだ。

「怪を倒したから洞窟の奥にあった×印も消えてル。もうここにはいないヨ」

「でも、羽心のグローブが……？」

「邪鬼は何かを企んでるんだヨ。きつト」

勇気は星のグローブを握り締めた。

（確かにそうかもしれない。でも、何としてでも羽心を助けないと……）

勇気は心の中で誓った。

ディアーナとジャネットも、彼らの後ろから声をかける。

「まったく、羽心と聞くやこれだもの」

「私達はゆつくりと作戦を練りましょうね」

人の振り見て我が振り直せとばかりに、ディアーナとジャネットはそう誓った。

e p i s o d e 6 | T r u t h o f J a k i

不幸を呼ぶ箱

1 | 勇気と先生

路地裏に戻ってきたディアーナとジャネットは、改めて作戦を考えた。

ノノ、アプリル、チェイニーだけでなく、麗羅、つるぎ、揚羽、カリオストロも集まっている。

後の四人はかつて邪鬼に仕えていたが、今は彼を裏切つて盗賊として活動している。こうして集めるために、ジャネットは相当苦勞したとか。

「皆様、よく集まりました。これより『羽心救出作戦』を敢行します」

真剣な表情でジャネットは集まった者達に言う。

ジャネットが「敢行」と言ったのは、成功する見込みがないからだ。

「邪鬼が羽心をさらい、海からあの大陸が浮上した、とディアーナは報告しました。

よって、羽心はあの大陸にいる可能性があります。

そして、×印状の罅の中に逃げた……という事は、

羽心、いえ、あの大陸はあの罅の奥にあります」

単純に考えれば、邪鬼は羽心の力を利用し、あの大陸に行ったのだろう。

ちなみにジャネット達は分からなかったが、

アンノウンマン
知らざる者が羽心の存在を忘れたのも、これが原因だという。

ふと、ディアーナは浮上した謎の大陸の正体について推測する。

「ねえ、ジャネット。あの大陸って、もしかして海「遊戯王」のフィールド魔法「伝説の都 アトランティス」は「このカード名はルール上『海』として扱う」とある。？」

「十中八九海でしょう」

ディアーナが自身の推測をジャネットに話すと、ジャネットは首を縦に振った。

「海」と言っている理由はノノ達には分からないが、二人には話が通じているようだ。
「たいてりくなのに、うみ？」

「隠語だよ」

「なに？」

「ディアーナとジャネットだけに通じる言葉さ。で、俺達はどうするんだ？」

「あなた達は路地裏の奥に行ってください。」

そしてその人達は、ノノ達が行った場所とは逆方向に行ってください」

「何故別の場所から行くのじゃ？」

「足止めも考慮してです。いいですか？ もう一度言いますよ。」

ノノ、アプリル、チェイニーは路地裏の奥、その人達はその逆に行ってください」
ジャネットは何から何まで見通しながら作戦を考えている。

そんな彼女の作戦を、誰も蹴らないはずがなかった。

「ああ……もちろん、賛成だぜ！」

「邪鬼に一泡吹かせられるんだ、ぶっ飛ばしたいね！」

「ああ……ボク達はキミの傀儡じゃないんだよ」

「アタイ、ぜったいに負けないんだから！」

「世界を救う……なんて大きな事ではないが、私達でできるだけの事はやろう」

「よろしい！ では、行ってきなさい」

ジャネットはノノ、アプリル、チェイニー、麗羅、つるぎ、揚羽、カリオストロを送り出し、

自らはディアーナと共に出陣した。

「さて、ディアーナ、行きますよ」

「凄いいじゃない、ジャネット。いい作戦だわ」

「……私はそんなに勉強した事がないので、ジルから教わった事を言っただけですが」

そして、場面は勇気に変わる。

「あの場所に、羽心はいたのかな……?」

昼休みの小学校。

勇氣は、一人渡り廊下に立っていた。

手には、『星のグローブ』がある。

先日、サラマンダーを追って、時を超えた。

邪鬼と羽心を捜したものの、その場所にはいなかった。

しかし何故か、星のグローブが落ちていたのだ。

「もしかして、邪鬼が落としていったのかもしれないヨ」

ふと、プーカが服の胸ポケットから顔を出して言った。

「邪鬼は恐らくあの場所にいたよネ?」

「ああ、多分いたと思う」

邪鬼がいついたのかは分からない。

しかし、刀で×印状の罅を作り、サラマンダーの力を利用した事だけは確かだ。

「羽心……」

羽心はどこにいたのだろうか。

浮上した謎の大陸の事も、連日のようにニュースで報じられている。

(気になるけど、今はそれどころじゃないよね)

「羽心を早く助けないと」

そう呟くと、勇気は星のグローブをじっと見つめた。

「勇気くん……」

プーカは胸ポケットから出ると、勇気に満面の笑みを浮かべる。

「羽心チャンはきつと無事だ。だから、落ち込むなヨ」

「……うん」

「真之、何をしてる？」

突然、声がした。

見ると、渡り廊下の入り口に、担任の原末先生が立っていた。

「ええつと」

勇気は慌てて星のグローブをポケットにしまう。

「プーカも早く脇ポケットに入って……！」

「お、おう」

プーカは急いで脇ポケットに隠れた。

「ここで何してたんだ？」

「ええつと、ちよつと考え事をしてて」

「こんなところですか？」

勇気がいるのは、四階の渡り廊下だ。

各学年の教室は三階までにしかなく、四階には滅多に人は来ない。

そのため、勇気は誰にも邪魔されず、羽心の事を考えられると思ったのだ。

原末先生は、ガラスケースのフタが付いている箱を持っていた。

箱の中には、いくつもの石が入っている。

勇気はその石を見てみると、原末先生は「あゝ、これはな」と言った。

「次の理科の授業で使うんだよ。砂岩や泥岩と言って、石によつて地層の違いが分かるんだ」

どうやら原末先生は、地層の授業でみんなに見せる石を、

四階にある理科準備室に取りに行っていたようだ。

「そろそろ昼休みが終わるぞ。教室に戻ろう」

「は、はい」

勇気は、原末先生と共に、6年2組の教室に戻る事にした。

「真之、この前の理科のテスト、あまり点数が良くなかったな」

「はあ」

「勉強は嫌いか？ 先生は真之と同じぐらいの頃は、勉強するのが凄く楽しかったぞ」

「そうなんですか」

原末先生はいつも勉強の事ばかり言う。

怒る事も多いので、勇気は原末先生の事があまり好きではなかった。

(今は先生の事なんて考えてる場合じゃないのに)

勇気は溜息を吐きながら、校舎に入ると、階段を下りようとした。

「何かあったら、先生に言うんだぞ」

不意に、原末先生が言った。

「いやあ、あ、あれだ、人は誰だって悩みの一つや二つはある。

そういう時は誰かに話した方が楽になるからな」

どうやら原末先生は、勇気が四階の渡り廊下に一人でいた事を、心配してくれている

ようだ。

「原末先生……」

(普段は全然そう思わないけど、意外と優しいのかも)

勇気は原末先生の気持ちを知り、嬉しくなった。

しかし、すぐに首を小さく横に振る。

(だけど、この悩みは原末先生じゃ解決できないよね)

羽心の事は、皆、忘れてしまっている。

怪の事も、邪鬼の事も、どれだけ説明しても理解してもらえないだろう。

「ありがとうございます」

勇気はお礼を言う事しかできなかった。

「いつでも相談してくれていいからな」

事情を知らない原末先生は、似合わない笑みを浮かべながら、階段を下り始めた。瞬間、原末先生が急に身体のバランスを崩した。

階段を踏み外したのだ。

「うわああー！」

原末先生は、そのまま階段を転げ落ちる。

ドントツという音と共に、踊り場に倒れた。

「先生ー！」

「う、ううう」

勇気は慌てて駆け寄る。

原末先生は、苦悶の表情を浮かべ、まともに声を出す事もできなくなっていた。「しっかりと下さい。誰か！」

勇気は、三階の廊下にいる子供達に助けを求めた。

2 — 苦しむ人々

ノノ達に潜入を任せした後、ディアーナとジャネットは見捨里市の調査をしていた。

どうやら、見捨里市で不幸な出来事が起きているらしい。

「かぜのせいはいよ、こえをとどけて」

ディアーナは風の精霊を召喚し、ジャネットは金属音を出しながら辺りを見渡している。

「ジャネット、大丈夫なの？ 重くない？」

「体力にはそれなりに自信がありますから、大丈夫ですよ」

「無茶はしない！ ジャネット、サラマンダーを探してた時、疲れてたじゃない」

「……そうでしたね」

ジャネットは少しふらついている。

ディアーナは彼女が疲れているのを瞬時に見抜きジャネットに休んでもらうように言ったのだ。

いつも命令されている側ではない、自分にもきちんとした意志がある。

それをジャネットに伝えたかったのだ。

「ありがとうございます」

ジャネットはお礼を言うと、休める場所で休んだ。

「……で、集まった情報はというと……」

風の精霊シルフに教えてもらった情報によれば、以下の通り。

・この異変を起こしているのは怪物ではない

これだけだった。

風の精霊シルフの調子が、いつもよりも悪かったせいらしい。

「怪物ではないとはどういう事ですか？」

「文字通りよ。ファフロツキーズとか、霊界通信機とか」

「不幸を呼び、怪物ではない……何を指しているのかは分かりませんが、

とりあえず、勇気達と合流しましょう」

「そうね」

場面は勇気に戻る。

「先生、大丈夫かな……」

放課後。

勇気は一人道路を歩きながら、昼休みの出来事を思い出していた。

あの後、原末先生は救急車で病院に運ばれた。

帰りの会で、学年主任の先生は、原末先生が足を骨折し、当分入院する事をみんなに話した。

(僕のせいかも……)

勇気が渡り廊下になど行かなければ、原末先生も怪我をせずに済んだのかもしれない。

勇気は、自分を情けなく思い、ガツクリと肩を落とした。

「おい。勇気クンの友達がいるゾ」

服の胸ポケットから顔を出したプーカが、前方を見ながら言った。

「友達？」

顔を上げると、遊歩道の入り口にクラスメイトの蒲谷亜衣と志水拓馬、それに桐谷花恋がいた。

何故か皆、オロオロとしている。

「どうしたんだろう？」

勇気は気になって、傍に駆け寄った。

「ねえ、どうしたの？」

「あつ、勇気君、大変な事が起きたの」

「大変な事？」

勇気が首を傾げると、花恋は遊歩道の少し先を見つめた。

「さつき遊歩道の前を通りかかったら、犬の散歩をしていたおばさんが倒れて」
「ええ？」

「突然、体調が悪くなったみたいなの」

花恋の話によると、おばさんは近所の人の車で病院に向かったのだという。

「凄く苦しそうな顔をしてた」

「そうなんだ（また、救急車で運ばれる人が出たなんて）」

一日の間に、外のとこで病院に運ばれる人と出くわすなど、滅多にない。

（ただの偶然、だよな）

勇気がそう思っていると、亜衣が口を開いた。

「これで、今日病院に運ばれた人は三人目よ」

「どういう事？」

勇気が戸惑いながら尋ねると、亜衣は真剣な表情で一同を見た。

「朝、隣の家に住んでる高校生のお姉さんが、玄関のドアで指を挟んじやったの」

その人は、そのまま病院に向かったのだという。

「原末先生とおばさん、それに近所のお姉さん、いくらなんでも少し変よね？」

亜衣の言葉に、花恋と拓馬は頷く。

「私、なんか怖い」

「僕も。なんか不気味だよね」

「確かにこれは……」

単なる偶然とは思えなくなっていた。

その時、勇気の頬に風が当たった。

「あれ？」

気が付くと、花恋達の姿が消えていた。

「ねえ、みんなどこ？」

周りを見るが、どこにもいない。

「プーカ、花恋ちゃん達はどこに行ったんだ？」

勇気はそう言いながら、胸ポケットを見る。

だが、胸ポケットにプーカの姿はなかった。

「どういう事？」

「うわああ！」

道路の角から声が聞こえた。

勇気は慌てて駆け出すと、角を曲がる。

「あつ！」

そこには、拓馬が倒れていた。

「どうしたの？」

「急に……トラックから荷物が、足の上に落ちてきて」

拓馬の前には、引越し業者のトラックが止まっていた。

荷台のドアが開いていて、道路に大きな段ボールが落ちている。

「もしかしてこの荷物にぶつかったの？」

「う、うん、あああつ」

「拓馬君！」

拓馬は足を押さえながら、苦しむ。

勇気は助けを呼ぼうと、周りを見た。

「えっ？」

傍にある小さな公園に、誰かが倒れている。

花恋と亜衣だ。

「花恋ちゃん！ 亜衣ちゃん！ 拓馬くん、すぐ戻ってくるからちよつと待ってて！」

勇気は二人のもとへ駆け寄った。

花恋達は苦しそうな声を漏らしている。

「お腹が、痛くなって」

「私は、歯が……」

「ううっ」

花恋達は苦悶の表情を浮かべる。

「しっかりと！ 誰か！」

勇気は焦りながらも声を上げた。

すると、プーカが飛んできた。

「ゆ、勇気くん……」

「プーカ、助けを呼んできて！ みんなが！」

「オ、オイラも、うああ……」

次の瞬間、プーカはフラフラと彷徨うように宙を舞いながら、地面に落ちた。

「プーカ！」

「カラスに……襲われテ」

「えっ」

「そのカラスも……ブランコの鉄柱に……ぶつかつて」

プーカは、ブランコの方を見る。

ブランコの傍に、一羽のカラスが落ちていた。

「どうなってるの？」

皆が、何故か急に怪我をしたのだ。

「とにかく、助けを呼ばないと」

勇気は、プーカを抱きかかえると、人を探そうと公園を出た。

ーゴゴゴゴゴッ

突然、背後で大きな音がした。

ハツとして振り返ると、傍に立っていた信号機が鉄柱ごと折れ、勇気の頭上に倒れてきた。

避ける余裕などない。

勇気は悲鳴を上げた。

「うわあああー！」

「勇気君、しっかりして」

目の前に、花恋が立っている。

傍には、亜衣と拓馬もいる。

勇気は、おばさんが倒れた遊歩道にいる事に気づいた。

「まさかー！」

服の胸ポケットを確認すると、プーカがいる。

「勇気くん、ポーツとしてたヨ……」

「ポーツと」

プーカは花恋達に聞こえないように小声で言った。

勇気はハツとなると、空を見上げた。

「あっ！」

遊歩道の傍にある雑居ビルとビルの隙間に、黒い物体が見える。

×印状の罅だ。

罅から、黒い煙が漏れ出していた。

「みんな、今すぐ家に帰るんだ！」

勇気は険しい表情で、花恋達に叫ぶ。

「どうしたの、勇気君？」

「雨でも降ってくるのかい？」

拓馬は空を見ようとす。

「見なくていいから！」

そんな拓馬を、勇気は慌てて止めた。

「早く家に帰って！ とにかくじつとしてるんだ！」

勇気は、戸惑う花恋達を半ば強引に説得して、家へと帰らせた。

「やっぱり、あなたも気づいたのね！」

「ジャネット、ディアーナ！」

そこに、ディアーナとジャネットがやってきた。

3 — 不幸を呼ぶ怪

「そう、全ては怪の影響よ」

そう言うディアーナの髪が淡く光り輝き、ジャネットの右手が聖遺物になる。

黒い罅があるという事は、邪鬼が怪をこの町に送り込もうとしているという事だ。

その怪がいる時代に行けば、邪鬼がいるかもしれない。

(今度こそ、羽心を助けなきゃ)

勇気は、ポケットに入れていた星のグローブを握りしめた。

ディアーナとジャネットも頷く。

やがて、家へ帰ってきた勇気と、侵入したディアーナとジャネットは、

父親の書齋に駆け込むと、星のグローブを入れたポケットとは反対側のポケットに手を入れた。

そこには、太陽と月のグローブが入っていた。

勇気は二つのグローブを嵌めると、壁の方を見た。

しかし、急に頭を抱えた。

「だけど、一体どんな怪なんだ？」

勇気はそれが全く分からなかった。

原末先生は階段から落ちて怪我をして、おばさんは体調が悪くなり、亜衣の言っていた近所のお姉さんは、玄関のドアで指を挟んだ。

「夢の中でも、みんなにはバラバラな事が起きて、不幸になっていたよね……」

「不幸になっていタ？ そうカ！」

プーカがそれを聞き、胸ポケットから飛び出してきた。

「分かったよ、勇気くん。今回の怪は、恐らく『パンドラの箱』だ」

「それって」

「分かるわ」

勇気は、本棚に置かれていた『世界の不思議アイテム』と書かれた本を取った。

「確か、この本に……あつた！」

パンドラの箱とは、神がパンドラという女性に渡した箱の事で、

その箱は絶対に開けてはならないと言われている。

もし箱を開けてしまうと、中に入っていた様々な災いが飛び出し、

人々は不幸な目に遭ってしまうのだという。

（確か、パンドラの箱は、ある一つを除いて災いが解き放たれたのよね……）

「不幸な目……なるほど、だからみんなあんな風になったのか」

「妖精族にも、パンドラの箱はとても怖い箱だという言い伝えがあるんだ」

「だったら、この町に箱が出てくる前に何とかしないと。」

「だけど、箱なんかとどうやって戦えばいいの？」

「全くイメージができない。」

「勇気が首を捻っている、プーカがにつこりと笑った。」

「パンドラの箱は、開けると様々な災いが飛び出してしまおう。」

「だったら、開けないようにすればいいんだヨ」

「もしくは、異次元に投げ捨てるか」

「そんな乱暴な……。でも、箱が開けられないようにするためには……。あれだ！」

「勇気は部屋を出ると、廊下の端にある大工道具などをしまっているクローゼットを開け、

ロープを手にとった。

「これで箱をグルグル巻きにすれば、開ける事ができなくなるよね」

「おう、いいアイデアだと思うゾ」

「後は、私が管理すればいいだけですわね」

「勇気はロープを持ってプーカと共に書斎に戻ると、壁の前に立った。

「行くよ」

「おう。羽心チャンを助けるヨ！」

「あたしは負けない、何が何でも！」

「さあ、箱を探しましょう！」

プーカは、勇氣の服の胸ポケットに入る。

勇氣は、壁に向かって左手をかざすと、呪文を唱えた。

「カオス・ゲート
時空貫通」

次の瞬間、壁に大きな渦の穴ができた。

勇氣、ディアーナ、ジャネットは、光の渦の中に飛び込む。

トンネルの先に、茂みが見えてきた。

「わああー！」

「おっと」

ーバサツ

勇氣とジャネットはトンネルを抜け、上手く着地しようとするが、茂みにすっぽりと身体が入ってしまった。

ジャネットは鎧で守られたが、動けなくなる。

一方、ディアーナは華麗に着地に成功した。

「いたたた」

「勇気クン、ジャネット、大丈夫か？」

胸ポケットからいち早く脱出していたプーカが、飛びながら勇気とジャネットに言った。

「流石に出た先が茂みだったら、上手く着地できないよ」

「はあ、だらしないわね」

勇気とジャネットは、這い出るように茂みから出ると、何とか立ち上がった。

「ええつと、ここは……」

「どうやら、森の入り口のようなのだ。」

「いつの時代なんだ？」

勇気がそう呟いていると、一人の少女が傍にやって来た。

「あなたは誰ですか？」

キレイな赤いドレスを着た少女だ。

「あ、あの僕は」

「お空から急に落ちてきましたか、まさか盗賊さんですか？」

少女は、近くに落ちていた杖を拾って構えると、勇気達を警戒する。

「いや、違うんだ。僕は盗賊とかじゃなくて」

「そうだヨ。勇気クン達は悪い怪を退治しにきたんだヨ」

「プーカ、君は隠れてないといけないだろ！」

勇気は慌ててプーカを捕まえようとする。

だが少女は、プーカ、ディアーナ、ジャネットを見て構えていた枝を下ろすと笑みを浮かべた。

「まあ、妖精さんが二人に、聖女様ですわね」

「えっ？」

少女はプーカ、ディアーナ、ジャネットを見ても全く驚いていないようだ。

「キミは、妖精を見た事があるのかイ？」

「それに、私を聖女と言いましたね」

「お城にあった書物に、妖精は人間と友達になつてくれると書いてあつたんですわ。」

それに、聖女様は国を救う希望ですもの」

「そうなんだ。つて今、城つて言った？」

勇気は、周りの景色を眺める。

森と反対側の場所に、真つ白な城が建っていた。

「あら、随分立派なこと」

「わたくしのお家ですわ」

「ええ？」

「名前を言っていないませんでしたわね。わたくし、この国の王女・サラと申します」

「王女だったんだ」

「道理でそんな格好だと思ったわ」

「どうやら、ヨーロッパの古い時代に来たようだ。」

「オイラの名前はプーカ。妖精族の王子だよ」

「ディアーナよ」

「ジャネットです」

「まあ、それは奇遇ですわね。初めまして、プーカ王子、ディアーナさん、ジャネット様」

サラはそう言いながら、勇気の方を見た。

「勇気さんと言いましたわね？ あなたもどこかの国の王子様なんですか？」

「いや、僕はただの小学生だよ」

「小学生？」

「あ、ええつと、普通の子供って事だよ」

「彼は私達の護衛対象です」

「まあ、そうなのですね。それなら勇気さんは盗賊などではありませんわね。」

妖精さんと仲良くなれるのは、心が清らかな良い人だけですもの」

「は、はあ」

よく分からないが、どうやら誤解は解けたようだ。

「ところで、サラ姫はどうしてこんなところにいたんだ？」

ふと、プーカが尋ねた。

「そう言われれば確かに」

周りには、誰もいない。

いくら城の近くとは言え、王女が一人で森の傍にいるのは奇妙だった。

「散歩でもしてたの？」

「いえ、そうではありませんわ」

サラは急に暗い表情になった。

「お父様の事で悩んでいましたの。それで少し城の外を散歩していて。

……お父様は、あの人が現れてから、様子がおかしくなってしまうたんですの」

「あの人？」

「片目を包帯で隠した、黒い服を着た少年ですわ」

「それって！ やっぱり、この時代にいたんだ！」

「……！」

ダイアーナは、サラに詰め寄った。

「そいつは邪鬼。羽心をあの大陸にさらったわ」

「え？ そうなんですか？」

「邪鬼と一緒に女の子はいなかった？」

「女の子？ うくん、わたくしの知る限りいませんでしたわ」

「一緒にじゃないのね」

「とにかく邪鬼を捕まえましょう」

邪鬼を捕まえれば、羽心も助ける事ができる。

ジャネットは、サラに邪鬼のところに連れて行ってもらおうと思った。

その時、数人の兵達が勇氣達のもとへ走ってきた。

「サラ様！ 大変です！」

「どうやら、城の兵達のようにだ。」

「どうしたのです？」

サラが尋ねると、口ひげを生やした兵が答えた。

「王が、『封印の間』の扉を開けると言っているのです」

「なんですって！」

サラは目を大きく見開いた。

「サラさん、どうしたの？」

「勇氣さん、大変ですわ。あの部屋には、絶対に使つてはいけない禁断の箱があるので

す」

「箱とは」

「人々を不幸にする、『パンドラの箱』ですわ！」

勇氣、ディアーナ、ジャネットは、城を見つめる。

「そうか。邪鬼はパンドラの箱を手に入れるために王様に近づいたんだ」

三人はサラの方に顔を向けた。

「サラさん、封印の間に案内して。このままじゃ邪鬼にパンドラの箱を奪われてしま

う！」

勇氣達はサラ達と共に、城へと走った。

4 — 捕らえられた勇気

「封印の間は、こちらですわ!」

城にやって来た勇気達は、封印の間へと向かっていた。

部屋は、一階の一番奥にあるのだという。

通路の両脇には、何体もの大きな石像が立っていた。

勇気は、その石像の迫力にたじろぎながらも、ロープを持つ手に力を入れ、サラの後を追った。

ディアーナとジャネットも、勇気の後を追った。

「これですわ」

やがて、サラは大きな石の扉ので立ち止まった。

扉の中央には、手形のような紋章が刻まれている。

「わたくし達王家は、代々パンドラの箱を守る役目がありますの。

この扉は『選ばれし者の扉』と言って、特別な力を持つ王家の者しか開く事ができないのです」

「特別な力?」

聞き難いのある言葉に、勇氣は思わず聞き返そうとする。すると、プーカがそれを止めた。

「勇氣くん、今はそんな事考えてる場合じゃないゾ」

「そ、そうだね。サラさん、早く扉を開けて。箱を他の場所に移さないと！」

「ええー！」

サラは、手形のような紋章に、手をかざした。

瞬間、紋章が光り輝く。

—ゴゴゴゴツ

次の瞬間、扉がゆっくりと開いた。

勇氣達は急いで中に入る。

だが、中央に石でできた台がポツンとあるだけで、他には何もなかった。

「どういう事ですの？ パンドラの箱はこの台の上にあつたはずですわ」

「そんな」

勇氣達は戸惑いながらも、辺りを見回した。

すると、入り口の扉の前に誰かが立った。

「思つた通り、来たようだね」

「あなた……」

邪鬼を見るや否や、ディアーナが身構える。

彼の後ろには、赤い豪華な服を着た王と兵達がいた。

「邪鬼！」

「待ちなさい！」

勇気は邪鬼を捕らえようと、扉の方へ駆け出す。

だがそれよりも早く、王の周りにいた兵達が、それを防ぐようにして立ち塞がった。

「お父様、パンドラの箱はどこなのですか？」

「それはもちろん、ここだ」

王は、大事そうに持っていた黄金色に輝く小箱を見せた。

「それが、パンドラの箱……」

勇気は、ゴクリと唾を呑み込む。

ディアーナはパンドラの箱、ジャネットは邪鬼を睨みつけている。

「これはこの国の宝だ。王である私だけが持つ事ができる」

「その箱で、何をしようとするの？」

「決まっているだろう。これで国を守るのだよ」

微笑みながら邪鬼を見た。

「邪鬼殿が教えてくれたのだ。周りの国々がこの国を狙っているとな」

「まさかそんな……」

戸惑うサラをよそに、王は勇気達を見た。

「邪鬼殿。この少年と仲間が先ほど言っていた盗賊か？」

「はい。パンドラの箱を狙って、必ずやって来ると思っていました」

「盗賊？ 僕は盗賊じゃない！ そいつに騙されないで！」

「また騙すなんて……！」

勇気は立ち塞がる兵達をくぐり抜けようとするが、それを見て王が怒鳴った。

「ええい、邪鬼殿は国の危機を報せてくれた人物だ。そのような人物を悪人のように言うとは。」

その子を捕まえろ！」

「はっ！」

兵達は勇気の身体を掴んだ。

「やめろ！ 邪鬼、パンドラの箱の力は絶対に使わせない！」

勇気は邪鬼のもとへ近づこうとするが、兵達に取り押さえられ、動けなくなってしまう。

「ダイアーナとジャネットも、兵達に拘束されてしまう。」

「皆さん！」

サラは勇気達のもとに駆け寄ろうとするが、王が「やめろ」と声を上げた。

「サラよ。お前は危うく騙されるところだったのだぞ」

「彼らは盗賊などではありませんわ！」

「ふん。盗賊でなければ、何故パンドラの箱を狙う？」

「だからそれは」

サラは反論しようとするが、王は一方的に話を続けた。

「こんな少年と冒険者如きに騙されるとは、王家の人間として情けない。

お前は死んだあいつと同じように、人が良すぎるのだ」

「あいつ……それは『お母様』の事を言っていますの？」

サラは、険しい表情で王を睨んだ。

王はその迫力に一瞬怯んだものの、すぐに「ふん」と鼻を鳴らした。

「サラを部屋に連れて行け。今から戦いの準備をするぞ！」

「はっ！」

「お父様！」

「サラ様、こちらへ」

王はサラを無視して部屋を出て行き、サラも、兵達に連れて行かれてしまう。

「サラさん！ 王様！」

「……許さない……」

「生かすわけには、いきません……!」

勇気は捕らえられながらも必死に叫び、

ディアーナとジャネットは我慢できずに強い怒りと殺意を露わにする。

その姿を見て、邪鬼が不敵に笑う。

そして傍に近寄ると、勇気に顔を近づけて囁いた。

「無駄だよ。勇気君、聖女に勇者。パンドラの箱は、この僕が手に入れるからね」

「邪鬼!」

「聖女はともかく、あたしが勇者ですって!? とにかく、消えなさい!」

ディアーナは呪文を詠唱すると、邪鬼に向かって風の刃を飛ばし、頬を切り裂いた。

「……簡単には消えないさ。君が勇者である限りね」

邪鬼は頬を押さえながら、その場から去って行った。

「待ちなさい! くっ、離しなさい!」

「五月蠅い、静かにしろ!」

兵達はさらに力を入れ、勇気達を取り押さえる。

「やめろ!」

勇気は抵抗する事ができなくなり、そのまま地下牢へと連れて行かれた。

ディアーナとジャネットも、封印の間を追放された。

「よくもあたし達を……」

「何としてでも、再び入らなければ」

怒りに燃えるディアーナとジャネットは、もう一度封印の間に入ろうとした。

しかし、扉は特別な力を持つ者にしか開かない。

何とか誤魔化して扉を開けるしかないと言ったが、ディアーナは言ったが、ジャネットは首を横に振った。

「私はそういう作戦はできません」

「そうね、それなら……気絶させるしかない」

「やめなさい！」

どうしようもなくなったディアーナとジャネットだったが、ふとジャネットが顎に手を当てる。

「……特別な力……もしかしたら、ディアーナは……」

「あたしは王族じゃないでしょ？」

「いいえ、あなたは特別な力を持つはずです！ 紋章に手をかざしてください！」

「……分かったわ」

ディアーナは、手形のような紋章に手をかざした。

すると、紋章が光り輝き、扉がゆっくりと開いた。

「やった！」

「あなたは、やはり勇者でしたね。勇気を助けましょう！」

（早く、邪鬼を止めないと……）

薄暗い地下牢の中。

勇気は、その事をずっと考えていた。

邪鬼にパンドラの箱を奪われれば、見捨里市は怪の脅威に晒されるだろう。

そんな事を絶対に許すわけにはいかない。

勇気は急いで邪鬼のもとへ行きたいと思うが、牢には窓もなく、

鉄格子の扉も頑丈な鍵がかかっていて、逃げ出す事は不可能だった。

（こんな時に、キユウやディアーナがいてくれたら）

キユウとディアーナは、どんなピンチでも冷静だった。

勇気は、そんなキユウとディアーナをいつも頼りにしていた。

「やっぱり、僕一人じゃ、邪鬼を止める事も羽心を助ける事もできないんだ……」

勇気は、自分の無力さを痛感し、絶望感を抱いた。

「助けに来たわ！」

「ディアーナ、ジャネット！」

すると、鍵を持ったディアーナとジャネットが勇氣とプーカがいる地下牢に辿り着いた。

看守達に息はなく、殺した事を暗示しているようで勇氣は気分が悪くなるが、

二人は怒りに燃えているため何も言えなかつた。

たとえキユウがいなくても、勇氣は一人ではない。

一人では無力でも、力を合わせれば、どんな苦難にもきつと立ち向かう事ができる。

ディアーナは牢の鍵を開け、勇氣は、飛び出すように外に出た。

「邪鬼、待つてろ」

勇氣はプーカ、ディアーナ、ジャネットと共に、邪鬼のいる場所へと急いだ。

「邪鬼はどこにいるんだ？」

地下牢から一階に戻つて来た勇氣は、城の中を見回す。

ディアーナの髪は強く光り、ジャネットの上半身が聖遺物に覆われる。

二人の怒りは治まったようだが、既に人間性は残り少なくなつていた。

城は広く、どこに邪鬼達がいるのか分からない。

「兵にも見つからないようにしないと」

見つければ、また捕まってしまうだろう。

だが、勇氣は奇妙な事に気づいた。

「兵が、全然いないんだけど……」

「もしかしたら、戦争を始めたとか」

「やめてよ、ジャネット」

見渡す限り、人の姿はなかった。

勇気達は、警戒しながら通路を歩いて行く。

すると、角の向こうから声が聞こえてきた。

「たす……け、て……」

今にも掻き消されそうな弱々しい声だ。

勇気、ディアーナ、ジャネットは戸惑いながらも、角を曲がった。

「ああっ」

曲がった通路の先に、一人の兵が倒れている。

兵は苦しそうな顔をしていた。

「大変だ！」

勇気達は、慌てて兵の元へ走る。

「勇気クン、捕まっちゃうヨ！」

「そんな事を言ってる場合じゃないだろ！」

「あの人は困ってるのよ！」

勇氣達は兵の傍に辿り着くと、声をかけた。

「どうしたの?」

「きゅ、急に頭が痛くなって……」

兵が、苦しそうに答える。

「まさかこれって」

「勇氣、見て!」

ダイアーナが、通路の先を指差す。

そこには、中庭があった。

「あああ!」

庭に、大勢の兵達が倒れていた。

勇氣は中庭へと走り、兵達を見る。

お腹を押さえている人や、足を押さえている人、壁の前には、身体をぶつけてしまったのか、

苦しそうに唸り声を上げている人などが倒れていた。

「みんな不幸な目に遭ったの?」

「こんな事になるのは、パンドラの箱のせいだ」

箱が開けられた事によって、人々が不幸な目に遭ってしまったのだ。

「だけど勇氣クン、どうしてこの城の兵達が怪我をしてるんだ？」

「多分、邪鬼が箱を奪って開けたんだ」

早くしないと、邪鬼は刀で罅を作って逃げてしまっただろう。

「邪鬼、どこにいるんだ！」

「いるなら、姿を現しなさい」

5 — 村を救え

勇気はプーカ、デアーナ、ジャネットと共に、城のあちこちを捜す。

城の中は、怪我をしていて動けなくなった兵達で溢れていた。

「もう逃げたのかモ」

広間の中を捜しながら、プーカが不安そうに言う。

「もしそうだったら、見捨里市は……」

ここと同じように、大勢の人が怪我をしてしまう。

勇気はそれを想像し、首を大きく横に振った。

「それはあり得ないわよ。だって、あたし達は今まで何度も阻止したじゃない」

その時、音がした。

—コツ……コツ……コツ……

誰かがゆつくりと歩いている音だ。

音は、広間の外の通路から聞こえていた。

「邪鬼だ！」

勇気達が広間を出ると、通路の角を曲がる人影が一瞬見えた。

「待て！」

勇気達はその人物を追い、角を曲がる。

すると、誰かとぶつかった。

「わっ」

勇気はよろけて、尻餅をつく。

「勇気クン！」

「くっ」

「危なっ、もう少しで巻き込まれたじゃない」

勇気は邪鬼だと思い、素早く立ち上がると、身構えた。

だが、目の前に立っていたのは邪鬼ではない。

そこにいたのは、王だった。

「そなた達は……ううっ」

王は苦悶の表情を浮かべる。

よく見ると、王はあちこち怪我をしているようだ。

「まさか、邪鬼がやったんですか？」

勇気は身構えながら、邪鬼の姿を捜す。

だが、邪鬼はどこにもおらず、通路には石像だけが並んでいた。

「王様、邪鬼はどこですか？」

「邪鬼……?」

王は傷ついた腕を押さえながら、勇気の方を見た。

「これは……邪鬼殿がつけたものではない」

「じゃあ一体誰が？」

「それは」

王様は険しい表情で、その名前を言おうとした。

瞬間、傍にあつた石像の頭が大きく揺れ動いた。

「えっ?」

「危ない!」

石像の頭が、王の真上に落ちてきた。

勇気はとつさに王に飛びついた。

—ドオオン!

「勇気クン!」

「勇気!」

「勇気さん!」

プーカは、倒れた石像の上を飛びながら必死に勇気に声をかける。

「プーカ……」

すると、勇気の声がした。

王と一緒に、木に転がった石像の頭の陰に倒れている。

寸前のところで、落ちてきた頭を避けたのだ。

「まったく、あなたならできたのよね」

「王様、怪我は？」

勇気は、王を見た。

「な、何故助けた……？ 私は、そなた達を捕らえさせたのだぞ？」

「そんなの関係ないです。僕は、誰かが傷つくのを放っておく事なんかできない！」

勇気は、真っ直ぐな瞳で王を見つめながらそう答えた。

「そなたは……もしかして本当に、盗賊ではないのか……う？」

王は勇気の行動を見て、自分が間違っていた事に気づいた。

「頼む……パンドラの箱を、閉じてくれ。このままでは……村の人達が」

「どういう事ですか？」

「奪われてしまったのだ……。村へ行かせてはならん。ぐうう」

王は再び苦悶の表情を浮かべると、そのまま気を失ってしまった。

「これは予想以上に悪いですね」

「石像が倒れてきたのは、怪の影響によるものだ。

だったら、まだパンドラの箱はこの時代にあるはずだ」

王は村の人達を心配していた。

邪鬼は、村でパンドラの箱を使おうとしているのだろう。

勇気はプーカ、ダイアーナ、ジャネットと共に、村へと向かう事にした。

勇気達は城を出て、村を探した。

だが、村らしい場所はどこにも見えない。

どうやら、村は城から離れた場所にあるようだ。

勇気達は探している内に、最初にいた森の入り口まで戻って来てしまった。

「どこに行けばいいんだ？」

「こうなったら勘で探すしかないゾ」

「そんなのダメだ。間違つてたら間に合わなくなるだろ」

勇気は、森の方を見た。

「じゃあ、あたしが何とかするわ。魂は奈落に近づきつつあるけど……やるしかない！」

ダイアーナは植物の精霊を召喚し、森を探索させた。

植物の精霊は、木に人が引つかかっているのを発見した。

「いっつちよー！」

「あ、ちよつと！」

勇気も後を追おうとした。

その時、地面のくぼみに足を取られた。

「わっ！」

思わず転びそうになる。

目の前に先が尖った石が落ちている。

「うわっ！」

勇気は、慌てて手をついた。

「あ、危なかった」

手をついていなかったら、尖った石が顔に当たって、大怪我をしていたかもしれない。

「まさか、これも怪のせいなのか？」

「知らないゾ」

プーカとジャネットが上手く渡り、

勇気は戸惑いながら立ち上がると、急いでダイアーナを追った。

すると、前方に道が見えてきた。

その道の脇に、一人の兵が倒れている。

「あの人は」

サラを森まで迎えに来た、口ひげを生やした兵だ。

「大丈夫ですか？」

「う、うう、きゅ、急に強い風が、吹いて」

「風？」

勇気はハツとして、周りの木々を見上げた。

数人の兵達が、木の枝に引つかかって気絶していた。

「パンドラの箱のせいだ」

彼らは強い風に襲われ、木にぶつかつたり、枝まで飛ばされたりしたのだ。

「村はどこですか？」

勇気は、口ひげを生やした兵に尋ねる。

「この道を、真っ直ぐ……は、早く、止めてくれ」

勇気達は、大きく頷くと、駆け出した。

やがて、遠くにいくつも家が見えてきた。

「勇気クーン！」

「ああ！」

「はい！」

村だ。

三人はさらに全力で走る。

すると、村へ向かって歩いている人の姿が見えた。

「邪鬼だ！」

まだ、村へは辿り着いていないようだ。

今なら、村の人達を救う事ができる。

「止まりなさい！」

ジャネットは、その人物の元へ向かおうとした。

その瞬間、大きな影が、勇気達の頭上を覆った。

「えっ?」

見上げると、道の傍に立っていた木が、倒れそうになっていた。

「うわっ」

勇気は慌ててそれを避けようとする。

だが、ジャネットが声を上げた。

「勇気、周りを見なさい！」

「周り? ああああ！」

倒れようとしているのは、一本だけではない。

道の両側にあった、数十本の木が、同時に倒れそうになっていたのだ。

—バリバリバリツ、ドオオオオン
次の瞬間、木々が一斉に倒れた。

6 — 王と王女

「う、ううう……」

倒れた木々によって土埃が舞う中、勇気達は道の外へと這い出した。

何とか木々を避け、怪我をせずに済んだのだ。

「プ、プーカ……それに、ディアーナとジャネットは……」

勇気は必死に目を凝らしながら、辺りを見回す。

「オ、オイラは、ここだゾ……」

「装備が役に立ちました……」

「……」

土埃の中から、小さな手が伸びる。

ボロボロになったプーカと、無傷のディアーナ、そして鎧が汚れたジャネットだ。

「プーカ！ ディアーナ！ ジャネット！」

「上手く逃げたつもりだったけど……枝が身体に当たっテ」

プーカは苦しそうに悶える。

「プーカ！」

「あたしは平気よ」

「私もです」

勇気は慌ててプーカを包み込むように持った。

ディアーナとジャネットはゆっくりと立ち上がる。

そんな彼らの前に、誰かが立った。

「あなた達まで、邪魔をするのですのね？」

風が吹き、土埃が舞い散る。

勇気達の目の前に立っていたのは、サラだ。

「サラさん、どうしてここに？ 邪鬼は」

「邪鬼？ あの少年がどこにいるのかなんて、わたくし、知りませんわ」

サラはそう言って、冷たい笑みを見せる。

その手には、黄金色に輝くパンドラの箱があった。

パンドラの箱のフタは開いている。

「どうしてあなたがそれを？」

「決まっているでしょ。わたくしが、お父様からこれを奪ったからですわ」

「なんとという事を……」

悲しむジャネットをよそに、サラは城の方を眺めた。

「お父様はお母様の事を馬鹿にした。お母様はいつもみんなの事を思う素晴らしい人だったのに」

サラは、死んだ母親を馬鹿にした父親を許せなく思ったようだ。

「だから、わたくし、パンドラの箱を奪ったのですわ。」

周りの国々と戦うなんて、お母様もきつと反対すると思ったから。だけど……」

サラはパンドラの箱の中をじつと見つめた。

「この箱が、心の中で嘔きますの。フタを開けて、みんなを不幸にしろと」

サラは、にやりと笑った。

それを見て、プーカが口を開いた。

「勇気クン、サラ姫は……パンドラの箱の力に支配されてるみたいだぞ」

「あの時と同じね」

フタの開いたパンドラの箱の中から、黒い煙が出ている。

その影響のようだ。

「早く、箱を閉めなきゃ」

勇気は、ロープを使って、箱を閉じようと思った。

だが、自分の手を見てハツとした。

「ロープがない！」

「仕方ないわね」

牢に捕らえられた時、ロープを取られてしまったのだ。

勇気とディアーナは、サラの方へと走ると、箱を奪おうとした。

「邪魔はさせないですわ!」

サラは、パンドラの箱を突き出す。

瞬間、勇気とディアーナは勢いよくつまずき、地面に倒れた。

「うわっ!」

「きゃ!」

「勇気クン!」

「ディアーナ!」

パンドラの箱の力によつて、不幸な目に遭つてしまったのだ。

「パンドラの箱は誰にも奪わせませんわ。」

今から、村の人達に不幸になつてもらわないといけませんもの。フッフ、フッフフ

パンドラの箱から漏れる黒い煙に、サラは包まれていく。

「これはヤバいゾ」

「サラ、やめなさい」

二人はサラのもとに近づこうとするが、足が痛く、上手く動けない。

「さあ、そこで村の人達が不幸な目に遭うのを見て、いいですね」「やめるんだ！」

突然、勇気達の背後から声が出た。

サラがその声の主を見る。

そこに立っていたのは、王だ。

王は、斬られた腕を押さえながら、苦しそうに荒く息をしている。

「お父様……」

「サラ、みんなを傷つけてはならん。その箱は手にしてはいけないのだ」

王は、フラフラと歩きながら、ゆっくりとサラに近づく。

「私はあの少年の言葉を信じ、箱を手にしてしまった」

それから何故か、人々の事を不幸にしたいと思うようになってしまったのだ」

王は、苦しそうに歩きながらも、サラの傍に近づく。

「私は、お前の母の事を素晴らしい女王だと思ったっている」

それなのに、その箱のせいで、酷い事を言ってしまった。すまない……」

そう言って、サラの前までやって来ると、優しく抱きしめようとした。

だが、サラがその手を振り払った。

「お父様なんて信じられせんわ！」

「サラ」

「お父様は、わたくしの事もお母様の事も、愛していないんですよ。」

そんなお父様なんて、この世からいなくなればいいんですわ！」

するとそれを聞き、ジャネットが声を上げた。

「いい加減にしなさい！」

「ジャネット……」

ジャネットは、サラをじつと見つめた。

「王は嘘をついていません。あなたの事を、そして母の事も、本当に大切だと思っ
ていま
す。」

あなたも父を愛していますよね」

「そ、それは……」

サラは動揺しながら、王を見る。

「サラ、人を傷つけてはならん。お前は妻に似て、私の自慢の優しい子なのだ」

王はサラを力いっぱい抱きしめた。

「わ、わたくし、わたくし……」

サラを包んでいた黒い煙が四散していく。

「お父様！」

サラは、パンドラの箱を地面に落とすと、泣きながら王に抱きついた。「やった、サラさんが元に戻った！」

勇気は、パンドラの箱を拾おうとした。

その時、周りの木々が大きく揺れた。

「まさか！」

三人はハッとすると、顔を上げる。

森に、大きな竜巻が発生していた。

「これは、人為的なものですね……」

竜巻は、木々をなぎ倒しながら、猛スピードでこちらに向かってきた。

パンドラの箱の力によって、サラ達も不幸な目に遭いそうになっていたのだ。

「危ない！」

勇気とディアーナは足の痛みに耐えながら、二人のもとへ駆け寄る。

そのまま、彼らを連れて岩陰に飛び込んだ。

—ゴオオオオオ

竜巻が、勇気達の上を通り過ぎて行く。

「あ、危なかった……」

土埃が舞う中、勇気達は岩陰から顔を出すと、倒れている木々を見て冷や汗を掻いた。

王とサラも無事なようだ。

「二人とも、ナイスだゾ！」

「よく頑張りました、ディアーナ」

プーカが笑顔で勇気に抱きつき、ジャネットはディアーナの手を繋ぐ。

「パンドラの箱は？」

勇気は、先程までサラ達のいた地面を見る。

しかし、箱はどこにもなかった。

「まさか、竜巻と一緒に飛んでいったんじゃない？」

勇気がそう言うと、プーカが「違うと思うヨ」と言った。

「多分消滅したんだヨ」

サラを包んでいた黒い煙は四散していた。

その後、箱も黒い煙になって消えたのだろう。

「そっか、じゃあ僕達は助かったんだ」

勇気は箱がなくなった事に、ホッと胸を撫で下ろすのだった。

翌日。

サラは王と共に、村で人々と祭りを楽しんでいた。

パンドラの箱の事は、サラ達は覚えていない。

サラと王のもとには、人々が集まり、皆、楽しそうに笑っていた。

その光景を、勇気、プーカ、ディアーナ、ジャネットは少し離れたところから見ていた。

「サラも、王と仲良くなれてよかったわ」

「ああ、王様もとてもいい人みたいだもんね」

「パンドラの箱に残ったのは……」

「『アレ』よね？」

「ええ」

全ては、パンドラの箱のせいだったのだ。

「みんな騒動の事を覚えていないって事は、やっぱりパンドラの箱はあの時消滅したんだらうね」

「だけど、邪鬼はどこに消えたんだ？」

封印の間で会った時以降、邪鬼には一度も会わなかった。

「箱を奪えなかつたから、この時代からさつきと逃げたのかナ？」

「また、捜さないといけないって事か」

邪鬼を捕まえない限り、羽心を取り返す事はできない。

勇気は、苦々しい表情を浮かべながら、グローブを嵌めた拳を強く握りしめた。

「捜す必要はないよ」

一人の人物が、勇気達の前にやって来た。

黒い着物を着て、刀を差していて、左手にナイフの傷、身体にレイピアの傷、

片目に包帯をした少年……。

「「邪鬼！」」

邪鬼は、勇気達をじっと見つめた。

「勇気君、それに聖女に勇者じゃないか。君達は本当に勇気があるね。

だけど、僕は目的の物を手に入れたよ」

邪鬼はそう言うと、黄金色に輝く箱を見せた。

「パンドラの箱！ どうしてそれを！」

「王女の後をずつつけてたんだよ。竜巻が襲った時、上手く奪う事ができてよかった

よ」

「奪うって、怪の力はなくなったはずじゃ？」

「僕が箱のフタを閉じたんだ。だから、元に戻ったんだよ」

邪鬼は、フタが閉じられた箱を見て、不気味な笑みを見せた。

「王から奪うチャンスがなくなかなくてね。

ようやく奪えそうだったと思ったら、今度は王女が奪ってしまった。

だけど、無事手に入れる事ができてよかったよ。

この箱は、白鳥羽心と同じくらい、僕にとって重要なものだからね」

「何ですって?」

ディアーナは思わず剣を抜こうとするが、ジャネットが制止する。

「これ以上攻撃したら、決意に飲まれ、堕ちます。今は抑えてください」

「くう……」

悔しがるディアーナをよそに、邪鬼は話を続ける。

「僕の望みを叶えるためには、彼女とパンドラの箱が絶対に必要だったのさ」

邪鬼は片手で刀を抜くと、空間を斬った。

空間に×印状の罅ができる。

「勇気君、聖女、勇者、僕を止めたいのなら、追って来るがいい」

邪鬼はにやりと笑うと、パンドラの箱を持って、罅の中に飛び込む。

「邪鬼!」

勇気達は、罅を見る。

「追って来るがいいって、罅の中に飛び込めって事?」

「そんなの絶対罨だゾ」

「それは……」

邪鬼が何をしようとしているのか分らない。

だが、ここで逃がすわけにはいかない。

「プーカ、行こう！」

「で、でモ」

「どんな罠があろうが、僕は絶対に羽心を取り返す！」

「あたしはジャネットの期待に答えたいもの、何が何でも行くわ！」

「それに、彼らもそろそろ、海に着いているところでしよう」

勇気、ダイアーナ、ジャネットは意を決し、罫の中に飛び込んだ。

「あゝ、もウゝ！」

プーカも真剣な表情になると、勇気達の後を追って、罫の中へ突入した。

Side Story

1 — 八人の戦士

「で、俺達は向こうから行つて」

「ウチらは向こうから行くんだね？」

アプリル、ノノ、チェイニーチームと、麗羅、つるぎ、揚羽、カリオストロチームは、ジャネットの作戦で二手に分かれていた。

ディアーナとジャネットが「海」と呼ぶ謎の大陸に潜入するためである。

「一人じゃ無理でも四人なら楽勝だね」

「でも、ノノたちはさんなんだよ？」

麗羅チームは四人、アプリルチームは三人。

人数が足りないよ、とノノが言おうとした瞬間、

「ちよつと待つてくださーい！」

女性の声が、アプリルの後ろから聞こえてきた。

「愛衣も、アプリル様と一緒に行動させてくださいー！」

黒髪に赤い瞳、狐の耳に尻尾、持っているのはカード。

女性は愛衣と名乗り、アプ rilルを追いかけてやってきたようだ。

「おいおい……ここで助っ人かよ」

「助っ人じゃありません！ アプ rilル様が困っているなら愛衣も困っていますから！」

愛衣はアプ rilルに片思ひしており、彼のために召喚士になったのだ。

「ま、人数は多いに越した事はないしな！」

助っ人なら、人数が多いなら、きつと邪鬼を追いかける事ができる。

アプ rilルは愛衣の同行を了承するのだった。

「来たな！ うおおー……っ!!」

四人が進むと、四体のゾンビが待ち受けていた。

アプ rilルは狼の姿になると、ゾンビを突き飛ばして壁に思いつき叩きつける。

チェイニーは血液から槍を生成し、ゾンビを突き刺して戦闘不能にした。

ゾンビはアプ rilルとチェイニーに噛みつくが、二人はゾンビの攻撃を防御した。

そして、二人はゾンビに爪と血液の槍で反撃し、戦闘を終わらせた。

「さあ、早く行きますよ〜！」

「……どうやって？」

「魔物に助けてもらうんです！」

そう言って愛衣はカードを放り投げ、一匹の魔物を召喚した。

別に、彼女の歌が下手なわけではなく、下級吸血鬼に効果抜群だからである。

「負けません!」

愛衣はカードを掲げ、魔物を召喚してけしかける。

吸血鬼は無数の下級吸血鬼をけしかけ、愛衣を追い詰めてダメージを与える。

「うう、何だか気分が悪いです……」

「諦めるなよ、愛衣! うおりやああああつ!」

「ふっ」

アプリルは思い切り爪で吸血鬼を切り裂くが、吸血鬼は両手を交差させて攻撃を防ぐ。

その隙にチェイニーは血液の槍を突き立てるも、吸血鬼にはかわされてしまった。

「ぬあああああああ!」

さらに下級吸血鬼がアプリルに一斉に襲い掛かり、アプリルは浅くない傷を負ってしまった。

「ちつくしよお、やるじゃねえかよ」

傷ついたアプリルは、吸血鬼を鋭く睨みつける。

「だが……それでこそ戦いだ!」

アプリルを動かしているのは、そんな本能だった。

実際のところ、狼は群れないと寂しがるほど臆病な動物だ。
しかし、群れているからこそ、強大な敵に立ち向かえ、そして勇気を奮い立たせることができる。

「アプ Ril 様……」

愛衣はそんな彼を見て、自分も頑張らなければ、と思った。

「さあ、行きますよ!」

「♪~~~~♪♪~~~~♪♪~~~~」

ノノは歌声で傷ついたアプ Ril の身体を癒し、

愛衣はカードからモンスターを召喚して下級吸血鬼を倒す。

「うおっ!?!」

「儂が守る!」

アプ Ril に襲い来る下級吸血鬼の群れから、チエイニーは血液の盾で身を挺して守る。

「ありがとよ、チエイニー! でやあああっ!」

「感謝するぞ!」

アプ Ril はチエイニーに感謝の言葉を述べ、下級吸血鬼を殴り倒した。

チエイニーも血液の槍で下級吸血鬼を薙ぎ払った。

「後はお前だけだな！」

アプリルは吸血鬼目掛けて飛び掛かり、その首を切り裂こうとする。

吸血鬼には当たらなかつたが、かわした吸血鬼にチエイニーの血液の槍が突き刺さる。

「うぐおっ!!」

「後は愛衣が倒します！ このモンスターとモンスターを召喚して……」

愛衣が放り投げた二枚のカードがモンスターに姿を変える。

そのモンスターが合体すると、全長5 m程の大蛇に変化した。

「いってください、アナコンダ！」

このアナコンダというモンスターに毒はない。

しかし、その巨体は相手を絞め殺すには十分だ。

アナコンダは愛衣の命に従うと、吸血鬼目掛けて身体をくねらせ、

その身体で吸血鬼を締め上げる。

「ぐっ……うううっ……うっ……うっ……！」

吸血鬼は逃れようとするが、アナコンダの締め上げる力はどんどん強くなっていく。

やがて吸血鬼が絶命した事で、アプリル達の目の前に扉が現れた。

「みんな、行くぞー！」

「うん！」

「アプリル様、頑張りましたよ！」

2 — 潜入作戦

「アプリル達は成功したのかな？ よし、ウチらも行こう」

麗羅達は穴の中から潜入する。

飛び込んでみると、そこは遺跡だった。

その直後、時空の歪みが発生し、麗羅達の目の前に火柱が起こる。

「わっ、なんだいこれはー」

慌てて麗羅は飛び上がり、火柱にナイフを投げつけた。

すると、激しく燃え上がっていた火柱はびたりと止まった。

「麗羅君……偶然とはいえ、罍を解除できるなんて」

こんな時でも盗賊らしいな、と驚くつるぎ。

「ま、当然さ。ウチは盗賊の中の盗賊だからね」

くるつとナイフを一回転させる麗羅。

四人が遺跡を探索すると、宝箱を発見した。

罍が仕掛けられていると読んだ麗羅は罍を調べ、毒針の罍を解除して雷の巻物を手に入れた。

「きゃっ!」

ふわふわ飛んでいた揚羽の頭上に刃が降ってくる。

揚羽は何とかかわしたが、道に刃が突き刺さって通れなくなってしまう。

「これは遠回りしなければならぬな」

「ごめんなさい……」

四人は遠回りして別の道を歩く。

「ところで、どこに道があるんだろうね」

「さあ……」

別の道を通ったはいいものの、どこを通ればいいのか分からない。

「なんだい、これは?」

ふと、麗羅は壁に何か違和感を発見する。

その部分だけが、少し黒ずんでいた。

「気を付けて、麗羅君。それは罠かもしれないよ」

「分かっているって……ああああっ!?!」

「麗羅君!」

うっかり壁に触れてしまった麗羅は壁が回転し、そのまま巻き込まれてしまった。

つるぎ、揚羽、カリオストロは彼女を助けようとするが、そのまま壁は閉じてしまっ

た。

「どうしよう……麗羅ちゃんが一人になっちゃったよ!？」

「ボク達は彼女を信じるしかないみたいだね」

「うう〜」

揚羽は悔しそうな表情になるが、どうこう言っても麗羅は戻ってこない。

つるぎの言う通り、麗羅を信じるしかなかった。

「まったく、栗鼠騒がせな罠だね!」

麗羅はそう言いながらナイフを構える。

罠にかけるつもりなら、こちらも身構えれば大した被害は受けないからだ。

麗羅は辺りを見渡すが、周りには誰もいない。

「何があるんだろうね……ぐっ?」

突然、麗羅の肩に鋭い痛みが走った。

麗羅が頭上を見ると、そこには赤い翼を持った巨大な竜がいた。

「ドラゴン!?! なんて遺跡に……」

もしかしたら、ドラゴンが自分を仕留めるために麗羅一人を罠にかけたのだろうか。

このドラゴン、まだ若いとはいえ人間並みの知能はある。

盗賊一人で追いつく事は極めて難しいだろうが、麗羅は諦めるわけにはいかなかった。

た。

一度離れてナイフを投げるといふ手もあるが、ドラゴンから機会攻撃を受けるため、麗羅はその場を動かずにナイフを構えた。

「はあああつー！」

麗羅は思い切りナイフをドラゴンに突き刺そうとするが、ドラゴンの固い鱗に弾かれてしまう。

ドラゴンは麗羅を睨みつけると、口から炎のブレスを吐きかける。

凄まじい熱が麗羅を襲おうとするが、麗羅は高く飛び上がって炎のブレスをかわした。

「盗賊を捕らえようなんて100年早いよ！」

そう言つて麗羅はドラゴンの背後に回り込み、舞うようにナイフでドラゴンに切りかかる。

急所に攻撃を受けたドラゴンは悶えるものの、すぐに飛び上がって体勢を整え直した。

麗羅は両手にナイフを持ち、ドラゴンの足を突き刺した。

攻撃は成功し、続けて鱗を突き刺そうとするが、ドラゴンは攻撃をかわして爪で引き裂いた。

「ぐうつー！」

浅くない傷を負い、ふらつく麗羅だが、ドラゴンを見る目つきは鋭かった。「たああああーっ!!」

ドラゴンの身体や翼に、麗羅が投げた無数のナイフが突き刺さる。

攻撃を全て食らったドラゴンは地に落ち、煙が辺りに充満する。

同時に、どこかでガチャリ、と鍵が開く音がした。

「鍵が開いたのかな？ でも、どうやって脱出すればいいんだ……ん？」

麗羅が辺りを見渡すと、どこかの壁に違和感を発見した。

その壁をもう一度押してみると、再び壁が回った。

「わ、わ、な、なんだいこれは!!」 のあああああああ!!」

壁の回転に巻き込まれた麗羅は、そのまま遺跡の外に飛び出してしまった。

「大丈夫かい、麗羅君!!」

「元氣ー!!」

「遅かったぞ」

麗羅を待っていたのは、つるぎ、揚羽、カリオストロだった。

何が起こったのか、麗羅はまだ理解できなかった。

「うう………いたたた………」

「あれを見るんだ、麗羅」

カリオストロは尻をさする麗羅を起こし、鍵の開いた扉を指差す。

「な、なんで鍵が……あ！ さつきウチがドラゴンを倒したからか！」

「そうみたいだ。でも、これであの大陸に行く事ができる」

「あいつらは海つて呼んでるみたいだけど……本当に、海なのかね？」

「でも、行かなきゃ意味ないよ。アタイ、邪鬼をやっつけたいんだから」

「逸る気持ちは分かるが、落ち着いた方がいいよ、揚羽君。……さあ、海へ行こうではないか」

そう言って、麗羅、つるぎ、揚羽、カリオストロは、扉の中に入っていった。

e p i s o d e 6 | T r u t h o f J a k i

↳ 謎の大陸

1 | 謎の大陸

「わあああああ！」

「……」

勇気とプーカは、手足をばたつかせながら、罅の中を飛んでいた。

デイアーナとジャネットは目を閉じて、ぐっと腕を組んでいる。

時のトンネルと違い、周りはずす黒く、泥のようにドロドロとしている。

目が回り、頭が回り、何より、この空間にいるだけで気分が悪くなっていく。

「ゆ、勇気くん、やっぱり入っちゃまずかったんじゃないの力？」

「そんな事言われても、これしか方法がなかっただろ！」

罅の先に邪鬼がいる。

捕まえて、羽心を救い出すチャンスなのだ。

勇気達は、全身に力を入れた。

やがて、どす黒い空間の先に、光が見えてきた。

「出口だ！」

——ドドンッ！

勇気とディアーナは思い切り尻餅をついた。

「勇気くん、ディアーナ、大丈夫かい？」

「あ、ああ、何とか無事だよ、あいたた」

「ちよい怪我したわ」

勇気とディアーナは、フラフラとしながらも、立ち上がると、周囲を確認した。

「アハハは……」

湿った大地がどこまでも広がっている。

草木は生えておらず、数え切れないほどの水たまりや干潟が見える。

その大地に、ところどころ見慣れない建築物が建っていた。

どれも石を積み上げて造っているようだ。

勇気はふと、一際大きな建築物に目を留めた。

「あれは……」

ピラミッド状の建築物で、中央に階段があり、頂上に神殿のようなものが見える。

以前怪狩りで行ったエジプトにあったピラミッドとは全く形が違う。

勇氣は、その建築物に見覚えがあった。

先日ニューヨークの映像で見た場所だ。

「まさかここって」

「海……！」

大西洋に浮上した、謎の大陸である。

「どうしてここ？」

勇氣は戸惑いながらも、「あつ」と声を上げた。

以前見た夢の中で、キユウはあの頂上にある神殿のような場所に立っていた。

「もしかして、キユウがいるのかも！」

しかし、勇氣はすぐに冷静になった。

罎に飛び込んだら、ここに着いたのだ。

「それって、邪鬼の目的の場所がこの大陸だという事だよ……う！」

邪鬼は、望みを叶えるためには、羽心とパンドラの箱が必要だと言っていた。

ここが、彼の野望を叶えるための場所なのだろうか？

すると、ジャネットが口を開いた。

「行くしかありません。外でも動いていますから」

「どういう意味？」

邪鬼はこの大陸のどこかにいる。

それを捕まえるために、勇氣達は罅の中に飛び込んだのだ。

「あと八人、来ますよ」

「えっ」

邪鬼を捕まえ、羽心を救い出せば、野望も打ち砕く事ができるはずだ。

そして、ジャネットはアプリル達を信じている。

「そ、そうだね。行ってみるしかないよね」

「はい、任せてくださいいね！」

「ピンチになったらオイラが助けてあげるから」

ジャネットとプーカはそう言って笑う。

勇氣はその笑顔を見て、少し心が落ち着いた。

「よし、行こう。まずはあのピラミッドからだ！」

「うわー、これは凄いネ」

「遠くで見るとこんなに大きかったんだ」

「恐らく、ここに邪鬼がいるでしょう」

「聖女として、彼を捕まえます！」

勇氣達は、ピラミッド状の建築物の傍までやって来た。

建築物は、想像以上に大きく、真下からだど頂上にある神殿は全く見えない。中央にある階段も大きい。

横の幅は、5 mほどあり、1段ずつの高さも3 c mほどある。それが100段以上続いているようだ。

勇気達は建築物を一周するが、どこにも入り口はないようだ。「階段を上るしかないみたいだね」

「そうですね」

勇気は、階段を見上げながら、ゆっくりと上り始めた。

ジャネットも、鎧の重さに耐えながら、階段を上がった。

—ヒュ、ヒュ—

上るにつれ、風が強くなっていく。

「風と友達になるのよ」

「うう、勇気クン、肩を借りていいかな？」

ディアーナが風に乗る中、プーカは、風のせいで、真つ直ぐ飛ぶ事ができないようだ。「無理して飛ぶ必要ないだろ」

「いやあ、オイラも一人前だつてところを見せたくて」

プーカは、勇気の肩の上に避難しながら笑った。

勇気はふと、眼下を眺めた。

既に3mほど上っているようだ。

「勇気、どうしましたか？」

「転げ落ちたら、怪我だけじゃすまないよね」

「私は大丈夫ですが……生身の人間では、重傷ですよね」

勇気は、ゴクリと唾を呑み込む。

「下を見ちゃ駄目だ。こういう時は上だけを見ながら歩く方がいいヨ」

「そ、そうだよね」

勇気とジャネットは、階段に手をつけ、落ちないように気を付けながら、慎重に上へと進む。

ディアーナも、風に乗りながら、階段を上がった。

「落ちないように……ゆっくり、ゆっくり……」

一段、また一段。

やがて、頂上が見えてきた。

「よくやった、勇気くん、ディアーナ、ジャネット！」

「ふう、何とか着いた」

勇気、ディアーナ、ジャネットは、頂上に足を掛ける。

真っ白な神殿が見える。

三人はその神殿をじっと見つめる。

だがその時、目の前に突然人の影が現れた。

「来るなっ！」

丸メガネをかけた男性が襲いかかってきたのだ。

「わっ」

勇気は反射的に逃げようとして、思わずバランスを崩す。

ダイアーナとジャネットは、勇気と対照的に動きを止めたままだった。

「わ、あ、あ、あ」

頂上から落ちそうになってしまう。

「勇気クーン！」

「危ない！」

「ダメです、動かないでください！」

2 — 調査隊と神殿

「ぬあああ！」

勇氣は齒を食いしぼり、腹に力を入れると、身体を前に動かした。

そのまま、前のめりになると、頂上の地面に手足をつけた。

「危なかつた〜」

何とか転落せずに済み、勇氣はホツとする。

「なんだ」

「ひい、許してくれ」

戸惑いながらも、勇氣は男性の方を見た。

男性は尻餅をつき、完全に怯え切っていた。

彼の後ろには、四人の大人達がいた。

皆、揃いの紺色の作業ジャンパーを着て、頭には安全用のヘルメットを被っている。

彼らも眼鏡の男性と同じように、勇氣を見て怯えていた。

「あの、あなた達は？」

「頼む！ 離してくれ！」

「だからあの」

「もう神殿には入らない。調査もやめる。だから襲わないでくれ！」

眼鏡の男性は必死に叫び続ける。

すると、後ろにいた金髪の女性が、怯えながら眼鏡の男性に話しかけた。

「ね、ねえ、さっきの子とは違うみたいよ」

「えっ？」

男性は土埃だらけになっていた眼鏡のレンズを布で拭き、勇気を見つめた。

「ほんとだ、さっきの男の子とは違う子だ」

「男の子!？」

勇気は眼鏡の男の人に詰め寄った。

「それって、片目に包帯をして黒い着物を着てませんでしたか？」

「あ、ああ、僕達はその子に、刀で斬られそうになったんだ」

「ええええ!？」

勇気は、彼らから話を聞いた。

彼らは調査隊のメンバーで、浮上した謎の大陸を調査していたという。

しかし、このピラミッド状の建築物の頂上にある神殿の中を調べている時、事件が起きた。

「僕達は、調査チームの隊長であるフォード博士と一緒に、神殿の中を歩いていたんだ。そうしたら、女の子がいたんだよ」

「女の子？」

「君ぐらいの年齢で、背が高くってロングヘアーの子だ」

「羽心だ！ 彼女は今どこにいるんですか？」

勇気が尋ねると、男の人達は沈痛な表情になった。

「連れて行かれたよ。着物の男の子に」

調査隊のメンバーは、神殿の中に女の子がいて驚いたのだという。

だが、いくら声をかけても、ブーツと立っているだけで、まるで反応がなかった。

フォード博士はそんな羽心を心配し、調査を中断して神殿の外に連れて行こうとしたらしい。

しかしその時、邪鬼が現れたのだ。

「彼は黄金色の箱を持っていたよ。そして『その子を返せ』と言ったんだ」

邪鬼は刀を抜き、調査隊に襲いかかってきた。

彼らは必死になって逃げ、命からがら神殿の外に脱出したのだという。

「それで、羽心、ええっと、女の子は？」

「男の子に、神殿の奥に連れて行かれたよ」

調査隊の面々は、邪鬼の事を思い出して震える。

「羽心……」

邪鬼は、羽心とパンドラの箱を使って、何をするつもりなのだろうか？

目的は分からないが、早く止めないと大変な事になってしまいうだろう。

そんな中、金髪の女性が口を開いた。

「あなた達は何者なの？ あなた達だけじゃない、あの男の子や女の子は一体誰なの？」

つい最近浮上した大陸に、子供が何人もいるのだ。

彼らは完全に戸惑っていた。

「僕は、ええつと、説明するのは難しいけど……」

アンノウンマン
知らざる者に怪狩りをしているなどと言ったら、余計に混乱するだろう。

勇氣は焦りながらも、彼らを見た。

「とにかく、あなた達はすぐに階段を下りて、避難して下さい」

勇氣はそう言うのと、神殿の入り口を見た。

「まさか、中に入ろうっていうの？」

「それは危険だ。僕達と一緒にいるんだ」

調査隊の面々は、勇氣を止めようとする。

だが、勇氣は首を横に大きく振った。

「僕は、仲間を助けるためにここに来たんです。

どんな怖ろしい事が起きても、どんな危険な事が起きても、僕は絶対に羽心を助ける！」

勇気の言葉に、調査隊の面々は何も言えなくなる。

勇気は「早く安全な場所に逃げて下さい！」と言うと、神殿の中に入って行った。

「何か分かりましたか？」

ダイアーナとジャネットと合流した勇気は、二人に情報を話した。

邪鬼が神殿の中に羽心を連れて行った事、邪鬼がパンドラの箱を持っていった事、

邪鬼が調査隊に斬りかかった事……。

勇気から情報を聞いた二人は、うん、と頷いた。

「分かりました。海に何か潜んでいるというわけですね？」

「だから、海って何？」

「海は海よ」

どこまでも海と言い続ける二人を、勇気は理解できなかつた。

もつとも、これはダイアーナとジャネットの隠語なのだが、それを話しては意味がないため、

二人はこれ以上何も話さなかつた。

神殿の中は、外と同じように壁も床も真っ白な石でできていた。

壁には松明が取り付けられていて、明るくなっていた。

勇気はプーカ、ディアーナ、ジャネットと共に、神殿の通路を進んで行った。

「松明は、邪鬼が見つけたのかな？」

プーカは周りを見ながら言う。

調査隊の話によると、邪鬼は神殿の奥へと向かったらしい。

「奥と言っても、そこまで広くないですよね」

ピラミッド状の建築物自体は巨大で高さもある。

しかし、神殿そのものは体育館ぐらいの大きさだ。

「建物としては大きいけど、すぐに奥まで行けるはずだ」

神殿の中にはいくつか部屋があり、勇気達はそれらの部屋の中を確認していった。

だが、部屋の中には誰もおらず、物も置いていなかった。

「次が最後の部屋だ」

勇気達は、神殿の一番奥までやって来た。

「邪鬼がいるとしたら、あの部屋だよネ？」

プーカの呟くような声に、勇気は小さく頷く。

勇気は全身に力を入れると、ゆっくりと部屋の中を覗き込んだ。

「あら？」

すると部屋の中に、背の高い男性がいた。

男性は、一心不乱に壁を触っている。

邪鬼ではない。

「すみません」

ディアーナは男性に声をかけた。

「すみませんじゃない。君達も早く調べて」

「えっ？」

「えっじゃない。君達の仕事は調査だろう」

男性は、ディアーナの方に顔を向ける事なく、壁を調べ続ける。

「あたしは調査隊じゃなくて……」

ディアーナがそう言うと、男性はピタリと手を止め、顔を向けた。

「ぬおっ、君は誰だ？」

「あたしは、この子の仲間の女の子を助けに来て」

「女の子？ あの着物の男の子に連れ去られた子の友達かい？」

男性は、勇気達の傍まで来ると、ジロジロと見つめた。

「この大陸にどうやって来たんだ？ 船でも使ったのか？」

(知らざる者特有の現象だわ)

男性は、勇気のポケットの中にいるプーカと目が合った。

「ヤバイゾ！」

「おお、これは！」

男性はプーカを摘み上げた。

「わああ、離せ！」

「ちよつと、やめて下さい！」

「これは、妖精だな！」

「えつと、あの、ええつと、それは人形です」

勇気は必死に誤魔化すが、男性は首を横に振った。

「こんな人形はあるわけがない。この子は立派な生き物だ」

「いや、だから」

「まさか、本物の妖精に会える日が来るなんて」

男性は、満面の笑みを浮かべると、プーカに頬ずりをした。

「うわあ、やめテ」

プーカは慌てて、男性の手から抜け出すと、勇気にしがみついた。

「おお、すまない。だけど子供の頃から会いたかったものに会えて、つい、嬉しくてね」

「子供の頃から？」

「ああ、子供の頃から未知なるものに興味があつたんだよ」

「あたしにとつては未知じゃないけどねえ」

男性は、神殿の外にいた人達と同じように、紺色のジャンパーを着てヘルメットを被っている。

彼はディアーナの姿を見ると、興味深く彼女の顔を見る。

「お、君も耳が長いじゃないか。妖精か？」

「まあね。で、あなたも調査隊の人？」

「ああ、私は考古学者のフォードだ」

「それって」

外にいた人が言っていた、調査チームのリーダーだ。

3
— 隠し扉

「なんだって？ 他のメンバーは外に逃げてしまったのか」

勇氣は、神殿の外で会った人達の事をフォード博士に話した。

「まったく、情けない。襲われそうになったぐらいで逃げ出してしまうとは」

「そうよねえ」

フォード博士もディアーナも、邪鬼の事を全く怖ろしく思っていないようだ。

「それで、君達やあの着物の男の子達は何者なんだい？」

「それは、ええっと」

外にいた人達と同様に、説明しても理解してもらえるかどうか怪しい。

勇氣がそう思っていると、プーカが「大丈夫だと思っヨ」と言った。

「この人は、オイラを見ても驚かなかつただ口。全部話してもきつと分かつてくれるはずだよ」

「それは、確かにそうかも……」

調査隊のリーダーだけあって、外にいた人達とは違いどこか頼りになりそうな雰囲気があった。

もしかしたら、彼は知る者なのかもしれない。ノウンマン

勇氣は、フオード博士に、キユウとの出会いの事や怪狩りの事、そして邪鬼の事などを手短かに話した。

少年説明中……

「なるほど、そんな事があつたのかい」

フオード博士は、戸惑いながらも、強い興味を抱いたようだ。

「それで勇氣君。その邪鬼というのが私の仲間を連れ去つたという事なんだね」

「はい。その子が必要だと言って」

「その子と、パンドラの箱を使って、邪鬼はこの神殿で何かしようとしているという事か」

「この神殿は何なんですか？」

「それは分からない。だが、この浮上した大陸が何なのかは分かるよ」

フオード博士は、勇氣達をじつと見つめた。

「ここは恐らく、『アトランティス大陸』だ」

「えええ!!」

「やっぱり海だったのね!」

ダイアーナは予想通り、という顔をする。

勇氣は、怪狩りを行う前から、その言葉を知っていた。

ある意味、最も有名な不可思議なものと言っても言い過ぎではない。

アトランティス大陸は、1万2千年前に存在した大陸の事である。

大陸には、高度な文明があり、そこに住む人々は、

現代よりも遥かに進んだ科学知識を持っていたという。

彼らは世界を支配していたが、ある日大陸が没し、滅んでしまったと言われている。

「私は長年、アトランティス大陸は実在すると思っていた。

まさか急に大陸が浮上するとは思わなかったがね」

フォード博士達は、浮上した大陸にある遺跡の中でも、最も神秘的だった、

この神殿のようなものがあるピラミッド状の建築物から調査する事にしたのでという。

「だけど、その調査を始めた途端、邪鬼に襲われてしまったんだよ」

「なんで？」

「気づかれたら困るかららしいよ」

結果、調査はほとんどできていないのだという。

「それで、邪鬼はどこに行っただんですか？」

神殿の中を捜したが、邪鬼も羽心もいなかった。

フオード博士はそれに答えるかのように、先ほどまで触っていた部屋の壁の方を指差した。

「邪鬼は私達を襲った後、パンドラの箱を持って、君の仲間を連れてこの部屋に入ったんだ。

私は慌てて追いかけたんだが、何故か消えてしまつて」

「消えた？」

「私が部屋に入る直前、石が動く大きな音がした。

恐らく、この部屋のどこかに『隠し扉』があるはずだ」

フオード博士は、それを見つけ出そうと、壁を調べていたのだ。

「隠し扉……」

ディアーナは、部屋の壁を見た。

壁は他の部屋と同じように、白く、おかしなところはなさそうだ。

「隠し扉があるとすれば、何か手がかりがあるはずだと思うけど」

「私もそう思うんだが、全く分からなくてねえ」

勇氣、ディアーナ、ジャネット、フオード博士は、壁を見回していく。

「うーん、オイラにはさっぱり分からないゾ」

プーカも飛びながら天井などを探すものの、手がかりを見つける事ができない。

「早く羽心チャンを助けたいの二」

プーカは、大きく息を吐いた。

「あ！ これですぬ！」

「えっ？」

勇気はジャネットが見ている床を見る。

床の白いタイルの一枚に、うつすらと手形のような紋章が刻まれていた。

「これって、サラさんの城にもあつた——」

「『選ばれし者の扉』です」

ジャネットは、フォード博士に手形の仕組みを伝えた。

「なるほど、邪鬼はそこに手をかざして、隠し扉を開けたんだな」

フォード博士は手形に手をかざした。

しかし、何の変化も起きない。

「どういう事だ？」

「扉は、特別な力を持つ者にしか開く事ができないんです」

サラの城の部屋は、サラ達王族の人間しか開ける事ができなかった。

そのため邪鬼は、サラの父である王を騙して、扉を開けさせたのだ。

「特別な力を持つ者か。だが、それなら何故邪鬼は開ける事ができたんだい？」

「それは……」

勇気が首を傾げていると、プーカが「分かつた」と声を上げた。

「羽心チャンが開けたんだヨ！」

羽心は、特別な力を持っていた。

その力をここで利用するために、邪鬼は連れ去ったのかもしれない。

すると、フォード博士が勇気を見た。

「だったら、君でも開くんじゃないのかい」

「えっ、僕？」

「ああ、君はそのグローブを嵌めて、キユウという幽霊の男の子や、

後ろにいる女の子と、時空を超えて数々の怪狩りをしてきたんだろう。

君にも特別な力があると思うんだ」

「それは、確かにそうかもしれないけど」

「勇気くん、手をかざしてみるんだ」

「えっ、あ、ああ」

勇気は戸惑いながらも、手形の上に手をかざしてみた。

瞬間……。

—ブウウウン

光り輝いた。

勇気達の前にある床の一角が、次の瞬間、スーッと板が動くようにスライドし床に穴が開いた。

床の中には、下へと続く階段がある。

「隠し扉ね！」

ディアーナが興奮しながら言う。

「羽心だけじゃなくて、僕にも反応するなんて……」

この神殿は、勇気や羽心の持っている力に、何か関係があるのだろうか？

「勇気クン、ディアーナ、ジャネット、行ってみよう」

「私も行くよ」

フォード博士が言う。

「この神殿の謎を解き明かしたいんだネ？」

「もちろんそれもある。だが、邪鬼は危険な少年だ。君達だけで行かせるわけにはいかない。

いざとなったら私も戦うよ」

フォード博士は真剣な顔つきで、勇気達にそう言った。

「フォード博士……」

フオード博士は、どこことなくキユウに似ている。

勇気は、助けてくれようとしている気持ちを楽ししく思った。

「行こう！」

「はい！」

勇気達は、ゆっくりと階段を下りて行った。

4 — もう一人の狼

「一体どこまで下りるんだ？」

勇氣達は、隠し扉の階段を下りていた。

階段は、大きな穴のような空間の壁に取り付けられていて、螺旋状になっていた。壁はむき出しの岩でゴツゴツとしている。

階段には手すりなどはなく、幅が狭く表面に砂も舞っていて滑りやすくなっていた。神殿とは違い、地下へと続くこの空間には、松明の光もなく、真っ暗だ。

先頭を歩くフォード博士が持っているライトの光と、ダイアーナの暗視能力だけが頼りだった。

勇氣とジャネットはフォード博士の後ろを歩きながら、

足を滑らせないように、慎重に階段を下りていた。

しかし、いつまで経っても、底には到着しなかった。

ライトで下を照らしても、どこまでも階段が続いているだけで、底は全く見えなかったのだ。

「ねえ、プーカ、下がどうなってるか飛んで確認してきてよ」

「オイラが？ 何言ってるんだヨ。こんな真つ暗なところ、一人で行けるわけないだロ」

プーカは勇気の肩の上でブルブルと震える。

「だいたい、ほんとに底なんてあるノ？」

「それは……」

「あるわけあるじゃない」

神殿は、ピラミッド状の建築物の上にあつた。

穴は、その建築物の中に作られているのだろう。

「かなり歩いたよね？ いくらなんでも、もう地上には着いていると思うんだけど」

すると、フォード博士が言った。

「これは、エジプトにあるピラミッドと同じ構造なのかもしれないな」

「道理でそうだと思つたわ」

「このアトランティス大陸にある文明は、エジプトの古代文明よりも古い。

恐らく、エジプトの古代文明は、この文明を真似て作られたんだろう。」

エジプトのギザのピラミッドなどには、地下にも部屋があるんだよ」

「ん？ じゃあ、あたし達は地下を進んでるって事？」

「ダイアーナの言葉に、フォード博士は大きく頷いた。」

「はつきりとした事は分かっていないが、

ピラミッドでは、その地下にある部屋の方が重要だと言われている」

「じゃあ、この下にある場所こそが、邪鬼の目的なのね……」

「急ごう！」

「分かったわ！」

勇氣、ディアーナ、ジャネットは、落ちないように下りるスピードを速めた。

だがその時、螺旋状になった階段の反対側で、何かが動いた。

真つ暗なのでほとんど見えないが、人の影のようだ。

その影が、勇氣達の方へと大きくジャンプした。

「えっ」

勇氣は、反射的に一步階段を上に戻った。

ディアーナとジャネットは、身構えている。

—ドーンツ

次の、目の前の壁に何かが当たった。

暗闇の中に、牙の生えた獣の顔が僅かに見える。

「ハッ……」

顔は獣だが、人のように二本足で立っていたのだ。

前にいたフォード博士が慌ててその生き物にライトを当てた。

「そいつは『狼男』だ！」

「同胞っ！　ここで同胞をぶつけるとは！」

狼男は、月を見ると狼の化け物に変身する怪だ。

アプリルの同胞であるこの怪を、ディアーナとジャネットは傷つけられなかった。

―ガルルッ

狼男は、牙を剥き出しにして吠えながら、鋭い爪を振り上げ、勇気に襲いかかってきた。

「わっ！」

「傷つけないで！」

ディアーナは、光の精霊を召喚して一瞬だけ光を放った。

狭い場所で剣を振る事はできないので、魔法を使ったのだ。

狼男は怯んでその場から大きくジャンプすると、暗闇の中に消えた。

「君が言った通り、本当に怪はいるんだな」

「闇属性が多いのは仕方ない事よ」

「だけど、狼男がどうしてこんなところ？」

勇気がそう言うのと、暗闇の中から、唸るような声が聞こえてきた。

「才前ヲ、倒ス。神ヲ、守ル」

狼男だ。

「神って?」

「確か、ゾンビも言ってたよネ?」

以前、怪狩りで倒したゾンビも、消える前に同じような事を言っていた。

「神というのは、邪鬼の事か」

「勇気がそう思った瞬間、上の方の壁で、何かが動いた。」

— シュ

動いた物体が、勇気の腕を掠める。

「うわっ」

勇気は腕に引つかかれたような痛みを感じた。

壁へへばりついていた狼男が、勇気の元へ飛んできたのだ。

狼男は、再びその場からジャンプをすると、暗闇の中に消えた。

「大丈夫?」

「あ、ああ、ちよつと掠っただけだ」

「勇気、狼は夜行性。暗置の中でもあたし達の姿がはつきりと見えてるはずよ」

「そんな」

暗く、狭い上に滑る階段の上では、格好の餌食だ。

「ここではまともに戦えないわね。ま、あたしも傷つけられないけど」
「は、はい！」

勇気達は、落ちないように気を付けながら、階段を駆け下りた。

—ガルルルッ

背後で、狼男の鳴き声が響く。

シュ、シュという空気を切る音も聞こえる。

「ヤバいゾ。壁から壁に飛びながら追って来てるみたいダ！」

プーカが勇気の肩にしがみつきながら言う。

勇気は焦りながら、必死に走り続けた。

ディアーナとジャネットは、こんな時でも落ち着きを忘れない。

「どうして、二人とも落ち着いてるの？」

「あたしにとつては」

「当たり前だからです」

—シュ

「がっ！」

突然、前を走るフォード博士が声を上げた。

「「フォード博士！」」

「だ、大丈夫だ」

フォード博士は、腕の辺りを押さえている。

どうやら、狼男に噛みつかれてしまったようだ。

狼男は、既にジャンプをして、暗闇の中に消えてしまっている。

「このままじゃ、下に着く前にやられちゃうゾ」

「何とかして狼男の動きを止めないと」

「だけど、どうやって止めるんだ？」

「魔法……使う？」

その時、ふと、勇気は階段を見た。

「そうだ！」

勇気はフォード博士の方に顔を向けた。

「フォード博士！ 狼男は、この暗闇でも僕達の姿がはつきり見えてるんですよ？」

「あ、ああ、狼と同じならきつとそうだ」

「だったら、これだ！」

勇気はその場にしゃがみ込むと、何かを掴む。

そして立ち上がり、大声で叫んだ。

「狼男！ 僕を襲えるものなら襲ってみろ！」

「ちよつと、何するのよ！」

「普通の人間が立ち向かうのは自殺行為ですよ！」

ディアーナとジャネットは勇気を止めようとするが、勇気は「大丈夫」と言った。
瞬間、上空で、影が動いた。

狼男が、壁から壁へと飛び移り、勇気に襲いかかろうとしているのだ。

—ガルルルツ

やがて、影が近づく。

次の瞬間、狼男は鋭い爪を振り上げ、勇気に襲いかかった。

「今だー！」

勇気は、悩む事なくタイミングを見計らい、掴んでいた物を狼男の顔目掛けて投げた。

それは、砂だ。

—ギヤアアア！

狼男の両目に、大量の砂が入る。

狼男は、悲鳴を上げ、手で目を拭う。

しかし、砂は全く取れない。

—ガアアア

狼男は、逃げるようにその場からジャンプすると、暗闇の中に消えた。

「やった、上手く行った」

「……」

狼男は、暗闇でもはつきりと見える目を持っていた。

勇気は、その目を砂で見えないようにしたのだ。

「勇気くん、ナイスアイデアだゾ！」

「フォード博士、これで時間稼ぎはできるはずですよ！」

「あ、ああ、下まで走るぞ！」

フォード博士は、腕を押さえながら走る。

勇気もその後に続き、デイアーナとジャネットは絶句しながらも後を追った。

（ですが、彼と同胞ならば、こいつも同じはず。アプリル達よ、間に合ってください！）

5
— オベリスク

勇氣、ディアーナ、ジャネット、フオード博士は、懸命に階段を下り続けていた。すると、フオード博士が急に立ち止まった。

「狼男に噛まれた傷が痛むんですか？」

「いや、そうじゃない。あれを見るんだ」

フオード博士は、前方をライトで照らした。

「あっ」

階段が終わり、床が見える。

「底に着いたんだ！」

「待つてくださいい！」

勇氣達は、一気に階段を駆け下りた。

ジャネットとディアーナは、後から慎重に降りた。

— ボ、ボボボ

突然、底の空間が明るくなった。

壁に取り付けられていた何本もの松明に火がついたのだ。

「邪鬼か!？」

勇気は身構える。

しかし、周りには誰もいなかった。

穴の底は、真つ白な木が敷き詰められた円形の舞台のようになっていた。

舞台の上には、いくつか白い柱が立っている。

「この柱は何なんだろう?」

柱はボロボロになっていて、あちこち崩れている。

だが、どの柱も何も支えていなかった。

すると、フオード博士が口を開いた。

「これは、古代のエジプトでもよく作られていた『オペリスク』と同じようなものだろう」

「羽心が持っていたあの鈴はオシリスの鈴※「遊戯王」のモンスター「オペリスクの巨神

兵」「オシリスの天空竜」「ラーの翼神竜」……あ、その、別に、何も考えていませんよ

?

で、何ですか、それは?」

「記念碑だよ。ここが何か神聖な場所である事を示しているんだろうね」

「神聖な場所……」

勇気達は、オペリスクをじつと見つめる。

見た事もない文字のようなものが刻まれている。

「アトランティスの文字だろう。私にも解読はできないが」
「邪鬼と羽心はどこにいるんだ？」

三人は、改めて周りを見た。

「待ちなさい」

ジャネットがそう言うと、階段に誰かが立っている。

それは、狼男だ。

「追ってきたのか？」

勇気が戸惑っていると、狼男はゆっくりと歩きながら、底の床に足をつけた。

その目は、つぶったままだ。

それにも関わらず、何故か勇気達の方に顔を向けた。

「見えてるの力？」

「いえ……」

「傷つけたくないけど……仕方ない」

勇気は落ちていたオベリスクの破片を拾うと、それを遠くに投げた。

—コツン

音が響き、狼男がその方向を見る。

(やっぱり、音に反応した)

勇氣はそう思ったが、狼男はすぐに顔を勇氣達の方へ向けた。

—ガルルルツ

次の瞬間、牙を剥き出しにして吠えようと、勇氣の方へ向かって来た。

「どうして?」

「狼は、嗅覚が鋭いのよ……!」

勇氣達は慌ててその場から離れる。

狼男は、立ち止まると、顔を何度か動かした。

「ソコダ」

次の瞬間、狼男は勇氣の方に顔を向けると、再び走って来た。

「待て!!」

その時、勇氣の目の前に四人の人物がやってきた。

アプリル、ノノ、チェイニー、そして愛衣である。

彼らはジャネットの作戦で、この大陸に忍び込んだのだ。

「間に合いましたね!」

「ここは俺達が食い止める! お前らは先に行つてろ!」

「……うん!」

アプリルは狼男の前に仁王立ちする。

勇気達は頷いた後、大急ぎで先に進んでいった。

「ソコダ」

狼男は高速で行動し、狙いを定め強烈な一撃をアプリルに放とうとした。

「させぬ！」

チエイニーは血液から盾を生成し、身を挺してアプリルを庇った。

ここは狭いので、なかなか動けないが、それでもチエイニーは仲間を守る事ができた。

「♪♪♪♪♪」

「このクリーチャーを召喚します！」

ノノは歌声で狼男の動きを鈍らせ、その隙に愛衣は魔物を召喚するが、

魔物はあらぬ方向に飛んで行ってしまう。

「アプリル様！」

「くそ、かわしやがって！」

アプリルの爪が、狼男を切り裂く。

チエイニーは血液からナイフを作り、狼男に投げつけるが、かわされる。

「そうはいきません！」

しかし、愛衣がカードから魔物を召喚し、飛んできたナイフをキャッチして狼男に突

き刺した。

「♪♪♪♪♪」

ノノの歌は狼男には効果がなく、狼男は愛衣に向かって突進する。

チエイニーは血液で盾を作り、愛衣を庇った。

「無事か、小娘！」

「あああ、アプリル様がよかったです……」

アプリルに守ってもらえず愛衣は泣きそうになる。

明らかに嘘泣きだったが、アプリルは女性の頼みを放っておくわけにはいかない。

「女の子を傷つける奴あ、俺が許さねえ！」

そう言って、アプリルは気合を入れ、狼男を思いつきり殴り、戦闘不能にした。

「……同族を殴るのは気分が良くないけどな」

アプリルが悪態をつくくと、突然、彼の身体がぐらつく。

戦いすぎて、疲れてしまったようだ。

「はあっ……はあっ……」

チエイニー、ノノ、愛衣も疲労から倒れ伏す。

相手が中ボスで、しかもタフだった事が災いしたのだろうか。

「……どうやら、俺達が行けるのはここまでだ」

「後は頼んだぞ……!!」

「何とか逃げられましたね」

「そうだな。……私はこれがある限り、そう簡単には大怪我はしないからね」

フォード博士はそう言うのと、首から下げていたペンダントを勇気に見せた。

「これは？」

「子供の頃、考古学者をしていた人に貰ったんだ。その人は、世界中を旅していてね。

私の住んでいた町にもしばらく調査で滞在していて、仲良くなったんだ。

これは、その人が町を去る時、私にくれたんだ」

ペンダントは、太陽と月と星のマークが刻まれていた。

「これって……」

「これは『奇跡のペンダント』と言って、

持ち主に危機が迫った時、奇跡を起こして助けてくれるらしい。

まあ、本当にそんな力があるとは思っていないがね」

「奇跡のペンダント……」

「勇気くん、どうしてこのマークが？」

「それは分からないけど。フォード博士、これは誰にももらったんですか？」

「私の憧れの考古学者だよ」

フオード博士はそう言いながら、何かを思い出した。

「そう言えば、君を怪狩りに誘った幽霊の少年はキユウと言ったね。」

私が憧れていたその人も同じ名前だったよ」

「えっ？」

「その人の名は、真之喜優というんだ」

「真之……」

勇氣は、目を大きく見開いた。

「それって、僕と同じ苗字です！」

「何だって？」

「もしかして、勇氣クンのお父さんって事かい？」

プーカが尋ねると、勇氣は首を大きく横に振った。

「お父さんは考古学者だったけど、名前は『力』だよ。」

大体、フオード博士が子供の頃に出会ったのなら、何十年も前って事だよな？」

勇氣は、「うーん」と唸った。

そんな勇氣を見て、フオード博士は優しい笑みを見せた。

「よく分からないが、どうやらこれは、君が持っていた方がいいようだね」

「は、はい」

フオード博士は、奇跡のペンダントを勇気に差し出す。勇気は戸惑いながらも、それを受け取った。

「喜優と、キユウ……」

ペンダントをじっと見つめながら、勇気はそう呟いた。その時……。

—ブウウウン

周りに立っているオベリスクが、光り輝いた。

6
— 邪鬼の望み

「……よし、誰にも気づかれないね」

麗羅は邪鬼に気づかれないように、慎重に歩いた。

斥候としての能力は彼女が最も高いため、一行は麗羅を先頭に行っている。

音を立てず、抜き足、差し足、忍び足……麗羅は羽心に、慎重に近づいた。

円形の舞台の中央の床が開き、下から誰かがせり出すように出て来る。

片目を包帯で隠した着物の少年……邪鬼だ。

邪鬼の前に、白い円柱の台も出てきた。

台には、黄金色に輝くパンドラの箱が置かれている。

そして、邪鬼の横に白い柱が現れ、その柱に、ロープで捕らえられた羽心の姿があった。

彼女を助けるために、麗羅達は罅を通り、神殿に潜入したのである。

「よし、待つてな。ウチが解いてやるよ」

麗羅はナイフを取り出し、羽心を縛るロープを慎重に切った。

羽心はボーッと立ったまま、何の反応も示さない。

一歩間違えれば羽心を切る可能性があるため、

麗羅は何にも目をくれず、ただロープを切る事だけに集中する。

麗羅の周りは、静寂が支配していた。

(ウチらはただのコソ泥だけどね……コソ泥にも、誇りがあるんだよ)

そして、麗羅がロープを切り終わると、羽心が目をパチクリさせた。

「大丈夫かい？」

「わ、私……」

羽心は、麗羅の方を見る。

麗羅はすぐにナイフをしまい、羽心に感づかれないようにする。

「あなたが……助けたの？」

「静かにしないと見つかるよ」

「……うん」

羽心は、邪鬼に見つからないように、麗羅と共に脱出した。

邪鬼は麗羅達の姿を見る事なく、羽心もまた、邪鬼に気づかれる事なく勇気のところに戻った。

「……勇者のせいで何度も傷ついたけど、これで、パンドラの箱と、三つのグローブが揃った」

「どういう事だ？」

「さつきから、あたしを勇者って呼ぶなんて、どういう意味よ」

邪鬼は、不気味な笑みを浮かべた。

「君は、星のグローブを拾っただろう？ あれは僕がわざと落としてみたんだ。

君達にこの白鳥羽心を何としても取り返したいという思いをずっと持ち続けてもらうためにね」

「それがどうしたの？」

「ディアーナは邪鬼の前に出て、レイピアを抜き、邪鬼の首元に突きつける。

「あなたの事なんてどうでもいいわ。」

パンドラの箱で世界に災いをもたらそうだなんて、そうはいかないわ！」

ディアーナはレイピアを握りながら、険しい表情で邪鬼を睨む。

すると、邪鬼が刀を抜き、ディアーナの首元に突きつけた。

「だったら君をこうするしかないね」

「待て、邪鬼！ ディアーナを殺すつもりか!？」

勇気は慌ててディアーナに駆け寄った。

「邪魔をするなら、斬ってやる！」

邪鬼はそう言うのと、刀を大きく振りかぶった。

—ガキイイイイイン!

瞬間、邪鬼の刀と勇気の間に、金属音が発生する。

ディアーナのレイピアが盾となり、間一髪、邪鬼の攻撃を防いだのだ。

「貴様は……ジャンヌ・ダルクが召喚した、ラーの勇者……!?!」

「ラーメンだかゆし豆腐だか知らないけど、勇気はあなたに殺させはしないわ!」

「ジャンヌ・ダルク……まさか、ジャンネットって……!」

ディアーナは勇気が首から提げていた奇跡のペンダントを左手で握り締め、強く祈りを捧げた。

「お願い……あたし達を、守って!!」

ディアーナがそう叫んだ瞬間、ペンダントが粉々に砕け散り、光が勢いよく四方に広がる。

「うわあああ!」

「きやあああ!」

勇気達は、眩い光に包まれた。

7 — 父の書齋

「ええつと、僕は、何をしてたんだっけ？」

勇氣は、雲のようなフワフワとした地面の上に立っていた。

空も真つ白で、遮るものは何もなく、どこまでも白い空間が広がっている。自分がいつからここにいるのか、どうしているのか、全く思い出せない。

「だけど、何だかここは居心地がいいなあ」

ずっとボオーツとしていたい。

ここにいれば、嫌な事も辛い事も全部忘れられそうな気がする。

勇氣は、ゆつくりと休みたいと思ひ、その場に座ろうとした。

— 勇氣。

遠くでかすかに声がした。

勇氣は、座るのをやめて、周りを見る。

だが、誰の姿もなかった。

「空耳だったのかな？」

勇氣は、腰を下ろそうとした。

—勇氣。

また、声が聞こえた。

どこかで聞いた事がある。

懐かしい声だ。

「まさか、この声は——！」

勇氣は、反射的に起き上がった。

ベッドの上にいる。

周りを見ると、自分の部屋の中だ。

先程まで、ピラミッド状の建築物の地下にある部屋にいたはずだ。

「それなのに、どうして？」

どうやらベッドで眠っていたらしい。

勇氣は、意味が分からず、混乱してしまった。

（僕は、ディアーナを守ろうとして、邪鬼に斬られそうになって、確かペンダントが光つて……）

勇氣はベッドから出ると、その事を思い出そうとした。

奇跡のペンダントは、ディアーナに握られて粉々に砕け散りながら光り輝いた。

（あのペンダントのおかげで、僕は助かったの……？）

勇氣はそう思いながら、ハツとした。

「そうだ、プーカ、ディアーナ、ジャネットは？」

辺りを見回すが、プーカ、ディアーナ、ジャネットがいない。

「グローブは!？」

勇氣は、自分の手を見た。

だが、太陽のグローブも月のグローブもない。

ポケットを探るが、星のグローブもなくなっていた。

「そんな！」

勇氣は、慌てて部屋を飛び出した。

(どうしてプーカ、ディアーナ、ジャネットがいないの？ グローブはどこに行ったの？)

階段を下りながら、勇氣はますます頭が混乱する。

(僕は、何度も怪狩りをしていて、だけど、邪鬼が羽心を連れ去ってしまった)

もしかして、全て夢だったのだろうか？

その時、勇氣は「あつ」と声を上げた。

「そうだ、アトランティス大陸がある！」

アトランティス大陸が大西洋に浮上した事は、大きなニュースになっていたはずだ。

「お母さん、アトランティス大陸はどうなったの？」

勇気は、リビングに駆け込むと、仕事に出ようとしていた母親に尋ねた。

しかし、母親はキョトンとしている。

「勇気、朝から何を言ってるの？」

「海に謎の大陸が浮上したってテレビのニュースで言ってたでしょ」

「大陸？ そんなの、お母さん聞いた事ないわよ」

「えっ？」

勇気は、慌ててテレビを付けた。

アトランティス大陸の事は、ニュースだけではなく、

ワイドショーでも毎日特集が組まれるほど、大きな話題になっていた。

だが、どの番組を見ても、アトランティス大陸の事は言っていないかった。

「そんなはずない！」

勇気は、リビングに置かれていたタブレット型のパソコンを操作して、

ニュースサイトを確認する。

しかし、どれだけ遡っても、アトランティス大陸の記事は載っていないかった。

「そうだ、フォード博士は？」

勇気はフォード博士の名前を検索した。

すると、外国の大学で、教授をしているという記事が出てきた。

「フオード博士は、アトランティス大陸を探索してないって事？」

どこを探しても、そのような内容は書かれていないようだ。

「勇気、さつきからどうしたの？ 変な夢でも見たの？」

「え、あ、ええつと」

「いいから、ちゃんと朝食を食べるのよ」

母親は呆れながらも、仕事に出かけてしまった。

「全部、夢だったの……？」

勇気は呆然となりながら、朝食の置かれたテーブルの椅子に座った。

「そっか、やっぱり現実なんかじゃないよね」

怪狩りなど、本当にあるわけがない。

「僕はただの小学生だもん……」

勇気は戸惑いながらも、心を落ち着かせようと、パンを食べようとした。

—ピンポン

不意に、玄関のチャイムが鳴った。

「こんな時間に誰だろう？」

母親が忘れ物でもしたのだろうか？

勇気は、パンを置くと、玄関へ向かい、ドアを開けた。

「おはよう、勇気」

外に立っていたのは、羽心だ。

「お、おはよう」

「朝食はもう食べた？ 私はさつき食べたわよ」

「え、あ、そうなんだ」

羽心は、「お邪魔します」と言うのと勝手に家に入り、今日は晴天である事を話した。

(いつも通りの羽心だ……)

勇気は、やはり今まで経験した事は全部夢だったのだと思った。

「ええっと、それで用事は？」

勇気が尋ねると、羽心は立ち止まり、顔を向けた。

「用事？ そんなの決まってるじゃない。……この町を救うんでしょ」

「えっ？」

「もく、朝から寝ぼけてるの？ アトランティス大陸に行った事も忘れちゃったの？」

「それって！」

勇気が驚きの声を上げると、羽心の肩から声がした。

「勇気くん、驚いてる場合じゃないだろ」

「あたし達も帰って来たわ！」

羽心の肩に、羽を生やした小さな男の子がいる。

さらに、彼女の後ろに、二人の少女がいる。

「プーカ！ ディアーナ！ ジャネット！」

勇気は羽心に駆け寄ると、プーカに頬ずりした。

「嬉しいけど、ちよつと痛いゾ」

「ごめん。だけどプーカ、また会えて凄く嬉しいよ！」

「あたしだって、あなたとまた会えたら嬉しいわよ」

「とにかく、皆さん、無事でよかったです」

ディアーナとジャネットが無傷のために微笑む。

勇気は、笑顔で羽心の方に顔を向けた。

「三人とも、無事でよかった！ 僕達、助かったんだね！」

アトランティス大陸での出来事は、夢ではない。

だが、勇気は首を捻った。

「だけど、一体どうやって見捨里市に帰ってきたの？」

「それは、私もよく分からないけど」

羽心の話によると、気づくと自分の家のベッドの上に戻っていたらしい。

「オイラも、羽心チャンの傍にいたんだ」

「多分、勇者の力だと思っけど」

「私達は選ばれた人ですしね」

羽心、プーカ、ディアーナ、ジャネットも勇気と同じように、

アトランティス大陸での出来事を覚えていたが、

他の人達は大陸があつた事すら覚えていないらしい。

「つまり、僕達だけが覚えてるって事？」

「そりゃ、あたし達以外は知らざる者だもの」
アンノウンマン

「そうだ、邪鬼はどうなったの？」

勇気は、その事が気がかりだった。

すると、羽心は険しい顔になった。

「多分、逃げたと思っわ」

羽心は、ペンダントが砕け散つた瞬間、邪鬼がパンドラの箱を持って、

刀で×印状の罅を作つて逃げるのを見たのだという。

「邪鬼は、きつとまた何かをしてくるはずよ」

「そうですね……パンドラの箱は彼の手の中ですし……」

だからこそ、羽心は「この町を救うんでしょ」と勇気に言つたのだ。

「勇気くん、これヲ」

「それは……」

プーカは、ポーチからある物を取り出した。

太陽と月と星のグローブだ。

「あの時、とっさに取り返したんだ」

プーカは光の中で、あらかじめグローブを取っていたのだ。

「流石、プーカね」

「オイラ、妖精族の王子だからネ」

羽心は、星のグローブを手に取ると、勇気を見た。

「勇気、戦いはまだ終わってないわよ」

「あ、ああ」

勇気は、太陽と月のグローブを手に取る。

「だけど、邪鬼はまた、羽心と三つのグローブを奪いに来るはずだよね？」

奇跡のペンダントは、もうない。

勇気は、邪鬼が襲いかかってきても、それを防げる自信がなかった。

（そりゃ、勇気も羽心も特別な力は持つてるけど、そもそも怪とまともにやり合えないもの）

(だから私が勇者を召喚したのです)

ディアーナとジャネットは何としてでも勇気を守ろうと思った。

その時……。

「君達なら、きつとやれる」

どこからか声がした。

それは、先程見た夢の中で聞こえた、懐かしい声だ。

「まさか!」

勇気は周りを見る。

だが、羽心、プーカ、ディアーナ、ジャネットしかない。

「どうしたの、勇気?」

「今の声、あの声は……」

勇気は、リビングの扉を見た。

「そうだ……!」

次の瞬間、勇気は扉を開け、廊下に出た。

「あの声は!」

一番奥にある半分地下室になった短い階段の前に立つ。

そこは、父親の書斎だ。

「きつとこの中に……」

勇気はドアを開け、中に飛び込んだ。

すると、部屋の窓際に、一人の少年が立っていた。

赤髪に鋭い目をした少年。

勇気は、少年の事を知っている。

「やつと、会えたね」

「キユウ！」

勇気が一番会いたかった大切な人だ。

「キユウ！ 夢じゃないよね？」

勇気は慌てて頬をつねる。

「いたたた、夢じゃない！」

勇気は笑顔でそう言いながらも、ふと、フォード博士が言った言葉を思い出した。

「キユウ、君は……」

「ああ、僕は、君の祖父、真之喜優だ」

キユウは、優しく微笑むと、自分の身体を見た。

「どうやら、奇跡のペンダントのおかげで、僕はこの世界に戻って来る事ができたようだね」

奇跡のペンダントは、持ち主に危機が迫った時、奇跡を起こして助けてくれる。

それは、あの場から脱出するだけではなかったのだ。

「キユウ、ううん、ええつと、お、おじいちゃん」

「ははは、キユウのままでもいいよ。それよりも」

キユウは、真剣な表情で、勇気をじっと見つめた。

「今度こそ邪鬼を止めよう。僕、そして勇気、君にも、彼を止めなければならぬ理由がある」

「理由？」

「邪鬼の本名は、真之力である」

「僕の、お父さん……？」

キユウの言葉に、勇気は呆然となるのだった。

episode 7 — Last Battle (

邪鬼を追え！

1 — 聖女と勇者と邪鬼の行方

「ジャンヌ・ダルク……邪鬼は最後に、そう言ってた……。」

ジャンネットは、本当にジャンヌ・ダルクなんだね？」

「……とうとうバレてしまいましたね」

勇気は、父親——真之力の本に、彼女が書いてあったのを思い出す。

ジャンヌ・ダルク（1412～1431）は、フランスのドンレミ村で生まれた羊飼いである。

14～15世紀、イギリスとフランスで長きに渡る戦争「百年戦争」が行われていた。戦争後期、ジャンヌ・ダルクが挙兵し、オルレアンを含め劣勢のフランスを救った。だが、イギリスの裏切りにより魔女として火刑にされた。

後に彼女が聖女として祀られる事になったのは、遠い未来の話である。

「ジャンネットがそんな素晴らしい人だなんて、全然知らなかったよ。」

それで、話は変わるけど、ラーの勇者って何？」

「妖精族に伝わる伝承を聞いたでしょ？ 実は、アレには続きがあつたのよね」

「ディアーナは、コテイングリーの森で聞いた、あの伝承をもう一度語った。」

かつて、「異能」と呼ばれる力を持った人間のある家族が、

妖精族の王からいくつかのグローブをもらった。

彼らはそのグローブを嵌め、怪と人間に災いをなす邪悪な者と戦い、

そしてこの世界を救った。

「……までは分かるけど、その続きって？」

「えっとね……」

邪悪な者と戦つたのは、家族だけではなかった。

異世界より降臨せし太陽の加護を受けた勇者も、人間の家族と共に邪悪な者を打ち

払った。

ある者は融合の力、ある者は共鳴の力を使った。

そして遠い未来、両手に剣と魔法を携えた勇者が、聖女によって降臨するだろう。

「その勇者が、邪鬼の言っていた『ラーの勇者』なんだね。」

「両手の剣と魔法……ディアーナとそっくりだ」

「現代に召喚される事はあり得ないと思つたけど、あつたのよね」

そのせいで能力は元の世界より落ちただけで、とディアーナはぼやいた。

「そして……キユウが、僕のおじいちゃん、邪鬼が、お父さん……」

勇気はついにキユウと邪鬼の正体を知った。

そんな事は、信じられなかった。

もし、父親だとしたら、何故人々を苦しめようとしているのだろうか？

そこへ、羽心とプーカがやって来た。

先程、勇気は何かを思い出して突然駆け出した。

二人はそれが気になって追いかけて来たのだ。

「勇気、どうしたの?」

羽心は呆然としている勇気が気になる。

と、書斎の窓際に、一人の少年が立っている事に気づいた。

「ええっと、あの人は……」

赤髪に、鋭い目をした少年。

羽心は、その少年を見てハッとす。

「もしかして、キユウさん?」

その問いに、キユウは優しい笑みを浮かべながら、小さく頷いた。

「こうやって会うのは初めてだね。勇気の祖父の真之喜優だよ」

キユウは、奇跡のペンダントのおかげで復活できた事を羽心に話す。

「そうなのね。よかった……。私、あんな事をして、ずっと悩んでいたの」

羽心は、邪鬼に騙され、幽霊を消滅させる事ができる「オシリスの鈴」を振ってしまつた。

そのせいで、キユウは消えてしまったのだ。

「あれは君のせいじゃない。だから気にしなくていいよ」

「キユウさん……」

微笑むキユウに、羽心は何だか救われたような気がした。

「流石、勇気のおじいちゃんね。え？ おじいちゃん??」

キユウは、自分の正体が勇気の祖父・真之喜優である事を改めて説明した。

その言葉の意味によく気付いた羽心は、目をパチクリさせる。

「つまりキユウさんは、勇気のおじいちゃんの幽霊って事？」

「その通り。まあ、見た目は君達と変わらない少年の姿をしているけどね」

キユウはそう言いながら、ディアーナの肩の上辺りに目をやった。

「ところで、君は誰なんだい？」

そこには、プーカが浮かんでいた。

「オイラはプーカ。妖精族の王子だゾ」

「私はジャネット・デイ・アルクと申します」

「キユウがいなくなつた後、あたしと同じように勇気の仲間になつたの」
「デイアーナは、勇気達に連れられて、様々な時代で怪狩りをした事や、
邪鬼にパンドラの箱を奪われ、

自身が海と言つたアトランティス大陸の神殿に行った事などを話した。

上妖精説明中……

「そうか、そんな事があつたんだね」

「まあ、オイラが大活躍して、何とかなつたけどネ」

「私ですよ」

「ありがとう、流石、王子に聖女。とっても頼りになるんだね」

「いやア。えへへ」

「どういたしまして」

プーカはキユウに褒められ、嬉しそうに笑つた。

ジャネットはキユウに丁寧にお辞儀をした。

「だけど、パンドラの箱が邪鬼の手に渡つてしまつたとはね」

「ええ……」

キユウとジャネットは、苦々しい表情を浮かべた。

「キユウさん、あの箱の事、知ってるの？」

「ああ、あれは危険な物だ。今度こそ取り返さないと。恐らく、今も邪鬼が持っているだろう」

キユウは、勇気とディアーナを見た。

「勇気、月のグローブを渡すんだ。そして、ディアーナにはこのカードを渡す」

「えっ？」

「早くグローブを」

「え、あ、ああ」

勇気は戸惑いながらも、ポケットから月のグローブを取り出し、差し出した。

キユウは、白い渦を巻いた光が描かれた緑のカードをディアーナに渡す。

「これは……？」

「いざという時に役に立つ時が来る。勇気、羽心……君達もグローブを嵌めて。

靴も用意するんだよ」

キユウはグローブを左手に嵌めると、傍の壁の前にかざし、呪文を唱えた。

「カオスゲート
時空貫通」

壁に光が渦巻き、螺旋状に風が舞う。

その渦が大きくなって、壁に大きな光り輝く渦ができる。

時のトンネルだ。

「さあ、行こう」

「はい！」

キユウとジャネットが、光の渦の中に消えた。

「あ、ちよつと！」

勇気には、訳が分からないようだ。

「どこに行くつもりなんだよ??」

「勇気、よく分からないけど、ここにいっても仕方がないわ」

「そうだネ。行くしかないみたいだゾ」

「あたしは勇者だから、前に進むしかないわ」

「あ、ああ」

勇気と羽心は、靴を用意すると、それぞれ太陽と星のグローブを嵌める。

ディアーナも、レイピアとダガー、冒険者セットで武装し、

キユウからもらったカードをベルトポーチにしまった。

プーカも、羽心の肩にしがみついた。

四人は、キユウとジャネットを追って、光の渦の中に飛び込んだ。

「んんんん！」

光のトンネルの中を飛んでいく。

それでも、勇氣は耐え続ける。

目が回り、頭が回り、何度飛んでも慣れる事はない。

やがて、光のトンネルの奥に、何かが見えてきた。

—スタツ

時のトンネルから出た勇氣達は、地面に着地した。

「(ハハ)は？」

周りを木々に囲まれた森の中のようだ。

森の向こうに、湖が見えている。

「どこかで見たような……」

勇氣がそう思っていると、前方で宙に浮いているキユウが口を開いた。

「ここは、1934年のネス湖だよ」

「えええ?!」

勇氣は驚き声を上げる。

だがそれよりも大きな声を上げたのは、羽心だった。

「ネス湖って、あのネツシー伝説があるところよね!」

「……うるさいわねえ」

羽心は草木を掻き分け、湖を凝視する。

「ディアーナとジャネットは呆れている。」

「ネツシーは癡猛な奴だぞ。気を付けるんだ」

「食べられても私は責任を取りませんよ？ 何しろ最上級未界域のネツシーはレベル7モンスター。ですからね」

プーカは羽心の肩に強くしがみつき、警戒した。

「ジャネットは自己責任だ、と羽心に警告した。」

そんな羽心達を、キユウは不思議そうに見つめた。

「プーカはともかく、羽心ちゃんまでどうやって時のトンネルを？」

「そう言いながらふと、キユウは羽心の嵌めているグローブを見た。」

「それは、もしかして星のグローブじゃ？」

「そっか、さっき話した時、このグローブの事は言ってなかったわね」

「星のグローブは妖精族の王様が作った物で、オイラが持ってたんだ」

羽心とプーカは、キユウにその事を詳しく話した。

少女&妖精説明中……

「なるほど、プーカは妖精だものね。まさか、グローブが三つ揃うなんて」

「キユウ、星のグローブの事も知ってたの？」

「ああ、どこにあるかまでは知らなかったけどね。てつきり邪鬼が持っていると思っ
ていたよ」

キユウは、星のグローブを見て、笑みを浮かべた。

「太陽と月、そして星。三つのグローブと、ラーの勇者の力があれば、

邪鬼を見つけるだけではなく、倒す事ができる」

「久しぶりの赤文字ね」

「え、そうなの？」

「オイラ、そんな事知らないゾ？」

「大昔の事だからね。妖精族の王様は、邪鬼を倒すために三つのグローブを作ったんだ」

「大昔？ それってどういう事？」

「あたしがいた時代かしら。」

でも、あたしはまだ、そんなに生きてないし、ジャネットは600年くらい前の人だ
し……」

勇気はその言葉に引っかけかり、ディアーナは推理する。

まるで、大昔にも邪鬼がいたような言い方だったのだ。

だが、キユウはそれについて何も答えなかった。

代わりに、湖の方に顔を向けると、目を瞑った。

意識を集中させているようだ。

やがて、ゆっくりと目を開く。

「ここにはいないようだね」

「いないって、ネツシーの事？ それはもう、僕達が倒したよね？」

勇気はかつてキユウとディアーナと共に、

時のトンネルを使ってこの場所に来て、ネツシーを倒したのだ。

すると、キユウは首を横に振った。

「ネツシーじゃないよ。邪鬼だ」

「邪鬼？」

「邪鬼は、奇跡のペンダントの光によって、大きなダメージを受けた。

その傷を回復するために、怪のいた時代に逃げているんだ。今が倒せるチャンスなん

だ」

キユウは、周りを見回す。

「ここにも邪鬼の気配がかすかに残ってる。だけど、残念ながら既に逃げた後のようだね」

邪鬼は、傷を回復させながら、様々な時代を移動しているらしい。

キユウは浮かびながら、近くの木に近づいた。

「次の時代に行こう」

キユウはグローブを嵌めた左手をかざし、呪文を唱えた。

空間に、時のトンネルができる。

光の渦の中に、キユウとジャネットは勢いよく飛び込んだ。

「ちよつと、キユウー！」

聞きたい事が山ほどあるが、キユウは止まってくれない。

勇気達は再びキユウとジャネットを追うように、時のトンネルに飛び込んだ。

ディアーナは時のトンネルの中で、キユウが渡したカードを思い出そうとした。すると、彼女の頭の中に、何かが浮かび上がった。

(もしかして、あのカード……世界で一番上手く融合を使いこなしたとされる、あの子が使ったカードじゃ……)

2 — 時のトンネル

勇氣達は、キユウと共に、次の時代にやって来た。

降り立ったのは、平安時代の町だ。

以前、鶴と戦った場所だ。

「……既に、邪鬼は移動した後のようだね」

キユウは周りを見ながら言うと、再び左手をかざし、呪文を唱えた。
時のトンネルが現れる。

「次の時代に行くよ」

「はい」

キユウとジャネットは、そのまま光の中に飛び込もうとする。

だがそんなキユウを、勇氣が呼び止めた。

「キユウ、ちよつと待って！」

「ごめん、何してるの？」

勇氣とディアーナは、キユウの傍に歩み寄った。

「ちゃんと説明して。何がどうなってるかさっぱり分からないよ」

「今は時間がないんだ。邪鬼を捜し出して倒さないと」

「だから、どうして邪鬼がお父さんなんだよ！」

「そうよ。もし本当なら、あんな事はしないとと思うわ」

勇氣は声を荒らげ、ディアーナは冷静に言う。

「勇氣、ディアーナさん、どういう事？」

「意味が分かりません……」

羽心、プーカ、ジャネットは、勇氣の言葉に戸惑う。

勇氣とディアーナはそんな三人にキユウに言われた事を話した。

少年&上妖精説明中……

「そんな……」

勇氣の父・力は、10年前、出張中に事故に遭って死んだと言われていた。

それが何故か、邪鬼になっていたのだ。

「まさか、キユウさんと同じ幽霊って事？」

事故に遭って死んで、幽霊になったのかもしれない。

だが、キユウは首を小さく横に振った。

「真之力は死亡していない」

「生きてたって事？ だけど、どうして邪鬼になんか??」

「邪鬼は、力であつて、力じゃないんだ」

キユウは悔しそうな表情で言う。

「意味が分からないゾ」

「う、うん」

羽心達はますます戸惑う。

「とにかく、次の時代へ行こう」

キユウは、勇気とディアーナの方を見る。

「力の事も、ちゃんと話すよ」

キユウはそう言うのと、時のトンネルに飛び込んだ。

「勇気……」

羽心とジヤネットは心配そうに勇気を見つめる。

勇気は、父親の事でずっと混乱しているようだ。

そんな彼の傍に、ディアーナがゆっくりと近づき、彼の頬を叩こうとしたが、

勇気は慌ててディアーナから離れる。

「これ以上、僕を叩かないで。もう……平気だから……」

そう言いながらも、勇気の表情には覇気がなかった。

「勇気、キユウさんはちゃんと話してくれるって言ったでしょ。だから、私達も移動しま

しよう」

邪鬼が何者であれ、早く見つけ出さなければならぬ。

「わ、分かったよ」

勇氣は、羽心達と共に、キユウを追った。

時のトンネルを抜けて、やって来たのは、砂浜だった。

遠くに小さな村が見える。

勇氣達は、この場所にも見覚えがある。

人魚のセイレがいた、中世のヨーロッパだ。

キユウは宙に浮かびながら、目を瞑り、意識を集中させていた。

そして、目を開けると、首を小さく横に振った。

「残念ながら、邪鬼は逃げた後のようだね」

ここにも、邪鬼は既にないないようだ。

キユウは、フウと小さく息を吐くと、勇氣達の方を見た。

「君達は、邪鬼についてどう思っているかな？」

「どう思うって、そりゃあ悪い奴だと思っゾ」

「そうね。色んな時代に行って、怪達に人間を襲わせようとしてるんだもんね」

「私は分かりません」

「あたしも分からないけど……あのカードを渡したのは、何か理由があるからでしょ？」
「邪鬼は色んな時代に行ける。」

僕達が時のトンネルを使うように、邪鬼も時のトンネルを利用してゐるんだ」
キユウは、その渦をじつと見つめた。

「時のトンネルを?？」

勇気は、邪鬼が刀で空間を斬り、黒い罅を生み出すところを思い出した。

「もしかしてあの罅って」

罅は、見捨里市に繋がっている。

あの罅のせいで、町で何度も怪現象が起きていた。

「勇気、あの罅は、僕達が使っている時のトンネルと同じものなんだよ」

キユウは、傍にある岩の前に行くと、グローブを嵌めた左手をかざし、呪文を唱えた。

「カオス、ゲート
時空貫通」

螺旋状に風が舞い、岩肌に光の渦が現れる。

キユウは、その渦をじつと見つめた。

「時のトンネルは、あらゆる時代のあらゆる場所に繋がっている。」

そして邪鬼は、この時のトンネルの中で生まれたんだ」

「生まれた?？」

「ああ。邪鬼は、人々の負の感情から生まれた『怪』なんだ」
「そんな！」

（あいつの正体は人間の心の闇だったのね。

ネットシーヤツチノコの時に見た、人々の持っている欲望は、間違っただけじゃなかったわ）
勇氣達は、その事実を驚く。

ディアーナとジャネットは、胸に手を当てていた。

「だけど、邪鬼は勇氣のお父さんなのよね？ どうして時のトンネルの中で生まれた怪なの??」

羽心は、理解できず戸惑う。

プーカも首を何度も捻り、意味が分かっていないようだ。

だがその時、勇氣が「あつ」と声を漏らした。

「キユウは、邪鬼がお父さんであって、お父さんじゃないって言ってたよね？」

それって、もしかして、お父さんは、怪である邪鬼に身体を乗っ取られているって事じゃ?」

「その通り」

キユウは、空を見つめた。

「全ては10年前、力がある遺跡を調査していた時に起きた悲劇が原因なんだ」

10年前。

考古学者である力は、エジプトで遺跡の調査をしていた。

その中で、力はある壺を見つけた。

壺には、太陽と月、そして星のマークが刻まれていたのだという。

力はその壺を掘り出して、詳しく調べようと思った。

だがその時、事件が起きた。

掘り出す際に、誤って壺の蓋が開いてしまったのだ。

すると、中から黒い煙が飛び出してきた。

そしてその煙は、傍にいた力にまとわりついた。

「それが邪鬼だったんだ。時のトンネルは、あらゆる時代に繋がっている。

どの時代にも、多くの人達が住んでいる。彼らは、皆が幸せというわけじゃない。

誰かに対して、恨み、妬み、嫉みといった負の感情を抱く人達もいる。

その負の感情が時のトンネルの中に溜まっていき、やがて『邪鬼』という怪を生み出

したんだ」

「人々が生み出した、怪……」

「あたし達を感じた嫌な気は間違ってたのね」

勇気達は、そんな怪が存在する事に驚き、ディアーナは唇をぐつと噛み締めた。

「邪鬼は人間を憎み、人々を恐怖に陥れようと考えている。

だけど、単体では人間界に存在する事ができないんだ。だから、力の身体を利用した結果、邪鬼は、勇気達の知っている姿になり、人間界で活動できるようになった。

「そんな事があったのね。まさに、勇気のお父さんであってお父さんじゃないわね」

「くうう、人の身体を利用するなんて、オイラ、ますます邪鬼に腹が立ってきたゾ」

「それでも、ラーの勇者として、あたしは邪鬼を止めなきゃいけないのよ」
「私が見初めましたからね」

羽心とプーカは、キユウの話を聞き、苛立ちを感じていた。

一方、勇気、ディアーナ、ジャネットは真剣な表情で、キユウを見た。

「だけど、本当にそんな邪鬼を倒す事ができるの？」

キユウは、三つのグローブとラーの勇者の力があれば、邪鬼を倒せると言っていたのだ。

「グローブとラーの勇者の力があれば、必ず倒せる。

大昔、アトランティスの人達が実際に使って、邪鬼を封じ込めたからね」

「それって邪鬼を追って行った、あの大陸よね？」

「私達が行った時は、遺跡だけだったけど」

「大昔……そうか、大昔、あの大陸に高度な文明があった時の話って事か」

「ええええ？」

アトランティスに高度な文明があったって言われているのは、確か、1万年以上も前よ？」

「そう、その時代に、邪鬼は一度、この世界に現れたんだ」

「何ですって……」

キユウの言葉に、勇気達は驚く。

邪鬼は、当時の人々を恐怖に陥れようとしたという。

しかし、アトランティス文明の人々が、妖精族と組み、三つのグローブを作った。

そのグローブこそが、邪鬼を倒す武器だったのだ。

そして、アトランティスの民が異世界の人物をラーの勇者として呼び出し、彼らと共に戦った。

「邪鬼は、ラーの勇者と三つのグローブによって倒され、封印されたんだ」

「そして、今のラーの勇者が、あたし……」

「もしかして、その封印が、お父さんが開けてしまった壺って事？」

キユウは、「ああ」と答えた。

「そうか、だから壺にはグローブと同じマークが」

「アトランティスの人達は、いつか再び邪鬼が現れる事があるかもしれないと思い、

グローブを仲間達で代々保管する事にしたんだよ。

邪鬼にバレないように、あらかじめ、世間の知名度が低い英霊を召喚して、その英霊にラーの勇者を召喚する準備をした後にね」

「それって私の事ですか？」

「ああ。ジャンヌ・ダルクなら妥当だと思つて。結局、邪鬼にはバレちゃったけどね」

キユウは、勇気と羽心が嵌めているグローブと、ディアーナとジャネットを見つめた。ジャネットは、キユウに馬鹿にされたような気がして、少しむつとした。

「そして君達は、僕と同じようにそのグローブを使える。」

それはつまり、特別な力を持つアトランティスの人達の末裔という事なんだ」

「僕達が……」

「なるほど。だから、羽心に特殊能力があつたのね」

勇気は戸惑い、ディアーナは顎に手を置いた。

「私も、そうだったんだ……」

羽心も驚く。

すると、羽心は「あつ」と声を上げた。

「そう言えば、私、キユウさんがずつと見えてるんだけど？」

以前、勇気の傍にキユウがいた時、その姿は全く見えていなかったのだ。

「君が勇氣と同じように特別な力を發揮できるようになったからだよ。

君達の話によれば、サラという女の子の城に、パンドラの箱があったんだよね。

恐らく彼女の一族も、アトランティス人の末裔なんだろう。

邪鬼は1万年以上前、アトランティス大陸の神殿にあったあれを奪おうとしていたからね」

「そうだったんだ」

「一つ聞くけど、結局あの黒い鈴は何だったの?」

「ラーの勇者が使った武器の一つさ」

「それで、邪鬼はあの箱をどうするつもりなの??」

勇氣が身を乗り出して尋ねる。

しかし、キユウは首を小さく横に振った。

「どういう風にするのかは残念ながら分からない。

だけど、三つのグローブとパンドラの箱を手に入れようとしている事だけは確かだ。

アトランティス人達との戦いの時も、同じ事をしようとしていたと言われているからね」

「そんな昔から狙ってたなんて……」

勇氣達は恐ろしく思うが、同時に、自分達こそが、邪鬼に対抗できる唯一の存在だと

気づいた。

「じゃあ、キユウ。あなたがあたしにくれたこのカードは、何？」

そう言つて、ディアーナはキユウにカードを見せた。

「だから、そのカードはしまつてと言つただろ」

「そうじゃなくて、あたしはこのカードに見覚えがあるの。キユウ、分かる？」

「……君以外には内緒だからね。このカードは、『超融合』という、君より前のラーの勇者が使つたカードだ」

キユウは小声でディアーナに話した。

「えっと、超融合つて……？」

「ありとあらゆるものを、何にも邪魔されずに融合できる、最高の融合カードだ。」

……まあ、出さずに融合できる方が強いんだけどね所謂「デツキ融合」のブリリアント・フュージョンとフュージョン・デステニーが制限カードなのに対し、超融合は準制限カード。」

「……何でも融合できるカード……」

ディアーナはしげしげと超融合のカードを見やる。

もしかしたら、このカードを使えば、力から邪鬼を引き剥がせるかもしれない。

ディアーナは、超融合のカードをベルトポーチにしまうと、勇気に向き直る。

「行きましょう、勇気、キユウ、羽心、プーカ、ジャネット。力を救うために！」
勇気達は、邪鬼を捜し出すために、次の時代へ行く事にした。

3 — 怪の復讐

「ところで、6つ目の時代かあ」

勇氣達は、時のトンネルを使って様々な時代に行つた。

しかし、邪鬼は逃げた後だった。

勇氣達はさらに移動し、中世の東ヨーロッパ、ドラキュラ伯爵の城にやって来ていた。ここにも、邪鬼の気配がかすかにあつた。

だが、既に違う時代に逃げた後のようだ。

「ほんとに、邪鬼は見つかるのかしら？」

「……」

「自己嫌悪、ですな。ディアーナ」

「ちよつと休憩しよう。オイラ、時のトンネルを何度も通つたせいでトンネル酔いしてきたヨ」

「トンネル酔いって」

勇氣はプーカの言葉に呆れながらも、キユウの方を見た。

ジャネットはディアーナを冷たい目で見ている。

「だけど、怪がいなくても時のトンネルに入れるようになってよかったよ」

キユウは、かすかでも怪の気配があれば、

その時代に繋がる時のトンネルの入り口を作る事ができるのだ。

「僕は、書齋でしか作る事ができないからね」

すると、そんな勇気を見て、キユウは優しい表情になった。

「別に君がトンネルを作る必要はないよ。人には役割というものがあるからね。

僕にだって、できない事はたくさんある。

例えば、幽霊である僕には、くるみパンを美味しそうに食べる事はできないからね。

その分、勇者と聖女は何でもできるけど」

「いえ、私は……」

「確かにあたしは勇者なんだけど」

キユウは、ちらりと横に目をやり、隠れてくるみパンを食べていたプーカを見た。

「い、いやア。腹が減っては戦はできぬって言うだろウ」

「プーカ、さつきもくるみパン食べてたじゃない。これで確か三つ目よね？」

「え、いや、ははは、つつい美味しくテ」

反省しながらも、プーカは三つ目のくるみパンの残りを、しっかりと口の中に入れる。

それを見て、勇気、羽心、ディアーナ、ジャネットは笑った。

「いいチームだね」

キユウが、ふと呟いた。

「勇気の前から消える時、凄く不安だったんだ。勇気を一人にしてしまうと思ってる。だけど、羽心ちゃん、プーカ、ディアーナ、ジャネットがいてくれて、ほんとはよかつた」

キユウはホツとして微笑む。

勇気は、羽心、プーカ、ディアーナ、ジャネットの方を見た。

「僕もそう思うよ。頼もしい仲間が四人もいてくれて凄く心強いもん」

「勇気」

「うんうん、嬉しいゾ」

「ありがとう」

「ありがとうございます。では、次の時代に行きましょう」

「トンネル酔いするから休憩するんだよね？」

「勇気くん、何を言ってるんだ。邪鬼を早く捕まえなきゃいけないだろ」

「まったく」

プーカはどんな時でもやんちゃで、調子がいい。

勇気は、そんなプーカに呆れながらも、キユウが作った新しい時のトンネルに入った。

そして、トンネルを出て、次の時代に到着した。

瞬間……。

「えっ」

勇気は、全身の毛が逆立つような気配に覆われた。

「うっ……ああ……！」

ダイアナとジャネットはその気に当てられ、不調になってしまう。

そこは、薄暗い洞窟の中だ。

岩肌には、松明が取り付けられていて、炎が揺らいでいる。

どす黒い邪悪な空気が、辺りに漂っている。

「これは……」

勇気が戸惑っていると、時のトンネルから出てきたキユウが口を開いた。

「邪鬼の気配だ」

去った後ではない。

この洞窟のどこかに、邪鬼がいる。

「ついに見つけたんだね」

勇気は身構える。

羽心とプーカも険しい表情に変わった。

「うう……」

「確か、ここは」

勇氣は、洞窟を見て、ここがどこかすぐに気づいた。

ある意味、勇氣にとつて、最も思い出深い場所と言つても過言ではない。

「ここは、僕が初めて怪狩りでやって来た場所……」

勇氣達は、メデューサがいた洞窟にやって来たのだ。

「メデューサは既にいない。邪鬼は、この洞窟のどこかに隠れているはずだ」

「キユウ、急ごう！」

「そうですね……！」

逃げられてしまったら、元も子もない。

勇氣達は、邪鬼に気づかれないように、慎重に洞窟の中を進み始めた。

ディアーナとジャネットは不調ながらも、何とか彼らについていった。

「だけど、何も無いわね」

洞窟の中を進みながら、羽心は周りを見回した。

岩肌には松明が取り付けられているが、他には何も無い。

ディアーナは、暗視があるので時に問題ない。

「メデューサが棲んでたつて言うから、もっと恐ろしい場所かと思ったけど」

「倒したからリセットされたんだよ」

勇気は、メデューサがいた頃の光景を思い出した。

洞窟の中には、至るところに、鎧を着て剣を持った人達の石像が転がっていた。

彼らは皆、元は人間で、メデューサと目が合い、石像になってしまっていたのだ。

あの頃は、その光景に怯えていた。

しかし、今はそれを見ても逃げ出したりはしないだろう。

恐怖よりも、怪を倒さなければという使命感の方が強くなっていたのだ。

「邪鬼を必ず倒さないと」

力を助けるため、そして邪鬼の野望を食い止め、人々を救うため。

勇気は、真っ直ぐ前を向いて、洞窟の中を進んで行った。

—ゴトツ

「……？」

その時、背後で音がした。

ディアーナとジャネットは、それが何なのか分からなかった。

先頭を歩いていた勇気は、立ち止まると後ろを見た。

しかし、何もない。

「今、音がしたよね？」

「え、ええ」

羽心とプーカも後ろを見て警戒する。

勇気は、身構えながら、音がした方へと近づいた。

「勇気、気をつけるんだよ」

「ああ、分かっている」

キウウも浮かびながら、勇気の背後に続く。

プーカ、ダイアーナ、ジャネットもそんな二人の後をついていく。

「私も……」

羽心は緊張しながら、勇気達を追いかけようと思った。

ーゴトツ

また音がした。

聞こえてきたのは、先程とは反対側の場所だ。

「何なの……?」

それは低くて鋭い小さな音で、一番後ろにいる羽心しか気づかなかったようだ。

羽心は戸惑いながら、音がした方に顔を向ける。

すると、地面の真ん中に、レンガぐらいの石が落ちていた。

「あんなの、さつきは落ちてなかったわよね……?」

地面だけではなく、壁も天井も岩でゴツゴツしている。

天井から落ちてきたのだろうか？

羽心は何気なく、天井を見上げる。

「あつー！」

天井に、大きな物体が張り付いている。

その物体が、勢いよく地面に着地した。

—ドオオオン

「きゃー！」

羽心は、その物体を避けようと、後ろに下がる。

「羽心ー！」

そんな羽心の元に、ディアーナとプーカが慌てて飛んで行った。

「あれはー！」

勇気は、天井から着地した物体を見て、声を上げた。

—ガールルツ

「ワーウルフ人狼!？」

「海で倒したはずなのに……!？」

アトランティス大陸の神殿にいた、あの狼男だ。

その時、周りの壁が大きく揺れた。

狼男が天井から飛び降りたせいで、壁が崩れ出したのだ。

「勇気！」

ドドドドオオン

次の瞬間、勇気、キユウ、ジャネットの傍の壁が崩れ落ち、

その瓦礫で羽心、プーカ、デイアーナのいる場所が見えなくなってしまった。

「羽心、プーカ、デイアーナ！」

勇気は、瓦礫の向こうにいる羽心達に向かって叫ぶ。

「勇気！」

「オイラ達は無事だゾ」

「心配しないでよね」

三人は大丈夫なようだ。

しかし、ガルルルと声がした。

彼らの前には、狼男がいるのだ。

「勇気、ジャネット、こっつちだ！」

キユウは、通路の曲がり角を指差した。

「勇気とジャネットが羽心達の元へ行くためには、他の道を探すしかない。」

「ああ！ 羽心、プーカ、すぐに行くから！」

「ラーの勇者よ、今度こそ止めてください！」

勇気とジャネットは、キユウと共に、通路を駆け出した。

一方、瓦礫の向こう側。

狼男は、羽心、プーカ、ディアーナを睨みつけた。

「フン 来ル前ニ コイツヲ倒シテヤル」

だが、羽心、プーカ、ディアーナはそんな狼男を睨み返した。

「私達だけでも、戦えるんだから！」

4 — 黒い煙

「狼男は、僕達にかなり恨みを持っているはずだ」

「まあ、乱入しましたしね……」

勇氣は通路を走りながら、神殿で戦った際、狼男が逃げた事をキユウに話した。

ジャネットは、鎧を着ているために動きが鈍く、不調なので遅れて走っていた。

「狼男か。単純な性格だけど、かなり凶暴な怪だね」

「ああ、だけど羽心達なら、きっと戦えるはずだ」

勇氣とジャネットは、全力で洞窟の中を走り続けた。

その頃。

羽心、プーカ、ダイアーナは、狼男と対峙していた。

先程いた通路から移動し、部屋のような広い空間にいる。

「プーカに聞いたわよ。あなた、この前、逃げ出したんでしょ？」

羽心は、先程勇氣の家を訪れる前、

プーカからアトランティスの神殿で何があったのか詳しく聞いていた。

狼男は、邪鬼の役に立ちたいと思い、勇氣達を襲った。

鋭い嗅覚が武器だったが、プーカが納豆を出した事により、

その強烈な臭いを嗅いで逃げてしまい、さらに、乱入したアプリル達が退けたのだ。

「今度も、どうせすぐやられちゃうわよ！」

「そうだゾ。オイラ達を舐めるなヨ！」

「あたしはラーの勇者だから！」

羽心、プーカ、ディアーナは、強気な態度でそう言った。

「ウルサイツ！」

狼男は、床を叩くように踏む。

ドンという音が部屋中に響いた。

「俺ハモウ負けナイ！ 今度こそ アノ方ノ 役に立ツンダアア！」

狼男は、声を荒らげ、周りの壁を殴る。

「そうはいかないわよ！」

羽心とプーカは慌てて後ろに下がりに、

ディアーナはレイピアで狼男を突き刺した後に素早く後ろに下がった。

その時、ふと、狼男の方を見た。

「えっ」

狼男の身体から、黒い煙が漏れ出している。

「どういふ事？」

黒い煙は、怪を倒した時に出るものだ。

狼男は、ディアーナの攻撃こそあれ、まだ体力はそんなに減っていないはずだ。

ーガルルルツ

狼男は興奮しながら、口からも黒い煙を出した。

「俺ハモウ 負ケナイ……」

狼男は、身体のあちこちから黒い煙を出しながら、小刻みに震え始めた。

「一体、彼に何が……？」

「なんか、様子がおかしいわよね」

「よく分からないけど、チャンスかモ」

「先制攻撃よ。かぜのせいはいよ、みえざるしようげきを！ Wind Blast」

ディアーナは呪文を唱え、風の衝撃を狼男に飛ばして攻撃した。

そしてプーカはポーチを弄まどると、納豆を出した。

「そうか、それがあれば！」

狼男の弱点は、臭いのキツイものだ。

「私が狼男の注意を引くわ」

「あたしは、後ろから魔法でサポートするわ。その間に、プーカ、納豆の臭いを嗅がせる

のよ」

「分かったゾ」

羽心とディアーナは、狼男の方を見た。

「さあ、私を倒してみせなさいよ！」

「ナニイイ？」

「どうしたの？ 怖いのか？ ほら、私はここよ！」

羽心は、両手を大きく開いて、狼男を挑発した。

ディアーナは不調ながらも、彼女の後ろで、呪文を唱える。

「イイダロウ」

狼男は、黒い煙を出しながら、ゆっくりと羽心に迫る。

「Wind Blast」

「ウグツッ！」

風の衝撃が命中し、狼男にさらにダメージを与える。

「よおし……チャンスだゾ……」

プーカは、床すれすれを飛びながら、狼男に気づかれないように近づいていた。

「もうちよつと……もうちよつとダ……」

プーカは羽心とディアーナと目が合う。

羽心は迫り来る狼男に怯えながらも、その場から離れようとしなかった。ディアーナも、呪文を唱えて、羽心とプーカを援護しようとした。

「羽心チャン……もうちよつとの我慢ダ……。オイラがやつつけてやるからネ……」
プーカは、狼男の傍に辿り着いた。

狼男は、羽心の方を見ていて、プーカとディアーナには全く気づいていない。

「よおし、くらエー！ ええイー！」

次の瞬間、プーカは納豆を掲げるように突き上げると、狼男の鼻に向かって飛んだ。

「ヌオツ！」

狼男が、納豆の臭いを嗅ぐ。

「やった！」

羽心は、作戦が見事成功して喜ぶ。

だが、プーカとディアーナは何故か怪訝な表情をしていた。

「どうしたの、プーカ、ディアーナ？」

「何だか、変だゾ」

「うん、あたしの魔法しか効かないみたい」

「変？」

その時、狼男がニヤリと笑った。

「ソナナ物 俺にハ効カナイ！ ガルルツ！」

狼男は、納豆を持ったプーカを叩くように払いのけた。

「うわああ！」

「プーカ！」

プーカは納豆を持ったまま、床に叩き落とされる。

「プーカ、しつかりして！」

羽心は、慌てて駆け寄り、プーカを抱きかかえた。

ディアーナは彼女の後ろから動かなかった。

「うう〜ん、ど、どうして、納豆攻撃ガ……？」

「多分、あの黒い煙のせいじゃないかしら」

羽心の手の中で戸惑うプーカに向かって、狼男は笑い、ディアーナは理由を説明した。

「俺ハ 強クナツタンダアア！ ガアアアアツ」

狼男の全身から大量の黒い煙が漏れ出す。

その煙が、狼男の身体を包み込んだ。

「何なのこれは?！」

「才前達ヲ 倒ス！ ガアアアア!!」

狼男を覆った黒い煙が徐々に大きくなっていく。

次の瞬間、煙の中から、巨大な姿になった狼男が現れた。

「ガアアアアッ」

狼男は、羽心達に襲いかかってくる。

「きゃー！」

「おっとー！」

羽心はプーカを抱きしめ、とつさに横に横に逃げた。

デイアーナは、何とか狼男の攻撃を横に飛んでかわした。

ードオオオオオン

地響きと共に、羽心達がいた床に、大きな穴が開く。

狼男は、先程とは比べ物にならないほどパワーアップしていた。

「ドウダ 人間ドモ！ ガアアア アアアア」

狼男は、歓喜の雄叫びを上げた。

その頃。

勇気とジャネットは、キユウと共に洞窟の中を走っていた。

すると、曲がり角の向こうから雄叫びが聞こえた。

「近くにいますー！」

勇気達は、身構える。

キユウが口を開いた。

「妙だ。さっきの気配とまるで違う」

「まさか、他にも怪が？」

「いや、いるのは狼男だけだ。だけど、この気配は……」

「何ですか？」

その時、角を曲がった勇氣は、広い空間にいる羽心、プーカ、ディアーナの姿を見つけた。

「三人とも、大……」

「勇氣、危ない！」

「えっ!?!」

勇氣がハツとして横を見ると、巨大な狼男が立っていた。

「来タナ ガアアア!!」

狼男は、巨大な腕を、勇氣に振り下ろした。

5 — 邪鬼と勇氣

—ガキイン!

狼男の爪を、ジャネットの鎧が防ぐ。

「ジャネット!」

「鎧、役に立ちましたね」

微笑むジャネットだが、すぐに真剣な表情になる。

「プーカ、納豆の臭いを嗅がせるんだ!」

勇氣はプーカに向かって叫ぶ。

だが、羽心に抱きしめられたプーカは、首をブンブンと横に振った。

「それは効かなくなっちゃったんだ」

「何だって!?!」

勇氣とジャネットは戸惑いながらも、狼男を避け、羽心達の元へ駆け込んだ。

「どういう事なんだ?」

「分からないゾ」

「急に黒い煙を身体から出して、大きくなったの」

「そんなー！」

勇氣は、何故そんな状態になったのか理解できなかった。
が、キユウは、「黒い煙……」と呟いた。

「まさか、邪鬼が？」

そう言うと、狼男が吠えた。

「全テハ 神ノオカゲダ！ アノ方ニ エネルギーヲ与エラレ 俺ハ パワーアップシ
タンダ！

ガアアアア

狼男は身体からゆらゆらと黒い煙を漂わせながら、勇氣達に叫ぶ。

「そんなのって」

羽心は戸惑う。

プーカも呆然とし、ディアーナとジャネットは歯を食いしばった。

「才前達ヲ 今度こそ 倒シテヤルツ！ ガアアアアツ」

鼓膜が破れそうな雄叫びが響く。

「うわああー！」

「くっ……！」

その風圧で勇氣達は思わず目を瞑る。

ディアーナとジャネットは、何とか風圧に耐えた。

「勇気、上を見るんだ！」

「えっ!!」

勇気は、慌てて目を開けて、顔を上に向けた。

真上に、巨大な足が見える。

狼男がジャンプをし、踏み潰そうとしているのだ。

「うわっ！」

「きゃー！」

勇気とディアーナはとっさに、横に避けた。

ードオオオンッ

攻撃はジャネットの鎧で弾いたが、轟音が響き、床が粉々になって飛び散る。

床に爆弾でも爆発したかのような大きな穴が空いた。

「勇気、ディアーナ、大丈夫かい？」

「あ、ああ」

「なんて破壊力……食らったらひとたまりもないわ」

「勇気とディアーナは、巨大な穴を見て、ごくりと唾を呑み込んだ。

以前とはまるでパワーが違う。

邪鬼によって強くなったのは本当のようだ。

狼男は、傍にあつた岩を掴む。

「ガアアアア」

そして、岩を持ち上げると、勇氣達に向かつて投げつけた。

「うわあああ！」

「きゃあああ！」

——ドオオオオン

岩が、音を立てて転がる。

勇氣達は何とか避けたものの、まともに喰らつたらひとたまりもないだろう。

「ここでは危険だ。狭い通路に逃げるんだ」

「あ、あああ！」

勇氣、羽心、デアーナ、ジャンネットは、キユウと共に通路へと向かう。

だが、それを見て狼男がジャンプした。

「逃ガスカ！」

——ドンッ

空間の入り口の前に、巨大な狼男の身体が立ち塞がる。

「このままじゃヤバイゾー！」

「くっ、何とかしないと」

「かぜの……」

「全員 ココデ終ワリダッ！」

「きゃ!？」

ディアーナが呪文を唱える間もなく、狼男が襲いかかってきた。

「散るんだ！」

キユウの言葉に、羽心、プーカ、ジャネットは頷き、ディアーナはまだ慌てる。

しかし、勇気は何かを見てハツとした。

そして、キユウ達に声をかけた。

「散っちゃ駄目だ！ 僕についてきて！」

「勇気、一体どこに？」

「いいから、早くこっちだ！」

勇気は通路とは反対側に向かって駆け出す。

「勇気！」

「何を考えているのでしょうか……？」

羽心も、訳が分からなかったものの、プーカを抱えて後に続く。

ジャネット、ディアーナ、キユウはそんな勇気達に戸惑いながらも慌てて彼らの方へ

と飛んだ。

「逃ゲテモ 無駄ダ！ ガアアア！」

狼男は、巨大になったその身体を震わせ、勇氣達を追いかける。

「来たわよ！」

「今度こそ絶対ヤバイゾ！」

「みんな、ここに飛び込むんだ！」

「え……はい！」

勇氣は、前方を見ながら大きくジャンプした。

羽心とデイアーナも同じようにジャンプする。

ジャネットは鎧を着ていたため、ふらつきながらゆっくりと上がった。

狼男は、そんな勇氣達に襲いかかった。

—ドドンッ

「又ワアアアア！」

次の瞬間。

狼男の顔が、何かにぶつかった。

それは、先ほど狼男が投げた「岩」だ。

勇氣達は、その岩の後ろにとっさに逃げたのだ。

岩は狼男が投げた衝撃で、上の部分が割れて尖っている。

狼男は、尖った部分に顔をぶつけ、苦しんでいた。

「なるほど、岩が尖っている事に気づいたんだね」

「散って逃げても、ここは広い空間だろ。」

狼男はあつという間に追いついて、全員襲われると思ったんだ」

勇気は、少し離れた場所に岩があるのを見つけ、尖っている部分を武器にしようと思っただのだ。

「勇気、君はいつの間にか、僕より戦うのが上手になったみたいだね」

「人間なのに、なんて素晴らしいの」

キユウとディアーナは、自分にはない勇気の判断力に感心する。

だがその時、羽心が声を上げた。

「見て！」

「グウウウウ……」

狼男はフラフラとしながらも、ゆっくりと勇気達の方に顔を向けた。

「ヨクモ コノ俺ヲ……」

狼男は、唸り声を上げながら、巨大な狼の身体を勇気達の方に向けた。

「全員 握り潰シテヤル！」

狼男は、岩を両手で挟むように掴んだ。

—グシヤ

岩は、狼男の挟む力によって、粉々に碎ける。

「ぬあア！ あんな力で挟まれたらひとたまりもないゾ！」

「くっ、ここにいちや駄目だ」

勇氣は、安全な避難場所を探す。

だが、辺りを見回しても、もうどこにもない。

「どうすれば?？」

焦る勇氣を、狼男はジロリと睨む。

「終ワリダ！」

狼男は、勇氣を両手で挟もうとした。

「そこまでだ」

突然、声が出た。

その声を聞き、狼男はピタリと止まった。

「ここまで辿り着いた事は、褒めてあげるよ」

声の主はそう言うのと、ニヤリと笑う。

通路へと続く入り口に、一人の少年が立っている。

勇氣達は、その人物を見つめ、険しい表情になった。
邪鬼だ。

「邪鬼……!」

「キユウ、まさか君が復活するとはね」

「お前を倒すために蘇ったんだ」

ディアーナとキユウは邪鬼を睨む。

その横に、勇氣は立った。

「お父さんを返せ!」

今までずっと事故で亡くなったと思っていた。

その父親の身体が、目の前にあるのだ。

すると、邪鬼が「ふっ」と鼻で笑った。

「その事も知ってるのかい。まあ、知ったところでどうにもならないけどね」

邪鬼は、指を鳴らす。

狼男はその音に反応し、大きくジャンプすると、邪鬼の横に着地した。

「どうだい? あれだけ情けなかった狼男も、強くなっただろう?」

「邪鬼! 僕は絶対お前を許さない!」

「たとえ誰であつても、あたしは負けないから」

勇氣とディアーナは、邪鬼の元へ駆け出す。

「勇氣！」

「待ちなさい！」

キユウ達も慌てて追おうとする。

だが、邪鬼は素早く刀を抜き、その刃の先を勇氣に向けた。

刀から、黒い煙が漏れ出ししている。

勇氣達は、思わず動けなくなる。

「君達は、弱った僕を倒そうと思ってたんだろ？ だけど、残念だったねえ」

邪鬼の身体からも、黒い煙が漏れ出し、ゆらゆらと揺れ動いた。

その姿に、キユウはハツとする。

「そうか、狼男が僕達に襲いかかってきたのは、倒す事だけが目的じゃなかったんだ」

キユウの言葉に、邪鬼は、勝ち誇ったかのような笑みを浮かべた。

「その通り。全ては僕の傷が癒えるまでの時間稼ぎさ」

「そんな！」

「何ですって!?!」

「残念だったね。今度こそ人間を滅ぼしてやるよ」

邪鬼は、刀で空間を斬った。

空間に罅が現れ、黒い煙が漏れ出す。

その罅の中に、邪鬼は入ろうとした。

「逃がすか！」

「させないわ……！」

勇気とディアーナは、邪鬼を捕まえようとする。

だが、狼男が行く手を塞いだ。

「彼らを楽しませてやれ」

「分カリ マシタ ガアアアツ」

狼男は、全身に力を入れる。

そして、素早い動きで高く跳ぶと、勢いよく床に着地した。

——ドオオオオオオン!!

床が破壊される。

その衝撃で、洞窟そのものが激しく揺れる。

「うわああ！」

「きゃああ！」

次の瞬間、洞窟が崩れ始めた。

「せいぜい、怪我をしないようにね」

邪鬼は笑いながら、罅の中に消えて行った。

狼男もその後が続く。

「邪鬼！」

「待ちなさい！」

勇氣とディアーナは追おうとするが、洞窟がさらに崩れ出した。

「勇氣、ディアーナ、外に出ますよ！」

「だけど邪鬼が！」

「このまま埋まってしまうたら元も子もありません！」

「そ、それは……」

勇氣とディアーナは奥歯を噛みしめながら、洞窟から脱出する事にした。

「あと少しだったのに……」

森の中。

勇氣達は少し離れた場所に見える、崩壊した洞窟を眺めている。

何とか無事に洞窟から脱出する事ができた。

しかし、邪鬼にまた逃げられてしまった。

しかも、邪鬼は完全に傷が癒え、人間を滅ぼすと宣言した。

「あいつ、どこに行ったのかしら？」

「また違う時代に行ったのかモ」

「どうすればいいんだ……」

勇気達は、邪鬼の行方が分からなくなり、困惑していた。
すると、キユウがハツとした。

「キユウ、何か分かったの？」

勇気が尋ねると、キユウは真剣な表情で勇気達を見た。

「邪鬼は、『見捨里市』に行ったんだ」

e p i s o d e 7 | L a s t B a t t l e (

見捨里市の怪

1 | 勇気と母

「邪鬼は、町のどこにいるの?」

勇気達は、キュウに連れられ、見捨里市に戻ってきた。

邪鬼は、狼男と共に黒い罅を通して、この町のどこかにいるはずだ。

だが、町は平和そのものだった。

空は晴れていて、雲一つない。

勇気達は、書斎からリビングにやって来て、これからどうするか考える事にした。

「邪鬼は、この町で何をする気なのかしら?」

「人間を滅ぼしてやるって言ってたよネ」

「滅ぼす……」

「まさか、パンドラの箱で……」

勇気とディアーナは、険しい表情になる。

傷が治り回復した邪鬼は、何をしでかすか分からなかった。

「だけど、そう簡単には行動を起こせないはずだ」

「どういう意味ですか？」

キユウがふと、勇気達の方を見た。

「邪鬼が求めていたものは、『パンドラの箱』と『三つのグローブ』だっただろ？」

僕達がグローブを持っている限り、邪鬼の野望は果たす事ができないはずだ」

「確かにそれはそうかも。神殿の台も、この町にはないもんね」

邪鬼はアトランティス大陸で、神殿にあった台の上に、

パンドラの箱と三つのグローブを置いていた。

「あれって、あの台の上に置く事も重要だったって事だよな？」

「ああ、恐らく邪鬼の野望を叶えるためには、

箱とグローブを台の上に置く事が必要なんだろうね」

「じゃあ、もう大丈夫って事よね？」

羽心が勇気達にそう言った。

大西洋に浮上したアトランティス大陸は、

神殿で邪鬼と戦っている時に奇跡のペンダントの力で奇跡が起きてリセットされ、

消えてしまったのだ。

「アトランティス大陸が浮上してないって事は、神殿もないって事だもんね」

羽心の言葉に、勇気、プーカ、ディアーナ、ジャネットは頷く。

「そうなるよ、邪鬼は何のために見捨里市に来たんだらう？」

「とにかく、早く捜し出した方がいいよネ」

すると、キユウが「ああ」と答えた。

「急がないと大変な事になる」

「キユウ、どういう事ですか？」

「邪鬼がどうやって野望を叶えようとしているのかは分からない。

だけど、あれは闇雲にこの町へ向かうような感じじゃなかった」

メデューサの洞窟から移動する際、邪鬼は勝ち誇ったかのような笑みを浮かべていた。

あれは、傷が癒える時間稼ぎに成功したからだけではない。

キユウには、確実に野望を叶えられる自信があるように思えたのだ。

「今すぐ捜しに行こう。この町のどこかにいるはずだ」

その時、母親がリビングにやって来た。

「あ、プーカ、隠れて！」

勇気は、慌てて宙に浮いていたプーカを掴むと、服の中に入れた。

「勇氣、今、何か飛んでなかった？」

「あ、あ、虫がいたみたいだね」

「オイラは虫じゃないゾ！」

プーカが、服の中から訴える。

「え？ 虫じゃない??」

「いや、ええつと、今のは羽心が言ったんだよ」

「私？ そ、そう。勇氣に、無視するのはよくないって言ったの」

「あらあら、無視するなんて、喧嘩でもしてたの？」

「え、うん、だけでも仲直りしたよ」

「そうそう、私達仲良しだから」

勇氣と羽心は無理矢理笑顔になった。

「そう、それならいいけど」

母親は、勇氣達の言う事を信じてくれたようだ。

「プーカ、喋ったら駄目だろ」

「ついうっかり。申し訳ない」

プーカは勇氣の服の中でペコリと頭を下げる。

そんななか、母親は勇氣をじっと見つめた。

「ねえ、それって」

「えっ!?!」

服の中にいるプーカが見つかってしまったのだろうか？

「ええつと、人形だよ。だから気にしないで」

勇気は上手く誤魔化そうと、また作り笑いを浮かべた。

しかし、母親はそんな勇気の返答にキョトンとしていた。

「人形？ 私と言ったのは、そのグローブなんだけど」

「えっ!?!」

勇気は自分の手を見る。

右手に、太陽のグローブを嵌めていた。

「それ、お父さんの書齋にあったものよね？」

「あ、うん」

勇気の嵌めている太陽のグローブは、元々書齋にある父親の机の引き出しにあったのだ。
だ。

「羽心ちゃんがつけてるのも、同じようなものよね？ どうして持ってるの」

「ええつと、それは、似たようなのが売ってて。それでいいなって思っ」

「そうなのね」

母親は、羽心のとつきについた嘘を信じてくれたようだ。

「だけど、久しぶりに見たわねえ、そのグローブ。」

お父さん、世紀の大発見かもしれないぞって言ったのよ」

「どういう事？」

「あら、言つてなかった？」

そのグローブ、お父さんが考古学の調査をしている時に見つけたのよ」

「え、そうだったんだ」

グローブは大昔、アトランティス大陸に住んでいた人達と妖精族が作ったものである。

恐らく、父・力は、アトランティス大陸について調査をしている時に、

グローブを見つけたのだろう。

勇気がそう思っていると、母親は何かを思い出したようだ。

「そう言えば、あの時、他にも発見したものがあつたのよね」

「他にも？」

「ええ、見捨里市立博物館に寄贈しているわ。確か、白い円柱の台だったような……」

「それって！」

アトランティス大陸の神殿で見た台と似ている。

「キユウ！」

勇気は、母親がいるにも関わらず、傍に立っているキユウに声をかけた。

「キユウ？ 勇気、どうして亡くなったおじいちゃんの名前を知ってるの？」

「え、あ、ええつと」

勇気は首を大きく横に振った。

「今はそんな事言ってる場合じゃない！」

その言葉に、キユウは大きく頷いた。

「もしかしたら、邪鬼はその台を奪おうとしているのかもしれない。

勇気、ディアーナ、ジャネット、博物館に行こう！」

「はい！」

「うん！ 羽心！」

「ええ！」

勇気達は慌てて駆け出した。

「ちよつと、勇気、どこに行くの？」

「博物館に行つて来るよ！ お母さんは、家でじつとしてて」

「どういう事？」

「いいから。外に出るのは危険かもしれないんだ！」

勇気はリビングを出て行こうとした。

だが、グローブに目が留まり、ふと立ち止まった。

勇気は、母親の方を見る。

「……ねえ、お母さんは、もしお父さんが帰ってきたら嬉しい？」

「えっ？」

突然の質問に、母親は戸惑いを覚えたようだ。

しかしすぐに、笑顔になった。

「もちろん、嬉しいわ。大きくなったあなたを、あの人に見てもらいたいもの」

「お母さん……」

勇気は、グローブを強く握り締める。

「行つてきます」

そう言うとき、勇気は羽心達と共に、リビングを出て行った。

2 — 誰もいない博物館

「ここに、邪鬼がいるんだね」

勇氣達は、博物館の前にやって来た。

以前、羽心と『エジプト文明展』を見に来た場所だ。

「まさかお父さんが寄贈した物があるなんて思ってたよ」

あの時は、エジプトの展示品を中心に見て回った。

全ての展示を見たわけではないので、台のような物があつたかどうか思い出せない。

「とにかく、調べなきゃ」

「ああ、みんな用心するんだ」

キユウの言葉に、勇氣達は大きく頷いた。

やがて、勇氣達は、邪鬼を用心しながら、入り口までやって来た。

だが一同は、受付を見て首を傾げる。

「受付に、誰もいない」

以前来た時は、受付係がいて、横には警備員も立っていた。

「休憩中なのかナ？」

プーカはそう言うが、それを聞いた羽心は、周りを見ながら首を横に振った。

「……受付だけじゃないかも」

受付からは、館内が見える。

その館内には、人が一人もいなかったのだ。

「邪鬼だ」

キユウが呟くように言った。

邪鬼がいるとすれば、館内にいた人々を邪魔だと思い、狼男に襲わせた可能性があるのだ。

これ以上、人々を襲わせるわけにはいかない。

勇気達は、緊張しながら、館内に入って行った。

館内は、気がなく、静まり返っていた。

勇気達はなるべく音を立てないように、慎重に館内を進んで行った。

「台はどこにあるのかしら？」

「アトランティス文明コーナーなんて、ないよね？」

勇気は、壁に貼られた館内の地図を見る。

しかしどこに展示されているのか全く分からなかった。

その時、勇気はふと、館の端の方を見た。

一瞬、端にある柱の裏で、何かが動いたのだ。

「人だ!」

勇気が声を上げる。

「邪鬼がいたの?」

「違う! 女の子だ!」

「女の子? じゃ、いくわ」

勇気とディアーナは、柱の方へと走った。

すると、小学1年生ぐらいの女の子が、柱の陰から飛び出して来た。

「怖いよ、来ないで!」

女の子は、震えてパニックになっている。

「大丈夫。僕達は何もしないよ」

勇気は、女の子に優しく話しかけた。

女の子はそんな勇気を見て、安心したのか、少しだけ落ち着きを取り戻す。

ディアーナはあえて黙っていた。

「もう大丈夫よ」

「私もいます」

羽心とジャネットも傍にやって来て、笑顔を見せた。

「さっきの怖い人の仲間じゃないの？」

「怖い人？ それって着物を着て、片目に包帯をした男の子かい？」

女の子は、勇気の言葉に何度も頷いた。

「やっぱり、邪鬼はここにいるんだ」

女の子は、家族で博物館に来ていたのだという。

すると突然、邪鬼と狼男が館内に現れたらしい。

彼らは、次々と館内にいた人達を襲い、捕まえたというのだ。

「私も捕まりそうになったの。だから柱の後ろに隠れて……」

女の子は泣きそうな顔で、勇気達を見た。

「ねえ、パパとママはどこに行ったの？」

「それは……」

邪鬼が、捕まえた人達を放っておくとは考えにくい。

だがそれでも、勇気は奥歯を噛み締め、「大丈夫」と言った。

「僕達が必ず助けるから」

女の子は、恐怖を味わった。

彼女をこれ以上怖がらせる必要はない。

「とにかく、この子を外に逃がさない」と

勇氣は、女の子を博物館の外に連れて行こうと思った。

「待つたく」

その時、プーカが羽心の後ろから姿を現し、手を挙げた。

「この子は、オイラが安全な場所まで連れて行くゾ」

「プーカが？」

「ああ。早く邪鬼を見つけないといけないだロ」

プーカの言う通り、女の子を博物館の外へ連れて行く余裕はなかった。

邪鬼に台を奪わせてはならないのだ。

「それに、グローブは三つ揃ってないといけないんだよネ？」

プーカは、後ろに浮かんでいるキユウに尋ねた。

「そうだね。太陽と月と星。その三つが揃う事によつて、邪鬼を倒す事ができるんだ」

「だったら、オイラが女の子を連れて行くヨ。勇氣くん達は五人一緒にいないト。」

「その聖女と勇者もネ」

「……？」

勇氣は、プーカの様子に違和感を抱いた。

「ジャネットとディアーナを名前で呼ぶはずなのに、何故か、聖女と勇者と呼んでいたのだ。」

「なんか、プーカの様子がおかしいような……」

「知らないわよ。でもプーカ、たまにはいい事言うわね」

「たまにはじゃない。オイラはいつもいい事を言ってるゾ」

女の子は、目の前で浮かんでいる小さな男の子を見て、目をパチクリさせていた。

「安心していいヨ。オイラは悪い怪じゃないからネ」

「怪??」

「オイラは妖精族の王子なんだ。さあ、一緒に行こウ」

プーカは博物館の出入り口の方へと飛んで行く。

「あ、あの」

「君も早く行くんだ。プーカは必ず君を守ってくれるから」

勇気は、女の子にそう言う。

「う、うん。分かった」

女の子は戸惑いながらも、プーカについて行った。

「じゃ、あたし達は台を探すわよ」

「そうだね」

「だけど、どこに展示してるのかしら?」

勇気達は、館内の地図が貼られている場所へ戻った。

もう一度、各部屋の展示品の種類を確認するが、

アトランティス文明の展示品らしい物は書かれていなかった。

だがその時、キユウが何かに気づいた。

「もしかしたら、ここかもしれない」

指差したのは、館内の一番奥……様々な文明の物が展示されているコーナーだった。

「そっか、あのコーナーなら、どの文明の物か分からない物もあるかも」

勇気達は、急いでその場所へ向かう事にした。

「ええっと、台？ 台？」

勇気とディアーナは、展示品を見ていく。

小さな島々の物など、展示品の種類が少ない物が置かれていた。

しかし、肝心の白い台はどこにもなかった。

「邪鬼達がもう見つけたのかしら？」

「いや、それはないはずだ」

勇気は、展示品を見る。

どれも綺麗に設置されている。

抜けている部分はなさそうだ。

「もし、邪鬼が台を奪っていたら、見れば分かるはずだからね」

「じゃあ、ここにはないって事？」

「うーん。他にもう探す場所なんてないわよね……？」

ディアーナはそう言いながら、キユウの方を見た。

「えっ」

ディアーナは、目を大きく見開く。

「どうしたんだい？」

「それ」

ディアーナは、キユウの傍まで歩み寄ると、後ろにあるドアをじつと見つめた。

ドアには、「関係者以外立ち入り禁止」と書かれたプレートが貼つてある。

「立ち入り禁止？ それがどうしたんだい？」

「そこじゃないわ、その上よ」

「上？」

キユウは、上に貼られたもう一つのプレートを見た。

『保管室・入り口』

「そういう事か」

「え、どういう事なの？」

「羽心ちゃん、博物館というのは、所有している全ての物を展示しているわけじゃないん

だ。

展示していない物も多くある。そういうのは一般の人が入れない場所に保管しているんだよ」

「なるほど！　じゃあ台もそこにあるって事ね」

羽心は、笑顔で保管室へと続くドアのノブを回した。

—ガチャガチャ

だが、ドアは開かない。

鍵がかかっているようだ。

「鍵を探さなきゃ」

「勝手にピッキングするわけにはいかないしね」

「そうだ、キユウ、君ならドアの向こうに行けるよね？」

キユウは幽体なので、物体をすり抜ける事ができるのだ。

「ドアをすり抜けて、鍵を開けて」

「勇気、いいアイデアね！」

しかし、それを聞いたキユウは、首を横に振った。

「確かにドアはすり抜ける事ができる。だけど、僕は物体に触れる事はできないよ」

たとえば、ドアの向こうに行ったとしても、キユウには鍵を開けるのは不可能だった。

「そっか、そうだった」

「じゃあどうすればいいの？ ピッキングもできないよね？」

勇氣達はその場で頭を抱えてしまった。

—パタパタパタ

不意に、羽音が聞こえてきた。

見ると、プーカが飛びながら勇氣達の方に近づいて来る。

「そこにいたのカ」

プーカは、勇氣達の傍までやって来た。

その顔は何故か、にっこりと笑っていた。

「女の子は？」

「外に避難させたヨ」

「そうか。よかった」

勇氣とディアーナは、ホツとしながら、飛んでいるプーカを見つめた。

「ああ、でも、もしかして、プーカなら」

ディアーナは、『保管室』と書かれたプレート横を見る。

そこには、通気用のダクトがあった。

「プーカ、ダクトを使って、ドアの向こうに行ってくれる？」

「ドアの向こう?」

ディアーナは、台が保管室の中にある可能性が高く、

そのためドアの鍵を内側から開けなければならぬ事を話した。

「なるほど、そんなところにあったの力」

「プーカ、急いで、今なら邪鬼より早く台を見つけられるわ!」

「ディアーナ、どうしてそんな事が分かるの?」

「ドアの鍵は閉まつてるでしょ。つまり、邪鬼はまだ保管室へは行ってないのよ」

「確かにそうかも!」

「よし、じゃあ開けて来るヨ」

プーカは、通気用のダクトまで飛ぶと、その中に入つて行つた。

「それにしても、邪鬼はどこにいるんだらう?」

勇気はキュウ達に言つた。

女の子の話だと、狼男もいたはずだ。

「博物館の中に台がないと思つて、違う場所に行つたんじゃないの?」

「だけど、台がなければ野望は叶えられないんだよね?」

邪鬼がどこにいて、何を考えているのかは分からない。

「油断だけは絶対しちや駄目だよね」

「ああ、勇氣、その通りだ」

勇氣達は辺りを警戒しながら、プーカが到着するのを待った。すると、ドアの向こうから音がした。

—ガチャ

ドアの鍵が開いたのだ。

「やった」

ディアーナはドアを開ける。

ドアの向こうに、プーカが飛びながら待っていた。

「プーカ、凄いわ!」

「流石ね!」

「……」

ディアーナ達はプーカを褒めるが、勇氣だけはプーカを警戒していた。

プーカは「そうかい」と答えた。

「行きましょう!」

勇氣達は、保管室へと向かった。

プーカもそれについて行く。

「オイラ、キミ達の力になれて……凄く嬉しいヨ。フフフフ」

プーカは笑みを浮かべながら、誰に言うでもなくそう呟いた。

3 — プーカの提案

「ハイ、か」

勇氣達は、保管室にやって来た。

棚がいくつも並んでいて、古い壺や美術品などが置かれている。

「台はどこにあるのかしら?」

「神殿にあった物と同じなら、かなり大きいはずだよね」

勇氣達は、置かれている物をチェックし始めた。

すると、部屋の奥に布がかけられた大きな物体が並んでいた。

勇氣は、その一つの前に立ち、布を取ってみる。

等身大の銅像だった。

羽心は、他の布も取っていく。

どれも、大きな彫刻や銅像ばかりだった。

「台はななさそうね」

「もしかして、保管室には置いてないのかな」

勇氣はそう言いながら、一番端の布を取った。

「あつー！」

それは、神殿で見た物と同じ、白い台だ。

あちこち壊れていて、ボロボロになっている。

だが、これこそが勇気達が探し求めていた物だった。

「キユウ、やったよ！」

「ああ、ついに見つけたね！」

邪鬼より先に台を見つけた事ができたようだ。

「勇気、台をどこかに移動させるんだ」

「そうだね。ここにあつたら見つかるかもしれないよね！」

「あたしも手伝うわ」

勇気は、台を持ち上げようとした。

その時、後ろでそれを見ていたプーカが声を上げた。

「一つ、提案があるんだ」

「提案？」

「勇気クン、キミ達のグローブと、勇者が持つてるカードの事だよ」

「カード？」

プーカは、勇気達が嵌めているグローブと、ディアーナのポーチを見た。

「そのグローブとカードを邪鬼に取られてしまったら、元も子もないだろう?」

「それは、そうだけど」

「だったら、オイラが、ポーチの中に入れておくヨ」

プーカは、につこりと笑いながら、腰につけていたポーチを勇気達に見せた。

「王様のポーチは、妖精族しか中身を取り出す事ができないんだ。

だから、ポーチにグローブとカードを入れておけば安全だろう」

「確かに。その方が危険は少ないかもしれません」

「ジャネットは頷く。」

「そうね。戦う前に捕まったりしちやったら、グローブとカードを奪われちゃうもんね」

「羽心も、プーカのアイデアに賛成のようだ。」

「断るわ。このカードは勇者のあたしが使うもの」

しかし、ディアーナは首を横に振り、勇気とキユウは浮かぬ顔をしていた。

「グローブとカードを預ける、か……」

「なんか、プーカの様子がおかしいような……」

「でも、プーカは頼りになるわ。ね、勇気、キユウ」

「あ、ああ」

「ほら、貸しテ。早く台を運ばなキヤ」

プーカは、グローブを預けるように促す。

勇気と羽心は、グローブを外し、プーカに渡した。

「ほら、キユウサンモ」

「あ、ああ、そうだね」

キユウは少し躊躇しながらも、グローブを外すと、プーカに渡した。

「これで完璧だ。フフフフ」

プーカは笑いながら、三つのグローブをポーチの中に入れた。

「よし、これ以後は台を運べば」

勇気は再び台を持ち上げようとした。

—ガルルルツ

突然、保管室の入り口の方から唸り声が響いた。

「この声は！」

勇気達は、一気に顔が険しくなる。

「コンナ トコロニ アッタノカ」

「人狼……しつこいわね」

ドアの前に立っていたのは、狼男だ。

狼男は、勇気達が身構える前に襲いかかって来た。

「くっ」

勇氣は、台を持って逃げようとする。

だが、台は重く、僅かしか動かない。

「羽心、ディアーナ、ジャネット、手伝って！」

「ええ！」

「はい！」

羽心、ディアーナ、ジャネットも台を掴むと、勇氣と一緒に持ち上げようとした。

「逃ガスカ！」

狼男は、傍の柵に体当たりをする。

——ドオオオオン

衝撃で柵が倒れ、勇氣達の行く手をむ。

「三人とも、あっちだ！」

「分かった！」

勇氣達は、違う方向へ逃げようとした。

だが、狼男は、また柵に体当たりをした。

——ドオオオオン　ドオオオオン

次々と柵が倒れる。

棚にぶつかり、床に置かれていた銅像なども倒れ、勇気達の行く手を阻んだ。

「台を置いて逃げるんだ！」

キユウが叫んだ。

「だけど」

「グローブを手に入れない限り、邪鬼は何もできない。このままじゃ狼男にやられてしまおう！」

「ガアアアア」

狼男の身体から、黒い煙が出る。

その身体がだんだん大きくなっていく。

「くっ、みんな、外に逃げるぞ！」

「こんな狭い場所では、戦えないしね」

博物館から出て、態勢を整えるしかない。

勇気は、台を床に降ろした。

「ソレヲ ヨコセツ！」

大きくなった狼男は、台の方へとジャンプする。

それと同時に、勇気、羽心、ディアーナ、ジャネットは、

散乱している物を避け、ドアへと逃げた。

勇氣達はそのまま、保管室から飛び出した。

「あと少しだったのに！」

通路を走りながら、勇氣は悔やむ。

結局、台を邪鬼達に奪われてしまったのだ。

「ですが、何故人狼は、保管室に私達がいる事に気づいたのでしょうか」

ふと、ジャネットが言った。

「もしかしたら、後をつけてたのかも」

「だったら、グローブも奪おうとしますよね」

邪鬼は、自身の野望のために、グローブも必要だ。

「隙を突いて奪うチャンスはいくらでもありそうだったのに」

「隙を突いて……」

キユウが飛びながら、勇氣と共にハツとした。

「まさか」

キユウが何かを言おうとした時、博物館の出入り口が見えてきた。

勇氣、羽心、ディアーナは、走って外に出る。

キユウとジャネットは戸惑いながらも、後に続いた。

「とりあえず、何とかグローブとカードだけは取られずに済んだ……」

博物館の外。

勇気達は、荒く呼吸しながら、博物館の方を見た。

恐らく邪鬼は近くににいるだろう。

ここで戦うしかない。

勇気は、プーカからグローブを返してもらおうと思った。

「あれ？」

だが、どこにもプーカがない。

「まさか、狼男に捕まったんじゃない？」

—パタパタパタ

勇気達がそう思った瞬間、プーカが、のんびりと飛びながら、博物館から出てきた。

「プーカ、何やってるのよ」

「危ないわよ！ 早くこっちへ来て！」

ディアーナと羽心は、必死にプーカに呼びかける。

しかし、プーカはただ暢気に飛んでいるだけだ。

「プーカ、危ないから早く！」

だが、そんなディアーナ達に、勇気とキユウが声を上げた。

「二人とも、気をつけるんだ！」

「僕達は、まんまと騙されてたんだ！」

4 — 邪鬼の狙い

「騙されてた？ 勇気、キュウ、どういう事よ?？」

ディアーナ達が戸惑っている、プーカがニヤリと笑った。

「プーカを捕まえるんだ！」

「えっ!？」

その時、一つの影が現れた。

着物を着て、片目を包帯で隠した少年……邪鬼だ。

「邪鬼！」

勇気、羽心、ディアーナは、邪鬼のもとへ駆け寄ろうとする。

だが、邪鬼の後ろに狼男が現れ、威嚇した。

「ガアアアッ」

その手には、白い台がある。

「まったく、保管室に置いてあったなんて、想像していなかったよ。

だけど、これで全部揃える事ができた」

邪鬼は、不気味な笑みを浮かべる。

プーカは、暢気に飛びながら、そんな邪鬼の傍に近寄った。

「プーカ、近づいちゃ駄目よ！」

「早く逃げて！」

しかし、プーカは勇氣達の方を見て首を傾げる。

「逃げる？ どうしテ？」

「どうしてつて……まさか！」

ハツとする勇氣を見て、邪鬼が笑った。

「ああ、そのまさかだよ」

そして、それを邪鬼に渡した。

「あああ！」

「こいつは、僕が操っていたのさ」

プーカの身体から、僅かに黒い煙が出ている。

邪鬼はその煙を嬉しそうに見る。

「博物館にいた女の子は、わざと放っておいたんだ。君達が来た時、きつと助けると思ってたね。」

あの女の子を守るために、隙ができてグローブを奪いやすくなると思ったのさ」

しかし、女の子を連れて外に出てきたのは、プーカだった。

邪鬼は、仕方なくプーカだけを捕まえ、ある事に利用しようと思った。

「こいつを操って、君達からグローブを奪おうと思ったんだ」

邪鬼は、妖精族しかポーチから物を取り出す事ができない事を知っていた。

そして、上手く勇気達を騙し、グローブを預かるフリをさせようと考えたのだ。

「それを実行しようと思った時、今度は君達を見張っていた狼男が帰ってきた。

君達が台のある場所を見つけたって言うんだよ」

邪鬼は、グローブだけではなく、台とカードも奪おうと考えた。

結果、カードは手に入らなかったが、グローブと台は手に入れる事ができたのだ。

「こんなに上手く行くとはね。これで全て揃ったよ。こいつはもう必要ない」

邪鬼は、プーカを叩くように払い除けた。

「うわー！」

「プーカー！」

勇気は慌てて、プーカの元に駆け込み、キャッチする。

プーカの身体から、黒い煙が四散した。

「う、ううウ」

プーカはまるで眠りから覚めたかのような表情で、勇気を見つめた。

「オ、オイラ……一体何ヲ？」

「邪鬼に操られていたんだ」

「そんナ！」

「そいつにはもう用はない。他の怪を呼ぶからね」

「他の？」

「全ては、見捨里市から始まるんだ！」

邪鬼は、狼男に目配せする。

狼男は、持っていた台を、邪鬼の傍に置いた。

「やめろ！」

勇気は、邪鬼を止めようとした。

しかし、それよりも早く、邪鬼は台の上にパンドラの箱を置いた。

そしてその中に、三つのグローブを入れた。

「残念だったね。もう遅い！」

瞬間、箱が黒く輝いた。

—ゴオオオオツ

次の瞬間、パンドラの箱から、黒い煙が飛び出す。

「これは!？」

勇気とディアーナは近づこうとするが、煙の勢いが強く、近づく事ができない。

煙は、止まる事なく箱の中から溢れ続ける。

空は、大量の黒い煙に覆われ、真っ暗になっていった。

「ついに願いが叶った。人間どもは終わりだ！」

邪鬼は、刀を振るう。

空の闇に一筋の罅が入った。

—ピキ ピキピキピキピキ

罅が広がっていく。

「この見捨里市は、君達のような特別な力を持つ者達が住んでいる。それで僕は気づいたんだ。

この町自体が、かつてのアトランティス大陸のように特別な力を持っている事にね。

特別な力がある場所は、怪を集めやすくなるんだ」

邪鬼は、空にできた罅を見つめた。

「僕の願いは、ありとあらゆる怪を呼び寄せる事。

アトランティス大陸では、その願いは叶わなかったが、やっと実現する事ができたよ」

—アアアア ウウウウ

罅の中から、呻き声が聞こえて来る。

「人間どもよ、滅びるがいい！」

—バリンツ

罅が割れ、空に黒い巨大な穴が現れる。

その穴から、無数の怪達飛び出してきた。

「オオオオオッ!!」

怪達が、町の四方に散らばっていった。

「こんなのって!」

羽心とジャネットが声を上げる。

邪鬼は、穴から怪達が出て来るのを見て、笑う。

「さあ、やれ!」

邪鬼は声を上げる。

「せいぜい、そこで絶望を感じていればいい!」

邪鬼は笑いながら、跳ねるように、狼男と共に町の中へと消えていった。

「もう、終わりだわ……」

羽心は、呆然とその場に立ち尽くす。

「全部、オイラのせいだ……」

プーカも、勇気の手の中で嘆く。

だが、勇気、ディアーナ、ジャネットは大きく首を横に振った。

「プーカのせいなんかじゃない。悪いのは、邪鬼だ」

勇氣達は、二人を見つめた。

「羽心、プーカ、絶望している場合ではありません」

「あたし達が戦えるの、忘れたの？」

「町のみんなを助けないと！」

「勇氣、ディアーナ、ジャネットの言う通りだ。諦めるのはまだ早い」

キユウは、勇氣達を見た。

「怪を倒せば、その怪が起こした全てはリセットされる。

どんな状況になっても、邪鬼を倒せば、全てが元に戻るんだ」

「ああ、そうだよね」

勇氣、ディアーナ、ジャネットは、穴から出て来る怪達を睨む。

羽心もその横に立ち、プーカも羽を震わせ、空中に浮かぶと、同じように怪を見た。

そんな彼らを見て、ディアーナはこう言った。

「パンドラの箱にはあらゆる災いが詰まっています、その箱を開けたから世界に災いが飛び散った。

でも、最後に一つだけ、あるものが残ったの」

「それって」

「『希望』よ」

伝承では、パンドラの箱を開けたために世界中に災いが飛び散ったが、辛うじて箱の中には希望だけが残った。

いや、厳密には絶望の未来を知る予知能力だが、

それが飛び出なかつたおかげで人類は希望を抱くようになったのだ。

「そうか。僕達は、見捨里市を救う『希望』なんだ」

「その意気よ。だから、ここで折れるわけにはいかないわ」

勇気達は、ディアーナの言葉で自身が見捨里市を救う希望だという事を理解し、自分達が町を守らなければ、と思った。

キユウはそんな彼らと共に立ち、口を開いた。

「さあ、怪を倒しに行くよ。——怪狩りの時間だ！」

e p i s o d e 7 | L a s t B a t t l e (

最後の戦い！

1 | 町を襲う怪達

「これは悪い夢だ！」

「……だろうな」

教師の原末は、数人の子供達と、四人の聖職者と共に、商店街を走っていた。

日頃、商店街など、人が多いところでは走らないようにと子供達に注意している。

しかし今は、暢気に歩いている場合ではない。

「このままじゃ、あいつらに襲われる！」

—ガタガタガタツ

背後の店の中から物音が響く。

同時に、獣のような呻き声も聞こえてきた。

「オオオアア シャアアア」

店の中から、クマのようなバケモノ——灰色熊が出てきた。

後ろには、蛇のような細長いバケモノ——キラ・スネークもいる。

「先生！」

桐谷花恋が、泣きそうな声で叫ぶ。

彼女の横には、蒲谷亜衣と志水拓馬もいる。

皆、原末が担任をしている6年2組の子供達だ。

「せいっ！」

「それっ！」

「やっ」

「×△☆……」

聖職者は鞭を振り、剣を振り、拳と不思議な言葉でバケモノに立ち向かった。

彼女達は、伊達に戦闘訓練を積んでいないのだ。

「あ、あんな女の子が、怪物と戦えるなんて……！」

「先生、あの人達は町を守ってるんです。驚かないでください！」

原末は腰を抜かしかけるが、花恋の一言で何とか立ち直った。

10分ほど前。

原末は休日を利用し、商店街の書店にやって来た。

すると、花恋達もいた。

花恋は、学校の図書委員をするほど、本が好きだ。

そのため、図書室にはない面白い本を、亜衣達に紹介しようと思つたらしい。

原末は、そんな花恋に感心しながら、「気をつけて帰るんだぞ」と言つて、別れようとした。

その時、どこかからバケモノが現れたのだ。

原末は花恋達を連れ、慌てて店から飛び出した。

そこに四人の聖職者が現れたというわけだ。

現在。

商店街には、二体のバケモノ達がいる。

多くの人達は逃げ出したが、それと同じぐらいの人達がバケモノに襲われていた。

「こんな夢だ。現実のわけがない！」

「ええい、臆病者め！」

聖職者は容赦なく、バケモノを鞭で打ち据える。

「アネツサ、ナタリー、ティス、手加減はするなよ！」

「はい！」

四人が何とか食い止めているが、このままでは捕まってしまう。

原末は、花恋達の方を見た。

(何としても、この子達だけでも逃がさないと)

原末はギョツと歯を噛みしめると、その場に立ち止まった。

「先生、何してるんですか!」

「あの人達に任せて、早く逃げなきゃ!」

「先生が時間を稼ぐ。だから、君達は逃げるんだ!」

日頃、怒ってばかりいて、子供達には人気がない。

その事は、自分でもよく分かっていた。

だが、それでも彼らの事が好きだった。

「俺は……世界一素敵な先生になりたいんだ!」

原末は、バケモノの方に顔を向けると、そのまま突進しようとした。

しかし、恐怖のあまり、足が上手く動かない。

両足が絡み合い、そのまま転んでしまった。

「ぬわっ」

「先生!」

「オオオオオ」

灰色熊が、原末に襲いかかる。

「うわああ!」

「まづいー」

聖職者は走って原末を助けようとした。

その時……。

「お前の相手は」

「このあたしー」

男女の声が聞こえた。

目を開けると、少し離れた場所に、一人の少年と上のエルフが立っている。

勇気とディアーナだ。

二人の横には、羽心とジャネットもいて、プーカも飛んでいる。

「し、真之?? それに、あの娘は……」

「よし、私達は別の場所に行こう」

聖職者はその間に、勇気達から離れた。

「さあ、あたしを襲ってみなさいー」

ディアーナは、灰色熊を挑発するかのように、手招きをした。

「オオオオオオオ」

灰色熊は、ディアーナに向かって突進する。

ディアーナは、そんな怪から目を離さず、呪文を詠唱した。

「ほのおのせいれいよ、やとなりてきをつらぬけ！ Fire Shoot」
瞬間、炎の矢が怪を打ち据える。

「かぜのせいれいよ、みえざるしようげきを！ Wind Blast」
さらに、ディアーナは呪文を唱え、強風で怪を店の壁にぶつけた。

「ドオオオオ！」

怪はその場に崩れ落ちる。

身体から黒い煙が出てきて、四散した。

「あなたはこつちよ！」

「私達が何とかします！」

一方、羽心とジャネットは、キラール・スネークの傍に駆け寄った。

「シヤアアアアア」

キラール・スネークは、口を開き、羽心を呑み込もうとする。

「こちらです！」

だが、羽心はジャネットの号令で素早く動き、それを避けた。

キラール・スネークは逃げた羽心の方に頭を向ける。

すると、今度は反対側に、プーカが飛んできた。

「こつちにもいるゾ！」

キラー・スネークはその声に気づき、プーカを呑み込もうと、頭を向け、襲いかかった。

しかし、プーカも素早くそれを避ける。

「ほらっ、こつちよ！」

「こつちだゾ！」

「ついてきなさい！」

羽心とプーカは、交互に声を出し、キラー・スネークを挑発する。

ジャネットは旗を掲げ、羽心とプーカを応援する。

そのたびに、キラー・スネークは二人の方に頭を向け、身体を動かしていった。

ジャネットからは、完全に目を逸らしている。

「シャアアアア」

やがて、キラー・スネークは頭を動かさすぎたせいで、身体が絡まってしまった。

羽心とプーカは、最初から動けなくするために挑発していたのだ。

「シャアアアアア」

キラー・スネークから黒い煙が出て、四散する。

勇気達は、見事二体の怪を倒したのだった。

「やったな、みんな！」

「こんなに上手く行くとは思わなかったわね」

「オイラも役に立ったゾ」

「やはり私は聖女でした」

「勇者の名に恥じなかったでしょう」

「ああ、流石妖精族の王子だね」

勇気達は無事怪を倒す事ができて、喜ぶ。

そんな姿を、原末達はキョトンとした表情で見ていた。

「ほ、ほんとに、真之だよな？」

「羽心ちゃん、なんかカッコよかった。その人も、なんか素敵」

花恋の言葉に、ディアーナとプーカが顔を向けた。

「だって、あたしは勇者だから」

「オイラもカッコよかっただろ？」

「ええつと、あなたは」

小さな男の子と背が高い女性を見て、花恋達は目をパチクリさせる。

一方、勇気は、原末に話しかけた。

「先生、どこか安全な場所に避難してて下さい」

「あ、ああ」

何が起きているのか分からないが、勇気達に助けてもらった事だけは理解できる。

「真之、君達も一緒に」

原末はそう言うが、勇気は首を横に大きく振った。

「僕達は、こんな事をした元凶を捕まえなさいといけません」

「……真之」

その時、キユウが飛んで来た。

「勇気、邪鬼のいる場所が分かったよ！」

「ほんとに!? 行こう！」

勇気達は真剣な表情になった。

「お、おい、真之、誰と喋ってるんだ？」

原末は、勇気達と同じように空を見るが、そこには誰もいない。

「ええっと、それは」

「勇気、急ぎましょう！」

「あ、ああ。先生、花恋ちゃん達と一緒に隠れて下さい。みんなを守って！」

「真之……」

原末は、勇気、羽心、ダイアーナ、ジャネットの顔をじつと見つめた。

勇気達は、強い決意を固めているようだ。

今更何を言っても、彼らは行ってしまふだろう。

「……分かった、真之、それに白鳥。その女も。

君達が何をしようとしているのかは分からない。

「ただ、この状況を何とかしようとしているんだろう？ 桐谷達の事は先生が絶対守る。」

「だから、君達も必ず帰って来るんだ。先生は待っているからな！」

「はい！」

「勇気と羽心は、大きな声で返事をした。」

「いつもと同じ日常を取り返すためには、邪鬼を倒すしかない。」

「羽心！」

「ええ！」

「勇気達は、駆け出した。」

2 — 強敵の弟

「まったく、こんな奴と渡り合うとはねえ！」

麗羅、つるぎ、揚羽、カリオストロの四人は、邪鬼が呼び寄せた怪と渡り合っていた。彼らが相手しているのは、九尾の狐だ。

麗羅達はかつて邪鬼に仕えていたが、人間を恐怖に陥れるやり方に不満を抱いて離反した。

その怪に反撃を受けたのだが、苦々しい顔をするのは当然だ。

「麗羅君、引くつもりはないよね？」

「当たり前さ！ 揚羽、カリオストロ！ こいつらをやつつけるよ！」

「はーい！」

「もちろんだ」

麗羅達はそれぞれの武器を身構えて、九尾の狐と応戦した。

悪党にも、悪党なりの誇りがあるのだ。

ノノ、アプ Ril、チエイニー、愛衣が相手しているのは、大蜈蚣——デビルドージャーだ。

「うわーん、むかでこわいよー！」

「狼狽えるな！ 俺達は怪であっても、この町を守る正義の味方なんだ！」

「これくらいで怯んじやいけません！ 愛衣も一緒に戦いますから！」

泣き叫ぶノノを、アプリルと愛衣が激励する。

ノノは何とか泣き止んだ後、意を決して鳥に変身する。

「その意気だぞ、ノノ。では、儂も戦おうとするかのう」

そう言つて、チエイニーは血液から槍を生成した。

「これこそが、僕が待ち望んでいた光景だ」

見捨里市の一角に、見捨里タワーが建っている。

赤い鉄塔で、町の名物だ。

そのタワーの一番上にある展望室からは、町を一望する事ができ、

休日は町の人達で賑わっている。

しかし今は、展望室にはたった一人しかいない。

邪鬼だ。

邪鬼は、展望室から眼下に広がる町を眺めていた。

町は、至るところから火の手が上がり、人々の悲鳴が飛び交っていた。

無数の怪が、町の人々を襲っているのだ。

「もつと襲え。人間達に恐怖を与えろ」

邪鬼は、不気味な笑みを浮かべる。

「この町の人間達を全て襲った後は、世界中の人間を怪に襲わせてやる。

やれ、もつとやれ。ハツハツハ、ハーツハツハツハ」

展望室に、邪鬼の笑い声が響いた。

「邪鬼は、見捨里タワーにいるのね！」

勇氣達は、キユウと共にタワーに向かっていた。

「今度こそ絶対に逃がさないわよ」

「うんうん。オイラを操った事、後悔させてやるゾー！」

「ディアーナ、あのカードだけは、なくさないでね」

羽心達が意気込む中、勇氣はふと、キユウの方を見た。

キユウは、何故か神妙な顔つきになっていた。

「キユウ、どうしたの？」

「ああ、必死に考えてるんだ」

「考えてるって何を？」

「どうすれば邪鬼を倒す事ができるかだよ」

「それって」

勇氣は、自分の右手を見てハツとした。

「そうか、グローブはもうないんだった……」

「箱は、黒い煙が出る時に消えちやったわよね？」

「それって、つまりグローブも消えちやったって事？」

勇氣の言葉に、キユウは「ああ」と答えた。

「じゃあどうやってあいつを倒せばいいんだ？」

「キユウさん、邪鬼の『弱点』はないの？」

「グローブ以外に『弱点』はない。まったく、笑えないよね」

キユウは、力なく答えた。

「それじゃあどうすれば……」

勇氣達は動揺する。

邪鬼の元に辿り着いても、倒す方法がなかったのだ。

「グローブ以外にも、切り札はあるわ」

「切り札？」

「それは、後でのお楽しみよ」

しかし、ディアーナには自信があった。

キユウは、もう一つの武器をディアーナに渡したからだ。

彼女は、二刀流と魔法も使えるため、諦める気など全くなかった。
その時……。

「無駄な努力はしない方がいいぞ」

男の声が聞こえた。

道路の前方から、一人の男が現れた。

背が高く、全身黒づくめの服を着ていて、

羽織った黒マントの裾が広がり、大きなコウモリのように見える。

「何故、お前が！」

「……！」

ドラキュラ伯爵。

勇気とディアーナは、この男を知っていた。

「倒したはずなのに！」

勇気がそう言うと、キユウが口を開いた。

「この男は、あのドラキュラ伯爵じゃない」

「えっ？」

男は、ニヤリと笑った。

「その通り。私は、ドラキュラの弟、ヴァーニーだ」

ヴァーニーは、オールバックの髪から一束だけ垂れた前髪を撫でるように触った。

「ヴァーリー？」

「ヴァーニーだ！ ……こほん。兄は、こんなにカツコいい髪形をしてなかっただろう？」

顔はよく似ているが、ヴァーニーはドラキュラとは違い、

無精ヒゲが生えていて、服もあちこち汚れている。

「弟がいたなんて」

「ドラキュラ……。勇氣、ダイアーナ、私、何となく覚えてるわー」

羽心は以前、ドラキュラに操られていた花恋に襲われそうになった事があった。

その時の記憶は、勇氣達がドラキュラを倒した事によってリセットされたが、

特別な力に目覚めた羽心は、僅かに覚えていたのだ。

「兄は、自分で動くのが嫌いで、手下のコウモリを使ったり、人を操ったりしてばかりいた。」

しかし、私は違う。私は自ら動くのが好きだからねえ」

ヴァーニーは、笑みを浮かべる。

鋭い2本の牙が、キラリと光った。

ダイアーナは縮こまりながら、ジャネットの後ろに隠れる。

「だけど、どうして外にいられるんだ？」

空は黒い煙に覆われていたが、まだ夕方前だった。

太陽の光は、僅かだが地上にも届いている。

吸血鬼であるドラキュラは、夜しか活動できないはずだった。

それは、弟であるヴァーニーも同じはずなのだ。

すると、ヴァーニーは、嬉しそうに自分の手や身体を見た。

「全て、あの邪鬼という少年のおかげだよ」

ヴァーニーの身体から黒い煙が漏れ出す。

「まさか」

「ほう、察しがいいね。私はあの少年に強くしてもらったのさ」

「そんな！」

ヴァーニーは狼男と同じように、パワーアップしていたのだ。

「おかげで、太陽の下でもこうやって動く事ができる。そしてこんな能力も手に入れたんだ。」

「ふんんん！」

ヴァーニーは全身に力を入れる。

マントが破れ、背中から大きな2枚の黒い羽が生えた。

「どうだい、カッコいいだろう〜?」

ヴァーニーは、羽を飛ばたかせると、宙に浮いた。

ディアーナとジャネットは、彼を白い目で見ていた。

「分かっていると思うが、私にはニンニクも効かないよ。つまり、私には弱点はないという事だ」

兄であるドラキユラは、勇気達との戦いの中で、召し使いにニンニクを口の中に押し込まれ、

狼狽えたところに太陽の光を浴びて、青白い炎に包まれて消滅した。

その戦い方が、できないというのだ。

「くっ、早く邪鬼のもとへ行きたいのに」

キユウは苦々しい表情を浮かべる。

「キユウさん、どうするの?」

「さつき倒した怪達と違って、なんか強そうだな」

羽心とプーカも、ヴァーニーを見て困惑していた。

ディアーナとジャネットは、一歩引いている。

「私は無敵だ。兄にも、私のこの強さを見せたかったよ」

ヴァーニーはそう言いながら、眉間に皺を寄せた。

「兄は、私の事をコウモリよりも役に立たないといつも言っていた。

だが、私はそんな兄を倒した君達に勝つ。

私の方が、兄より優れた吸血鬼である事を証明してやるんだ！」

ヴァーニーは、口を大きく開き、牙を剥き出しにした。

「私は兄より凄いだああ!!」

ヴァーニーは、勇気に襲いかかった。

「勇気！」

キユウは、空中を飛び、攻撃を止めようとする。

だが、幽体であるキユウの手は、ヴァーニーを掴む事ができなかつた。

「逃げるんだ、勇気！」

キユウは、勇気に向かって叫ぶ。

しかし、勇気はその場から一步も動かない。

「怯えているようだね！」

ヴァーニーが笑う。

すると、勇気は目を大きく開いた。

「お前なんか怖くない！」

次の瞬間、勇気は傍に落ちていた石を拾った。

そしてその石を、襲いかかって来るヴァーニーの口に向かって突き出した。
ーガチンッ

ヴァーニーの口の中に、拳大の石が押し込まれる。

その衝撃で、鋭い牙が2本とも折れた。

「うぎゃああ!!」

ヴァーニーはその場に倒れると、口を押さえてのた打ち回る。

「わ、私によ、歯ぎゃああ!!」

ヴァーニーは、勇気を睨んだ。

「許しやにやい!!」

ーズズズッ

ヴァーニーの両手の爪が伸び、剣のようになる。

「お前まふえを刺してやりゆ!!」

その爪で、ヴァーニーは勇気を突き刺そうとした。

「うわああ!!」

勇気は、悲鳴を上げて横に逃げる。

「「「勇気!」」」

「勇気クン!」

羽心、プーカ、ディアーナ、ジャネットが叫ぶ。

「きやきやきや、怖いんだにや！」

ヴァーニーは、逃げた勇氣の方に爪を向け、そのまま勢いよく突き刺そうとする。

「かかったな！」

瞬間、勇氣がその場にしゃがんだ。

—ズサツ

10本の爪が、家の塀に突き刺さった。

「にやんだ？ にゅおお！」

ヴァーニーは必死に爪を抜こうとするが、爪は全く抜けない。

「勇氣、大丈夫ですか？」

「ああ、怯えたフリをしただけだ」

勇氣は、ヴァーニーを油断させて、塀の傍に誘導したのだ。

「ぬうあああ！ 私は兄ふおり優秀にや！ こんなはずではにやいんだ！」

ヴァーニーは泣きそうな顔で叫び続ける。

だが、爪が抜けず、最早どうする事もできなそうだった。

「みんな、行こう！」

「え、ええ、そうね」

「うくん、なんか拍子抜けだゾ」

「……よく落ち着けましたね」

「もう反省したわよ」

勇気達は、ヴァーニーを放って、見捨里タワーへと向かった。

3 — 見捨里タワーの入り口

「もしかしたら、邪鬼を倒せるかもしれない」

「あのカードもあるしね」

見捨里タワーへ向かいながら、キユウとデИАーナが呟くように言った。

勇気達は走りながら、宙を飛ぶキユウの方を見た。

「僕は今まで、弱点を攻める事によってしか、怪を倒せないと思っていた」

キユウは、ちらりと勇気を見た。

「だけどさつき戦いの戦いを見て、戦い方はそれだけじゃないと思っただけだ」

ヴァーニーは、邪鬼からエネルギーを与えられ、パワーアップしていた。

そのため、弱点である太陽の光やニンニクの臭いが全く効かなくなっていた。

だが、勇気は機転を利かせ、見事ヴァーニーを動けなくしたのだ。

「うん、ヴァーニーだけじゃないわ。人狼と戦った時も同じよね」

あの時、キユウは狭い通路へ逃げようとした。

しかし、勇気は広い空間にあった岩に隠れて、その岩に狼男の顔をぶつけさせたのだ。

「あんな発想、勇者のはずのあたしにはなかったわ」

「そうだね。君はどんな時でも必ず困難を乗り越えようとするんだ」

キユウは、「だから」と言葉を続けた。

「グローブがなくても、邪鬼を倒せるかもしれない。君達ならそれができると思うんだ」

「キユウ」

「だから、あたしにあのカードを渡したのね？」

勇気とディアーナはそれを聞き、嬉しく思う。

キユウはディアーナの言葉を聞いて、頷いた。

同時に、自信が漲ってきた。

「どう戦えばいいか分からないけど、これだけは言えるよ。」

僕は最後まで絶対に諦めない。諦めなければ、希望が見えて来るはずだ」

「言ってくれるじゃない」

その言葉に、キユウは頷いた。

「私も……」

「ええ……」

羽心とジャネットは、勇気の後ろを走りながら思う。

勇気や、ラーの勇者のようになりたい。

心からそう願うのだった。

その時、ふと、羽心はポケットにある物が入っている事を思い出した。走りながら、それを手に取る。

オシリスの鈴。

この鈴は、幽霊を消滅させる力を持っている。

「念のために持つて来てみたけど」

もしかしたら、何か役に立つかもしれない。

羽心は、鈴をギュッと握り締めると、再びポケットにしまった。

その時、一同は大きな交差点に出た。

「あそこー！」

勇気が指を差す。

交差点の右手に見捨里タワーが見えた。

「勇気、羽心ちゃん、プーカ、ディアーナ、ジャネット、覚悟はいいかい？」

「ああ、僕はとつくの昔に覚悟はできてるよ」

「当たり前じゃない！ あたしはラーの勇者なんだから」

「オルレアンの乙女は逃げませんよ」

「オイラもダ。何て言っただって、妖精族の王子だからネ」

「私ももちろん、勇気、邪鬼を倒しましょう！」

「ああ！」

勇氣達は、意を決すると、ゆっくりとタワーへ歩いて行った。
タワーの入り口には、受付があつた。

だが、博物館と同じように、人の姿はない。

「逃げ出したのかしら？」

「怪にやられちゃつたのかモ」

周りの建物は、破壊され、車もひっくり返っている。

人の姿はないが、恐らくこの辺りも怪が襲つて来たのだろう。

「だけど、怪達がどこにもいないのはどうしてなんだ？」

勇氣達は辺りを見回した。

すると突然……。

ードン　ドン

と、地響きがした。

見捨里タワーの傍にある雑居ビルの脇から、大きな影が現れる。

「俺ガ　全員　排除シタ」

巨大な狼になった狼男だ。

「他ノ怪ニ　オ前達ハ　ヤラセナイ　俺ガ　倒スンダ！　ガアアアツ」

狼男は咆哮し、黒い煙が、全身から漏れ出す。

「排除とは、どういう事ですか？」

ジャネットがそう呟くと、何かがこちらに向かって飛んで来た。

「お前にや、絶対に許しやないにや!!」

ヴァーニーだ。

剣のように伸びていた爪が、10本とも折れている。

どうやら、扉に刺さった爪を自分で折り、動けるようにしたらしい。

「私は、兄ふおり優れてりゆんだああ!!」

ヴァーニーは、折れた牙を剥き出しにして、勇気達に向かって急降下してきた。

「邪魔 スルナツ!!」

狼男が、巨大な身体で大きくジャンプした。

急降下するヴァーニーと同じ高さまで跳ぶ。

次の瞬間、狼男はヴァーニーを、その大きな前脚で吹き飛ばした。

「ひぎやああああ!!」

ヴァーニーは、弾丸のような速さで地面に墜落する。

ドオオオオン

地面に大きな穴が空き、道路が揺れる。

穴から黒い煙が出てきて、四散していった。

「邪魔スル奴ハ 排除スルツ!!」

狼男は、地面に着地しながら怒鳴るように言った。

「なんて奴だ」

勇氣は、狼男の凶暴さに戸惑い、ディアーナとジャネットは歯を食いしばる。

この辺りにいた怪達も、皆、狼男にやられたのだろう。

「オ前ヲ 倒スツ!!」

狼男の全身から、さらに黒い煙が漏れ出す。

狼男は咆哮しながら、勇氣に襲いかかろうとした。

だが、勇氣の前に、羽心が立った。

ジャネットもいつの間にか旗を掲げ、真剣な表情をしている。

「待ちなさい」

「相手は勇氣だけじゃないでしょ!」

プーカも、羽心の肩の上に降り立つと、狼男を指差す。

「お前を神殿で撃退したのは、オイラだゾ! ……あの人達もいたんだけどネ」

羽心達は、勇氣、キュウ、ディアーナの方を見た。

「早くタワーに行つて」

「邪鬼を倒すんだ」

「勇者よ、そのカードを使いなさい」

「羽心、プーカ」

「ジャネット」

「今まで、勇気に随分助けられてきたでしょ。今度は私達が助ける番よ」

羽心は、ただ守られるだけの存在ではない。

それを、自分自身の手で証明したかったのだ。

「私はあなたを召喚した事を、誇りに思います」

「おい、狼男、でかけりやいってもんじゃないゾ！

本当に強いのは、知恵と勇気を持つてる者なんだ！」

ジャネットとプーカも、勇気と並ぶほどの勇気をもって、困難に立ち向かおうとしている。

「ガアアア 邪魔ヲ スルナツ！」

狼男は苛立ち、吠える。

「勇気！ 早く！」

「勇者よ……」

勇気は、キユウを見る。

キユウは小さく頷いた。

「チャンスは、今しかない」

それを聞き、勇気とディアーナは頷いた。

「羽心、プーカ、ジャネット、そいつを絶対に倒すんだ！」

「ええ！」

「おう！」

「承知しました」

勇気とディアーナは、タワーの中に入って行った。

「待てエエ!!」

狼男は、脚に力を入れて、ジャンプしようとする。

しかし、そんな狼男を、羽心とプーカが笑った。

「なあに？ 私達を飛び越えて、勇気を追いかけてようっていうの?」

「情けないなあ。」

オイラ達を倒さないまま、勇気クンを倒しても、邪鬼はガツカリするんじゃないかな

?」

「私は羊飼いだった。けれど、私は祖国を守るために戦った。

人狼一人くらいに、私は負けません！」

「ナン、ダ、ト!?!」

狼男は、ジャンプをするのをやめ、羽心達を睨んだ。

「オ前ラカラ、ボロボロニシテヤルウウ!」

羽心、プーカ、ジャネットは、真剣な表情で身構えると、狼男と対峙した。

「消エロオオオオ!!」

狼男は巨大な狼の姿になると、羽心に向かって飛び掛かった。

いくら羽心が特別な力を持っているとはいえ、あの爪で切り裂かれたらひとたまりもない。

死を覚悟した羽心だったが、金属音と共に羽心への攻撃が防がれた。

「ジャネットさん!」

「グウウウウ……」

鎧で覆われた手で、ジャネットは狼男の腕を掴む。

ジャネットは狼男を片手で突き飛ばすと、旗を構えて羽心とプーカの前に立った。

「私に続け! 羽心! プーカ!」

「うん!」

「分かったゾ!」

羽心とプーカはジャネットの鼓舞を受けて、狼男に真っ向から立ち向かった。

だが、まともな武器を持たない人間と妖精なので、狼男は二人を軽く攻撃しては距離を取った。

爪が二人を切り裂き、頬にも傷を与えていく。

ジャネットは全身を鎧で覆っていたので、爪は軽々と弾いていった。

「武器ヲ持タナイ人間ナド 俺の敵デハナイ！」

狼男の爪が、羽心を切り裂き、プーカをボロボロにする。

ジャネットの鎧も、狼男の攻撃の余波を受けて、銀色から灰色にくすんでいった。

だが、羽心、プーカ、ジャネットは、その程度では決して諦めなかった。

何故なら、戦いに必ず勝つと信じているからだ。

「ドウダ！ 人間ドモ！ 俺ノ勝ちダ!!」

狼男が自身の勝利を確信したその時。

その身体からたくさんの黒い煙が漏れ出していく、同時に、身体が徐々に小さくなっていった。

「ナ……何……!?!」

「狼男が、小さくなってる……?!」

「どういう事だ……?!」

慢心していた狼男を羽心とジャネットは観察した。

プーカも縮んでいく狼男を見て怪訝な表情になる。
やがてジャネットは異変の原因にこう結論付けた。

「……恐らく、もうすぐ時間が切れるのでしよう。力を使えば使うほど、弱まっていく……」

「そっか……そういう事だったのね。じゃあ、時間切れまで耐えればいいのかね」
「よっし！ オイラ、そういう事なら得意だゾ！」

ジャネットの助言により、羽心達は狼男の攻撃に必死に耐え続けた。

いくら強力な攻撃だとしても、倒されなければ決してどうという事はない。
ジャネットも、旗を構えながら、攻撃に耐える羽心達を応援した。

すると、狼男はみるみるうちに縮み、羽心と同じくらいの大きさになった。

「今がチャンスだ！」

羽心、プーカ、ジャネットは、一斉に狼男を攻撃した。

「又……何故ダ……ナ!? 身体ガ……!?!」

狼男は慌てて三人を倒そうとしたが、縮んでしまっていて、素早く動く事ができなかつた。

それでも、狼男は三人を倒そうと、その身体で必死に爪を振るつた。

「……!?!」

その時、狼男の動きが止まった。

羽心が狼男をじつと観察すると、

次の瞬間、狼男の身体から大量の黒い煙が漏れ出し、その場に倒れた。

「グ……アノ方コソガ……神……ナノニ……」

そして狼男は黒い煙になって、そのまま消滅した。

「どういう事かしら……」

「ですが、人狼を倒す事はできました。羽心、プーカ、合流してください！」

「……ああ」

4 — 怒りと絶望

「大丈夫よね。羽心達は絶対に、あいつを倒せるわよね」

「うん、信じてるよ。だって、羽心達は僕の、大切な仲間だから」

勇氣、キユウ、デИАーナは、タワーの階段を駆け上がっていた。

1階のフロアにも、2階のフロアにも、邪鬼はいなかった。

他に考えられるのは、展望室だけだ。

階段を上がるたびに、踊り場の窓から町が見える。

町のあちこちで火の手が上がっている。

怪が暴れているのだろう。

勇氣とデИАーナは、その景色を見ながら、苦々しい表情になっていく。

「早く、みんなを助けないと」

「あたしみたいのに、まともに戦える人はいないしね」

怪に襲われた人々は、恐怖を感じているだろう。

怪我を負い、苦しんでいる人達も大勢いるはずだ。

元に戻すには、邪鬼を倒すしかない。

全ては勇氣と、ラーの勇者・ディアーナにかかっていた。
やがて、勇氣、キユウ、ディアーナは、展望室に到着した。

「へえ、まだ追つて来るとはね」

展望室の窓辺に、邪鬼が立っている。

「邪鬼！」

勇氣とディアーナは、険しい表情で身構える。

ディアーナは既に、レイピアとダガーを抜いていた。

「狼男は彼女達に任せたのか。まったく、全員倒せと言ったのに」

「邪鬼、これ以上あなたの好きにはさせないわ！」

「お父さんの身体も必ず返してもらおう！」

「威勢がいいねえ。だけど、いい加減諦めた方がいいと思うよ。」

「君達が僕に勝てる可能性があったのは、グローブがあったからだろう？」

「たとえ、グローブがなくても勝つてみせる！」

僕とキユウ、それにディアーナはそのためにここに来たんだ」

勇氣の横に、キユウも立つ。

ディアーナは、頷いた。

「勇氣、ディアーナ、行くよ！」

「ああー！」

「ラーの勇者、参るー！」

三人は、同時に駆け出した。

「あくあ、僕はそういう熱い思いだけで行動する奴が、一番嫌いなんだ！
たとえ相手が善良な怪でもね！」

邪鬼は刀を抜いた。

勇気達は警戒する。

だが、邪鬼はそんな三人を気にせず、そのまま刀を振るつた。

—シユ

瞬間、刀から、黒い閃光が走る。

その閃光が、キユウの方に向かい、腕に直撃した。

「がっ」

「ちよっ」

キユウは、腕を押さえて、苦悶の表情を浮かべた。

「キユウー！」

「忘れたのかい？ 僕の刀は幽霊でも斬る事ができるんだよ」

以前、キユウはオシリスの鈴の音を聞いて弱つたところを、

邪鬼に刀で斬られ、消滅してしまった。

「もちろん、キユウだけじゃない。君達にも」

邪鬼は、再び刀を振るう。

—シユ

再び、刀から黒い光が走る。

勇気は避けようとするが、光が足に掠った。

「うわっ！」

「勇気！」

「残念だったねえ。僕に近づく事すらできないなんて。ほうら、行くよ！」

「そうはいかないわ！ 剣ならあたしも使える！」

ディアーナはレイピアとダガーを邪鬼に向かって振りかざした。

ダガーで刀を絡め取り、レイピアで邪鬼の身体を突き刺す。

「がっ！」

「ディアーナ、殺しちゃダメ！ あれは、お父さんなんだよ！」

「それだけで躊躇うほど、あたしは甘くないわ。邪鬼が取り憑いている以上、やるしかないのよ」

ディアーナはレイピアとダガーを巧みに使い、邪鬼の攻撃をいなしていった。

「あつー！」

だが、一瞬の間を見せしてしまい、邪鬼は素早くディアーナから離れた。

「ハツハツハ、人間は、そして勇者は、なんて愚かな生き物なんだろうね」

邪鬼は笑いながら、倒れた勇氣達に近づいて来た。

「僕は、別に生まれたくてこの世に生まれたわけじゃない。

だけど、恨みや妬みや嫉みといった人間の負の感情が、僕という怪を生み出したんだ」

邪鬼は、倒れている勇氣達を見る。

ディアーナは急いで、彼らのところに走った。

「僕は、君達人間が隠そうとしてきた、本能そのものだ。

平和を望みながらも争い、平等だと言いながら勝つ事にこだわる愚かな君達そのもの

なんだよ」

その言葉を聞き、勇氣は顔を上げる。

ディアーナは切り札を使うため、レイピアとダガーを鞘にしまう。

邪鬼の顔から、いつの間にか笑みが消えていた。

「僕は人間が憎い。それは人間が他人を憎む生き物だからだ。

僕は人間達がやりたいと思っている事を実行しているに過ぎないんだ」

「そうよね」

「……」

ディアーナは頷き、勇氣は、立ち上がろうとする。

そんな勇氣の襟首を、邪鬼が掴んだ。

「君もちやくんと思えば、理解できると思うよ」

邪鬼は勇氣を掴んだまま、窓辺に歩き出す。

「は、離せ！」

「勇氣！」

キユウは立ち上がろうとするが、身体が上手く動かない。

邪鬼は、窓の前までやって来ると、勇氣の顔を外に向けさせた。

「ほうら、よく見るんだ。君だって、怪を憎く思うだろう？」

町では、先程見たよりもさらに火の手が上がっている。

巨大な怪が、ビルを壊そうとしている。

数え切れない怪達が、笑いながら人々を追いかけている。

「怪を狩るのは、憎いからだ。どうだい、僕や怪の事が憎いだろうか？」

邪鬼は、勇氣の襟首から手を離すと、高笑いをした。

その言葉に、ディアーナはついに我慢できなくなり、邪鬼に掴みかかった。

「好き勝手言うんじゃないわよ。確かに人間には心の闇があるわ。」

でも、それは本当は消し去るべきではないもの。だから、受け入れるべきなのよ」
「……ラーの勇者め……」

そもそも、人間の心の闇は、決して消し去ってはならないものだ。

心の闇を乗り越えてこそ、人間は成長する。

キユウはそれを考えていたのか、ディアーナに超融合のカードを渡したのだ。

そして、勇氣は邪鬼の方を見た。

「まだだ。僕はまだ……諦めるつもりはない」

勇氣は、崩壊しようとしている町を背にして、邪鬼を睨んだ。

「ふっ、その根性だけは褒めてあげるよ。だけど、これを見ても同じ事を言えるかな？」

邪鬼は、刀を振り上げると、街を斬った。

空間に、黒い穴ができる。

その穴の向こうに、風景が見えた。

「あれは……」

勇氣には、見覚えがある。

穴の向こうに、江戸時代の町並みが広がっていた。

「ほらほら、みんな、美味しい煎餅があるぞ」

長屋の一角で、優しそうな顔をした男が、近所の子供達に煎餅を配っていた。

キセル職人の巳之吉だ。

巳之吉はかつて、雪女と一緒に暮らしていた。

勇氣はキユウとディアーナと共に、そんな巳之吉の元へ行き、交流した事があったのだ。

巳之吉は、子供達が大喜びで煎餅を食べる姿を見て、嬉しそうに笑った。

「ねえ、あれなあに？」

ふと、一人の男の子が空を指差した。

「どうしたんだい？」

巳之吉は、空を見上げる。

すると、空に罅が出来ていた。

その罅から、黒い煙が漏れ出している。

「アアアアア、ウウウウ」

ヒビの中から、不気味な呻き声が聞こえる。

「ありやあ、何なんだい？」

罅はさらに大きくなり、ピキピキと音を立てて割れていく。

その罅の向こうに、いくつもの邪悪な目が光っていた。

見捨里市。

勇氣とディアーナは、タワーの展望室に浮かぶ穴から、その光景を見ていた。

「まさか、巳之吉さんのいる時代にも怪達を!？」

「これが目当てだったのね……」

戸惑う勇氣と、唇を噛み締めるディアーナを見て、邪鬼はニヤリと笑った。

「何を言っているんだい。こんな楽しい事、彼の時代だけにするわけないだろ」

「何だと!？」

「何ですって!？」

邪鬼は、さらに刀で宙を斬る。

空間に、先程と同じような穴がいくつもできた。

その向こうに、次々と風景が映し出される。

それを見て、勇氣とディアーナは目を大きく見開いた。

「そんな……」

それらの風景にも、見覚えがあったのだ。

一番端の穴の中には、太った保安官の姿が見えている。

フラットウッズ・モンスターと戦った時に、協力してくれた保安官だ。

彼は、空を見て呆然となっていた。

巳之吉の町と同じように、黒い煙を出す罫が現れていたのだ。

その横の穴には、青いスカーフを頭に巻いた女性の姿が見える。彼女は、弓を持っていた。

フアフロツキーズと一緒に倒した、リサだ。

リサは、村の人達と共に、空に現れた罅を見て戸惑っていた。

次に、その横の穴には、二人の少女の姿が見えていた。

ブーカと出会った妖精事件の、エルシーとフランシスだ。

二人は、罅の中から聞こえて来る不気味な呻き声に怯えていた。

様々な時代に、怪達が現れている。

さらに、その横の穴には、村人の姿が見えた。

ジャネットの故郷・ドンレミ村の村人だ。

黒い煙が漏れ出している罅を見て、村人は恐怖していた。

他の穴にも、勇気達が知っている人達の姿が見えていた。

皆、怪を見て恐怖に慄いていた。

「何て事を……」

その光景を見て、キユウは愕然となる。

邪鬼は、この時代だけではなく、全ての時代の人々を苦しめようとしていたのだ。

「これで分かっただろう。君達には、最早どうする事もできないんだよ」

邪鬼は、勇気とディアーナに顔を近づけた。

「どうだい？ 僕が憎いだろう？」

「何だと……？」

「父親の身体を奪い、怪を使って人々を苦しめる。憎くて憎くて仕方がないだろ？」
「確かに……：そうかもしれないわね」

勇気とディアーナは目の前で不気味な笑みを見せる邪鬼を、じつと睨みつける。
全身を震わせ、拳を強く握り締める。

「お前だけは！」

勇気は、握り締めた拳を大きく振り上げた。

「殴っちゃ駄目！」

突然、大きな声がした。

見ると、展望室の入り口に、羽心、プーカ、ジャネットが立っている。

「怒りに任せて殴るなんて、勇気らしくないわよ」

「よく、我慢できましたね」

「羽心」

「ジャネット」

「どうしてお前達か？ 狼男はどうしたんだ??」

邪鬼は、タワーの外で戦っているはずの羽心達がいる事に驚く。

そんな邪鬼に、羽心は真っ直ぐ顔を向けると、堂々と答えた。

「決まってるでしょ。倒してやったわよ、コテンパンに！」

5 — 勇気と希望

羽心、プーカ、ジャネットは、勇気とディアーナの元へ駆け寄る。

あちこち傷を負っていてボロボロの羽心とプーカに灰色になった鎧を着たジャネットト。

その様子は、激しい戦いがあつた事を物語っていた。

「勇気、大丈夫??」

「無事でしたか、ラーの勇者」

「勇者が倒れるはずがないわ」

「羽心達こそ、大丈夫なのか？」

「もちろん」

「大丈夫だから、助けに来られたんだゾ」

「私も何とか耐えました」

「だけど、どうやって狼男を？」

「必死に戦い続けた。ただそれだけよ」

羽心、プーカ、ジャネットは、タワーの入り口で狼男と戦った。

巨大な狼の姿になった狼男は、素早く動き、羽心達を翻弄した。メデューサのいた洞窟の空間よりも広い場所で、

狼男は思う存分、その力を発揮する事ができたのだ。

「あいつは、私達なんか簡単に倒せる、そう思ったんでしょね」

「オイラ達を何度も軽く攻撃しては、距離を取って、楽しそうに笑ってたんだ」

「ええ、あれは全力ではありませんでした」

狼男は、羽心達を完全に弄んでいた。

傷つき、ボロボロになっていく姿を見て、愉快でたまらなかつたらしい。

「ですが、それが大きな失敗でした」

羽心とジャネットは、狼男の身体から出ている煙が、だんだん多くなっている事に気づいた。

同時に、その身体が徐々に小さくなっていった。

「邪鬼が与えた黒い煙は、怪を強くするようです。ですが、その代償があるのです」

狼男は、羽心達を弄ぶのに夢中になっていて、自分の身体の変化に気づいていなかった。

「だから、私達は、狼男の攻撃に必死に耐え続けたの。」

そうしたら、狼男は、私と同じぐらいの大きさになったわ」

羽心、プーカ、ジャネットは、そんな狼男に向かつて、反撃を開始した。

狼男は自分が小さくなった事に気づき、慌てて三人を倒そうとしたが、既に素早く動く事すらできなくなっていた。

羽心達は、そんな狼男に攻撃を続け、追い詰めていった。

狼男はそれでも三人を倒そうとしたが、その時、動きが止まったのだという。

次の瞬間、狼男の身体から大量の黒い煙が漏れ出した。

狼男はその場に倒れ、黒い煙になって、そのまま消滅したのだという。

「強くなれるのには、タイムリミットがあったの」

「強くなる代わりに、命の危険があるという事だネ。」

ええっと、こういうのを人間の言葉で言うト……」

「諸刃の剣」

ディアーナは静かにそう言い、呪文を唱え始めた。

「羽心ちゃん、プーカ、ジャネット。君達も、僕なんかよりよっぽど勇気と行動力がある

ト

キユウはふらつきながらも、邪鬼の方を見る。

「さつき、1つだけ気になる事があったんだ」

邪鬼が何故勇気を怒らせようとしたのか、疑問に思っていたのだ。

「わざわざ、怪に襲われそうになっている色んな時代の人々を見せ、お前は勇気を挑発した。」

いや、今回だけじゃない。お前は出会ったその時から、ずっと僕達を挑発していた」
キユウは少しずつ邪鬼に遊ぶく。

「お前は、あのドラキュラ伯爵と同じだ。自ら動こうとせず、怪達ばかりに人間を襲わせた。」

「だけど、それにはそうしなければならぬ理由があつたんだ」
「理由だと?」

「ああ、お前は激しく動けば動くほど、その身体を維持する事ができなくなるんだろ?」
キユウは、邪鬼の目の前に立った。

邪鬼の肩から、僅かに黒い煙が出ていた。

「あの煙は……」

勇気の言葉に、キユウは「同じだよ」と答えた。

「狼男がそうだったように、邪鬼も攻撃をすればするほど弱っていくんだ」

「くっ」

邪鬼は煙を隠すように肩を触ると、跳ねるように後ろに逃げた。

「どうやら当たりのようだね」

「そうですね」

キユウとジャネットは、邪鬼を見つめる。

「お前は、常に人々の恨みや妬み、嫉みといった負の感情をエネルギーとして得ていないと、

生きていく事ができないんだ」

「だから、怪に人間を襲わせ、人間達が怪を恨むように仕向けました。

勇氣に怒りに任せて殴らせようとしたのも同じ事です。

あなたは、人間が怪に怒りを感じるように仕向けているだけです！」

キユウとジャネットの言葉を聞き、邪鬼は奥歯を噛み締める。

だがすぐに、フツと笑った。

「君達の言う通りだ。だけど、だからってそれが何だって言うんだい？」

邪鬼は、肩から漏れる黒い煙を見た。

「確かにこのまま戦い続ければ、さらに煙が漏れ出し、僕は弱ってしまうだろう。

そうしたら、君達は僕を倒す事ができるかもしれない。

けど、その前に僕が君達を倒せば何の問題もないだろ？」

邪鬼は刀を強く握り締めた。

その瞬間、邪鬼の髪が逆立ち、右目を覆っていた包帯がほどける。

右目は、黒い煙に覆われていた。

その目が、どす黒く光った。

「今ここで、倒してあげるよ！ はあああ!!」

邪鬼は、身体を激しく回転させながら、刀を大きく振り抜いた。

刀から巨大な閃光が走る。

閃光が、一瞬でキユウや勇氣達に襲いかかった。

「E t h e r A r m o r」

—ドオオオオオン

展望室の窓が割れ、ガラスが霏のように地面に降り落ちる。

強い風が展望室の中に吹きつける。

邪鬼の全身から、黒い煙が溢れ出ている。

風が揺られた黒い煙は、悪魔の顔のような形になっていた。

「どうだ、これでも僕を倒せると言うのか？ 僕が本気を出せば、君達なんて一瞬で倒せるんだ。」

分かったか！ 人間が僕に敵うはずないんだ！」

邪鬼は、高笑いをする。

だが、風によって黒い煙が外へと流れ、薄らと何かが見えてきた。

五つの影と、一つの小さな影だ。

「ふう……唱えててよかったわ、魔法拡大したエーテルアーマー」

煙の中から、顔が見えてくる。

勇気とディアーナだ。

邪鬼の攻撃は、魔法で完全に防いだのだ。

その目は、しっかりと前を見つめている。

隣には、キユウがいる。

そして、羽心、プーカ、ジャネットもいる。

「バカなー」

邪鬼は、勇気達が無事だった事に戸惑う。

勇気は立ち上がると、ゆっくりと邪鬼に近づいた。

「お前は、勘違いをしている。確かに人間は誰かを恨んだり、妬んだりする。

だけど、それだけじゃない。僕達人間には、勇気と希望があるんだ！」

勇気は、邪鬼に近づきながら、宙に浮いた黒い穴から見える風景を見た。

「巳之吉さん、怖いよお」

江戸時代の長屋。

子供達が、罅から現れた怪達を見て怯えていた。

しかし、巳之吉だけは違った。

「みんな、安心しろ。俺が絶対に守ってやるから！」

巳之吉は、傍にあつた棒切れを取ると、怪達を見ながら構えた。それを見て、周りの大人達も、武器になりそうな物を取る。

「てめえらが何かは知らねえ。だけどな、子供達は襲わせねえ！」

巳之吉達は、武器を振り上げると、怪達に向かって駆け出した。アメリカ。

太った保安官が、怪達と対峙していた。

後ろには、怯える町の人達がいる。

「俺はどんな相手だろうと、この町の平和を乱す者は絶対に許さん。

それがたとえ、宇宙人だったとしてもな！」

保安官の証である胸のバッジがキラリと光る。

保安官は、怪達を前にしても一步も引かなかつた。

19世紀のイギリスの田舎の村では、リサが弓を使つて、怪達と戦っていた。

「サーカス団で鍛えた弓の芸が、こんなところで役立つなんてね」

次々と的確に矢を放つリサに、怪達はたじろぐ。

「この村を守ってみせる！ 私はこの村が、みんなが大好きだから！」

森の中。

エルシーとフランシスは、必死に怪から逃げていた。

「エルシーお姉ちゃん、怖いよお」

「止まっちゃ駄目よ、フランシス！」

二人は必死に走り続ける。

だが、フランシスはつまずき、転んでしまった。

「きゃー！」

「フランシス！」

エルシーはフランシスに駆け寄る。

そこへ、怪が迫ってきた。

エルシーとフランシスは逃げる事ができず、抱き合つて怯える。

するとそこへ、小さな物体が飛んで来た。

その物体は、エルシーとフランシスの前で止まり、怪から守るように宙に立った。

「この子達に何をするつもりじゃ」

白く綺麗な顎髭を生やした、小さな老人には、羽が生えている。

妖精族の長老だ。

次の瞬間、木の陰から、何人もの妖精達が飛んで来る。

彼らは皆、プーカの仲間だ。

「この子達は森を愛しておル。そんな子達をよくモ。

皆の者、何があつても、この子達を守るのジャ！」

長老の言葉に、妖精達は「おオ！」と声を上げる。

エルシーとフランシスは、そんな妖精達に戸惑いながらも、

自分達も戦おうと、立ち上がつて怪を睨んだ。

「うおおおおおっ！」

ドンレミ村では、村人達が鍬などを持って、怪に立ち向かつていた。

彼らは国を守つたジャネットのために、負けるわけにはいかなかったのだ。

「ジャンヌは国を守るために戦つたんだろ？ だから、こんな怪物ぐらいに怯えるわけ

がない」

「俺達は、ジャンヌのためにも、絶対に怪物に負けるわけにはいかない！」

「何ぼさつとしてんだい！ 怪が怖いのは、まともに戦えないからだろう！」

アンタ、戦えないのかい!？」

「キミが悲しい顔だと、ボクまで悲しくなつちゃう。キミ達に似合うのは、笑顔だけだ

よ」

「アタイね、ここまで来てずっと頑張つた。だから、アタイ、応援する！」

「私にも魔術師の誇りがある。たとえアウトローでも、私には信念がある」
かつて邪鬼に仕えた、四人の盜賊。

「お前は一人じゃない。私達仲間がいる」

「私達は、あなたを応援しています」

「それくらいで諦めたら、あなたじゃないわよね」

「テイス、どんな時でも、諦めない」

見捨里市で怪と戦った、四人の聖職者。

「ノノ、ぜつたいにあきらめない。だって、おわりはじぶんできめることだもん」

「俺達は人間と共存したいんだ。だから、怖がらせるなんてしねえよ」

「儂はお主らを信じておる。邪鬼を退ける事をな」

「愛衣はアプ Ril 様を愛しています。だからこそ、自分を奮い立たせる事ができるので
す」

見捨里市の路地裏で暮らしていた、四人の怪。

他の穴から見える様々な時代の人達も、盜賊や聖職者や怪も、皆、諦めていなかった。
勇氣は、そんな彼らを見て、やがて、邪鬼の前に辿り着いた。

「みんな、勇氣を出して戦おうとしている。お前の野望は叶う事はない！」

6 — 最後の時

「ふざけるな！」

邪鬼の全身から、黒い煙が漏れ出す。

右目からも、さらに黒い煙が溢れ出る。

「人間は弱い！ 僕に敵うはずなどない！！ ああああ！！」

邪鬼は刀を大きく振り上げ、勇氣とディアーナを斬ろうとした。

「勇氣！」

「ディアーナ！」

キユウ達が叫ぶ。

だが、勇氣とディアーナは冷静だった。

「邪鬼っ！！」

次の瞬間、勇氣は振り上げられた刀に怯える事なく、邪鬼に体当たりした。

「ぐあっ！」

—カチャン

体当たりを受けた衝撃で、邪鬼は刀を落とす。

「ぐう!!」

邪鬼は、落ちた刀を拾おうとするが、そんな邪鬼の身体を勇気が掴んだ。

「お父さんを返せ!」

勇気はそのまま邪鬼を押し倒す。

「邪魔をするな!!」

邪鬼は、勇気の手を振りほどこうとする。

だが、勇気はさらに強く掴んだ。

「ええい、離せ!」

「離すもんか!!」

勇気は、邪鬼を必死に押さえ込もうとする。

しかし、邪鬼は少しずつ手を伸ばし、刀を握り締めた。

「これで終わりだ!」

邪鬼は、刀の刃を勇気に向け、突き刺そうとした。

そんな邪鬼の腕と身体を、誰かが掴んだ。

羽心とジャネットだ。

横には、プーカもいる。

「そんな事させない!」

「怪がみんな人間を憎んでると思つたら、大間違いだゾ！」

「私はイギリスに裏切られ、炎の中に消えました。ですが、もうイギリスは恨んでいません！」

「貴様ら！」

腕と身体を押さえられ、邪鬼は再び刀を落とす。

勇氣はその刀を掴んだ。

「勇氣、あたしにそれを貸して！」

ディアーナが声を上げる。

勇氣は頷くと、彼女に刀を投げ飛ばす。

「貴様ああああ！」

邪鬼が暴れるように手足を動かし、羽心達を振り払う。

「許さんぞおお!!！」

邪鬼は、勇氣、キユウ、ディアーナのもとへ駆け寄ろうとした。

瞬間……邪鬼の動きが止まった。

「が、あ、ああ」

全身から黒い煙が漏れ出す。

邪鬼は大きくよろめく。

「許さん……許さん……許さん……ガアアアアアツツ」

悲鳴のような叫び声が響く。

邪鬼の右目から、大量の黒い煙が溢れ出た。

邪鬼の身体がその場に崩れるように倒れる。

煙が宙を舞う。

その姿は、まるで生き物かのようなようだ。

「あれは」

驚く勇氣に、キユウが答えた。

「『邪鬼』の本当の姿だ」

「……」

「ニンゲンドモメ ニクイ ニクイニクイニクイイイイ」

『邪鬼』は、空中をうねるように飛びながら、壁や天井に何度も激しくぶつかる。

「ニクイニクイニクイニクイ アア アアアア ガアアア」

その体から、黒い煙が四散していく。

キユウは、それを見ながら、勇氣達に話しかける。

『邪鬼』は、単体ではこの世界で生きていく事ができないんだ。

あの体は僕と同じような幽霊だからね」

羽心がピクリと反応した。

勇気、ディアーナ、ジャネットは、ごくりと唾を呑み込んだ。

「あいつは、このまま消滅するんだね」

「……ああ」

長い戦いが終わった。

勇気は、そう思った。

だがその時、『邪鬼』がピタリと止まった。

「オマエモ ミチヅレダアアア」

『邪鬼』は、煙を四散させながら、勇気に向かってきた。

「ああっ！」

勇気は逃げようとするが、足元に違和感を覚えた。

見ると、黒い煙が漂っている。

その煙が、勇気の足にまとわりつき、動けなくしていたのだ。

「勇気！」

キユウは勇気を助けようとするが、

黒い煙が身体にまとわりつき、身動きが取れなくなってしまう。

「くっ」

『邪鬼』は、キユウの横を通り抜け、勇気に襲いかかろうとした。刹那、ジャネットが声を上げた。

「ディアーナ、あのカードを使う時です！」

「あのカード……分かったわ。これで終わりよ」

ディアーナはベルトポーチから、一枚のカードを取り出した。白い渦が描かれた緑のカードだ。

そのカードを見た『邪鬼』は、慌てふためく。

「チヨウユウゴウ!？」

「そうよ、このカードを使って、あなたとあたしを融合するの」

「融合……そんな事が……」

「できるの。だからあたしは、キユウからこのカードをもらったの」

超融合は、何にも邪魔されずにあらゆるものを融合できるカードだ。

『邪鬼』の妨害も、人々の恐怖も、全てを弾いて融合できるそのカードは、まさしく切り札に相応しいものだった。

「見せてあげるわ。知恵と勇気が作り出した、最強の力の象徴を！」

ディアーナが超融合のカードを掲げると、超融合のカードの中から白く巨大な渦が現れる。

『邪鬼』は、その渦の中に吸い込まれていった。

「又アアアアアアアアアアア!!」

「これが……超融合……」

「なんとという力なの……!!」

「うう、なんか怖いゾ」

勇気と羽心は思わず腰を抜かし、プーカはポケットの中に隠れてしまう。

ディアーナにカードを渡したキユウは、

真剣な表情で『邪鬼』とディアーナが融合しようとする光景を見た。

「絶対無敵、究極の力! あたしとあなたの魂を一つに!!」

ディアーナは『邪鬼』が吸い込まれた渦の中に、共に吸い込まれていった。

「オシリスの鈴が……!!」

「私の指輪が……!!」

羽心の手からオシリスの鈴が離れ、同じく、渦の中に吸い込まれた。

そして、ジャネットの指輪から、光が消え失せた。

渦の中では、一人の上のエルフト、一匹の幽霊、そして小さな黒い鈴が宙に浮かんでいた。

周りは黒く、泥のようにドロドロとしているが、

上のエルフ——ダイアーナは真剣な表情で一匹の幽霊——『邪鬼』と向かい合っていた。

「あなたは、邪鬼と言ったわね。

誰かに依存しなければ生きていけない、他人の姿を借りる事しかできない、哀れな悪霊」

「グ……ウウ……」

弱っていた『邪鬼』を、ダイアーナは憐れんでいた。

「けれど、その哀れな生も、これで終わり。後は、あたしが一緒について行ってあげるわ。

邪鬼……これからは、あたしと一緒に、世界の脅威を倒していくのよ」

そう言つて、ダイアーナは『邪鬼』を抱きしめた。

破壊をもたらす闇を、正しい闇に変えるための、とても優しい抱擁だった。

ダイアーナの身体から、眩い光が溢れ出て、黒い煙を眩い光で取り込んでいく。

邪鬼は、時のトンネルの中で生まれた。

人間を憎み、人間の怒りを、自らのエネルギーにしようと思っていた。

邪鬼の野望、それは人間を滅ぼす事。

しかし、その野望は今、ダイアーナと共に終わろうとしていた。

「アア……コレハ ヤサシスギル アカルスギル ナンテ ヤサシイ ヒカリナンダ

……

「アア アアアア アアアアア……」

「チリン チリン チリン」

鈴の音を聞き、邪鬼は浄化され、さらに超融合により、ディアーナと一体化する。

今、邪鬼とディアーナは、文字通り一つになろうとしていた。

「ただいま」

「ディアーナ……」

渦が消えると、黒い煙と白い光を身に纏い、衣装も変わったディアーナが勇気達の前に現れる。

超融合によりディアーナは邪鬼の一つになり、ディアーナ以外の全員は、彼女を見て驚愕した。

今、彼女は一時的にだが、神になったのだから。

「ディアーナ……君は……」

「この戦いで失われたものを、全て蘇らせて」

ディアーナは目の前に落ちていた刀を拾うと、空に向かってそう叫んだ。

それは、神の願いとしては酷くエゴイストだった。

それでも、彼女はそれを望み、神が持つ再構築の力を発動した。

刀は空を包んでいた黒い煙を吸い込んでいく。

そして、全ては優しい光の中に包まれていった。

「これで……終わったのか……」

勇気が呆然としてしていると、キユウは苦しそうな表情をしていた。

「キユウ！」

勇気は、慌ててキユウに駆け寄った。

「キユウ、しっかりして！」

「勇気、君は凄かった。僕は最後に君の勇気のある姿を見られて嬉しかったよ」

キユウは、勇気をじっと見つめた。

「僕は……邪鬼を倒して、息子の力を救い出すために……存在していた。」

そして、ラーの勇者が発動した超融合の代償は……誰かの存在の力なんだ……」

キユウはその場に倒れる。

「それが、キユウなの……？　ねえ、キユウ！」

超融合の代償に、キユウの身体が、だんだん透明になっていく。

「キユウ、別れるなんて嫌だ！」

勇気の目に涙が浮かぶ。

「君に会えて本当によかった……。僕は、君のような孫が持てて幸せだよ」

「キユウ！ 僕だつて君に出会えて幸せだつたよ！ これからももつと話がしたいんだ！」

その言葉に、キユウは微笑んだ。

「僕は、遠い空の向こうから、いつまでも君の事を見守っている……。」

だから、勇氣、これからも、勇氣を出して前に進むんだ」

キユウの身体が光り輝き、その身体が消えていく。

「勇氣」

「キユウ！」

勇氣は、キユウに手を伸ばす。

キユウも微笑みながら、手を伸ばした。

掴む事はできない。

だが二人は、確かに互いの手をしっかりと握り合っていた。

「さようなら、みんな」

「本当に、ありがとう」

次の瞬間、キユウとディアーナは、光と共に消えていった。

Epilogue

怪狩り ～ 勇者の導く先

神となったディアーナが世界を再構築したため、人間と怪は共存するようになった。

怪狩りで消えてしまった者達も、ほとんどは蘇っていた。

「そういえば、ネス湖に怪獣がいるらしいぞ」

「おおっ！ 一目見たいな」

ネス湖の三人の男達は、ネツシーを探そうと一生懸命だった。

「おとつつあん、私、私……」

「泣くんじやない、お雪。もう、お前は俺の娘だ」

お雪は妖怪屋敷から帰還し、

雪女の力を封印するヘアピンを身に付けて巳之吉の本当の娘として暮らしている。

「この町にツチノコがいるらしいが……ま、いいか」

ツチノコは今頃、昭和の町をふらふらと放浪しているだろう。

「よし！ 宇宙人でも矢でも鉄砲でも持ってこい！」

「……といっても、できるのはパトロールぐらいか」

20世紀のアメリカでは、今日も保安官が町の平和を守っている。

「この村に怪物が現れたら、私が何とかするわ！ だから、あなた達は安心してね！」

19世紀のイギリスの村では、弓を携えたりサガ、村人達に向かつて胸を張っていた。また、妖精がたくさん来るといいね、エルシーお姉ちゃん」

「そうね、フランシス。だけどまずは、この森を綺麗にするとこから始めましょう」
「オイラも手伝うからナ！」

荒れ果てたコティングリーの森は、人間と妖精が手を取り合い、
少しずつだが元の美しさを取り戻している。

「本当に宇宙人なんているのかしら？」

「信じていれば、きつと現れるさ」

「きつと、あなたが大人になったらやってくるわよ」

1990年のアメリカでは、アリスとその両親が、
宇宙人に思いを馳せながらも普通に暮らしていた。

「お帰り、セイレ」

「ただいま、ヨハン」

「大丈夫、私達は三人一緒だ」

消滅したセイレと彼女の姉も蘇り、ヨハンと共に元の時代で幸せに暮らすようになった

た。

「敵は外側だけでなく、内側からも攻めてきますわ。皆様、気を付けてくださいませ」
「おーっーっ!!」

サラ姫は、内外の脅威から国を守るために、自らも国民と共に協力した。

「おお、これが聖女ジャンヌ・ダルクの像か!」

「この国を守ったんですよね」

600年後のフランス・オルレアンでは、人々がジャンヌ・ダルクの像を見ていた。

「これからアルカディアに行くんだね?」

ノノ、アプリル、麗羅、つるぎ、揚羽、カリオストロ、パーシャ、ナタリアは、

チェイニーが漕ぐ光の船に乗っていた。

邪鬼がディアーナと超融合した事で、その力を受けていたジャネットの指輪は効力を

失い、

既に路地裏はただの路地裏に戻っていた。

ノノ達は見捨里市に隠れ住んでも、いずれは時代の流れで消えてしまう運命にある。

だから、この光の船は人間には見えない直線の道を通り、遠い理想郷に向かつていく

のだ。

「アルカディアはたくさん冒険があるからな」

「わーい！ たのしみー！ ぼうけんたのしみー！」

大はしやぎするノノを、パーシャとナタリアは微笑みながら見守っている。同時に、自分達もアルカディアで新たな日常を過ごしていくのだと思うと、少しだけ涙を流すのだった。

「そろそろ出港するぞ。皆、準備は良いか？」

「はい！」

ノノ達を乗せた光の船は直線の道を通っていった。

「よし、いくわよ、邪鬼！」

「ああー！」

邪鬼と一つになったディアーナは、その力を使って魔物と戦っていた。

超融合によって邪鬼はディアーナの守護精霊となっており、

名実ともに彼女のパートナーになっていた。

正しい光と正しい闇の力で、世界を滅ぼそうとする光と闇に立ち向かう。

それは、まるで異なる世界の勇者のようだった。

(勇氣、羽心……あたし達が導いたんだから、輝きに選ばれし者として、恥じるんじゃないわよ)

(ここからは、僕は君を守る。もう、人間を恨んだり、憎んだりはしない。

これが人々を苦しめた報いだとしても、ディアーナがいたから、助かったよ
そして――

「うーん、ここにはいっぱい思い出があるわねえ」

3月、勇気と羽心は卒業式を終えて、正門の前から学校を見ていた。

来月から、中学生になる。

「勇気くん、羽心ちゃん、中学校でもよろしくね」

「二人は何の部活に入るのかな？」

「よかつたら、私達と一緒に『怪奇現象研究部』を作らない？」

同じ6年2組のクラスメイトだった、花恋と拓馬と亜衣が勇気達にそう言う。

「怪奇現象研究部！ それいいわね！」

「あのねえ」

勇気は、それを聞いて興奮する羽心を見て呆れるものの、そういう部も面白いかもと思つた。

ディアーナが邪鬼と超融合し、世界を再構築した事により、

あの騒動の事は知らざる者の記憶から消えていた。

覚えているのは、勇気と羽心だけである。

「それじゃあ、中学校でね！」

やがて、勇氣と羽心は花恋達と別れた。

「それにしても、プーカやディアーナ、ジャネットは、元気にしてるかな」
道路を歩きながら、羽心がふと、勇氣に言った。

ディアーナが邪鬼と超融合した後、彼女はアルカディアに帰還し、
プーカは元の時代に帰り、ジャネットは英霊の座に戻った。

「きつと元気にしてるよ。仲間と毎日楽しく過ごしてると思うよ」

「そうね。オイラは王子だゾーって言ってそうよね」

「ディアーナも、天から私達を見守ってるわよね」

勇氣と羽心はクスクスと笑う。

そこへ、一台の車が止まった。

「勇氣、卒業おめでとう〜」

優しい笑顔の男性が、運転席から降りて来る。

「お父さん！」

勇氣の父だ。

邪鬼と超融合したディアーナの再構築によって、力が事故で亡くなった事もリセット
され、

勇氣は父親と一緒に暮らしているのだ。

「そうそう、さつき書齋を掃除していたら、こんな物が出てきたんだ」

力は、ポケットの中から何かを取り出す。

それを見て、勇氣と羽心は「あっ」と声を上げた。

それは、キユウが頭に着けていたゴーグルだ。

「おじいちゃん、いつもこれを着けて、色んなところを冒険してたんだよ。

まさか、家にあつたとは思わなかったけどねえ」

力はそう言いながら、ゴーグルを勇氣に差し出した。

「卒業祝いに、勇氣にプレゼントするよ」

「これを、僕に？」

勇氣は、笑顔でゴーグルを受け取った。

「さあ、勇氣、そろそろ行こうか」

「あら、どこに行くの？」

「あく、隣町の遺跡を見に行こうと思って。お父さん、発掘調査に参加してるんだ」

「えー、そうなの!? 私も行きたい!」

「そうだね、じゃあ一緒に行こう!」

「やった〜!」

羽心は嬉しそうに笑った。

そこへ、一人の女性が走ってきた。
女性は、何かに怯えているようだ。

「どうしたんですか？」

勇気が声をかけると、女性は「大変なの」と声を上げた。

「この先の池に、変な生き物がいたの。まるで竜みたいな大きなバケモノで！」

「竜!？」

「それって」

勇気と羽心は、顔を見合わせた。

もしかすると、怪かもしれない。

「勇気」

「ああ、羽心」

勇気は、女性の方を見た。

「大丈夫です。もしそれが本当にいたとしても、僕達が何とかしますから」

怪を倒す事ができるのは、怪を何度も倒してきた勇気と羽心だけだ。

「行きましょう」

「ああ、悪い怪なら、僕達が倒さない」と

勇気は、キユウの形見のゴーグルを頭に着けた。

「さあ、怪を倒しに行くよ。——怪狩りの時間だ！」

人間が恨み、妬み、嫉みなど、負の感情を抱けば、第二の邪鬼が誕生するかもしれない。

しかし、人間にはそれ以上に、勇気と希望がある。

神が再構築した世界で、勇気と羽心は、強い勇気と希望を胸に前に進むのだった。